平賀源内全集 上

源頼寿

源内畫像

高松市　鈴木幾次郎氏藏

この像は高松藩の家老木村默老が故老の說によつて畫いたもので、翁の著書戲作者考補遺に載せられてある。よく見受けられる油繪の畫像はこの像から出たものである。

武州新座郡新倉村百姓持山字
橋立山炭焼竈之節山女
封之儀先度局相来本村へ
有之候村方
相封村ゟも相拵請引傳
之段世話山岸焼之口引合候始末
付付合小平文野
相談上一同押

門弟ニ付諸流稽古相手之剣術修行指南

剣術門人剣術累年有之候而已西寿之

右為謝儀遣候間差上度

宛行致剣術修行其法有之仕切遣候

諸事立候而致候而可相心得候条如件

安政六年未十二月　平蔵（印）

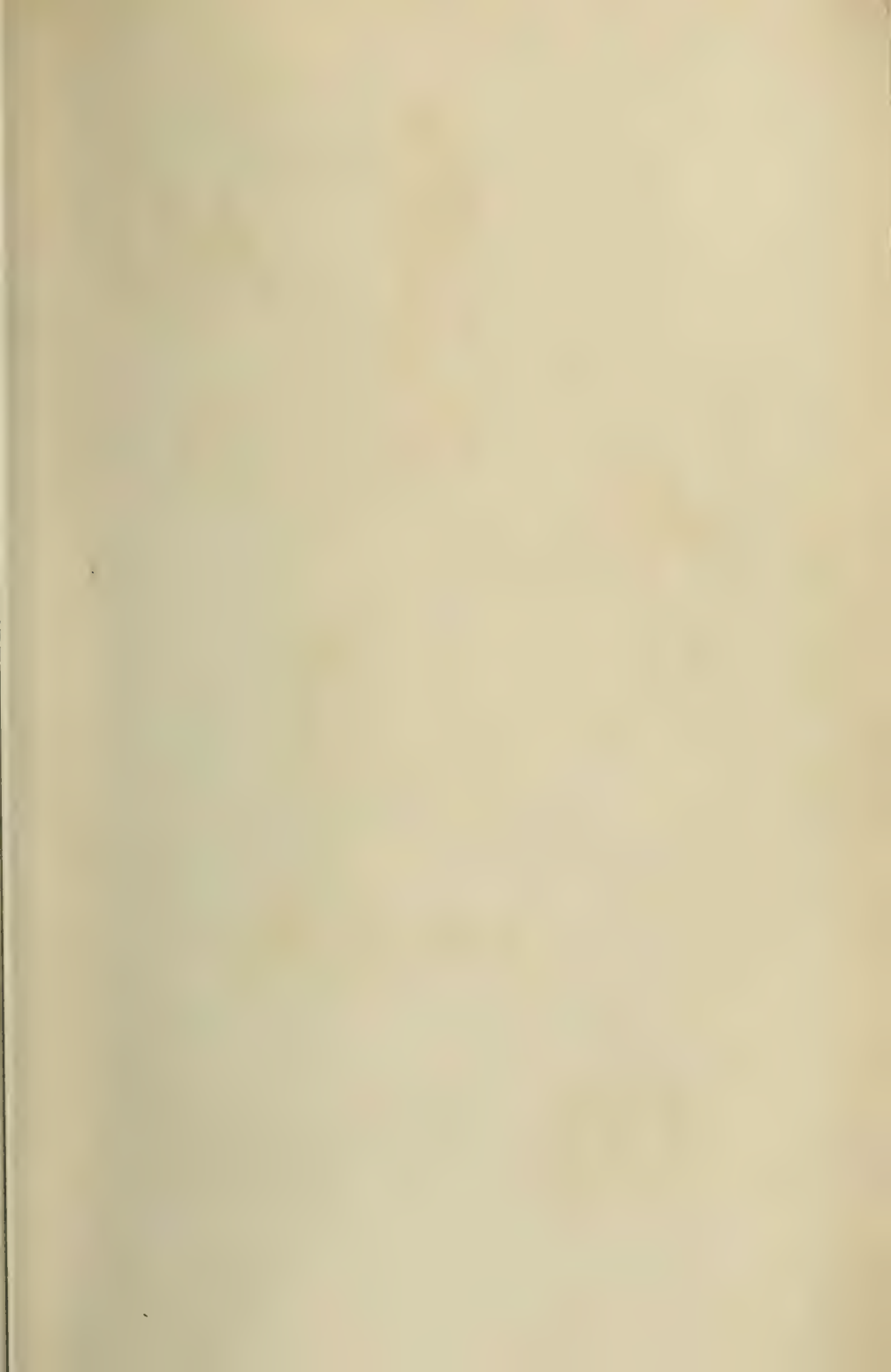
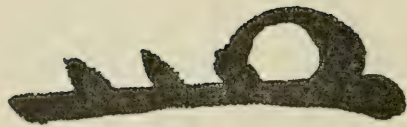
久那村
三郎兵衛殿

同
某殿

鳩溪

平賀源内

國倫

鳩溪

故平賀敏氏藏書翰

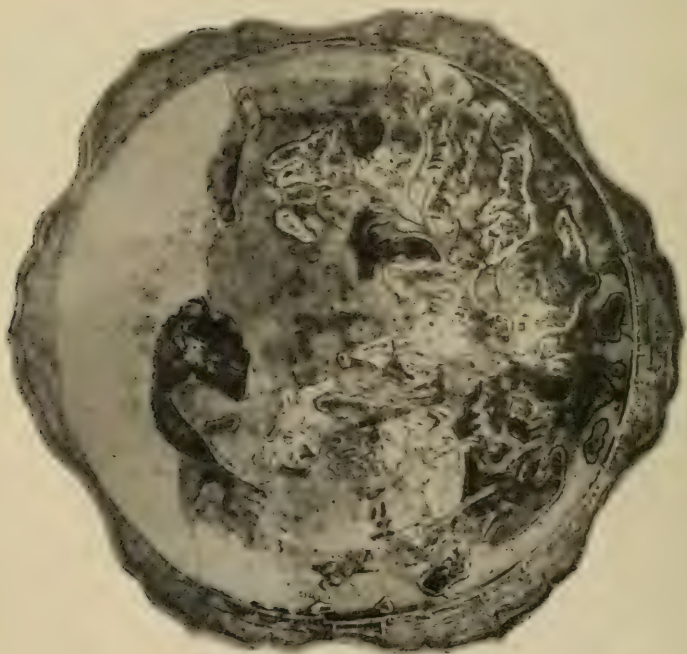
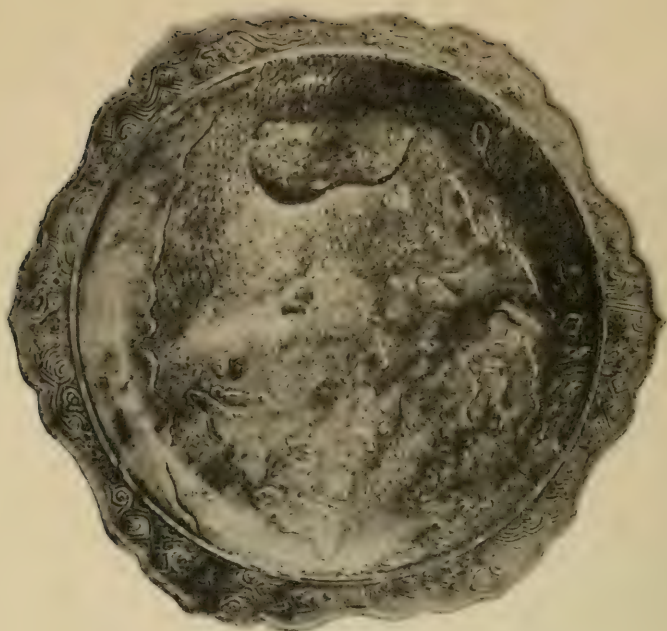
林恒三郎氏藏書翰

藥品會陳列札

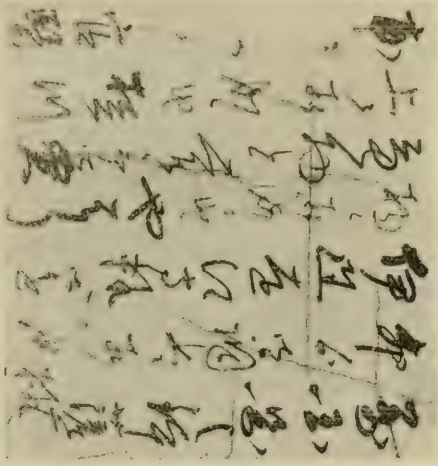
岩田甚三郎氏藏
安永二年六月十五日附文書

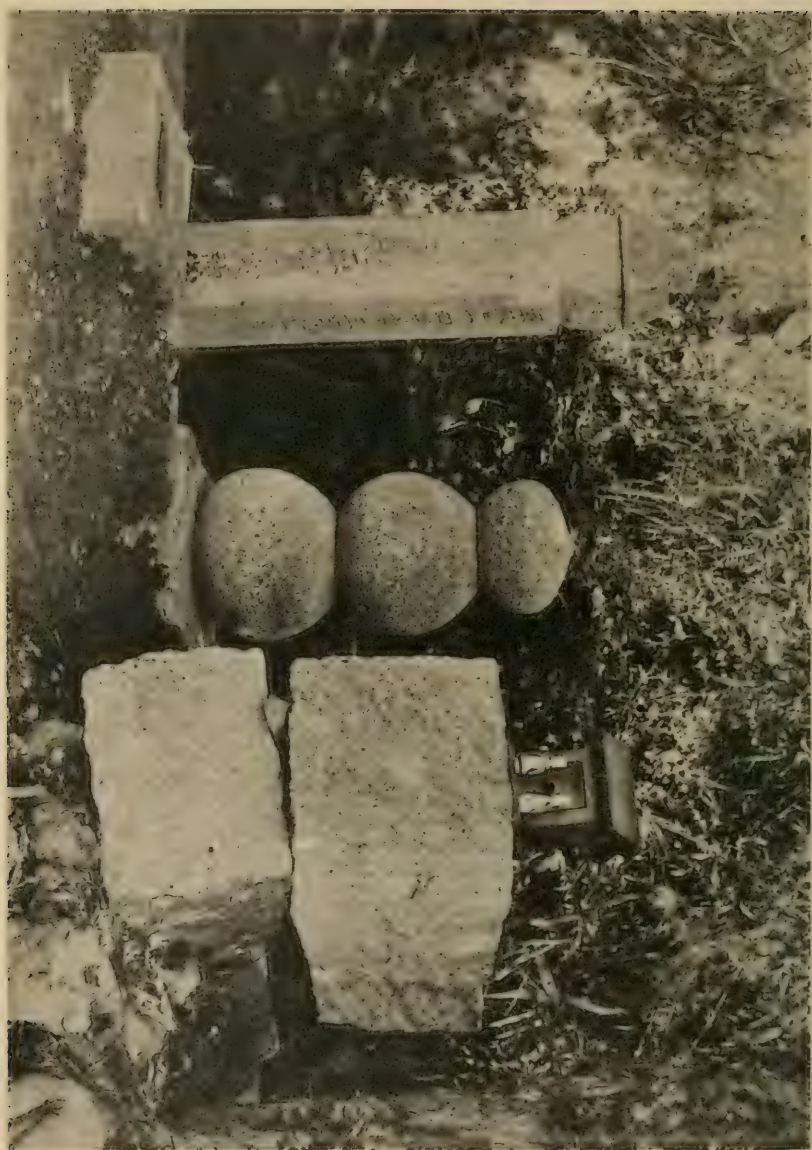
岩田丈五郎氏文書

藥品會陳列札

岩田甚三郎氏藏
安永四年十二月五日附文書

萬國圖皿

右、東半球皿　直徑　一尺四寸　東京　菊池　寛氏藏
左、西半球皿　直徑　一尺二寸二分五厘　同　大槻　茂雄氏藏

源内が支那交趾等の彩釉陶器を研究して、一種の陶器源内燒を創め、そして釉色の華麗な志度燒の基礎を開いたことは今更言ふまでもない。この萬國圖の皿は源内自らが燒いたのかどうかは判らないが、その製法と圖案とは確かに源内の腦裏から湧出したものである。この萬國圖は此頃一般に風靡してゐた橢圓形圖法の世界圖から脫脚して、球狀圖によつた地球圖に着想し、しかも皿の圓形をこれに利用して新地球圖を表現し、舊知識から新知識へ誘導せんとしたことは源内でなければ出來なかつたことであらう。なほここに插入した文書は平賀家所藏の源内書簡の一節で、萬國圖の鉢に關するものであるが、念のため讀み下すと「萬國圖の鉢松平樣へ公方御調上ニ相成伊達遠江守樣へ御進物ニ相成候由やはり時物と思召め宿御買上ニ相成候由桂川甫……竹齋」とある。

源内の生祠

広島県沼隈郡鞆町江ノ浦町

寶暦十四年三月源内が鞆ノ津に滞在した時、同地の溝川家にこの祠のあるところの土が製陶に適してゐるから、その土を採つて陶器を造れ、そして製陶に先つて、地神荒神と自分とを三寶荒神として祀れと教へた。その教によつて建てられたのがこの生祠で、江の浦町東山醫王寺表参道の左側に少し東によつた南向である。一坪ばかりの石塀のなかに、一個の大割石を積み重ね、その上に小さな祠を設け、その西側に、三個の丸石を積んで、三寶荒神を祀つてある。なほこの石塔の西には、慶應四年七月八日この事蹟の煙滅を慮つて、溝川家によつて建てられた一本の標石がある。そして高さ三尺六寸五分のこの標石には

寶暦十四甲申三月七日　（右側面）
南無妙法蓮華經平賀源内神儀　（正　面）
慶應四戊辰七月二十八日　溝川榮助　同　茂助　同　利三郎　（左側面）

との刻銘がある（備後史談第五巻第十一號所載金原利道氏の稿に於ける平賀源内生祠についての稿より抄録）

凡例

一、本集は平賀源内先生顯彰事業の一として編纂したものである。

一、本集は上集と下集との二冊に分ち、上集には本草及工藝に關するもの、風來六六部集、根無草、風流志道軒傳等の散文はもとより和歌、俳句、書翰、日記の類を收め、下集には神靈矢口渡以下九編の戯曲と源内先生の著作として是非相半はするものとは、これを下集の卷末に附載した。以上にて先生遺作の主なるものは大體收輯し盡したと信ずるのである。

一、本草及工藝の編に收められた物類品隲はもと卷頭に目錄があつたけれど、本集には便宜上これを省略して他の目錄とともに上集の卷頭に收めた。

一、上集の索引は下集の末尾に附することとした。

一、上集編纂にあたつて貴重な資料の借覽、謄寫、撮影等に便宜を與へられた帝室博物館・帝國圖書館・遞信博物館・東京帝國大學史料編纂所・京都帝國大學附屬圖書館・香川縣師範學校・香川縣教育會・鎌田共濟會圖書館竝に故大槻如電・岩田甚三郎・岩田丈五郎・小倉右一郎・勝俣詮吉郎・金原利道・菊池寛・久保計一・久保道藏・黑川慶之助・黑川眞前・桑野寛・佐伯理一郎・鈴木幾次郎・鷹見久太郎・高橋佐吉・多田金三・田中庸三郎・中島國作・早川佐七・故萩野由之・羽田桂之進・林恒三郎・故平賀敏・平賀輝子・藤村作・藤懸靜也・保阪潤治・松原朋三・南大曹・三好松太郎・幸島啓三・渡邊富三郎等の諸氏に感謝の意を表する。

一、上集編纂刊行に直接間接に便宜と援助とを賜はつた青山大作・蘆田伊人・有川武彥・伊藤赳・稻村坦元・猪熊信男・遠藤佐佐喜・岡田唯吉・大塚稔・大沼滉・北原大輔・故吳秀三・鹽谷俊太郎・故白井光太郎・菅原一・故關根正直・高野辰之・高橋直一・辻善之助・浪岡具雄・林繁三・樋畑雪湖・福泉寛・藤浪剛一・藤原猶雪・武藤長藏・本多厚二・松浦正一・松本喜一・溝口禎次郎・森金次郎・森田龜太郎・矢島正昭・山鹿誠之助等の諸氏に感謝の意を表する。

一、上集刊行に當つて或は原稿の整理を、或は校正をお引受け下さつた植野喜代松・小里璣・尾崎元春・加藤宗厚・澤田篤二郎・關根龍雄・高橋好三・高橋勇・軒原利雄・本多法學・松浦貞俊・森銑三・諸野光太郎・吉浦祐全の諸氏の厚意を謝する。

一、本集扉の題箋はもと先生が祿仕してゐた舊高松藩主松平家の當主である松平會長の筆である。

この集は平賀源内先生顯彰會の會員にのみ頒たれたものであるが、世の讀書子の需めることの多きを思ひ、こたび書林のすすめにまかせ、普及版として世に公にすることとした。

昭和十年一月二十四日

編纂者しるす

平賀源内全集上目次

解題略…………一―三

本草及工藝

物類品隲卷之一
物類品隲序…………一
水部
薔薇露…………二
土部
白堊…………三
烏古瓦…………三
墨…………三
釜臍墨…………五
百草霜…………五
石鹼…………五
金部
金…………五
砂金…………五
金礦…………五
銀…………六
銀礦…………六
赤銅…………六
假鍮石…………六
自然銅…………六
鉐石…………七
銅礦石…………八
銅青…………八
粉錫…………八
密陀僧…………九

目次

古文錢……一九

玉部

珊瑚……二〇
海松……二〇
馬腦……二一
寶石……二一
水精……二二
雲母……二二
雲膽……二二
雲砂……二二
白石英……二二
黑石英……二二
紫石英……二二

物類品隲卷之二

石部

丹砂……二五
水銀……二五
水銀粉……二五
紛霜……二五
銀朱……二六
雌黃……二六
雄黃……二六
石膏……二六
理石……二六
長石……二七
方解石……二七
滑石……二七
冷滑石……二七
斑石……二八
松石……二八
白石脂……二八
黃石脂……二八
赤石脂……二八
爐甘石……二八
無名異……二八

畫燒青……二八
石鍾乳……二九
孔公孽……二九
殷孽……二九
石牀……二九
石花……二九
土殷孽……三〇
石髓……三〇
地脂……三一
石腦油……三二
石炭……三二
石灰……三二
水龍骨……三二
石麪……三二
礜石……三二
石芝……三二
慈石……三二
玄石……三二
代赭石……三三
禹餘糧……三三
太一餘糧……三三
空青……三三
曾青……三三
鍮石……三四
綠青……三四
扁青……三四
佛頭青……三四
ペレインブラーウ……三五
石膽……三五
礞石……三五
花乳石……三五
金牙石……三五
銀牙石……三五
金剛石……三五
石弩……三六
薑石……三六

石蟹……三六
石蛇……三六
石蠶……三七
食鹽……三七
戎鹽……三八
光明鹽……三八
鹵鹹……三八
凝水石……三八
緑鹽……三八
鹽藥……三九
水消……三九
火消……四二
硇砂……四二
蓬砂……四三
石硫黄……四三
水硫黄……四三
礬石……四三
緑礬……四四
黄礬……四四
石柏……四四
石梅……四四
試金石……四四
化石……四五
カナノヲル……四五
ロートアールド……四六
ポットロート……四六
コヲルド……四六
ペレシピタアト……四六
ヒッテリヨウルアルビイ……四六

物類品隲巻之三

草部

甘草……四七
黄耆……四八
人參……四九
沙參……五二

羊乳……五二
薺苨……五二
桔梗……五二
黃精……五三
萎蕤……五三
知母……五三
肉蓯蓉……五三
列當……五四
赤箭天麻……五四
白朮……五四
蒼朮……五五
巴戟天……五五
百脈根……五六
淫羊藿……五六
仙茅……五六
玄參……五七
地楡……五七
紫草……五七
三七……五七
黃連……五七
黃芩……五八
秦艽……五八
防風……五八
延胡索……五八
貝母……五八
山慈姑……五九
細辛……五九
釵子股……五九
白芷……五九
補骨脂……五九
鬱金……六〇
蓬莪茂……六〇
茉莉……六〇
薄荷……六〇
石薄荷……六〇
艾……六〇

角蒿……六〇
泊夫藍……六一
胡盧巴……六一
麻黄……六一
地黄……六一
麥門冬……六一
鴨跖草……六二
款冬……六二
決明……六二
車前……六三
馬鞭草……六三
鼠尾草……六三
藍……六四
海根……六四
蒺藜……六四
地楊梅……六五
紫花地丁……六五
見腫消……六五

大黄……六五
蘭茹……六六
草蘭茹……六六
大戟……六六
澤漆……六六
甘遂……六七
續隨子……六七
莨菪……六七
常山……六七
臭梧桐……六七
土常山……六八
藜蘆……六八
木藜蘆……六八
附子……六八
烏頭……六八
白附子……六八
由跋……六八
半夏……六九

芫花……六九
醉魚草……六九
莽草……六九
茵芋……六九
五味子……六九
使君子……七〇
牽牛子……七〇
天茄子……七〇
旋花……七一
藤長苗……七一
墻蘼……七一
木香花……七二
栝樓……七二
王瓜……七二
天門冬……七二
百部……七二
野天門冬……七三
何首烏……七三

萆薢……七三
菝葜……七四
土茯苓……七四
白斂……七四
山豆根……七四
釣藤……七四
忍冬……七五
南藤……七五
紫藤……七五
香蒲……七六
萍蓬草……七六
沙箸……七六
石帆……七六
石斛……七六
麥斛……七六
骨碎補……七六
卷柏……七七
地柏……七七

含生草……七七
巨柏……七七
石松……七七
百草灰……七七
胡菫草……七七
天芥菜……七八
覇王樹……七八
覇王鞭……七八
金絲桃……七九
金絲梅……七九
平地木……七九
水木犀……七九
ローズマレイン……八〇
ケルフル……八〇
イケマ……八〇

物類品隲巻之四

穀部

稲……八一
粳……八一
早稲……八一
秈……八二
薏苡仁……八二
粳穢……八二
罌子粟……八二
緑豆……八二
豌豆……八二

菜部

葱……八三
樓葱……八三
菘……八四
蕪菁……八四
萊菔……八四
生薑……八四
邪蒿……八五
紫菜……八五

萵苣……八三
蒲公英……八四
百合……八四
茄……八四
冬瓜……八四
絲瓜……八四
苦瓜……八四
番椒……八四

果部

木瓜……八五
胡桃……八五
橄欖……八五
阿勃勒……八五
羅望子……八五
吳茱萸……八六
茗……八六
皐盧……八六
甜瓜……八六
瓜蔕……八六
西瓜……八六
甘蔗……八六

木部

杉……八七
桂……八七
烏藥……八七
楓樹……八七
質汗……八八
篤耨香……八八
膽八香……八八
蘆會……八九
檗木……八九
楝……八九
桼皮……九〇
皂莢……九〇
肥皂莢……九〇
椶櫚……九〇

相思子……九〇
枳……九〇
枸橘……九一
酸棗……九一
蕤核樹……九一
山茱萸……九一
女貞……九一
水蠟樹……九一
枸杞……九一
牡荊……九二
紫荊……九二
紫珠……九二
扶桑……六二
蠟梅……九二
虎刺……九三
木綿……九三
海桐花……九六
娑羅……九六
琥珀……九六
鳳尾竹……九七
方竹……九七
竹黃……九七
瑿……九七
雷丸……九七
篁竹……九八
苦竹……九八
淡竹……九八
キヨルコ……九八
サツサフラス……九八
エブリコ……九八
ルザラシ……九八

蟲部

蟲白蠟……九九
紫鉚……九九
石蠶……九九
斑蝥……九九

芫菁……九九
鰲……一〇〇
衣魚……一〇〇
蝸牛……一〇〇

鱗部

龍骨……一〇〇
龍齒……一〇一
龍角……一〇一
紫梢花……一〇二
鼉龍……一〇二
蛤蚧……一〇二
蚺蛇膽……一〇二
鱧魚……一〇三
魚虎……一〇三
海馬……一〇三
海牛……一〇三
蠵龜……一〇三
瑇瑁……一〇四
牡蠣……一〇四
蚌……一〇四
馬刀……一〇四
蜆……一〇五
石決明……一〇五
鰒魚……一〇五
貝子……一〇五
紫貝……一〇六
海鏡……一〇六
壁虎魚……一〇六

獸部

水鼠……一〇七
鼷鼠……一〇七
香鼠……一〇七

物類品隲卷之五圖繪

甘草……一〇九
朝鮮種人參四圖……一一〇

初生圖……一一〇
兩極圖……一一一
三極五葉圖……一一二―一一三
結實圖……一一四―一一五
漢種黃精……一一六
肉蓯蓉……一一七
赤箭天麻……一一八
巴戟天……一一九
仙　茅……一二〇
漢種延胡索二種……一二一
大　葉……一二二
小　葉……一二三
漢種細辛……一二三
漢種補骨脂……一二四
琉球產茉莉……一二五
泊夫藍……一二六
漢種藺茹……一二七
蝦夷種附子……一二八
漢種使君子……一二九
琉球種天茄子……一三〇―一三一
漢產木香花……一三二―一三三
漢種百部三種……一三四
特　生……一三四
一種特生……一三五
蔓　生……一三六―一三七
山豆根……一三八―一三九
漢產楓樹……一四〇
臘八樹……一四一
漢種橄欖二圖……一四二
初生圖……一四二
葉　圖……一四三
臺州種烏藥……一四四
漢種蕤核樹……一四五
漢種檀香梅……一四六―一四七
蠻種木綿樹……一四八
蠻產木綿殼……一四九

漢産鱧魚……一五〇—一五一
蠻産蠡……一五二
鼷鼠……一五三
蠻産鼉龍……一五四
蠻産蛤蚧……一五五
石芝……一五六

物類品隲卷之六附錄

人參培養法……一五八
擇土之法……一五八
作畦之法……一五八
下種之法……一五九
搭棚之法……一六二
掘根之法……一六三
移植之法……一六三
採實之法……一六四
用糞之法……一六四
甘蔗培養並製造法……一六六
擇地之法……一六九
貯莖之法……一六九
植莖之法……一六九
分栽之法……一七〇
伐莖之法……一七〇
製車之法……一七一
造糖之法……一七一
造白糖法……一七五
造氷糖法……一七六
朝鮮種人參試效說……一七七
會藥譜……一八五
紀州産物志……一九三
火浣布說……一九九
火浣布略說……二〇一
火浣布略說序……二〇一
火浣布略說……二〇三
陶器工夫書……二一九

散文集

根無艸

根無草序……二三一
根無草自序……二三三
根無草一之卷……二三七
二之卷……二四一
三之卷……二五一
四之卷……二六二
五之卷……二七〇

根無草後編

根無草後編序……二八三
根無草後編自序……二八七
根無草後編一之卷……二九一
二之卷……三〇二
三之卷……[illegible]
四之卷……[illegible]
五之卷……[illegible]

風來六部集

風來六部集序……三四一
放屁論自序……三四三
放屁論……三四四
放屁論後編自序……三五二
放屁論後編……三五三
痿陰隱逸傳……三六九
飛だ噂の評自序……三七一
飛だ噂の評……三七三
天狗髑髏鑒定緣起序……三七八
天狗髑髏鑒定緣起……三八二

里のなだまき評自序……三九〇
吉原細見里のなだ巻評……三九二

風來六部集後篇

太平樂卷物序……四〇五
太平樂卷物……四一一
蛇蛻青大通自序……四二四
蛇蛻青大通……四二五
力婦傳自敍……四三二
力婦傳……四三三
飛花落葉序……四三八
飛花落葉……四四四
江戸男色細見序……四四四
長枕褥合戰後序……四四六
道行虱の妹脊筋……四四七
神靈矢口渡跋……四四八
嫩榮葉相生源氏後序……四四八
きよみづもち口上……四四九
風流餅酒論……四五〇
矢口後日荒御靈新田神德口上……四五一
同口上後日……四五二
荒御靈新田神德後序……四五三
木に餅の生辨……四五三
麥飯報條……四五六
吉原細見天の浮橋序……四五七
細見嗚呼御江戸序……四六二
佛法奇瑞菩提樹之辨自序……四六五
佛法奇瑞菩提樹之辨……四六六

風流志道軒傳

風流志道軒傳敍……四八一
風流志道軒傳自序……四八五
風流志道軒傳卷之一……四九一
卷之二……五〇四
卷之三……五一六
卷之四……五二七
卷之五……五四〇

雜集

男色細見序……五五九
金の生木序……五七七
金の生木……五七七
日本創製寒熱昇降記……五八二
武州秩父郡中津川村吹初金說明書……五八四
武州秩父郡中津川村產爐甘石說明書……五八五
文會錄跋文……五八六
寢惚先生初稿序……五八六
太平樂跋……五八七

落葉

狂歌と俳句……五九三
寶曆壬午歲閏四月十日藥品會主品目錄……五九四
明和二年吉曆……五九六

蝦夷松前島序……五八八
淨貞五百介圖序……五八八
源內戲書……五九〇
歲旦……五九〇
歲暮……五九一
冬籠の吟……五九一
安永八亥年十月初旬伊豆七島の山燒灰のふりたる
折の戲文……五九二
平線儀銘……五九七
磁針器銘……五九八

文書

岩田丈五郎氏藏

十二月五日岩田三郎兵衛、同要藏、同三藏宛……五九九
極月十一日三郎兵衛、要藏宛……六〇〇
十月十三日岩田三郎兵衛宛……六〇一
十一月十五日三郎兵衛、要藏宛覺書……六〇四
二月六日附……六〇四
安永四年十二月十二日喜左衛門宛一札……六〇五

岩田甚三郎氏藏

安永二年六月十五日岩田三郎兵衛宛一札……六〇五
安永四年十二月五日三郎兵衛、喜左衛門宛一札……六〇六

小倉右一郎氏藏

二月十六日岩田三郎兵衛宛……六〇七
某月二十日三郎兵衛、要藏宛……六〇八

香川縣師範學校藏

八月十七日友七宛……六〇九

菊池寛氏藏

某月十五日黄山先生宛……六一一

久保計一氏藏

十二月三日田村淸助宛……六一二

久保道藏氏藏

十一月二十三日久保四郎右衛門宛……六一三

黒川慶之助氏藏

九月二十四日中島理兵衛、同理右衛門宛……六一四

佐伯理一郎氏藏

六月二十七日宛名不明……六一五
高橋佐吉氏藏
十月八日清太夫宛……六一六
十月二十日清太夫宛……六一七
田中庸三郎氏藏
七月四日立田玄道宛……六一七
中島國作氏藏
中島理兵衛宛……六一八
羽田桂之進氏藏
七月七日立田玄道宛……六二〇
林恒三郎氏藏
八月三日平賀權太夫宛……六二〇
故萩野由之氏舊藏
四月十二日桃源院宛……六二一
故平賀敏氏藏
二十八日桃源院、觚哉、權大夫宛……六二三
六月二十九日桃源宛……六二六
平賀輝子氏藏
安永四年十一月二十四日平賀權太夫宛……六二七
日附不明訴狀斷簡……六三一
書翰斷簡二十三通……六三二—六四四
保阪潤治氏藏
十月四日井口長兵衛宛……六四四
松原朋三氏藏
六月二十八日久保桑閑、同久安、伊東忠吾宛……六四九
南大曹氏藏

某月十七日稚樂宛……六四六

三好松太郎氏藏

九月二十七日久保久安宛……六四七
十二月四日平賀權大夫宛……六四九
日附宛名不明書翰斷簡……六五〇

中村不能齋採集文書所載書翰

七月十六日宮脇又右衛門宛……六五〇

名家手簡所載書翰

酉十二月六日前澤藤十郎宛……六五一

先哲像傳所載書翰

霜月十二日道有宛……六五二

所藏書不明書翰寫

七月二十日立田玄道宛……六五三

日記

明和五年日記斷簡……六五五

附 材木直段覺……六六七

圖版

源内畫像……(コロタイプ)……口繪
源内筆蹟……(コロタイプ)……口繪
源内の署名と印章……(凸版)……口繪
萬國圖皿……(コロタイプ)……口繪

目次

源内生祠……………（コロタイプ）…………口繪
火浣布の小片…………（原色版）…………一九
火浣布の隔火…………（網版）…………二〇〇
火浣布說の一部…………（網版）…………二〇〇
火浣布隔火の包紙…………（網版）…………二二三
肥後國天草郡深江村陶器土行程麁繪圖（原色版）……二三〇
（但シ陶器工夫書原本ニ添付モノ）

源内自製のエレキテール…（コロタイプ）…………五四四
菅原櫛…………（コロタイプ）…………五六六
藥品會陳列札…………（網版）…………五九四
平線儀…………（コロタイプ）…………五九六
源内手製文庫…………（コロタイプ）…………六二二
源内訴狀斷簡…………（網版）…………六三〇

解題略

一　本草及工藝

この編は本草竝に工藝に關する雄篇を集めたもので、斷片的な藥品會の陳列目錄、明和二年官暦の如きものは落葉の編に收めた。

物類品隲

本書は田村元雄、松田長元、平賀源内等によつて開かれた寶暦七年、八年、九年、十年、十二年の五次の藥品會に蒐まつた和漢の草木、鳥獸、魚介、昆蟲、金玉、土石の類、二千餘種のうち、重複のもの、よく世に知られたものなどを除いて、適切な三百六十餘種を上、中、下の三等に分ち、一々詳細な解說を加へたもので、書名物類品隲は物類を品隲すること即ち品等を定むることから名付けたのである。卷數四、別に珍品三十餘種をえらんで圖繪にしたもの一卷と、人參、甘蔗の培養製造法を詳述した附錄一卷とが添へてある。松籟館藏版、寶暦十三年七月刊行。

會藥譜

この譜は田村元雄　松田長元、平賀源内等によつて開かれた數次の物產會に出陳された藥品の陳列目錄を蒐めたも

ので、寶暦七年七月、同八年四月、九年八月の三回のみしか遺存してゐないから、全部脱稿したのか、一部分で中絶したものかよく判らない。しかも朱點の加へられた未定の稿本に過ぎない。なほまた平賀輝子女史所藏本より外に一本もないものである。墨付美濃判十六葉、この集に載せたのはその本の縮寫である。

紀州物産志

この書は寫本のみで、未だ上梓されてゐない。内容は紀伊國の加太、和歌浦、鹽津、由良、比井、印南、切邊、田邊等の地方の貝類から說きおこし、朝鮮人參の培養と甘蔗の植付とが將來大利となること、在田郡内で蜜柑の外に唐渡りの藥草種を播種することなど、紀州領である伊勢丹生村產の水銀の產出について、こまノ\論したものである。この書の成れる年代は卷末に九月とばかりあつて、よく判らないが、淨貞五百介圖の序に、寶暦十年六月源内が若の浦、加太、鹽津、由良、印南地方に貝類を索めたことが誌され、この物產志に「去去年貝類詮儀仕度、加太、和の浦、鹽津、柏、比伊、印南、印邊、南邊、田邊、瀨戶、湯崎之邊迄浦々無殘所遊行仕候」とあることから、この書の成立は寶暦十二年の九月なることが確められた。

火浣布說

火浣布は竹取物語に至てなき物の部に入られてある火鼠の裘のことで、ラテン名ではアミヤントスまたはアスベストと呼ばれてゐる。この書は唐土、天竺、紅毛等の諸國でも出來なかつた火浣布をば、源内の工夫によつて、日本國

内で織出すことが出來た。そしてそれを香敷に製したことまで、簡單ながら說明されてある、卷末に、寶曆十四年三月の識語がある。本書もと書名があらはされてゐないが、今かりに火浣布說と名付けた。この集に收めた火浣布說の底本は京都帝國大學附屬圖書館藏のもので、文化五年菊池五山の跋語ある木村默老翁の舊藏で。幅一尺二分、長六尺の卷子本である。

火浣布略說

この書は火浣布說より一年後れて、明和二年に上梓されたもので、卷頭には同年八月桂川國訓の序がある。本書は最初に漢土の火浣布を紹介し、著者自身が製作した火浣布に說き及び、更に火浣布隔火について、火浣布說よりも一層詳しい說明を加へてあるばかりでなく、火浣布を淸人に送つた手紙や、淸商の火浣布製馬掛羽織の注文書までも載せてある。半紙本、序文とも十五枚。

陶器工夫書

本書は明和七年源內の長崎再遊の折、製陶に最も適してゐる肥後國天草郡深江村の粘土で、彩釉華麗な阿蘭陀、交趾等の陶器を手本に、色々工夫し、それを熟練な職人に燒かせ、それが外國品よりも優秀なものであつたら、自然と我が國產品を重寶かり、外國人に多額の金銀を貪ぼられることなく、却つて外國人の好に應じ、海外にまで輸出されることになれば、永代の我が國益であるから、どうかこの計畫を實行するようにと其筋に提出した建白書である。

しかも著者はこの書に一枚の施綸圖を添へて、天草の陶土を長崎へ運送する方法まで細かに述べてある。

この集に收めた本書の底本は、大正十二年の震火災に烏有に歸した故黒川眞道氏藏本の影寫本である東京帝國大學史料編纂所本に故平賀敏氏藏本を以て校合したものである。

二　散文集

この編は根無草、風來六六部集、風流志道軒傳の三大名著を蒐めたものである。

根無草

この書は前後二編に分かれ。二編ともに五卷から成れる一滑稽本で、書名の根無草は風流志道軒の元無草から取つたものである。前編は寶暦十三年の或夏の日、萩野八重桐と云ふ一歌舞伎役者が墨田川に舟遊したが、過つて溺死したのを水虎の所有として戯作したもので、寶暦十三年十月に梓行され三千部を買り盡したと云ふ名著である。後編は五年後の明和六年正月に印行されたもので、前編に引續き名優市川雷藏こと柏車と墨田川の水神の申子である色事師板東彦三郎こと薪水とを捕へて來つて龍神との關係を戯作せるものである。

風來六六部集

この書はもと著者が小冊子として刊行した痿陰隱逸傳（明和二年刊）放屁論（安永三年刊）放屁論後編（安永六年刊）里

のおだ卷(安永三年刊)天狗髑髏鑒定緣起(安永五年刊)飛んだ噂の評(安永七年刊)の六部を著書の死後桂川甫粲が合刻して風來六部集と名けて、上册に放屁論、同後編、痿陰隱逸傳を、下册に里のおだ卷以下を收めて安永九年下谷池の端大觀堂伏見屋善六から梓行された。其の後、小膽山人と云ふもの六部集にもれた著者の小編力婦傳(安永四年刊)蛇蛻青大通(安永六年刊)於千代傳(明和五年刊)菩提樹の辨(安永七年刊)細見嗚呼お江戸の序(安永三年刊)の五編に、天明三年太田南畝が著書の小品文を集めて飛花落葉と題して刊行されてゐたものを加へ、都合十二部を風來六六部集と名付けて、前後二編四册に分けて、刊行することとなつた。この時本來なら安永九年刊行のものを前編とし新に加へられた六部を後編とすべきものであるに、何故か前編に安永九年刊行風來六部集の上卷に、力婦傳、蛇蛻青大通、於千代傳の三編をその下卷とし、安永九年刊行の下卷を後編の上卷とし、飛花落葉、細見嗚呼お江戸の序、菩提樹の辨、三編をその下卷として刊行した、これは後人を誤るものであるから、本集は安永九年刊を前編とし、新に加へられた六部を後編として收載した。

なほ序ながら小膽山人の十二部を合刻した風來六六部集表紙裏の記を記すこととした。

風來先生書捨給ひし反古を大平館主人拾集て六部集といふ其言意外出でし一家の文法古今獨歩といふべし今に至りしも我人共に見んことを欲すしかるにこの集はやくより世にともしく成もて行まゝにこたび櫻木に彫猶ほ殘れる花をもあつめて六部を增補し前後四卷となし六六部集とはなりぬ。　除貨樓銅多云。

放屁論

前後二編に分れ、前編は安永三年、後編はその六年の刊行である。前編はその頃兩國橋畔で、評判高い放屁漢花咲男

と題材として、放屁の理にことよせて、下賤ではあるが獨創力のあることを褒め、世人に鞭韃を加へんとしたものである。後編は天下一般の人士が黄金萬能主義であることを冷評し、著者自らを錢內と呼んで、放屁の理から色々工夫を凝らしてエレキテルセイリテと云ふ人身から火をとつて病氣を治療する器械を發明したことに大氣焔をあけたものである。

追加

著者が安永五年頃伽羅木に銀覆輪を掛けた所謂菅原櫛を工夫して、大に流行したが、好人から送られた狂歌と著者の返歌並に序とを記し、當時の社會にある愚者を冷罵して、著者自ら火浣布、エレキテルなどの珍奇なものを發明したことを自慢し、己れの時世に容らないことに、氣焔をあげたのがこの書である。

痿陰隱逸傳

この書は善良の風俗を害するため、本集にも收めなかつたから、解題も省略することゝした。

飛んだ噂の評

安永年中市川團十郎が市川八百藏の寡婦に密通したことが評判高くなつた。或る商人がこれを印行して、「とんだ事を御覽じろ」喚び賣り歩いたことがある。その刷物を著者が批判したものがこの書である。

天狗髑髏監定縁起

明和七年九月著者の所へ大場豐水と云ふ人、天狗髑髏と云ふ珍奇なものを持ちこんで、鑑定を乞ふたことがある。著者はそれに世の醫師、藥種家の無學で、世を欺くを罵り、著者自らの世に容れられないことに不平をこぼして筆を走らせたのがこの書である。

里のおだ卷

この書は麻布先生、古遊散人、花景の三人が、江戸の遊里である吉原と深川との優劣論に花を咲かせ、麻布先生が深川の惡風を非難し、吉原の長所をあげて批評を試みたもので、麻布先生とは恐く著者自身であらう。

お千代傳

大平樂は雅樂の一種であるが、勝手放題、口から出まかせに妙な事を言ふことを大平樂を竝ると云ふやうに轉用された。本書は船中で春を賣る、船饅頭のお千代が、橘町の町藝者に大平樂を竝べて、大氣焔當るべからずと云ふ一編であるが。その刊年はよく判らないけれども、恐らく安永七八年頃の作と思はれる。

蛇蜕靑大通

大通とは大に人情に通じた者をさすのであるが、寶暦、明和、安永頃の所謂通は靑才子、靑大通卽ち生半熟の者であ

る、しかもその所謂通人の跋扈が甚だしかつたのをまのあたり見た著者は、たゞの大通はよいが、所謂通の卑俗なるを惡み、通を以て遊里に優待せられる愚者を罵倒して、當時の社會相を諷刺したるのがこの書物である。

力婦傳

越後高田城の附近の一農夫の女に、登毛與と云ふがあつた。家産が傾いた父を助けんと、金十片で身賣して、六年かの年期で、柳家某の半物となつたが、或る日四斗の酒樽を毬をもてあそぶやうに、容易く運んだので、主人は登毛與の强力に驚き五年の年期を免じて、故郷に歸さんとしたが、その强力を民衆に知らせることとなり、葉屋新道で人々に觀覽させたが、大評判を博したことがあつた。著者はこの登毛與の强力を題材として、こんな力婦が出たのは世上のなまけ男に見せて、勇氣に引き入れんとした神慮であると、當時の時世を諷刺せんがために、書いたのがこの書であつて、安永五年の作品である。

飛花落葉

この書は著者の歿後、友人太田南畝が著者の遺文である木に餅の生る辯以下十數編を蒐め、天明三年に梓行したもので、飛花落葉と云ふ書名は、春は梅の花の雨、秋は落葉の村時雨、徒然を慰さむることから、亡き名に花を咲かせる心から出たものである。その後天明八年門人萬象亭が細兒嗚呼お江戸の序一編を加へて、風來先生假名文選と改題して上梓した。ここにあげたのは風來六六部集本を底本とし、單行本飛花落葉に對校したものである

佛法奇瑞菩提樹の辯

或る年本所の回向院に信濃善光寺如來が出開帳し、それが濟んだ後、如來の功德によつて、菩提樹が降つて、人々は我れ先にと拾ふた。著者はこのことにことよせて、當時の僧侶が御幣昇ぎの愚民たちが迷信に動かされることを利用して、金錢を貪ることを諷刺嘲笑した戲文である。

風流志道軒傳

風流志道軒傳或は志道軒蝴蝶物語とも云ふ。志道軒、姓は深井氏、名は淺之進、無一堂と號し、明和二年八十四歲の高齢で歿した人である。もと知足院の一禪僧であつたが、後寺を脫して淺草花川戶に住み、淺草觀音堂脇の三社權現の前で、日日軍書を講釋して、僧侶と女人とを罵倒し、元無草と云ふ小册子や自像の上に戲言を書いた一枚刷を賣つて、せしめた錢は皆酒代となつたと云ふ一奇人である。本書は著者がこの奇人が夢に人情に通ずるには色慾からであるとて、諸國の遊里に出入することをすゝめられ、吉原、深川はもとより、果ては朝鮮支那に渡り支那の後宮に入つて歸朝し、社會の世相を教へられ、遍歷七十年、鏡によつて我が身の老いたこと知り、志道軒と改名し、淺草地內で戲言で人をあつめたことに戲作して、世の僧侶の愚と時世とを非難したものである。

三　雜　集

この編は諸書に散見する源內の稿になる序文、或は風來六六部集にもれた小品文並に寒熱昇降器の說

明書のことき雑書を集めたもので、くさ〳〵のものを集めたことから、雑集と名付けたのである。今その主なるものを解題しよう。

金の生る木

著者はその門人の諺にある金の生る木が實際存在するものかとの問に答へ、實在するものとて小判金を示し、それから黄金の産出から說きおこし、流通法に及んで、明和安永當時の惡貨の流通を冷罵し、金の生る木を金に成る氣と解いて、一意專心、金に成る氣で努力すれば、何事も人並に勝れて名高くなり、自然と富貴となるものと滑稽を交へて書いたのが本書であつて、安永八年正月の作である。

日本創製寒熱昇降器

こは著者が明和五年の五月に紅毛人の製作した寒熱昇降器を模作して、知人に贈つたときにものした說明書で、美濃判、横長の二つ折の兩面に印刷したものである。

淨貞五百介圖序

淨貞は貞享元祿頃の京師の富商吉文字屋の主人である。この頃靈元天皇貝殼を非常にめでられたが、淨貞はその仰によつて五百あまりの貝を集め、それを貞享五年三月に御所へ獻納に及んだ。この時淨貞は奉獻の貝を圖にして、手元に止めた。其の後寶曆十年十月平賀源内は高松侯の命によつて、紀州の海岸で拾ひ集めた貝を奉るときに淨貞のも

のした貝圖の寫本を、浪花天満の神主渡邊主税から借り寫して、君侯に奉つたことがある。この時著者自らも一本を寫したが、後にこの書の湮滅をおそれ、東都本阿彌忠光の校閲、著者の考訂で梓に上せたのが、この淨貞五百貝圖である。卽ちこの書は淨貞の著作であつて、源内はたゞ考核したに過ぎないのであるが、世に源内の著書として傳へゐるものは誤りである。

安永八年十月初旬伊豆七島の山燒灰のふりたる折の戯文

この一編は著者の絶筆であつて、帝國圖書館藏先哲像傳著者の自筆本を底本としたものである。

四　落　葉

この集は一話一言に載せてある源内の和歌俳句數首に、寶暦十二年四月源内主催の藥品會陳列目錄、明和二年官暦、源内の製作した平線儀の銘などの小品を蒐めたもので、落葉とはもれおちたものを蒐むる意で、編者の命名である。なほこれに收めた二三について解說しよう。

藥品會目錄

寶暦十二年閏四月十日源内によつて江戸湯島天神前京屋九兵衞方に開かれた藥品會の陳列目錄で、美濃判大、横長の二ッ折の表裏に印刷したものである。

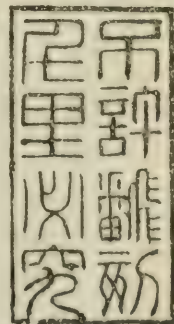
明和二年盲暦

原品の所在は判らないが、藤懸靜也氏の著書木版浮世繪大家畫集中の浮世繪版畫發達史に載せられた模本からとつた。

五　文　書

この編は諸家に秘藏されてゐる源内自筆の書翰、その他の文書と諸書に散見する書翰とを集めたもので、登載順はさきに眞蹟の存するものを、所藏者の五十音順に排列し、寫眞、模刻があつて、眞蹟の存否不明のもの、或は諸書に散見するものを次にした。

六　日　記

こは明和五年、彼れが秩父に滯在中の日誌で、三月十五日に筆を起こし七月廿一日に筆を止めてゐる。この書はもと岩田甚三郎氏の舊藏である。美濃横三ッ切を二ッ折にした竪三寸横五寸九分の和綴で、表紙とも九十二葉の小册子である。ここに收めた日誌はこの小册子の一部に書かれたもので、源内が建築工事の請負をした見積書や覺書までが細かに示されてある。なほ終りに當時の材木の値段まで記されてある貴重な史料である。原本小倉右一郎氏藏

文學及工藝

物類品隲

鳩溪平賀先生著

不許翻刻
千里必究

物類品隲

松籟館藏板

以達已乎以循生說之濟度人之苦惱者之
西洲濟度之法濟之潤比邑也
冥論湧乃字人說之云爾
寶曆癸未季冬之十二夜
東都　藍水田村元雄父撰

物類品隲序

遠寉啣薆鞨西洋靈樸凡埴填炮痕是天地造化之所以敎乎人而醫藥之所自而興也夫醫之所恃者金石草木之毒也而毒草之難辨者有眞僞也明辨其眞僞而後衛生可

得而論也已而世難乎其人焉吾友平賀鳩溪自少好名物之學專精篤志求而不得不舍焉每攀絶險歷窮蒐得奇品異類者蓋不少矣客歳訪求

神州七道所產珍異品類會臭味之士於城東湯島陳之席

上絲分縷析指示詳確於是無不疑者渙然冰釋信者怡然願解也乃輯而錄之豈非青囊家帳中秘寶乎夫識藥實於畫論辨枯骨於專東者實生知之所獨運也自此以降困彭頗之吐下委杜若於坊州之輩蓋亦不尠

矣嗟誰知千載之下不有若斯人矣
鳩溪受業藍水先生語曰寒於水青
於藍蓋君之謂也乎
寶暦癸未五月望東都後藤光生
書於梧陰菴

物類品隲

凡例

一以藥物會友也藍水田村先生寶曆丁丑歳會于東都湯嶋者是爲其始矣翌年戊寅又會于神田己卯歳予繼之而會于湯嶋庚辰歳社友松田氏會于市谷壬午歳予又會于湯嶋凡爲會五次其會主自具者爲主品同好諸子所具者爲客品不擇草木鳥獸魚介昆蟲金玉土石和漢蠻種其主品則每會以百種爲限如初二會主品則固皆田村先生園庭中物雖後三會主品亦其半則先生之所助具也丁丑至庚辰四會主客品物不過七百數十種壬午會則倫乃告海內同志者凡三十餘國所湊品物一千三百餘種通向四會物類會萃者凡二千餘種夏夷異類於是爲大備矣今擇於其中以編此書凡品物重復者及論當未核者及常種凡類世人所能識者皆略不載

一東壁綱目木類或收草部竹類或收木部非無差謬然比之諸家本草頗爲博該且學者常能串習之故今此書分部列物一以綱目爲準但綱目附錄幷本條中帶說者及所出他書者亦提頭另書以其非綱目本條冠以△分之蠻物夷種漢名未詳者附入各部之末

一主客物類產必限地方者皆舉其出產之地名悉以圈分之但如所在皆產者則不舉

一客品雖其數十品非珍異之種則不擧其者姓名但其人更有所考而其說可取者必載不遺

一主客之物類皆以上中下三等品之此書之所以名品隲也然地之產物年有近久物有生熟雖一山一澤之內物各自有優劣難以一石一木之上下概一山一澤之上下今就當時所湊之物品隲之覽者勿拘

一辨說之累下百言不如圖繪之一覽而爲分了因拔珍品三十六種別爲圖繪一卷

一人參甘蔗國益爲不少今紀其培養製造法別爲附錄一卷

讃岐平賀國倫士彝識

物類品隲巻之一

藍水田村先生鑒定

讃岐　鳩溪平賀國倫編輯
東都　田村善之
　　　中川鱗同校
信濃　青山茂恂

水部

△薔薇露　綱目露水條下ニ出タリ和名バラノツユ紅毛語ローズワアトル紅毛人都テ刺棘アルモノヲローズト云ワアトルハ水ナリ此物ランビキヲ以テ薔薇花ヲ蒸シテ取タル水ナリ薔薇ノ類多シ就中野薔薇花ヲ最上トス李東璧曰番國有薔薇露甚芬香云是花上露水未知是非又墻蘼條下曰㕍番有薔薇露云是此花之露水香馥異常ト今按ズルニランビキハ番人ノ巧思ニ出李氏モ其法ヲ知ザルガ故ニカク云ルト見タリ此ノ水外療ニ用テ功效多シ紅毛人常ニ長崎ニ持來ル近世本邦ノ人亦其傳ヲ得テ是ヲ製ス然ドモ其製法精カラザレバ水腐テ不堪久製スル時サルアルモニヤアカヲ少許納レバ水數十年ヲ經テモ損セズ梅花及其餘ノ露ヲ取モ皆然リ是ヲ蓄フル法フラスコニ

納テキヨルコヲ口ニシテ紙ニテ封シ置ベシキヨルコナキ時ハ蠟ニテ密封スベシサルアルモニヤブカキヨルコノ事各條ニ詳ナリ

土部

白堊　ヤキモノニ用ウル色白キ土ナリ數種アリ其性堅硬ナルヲ粳米土ト云柔軟ナルヲ糯米土ト云共ニ天工開物ニ見エタリ

○粳米土　○肥前伊萬里ノ產甚堅硬ニシテ石ノゴトシ伊萬里燒唐津燒等皆此土ヲ用ウ本邦陶器ノ絕品ナリ○信濃水內郡小市邑產上品色至テ精白ナリ○安房產俗ニハミガキ砂房州砂ト云此土ヲ細末シテ龍腦紫檀丁子ノ類ヲ加ヘ齒磨トシテ四方ニ賣ルモノ是ナリ○讚岐阿野郡陶村產色白ク齒磨ニ用テ上品ナリ又陶器泑藥ニ用テ佳ナリ○讚岐寒川郡富田村產陶器ニ作テ色イマリニ亞グ然ドモ土モロクシテ器ニ作リガタシ方俗滑石ト稱スルハ誤ナリ以上五種其性堅軟ノ異アリトイヘドモ粘ナキモノ皆粳米土ナリ

○糯米土　○讚岐陶村產中品色白微赤色ヲ帶粘ツヨキガ故ニ器ニ作テハ窯中ニテ破裂ルコト多シ粳米土ト兩土和合スレバ其憂ナシ○讚岐富田村產上品ナリ

烏古瓦　和名フルカハラ○筑紫都府樓ノ瓦至テ古シ○讚岐松山

崇德院行宮ノ跡ヨリ出方ノ俗配所ノ瓦ト稱スルモノ近世ノ瓦ヨリ大ナリ

墨　本邦ニテ墨ヲ製スルノ始ハ日本書紀ニ
推古天皇十八年春三月高麗王貢上僧曇徴此人能作紙墨是日本ニテ墨ヲ作ル始ニヤト貝原好
古ガ和事始ニ記セリ近世墨ヲ製スルノ家多シ就中南都墨工古梅園松井和泉家造心ヲ用テ甚
精巧ヲ盡セリ壬午客品中數十品ヲ具ス今彼家所製數種ヲ下ニ附ス

○松煙　宗奭曰須松煙墨方可入藥東璧曰上墨以松煙用梣皮汁解膠和造ト漢土ニテハ專
松煙ヲ以テ製ス本邦ニテモ古紀伊藤代ニテ製シタル墨ハ松煙ニテ造タルヨシ古今著聞集第三
ニ出タリ冷泉爲重卿ノ歌ニ逢フコトヲ松ニカケタル藤代ノ墨ノ名高キ楮ノ玉ヅサトモ詠ゼリ今ニ
至テ藤代ノ山中ヨリ松煙ヲ燒出ス墨戶是ヲ求テ墨ヲ製ス名ケテ大平煤ト云然ル時ハ昔ノ藤代墨
ノ形ハ今世ニ傳ル所ノ大平墨ノ形ナラント松井元泰ガ筆記ニ見エタリ中古以來本邦ニテハ上
墨ニハ油煙ヲ用ヰ松煙ハ下墨ノ料トス且秦皮汁ヲモ用ヰズ故ニ目疾等ヲ治スルノ功少シ藥用ニ
ハ漢製ノ松煙墨ノ上品ナルヲ用ウベシ但古梅園ガ製秦皮汁及膠等ヲ用ノ法漢製ト異ナルコト
ナシ藥用トスルニ堪タリ○千歲松　宋晁氏墨經及他ノ諸說ヲ考ヘ熊野山中千歲古松ノ煤ヲ取
テ製シタル墨ナリ
敕アリテ千歲松ノ号ヲ賜フト云○御墨　松井元泰長崎ニ遊テ家製ノ松烟煤ヲ以テ商舶ノ歸ルニ

附ス漢土ニ送リ徽州官工程丹木之所製也

○油煙　本邦油煙墨ヲ製スルコトハ中世南都興福寺ノ二諦坊持佛堂ノ燈煤ノ屋宇ニ薫滯タルヲ取テ膠ニ和シテ造ル是南都油煙墨ノ始ナリト云ヘリ或ハ空海中華ヨリ歸朝ノ後南都ノ人ニ教テ造ラシムトモ云ヘリ然レドモ東野ノ語ニシテ書傳ニ載セズ凡世俗動モスレバ空海ヲ以テ事原ノ談柄トス皆附會ノ説信ズルニ足ラズ藥用ニハ松煙ヲ上トシ油煙ヲ次トス○二諦坊墨　是南都油烟墨創造ノ古法ヲ以テ造タルモノナリ長三寸廣八分其形世ニ所謂油烟形ト稱スルモノニシテ長ニ鼓龍背ニ李家烟ノ三字ヲ篆書ニテ記セリ○延喜圖書寮墨　長五寸廣八分是即延喜式ニ出ル所ノ法ヲ以テ製シタルモノナリ○御覽大墨　元泰所製徑一尺六寸厚二寸五分重二十二斤其形圓ナリ此墨世ニ希ナル大墨ナリトテ昔年

禁庭ヘ召レケル時永田貞柳ガ月ナラデ雲ノ上マデスミノボル是ハイカナルユヱンナルラント詠ゼシハ即此墨ナリ

○雜煙　凡諸油燈トナセバ煤アリ是ヲ取テ墨ニ製スレバ色各異ナリトテ好事者是ヲ翫フ然トモ藥用トスベカラズ○石液墨　越後國所産石腦油ノ煤ヲ取テ製シタルモノナリ宗奭曰鄜延有石油其煙甚濃其煤可爲墨黑光如漆不可入藥ト云モノ是ナリ○麻油烟墨○榧油烟墨○紅花子油烟墨○桐花烟墨○鯨油烟墨○松子烟墨　以上十二種古梅園所製壬午客品中具之其餘二十餘種、

藥用ニ論ナキモノ略之

釜臍墨　和名カマノヘソノスミ又カマドノヒタヒスミ又ナベズミ

百草霜　和名クドノスミ又カマドノヒタヒスミ釜臍墨百草霜百草灰三種紛ヤスシ混ズベカラズ釜臍墨ハ鐺釜ニ付タル墨百草霜ハ竈額ニ付タル墨ナリ田舍色色ノ草ナド燒トコロノ者ヲ取用ウベシ百草灰ハ雜草部ニ出ヅ五月五日百種ノ草ヲ採テ陰乾シ燒テ灰トシタルモノナリ

石鹼　和名シヤボン煉モノナリ和産ナシ（蠻産紅毛語セツブラテイン語サボウ子ト云シヤボンハラテイン語ヨリ轉ジ來ルナルベシ紅毛新流外科家ニ多ク用之又衣ヲ洗ニ少許入レバ甚妙ナリ

金部

金　和名コガ子往古ハ本邦ニ金ノアルコトヲ知ズ聖武天皇天平二十一年二月丁巳陸奥國ヨリ始テ黄金ヲ貢ズルヨシ續日本紀ニ見タリ大伴家持ノ歌ニスメロキノ御代サカエントアヅマナル陸奥山ニコガ子花サクト詠ゼシモ其時ノ歌ナリ後世諸國ヨリ出ヅ

△砂金　和名ナスヒガ子（蝦夷産上品○若狹産上品ナリ

△金礦　礦又作鉚五金皆石中ニ生ズ鎔分ザルヲ礦ト云先輩礦ヲマブト訓ズ然レトモ今金山ニテ所稱

マブハ金銀ヲ掘タル穴ノ名ナリ金礦ヲヒイシト云又ニト云但ニト云ハ金銀トモニ通稱ス銅礦ヲ
ハクト云○佐渡産上品○武藏秩父山産中品

銀　和名シロカネ

天武天皇三年三月七日對馬國司守忍海造大國言銀始出于當國即貢上由是大國授小錦下位凡
銀有倭國初出于此時ト日本書紀ニ出タリ後世諸國ヨリ出ヅ

△銀礦　俗是ヲモニト云説上ニ見エタリ○佐渡産上品ナリ

赤銅　和名アカヾネ本邦俗シヤクドウト稱スルモノハ紫銅ナリ○伊豫産上品

△假鍮石　和俗シンチウト云是即銅ト亞鉛トヲ以テ製シタルモノナリ漢ニテハ銅ト爐甘石トヲ煉テ
作ルト云鍮石ハ本婆斯國ニ出ヅ自然ニ金色ノモノナリ是ヲ眞鍮ト云煉成モノヲ假鍮ト云和俗
煉タルヲ指テ眞鍮ト云其誤久シテ改ベカラズ又一種鍮石アリ同名異物ナリ石部ニ詳ナリ

自然銅　數種アリ

○方解様ノモノ和名キリメイシ蘓頌曰一體大如麻黍或多方解纍纍相綴至如斗大者色煌煌明
爛如黄金鍮石入藥最上ト此物ト金牙石銀牙石方解様銛石四種甚相似タリ能能辨ズベシ○
漢産上品

○亂銅絲様ノモノアリ頌曰信州出一種如亂銅絲狀云在銅礦中山氣熏蒸自然流出亦如生銀老、

翁鬚之類入藥最好又曰未嘗見似亂銅絲者此兩說ヲ以考レバ頗其說ヲ聞テ未見其物ナリ
此物狀ホソキ銅絲ヲツクネタルガゴトシ○出羽產己卯客品中官醫岡田氏具之是昔年阿部將翁軒
探得トコロナリト云

○蛇含石樣ノモノアリ陳承曰今辰州川澤中出一種自然銅形圓似蛇含大者如胡桃小者如栗
外有皮黑色光潤破之與鍮石無別但比礦石不作臭氣耳入藥用之殊驗ト此物禹餘糧樣鍮
石ト形狀頗相似タリ混ズベカラズ○遠江菊川天神澤產里俗カネイシト云庚辰歲予始テ此ヲ得
タリ壬午主品中ニ具ス○下野產遠江產ニ同シ○松岡子用藥須知曰自然銅金色銀色鐵色ノ三
種アリ金銀二色ノモノ紀州熊野ヨリ出ヅト國倫按ズルニ疑ハ是金牙石銀牙石ナラン然ドモ其
物ヲ見ザレバ是非決シガタシ又曰無名異自然銅蛇含石三物大抵相似タリ皆小碎石ノ一處ニ
アツマリテ成毬モノナリ打破スルニ圓ニ解クルモノハ無名異ナリ方ニ解クルモノハ自然銅ナリ
方圓不定モノハ蛇含石ナリ功用大抵相似タリト又按ズルニ此說ノゴトキハ其性一物ニシテ形
ヲ以テ名ヲ異ニスルニ似タリ恐クハ誤ナラン三物各類ヲ異ニス必混ズベカラズ

△鍮石　自然銅條下蘓頌曰火山軍出者顆塊如銅而堅重如石醫家謂之鍮石用之力薄采無時又云
今市人多以鍮石爲自然銅燒之成青焰如硫黃者是也此亦有二三種ト此物本邦ニモ產ス然
ドモ其相似タルモノ多キヲ以テ人知コト能ハズ辛巳ノ歲予伊豆ニ至テ始テ是ヲ得タリ二種アリ其

形不同

○方解様ノモノアリ蘊頌曰一種碎理如闇砂者皆光明如銅色多青白而赤少者燒之皆成烟焰頃刻都盡今醫家多誤以此爲自然銅市中所貨往往是此而自然銅用多須火煆此乃畏火不必形色只此可辨也ト此物形方ニシテ纍纍相重大小不定自然銅金銀牙石ト甚ダ相似タリ是ヲ辨ズルノ法炭火中ニ投ズレバ牙石類ハ烢聲アリテ飛散ス鍮石ハ然テ青焰アルコト硫黃ノ如シ臭氣モ亦相似タリ火盡レハ其形浮炭ノゴトシ火ニ入ザル時ハ自然銅ト紛ヤスシ醫家知ズンバ有ベカラズ○伊豆熱海産方言ジヤカト云壬午主品中予具之○下總産上品壬午客品中同國香取郡佐原村藤友才具之○美濃産壬午客品中同國可兒郡石原村三宅儀平具之

○禹餘糧様ノモノアリ頌曰一種有殼如禹餘糧擊破其中光明如鑑色黃類鍮石也ト此物殼アリテ禹餘糧ニ似タリ中ハ銅鑛ノゴトク又蛇含様自然銅ト一般是ヲ燒テ青焰硫黃ノゴトキコト方解様ノ物ト異ナルコトナシ○伊豆田方郡修善寺村不越坂山中産壬午主品中予具之

銅礦石　俗ハクト稱ストカゲハク紅ハクソウデンハクノ數品アリ○伊豫産上品○下野足尾産中品

銅青　和名ナラロクシヤウ銅ノ精華ナリ銅山自然ノ山氣ニ熏蒸シテ出ルモノハ石綠ナリ人作ヲ以テ製シ出スモノハ銅青ナリ

粉錫　一名白粉一名胡粉和名オシロイ鉛ヲ製シテ作ルモノナリ白粉ヲ再燒ハ又鉛出ルナリ今和

俗胡粉ト稱スルモノハ牡蠣或ハ蛤蚌ノ類ノ殼ヲ燒テ水飛シタルモノナリ是ハ蛤粉トテ功用モ別ナリ方書胡粉トアルニハ白粉ヲ用ウベシ又畫色ニ用ウ芥子園畫傳曰古人率用蛤粉今則畫家概用鉛粉矣ト本邦ニモ畫家蛤粉ヲ用ウルモノハ古傳ナリ近世漢畫ヲ學フ者ハ白粉ヲ用ウ○漢製下品○和製上品ナリ又上中下ノ品アリ價賤キモノハ他物ヲ雜フルモノ多擇用ウベシ

密陀僧　藥肆二種アリ

○和俗銀密陀ト云モノ蘸頭所謂銀鉛脚ト云モノ是ナリ

○又金密陀ト云アリ黃赤色ニシテ形靈砂ニ類ス蘸恭曰出波斯國形似黃龍齒而堅重古今醫統曰金錫即密陀僧金色者ト蓋是ナラン松岡子曰金密陀ハ他物ナリ不可用ト是非未詳

古文錢　此モノ目疾ヲ治スルコト妙ナリ其外功用多シ東璧曰但得五百年之外者即可用○大半兩錢　前漢書食貨志曰秦兼天下鑄銅錢質如周錢文曰半兩重如其文敦素曰徑寸二分重八銖○三銖錢　前漢書武帝紀曰建元元年春二月行三銖錢○五銖錢　前漢書武帝紀曰元狩五年罷半兩錢行五銖錢○四出文　一名角錢後漢書靈帝紀曰中平三年鑄之○直百五銖　宋洪遵泉志曰此錢不知年代品然考諸家之說則劉備所鑄審矣○大泉五百　吳志曰孫權嘉禾五年春鑄大錢一當五百○得壹元寶　唐書食貨志曰史思明據東都鑄之○周元通寶　五代志周紀論曰世宗即位之明年廢天下佛寺三千三百三十六毀天下銅佛以鑄之（以上八種皆漢錢）○寛平大寶　寛

平二年鑄之○富壽神寶　弘仁九年鑄之○乾文錢　泉志引國朝會要曰大平興國九年日本國僧奝然等浮海至云其國用銅錢文曰乾文寶（皆和錢以上三種）凡テ十一種紀藩關口氏壬午客品中ニ具ス其餘二百有餘種或ハ五百年內ノモノ或ハ蠻錢ノ類藥用ニ關ラザルモノ今略之

玉部

珊瑚　此物海底石上ニ生ズ枝アリテ葉ナシ○漢產和俗亞媽港ト稱スルモノ上品ナリ宗奭曰有紅油色者細縱文可愛ト云モノ卽是ナリ又色淡モノアリ宗奭曰有如鉛丹色者無縱文爲下品ト云モノ是ナリ又一種赤コト血ノゴトク縱文ナキモノ和俗血玉ト云下品ナリ

△海松　和名琉球珊瑚又嶋珊瑚ト云海中石上ニ生ズ色赤シテ珊瑚ニ似タリ蘇頌曰珊瑚明潤如紅玉中多有孔亦有無孔者ト此說ノゴトキハ無孔者珊瑚樹ニシテ有孔ト云モノハ海松ヲ指ニ似タリ又物理小識曰一種海松全相似惟有針眼ト今此說ニ從テ二物トス此物形色甚珊瑚ニ似タリトイヘトモ固ヨリ別物ナリ又中山傳信錄曰海松生海水中大者二三尺根蟠海底石上久之與石爲一矣國人亦名礁松似言松本木類附生石上如義甲義髻之義此字甚切按字書礁石貌別是一意其枝葉纖細與側栢無少異鮮紅如火疑以柏枝葉成朱色有腥氣不可近翫其根本色輪囷屈曲如老樹根以刀刻之拒不可入儼然石也生馬齒山者較他處尤良紅色不卽

褪落ト此說甚詳ナリ惟蔵字註解鑒說ナリ本邦俗蔵ノ字ヲイソト訓シテ海濱ノ事トス琉球國本邦ノ詞ヲ用ウルモノ多シ是卽イソマツノ訓ナリ此物本邦ニテモウミマツイソマツト云○琉球產上品徑二寸長尺餘○紀伊熊野產上品○相摸產中品方言ウミマツ又イソマツト云

○一種和俗珊瑚砂ト稱スルモノアリ相摸紀伊但馬若狹等ノ海濱ニ出ヅ好事者翫之是卽海松ノ杪ニシテ眞珊瑚ニハアラズ海松杪ニ至テハ針眼ナク節節脆クシテ折易シ其折タルモノ砂中ニアリテ海水ニ礲礪レバ光潤珊瑚ノゴトシ

馬腦　數種アリ形色ヲ以テ名稱ヲ異ニス

○南馬腦　顚薦負暄錄曰南馬腦產大食等國色正紅無瑕可作杯斝○蠻產上品紅毛語アガアトステイント云

○截子馬腦　又曰截子馬腦黑白相間○漢產上品

寶石　是亦類多シ

○一種陸奧津輕ノ海濱ヨリ多ク出和名ツガルジヤリ又イマベツ石ト云色微黃色其外所在海濱砂石中ニ交リ生ズ

○石榴子　和名ザクロイシ是亦寶石ノ一種ナリ○蠻產其形全ク石榴ノ子ノゴトシ蠻人持渡ルコト希ナリ故ニ奸商硝子ヲ以テ僞造スルモノアリ

水精　東璧曰倭國多ニ水精ト此物本邦所在ニ産ス石英ト一物二種ナリ石英ハ大小皆六面如削
水精ハ顆塊定ル形ナシ貝原先生水精大小皆六角ナリト云ハ石英ヲ指ニ似タリ○日向産上品○
近江産中品

雲母　和名キラ、○參河吉良村産上品○河内道明寺山中産中品○讃岐良野産下品○豐産上
品紅毛語アラビヤガラアスト云アラビヤハ國ノ名ナリガラアスハ硝子ヲ云其大サ尺餘甚透明ナ
リ

△雲膽　雲母ノ色黑キモノナリ弘景曰其黯黯純黑有文斑斑如鐵者名雲膽ト○漢産上品○讃岐寒川
郡菴治村ニ産スルモノ小ニシテ下品ナリ

△雲砂　和名金雲母即雲母ノ黄色ナルモノナリ別錄曰雲砂色青黄ト云モノ是ナリ○漢産上品○
陸奥産下品ナリ方俗ヒル石ト云此物火ニ入レバ大ナルコト十倍ス其形蛭ニ似タルヲ以テ名ク

白石英　和名ケンジヤリ又カブトスイシヤウト云山中土石ノ上ニ生ズ皆六角ニシテ上鋭レリ上品ナ
ルモノ明徹ニシテ色白黯色ナルモノ下品ナリ○日向産上品○紀伊産上品○尾張本庄山産上品○
備前兒嶋産中品○信濃産上品○讃岐飯山産中品ナリ

黑石英　○漢産上品○攝津甲山産中品○近江産下品

紫石英　○漢産徑寸餘長三寸色深紫色至テ上品○近江産中品○下野都賀郡足尾連景寺山中

産中品方言ドウメウジト云

物類品隲卷之一終

物類品隲卷之二

藍水田村先生鑒定

讃岐　鳩溪平賀國倫編輯
東都　田村善之
　　　中川鱗同校
信濃　青山茂恂

石部

丹砂　一名朱砂辰州ニ出ルモノヲ上トス是ヲ辰砂ト云其餘或ハ形色ヲ以テ稱シ或ハ出ルトコロノ地名ヲ以テ稱スルモノ多シトイヘドモ和俗都テ辰砂ト稱ス○漢産上品○蠻産上品○大和吉野産上品○豐前下毛郡草本村産中品

水銀　和名ミヅカネ丹砂ヨリ出ヅ製法傳アリ又馬齒莧ヲ燒テ取タルヲ草汞ト云○漢産上品○伊勢産上品

水銀粉　一名輕粉和名ハラヤ水銀ヲ燒テ製ス○伊勢産上品

粉霜　水銀粉ヲ製シタルモノナリ升錬ノ法綱目修治ノ下ニ詳ナリ又別ニ直ニ水銀ヲ以テ製スル法

アリ醫宗粹言ニ載ス曰用水銀二兩鹽一兩明礬一兩皂礬一兩硝五錢共研一處以水銀不見星爲度用固濟礶一箇裝入前藥礶口用鉄燈盞固封密鉄線縛緊安三百眼爐上先文後武煉三炷香燈盞注水冷定取下升在盞上者掃下爲粉霜墜下者可以洗瘡毒傅腫毒○蠻産上品紅毛語メリクリヤルドーリス社友中川淳菴云是卽粉霜ナルベシ本草ニ其形如白蠟ト云ニ能合リト按ズルニメリクリヤルハ紅毛人水銀ヲ云ドーリスハ殺スト云詞ナリ水銀殺トハ水銀ヲ燒製スルヲ云ナリ蠻人ノ語脈此類多シ

銀朱　和俗直ニ朱ト云此物水銀ヲ燒製スルユヱ銀朱ト云毒アリ朱砂ト混ズベカラズ○漢産上品
和産上品○琉球ヨリ來ルモノ至テ上品

雄黄　和名ヲワウ其色如鷄冠者ヲ上トス和俗鷄冠石ト云○漢産上品

雌黄　雄黄ト一類二種ナリ和俗雌黄ト稱シテ畫色ニ用ウルモノハ藤黄トテ木脂ヲ取製シタルモノナリ本草蔓草部ニ出タリ眞ノ雌黄ハ石ナリ混ズベカラズ○漢産黑色ナルモノ下品○漢産黄金色ナルモノ至テ上品弘景曰出扶南林邑者謂之崑崙黄色如金而似雲母甲錯畫家所重ト云モノ是ナリ硫黄ニモ亦崑崙黄ノ名アリ同名異物ナリ○信濃産下品ナリ

石膏　○漢産上品○河内交野郡産中品○尾張智多郡産下品○石見産上品○越後山ノ下産上品

理石　石膏ト一類二種ナリ石膏ハ文理俺クシテ短ク理石ハ文理細ニシテ長シ別錄曰理石如石、

膏順理而細束璧曰卽石膏中之長文細直如絲而明潔色帶微青者ト云是ナリ○南部産上品己卯主品中田村先生具之○伊豆熱海産形小ニシテ匹消ノゴトシ中品ナリ○箱根産熱海ノ産ト同シ○河内金剛山産中品ナリ

長石　一名硬石膏先輩硬ノ字ニ泥テ火石ノ類トスルハ誤ナリ硬トハ軟石膏ノ鬆軟易碎ニ對シテ云ナリ火石ノ類ヲ云ニハアラズ李氏ガ所謂理石卽石膏之類長石卽方解之類ト云ヲ以テ考ベシ本草石膏理石長石方解石ノ四物諸説甚紛ハシ熟覧翫味スルニアラズンバ其詳ナルコトヲ得ズ唐宋ノ諸方ニ所用ノ石膏多ハ此長石ナリ○下野川股村産和名カキガライシ方言雪石ト云形頗ル石膏ニ類ス石膏ヨリ堅シ是ヲ碎バ片片横解スルコト牡蠣殼ノコトク色至テ潔白ニシテ玉ノゴトシ東壁ガ説トコロト毫モタガフコトナシ己卯三月予始テ此物ヲ得タリ本草ヲ閲スルニ其長石タルコト疑ナシ是ヲ懐ニシテ田村先生ニ至ル先生亦南部所産ノ理石ヲ得タリ再諸説ヲ考ルニ各眞物タルコト疑ナシ共ニ先輩ノ所未考ナリ

方解石　和名イヽキリ○漢産上品○常陸産上品○出羽庄内産中品○讃岐屋島産中品

滑石　○漢産上品○河内安部郡國分村産上品○備前八木山産上品

△冷滑石　和名イシワタ和俗イシワタト云モノ類多シ混ズベカラズ是ハ滑石ノ青蒼色ナルモノナリ○漢産上品○尾張産上品○上野産中品○讃岐菴治村産中品

△斑石　和名ブドウ石滑石條下ニ頌曰萊濟州出者理粗質青有黒點亦謂之斑石可作器甚精好ト云モノ是ナリ○駿河産上品硯及他ノ翫器ヲ製出ス

△松石　不灰木附錄ニ出タリ和名マツイシ○下野産下品

白石脂　○漢産上品○大和産中品

黄石脂　○蠻産上品紅毛語ボウリスアルメニヤト云此物外療ニ用テ功効多シ○長崎山里村葛坂産上品○肥後宇土郡産上品以上二種蠻産ト異ナルコトナシ戊寅歳田村先生始テ得之

赤石脂　○佐渡産上品○山城産上品○武藏秩父山産中品○讃岐城山産下品

爐甘石　○漢産古渡上品○漢産新渡中品○山城産上品

無名異　東璧曰無名異庾詞也本草原始曰出大食國生於石上大者如彈丸小者如黒石子顔色黒褐嚼之如錫言無可名其異也○漢産上品大サ蜀黍粒ノゴトシ○石見産上品○讃岐産下品形色零餘子ニ似タリ方俗ムカゴ石ト云

△畫燒青　和名ゴス即火煉ノ無名異ナリ形頗ル鐵屎ニ似テ色黒シテ青光ヲ帯ブ瓷器ニ畫テ燒之バ青色ニシテ扁青色ノゴトシ南京燒肥前燒ニ畫トコロ皆此物ナリ御室燒尾張燒ノ類ニ用ル時ハ青色ヲアラハサズ黒色ニシテ不佳獨伊萬里燒唐津燒等ニ用テハ青色至テ妙ナリ毎歳漢土ヨリ來ルヲ待テ用ニ給ス人其火煉ヲ經タルコトヲ思ハズ漢産ノ物ノ形色ヲ以テ物色シテ是ヲ求ム故ニ本邦

ノ產絕テナシ辛巳歲予始テ本邦亦此物アルコトヲ知レリ按ズルニ天工開物曰凡畫碗靑料總一味無名異此物不生深土浮生地面深者堀下三尺卽止各省直皆有之亦辨認上料中料下料用時先將炭火叢紅煆過上者出火成翠毛色中者微靑下者近土褐上者每斤煆出只得七兩中下者以次縮減凡使料煆過之後以乳鉢極研（其鉢底留粗不轉銹）然後調畫水調研時色如皂入火則成靑碧色物理小識曰窯器之靑乃石土所畫也盧陵安福新出黑赭石磨水以畫磁坏初畫無色入窯燒之則成天藍景德窯掌取諸婺源名曰畫燒靑一曰無名子蘸溺泥靑則外國來者以上ノ諸說幷考ベシ○漢產上品○讚岐陶村產下品以上二種壬午主品中予具之

石鍾乳　和名ツラヽイシ深洞幽穴ノ中ニ生ス石液滴リテ氷柱ノゴトク下リ垂ル石ニ附タル所ノ本殷孽ト云中ヲ孔公孽ト云鍾乳ハ末ニ至テ細クシテ透明ナリ○漢產上品○遠江岩水村產中品○豐後大野郡木浦山產上品○石見產上品

孔公孽　鍾乳石ノ本殷孽ノ末ナリ○遠江產上品○信濃木曾白保根山產上品

殷孽　鍾乳孔公孽ノ根ナリ○遠江產上品○下野安蘇郡山菅村產中品

△石牀　殷孽附錄ニ出タリ一名石笋蘇恭曰鍾乳水滴下凝積生如笋狀ト鍾乳ハ洞穴中ニ上ヨリ下リ生ズ石牀ハ上ヨリ乳水滴落テ下ニテ凝タルモノナリ其狀頗笋ニ似タリ

△石花　殷孽附錄ニ出タリ一名乳花蘇恭曰生乳穴堂中乳水滴石上散如霜雪者ト按ズルニ是亦石

牀ト一物二種ナリ凝積シタルモノハ石牀ナリ迸散シテ凝タルモノハ石花ナリ〇遠江産上品ナリ鍾乳以下五種其本ハ一物又同ク洞中ニ生ズ精粗本末ヲ以テ名ヲ異ニスル耳

土殷孽　東璧曰此即鍾乳之生於山厓土中者ト按ズルニ乳水洞穴中ニ凝モノハ鍾乳ナリ土中ニ凝モノハ土殷孽ナリ〇下野産上品

石髓　按ズルニ二種アリ下ニ詳ナリ

〇仙經曰神仙五百年一開石髓出又王烈入山見石裂得髓食之因撮小許與嵆康化爲青石ト是ハ石中空處ニ生ズルモノナリ〇下野境野産壬午客品中官醫山田氏具之云土人石ヲ破ル石中水アリテ流出ツ即時ニ凝テ石トナル其質殷孽ニ似テ色白シ上説ハ青石ナリ恐ハ石ノ色ニ随テ此物モ亦色ヲ異ニスルカ藏器曰有白有黄ト然時ハ色ハ不一ト見エタリ

〇藏器曰石髓生臨海華蓋山石窟土人采取澄淘如泥作丸如彈子ト此説上ノ石中空處ニ生ズルモノト異ナリ〇越前大野郡打浪村産壬午客品中郡上侯醫官澤東宿具之云深山溪水流出ス其邊自然ニ凝結シテ石トナル或ハ草木ノ枝葉其外何ニテモ物ニ附タル時ハ其物ノ形ニ随テ凝結ス〇下野安蘇郡山菅村産是亦山田氏所具是即水中自然ニ凝結スルモノナリ此二種境野ノ産ト所出一樣ナラズトイヘドモ皆石髓ナリ國倫按ズルニ鍾乳石孔公孽殷孽石牀石花土殷孽石髓ノ七種本同物ニシテ皆石液ナリ凡玉石皆液アリ玉液ヲ玉髓ト云フ石液ヲ乳水ト云フ石全トキ

ハ液出ルコトアタハズ或ハ金銀ヲ掘リ又ハ故アリテ石中穴ヲ穿ツ時ハ洞穴中石液滲漏凝結下垂シテ形ヲナス是ヲ鍾乳石ト云殷孼孔公孼石花石狀異名トイヘドモ同一物ナリ又石液滲漏シテ土中ニ凝結シタル是ヲ土殷孼ト云又石中希ニ空處アレバ液其中ニ充滿ス石ヲ破レバ流出シ風日ヲ見レバ凝テ石トナル下野境野ニ出ルトコロノ石髓是ナリ又深山幽谷石液水ト共ニ凝タルモノアリ下野山菅村越前打浪村ニ產スル所ノ石髓是ナリ列仙傳ニ言功疏煮石髓服卽鍾乳也ト云モノ證トスベシ今三所出ル所ノ石髓ヲ見ルニ其質殷孼孔公孼ト全ク同物ナリ又蛤蚌蝦蟹其餘諸物ノ化石モノ乳水ノ爲ニ凝結セラレテ朽ルコト能ハズシテ化スルモノアリ或ハ乳水ナクシテ化スルモノアリ又美濃國ニ產スル日ノ糞月ノ糞ト稱スルモノ人甚珍トス或曰空中此物ヲ雨スト此說非ナリ是亦乳水玉液等ノ螺殼中ニ入凝結シテ後螺殼去テ乳液殘タルモノナリ

△地脂　按ズルニ綱目石髓ノ條下東壁曰方鎭編年錄云高展爲幷州判官一日見砌間沫出以手塗老吏面皺皮頓改如少年色展以爲神藥問承天道士道士曰此名地脂食之不死乃發砌無所見又北史云龜茲國北大山中有如膏者流出成川行數里入地狀如醍醐服之齒髮更生病人服之皆愈ト以上二說其形狀ヲ考ルニ石髓トハ別物ナリ混ジテ一トスルモノハ誤ナリ讃岐阿野郡川東村奥林ニ石壁アリ高數丈去地丈餘ニシテ水石間ヨリ滴出ス內ニ乳汁ノゴトキモノ流出土人石ノ乳ト號ス火傷ニ塗テ治スルコト神ノゴトシト云フ是上ニ所說ノ地脂ナルベシ壬午客

品中同國陶村三好喜右衛門具之

石腦油　和名クソウズノアブラ○越後蒲原郡如法寺村産水上ニ浮ヲ土人カグマト云草ニ付取テ器中ニ貯ヘ燈油ニ用ウ○信濃水内郡藥山産越後ノ産ニ同シ

石炭　和名カラスイシ黑コト墨ノゴトシ火ニ入テ能然ユ○美濃産中品○大和水谷川産中品○信濃産上品○筑前鞍手郡産中品ナリ土人イハシバ又イシズミト云用テ薪ニ代フ

石灰　和名イシバイ此物石ヲ燒テ灰トス又蛤蚌及牡蠣房ヲ燒タルヲ蛤蚌粉牡蠣粉ト云狀石灰ト甚相似タリ故ニ和俗又石灰ト云然ドモ石灰トハ別ナリ混ズベカラズ○武藏多摩郡成木村産上品末燒時ハ其石色白微黯色ヲ帶テ堅キ石ナリ

△水龍骨　即艌船油石灰ナリ本邦ノ船ハ船茹ヲ用テ石灰ヲ用ヒズ故此物ナシ○漢産長崎ニアリ

石麪　○武藏那珂郡圓良田産色至テ白ク其形麪ノゴトシ壬午客品中同國野中村中島利兵衛具之○出雲産上品壬午客品中大坂古林杏節具之

△暈石　陳藏器本草拾遺曰生海底狀如薑石紫褐色極緊似石是鹹水結成之自然有暈也ト鹹水結成スト云ヲ以テ綱目浮石ノ附錄ニ出ス然トモ浮石ト別類ナリ○相摸産方言クモイシト云

石芝　和名クサビライシ又リウグウノサイハヒタケ此物海中石上ニ生ズ紀伊海中多クアリ其外所所ニ産ス其種甚多形狀モ亦一ナラズ○紀伊田部産上品○薩摩産大サ一尺餘至テ上品

慈石　和名ハリスヒイシ○漢產上品○備前產上品○甲斐金峯山產中品

玄石　慈石ノ鐵ヲ吸ザルモノナリ其色黑シ○甲斐金峯山產慈石ノ中ニ交リ產ス

代赭石　○漢產中品○漢產丁頭代赭和俗マメデト稱スルモノ上品ナリ

禹餘糧　和名イハツボ太一餘糧ト一類二種ナリ東璧名醫別錄ノ說ニ從テ生于池澤者爲禹餘糧生于山谷者爲太一餘糧○漢產上品○東都白銀臺熊本侯別莊溪澗中產上品○甲斐產中品○紀伊境浦海邊產上品ナリ

太一餘糧　○漢產上品○和泉產上品○紀伊綱不知浦金山產上品○讚岐鵜足郡炭處村產下品

空青　一名楊梅青陳藏器曰大者卽空綠次者卽空青也按ズルニ先輩イハコンジヤウトスルハ非ナリイハコンジヤウハ扁青ナリ下ニ見エタリ空青ハ狀楊梅ノゴトク內空ニシテ水ヲ含ミ色青クシテ綠ヲ帶ブ故ニ一ニ楊梅青又空綠ト名ク或ハ先輩岩コンジヤウト云ル說先入トナリテ綠色ニアラズト云者アリ誤ナリ綱目空青ノ發明ニ東璧曰銅亦青陽之氣所生其氣之淸者爲綠猶肝血也集解ニ又曰方家以藥塗銅物生青刮下僞作空青者終是銅青非石綠之得道者也ト銅青ハナラロクシヤウナリ是ニテ空青ノ僞造ヲスレバ空青ノ綠色タルコト明ナリ造化指南ノ說等合セ考ベシ○漢產庚辰主品中田村先生所具內ニ水ナシ下品ナリ

曾青　是亦青綠色ナリ東璧曰形如黃連相綴又如蚯蚓屎方稜色深如波斯青黛層層而生ト云

モノ是ナリ○漢産庚辰𫝼品中田村先生所具スルモノ上品ナリ

△鍮石　和名笙石或作青石物理小識曰鍮石性高麗者可磨下石汁塗笙簧是即今笙簧所塗ノ笙石ナリ其色青緑色是空青曾青ノ類ニシテ金部鍮石ト同名異物ナリ又綱目空青ノ條下東壁引造化指南云銅得紫陽之氣而生緑緑二百年而生石緑銅始生其中焉曾空二青則石緑之得道者均謂之鑛又二百年得青陽之氣化爲鍮石ト此鍮石又シヤウセキヲ云ナリ金部ノ鍮石ニアラズ○朝鮮産上品壬午𫝼品中予具之

緑青　一名石緑和名イハロクシヤウ畫色ニ用ルニハ水飛シテ三品トス頭緑二緑三緑ト云芥子園畫傳ニ見エタリ○攝津多田産上品○下野足尾山産下品ナリ

扁青　一名大青一名石青和名イハコンジヤウ是亦畫色ニ用ルニハ水飛シテ頭青二青三青トス空青ヨリ以下五種皆銅山ヨリ出ヅ銅ノ精華ナリ○漢産上品○攝津産上品ナリ

△佛頭青　和名ハナコンジヤウ綱目扁青集解中ニ出トイヘドモ不説形狀天工開物曰回青乃西域大青美者亦名佛頭青上料無名異出火似之非大青能入洪爐存本色ト按ズルニ瓷窯ニ入テ本色ヲ存スルモノ鐵落畫燒青ハナコンジヤウノ三種ノミ其餘ノ畫色皆色ヲ變ズ天工開物ニ所説ノ佛頭青即ハナコンジヤウナルコト明ナリ此物蠻國ヨリ來ル初細砂ノゴドシ研之細末シテ畫色ニ用フ扁青ニ比スレバ下品ナリ先輩云硝子屑ナリト未詳

△ペレインブラーウ　紅毛人持來ル扁青ニ似テ質輕ク扁青ニ比スレバ色深クシテ甚鮮ナリ予家紅毛花譜一帖ヲ藏ム品類凡數千種形狀設色皆眞其青碧色ノモノハ此ペレインブラーウニテ彩ルト見エタリ其色至テ妙ナリ東壁曰有天青大青西夷回回青佛頭青種種不同回回青尤貴ト疑ラクハ此物回回青ナラン

石膽　一名膽礬○漢産上品○下野足尾山産上品ナリ

礞石　一名青礞石○漢産上品○大和葛下郡下牧村産上品壬午主品中田村先生具ス同國宇陀郡松山森野賽郭始テ得之ト云

花乳石　一名花蕊石和名アハモチ石○漢産古渡上品○漢産新渡中品

金牙石　其形大小不定皆方ニシテ方解様ノ自然銅ニ似タリ金色ニシテ鍮石ニ類ス○漢産上品○佐渡産上品○信濃産中品

△銀牙石　金牙石ノ白色ナルモノ是ナリ○參河産上品○但馬産上品○大和吉野下市産上品

金剛石　一名削玉刀梵語跋折羅亦云斫迦羅大論云越闍新云縛左羅西域記云伐羅闍共ニ飜譯名義集ニ見タリ抱朴子曰扶南出金剛生水底石上如鍾乳狀體似紫石英可以刻玉人沒水取之雖鐵椎擊之亦不能傷惟羚羊角扣之則灌然氷泮玄中記曰大秦國出金剛一名削玉刀大者長尺許小者如稻黍着環中可以刻玉起居注曰晉武帝十三年燉煌有人獻金剛寶

生於石中色如紫石英狀如蕎麥百錬不消可以切玉如泥羅什維摩經註曰如有方寸金剛數十里内石壁之表所有形色悉於是現ト以上諸說ヲ以テ考レバ紅毛人持來ル所ノデヤマンナリ西川求林齋曰ギヤマンデ又デヤマントモ云其色紫赤多シ鐵槌ニテ打ドモ碎ズト此說ヲ見レバ當時長崎へ來ルモノハ紫赤ノモノアリト見エタリ近世見ル所ノ物ハ多白シ又薩遮尼乾經曰帝釋金剛寶能滅阿脩羅智碎煩惱山能壞亦如是無常經曰金剛智杵碎邪山永斷無始相纏縛ト其餘佛經金剛石ヲ以テ佛性ニ喩ル者ハ至テ堅剛ニシテ不壞ナルヲ以テナリ惟羚羊角ヲ以テ扣ハ碎ルコト物性ノ妙ナリ○蠻產デヤマン壬午主品中田村先生具之ソノ大サ二分許是ヲ指彄ニ着ク其質水精白石英ノゴドシ至テ明徹ナリ照之遠近左右悉クウツル然ドモ近世僞造スル物多シ試之法鐵椎ヲ以テ擊テ傷ザルヲ眞トシ或ハ燒赤シ醋中ニ淬シテ如故酥碎セザル等ノ法アリトイヘドモ此物世人甚珍トス其價數十金ヨリ百金ニ至ル故ニ容易ニ試ガタシ

△石砮　砭石附錄ニ出タリ和名ヤノ子イシト云古今醫統曰石砮卽砭石之別名也ト稻生先生亦一物トス○下野那須野產上品○尾張三淵山產中品○讃岐陶村產下品

薑石　和名シヤウガイシ○相模海中產形佛掌薯ノゴトシ

石蟹　和名カニイシ是蟹土中ニ有テ化シテ石トナリタルナリ○若狹瀨井濱產上品

石蛇　和名ハマカヅラ又ジヤカヒト云所所海邊石ニ著生ス肉アリ牡蠣ノ類ナリ綱目石部ニ出シ或

ハ眞ノ蛇ノ化スル所トスルハ誤ナリ

石鹽　和名ミドリ石ト云蟲部亦石鹽アリ同名異物ナリ○紀伊產上品

食鹽　和名シホ鹽ノ品類多シ海鹽井鹽鹺鹽池鹽崖鹽石鹽木鹽等食用ニ充ベキモノ皆食鹽ナリ印鹽ハ獸等ノ形ヲ作リタルヲ云本邦花鹽ノ類ノゴトシ飴鹽ハ飴ヲ拌マゼタルモノナリ本邦所所ヨリ出ルモノハ皆末鹽ナリハナ鹽ヤキ鹽ノ外ハ製作モナシ鹽井等モアレドモ日本ハ四方海ニ近キ國ユヱ製スルモノ希ナリ紅毛人持來ルモノハ種類多シ紅毛語鹽ヲソウトヽ云ラテン語ニテサルト云

○崖鹽　一名生鹽東壁崖鹽ヲ食鹽トシ又光明鹽ノ一種トス今按ズルニ其說相戾レルニ似テ却テ說得タリ崖鹽ハ食鹽ナリ其中明瑩ナルハ光明鹽ナリ○蠻產紅毛人持來ル云山崖ノ間ニ生ズト其形白礬ノゴトク黯色ナリ○下野鹽谷郡鹽湯產形枯礬ノゴトシ

○自然白鹽　和名ヲランダシホ吳錄曰婆斯出自然白鹽如細石子ト綱目光明鹽集解中ニ見エタリ今按ズルニ是亦食鹽ナリ故ニ此ニ出ス近世紅毛人持來ルニ因テヲランダシホト云形方稜纍纍トシテ相重屋形ノゴトシ味鹹甘能胸膈ヲ開ク○蠻產上品○讃岐山田郡瀉本產蠻產ト異ナルコトナシ方言ジヲンシホ又テントウシホト云亭戶鹵地ニ海水ヲソヽギ日ニ晒スコト數次霜ヲ生ズルヲ待テ刮取海水ヲ以テ淋滲シタルヲ名テタレシホト云是ヲ池中ニ貯置ハ其ノ底自然ニ凝

結シタルモノナリ○讃岐小豆島土庄産上ノモノニ同シ

戎鹽　蠻國ニ産ス故ニ胡鹽羌鹽等ノ名アリ凡ソ中華ニ産セズシテ蠻國ヨリ來ル鹽ハ皆戎鹽ナリ然ドモ古方戎鹽ト稱シテ藥用トスルモノハ青赤ノ二種ノミ

○青鹽　形色頗ル南蓬砂ノゴトク青黑色ナリ

○赤鹽　一名紅鹽一名桃花鹽形礬石ノゴトクニシテ微紅色ナリ以上二種紅毛人持來ル

光明鹽　和名ハルシヤシホ本唐本草ニ出タリ是卽食鹽中ノ一種顆塊明徹ナルモノ而已猶礬石中之明礬東壁山産水産ノ二種ヲ分別ス其說精ニ似テ却テ煩雜ナリ○蠻産上品大塊ニシテ形方解石ノゴトク色白シテ光徹ナルコト水精ノゴトシ壬午客品中長崎紅毛通事吉雄幸左衞門具之

鹵鹹　和名シホノカタマリ多鹽ヲ置タル所ノ土中ニ結成スル形蟲白蠟ニ似テ色不潔是ヲ碎バ末鹽ノゴトシ其生ズル所ハ凝水石ト同シテ其ノ形稍別ナリ

凝水石　一名寒水石石膏方解石モ寒水石ト云同名異物ナリ鹽ヲ積置バ其精土中ニ凝テ此物トナル其形氷ノゴトシ

綠鹽　一名石綠蘓恭曰出馬耆國水中石上取之狀如扁青空青珣曰出婆斯國生石上按ズルニ蠻産スバンスグロウントト云モノ是ナリスバンスハ國ノ名ナリグロウンハ綠色ナリ其色綠ニシ

テ銅青ヨリ淡ク味酸濇ナリ紅毛繪ノ設色ニ用ウルモノ是ナリ○蠻産上品壬午主品中田村先生具之

鹽藥　藏器曰生海西南雷羅諸州山谷似芒消末細入口極冷○蠻産壬午主品中予具之紅毛語サクシイリソート、云○上總産是亦壬午主品中予具之是ヨリ先上總山部郡大豆谷村實方直員者來問曰我邑古坑中霜ヲ生ズ又自然ニ凝テ芒消ノゴトキモノ希ニアリ因テ試ニ霜ヲ取テ煎煉スレバ芒消ノゴトシ請フ是ヲ鑒セヨ予覽之其形色芒消ニ似テ味微苦火ニ入ルニ芒消ト小異芒消ハ風化シヤスシ此物ハ風化セズ詳ニ是ヲ察スルニ蠻産サクシイリソート、同物ニシテ即鹽藥ナリ直員製法末精予其法ヲ敎テ多ク製シ出サシム此物獨陳藏器本草拾遺ニ出テ功用多シトイヘドモ諸家是ヲ知ラズ然ルニ今本邦ヨリ出ルコト直員ガ功大ナリト云ベシ予嘗テ芒消ヲ得テ手製ス故ニ其事ノ詳ナルコトヲ得タリ類ヲ以テ推考ルニ非スンバ何ヲ以カ其鹽藥タルコトヲ知ン

水消　綱目諸消ヲ辨ズルニ朴消消石ヲ提頭ス今按ズルニ芒消牙消ノ名同名異物アリ其餘辨說亦多シ其紛紛タランコトヲ恐テ今水消火消ヲ以テ提頭シテ諸消ヲ其下ニ附ス他ト例ヲ異ニス

○朴消　一名消石朴今藥肆ニ灰樣ノ芒消ト稱スルモノ是ナリ即水消ノ地上ニ生ジタルヲ刮取テ未煎煉モノナリ是ヲ煎煉シテ凝結シタルモノ芒消英消盆消ノ三種トナルナリ東壁曰煎煉入盆凝結在下粗朴者爲朴消ト是朴消ト盆消ト混ジテ一トスルモノ大ナル誤ナリ朴ハ樸ト通ス器

ノシタヂニテ未手入セザルモノヲ云玉ノ未琢ヲ璞ト云石ニ磔ト云金ニ鉄ト云ト其義一ナリ馬志曰、朴者未化之義也以其芒消英消皆従此出故曰消石朴也又曰以暖水淋朴消取汁錬之令減半投于盆中經宿乃有細芒生故謂之芒消也ト此説ヲ以テ朴消ハ不經煎錬ノ證トスベシ宗奭輩一煎シタルヲ朴消トスルノ説甚非ナリ本草諸家諸消ヲ辯ズルコト詳ナラズ或ハ水消火消ヲ混ジテ一トスルノ類舉テカゾヘガタシ東璧曰諸消自晉唐以來諸家皆執名而猜都無定見惟馬志開寶本草以消石爲地霜煉成而芒消馬牙消是朴消煉出者一言足破諸家惑矣ト東璧馬志ニ據テ諸消ヲ辨ズルコト至テ明白ナリ實ニ千歳ノ卓見ト云ベシ然シテ朴消ト盆消ヲ一トスルモノハ千慮ノ一失ナリ○漢産上品○伊豆田方郡上船原村産上品船原ニ温泉アリ湯ノ涌出所ノ土石上ニ霜ヲ生ズ冬ハ多夏ハ少シ刮取バ其形末鹽ノゴトシ辛巳歳予始テ是ヲ得タリ本邦ニ此物出ル始ナリ芒消ノ下ニ詳ナリ

○芒消　熱湯ヲ以テ朴消ヲ淋瀝シテ菜菔ヲ入テ煎錬シ盆ニ入テ經宿凝テ細芒アルモノヲ芒消トシ凝コト大ニシテ石英ノゴトキヲ英消一名馬牙消ト云底ニ凝テ塊ヲナスモノヲ盆消ト云今藥肆芒消ト稱スルモノ多ハ馬牙消ナリ細芒ノモノニアラザレバ芒消ニアラズ又火消細芒ノモノヲモ芒消ト云其名ト形ノ似タルヲ以テ庸醫大承氣湯等ノ方中ニ火消ヲ用ウルモノハ甚誤ナリ其狀相似タリトイヘドモ火消ハ火ニ入レバ烟火ヲ發ス水消ハ消テ水ノゴトシ火消ハ陽ニシテ升リ

水消ハ陰ニシテ下ル氣味功用自別ナリ必代用ウベカラズ○漢產上品○伊豆田方郡上船原產上品予辛巳秋家僕ニ命ジテ藥ヲ伊豆國ニ採シム留ルコト三月餘產物ヲ送致スモノ數十度一日送致ス所ヲ閱スルニ一封ノ朴消アリ予此物ヲ求ルコト數年藥ヲ採每ニ必是ヲ思フ僕ニ形狀ヲ告ルコト亦數ナリ竟ニ得之其喜可知即時田村先生ニ告グ先生亦大ニ悅テ是ヲ　官ニ告ス同年十二月辱

台命アリテ國倫ヲシテ伊豆國ニ至テ是ヲ製セシム郡官江川君使吏助之數日ニシテ製成ル壬午正月歸東都亦就田村先生是ヲ　官ニ獻ズ

曩伊豆人鎮惣七來訪余神田僑居也其人能言本草余怪問其所由受則曰本邑崎嶇山海之間吾儕野人豈能知讀書而爲學哉往歲有誠所並河先生寓于三島驛講經之暇又授本草曰耕也餒在其中矣農夫野人不可不多識鳥獸草木之名狀臭味以備豫救荒之用也以故亦與有聞焉鎮氏將歸曰若使人採藥於伊豆我請爲之導珍品奇種庶幾亦可得也因命家僕從往焉果獲珍品數種芒消其一也鄉非鎮氏好本草余何由有得此物乎雖然無並河先生者鎮氏一野夫耳斯焉取斯嗟乎君子教人其所及者遠矣哉

○馬牙消　一名英消其形馬牙ノゴトク又石英ニ似タリ故ニ名ヅク東璧齊衛ニ出ルモノヲ芒消トシ川晋ノモノヲ馬牙消トス是製法ニヨリテ形自大小ノ別アルノミ

○盆消　芒消英消ハ朴消ノ精ナリ盆消ハ滓脚ナリ
○甜消　芒消馬牙消ニ消ノ內ヲ取テ萊菔ヲ入テ再三煎シテ凝結シタルモノナリ萊菔ヲ入ル時ハ
鹽氣萊菔ニシミテ鹹味少キユヱ甜消ト云
○風化消　是亦芒消英消ヲ以テ風日ノ中ニ置バ化シテ粉ノゴトシ
○玄明粉　芒消英消ヲ以テ燒製シタルモノナリ製法綱目修治ノ下ニ詳ナリ以上伊豆產七種皆手
製漢產二種凡九種壬午主品中ニ具ス
火消　一名焰消人家年ヲ經タル所ノ床下ニ出ヅ初其形霜ノゴトシ土ト同ク刮取製スルコト芒消ノ
法ノゴトシ新屋或ハ下濕ノ地ニハナシ又海邊ノ產ハ鹽氣アリテ下品ナリ是亦製法ニヨリテ三物
トナル下ニ詳ナリ是ニ硫黃ト炭トヲ合タルヲ烟藥ト云鐵炮烽燧火及烟火等ニ用ウ
○芒消　是亦細芒アルヲ以テ名ク水消ノ芒消ト同名異物ナリ○讃岐產手製上品壬午主品中ニ具
ス
○牙消　形馬牙ノゴトシ故ニ名ク是亦水消ト同名アリ又生消トモ云○漢產上品○越中五加山產上
品
○消石　東壁曰其凝底成塊者通爲消石ト是ナリ○讃岐產上品
硇砂　紅毛語サルアルモニヤアカ形鹵鹹ノゴトシランビキニテ薔薇露及其餘ノ露ヲ取ニ少許水中

ニ投ズレバ經年モ香氣散ゼズ此物焔消等ノ藥ヲ以テ製之製法傳アリ本草ニ硇砂青海ニ生ジ或ハ火焔山ニ出乘木皮ヲ取ノ說アリ紅毛通事楢林十右衞門曰サルアルモニヤアカ二種アリ一種ハ蠻國自然ニ生ズ一種ハ自然生ノモノ多得ガタキヲ以テ紅毛人他藥ヲ以テ升鍊シテ作之氣味功用自然生ノモノニ同ジ○紅毛製ノモノ庚辰主品中田村先生具之

蓬砂　和產未見漢產二種アリ

○西蓬砂　和俗スキホウシヤト云色白シ上品ナリ

○南蓬砂　和俗油蓬砂ト云青黑色下品ナリ

石硫黃　和名イワウ種種アリ上ヲウノメタカノ目ト云下ヲ火口ト云○漢產上品○肥後阿蘇山產上品○箱根山產中品○信濃高井郡米子山產上品○伊豆宇武具村產中品

△水硫黃　一名眞珠黃蘇頌曰出廣南及資州溪澗水中流出以茅收取熬出ト按ズルニ東壁ガ所說ノ土硫黃卽一物ナリ○箱根山產溫泉中ニ出ヅ其形土ノゴトシ火ニ入レバ焔ヲ發スルコト硫黃ト異ナルコトナシ方言ユノハナト云○上野草津溫泉ニモ產ス

礬石　和名ミヤウバン明礬ハ礬石ノ上品光明ナルモノヲ云然ルニ本邦ノ俗都テ明礬ト云○漢產上品○箱根產上品○豐後產上品○

○漢產一種紅色ナルモノ壬午客品中紀伊若山山瀨治右衞門具之本草ニ此物ナシ綠礬煆赤者

絳礬ト云是又別物ナリ

綠礬　和名ロウハ○漢産上品○攝津多田産上品○下野足尾産上品○一種長理文アリテ陽起石ノゴトキモノ藥肆所有ノ陽起石中ニ雜レリ是ヲ碎バ綠礬ナリ所出未詳

黄礬　和名キミヤウバン○豐後産上品壬午客品中大坂林隆菴具之○伊豆那賀郡志多留村産中品壬午主品中予具之

△石柏　和名ウミヒバ范成大桂海金石志曰石柏生海中一幹極細上有一葉宛是柏扶疎無小異根所附着如鳥藥大抵皆化爲石矣此與石梅雖未詳可以入藥否然皆奇物不可不志ト此物海中石上ニ生ズ其形甚側柏ニ似テ莖黒ク葉初海水ヲ出ル時ハ微紅色後白ニ變ズ甚愛スベシ又一種イソヒバト稱スルアリ海傍石間ニ生ズ形卷柏ノゴトシ世俗石柏ナリト云然トモ上ニ所説ト不合ウミヒバ眞ノ石栢ナリ○相模産庚辰客品中予具之

△石梅　和名ウメイシ范成大桂海金石志曰石梅生海中叢數枝横斜瘦硬狀色直枯梅也雖巧工造作所不能及根所附著如覆菌或云木質爲海水所化如石蟹石蝦之類ト其質硬シテ色白其狀金石志所説ノ如シ是石蟹石蝦ノ類ニアラズ又寇宗奭石花ト云ルモノ即是ナリ詳ニ綱目般孽附錄ニ見エタリ○相模江島産上品○播磨二見浦産下品○江島産一種赤色ノモノアリ

△試金石　和名ツケイシ又ナチグロト云金ノ眞僞ヲ試ニ此石ニアラザレバ知ガタシ物理小識曰洗試

金石上金法以鹽置ニ濕地胡桃油摩之去○紀伊那智產上品○陸奧津輕產上品

△化石　古人曰石者氣之核也按ズルニ諸物其氣凝時ハ皆石ニ化ス石蟹松石ノ類既ニ本條ニ出ヅ其餘化石此ニ附ス

○蛤蚌ノ類石ニ化スルアリ○伊勢榊原村貝石山產上品○美濃岩室產下品○遠江產中品○土佐產上品方言クハズノ貝ト云○信濃水內郡產中品以上五種皆文蛤ノ化石ナリ○近江產上品シラカヒ化石ナリ○下野鹽谷郡鹽湯壺折谷產下品○伊豆產下品以上二種海扇化石ナリ○信濃產下品牡蠣殼化石ナリ○參河產上品蠣黄化石ナリ其形生物ト異ナルコトナシ壬午客品中尾張津島氷室氏具之

○螺類化石アリ○尾張產上品○信濃產中品以上二種螺名未詳○肥後葦北郡イカブチ山產上品○遠江產上品以上二種田螺化石ナリ○紀伊畑島產上品カミナノ類ニテ大ナリ

○樟化石　○河內交野郡國分寺村產上品

○杉化石　○讃岐產上品

蠻物漢名未詳者載于左

カナノヲル　和產ナシカナノヲルハ南蠻語ナリ紅毛ニテハブルートステイント云ブルートハ血ナリステインハ石ナリ其色赤シテ血ノゴトクナルヲ以テ名ク或曰此物能血ヲ留ム故ニ此名アリ吐血衂

血等是ヲ掌中ニ握テ治スルコト神ノコトシ

ロートアールド　和名石筆紅毛人赤色ヲロートヽ云アールドハ土ナリ是ヲ刮テ筆ノゴトクニシテ字ヲ書スルニ硯墨ヲ用ズシテ甚便ナリ○蠻産上品○駿河志田郡大賀山産蠻産ト異ナルコトナシ庚辰歳予駿河ニ至テ是ヲ得タリ本邦此物出ルノ始ナリ

ポットロート　和名黒石筆紅毛人持來ル和産ナシ

コヲルド　和名シヤムデイ此物往年暹羅人長崎ニ持來ル然ドモ本邦ノ人其用ヲ知ザルガ故ニ是ヲ買ズ因テ暹羅人是ヲ海中ニ投ズ今希ニ長崎海中ヨリ出ルコトアリ故ニシヤムデイト云研テ畫色ニ用テ赭黄色ヲナス秋景中山腰ノ平坡草間ノ細路深秋草木又ハ松幹ノ類此物ヲ用テ甚妙ナリ本邦ノ畫家銀朱藤黄三物ヲ合テ此色ヲナス然トモ碟子中ニテ銀朱ハ沉テ底ニアリ藤黄ハ浮テ上ニアリ墨ハ中ニアリ三物交リガタシ漢土ニテハ藤黄中代赭石ヲ加テ赭黄色ト名ク是亦代赭ハ沉ミ藤黄ハ浮ムコヲルドノ自然色ニシカズ○蠻産上品○伊豆田方郡湯カ島産上品庚辰歳予始テ是ヲ得壬午主品中ニ具ス

ペレシピタアト　紅毛人持渡ル水銀膽礬等ヲ以テ製スト云一切ノ惡瘡ヲ治ス能弩肉ヲ去肌ヲ生ズ

ヒツテリヨウルアルビイ　此物紅毛人持渡ル癰疽及諸惡瘡ニ傅テ口ヲ開キ腐肉ヲ切コト妙ナリ

物類品隲巻之二終

物類品隲巻之三

藍水田村先生鑒定

讃岐　鳩溪平賀國倫編輯
　　　田村善之
東都　中川鱗同校
信濃　青山茂恂

草部

甘草　和名抄アマキト訓ズ延喜式載常陸陸奥出羽三國獻之稻生先生曰今甲斐國地方山皆有之貝原先生曰近世甲斐國ヨリ多出ツ奥州ニモアリ直海氏曰古ヨリ富士甘草トテ富士山ヨリ出ヅト按ズルニ今官園ニ所有ノモノ本甲斐國ニ出ツ然ドモ山中多出ルコトヲ聞ズ又其他處産スルモノ未見之○甲斐産苗ノ長二三尺葉ハ紫藤葉ニ似テ稍小ニシテ微毛アリ根皮紫赤色肉黄色ニシテ味甘シ此物甲斐國山梨郡上於曾村伊兵衛同郡下石盛村與兵衛園中ニアリ其始所出未詳或云甲斐深山中ヨリ出ヅ或云武田信玄漢土ヨリ得テ植ルモノ今尚存スト何レカ是ナルコトヲ知ズ享保中阿部將翁軒

台命ヲ奉シテ甲斐國ニ至テ是ヲ得タリ今東都及駿府官園ニアルモノ是ナリ駿府ニテハ甚繁茂ス東都ニテハ繁茂セズ戸田先生非藥選曰一種稱南京樣者御園之種而人間幾希ト今官園ニ此種ナシ又甘草苗漢土ニ徴スルコトヲ聞ズ

黄耆　本草綿黄耆白水耆赤水耆木耆等ノ數種アリ按ズルニ白水赤水ノ二種ハ所出ノ地名ヲ以テ名ク綿黄耆ハ蘇頌曰其皮折之如綿謂之綿黄耆陳承曰出綿上者爲良故名綿黄耆非謂其柔靭如綿也松岡先生綿大戟ノ例ヲ以テ頌ガ説ヲ優レリトス今從之木耆ハ堅剛ニシテ木ノゴトクナルヲ以テ名ク本邦數種アリ

○綿黄耆　根柔ニシテ味甘モノ上品ナリ藥肆鐵椎ヲ以テ木黄耆ヲ打テ綿ノ如クナルモノアリ用ベカラズ○豐後産上品莖葉苦參ノゴトク特生ス五六月淡黄花ヲ開ク狀槐花ノゴトシ花謝シテ後短小角ヲ結ブ根直ニ土ニ入コト二三尺皮赤色ニシテ甘草ニ似タリ肉白柔靭ニシテ綿ノゴトク味甘シ丁丑主品中田村先生具之○下野日光山産上品莖葉大抵豐後産ニ同シ豐後産ニ比スレバ幹弱ク叢生シテ去地數寸根柔ニシテ味甘シ○信濃戸隱山地藏谷産至テ上品ナリ其形大抵日光産ニ同ジ花淡黄色又紫花ノモノアリ實狀翹搖子ニ似テ長寸許ニシテ扁ナリ根柔ニ味甘シテ餘味アリ大サ一虎口ノモノアリ同國善光寺青山仲菴是ヲ得タリ壬午客品中具之

木黄耆　○富士山産蔓延スルコト翹搖ノゴトク花淡黄色又紫花ノモノアリ根ハ横ニ延ブ雷斅

日凡使勿用木者草眞相似只是生時葉短并根横也ト云モノ是ナリ根堅實ニシテ味苦澁葉ハ味甘シ豐後産根甘シテ葉苦モノト相反ス〇讃岐阿野郡川東山中産富士山ノモノト同種ナリ〇日光又一種ヲ産ス特生スルコト豐後ノ産ニ似タリ根堅シテ味苦澁ナリ以上三種皆下品ニシテ不堪藥用

人參　和名抄カノニゲクサ又クマノイト訓ズ然ドモ何物ヲ認テ人參トスルコトヲ知ズ本邦ノ俗人參ト稱スルモノ甚多シ皆眞物ニアラズ但三枝五葉草ト云モノ人參ナリ是又横根直根ノ二種アリ

〇朝鮮種上品按ズルニ本草諸家上黨參ヲ以テ上トス高麗百濟新羅ノ者ヲ次トス東璧曰上黨今ハ路州也民以人參爲地方害不復采取今所用者皆是遼參其高麗百濟新羅三國今皆屬於朝鮮矣其參猶來中國互市亦可ト此說ヲ以テ考レバ漢土ニテモ後世ハ上黨參希ナル故專朝鮮參ヲ用ウルト見エタリ近世漢土ヨリ來ル所ノ人參及本邦諸處所産ノ人參等ヲ以テ是ヲ較ルニ其形色氣味功用朝鮮參ニ過ルハナシ貝原先生曰人參生根昔朝鮮ヨリ來リ江戸ニアリ今ハ無之ト然レバ昔モ朝鮮ヨリ種ヲ傳トイヘドモ種藝ノ法ヲ不知シテ種ヲ絶ト見エタリ享保中台命アリテ朝鮮ニ所徴ノ種官園及日光尾張等諸處盛ニ植葉ノ形狀和ノ三枝五葉草ト大抵相似タリ季春細白花ヲ開實ヲ結ブ初青後鮮紅色實ノ形扁ニシテ内ニ兩核アリ根ハ直根ニシテ味

甘シ朝鮮ヨリ製來物ニ比スレバ氣味薄トイヘドモ和參ノ味苦濇ナルモノト同日ノ談ニアラズ香川氏樂選ニ人參苦味ヲ以テ本性トシ及直海氏參葉ノ辨ニ參葉ハ芳野人參葉尤佳ナリトス皆癡論孩說一知半解固ヨリ擧テ論ズルニ足ズ凡人參藥肆ノ名色一ナラズ然トモ下品ニシテ氣味薄モノ或ハ奸商僞造スルノ類ハ用ルトイヘドモ功ナシ朝鮮參上品ノゴトキハ其價極テ貴ケレバ無力者望ヲ絕ツ加之若故アリテ朝鮮此物ヲ本邦ニ渡ザル時ハ有力ノ人トイヘドモ又束手待斃此種朝鮮ニ徵シテヨリ孤貧窮民トイヘドモ賴テ沉痾ヨリ起コトヲ得テ四海沐好生之德亦不貲ナリ只恨ラクハ今世上ニ植ルモノ專糞養ヲ加ガ故ニ雖其形美氣味薄說附錄中ニ詳ナリ

○和參直根ノモノアリ莖葉朝鮮種ニ相似タリトイヘドモ形狀自然ニ下品ナリ實南天燭ノゴトクニシテ不匾或ハ圓ク或ハ三稜ナルモノアリ根直根ナレドモ味苦シテ不堪用○大和吉野產下品

○一種根橫生狀如竹節モノ和俗竹節人參ト云莖葉ハ和ノ直根參ト一樣ニシテ根曲節アリテ味甚苦シ鬚ヲ取テ製シタルヲ小人參ト云稻生先生曰其鬚嚼之甘苦氣味微與人參相近又名三枝五葉草其苗葉花實雖與圖經三椏五葉之說相合然根形迥然不同凡物有似之而非者此物決非眞人參也人多有以甘草湯浸煮代人參用者尤爲不可也ト按ズルニ此物亦人參ノ種類タリトイヘドモ至テ下品ニシテ不堪用○下野日光山產○上野萬場山產○伊豆天城山產○信濃

木曾産○讃岐大川山産以上皆同種ナリ

京師熊谷氏廣參品曰世醫言用人參者宜去蘆頭本草有參蘆吐人之戒愚竊疑參蘆味不苦且服之不吐何故有此說一日翻張氏逢原方悟曰參蘆吐人者非直根之蘆頭而別是一種竹節參也知本草者將何如國倫按ズルニ熊谷氏張路玉本經逢原ニ所載ノ竹節參ヲ以テ和俗所稱ノ竹節參トシ吐藥ニ用ルモノハ直根ノ參蘆ニアラズトスルハ大ナル誤ナリ張氏逢原曰參蘆能耗氣專入吐劑涌虛人膈上清飮宜之鹽哮用參蘆涌吐最妙參蘆涌吐參鬚下泄與當歸紫菀之頭止血身和血尾破血之意不殊參鬚價廉貧乏之人往往用之其治胃虛嘔逆欬嗽失血等證亦能獲效以其性專下行也若治久痢滑精崩中下血之證每致增劇以其味苦降泄也其蘆世罕知用惟江右人稱爲竹節參近日吾吳亦有用之者其治瀉利膿血崩帶精滑等證俱無妨礙如氣虛火炎喘嘔嗽血誤用轉劇昔人用以涌吐者取其性升而於補中寓瀉也此義前人未發因屢驗而筆之ト張氏所說江右人竹節參ト稱スルモノハ卽直根參ノ蘆頭ナリ人參ハ年年莖ヲ生ズ今年ノ莖ハ去年ノ莖ノ側ニ生ズ莖枯レバ一節ヲナス十年ノモノハ十節アリ其形竹蘆根ノゴトシ是ヲ蘆頭ト云江右人ハ竹節參ト稱ス和俗所稱ノ竹節參ニハアラズ本文中當歸紫菀頭身尾功ヲ異ニスルノ說等甚明白ナリ又熊谷氏疑參蘆味不苦且服之不吐ト是亦誤ナリ張子和汗吐下說曰吐藥之苦寒者瓜蔕梔子茶末豆豉黃連苦參大黃黃

苓辛苦而寒者常山藜蘆鬱金甘而寒者桐油甘而溫者牛肉甘苦而寒者地黃人參蘆ト是味苦カラザレバ不吐ト云ベカラザルノ證トスベシ吳綬曰人弱者以人參蘆代瓜蔕ト是參蘆味不苦其功モ亦緩ナルコトヲ知ベシ

沙參　和名ツリガ子ニンジン又トヽギニンジン山城山科方言ビシヤ〳〵但馬方言キキヤウモドキ筑紫方言シテンバ南部方言ヤマダイコン所在多ク產ス種類多シ葉有毛モノ無毛モノ兩葉相對スルモノ四五葉相對スルモノアリ又長葉ノモノアリ細葉ノモノアリ花碧色又白花ノモノ淡紫花ノ者アリ○漢產上品享保中種子ヲ傳フ形狀大抵和產ト相似タリ和產ハ花ノ大サ二三分ニ過ズシテ根短シ此種花ノ大サ五六分許深碧色愛スベシ根長コト二尺餘ニ至ル二月種子ヲ蒔テ其年花ヲ開ク二年ニシテ掘取ルベシ

△羊乳　沙參條下ニ出タリ和名ツルニンジン又キキヤウカラクサ江戸方言ツリガ子カツラ木曾山中方言チソブト云所在ニアリ

薺苨　一名杏葉沙參其形沙參ノゴトク葉ニ鋸齒多ク葉背光澤ナリ花桔梗ニ似テ小ナリ大サ漢種沙參ノ花ノゴトクニシテ少シ短シ

桔梗　和名抄ニアリノヒフキト訓ス按ズルニ俗ニキヽヤウト云ハ桔梗ノ轉語ナリ所在ニ多シ花紺碧色又白花紫花或ハ二色相雜モノ各單瓣重瓣ノモノアリ近世製シ出ス者六月土用中ニ掘根

川水ニ浸スコト數日外皮爛ルヲ待テ洗乾スモノ色至テ白シ然トモ虚鬆ニシテ氣味薄シ八九月
掘取ベシ

黄精　陳藏器曰黄精葉偏生不對者名偏精功用不如正精正精葉對生ト本邦ニ所産ノモノハ
皆偏精ナリ

○正精　和産ナシ○漢種享保中種ヲ傳テ今官園ニアリ根葉和産ト略相似タリ葉薄兩兩相對シテ
出ヅ是正精ニシテ偏精ニ比スレバ功用勝レリトス惜ラクハ世上至テ希ナリ

○偏精　和名ナルコユリ又アマトコロ又サヽユリト云所在ニ多シ○南部産上品莖葉甚大ナリ

萎甤　和名カラスユリ所在ニ多シ黄精ト一類二種ナリ黄精ハ根節アリテ生姜ノゴトシ萎甤ハ節
ナクシテ地黄ニ似タリ

知母　葉韮ノゴトク長サ二三尺中間莖ヲヌキ穗ヲナシテ淡碧花ヲ開ク實ノ長サ三四分許内ニ三黒
子アリ三稜ニシテ扁ナリ實ヲ植テ甚生ジ易シ二三年ニシテ掘取ベシ○漢種享保中種子ヲ傳テ
今官園及世上多アリ

肉蓯蓉　三四月ニ生ズ狀稍天麻ニ類ス莖太ク鱗甲アリ長シテ後花ヲ開其形亦天麻ノ花ニ似タリ○
日光産上品方言ヲカサタケ又キムラタケト云徑寸餘長尺餘ノモノアリ○讚岐香川郡安原村産
上品以上二種壬午主品中予具之

列當　一名草蓯蓉和名ハマウツボ多沙地ニ生ズ肉蓯蓉ニ比スレバ稍小ニシテ紫花ヲ開ク形夏枯草花ニ似タリ

赤箭天麻　和名ヌスビトノアシ又タウカシラト云西國ニハ希ナリ關東ニハ多シ莖ノ長サ三四尺黄赤色ニシテ葉ナシ小薄皮アリテ初メ生ズル時莖ヲ包ミ長シテ後莖ニ付テヒレノゴトシ蘇頌所謂貼莖微有尖小葉ト云モノ是ナリ莖ノ狀矢ノゴトクニシテ赤シ故ニ莖ヲ赤箭ト云莖上數花ヲ開ク大サ二三分許莖ト同色ナリ根魁アリテ横ニ出ヅ形小兒ノ臂ノゴトク或ハ小子傍ニ生スルコト芋子ノゴトキモノアリ其數定ラズ又小子ナキモノアリ此物化生ニシテ秋ニ至レバ盡ク朽ルナリ故ニ他處ニ植テ再ビ生ゼズ又實ヲ植テ生ゼズ本草ニ其實却透虚入莖中潜生土内ノ說等信ズベカラズ○東都產上品○一種黄白色ノモノアリ形狀ハ異ナルコトナシ

白朮　和名ヲケラ上古蒼白朮ヲ分タズ後世分之弘景曰白朮葉大有毛而作椏根甜而少膏赤朮葉細無毛根小苦而多膏ト此說二朮ノ形狀ヲ說コト甚明ナリ然ルニ東壁三五叉ノ物ヲ蒼朮トスルハ大ナル誤ナリ白朮處處山中ニ產スルモノ葉五叉ノモノアリ三叉ノモノアリ多ハ花白色又紅花ノモノアリ皆下品ナリ○漢產上品享保中種子ヲ傳フ葉五椏ニシテ毛アリ形甚肥大花紅色ニシテ大薊花ノゴトク根佛掌薯ニ似タリ此物實ヲ植テ能生ズ又根ヲ切テ植レバ盡ク芽ヲ生ズ一兩年ニシテ掘取ベシ數年ヲ經タルモノ重數斤ニ至ル

△蒼朮 一名赤朮是亦處處ニ産ス葉ニ椏ナク花白色又紅花ノモノアリ皆下品ナリ○漢種上品亭保中種子ヲ傳フ大抵和産ノモノニ似タリ嫩葉ニハ綿ノゴトキモノアリ花ハ白色ニシテ根味香烈ナリ此物實ヲ植テ生ジガタシ根ヲ分ツコト白朮ノゴトクニシテ長ジ易シ

巴戟天 一名不凋草和名ジユズ子ノキ先輩カキノハ草トスルハ誤ナリ恭曰其苗俗名三蔓草葉似茗經冬不枯根如連珠宿根青色嫩根白紫ト此形狀カキノハクサニ非ズカキノハグサハ冬ニ至レバ葉盡ク凋落不凋草ト云ベカラズ根モ又曲節ノミニシテ連珠ニアラズ眞ノ巴戟天ハ樹下陰地ニ生ズ草ニアラズ小木ナリ形大葉ノ虎刺ノゴトク枝葉兩兩相對シテ出ヅ葉出ル所ノ左右ニ小刺アリ葉ノ形頗茶葉ニ類ス經冬不凋至秋赤實ヲ結ブ大綠豆ノゴトシ根黃赤色ニシテ略牡丹根ニ似テ連珠ヲナス心アルコト麥門冬ノゴトシ根乾テ心落レバ小孔アリ大明宗奭ガ所說ト符合ス是眞物ナリ或ハ綱目草部ニ出ルヲ以テ疑者アリ然ドモ綱目木本ヲ以テ草部ニ入モノ多シ牡丹莾草常山ノ類ヲ以テ知ベシ○肥後産戊寅歳田村先生始テ得之己卯主品中ニ具ス○讃岐鵜足郡中通村八幡社地産庚辰歳余得之壬午主品中ニ具ス

○蘇頌所說一種麥門冬葉巴戟天アリ予未見之松岡先生用藥須知後編直海氏廣大和本草モチズリヲ以テ麥門冬葉巴戟トシ藥肆所稱ノ棒樣ノ巴戟卽是ナラント云モノ大ナル誤ナリ東國モチズリノ一種大ナルモノアリトイヘドモ其ノ根巴戟ニ類セズ且藥肆棒樣ト稱スルモノハ漢渡

ノ内ヲ撰デ連珠アルモノヲ珠數樣トシ連珠ナキモノヲ棒樣トス其本ハ一物ナリ決シテモヂズリ根ニアラズ又己卯歲社友福山舜調箱根ニ遊テ所得ノ草モヂズリニ似テ花不戾根二三ノ連珠ヲナス初謂是麥門冬葉巴戟天ナラント然是亦眞ニアラズ又讃岐山中一種ノ草アリ葉大葉麥門冬ノゴトク又頗ルキスゲ葉ニ類ス根連珠アリテ黃赤色此物稍近シ然ドモ未決

百脈根　和名コガチハナ又ミヤコハナ又キレンゲ又コガチメヌキ江戶方言エボシ草ト云處處原野ニ多シ葉苜蓿ニ似テ花黃ナリ○鎌倉鶴岡產黃褐色相雜モノアリ

淫羊藿　和名イカリサウ江戶方言クモキリ紫花ノモノ所在多シ又白花ノモノアリチドリサウト云又淡紫色ノモノ青紫色ノモノアリ葉又大小ノ別アリ○一種黃花ノモノアリ甚稀ナリ○叡山產葉厚强ニシテ光澤アリ冬ニ至テ枯ズ蘓頌曰湖湘出者葉如小豆枝莖緊細經冬不凋ト云モノ是ナリ

仙茅　和名キンバイサ、先輩キスゲトスルハ大ナル誤ナリ頌曰仙茅葉青如茅而軟且略潤面有縱文又似初生棕櫚秧高尺許至冬盡枯春初乃生三月有花如梔子花黃色不結實其根獨莖而直大如小指下有短細根相附外皮稍粗褐色內肉黃白色東璧曰蘓頌所說詳盡得之但四五月中抽莖四五寸開小花深黃色六出不似梔子以上兩說キスゲニアラズ此モノ葉初生ノ棕櫚葉ニ似テ六瓣ノ深黃花ヲ開ク大サ五六分計甚可愛根ハ菖蒲根ノゴトクニシテ又別ニ小根ヲ

附ク其形略人參ニ似タリ皆頌カ說ノゴトシ但頌不結實ト云モノハ非ナリ花謝後莖更ニ延ルコト寸餘莖下豐ニシテ形棗核ノゴトク內ニ實アリ熟スレバ迸裂ス其內白穰アリテ實ヲ包ム實ハ椒目ノゴトクニシテ稍小ナリ○長崎八郎山產戊寅歲田村先生始テ是ヲ得タリ己卯主品中ニ具ス

玄參 和名ゴマクサ苗ノ高サ六七尺莖方ニシテ葉兩兩相對シテ胡麻葉ニ似タリ根乾ハ黑色ナリ○東都產上品淡黃花ノモノアリ褐色花ノモノアリ

地楡 和名ワレモカウ處處ニ多シ花紫色ナリ○一種白花ノモノアリ葉細小花長コト寸餘ニシテ細シ以上二種皆下品ニシテ不堪藥用○漢種上品享保中種子ヲ傳テ今官園ニ多シ葉大抵和產ト同シテ又別ニ小袴葉アリ和產ハ袴葉ナシ根ノ狀沙參防風ノゴトク直根ニシテ軟ナリ年ヲ經タルモノ旁根生ズトイヘドモ皆下ニ向フ和產根橫ニ出テ紫黑色ニシテ堅剛ナルニ異ナリ譬バ朝鮮參ト和ノ竹節參ノゴトシ功用優劣辨ヲ待ズシテ明ナリ

紫草 和名ムラサキ江戸方言ネムラサキ根ヲ取テ紫ヲ染ム○南部產上品○讃岐大川山產上品ナリ

三七 一名山漆東璧曰此藥近時始出南人軍中用爲金瘡要藥云有奇功ト按ズルニ此モノ本邦ニモ昔ハナカリシニヤ駿府政事錄曰慶長十六年辛亥八月十二日金森出雲守可重初獻山漆草其葉三七而考見本草綱目圖經相同云云今ハ世ニ多アリ

黃連 和產數種アリ○加賀產菊葉ノモノ上品○日光產三葉ノモノ中品○日光產至テ細葉ノモノ下品

○日光産芹葉大葉ノモノ中品○伊豆産芎葉小葉ノモノ下品○讃岐産川芎葉ノモノ中品○又一種五加葉ノモノアリ中品ナリ所出未詳

黄芩　俗和黄芩ト稱スルモノ眞物ニアラズ○漢種上品享保中種子ヲ傳フ今世上ニ多シ

秦艽　葉ノ形頗ル烏頭葉ニ類シ花亦烏頭花ニ似タリ根黄白色ニシテ羅文アリ○朝鮮産上品享保中種ヲ傳フ花黄白色又紫花ノモノアリ○日光産上品黄白花ノモノアリ紫花ノモノアリ○信濃産上品花紫色ナリ

防風　和産所在ニ多シ二種アリ葉芹ニ似テ光澤アルモノ和名ヤマゼリ又一種胡蘿蔔葉ニ似タルモノヤマニンジント云○漢種上品享保中種子ヲ傳テ今官園及世上多アリ葉白頭翁ニ似テ花叉不密毛ナクシテ文理アリ厚強ニシテ綠白色夏ノ末小白花ヲ開ク形芎藭葉本花ニ類ス根至テ纖長三四尺ニ至ルモノアリ

延胡索　和産所在ニアルモノ花葉頗ル相似タリトイヘドモ根色白甚小ニシテ不堪用○漢種上品享保中種ヲ傳フ大葉小葉ノ二種アリ俗牡丹葉延胡索ト云葉形三叉ニシテ微ク牡丹葉ニ似タリ二月紫花ヲ開地錦苗花ニ似タリ根ノ形半夏ニ類シテ黄色ナリ

貝母　初生錦棗兒ノゴトク長シテ後山丹ニ似タリ杪ニ至テ細絲絲ヲ出シテ左右ニ廻旋ス花百合ニ類シテ黄白色ニ紫點アリ○漢種上品享保中種子ヲ傳フ

山慈姑　和名アマナ又ムギクワヰ又メウロント云東璧曰山慈姑處處有之冬月生葉如水仙花之葉而狹二月中抽一莖如箭幹高尺許莖端開花白色亦有紅色黃色者上有黑點其花乃衆花簇成一朶如絲紐成可愛三月結實有三稜四月初苗枯ト此モノ本邦亦數種アリ白花ノモノ所在ニアリ○駿河產赤花ノモノ方俗田ユリト云壬午客品中同國沼津驛淸玄一具之○大和吉野下市產花深黃色ナリ壬午客品中同所內田七右衞門具之

細辛　種類多シ○漢產上品葉圓ニシテ厚シ○佐渡產上品葉少シ長シ○南部產佐渡產ト大抵相似タリ○伊豆天城山產上品○讚岐大川山產上品葉薄ク至冬卽枯

釵子股　一名金釵股和名バウラン東璧曰石斛名金釵花此草狀似之故名ト按ズルニ是卽バウ蘭ナリ○琉球產近世薩摩ヨリ來ル樹石上ニ寄生ス石斛ノ類ナリ中山傳信錄ニ直ニ棒蘭ニ作ル曰狀如珊瑚樹綠色無葉花從椏間出似蘭較小ト此物寒ニ堪ガタシ又土ニ植テ育ガタシ

白芷　和名ヨロヒグザ又ウマゼリト云和產所在ニアリ○漢種上品享保中種子ヲ傳テ今官園ニ多アリ形狀和產ニ同シテ香氣ツヨシ八月實ヲ蒔翌年秋掘取ベシ一年ニテハ根小ニシテ用ルニ堪ズ春植テ二年ニ至レバ花ヲ開テ根堅季秋ニ至テ悉ク朽ナリ故ニ八月ニ植テ翌年掘取ヲ佳トス

補骨脂　莖高三四尺葉形頗胡麻ニ似タリ葉間莖ヲ抽テ實ヲ結ブ和產ナシ○漢種上品享保中種子ヲ傳フ

鬱金　○漢種享保中種ヲ傳テ今官園多アリ莪蒁ト甚相似タリ形芭蕉ニ類シテ小ク葉亦芭蕉ニ比スレバ短小鬱金ハ葉背毛ナシ莪蒁ハ微毛アリ根鬱金ハ黃赤色莪蒁ハ淡黃色ナリ二種紛易シ鬱金能花サク莪蒁ハ花アルコト希ナリ秋ノ末掘取屋下ノ暖處ニ地ヲ掘コト二三尺土中ニ納テ水濕ノ入サルヤウニ貯置三月末掘出シテ植ベシ

蓬莪蒁　○漢種享保中種子ヲ傳フ

茉莉　和名モウリンクハ是茉莉ノ轉語ナリ貝原先生茶蘭ナルベシト云ハ誤ナリ東璧曰其性畏寒不宜北土弱莖繁枝綠葉團尖初夏開小白花重瓣無蕋秋盡乃止不結實有千葉者紅色者蔓生者其花皆夜開芬香可愛○琉球產白花其他未見

薄荷　和名メクサ西國方言メハリクサ所在水濕ノ地ニ生ズ

△石薄荷　和名ヒメメクサ蘓頌曰又有石薄荷生江南山石間葉微小至冬紫色ト云モノ是ナリ戊寅客品中官醫藤本氏具之

艾　和名ヨモギ處處皆アリ○漢種上品享保中種ヲ傳テ今官園ニ多シ是卽蘄艾ナリ○淡路產上品

角蒿　先輩ハマナデシコトスルモノハ非ナリ蘓恭曰花如瞿麥紅赤可愛子似王不留行黑色作角ト云ハハマナデシコヲ說ニ似タリ然ドモ眞角蒿ニアラズ宗奭曰莖葉如靑蒿開淡紅紫花大約徑三四分花罷結角長二寸許微彎ト云モノ眞ノ角蒿ナリ保昇雷斅ガ所說モハマナデシコニハ、

アラズ○武藏川越產宗甄ガ說ノゴトシ

泊夫藍 ラテイン語サフラン紅毛語フロウリスヱンタアリス又コロウクスヲリヱンタアリト云此物ハ生草絕テナシ乾花蠻國ヨリ來ル東璧曰番紅花出西番回回地面及天方國卽彼地紅藍花也按ズルニ此說大ナル誤ナリ泊夫藍番國產ナルガ故李氏モ其何物タルコトヲ知ズ花色紅ニシテ頗ル紅花ニ似タルヲ以テ妄ニ番紅花ヲ以テ命ズ近世紅毛人ドヾニヤウスト云者本草ヲ著ス泊夫藍ヲ圖スルコト甚詳ナリ根葉山慈姑ニ似テ五瓣ノ赤花ヲ開ク蠻國ヨリ來ル所ノ泊夫藍ハ卽チ其花ノ蕋ナリ紅藍ノ類ニハアラズ有圖可考

胡盧巴 葉苜蓿ニ似テ大花白シテ微黃色ヲ帶實莢ヲ結ブ禹錫蘓頌ガ董蠻國蘿蔔子トスルモノハ誤ナリ此物和產ナシ○蠻種享保中種子ヲ傳テ官園ニ植

麻黃 和名イストクサ又カハラトクサト云所在水濕ノ地ニ產ス形木賊ニ似テ稍小ナリ又蕢ニ似タリ今藥肆ニ有トコロノ漢產麻黃中堅實ナルモノハ雲花子ナリ和產ヲ用ウベシ○駿河產形甚長大ニシテ木賊ノゴトシ壬午客品中伊豆北條四日市鎭惣七具之

附錄ノ胡面莽ナラント未詳

地黃 ○大和產上品淡黃花ヲ開ク○一種紫花ノモノ和名千里駒ト云根堅シテ藥用ニ堪ズ或云是レハ

麥門冬 數種アリ小葉ノモノ和名ジヤノヒゲト云大葉ノモノヤブラント云葉ノ形建蘭ニ似タリ○

一種和名オキナクサト云アリ大葉ノモノニ比スレバ稍小ナリ初生色白シテ後漸ク青ニ變ズ〇琉球産和名ノシラン葉長シテ光滑ナリ又和俗雞尾蘭ト稱スルモノアリノシランノ類ニテ葉強シ

以上皆麥門冬ノ種類ナリ

鴨跖草　和名ツキクサ又ツユクサ又アヲハナト云讃岐方言カマツカ近江彦根方言コンヤタラウト云所在ニ多シ花碧色ナリ又白花ノモノアリ淡碧色ノモノアリ白花青暈ノモノアリ〇琉球種葉短シテ縦理多ク花至テ小シ異品ナリ〇近江栗本郡山田村産葉長六七寸花瓣大サ寸ニ近シ土人多植テ利トス六月十三日ヨリ七月十三日ニ至テ花ヲ採ノ候トス舉家野ニ出テ花ヲ取リ汁ヲ搾リ紙ヲ染是ヲ青花紙ト稱シテ四方ニ鬻其製傳アリ

欵冬　和名フキ和名抄朗詠集ヤマブキトスルハ誤ナリ山吹ハ棣棠ナリ欵冬處處ニ多シ野生ノモノ葉大小ノ二種アリ〇琉球産紅花ノモノアリ葉平常ノモノト異ナルコトナシ花一所ニ簇生ズルコト三四五或ハ七八ニ至ル花瓣紅色ニシテ愛スベシ蘇頌曰又有紅花者葉如荷而斗直大者容一升小者容數合俗呼為蜂斗葉又名水斗葉ト云モノ是ナリ丁丑客品中東都人後藤梨春具之〇一種和俗八頭又朝鮮フキト云アリ葉大ニシテ味佳ナリ花一所ニ簇リ生ズルコト七八ヨリ數十ニ至ル〇一種和俗紫フキト稱スルモノアリ葉ノ面淡紫色背ト莖トハ深紫色ナリ花ハ白シ

決明　二種アリ

○馬蹄決明　和名イタチササゲ、東壁曰莖高三四尺葉大於苜蓿而本小末奓晝開夜合兩兩相帖秋開黄花五出結角如初生細豇豆長五六寸角中子數十粒參差相連狀如馬蹄青綠色ト云モノ是ナリ○漢種享保中種子ヲ傳テ官園ニ植

○茳芒決明　和名センダイハギ東壁曰救荒本草所謂山扁豆是也苗莖似馬蹄決明但葉之本小末尖正似槐葉夜亦不合秋開深黄花五出結角大如小指長二寸許角中子成數列狀如黄葵子而扁其色褐ト云モノ是ナリ

車前　和名オホバコ數種アリ小葉ノモノ處處ニ皆アリ大葉ノモノ俗朝鮮オホバコト云然ドモ是朝鮮種ニハアラズ本邦所在ニアリ○東都產一種葉大ニシテ長ク縱理アリテ澤瀉葉ニ似タルモノアリ穗モ甚長シ

馬鞭草　和名クマツヅラ鼠尾草ト混ジテ一トスルハ誤ナリ鼠尾草ノ下ニ詳ナリ

鼠尾草　和名タムラサウ所在ニアリ秋ニ至テ紫花ヲ開ク又白花ノモノアリ先輩ミゾハギニ充ルハ大ナル誤ナリ救荒本草曰鼠菊本草名鼠尾苗高一二尺葉似菊花葉微小而肥厚又似野艾蒿葉而脆色淡綠莖端作四五穗穗似車前子穗而極疎細開五瓣淡粉紫色花又有赤白二色花者黔中者苗如蒿爾雅謂葝鼠尾可以染皂ト其餘弘景藏器等亦皂ヲ染ルコトヲ說タムラサウ能皂ヲ染形狀モ亦能當レリ松岡先生苦蔴薹ヲタムラサウトスルモ亦非ナリ苦蔴薹ハ東都方言クネ

ソバト云是ナリ又用薬須知鼠尾草ノ下ニ疑ハ馬鞭草ナラント然トモ後編有名未識部ニ鼠尾草ヲ出ストキハ自其非ヲ知ルト見エタリ直海氏雷同シテ鼠尾草和名クマツヅラ鼠尾草ハ即馬鞭草ノ一名トスルハ眞ノ鼠尾草ヲ知ザル故ノ誤ナリ本草二物各條ニ出ス氣味功用モ亦異ナリ決シテ混ズベカラズ

藍　和名アヰ數種アリ

○蓼藍　和名タデアヰ形状蓼ニ似タリ故ニ名ヅク處處植之就中阿波國多植テ四方ニ貢ス○漢種所在植ルモノニ比スレバ状稍大ナリ享保中種ヲ傳テ今官園ニ有之漢土ヨリ浙江大青ト號シテ渡セシヨシ然トモ大青ニハアラズ○一種水田ニ植ルモノアリ俗水藍ト云京師地方ニアリ

○菘藍　東璧曰菘藍葉如白菘救荒本草曰大藍苗高尺餘葉類白菜葉微厚而狹窄尖舖淡粉青色莖叉梢間開黄花小莢其子黑色本草謂菘藍可以爲靛染青以其葉似菘菜故名菘藍又名馬藍ト此物和産ナシ○漢種享保中種ヲ傳テ今官園ニ所植江南大青ト云モノ是ナリ是亦大青ニアラズ

海根　和名ミヅヒキ所在ニ多シ又葉中黑點八ノ字ニ似タルモノ和俗八幡ミヅヒキト云○一種矮生ノモノアリ莖地ニ布テ生ズ穗ノ長一二寸甚愛スベシ和俗チヤボミヅヒキト云

漢種　二種アリ

○刺蒺莉　和名ハマビシ海邊沙地ニ生ズ葉翹搖ノゴトク蔓延ス黄花ヲ開キ實ヲ結ブ刺多シ

○白蒺藜　一名沙苑蒺藜和名クサネムノキ葉合歡木葉ニ似テ夜ネムル至秋結莢形綠豆莢ノゴトク微刺アリ熟スレバ莢ノ節節ヨリ折易シ

地楊梅　和名ヒメスゲ所在ニ多シ藏器曰苗如沙草四五月有子似楊梅也ト此物穗ヲ出サヾル時沙草ト紛ヤスシ莖ヲ生ズルコト二三寸子形頗楊梅ニ似テ色青シ先輩地楊梅ヲスヽメノヤリトスルハ誤ナリスヾメヤリハ救荒野譜ノ看麥娘ナリ

紫花地丁　一名堇堇菜和名スミレ又スモトリクサト云二種アリ

○特生ノモノアリ東壁曰處處有之其葉似柳而微細夏開紫花結角平地生者起莖ト云モノ今田野多アリ花色百餘種ニ及ブ

○蔓生ノモノアリ東壁曰溝壑生者起蔓ト和俗ヤブスミレト稱スルモノ是ナリ葉短シテ細蔓ヲ生ズ花小ナリ是亦花色數十種アリ○深黄花ノモノアリ奇品ナリ己卯主品中予具之

見腫消　和名スイゼンサウ蘇頌曰生筠州春生苗葉莖紫高一二尺葉似桑而光面青紫赤色ト云モノ是ナリ形頗三七ニ似タリ葉背深紫色冬ニ至テ小白花ヲ開ク然トモ寒ヲ畏ル故花開得ズシテ凋ム實ヲ結バズ春夏ノ間莖ヲ折テ插バ能生ズ○蠻種己卯歲始テ東都ニ種ヲ傳フ

大黄　和名抄オホシト訓ズ羊蹄和名シト云此物羊蹄ニ似テ大ナリ故ニオホシト云和産葉狹小ニ

シテ下品ナリ〇漢種上品葉ノ大サ徑二尺餘ニ至ル根亦大ニシテ錦文アリ此物實ヲ植テ不生根ヲ數十ニ切テ植レバ悉芽ヲ生ズ

䕡茹　東璧曰春初生苗高二三尺根長大如蘿蔔蔓菁狀或有岐出者皮黃赤肉白色破之有黃漿汁莖葉如大戟而葉長微濶不甚尖折之有白汁抱莖有短葉相對團而出尖葉中出莖莖中分二三小枝二三月開細紫花結實如豆大一顆三粒相合生青熟黑中有白仁如續隨子之狀今人往往皆呼其根爲狼毒誤矣狼毒葉似商陸大黃輩無漿汁ト此物大戟甘遂ニ似テ莖葉肥大根形商陸根ノゴトクニシテ黃赤色斷之汁出藤黃色ノゴトシ其餘皆東璧ガ說ノゴトシ和產ナシ〇漢種享保中種ヲ傳テ今官園ニアリ此物漢土ヨリ渡ス時狼毒ト稱ス漢人誤來ルコト久シ

△草䕡茹　一名白䕡茹東都方言ヤブソバ陶弘景曰次出近道名草䕡茹色白蘇頌曰又有一種草䕡茹色白ト此物所在濕地ニ生ズ狀大戟甘遂ニ似テ大ナリ春末黃花ヲ開ク根䕡茹ニ似テ小ニシテ色白シ

大戟　和名ノウルシ伏見方言キツネノチ、江戸方言タカトウダイ頌曰春生紅芽漸長叢高一尺以來葉似初生楊柳小團三月四月開黃紫花團圓似杏花又似蕪荑根似細苦參ト云モノ是ナリ處處山中ニ多シ

澤漆　和名トウダイクサ又スヾフリハナ備前方言ミコノスヾ處處田野ニ多シ陶氏大戟苗トシ目

華子大戟花トスルハ誤ナリ東壁辨之明ナリ

甘遂　東都方言ナツトウダイ蘇恭曰甘遂苗似澤漆其根皮赤肉白作連珠ト葉澤漆ニ比スレバ稍硬シ所在多アリ

續隨子　和俗ポルトガルト云ハ非ナリポルトガルハ木ナリ絶テ別物ナリ處處多有然ドモ皆種ヲ傳テ植ルモノナリ(一)讚岐瀨島ジチンハエ生ノモノアリ蘭茹以下六種皆同類別種ナリ

莨菪　和名ホメキクサ東都方言ナヽツキヽヤウ肥後方言ハシリトコロト云莨菪ヲタバコトスルハ非ナリタバコハ烟草ナリ保昇曰莨菪所在皆有之葉似菘藍莖葉皆有細毛花白色子殼作罌狀結實扁細若粟米大青黃色ト今所在ニアリ葉商陸ニ似テ小ナリ根草薢ニ似タリ誤テ食之狂走シテ不止故ニハシリトコロト云此物功用相近花葉子殼ノ狀モ能合ヘリ獨莖葉皆有細毛ト云モノ不合

常山　和名コクサギ草ニアラズ小木ナリ所在ニアリ葉茶ニ似テ光滑ニシテ理文アリ甚臭シ根ヲ常山ト云葉ヲ蜀漆ト云

△臭梧桐　和名クサギ常山條下頌曰海州出者葉似楸葉八月有花紅白色子碧色似山棟子而小ト云モノ是ナリ六月土用中葉ヲ取テ陰乾シ細末シテ骨鯁ヲ治スルコト妙ナリ又樹中蠹蟲小兒疳疾ヲ治シ蟲ヲ殺ス

△土常山　常山集解ニ出タリ和名キアマチヤ又小ガクサウト云頌曰今天台山出一種草名土常山苗葉極甘人以爲飮甘味如蜜又名蜜香草ト云モノ是ナリ又別ニツルアマチヤカンサウツルアリ和名相似タルヲ以テ混ズベカラズ

藜蘆　和名シユロソウ又日光蘭ト云○日光產上品花紫黑色又白花ノモノアリ

木藜蘆　和名ウヂクサ東璧曰小樹也葉如櫻桃葉狹而長多皺文四月開細黃花五月結小長子如小豆大トウヂクサノ形狀ハ大和本草ニ詳ナリ

附子　其母ハ川烏頭ナリ天雄側子漏籃子皆是ヨリ出ヅ莖高三四尺葉草烏頭ニ似テ深綠色ニシテ岐叉少シ花大抵草烏頭ノゴトク淡紫色ナリ松岡先生附子ヲトリカブトヽシ培養製法ヲ不知故不堪用ト云ハ大ナル誤ナリ楊天惠附子記及東璧所說甚明ナリ考フベシ此物和產ナシ○漢種希ニアリ○蝦夷產享保中阿部將翁奉シテ台命至蝦夷是ヲ得タリト云己卯主品中予具之

烏頭　卽草烏頭ナリ和名トリカブト又カブトキクト云所在ニ多シ花深碧色又白花ノモノ淡紫花ノモノアリ○一種蔓生ノモノアリ和名ハナツルト云○箱根產葉小ニシテ花叉多シ

白附子　和名ヒメウヅ又トンボクサト云所在多シ

由跋　和名ムサシアブミ所在ニアリ

半夏　和名カラスヒシャク處處ニ多アリ○一種根葉肥大ナルモノアリ形由跋ニ似テ由跋ニアラズ是半夏ノ一種ナリ蘇頌所謂生江南者似芍藥葉根下相重ト云モノ是ナリ蘇恭半夏ニアラズト云モノハ其苗由跋ニ似タルヲ以ナリ頌カ説ニ隨ベシ○一種細葉ノモノアリ葉長コト六七寸廣サ三四分許異品ナリ以上二種己卯主品中予具之

芫花　和名ジゲンジ又サツマフヂ藝種家ニ甚多シ

醉魚草　和名フヂウツギ先輩アセミトスルハ誤ナリ東璧曰醉魚草南方處處有之多在塹岸邊作小株生高者三四尺根狀如枸杞莖似黄荊有微稜外有薄黄皮枝易繁衍葉似水楊對節而生經冬不凋七八月開花成穗紅紫色儼如芫花一樣結細子漁人采花及葉以毒魚盡圉圉而死呼爲醉魚兒草池沼邊不可種之此花色狀氣味並如芫花毒魚亦同但花開不同時爲異爾ト此形狀フヂウツギナリアセミモ魚ヲ毒スベキモノユエ先輩功ヲ以テ是ヲ充ト見エタリ然ドモアセミハ春花ヲ開テ其色白シ上ニ説トコロノ形狀ト不合

莽草　和名シキミ處處深山中多産ス

茵芋　和名ミヤマシキミ所在ニアリ弘景曰莖葉狀似莽草而細軟頌曰春生苗高三四尺莖赤葉似石榴而短厚又似石南葉四月開細白花五月結實ト云モノ是ナリ

五味子　二種アリ

○北五味子　○朝鮮種享保中種ヲ傳テ今官園ニ植葉杏葉ニ似テ蔓延ス實南五味子ト大ニ相似タリ○駿河産朝鮮種ト異ナルコトナシ享保中

台命アリテ藥ヲ採シムル時始テ此物アルコトヲ知至今毎歳是ヲ　官ニ獻ズ

○南五味子　和名サネカツラ處處ニ多シ

使君子　○漢種上品享保中種ヲ傳テ駿府官園ニ植今甚繁茂ス毎歳實ヲ東都ニ貢ズ然ドモ　官禁嚴ニシテ外人見ルコトヲ得ズ己卯歳長崎山本利源治漢種一根ヲ田村先生ニ贈ル其後亦漢産ノ實ヲ植テ生ズルコトヲ得タリ世上希ニアリ其苗蔓延ス葉大豆葉ニ似テ兩兩相對ス又不對モアリ莖ト葉背ニ微毛アリ花ハ予未見

牽牛子　和名アサガホ黑白二種アリ

○黑丑　黑牽牛子ナリ花色數十種アリ○黑白江南花　和名シボリアサガホ花鏡曰近又有異種一本上開二花者俗因名之曰黑白江南花○重瓣ノモノアリ奇品ナリ不結實其餘近花色數十ニ及ブ藥用ニハ碧花ノモノヲ用ベシ

○白丑　白牽牛子ナリ是牽牛子ノ花實皆白キモノナリ東璧天茄子ヲ白丑トスルハ非ナリ辨下ニ詳ナリ

○天茄子　一名丁香茄苗和名タウナスビ又丁子ナスビト云和産ナシ○琉球種其蔓微紅ニシテ、

無毛柔刺アリ斷之有濃汁葉圓ニシテ山藥及甘藷葉ニ似タリ花牽牛旋花ノゴトク白色ニシテ底紫ナリ午時ニ開テ夕ニ萎ム實牽牛子ニ類シテ蔕長シテ其形丁香ノゴトク又茄子ニ似タリ生ハ青熟ハ白其核牽牛子ニ比スレバ稍大ナリ嫩實ヲ取蜜煎シ或ハ焯茶ニ供シ薑醋ニ拌ゼテ饌ニ供ス又對口瘡ヲ治スル神方アリ詳ニ高濂ガ遵生八牋ニ見エタリ此物本邦ニ産スルコトヲ聞ズ戊寅ノ夏薩商東都ニ齎來ル琉球ニ出ヅト云予即是ヲ得テ甚愛ス至秋實數十百枚ヲ得タリ翌年己卯主品中ニ具ス又同志ノ者ニ贈テ公于世按ズルニ東璧天茄子ヲ以テ白牽牛子トス然レドモ蘇頌有黑白二種ト云ノ外古人ノ說ナシ牽牛子中又色白モノアリ天茄子形相似タリトイヘドモ其種自別物ナリ且天茄子ハ爲果食ドモ下痢セズ牽牛子ノ功ナキニ似タリ恐クハ東璧牽牛子白實ノモノヲ見ズ妄ニ認テ此物トスルカ

旋花　和名ヒルガホ仙臺方言アメフリ所在ニ多シ菠薐葉ノゴトク三尖ニシテ小ク花牽牛花ノゴトクニシテ又小ナリ

△藤長苗　救荒本草ニ出タリ和名オホヒルガホ讃岐方言チヨクハナト云葉旋花ニ比スレバ稍長大ナリ花亦旋花ノゴトクニシテ大ナリ色淡紅又白花ノモノアリ旋花ト紛レ易シ混ズベカラズ

墻蘼　數種アリ東璧所說ノモノ野墻蘼ナリ和名ノウバラ又サカヤニンドウト云處處山野ニ多シ又百葉八出六出白紅黃紫ノ數色アリ

△木香花　花鏡曰一名錦棚兒藤蔓附木葉比薔薇細小而繁四月初開花毎穎三蒂極其香甜可愛者是紫心小白花若黄花則不香即青心大白花者香味亦不及至若高架萬條望如香雪亦不下於薔薇剪條扦種亦可但不易活惟攀條入土壅泥壓護待其根長自本生枝外剪斷移栽即活臘中糞之二年大盛○漢産上品即紫心小白花ノモノナリ此物庚辰歳始テ是ヲ傳テ官園ニアリ予園中亦植之

栝樓　和名カラスウリ越前方言クソウリ所在ニ多シ實ノ形土瓜ニ似テ大ナリ生ハ青熟スレバ黄色ナリ關東ニハ土瓜多シテ栝樓希ナリ藥肆土瓜仁ヲ以テ僞ルモノ多シ又天瓜粉モ栝樓根ヲ以テ造タルモノ眞ナリ土瓜根ヲ製シタルモノ用ウベカラス

王瓜　一名土瓜和名タマヅサ所在ニアリ東都地方至テ多シ俗栝樓ニ代用ルモノ非ナリ

天門冬　所在ニアリ莖長丈ニ至ル葉絲杉ノゴトク莖ニ刺アリ秋ニ至テ圓實ヲ結ブ根數十相連

百部　蔓生特生ノ二種アリ

○蔓生ノモノ鄭樵通志曰葉如薯蕷蘇頌曰百部春生苗作藤蔓葉大而尖長頗似竹葉面青色而光根下一撮十五六枚黄白色ト云モノ是ナリ葉薯蕷ニ似テ葉ノ半ニ花ヲ開ク○漢種上品享保中種ヲ傳テ今官園ニアリ

○特生ノモノ天門冬條下禹錫曰別有百部草其根有百許如一而苗小異其苗似菝葜ト此種莖長、

コト一尺餘葉三縦文アリ頗ル菝葜ニ似テ小ナリ旁ラ莖ヲ生シテ花ヲ開ク○漢種上品享保中種ヲ傳テ
今官園ニアリ葉尖タルト圓ナルト二種アリ共ニ圖中ニ詳ナリ按ズルニ先輩東壁ガ誤ヲウケテキジ
カクシトスルモノハ非ナリ東壁百部ヲ知ズ弘景所謂百部其根數十相連似天門冬ト云ハ根ノ形
狀ナリ然ルヲ東壁莖葉ノコトトス故ニ野天門冬ヲ以テ百部トス野天門冬ハ今所在ニ產スル所ノサ
ウチクト云モノ是ナリ百部ト絶テ別ナリ或ハ云別ニサウチクキジカクシノ類ニ根似天門冬者有ベ
キモ知ベカラズト予曰東壁云其根長者近尺ト是天門冬根ニ似タル形狀ニアラズ又曰乾則虛瘦無
脂潤ト皆眞百部根ノ形狀ニアラズ是サウチク根ヲ說コト明ナリ蘇頌禹錫及鄭樵ガ通志ニ說ト
コロ眞ノ百部ナリ東壁眞物ヲ知ズシテ却テ鄭樵ガ說ヲ謬レリトスルハ何ソヤ氣味發明等ノ說モ
妄說ナリ釋名野天門冬ト並ニ刪去ベシ

△野天門冬　東壁誤テ百部ノ一名トス然ドモ是別物ニシテ百部ニアラズ說上ニ見エタリ是亦大小二
種アリ○大ナルモノ和名サウチクト云形天門冬ニ似タリ他物ニマトハズシテ生ズ貝原先生曰キ
ジカクシ赤實アリ一種實ナキヲサウチクト云是百部ノ雄ナルベシト此說誤ナリサウチク又赤實ヲ
結ブ○小ナルモノキジカクシト云是卽チサウチクノ矮生ナリ是亦赤實ヲ結ブ又實ヲ結ザルモアリ

何首烏　和俗カシユウト云モノハ黃獨ナリ○漢種上品ナリ今處處ニ植

萆薢　和名オニトコロ所在ニアリ○漢種和產ト大抵同ジ葉花又多シ

菝葜　和名サルトリイバラ又和サンキライト云近江讃岐方言カラタチ伊勢方言カンクチ備後方言ホラクヒ佐渡方言カナイバラ葉大小圓長ノ數種アリ

土茯苓　和名山歸來○漢産上品享保中種ヲ傳テ官園ニアリ葉竹葉ニ似テ厚ク光滑ナリ三縱文アリ○琉球産下品享保中種ヲ傳テ官園ニアリ葉菝葜ニ似テ圓ナリ莖細ニシテ刺ナシ實菝葜子ニ似テ稍小ニシテ色黑シ○駿河産下品大抵琉球種ニ似タリ壬午歳同國沼津驛清春達始テ是ヲ得タリ壬午客品中ニ具ス

白歛　先輩ホト、スルハ誤ナリ○漢種享保中種ヲ傳テ官園ニアリ葉五爪龍ニ似テ小ナリ根ニ塊アリ秋結實大如大豆生青熟青碧色

山豆根　蘇頌曰苗蔓如豆葉青經冬不凋八月采根ト此物山陰樹下ニ生ズ莖綠色葉三葉ニシテ豆ノゴトク厚クシテ滑澤冬不凋根牡丹ノゴトク肉厚シテ味苦シ秋ニ至テ實ヲ結ブ形蓮肉ノゴトク色青黑色薄皮ヲ去レバ仁二片トナルコト豆ノゴトシ官園ノ老吏海治善右衛門曰往年此種ヲ唐商ニ徵ス然ドモ長途調護ヲ失シ東都ニ至時已ニ枯ト近世和産ヲ得タリ○肥後上益城郡一丁木山産方言イシヤタフシト云戊寅歳田村先生肥後ニ至テ是ヲ得タリ己卯主品中ニ具ス○伊豆天城山産上品壬午客品中讃岐志度邑多田孫助具之

釣藤　和名カラスノカギツル依木蔓延ス莖初方ニシテ後圓ナリ枝相對シテ出葉臘梅葉ニ似テ滑澤

ニシテ兩兩相對ス葉間有レ刺チ形鉤ノゴトシ是ヲ釣藤鉤ト云小兒方中ニ用ウ安藝遠江ニ產ス讃岐金毘羅山ニ產スルモノ幹ノ大サ徑リ尺ニ近シ

忍冬　和名スヒカツラ所在ニ多シ一種葉ニ花叉アルモノ和俗菊葉忍冬ト云○肥後產大葉常ノモノニ異ナリ葉大ニシテ厚ク濇毛アリ花モ亦大ナリ

南藤　一名風藤一名石南藤和名フウドウカヅラ紀伊湯淺橋本仙室曰先輩南藤ヲツルウメモドキトスルハ非ナリ形狀本草ニ合ズフドウカツラ眞ノ南藤ナリ蘓頌曰南藤生ス南山山谷今泉州榮州有レ之生シテ依ニ南木ニ如ニ馬鞭ノ有レ節紫褐色葉如ニシテ杏葉ノ而尖リ采ルニ無レ時又曰天台石南藤四時不レ凋ト此ノ說ツルウメモドキノ形狀ニアラズフウドウカツラニ近シト此說是ナリ此物紀ノ伊伊豆ニ甚ダ多シ土人皆フウドウカツラト呼ブ愚謂ラク本邦往昔藥物ヲ以テ國國ヨリ貢上ス當時能ク此物ノ風藤タルコトヲ知テ其ノ名稱到テ今ニ民間ニ傳ルカ或ハ又暗ニ風藤ノ名和漢同キカ庚辰歲予讃侯ノ命ヲ奉シテ藥ヲ封內ニ採ル一日阿野郡川東村深山中ニ至ル土人合歡木ヲ指テカウカノ木ト呼ブ按ズルニ古今六帖合歡ヲカウカト訓ズ合歡古名ネムリノキカウカハ合歡ノ略語ニシテ中古ノ稱ナリ今都會ノ地ニテハカウカトハ稱セズ然ニ却テ田舍深山中ノ人此名ヲ呼コトヲ知レリ蓋シ風藤モ亦然ルナラン

紫藤　和名フヂ山野ノモノ花短シノフヂト云○攝津野田產上品花至テ長シ紫花白花二種アリ○

漢種粉紫花ノモノアリ希品ナリ壬午主品中田村先生具之○一種深紫色重瓣ノモノアリ至テ希品ナリ府中侯園中ニアリ

香蒲　和名カマ所在ニアリ○一種細葉ノモノアリ葉廣三四分ニ過ズ蒲槌モ亦小ナリ世俗妄ニ號シテアンペラト云按ズルニアンペラハ南蠻語ニテ席ノ惣稱ナリ草ノ名ニアラズ

萍蓬草　和名カハホ子黄花ノモノ所在ニ多シ○東都産赤花ノモノアリ可愛○一種黄瓣紅蘂ノモノアリ俗心クレナヰノカハホ子ト稱ス○一種矮生ノモノアリ花葉至テ小ナリヒメカハホ子ト云

△沙箸　越王餘算附錄ニ出タリ是草類ニアラズ○肥後宇土郡御輿置産方言ウミカンザシ又サギノソウメント云海邊沙中ニ生ズ其形箸ノゴトク色至白シ己卯主品中田村先生具之

石帆　藏器曰石帆生海底高尺餘根如漆至梢上漸軟作交羅文頌曰石帆生海嶼石上草類也無葉高尺許其花離樓相貫連ト云フモノ石帆ナリ弘景狀如柏ト云モノハ石柏ナリ

石斛　和産處處深山石上ニ寄生ス花白色粉紅色ノ二種アリ

△麥斛　和名ムキラン蘇恭曰石斛有二種一種似大麥累累相連頭生一葉而性冷名麥斛ト是亦深山樹石上ニ生ズ其形麥ノゴトク上ニ一二ノ小葉ヲ出ス光澤ニシテ石斛葉ノゴトシ

骨碎補　和名イハシヤウガ東璧曰其根扁長略似薑形其葉有椏缺頗似貫衆葉ト此物深山石上或朽木上ニ生ズ形狀東璧ガ所說ノゴトシ又別ニイハナト稱スルモノ亦石上ニ生ズ根ノ形略相似、

タリトイヘドモ骨砕補ニアラズ○長崎産上品

巻柏　和名イハヒバ筑紫方言コケマツ讃岐紀伊方言イハマツ處處石上多生ズ

△地柏　巻柏附録ニ出タリ和名イハシノブ頌曰根黄狀如絲莖細上有黄點無花葉三月生長四五寸許東璧曰此亦巻柏之生于地上者耳ト此物深山中ニアリ葉ノ形巻柏ノゴトク莖ハ細シテ巻柏ニ異ナリ

△含生草　巻柏附録ニ出タリ和名安産樹紅毛語ロウズハンヱリガウ紅毛人ロウズトハ刺棘ヲ云ナリハンハ助語ナリヱリガウハ此物所出ノ國ノ名ナリ藏器曰生靺鞨國葉如巻柏而性平無毒主婦人難産含之嚥汁即生ト此物生草絶テナシ乾腊ノモノ紅毛人持來ル其形屈曲頗巻柏ノ如臨産ニ此物水中ニ投スレバ葉ノ開ヲ期トシテ平産ヲナスト云○蠻産乾腊ノモノ壬午主品中田村先生具之

玉柏　日光方言萬年草其形杉ノ如ク長サ五六寸甚愛スベシ高野山所産ノ萬年草トハ別ナリ

石松　和名ヒカゲノカツラ是玉柏ノ類狀長ニシテ蔓生スルモノナリ

百草灰　五月五日百種ノ草ヲ采テ陰乾シ焼テ灰ニシタルモノナリ百草霜トハ別ナリ

胡菫草　和名エゾスミレ頌曰枝葉似小菫菜花紫色似翹軺花一枝七葉花出兩三莖ト云モノ是ナリ處處深山中ニ産ス

天芥菜　和名ダイコンナ江戸方言タンゴナ備前方言ダイコンサウト云東壁曰生平野小葉如芥狀味苦一名雞痾粘主蛇傷同金沸草入鹽搗傅之王璽醫林集要曰治腋下生腫毒以鹽醋同搗傅之散腫止痛膿已成者亦安亦治一切腫毒ト此物處處田野ニ生ズ大和本草所出和品大根菜其葉似菘爲菜食頗美其實結莢又如菘子治痘瘡壞症無效用之如神有起死回生之功漢名未詳ト云モノ卽天芥菜ナリ又同書天芥菜ヲ出ス其所說ノモノ莖葉實皆芥菜ニ似テ細長シト云モノハ恐ラクハ救荒本草ノ水芥菜ノ類ナルベシ松岡子用藥須知後編ニ云狼牙俗ニ大根草ト呼ブ大葉小葉ノ二種アリ痘瘡熱毒ヲ解スルノ功甚速ナリ中山華陽軒ハ小葉ノモノヲ根葉倶ニ用テ效ヲ得タリト云ヘリト此說大ナル誤ナリ和方痘瘡ニ所用ノ大根草ハ貝原先生所說ノ葉似菘其實結莢ト云フモノニシテ卽天芥菜ナリ今猶西國民間ニ傳テ痘瘡ニ用テ效驗アリ京師及東都ノ醫人和名同ヲ以テ依名迷實狼牙草ヲ用或ハ水楊梅ヲ用ルモノハ皆非ナリ

△覇王樹　一名仙人掌和名サンホテイ又タウナス又イロヘロ又サチラサツホウト云諸書ニ出タリ

△覇王鞭　和名キリンカク花暦百詠曰覇王樹一種方長類鐧者號覇王鞭按ズルニ鄕談正音云官音鎗錐鄕談鎗鐧ト鐧ハ鎗ノ鋒ナリ此物近世琉球ヨリ來ル寒ニ堪ガタシ或ハ始紅毛ヨリ來ト云ハ非ナリ紅毛ハ寒國故ニ此物生ゼズ皆南國ヨリ得テ貴重スト云ヘリ紅毛本草亦此物ヲ出スイボウエホウエト云

△金絲桃　和名ビヤウヤナギ處處園中ニ植

△金絲梅　致富奇書及園史ニ出タリ貝原先生クサヤマブキトスルハ非ナリ致富奇書金絲桃條曰一種似梅者名金絲梅其花稍小比金絲桃更勝ト此物金絲桃ト一類二種ナリ葉ノ狀圓小ニシテ花瓣モ亦短ク花形梅花ノ如ク稍大ニシテ深黃色頗萍蓬草ノ花ニ似タリ蘂短シテ五ニ分レ內ニ心アリ長三分許甚愛スベシ和產ナシ○漢種壬午主品中田村先生具之此種庚辰歲始テ本邦ニ傳フ

△平地木　和名ヤブカウジ詳ニ大和本草ニ出タリ松岡先生平地木ヲカラタチバナトスルハ非ナリ花鏡曰平地木高不盈尺葉似桂深綠夏初開粉紅細花結實似南天竹子至冬大紅子下綴可觀ト花鏡桂ト指モノハ木樨ナリカラタチハナ葉長キコト竹ノゴトシ木樨ニ似ズ又八種畫譜所圖ノモノ考ベシ

△水木犀　和名ヲトギリサウ先輩劉寄奴ヲヲトギリサウトスルハ非ナリ群芳譜桂附錄曰水木犀一名指田枝軟葉細五六月開花細而色黃頗類木樨中鬚葯香絕似二月內分種與甘州狗杞配植兩盆頗稱清賞搗葉加礬染指紅過鳳仙トヲトギリサウ葉ヲモメバ紅汁アリ上說ト合ス貝原先生綿胭脂ハ此草ノ生葉ヲシボリテ綿ニヒタセルナリト云ハ誤ナリ綿胭脂ハ紫鉚ナリ蟲部ニ詳ナリ○再按ズルニ本草拾遺ニ草犀アリ生水中者名水犀其功ヲトギリ草ニ似タリ疑ラクハ同物ナランカ

蠻種漢名未詳者載于左ニ

ローズマレイン　乾腊ノモノ紅毛人持來ル莖葉白蒿ニ似テ香氣アリ背ニ細理文アリ〇和産正午客品中大阪天滿藝種家喜右衛門具之和名マンルサウト云此物所出未詳

ケルフル　葉胡荽葉ニ似テ小實藁本茴香ニ類ス〇蠻種戊寅歳種ヲ傳フ按ズルニ此物本邦處處野生ノモノアリ

イケマ　蝦夷ニ産ス蝦夷人此物トヱブリコノ二種諸病トモニ用金瘡打撲等ニモ用本邦ニテモ産後産前ニ用テ大ニ驗アリト云世人其何物タルコトヲ知ズ予一日讃侯ノ邸ニ在テ仙臺侯所藏草木圖畫ヲ見ル其種品千ニ近シ寫生ノ妙逼眞其中イケマ生草ノ圖アリ其草蔓延シテ葉ノ形蘿藦及何首烏ニ類ス故ヲ以テ物色シテ是ヲ求ム庚辰歳讃岐ニ至テ根葉甚相似タルモノヲ得タリ後又日光ニ産スルコトヲ知方言ヤマカゴメト云是卽イケマニシテ本草ノ白兎藿救荒本草ノ牛皮消ノ類ナラン然ドモイマダ蝦夷産ノ生草ヲ見ザレバ是非決シガタシ今玆初春松前侯醫官宮崎椿菴歸國スイケマ生草ヲ贈致ンコトヲ約ス得ルノ後ヲ待テ是ヲ決スベシ

物類品隲巻之三終

物類品隲巻之四

藍水田村先生鑒定

讃岐　鳩溪平賀國倫編輯
東都　田村善之
　　　中川鱗同校
信濃　青山茂恂

穀部

稲　一名穤和名モチヨネ東壁曰物理論所謂稲者溉種之總稱是矣本草則専指穤以為稲也ト按ズルニ稲ハ穀稲總名ニテ和名イネ穤粳秈皆稲ナリ然ドモ古ヨリ本草家ニ稲ト指モノハ穤ナリ顔師古刊謬正俗云本草稲米即今穤米也ト此モノ種類多シ

粳　和名ウルシネ種類甚多シ○紀伊熊野本宮山中水澤中穭生ノモノアリ年年繁茂ス方俗空海所植ト云モノハ誤ナリ稲ハ天下普ク植ルトイヘドモ其始出ルモノハ皆穭生ナリ或曰仙臺ニモ穭生ノモノアリ

△旱稲　和名ハタケイネ○日向高千穂山中穭生ノモノアリ年年生ズ方言ヤマイネト云

秈　和名タイタウゴメ又タウボシト云赤白ノ二色アリ

薏苡仁　和名タウムギ○漢種今官園及世上多植

△粳穇　一名菩提子一名薏珠子救荒本草川穀ト云和名ジユズタマ是亦薏苡　秜類ナリ所在野生多シ穀厚シテ米少シ用ニ堪ズ

罌子粟　和名ケシ花單瓣重瓣アリ單瓣ノモノ米多シ花色數種アリ○一種矮生ノモノアリ和俗三寸ケシト云莖高三四寸ニシテ花ヲ開ク愛スベシ

綠豆　和名ブンドウ又ヤヘナリ二種アリ東璧曰粒粗而色鮮者爲官綠皮薄而粉多粒小而色深者爲油綠皮厚而粉少ト處處植ルモノ官綠ナリ○蠻種己卯歳紅毛人所献ノ咬𠺕吧産木綿子中ニ得テ是ヲ植形緊小ニシテ色深シ是即油綠ナリ

豌豆　和産處處ニ植○蠻産異種紅毛語グルウンヱルテ莖葉常ノ豌豆ノゴトク實大ニシテ褐色斑點アリ東璧曰出胡地者大如杏仁ト云モノ是ナリ

菜部

葱　和名キ又ヒトモジ又子ブカ又子ギト云○東都産上品葱白長サ尺ニ近シ

△樓葱　一名龍爪葱和名マンチンチギ又サンガイ子ギトモ云救荒本草曰樓子葱苗葉根莖俱似葱、

其葉梢頭又生小葱四五枝疊生三四層故名樓子葱不結子但掐下小葱栽之便活ト此物葉ノ末ニ根ヲ生ジ又葉ヲ出スコト覇王樹ノ枝ヲ出スガゴトシ甚異品ナリ東都希ニアリ其由テ出ル所未詳壬午主品中予具之

菘　和名ナ數種アリ○蠻種根大ニシテ根葉倶ニ食フベシ紅毛語コノルコールト云

蕪菁　和名カブラ種類多シ○蠻種根辛辣ナリ紅毛語ランマナスト云

萊菔　和名オホネ又ダイコン○漢種葉ニ花又多根味美ナリ○蠻種赤色ノモノ紅毛語ロートラテイスト云

生薑　○讃岐金毘羅産上品形小ニシテ味甚辛辣ニシテ筋スクナシ○長崎産大ニシテ佛掌薯ノ如シ氣味薄シ

邪蒿　形靑蒿ニ似テ細軟季春小碎瓣ノ黃花ヲ開ク所在ニアリ

菾菜　和名フダンナ又タウチサ又イツモナト云和産處處ニ多シ○蠻種色至テ紫赤ニシテ光澤アリ紅毛語ロートベートト云是亦菾菜火焰菜ノ類ナリ

萵苣　和名チサ葉靑キモノ紫ナルモノ數種アリ○一種葉細クシテ長一尺餘ニ至ルモノアリキジノヲト云○蠻種葉細長花又多シ花ハ深碧色ニシテ單瓣菊花ノゴトシ朝ニ開テ夕ニシボム和名ヲランダチサ又キクチサ紅毛語アンテイヒト云

蒲公英　和名タンホホ花黄白ノ二色アリ○筒瓣ノモノアリクダザキタンホホト云

百合　所在ニアリ種類多シ○松前産花小ニシテ紫黒色俗クロユリト云

茄　和名ナスビ數種アリ○水茄　和名ナガナスビ○靑茄　和名アヲナスビ○白茄　和名ギンナスビ

冬瓜　和名カモウリ處處多植本草ニハ大ナル者徑尺ノリ餘長三四尺トアリ本邦ノ産ハ多圓ナリ○一種狀越瓜ノゴトク長尺サ餘ニシテ黄色ナルモノアリ異品ナリ

絲瓜　和名ヘチマ是亦處處皆植○一種長コト三尺餘ナルモノアリ俗ナガヘチマト云

苦瓜　和名ツルレイシ長崎方言ニガゴオリト云處處ニ多シ○漢種異品長一尺五六寸ニ至ルモノアリ己卯主品中予具レ之ヲ

△番椒　和名タウガラシ此物後世番國ヨリ出ツ本草ニ不レ載セ東璧食物本草及ヒ其餘近代ノ書ニ出タリ本邦ニ傳ルコトハ秀吉公代ニ朝鮮ヲ時種子ヲ取來ル故ニ俗ニ高麗胡椒ト云是貝原先生ノ説ナリ近世盛ニ植色ニ赤黄ノ二種アリ其種類百餘種ニ及ブ○一種實兩岐ノモノアリ俗フタマタタウガラシト云長寸餘東都目黒讚侯別莊園中ヨリ出ヅ後植テレ之ヲ皆兩岐ナリ○一種其味甘キモノアリ長三寸許形豊ニシテ色鮮紅其形色ハ甚辛辣ナルベクシテ却テ甘シ是亦物ノ變ナルモノナリ

果部

木瓜　和名ボケ和産數種アリ○漢種享保中種ヲ傳テ官園ニアリ花紅白相雜實形大ナリ

胡桃　和名クルミ處處ニ多シ○陸奥會津産俗ゴンロククルミト云此種會津大鹽村穴澤權六者園中一樹アリ故ニ名ク其他絶テナシト云形彈丸ノゴトク愛スベシ

橄欖　和産ナシ○漢種己卯春種ヲ傳テ植之核ノ形六稜ニシテ兩頭尖ル内ニ三竅アリテ竅中ニ仁アリ形扁ナリ花鏡ニ仁ナシト云ハ桃仁梅仁ノゴトクナラザルヲ以テナリ仁ナキニハアラズ實ヲ植レバ日ヲ經テ核三方ヘ開テ芽ヲ生ズ故ニ一核三根ヲ生ズ甲拆兩方各三葉ニシテ水字ノゴトシ餘ノ草木ノ二葉ナルト異ナリ次ニ一葉ヲ生ズ漸長ジテ後葉狀欒木無患子ノゴトクニシテ光澤アリ此物甚寒ヲ畏ル北地ニ育ガタシ長崎一兩株大ニシテ實ヲ結ト云

阿勃勒　一名波斯皂莢生木絶テナシ○蠻産乾實紅毛人持渡ル藏器曰狀似皂莢而圓長東璧曰莢長二尺中有隔隔内各有一子大如指頭赤色至堅硬中黑如墨ト云モノ是ナリ己卯主品中田村先生所具狀不全長尺許莢ハ筒ノゴトクニシテ内ニ子アルコト東璧ガ說ノゴトシ

△羅望子　綱目阿勃勒附錄ニ出タリ桂海志云出廣西殼長數寸如肥皂及刀豆色正丹内有二三子煨食甚美ト按ズルニ和俗イソマメ一名ハマナタマメト稱スルモノアリ海濱處處蔓延シテ生ズ

花葉刀豆ノゴトク莢亦刀豆ニ似テ長サ三四寸許内ニ二三子アリ莢ノ状頗ル肥皂莢ニ類ス疑ラクハ是羅望子ナラン然トモ桂海志ニ花葉ノ形状詳ナラザレバ妄ニ決シガタシ

呉茱萸　木ノ形棟ノゴトク葉椿ニ似テ厚シテ光澤アリ實ヲ植テ不生傍根出芽分植ベシ和産所在ニアリ下品ナリ○漢産享保中種子ヲ傳テ官園ニ植ユ上品ナリ

茗　一名茶漢土ヨリ種ヲ傳ルノ說大和本草ニ詳ナリ按ズルニ伊豆深山中自然生ノモノ多シ是古ヨリ本邦此種アレドモ人是ヲ知ズ故ニ漢土ヨリ種ヲ傳ルト見エタリ

皐盧　和名タウチヤ李恂曰生南海諸山中葉似茗而大味苦澀出新平縣南人取作茗飲極重之如蜀人飲茶也ト此物東都蘐種家ニアリ甚茶ニ似タリ只葉大ニシテ厚ヲ異トスルノミ庚辰主品中東都松田長元具之

甜瓜　和名マクハウリ西國方言アジウリ和産數種アリ

△瓜蔕　和名ウリノヘタ○越前産上品吐藥ニ用テ妙ナリ

西瓜　和名スイクハ皮青ク瓤赤キモノ處々ニ植○一種皮白色ノモノアリ○伊勢産瓤黄色ノモノアリ○伊勢産核赤色ナルモノアリ

甘蔗　和名サタウタケ又サタウキビト云和産ナシ○琉球種享保中薩摩ヨリ傳テ今處々ニ植テ砂糖ヲ製ス是即糖砂ナリ形蜀黍ノゴトクニシテ花實ナシ莖ヲ切テ植レバ芽ヲ生ズ培養製法附錄ニ

詳ナリ

木部

杉　和名スギ○一種枝至テ長クシテ下リ垂ルモノアリ俗ヱンコウスギト云好事者植テ盆甚貴重ス其始叡山ヨリ出ヅト云

桂　○漢種上品享保中種ヲ傳テ駿府官園ニアリ今數千株ニ及ト云箘桂ヲ以テ接之長ジ易シ

烏藥　和産ナシ漢種享保中種ヲ傳ヘテ官園ニ植二種アリ

○台州種葉ノ形樟葉ニ似テ面青光澤アリ背白有テ横紋二三縱文アルコト桂葉ノゴトシ東璧葉形鯽魚ニ似タリト云モノ說得テ善シ三月細黃花ヲ開ク實大豆ノゴトク生青熟紺碧色植テ生ジ易シ根香氣ツヨシ

○衡州種下品大抵台州種ニ似タリ台州種ハ叢生シテ高三四尺ニ過ズ此種ハ高サ丈ニ至ル根硬シテ香氣薄シ

楓樹　和産絕テナシ一種唐カヘデト云モノ三葉ニシテ葉大サ寸許形狀大抵和ノカヘデニ似タルモノヲ俗楓樹ナリト云ハ非ナリ眞楓ハ是ニ異ナリ○漢産享保中是ヲ傳フ然ドモ御園及日光兩三株ニ過ズ其餘絕テナシ葉圓ニシテ岐ヲナス三角アリテ大サ二三寸形草綿葉ノゴトシ其實毬ヲナ

ス柔刺アリ其形圖中ニ詳ナリ樹脂ヲ楓香脂ト云功用多シ壬午主品中田村先生具之

質汗　和名ミイラ先輩木乃伊ヲミイラトスルハ非ナリ藏器曰質汗出西番煎檉乳松淚甘草地黄并熱血成之番人試藥以小兒斷一足以藥納口中將足蹋之當時能走者良ト云モノ卽ミイラナリ

篤耨香　紅毛語テレメンテイナ東壁曰篤耨香出眞蠟國樹之脂也樹如松形其香老則溢出色白透明者名白篤耨盛夏不融香氣淸遠土人取後夏月以火炙樹令脂液再溢至冬乃凝復收之其香夏融冬結以瓠瓢盛置陰涼處乃得不融雜以樹皮者則色黑名黑篤耨爲下品ト此說卽テレメンテイナナリ又和產ニ相似タルモノアリ然レドモ未決○蠻產壬午客品中小濱侯醫官杉田玄白具之

△膽八香　篤耨香附錄ニ出タリ和俗ポルトガルノ油ト名ヅクポルトガルハ蠻國ノ名ナリ此モノ其國ニ出ル故ニ名ヅク紅毛語ヲヲリヨヲレイヒト云ヲヲリヨハ油ナリヲレイヒハ此木實ノ名ナリ此物功用綱目ニ出タリ又惡血ヲ去肉ヲアゲ一切乾タルヲ潤シ筋ヲノバシ痛ヲ和ク服之痲疾ヲ治ス以上紅毛人カスハルロ授ノ功能ナリ又紅毛人平常ノ食用トス○蠻產紅毛人持來

○膽八樹　東壁曰膽八樹生交趾南番諸國樹如稚木犀葉鮮紅色類霜楓其實壓油和諸香爇之辟惡氣ト則此實ノ仁ヲ取テ油ニ榨タルモノヲヲリヨヲレイヒ和俗ノ所謂ポルトガルノ油是ナ

リ○紀伊産方言ヅクノ木ト云湯淺深專寺内ニ大木アリ高七八丈周圍一丈三四尺其他紀伊地方ニ多シ葉形冬青樹及木犀ニ類ス經冬不凋葉四時ニ落葉落ル時至テ鮮紅色可愛實形大棗ノゴトク熟シテモ色青シ庚辰歳予紀伊ニ游テ始テ是ヲ得タリ蠻産ノ實ヲ以テ是ヲ較ルニ蠻産ハ大ニ和産ハ小ナリトイヘドモ全ク同物ナリ或曰是橄欖ノ一種ナリト此説甚ダ非ナリ橄欖ハ絶テ別ナリ又今茲三月紅毛人東都ニ來ル予是ヲ携テ紅毛外療ポルストルマンニ質ス亦眞物ナリト云小川悅之進傳譯蠻人ハ實ヲ酢ニ漬テ是ヲ食味酸甘ナリ又和俗續隨子ヲポルトガルト稱スルハ大ナル誤ナリ

蘆會　和産ナシ○蠻産紅毛人持來何物タルコト未詳舊説木脂ナリト云按ズルニ東璧曰盧會原在草部藥譜圖經所狀皆言是木脂而一統志云瓜哇三佛齋諸國所出者乃草屬狀如鱟尾采之以玉器搗成膏ト鱟尾ノゴトシト云モノ近世琉球ヨリ所來ノタウアダンノ形狀ニ似タリタウアダン斷葉涎アリ是ヲ取テ製シ試ンコトヲ思テ未果

檗木　和名キハダ和産所在ニアリ葉無患子胡桃ニ似タリ皮黄色○朝鮮種享保中種ヲ傳テ官園中ニアリ

楝　和名アフチ又センダントト云和産所在ニアリ實小ニシテ下品ナリ○漢種實大ニシテ上品東璧以川中者爲良ト云モノ是ナリ

秦皮　和名トネリコ所在ニアリ大葉ノモノ葉形呉茱萸ニ似テ樹高大小葉ノモノ叢生ス此物目疾ヲ治スルノ功多シ汁ヲ取墨ニ入テ其色佳ナリ又畫色ニ加テ甚妙ナリ

皂莢　蘓恭東璧皆云三種アリ別録ニハ如猪牙者良トシ弘景ハ長尺二者良トシ恭ハ長六七寸圓厚節促直者味濃大好ト三説不同蘓頌曰今醫家作疎風氣丸煎多用長皂莢治齒及取積藥多用猪牙皂莢所用雖殊性味不甚相遠ト按ズルニ吹咽喉吐涎入鼻取嚔類皆猪牙皂莢ヲ用ベシ

○長皂莢　和名サイカシ所在ニアリ莢形甚薄シテ長シ弘景所謂長尺二者東璧長而痩薄枯燥不粘ト云モノ是ナリ

○猪牙皂莢　生木ナシ○漢産乾實藥肆ニアリ長三寸許曲戻ニシテ猪牙ノ形ニ似タリ又一種恭所説長六七寸圓厚者未見之疑ラクハ肥皂莢ナラン

肥皂莢　生木ナシ○漢産乾實莢長四寸許甚肥厚ニシテ堅ク内ニ黒子四ツアリ木患子ニ似タリ

椶櫚　和名シユロ是即椶櫚ノ轉語ナリ○漢種葉圓小ニシテ硬ク盆ニ植テ愛スベシ

相思子　和産ナシ實漢渡アリ俗タウアヅキト云○漢種田村先生新渡ノ種ヲ植テ生ズルコトヲ得タリ其葉槐ニ似テ小合歡葉ノゴトシ五六寸ニ至テ冬枯可惜

枳　實ノ小ナルハ枳實老スレバ枳殼ナリ和俗カラタチヲ枳殼枳實トスルハ大ナル誤ナリカラタチ

ハ枸橘ナリ混ズベカラズ○漢種享保中種ヲ傳テ駿府官園ニアリ樹橘ノゴトク葉橙ニ似テ刺アリ
實モ橙ニ似テ稍小ナリ

枸橘　一名臭橘和名カラタチ和産處處ニ多シ植テ藩籬トス○漢種享保中種ヲ傳テ東都官園ニアリ形和産ニ同シ俗唐枳殼トスルハ誤ナリ實大ナリトイヘドモ枳殼トハ別ナリ

酸棗　○漢種享保中種ヲ傳フ樹及實ノ狀皆棗ニシテ小ナルモノナリ

猴核樹　和産ナシ○漢種己卯春東都古河章輔植之生ズル事ヲ得タリ同年客品中ニ具ス

山茱萸　和産所在ニアリ葉縱理多ク正月黃花ヲ開實ヲ結ブ秋ニ至テ赤色形胡頹子ノゴトシ○漢種享保中種ヲ傳ヘテ官園ニ植形和産ト異ナシ實和産ニ比スレバ大ニシテ肉多シ上品ナリ

女貞　和名子ズミモチノキ又ヤブツバキ又子ヅミノフン讚岐方言テラツバキト云所在ニ多シ

△水蠟樹　和名イボタノキ女貞ノ一種葉小ニシテ薄ク實亦小ナリ

枸杞　蘓頌曰枸杞與枸棘二種相類其實形長而枝無刺者眞枸杞也圓而有刺者枸棘也不堪入藥ト今所在産スルモノ皆刺アリ眞ノ枸杞ニアラズ宗奭曰凡杞未有無刺者雖大至于成架尚亦有棘但此物小則棘多大則棘少正如酸棗與棘其實一物也ト此説誤ナリ○肥後産戊寅歳田村先生西游シテ得之枝ニ刺ナク實ノ形微ク異ナリ

○枸棘　卽枸杞ノ一種有刺モノナリ所在多アリ世人是ヲ枸杞トス

牡荊　東壁曰其木心方其枝對生一枝五葉或七葉葉似楡葉長而尖有鋸齒五月杪間開花成穗紅紫色其子大如胡荽子而有白膜皮裹之ト此說牡荊ノ形狀ヲ盡セリ○漢種享保中種ヲ傳ヘテ官園ニ植其葉頗似蔘葉故ニ和俗人蔘木ト云荊瀝ヲ取法本草ニ詳ナリ化痰化風爲妙藥醫家必植之藥用ニ備ベシ竹瀝荊瀝功相似テ不等コト延年祕錄及丹溪所說詳ナリ可幷考

紫荊　和名ハナスハウ所在人家植之宗奭曰春開紫花甚細碎共作朶生出無常處或生于木身之上或附根上枝下直出花花罷葉出光緊微圓園圃多植之ト云モノ眞物ナリ藏器所說ノ紫珠ハ別物ナリ下ニ詳ナリ

△紫珠　和名ヤブムラサキ藏器曰郎田氏之荊也至秋子熟正紫圓如小珠名紫珠江東林澤間尤多ト是ヤブムラサキノ形狀ナリ綱目紫荊ト混シテ一トスルモノ誤ナリ此物處處ニ多シ實ノ大サ雀珊瑚ノゴトクニシテ深紫色ナリ○一種白實ノモノアリ

扶桑　一名佛桑和産ナシ○琉球産近世多渡來槿ニ似テ深綠ニシテ光滑ナリ花形木槿ノゴトクニシテ大ナリ亦木芙蓉花ニ似タリ深紅色甚愛スベシ朝ニ開テ夕ニ萎實アリ植テ生ジ易シ花單瓣重瓣ノ二種アリ花鏡等ニハ其餘粉紅黃白青色ノ數種アリト云リ然ドモ未見之此物甚寒ヲ畏ル秋末土ヲ掘コト四五尺稻穀ヲ以テ埋之三月暖氣ヲ得テ出スベシ然ザレバ冬ヲ經ガタシ

蠟梅　和名ナンキンウメ東壁曰蠟梅種凡三種以子種出不經接者臘月開小花而香淡名狗蠅

梅經接而花疎開時含口者名磬口梅花密而香濃色深黄如紫檀者名檀香梅最佳結實如垂
鈴尖長寸餘子在其中ト今本邦狗蠅檀香ノ二種アリ

○狗蠅梅　江村如圭曰昔本邦不聞有之
後水尾帝時自朝鮮來ルト今ハ處處多植

○檀香梅　○漢種享保中種ヲ傳ヘテ官園ニ植俗唐蠟梅ト云花狗蠅梅ニ比スレバ大ナルコト三倍
色琥珀ノゴトク蔕ニ近キ處深紫色ニシテ紫檀ノ色ノゴトシ香甚濃ナリ若一枝ヲ瓶中ニ插メバ
香馥室ニ滿ツ○本草曰花瓶水飲之殺人蠟梅尤甚

虎刺　又作虎茨和名アリドホシ遵生八牋曰產杭之蕭山白花紅子而子性甚堅雖嚴冬厚雪不
能敗也畏日色百年者止高二三尺不甚易活ト此物所在山中ニ產ス寒ヲ畏ル故ニ北國ニハ不
生大葉小葉ノ二種アリ小葉ノモノ枝葉細密ニシテ實多シ盆ニ植テ愛スベシ大葉ノモノ枝葉
稀疎ニシテ實少シ大葉ノモノハ巴戟天ト甚相似タリ然レドモ巴戟天ハ根連珠アリ虎刺ハ根
連珠ナク色黄ナリ

木綿　東壁曰木綿有二種似木者名古貝似草者名古綠ト草本ノモノ處處所植ノキワタナリ
木本ノモノパンヤナリ下ニ詳ナリ

○古終　卽草本木綿ナリ和名キワタ東壁曰江南淮北所種木綿四月下種莖弱如蔓高者四五尺

葉有三尖如楓葉入秋開花黄色如葵花而小亦有紅紫者結實大如桃中有白綿綿中有實
大如梧子亦有紫綿者八月采棣謂之綿花此物往古ヨリ本邦ニ有ニアラズ類聚國史卷百
九十九殊俗部崑崙篇曰

桓武天皇延暦十八年七月有一人乘小船漂著參河國以布覆背有犢鼻不著袴左肩著紺
布形似袈裟年可廿身長五尺五分耳長三寸餘言語不通不知何國人大唐人等見之僉曰崑崙
人後頗習中國語自謂天竺人常彈一弦琴歌聲哀楚閲其資物有如實者謂之綿種依其願令
住川原寺即賣隨身物立屋西郭外路邊令窮人休息焉後遷住近江國國分寺同十九年四
月庚辰以流來崑崙人無賫綿種賜紀伊淡路阿波讚岐伊豫土左及太宰府等諸國植之其法
先簡陽地沃壤堀之作穴深一寸衆穴相去四尺乃洗種漬之令經一宿明旦殖之一穴四枚以
土掩之以手按之毎旦水灌常令潤澤待生芸之ト貝原好古曰是日本ニ木綿アル始ナリ中世ヨ
リ其種ヲ失シニヤ絶タリケルヲ文祿年中ニ重テ其種ヲ傳テ日本ニ入アマネク天下ニシケリト國
倫按ズルニ古終本南番ニ出テ宋末始テ江南ニ入ル本邦亦此種ヲ傳テヨリ今諸國ニ多植就中和
泉河内紀伊讚岐ノ諸國ニ出ルモノ上品ナリ北國ニモ植ルトイヘドモ實ヲ結ブコト少ク且下
品ナリ是本南國ニ出テ暖地ヲ好ムユヱナリ類聚國史ニ所謂紀伊淡路阿波讚岐伊豫土佐太宰
府ノ諸國ニ植シムルコト宜ナルカナ本邦往古國用ヲ慮リ其種所出ノ寒暖ヲ以テ土地ノ可否ヲ

考ルコトノ詳ナルコト如此後世ノ及ブ所ニアラズ

○古貝　卽木本木綿和名バンヤ又羅䕷絨ヲモ俗ニバンヤト云此物ニ似タルユヱナリ或ハ羅䕷絨ヲクサバンヤト云眞ノバンヤハ古貝ナリ東壁曰交廣木綿樹大如抱其枝似桐其葉大如胡桃入秋開花紅如山茶花黃蘂花片極厚爲房甚繁短側相比結實大如拳實有白綿綿中有實今人謂之斑枝花訛爲攀枝花ト此物本邦産絕テナシ其綿漢土ヨリ來モノ價貴シ若此物本邦ニ多産スルコトヲ得バ其益不少故ヲ以テ田村先生是ヲ　官ニ告ス戊寅歲

台命アリテ此種ヲ淸商ニ徵ス然ルニ淸人不知之船主貰多珠等呈狀ヲ上ル其略曰唐山木本綿花未曾聞見棉花原係草本每年于秋八九月收採此種唐山隨便有多竟不知綿花生于樹上多等囘唐之際查訪如有木本綿花樹或種子卽便帶來進上ト再

台命アリテ是ヲ蠻商ニ徵ス己卯歲紅毛人咬𠺕吧種木綿樹子數斤ヲ齎來同年八月長崎郡官高木君是ヲ東都ニ獻ズ紅毛語木綿ヲカトウンボヲムト云草綿ヲカトウンコロイトト云カトウンハ綿ナリボヲムハ木ナリコロイトハ草ナリ庚辰歲

台命アリテ是ヲ諸國ニ植シム希ニ生ズルコトアリ此時ニ至テ始テ見ルコトヲ得タリ形狀圖中詳ナリ但長シテ後葉形胡桃ノゴトシト云此物甚寒ヲ畏ル至冬盡枯按ズルニ此種亦南國ニ出ヅ暖地ニアラザレバ生育セズ若シ紀伊伊豆薩摩土佐等ニ植バ必繁茂スベシ古草綿ノ種ヲ傳テヨリ其益

被天下モノ至テ廣大ナリ今木綿繁殖ヲ得バ國益多カルベシ再此種ヲ得テ南國暖地ニ植試ンコ
トヲ思ノミ

△海桐花　和名トベラ讃岐方言ニガキ此物八種畫譜ニ出タリ又別ニ海桐アリ本草喬木類ニ出タリ
和名ボウタラ又ハリキリト云同名異物ナリ混ズベカラズ畫譜曰花細白如丁香而臭味甚惡遠觀
可也ト云モノハトベラナリ此物所在ニ多シ花黄白ニシテ金銀花ノゴトシ○蠻種咬𠺕吧ヨリ來ル
所ノ木綿子中ニ在テ生ス其狀和産ニ比スレバ葉深緑色ニシテ甚光澤アリ壬午客品中官儒青
木先生具之

△多羅　飜譯名義集曰舊名貝多此翻岸形如此方椶櫚直而且高極高長八九十尺華如黄米子有
人云一多羅樹高七仞七尺曰仞是則樹高四十九尺西域記曰南印建那補羅國北不遠有多羅
樹林三十餘里其葉長廣其色光潤諸國書寫莫不采用ト又綱目椰子附錄ニ樹頭酒アリ卽是
多羅樹ノ實ノ汁ヲ取テ製シタル酒ナリ樹ヲ樹頭椶ト云又貝樹ト云此物生木本邦絕テナシ又蠻
國ヨリモ來ラズ○蠻産葉紅毛人持來葉長三四尺廣五六寸色白シテ光滑ナリ壬午客品中長崎
山本利源次具之

琥珀　東璧曰色黄而明瑩者名蠟珀色若松香紅而且黄者名明珀有香者名香珀出高麗倭國
者色深紅有蜂蟻松枝者尤好○下總銚子外川産上品ナリ

△鳳尾竹　和名ホウワウチク東壁曰葉細三分竹譜曰紫幹高不過二三尺葉細小而猗那類鳳毛盆種可作清翫ト今處處ニ植テ藩籬トス

△方竹　和名シカクタケ竹譜曰體方有如削成而勁挺堪爲杖亦異品也ト其幹方ニシテ馬鞭草益母草ノ莖ノゴトシ和産ナシ○琉球産壬午客品中下野國那須郡佐久山白石松徹具之

竹黄　卽天竺黄ナリ馬志曰天竺黄生天竺國今諸竹內往往得之ト苦竹淡竹皆アリ形片ヲナシ色黄白色ナリ是竹液內ニ結成スルモノナリ此物始天竺ニ出ル故ニ天竺黄ト云然ルヲ東壁僧贊寧ガ言ヲ信シテ一種天竹中ニ出ルトシ作天竺者非ナリトスルハ却テ誤ナリ此物夏月暑熱ノ爲ニ熏蒸セラレテ竹液內ニ滲注シテ經日結成スルナリ天竺及其餘南國酷暑ノ處ニ多ク産ス北地ニハ不産故ニ東壁不知之贊寧ハ吳人ナリ親見之然ドモ天竹中ニ生ズルヲ見テ諸竹內生ズルコトヲ知ズシテ誤傳ルノミ又大明所謂竹內塵沙結成者ト云ハ甚妄ナリ塵沙何處ヨリ竹內ニ入ンヤ○駿河産上品壬午主品中予具之

瑿　和名クロコハク卽琥珀ノ黑色ナルモノナリ○下總銚子外川産上品○紀伊千里濱産上品方俗カラスミト云

雷丸　一名竹苓竹林中ニ生ズ竹ノ餘氣ノ所結ナリ松根ニ茯苓ノ生ズルト同意ナリ○遠江金谷産甚上品形大塊其色白シテ軟ナリ大抵茯苓ニ似タリ內竹根ヲ夾ムモノアリ壬午客品中金谷驛川

合小才次具之

箽竹　和名ナヨタケ又メタケ又カハタケ又ニガタケト云載凱之竹譜曰箽竹堅而促節體圓而質勁皮白如霜大者宜刺船細者可為笛ト云モノ是ナリ此物所在ニ多シ笋味甚苦故ニ和俗ニガタケト云苦竹トハ別ナリ蘇頌曰竹處處有之其類甚多而入藥惟用箽竹淡竹苦竹三種ト此三種根葉茹瀝功用各別ナリ本草主治ノ下ニ詳ナリ

苦竹　和名クレタケ又マタケト云笋微有苦味其籜紫褐色斑文アリ

淡竹　和名ハチク笋味不苦其籜黃褐色ニシテ斑文ナシ又別ニ淡竹葉アリ和名ササクサト云又鴨跖草一名淡竹ト云三種同名異物ナリ混スベカラズ

蠻物漢名未詳者載于左

キヨルコ　紅毛人持渡芝類ト見エタリフラスコノ口ニ用ルモノ其質軟ニシテ甚シマリヨシ紅毛語壜ノ口ヲホロツプト云故ニ和人聞誤テ此物ヲホロツフト稱スルハ誤ナリ

サツサフラス　烏藥ニ似タリ紅毛人持來ル

エブリコ　蝦夷ニ産ス蝦夷人諸病トモ是ヲ用ウ其質甚軟ニシテ色白或是五葉松ニ所生ノ芝ナリト云

ルザラシ　此木堅シテ味甚苦シ痔蟲積食傷霍亂胸痛目眩頭痛ヲ治シ傷寒ノ熱ヲ解シ諸毒ヲ解ス、

絞ニテオロシテ二分許白湯ニテ用又熱腫ニハ水ニテ解傅テヨシ

蟲部

蟲白蠟　和名イボタラフ東璧曰其蟲大如蟣虱芒種後則延緣樹枝食汁吐涎粘於嫩莖化爲白脂乃結成蠟狀如凝霜處暑後則剝取謂之蠟渣若過白露卽粘住難剝矣ト此物所在有之女貞木水蠟樹上ニ生ス又秦皮樹ニモ生ズルコトアリ剝取テ水ニ入テ煎シテ布ニテ漉シテ滓ヲ去レバ蠟トナルナリ此モノ能疣ヲ治ス故ニイボタト云イボタハ疣取ノ略語ナリ

紫鉚　東璧曰紫鉚出南番乃細蟲如蟻虱緣樹枝造成正如今之冬青樹上小蟲造白蠟一般故人多插枝造之今吳人用作臙脂ト此物和產絕テナシ○蠻產紅毛人持渡其色紫黑色ナリ是ヲ以テ綿ヲ染タルヲ綿臙脂一名胡燕脂ト云和名シヤウエンジ

石蠶　和名ダイコクムシ處處川澤中ニ生ズ藏器曰水底石下有之狀如蠶解放絲連綴小石如繭ト云モノ卽是ナリ又一種石類石蠶ト名ヅクルモノアリ石部ニ見エタリ

斑蝥　一名斑猫讚岐方言ダイダウトホシト云所在ニアリ○漢產上品○讚岐產上品

芫菁　頌曰處處有之形似斑蝥但色純青綠背上一道黃文尖喙ト此物形斑猫ヨリ小ニシテ青綠色ニシテ光アリ和產ナシ○蠻產紅毛語カンターリイ又スパンスフリイゲト云フリイゲハ蠅ヲ云ス

パンスハ國ノ名ナリ壬午客品中官醫橋氏具之

蠍　和名サソリ許愼曰蠍蠆尾蟲也長尾爲蠆短尾爲蠍ト薬肆ニ有モノハ皆乾腊ノ物ナリ○蠻産長尾ノモノ田村先生長崎ニ至テ紅毛商船中ニ生ズルモノヲ得タリ數十日不死死シテ後薬水中ニ蓄フ其狀圖中ニ詳ナリ

衣魚　一名白魚和名シミ衣帛書畫中ニ生ズ形小ニシテ色銀ノゴトシ本草鱗部亦白魚アリ同名異物ナリ混ズベカラズ

蝸牛　和名カタツフリ又デヽムシト云所在ニ多シ數種アリ

○一種モノアラガヒト云アリ陰濕ノ地又池沼中ニモ生ズ殼蝸牛ト異ニシテ肉ハ卽一樣ナリ是亦蝸牛ノ類ナリ頌曰其城牆陰處一種扁而小者無力不堪用ト云ハ卽是ナリ此物歌仙貝中ニ入故ニ世人海中ノ貝ト思ハ非ナリ古歌ニ荷葉ノ上ハツレナキウラニサヘモノアラ貝ハツクト云ナリト云ヲ以テ證トスヘシ

鱗部

△龍骨　別錄曰生晉地川谷及大山巖水岸土穴中死龍處弘景曰今多出梁益巴中骨欲得脊腦作白地錦文舐之著舌者良齒小强猶有齒形角强而實皆是龍蛻非實死也ト後世諸家辨說紛

紛タリ東壁以本經爲正ノ說甚明ナリ○讃岐小豆嶋產上品海中ニアリ漁人網中ニ得タリト云其骨甚大ニシテ形體略具ル舐之着舌用之其效驗本草ノ主治ト合ス是眞物疑ベキナシ近世漢渡龍骨アリ是一種ノ石ニシテ眞物ニアラズ木化石ニ近シ倪朱謨本草彙言ニ所說ノモノ是ナリ朱謨眞物ヲ見ズ世俗ノ言ヲ信ジテ晋蜀山谷所產ノ一種ノ石ヲ認テ龍骨トシ妄ニ辨ヲ費ス松岡先生是ニ雷同シテ眞ナルモノ絕テ稀ナリト云ヨリ吠聲ノ徒管見ヲ以テ辨說ヲナス皆夏蟲不知氷ノ論擧ニテ論ズルニ足ズ

△龍齒　○小豆嶋產其形象齒ニ似タリ大サ六七寸骨ニ着タルモノアリ

△龍角　小豆嶋產長サ六尺餘徑尺ニ近キモノアリ上黑ク中黑白灰色相雜ル骨ヨリハ肌密ナリ亦能着舌

○蠻產ニスランガステインアリ紅毛人希ニ持來癰腫ノ上ニ置ハ粘着シテ不離邪氣ヲ吸毒ヲ解ス是ヲ乳汁ノ中ニ投ズレバ所吸ノ邪氣ヲ吐出シテ石故ニ復ス如此スルコト數次ニシテ功能初ニ不減ト云世人甚貴重ス大サ碁子ノゴトキモノ其價百金ニ至ル福山舜調曰藥性纂要頭書ニ吸毒石アリ此物ナルベシ田村先生謂スランカステインハ卽龍角ナリト試之其功蠻產ト異ルコトナシ先生西游ノ時長崎ニ至テ紅毛譯官吉雄氏楢林氏ニ質ス皆眞物ナリト云庚辰歲紅毛人東都ニ來時外科パウルナル者ニ質ス又眞物ナリト云本邦ニ產スルコトヲ聞テ大ニ驚ク吉雄氏譯ヲ傳フ

産トスベシ蠻産ハ黒シテ堅ク和産ハ黒白相雜テ軟ナリトイヘドモ全同物ナリ按スルニ紅毛語ス
ランガハ蛇ヲ云ステインハ石ヲ云龍角ハ龍頭ニ在テ形石ノコトシ故ニスランガステイント云紅毛
人語脈轉語多シテ可解不可解モノ間有之或ハ直ニ蛇石ト譯シテ蛇頭中ニ在モノニシテ石首
魚頭中石魷ノコトシト謂ハ非ナリ

△紫梢花　綱目弔條下ニ出タリ○近江湖水中産方言カニクソト云蘆竹枝上ニ着狀蒲槌ノゴトクニ
シテ灰色ナリ陳自明婦人良方云紫梢花生湖澤中乃魚蝦生卵于竹木之上狀如糖轍去木用
之錢大用活幼全書云紫梢花即湖澤中鯉魚生卵於竹木上是也

鼉龍　蠻産紅毛語カアイマン頌曰形似守宮鯪鯉輩而長一二丈背尾俱有鱗甲ト此說ト相符合
ス形守宮蛤蚧ノ如ク四足アリ頭ヨリ尾ニ至テ鱗アリ三角ニシテ甚尖觜尾ノ長サ身ニ半ス圖中ニ
詳ナリ此物咬𠺕吧暹羅ノ洋海中ニアリ人舟中ヨリ形ヲ顯セバ忽チ水中ヨリ踊出テ是ヲ食フ形甚
大ナリトイヘドモ水ヲ離ルニ音ナシ蠻人甚恐ト云ヘリ戊寅歳田村先生長崎ニ至テ是ヲ得タリ長
サ二尺許藥水ヲ以テ硝子中ニ藏ム形色生ガゴトシ數十年ヲ經テ敗ズ己卯主品中ニ具ス

蛤蚧　蠻産紅毛語ハアガテス其形守宮ノゴトク又蟾蜍ニ似タリ今藥店ニアル處ノモノハ腹ヲ割
竹ニテ張テ曝乾スルカ故ニ形狀分明ナラズ藥水ヲ以テ蓄ルモノ田村先生己卯主品中ニ具ス

△鰐蛇骨　肥後阿蘇郡坂梨手永尾籠村産頭骨長八寸徑五寸脊骨徑寸餘壬午客品中東都能勢氏、

具レ之

鱧魚　一名大鳥魚一名黒鯉和産ナシ先輩ヤツメムナギトスルモノハ誤ナリ東璧曰形長體圓頭尾相等細鱗玄色有斑點花文頗類蝮蛇有舌有齒有肚背腹有鬣連尾尾無岐形狀可憎ト云モノヤツメムナギトハ絶テ別ナリ混ズベカラズ○漢産近世希ニ渡ル楊拱醫方摘要ニ浴兒免痘ノ法アリ曰除夕黄昏時用大鳥魚一尾小者二三尾煮湯浴兒遍身七竅俱到不可嫌腥以清水洗去也若不信但留一手或一足不洗遇出痘時則未洗處偏多也此乃異人所傳不可輕易

魚虎　和名ハリセンボン所在海中ニアリ形河豚魚ノゴトク全身有刺猬ノゴトシ

海馬　和名ウミウマ又リウグウノコマ又タツノオトシゴト云處處海中ニ多シ○相模産一種全身有刺モノアリ○相模産一種赤色ノモノアリ壬午客品中播磨高砂三浦迂齋具之

△海牛　和名スヾメフグ又イシフグト云本草原始ニ圖アリ此物駿河伊豆相模海中甚多シ形三稜ノモノ四稜ノモノ頭上有刺モノ無刺モノ數種アリ

蠵龜　一名鼅鼊和名ウミカメ讃岐方言ガメノニフタウト云海中ニアリ劉欣期交州記曰蚼蟕似瑇瑁大如笠四足縵胡無指爪其甲有黒珠文采斑似錦文但薄而色淺不任作器惟堪貼飾今人謂之鼊皮ト此物甲皮瑇瑁ノゴトクニシテ薄シ器物ヲ飾ルベシ或ハ藥肆蠵龜甲ヲ以テ龜甲ト稱シテ賣モノアリ龜ハイシガメナリ是ト混スベカラズ

瑇瑁　和俗誤テベツカフト云鼈甲ハスツホンノ甲ナリ瑇瑁ニアテズ瑇瑁海中ニ生ズ形蠵龜ノゴトク甲鱗ノゴトク十三片アリ漢渡多シ婦人ノ頭飾トス○石見產壬午主品中田村先生具之

牡蠣　和名カキ歌ニ須磨カシハト詠ズルハ牡蠣房ナリ海旁處處皆アリ多ハ鹹淡水相交處ノ石ニ着テ生ス

○海牡蠣　和名オキカキ洋海中ニ產ス故ニ名ヅク雷斅曰海牡蠣可用ト此物常ノ牡蠣ニ比スレバ大ニシテ藥用ニ佳ナリ是亦二種アリ○草鞋蠣　和名コロヒガキ閩書南產志曰又一種生海中大如杯曰草鞋蠣ト此物常ノ牡蠣ヨリ大ニ形圓ニシテ稍長シ洋海中石ニ着ズシテ生ズ故ニコロビガキト云○大蠣房　和名オホガキ南產志曰一種大蠣房數倍五六月有之名曰黃蠣ト是亦洋海ニ生ズ形至テ長大二三尺ニ至ル以上二種總テ海牡蠣ナリ

○蠔蠣　和名ナミマカシハ保昇曰又有蠔蠣形短不入藥用ト云モノ是ナリ海中石或ハ螺殼ニ着テ生ズ殼形圓ニシテ石ニ着タル方ハ甚薄シテ中ニ穴アリ

蚌　和名エガヒ又カラスカヒ又ヱカキカヒト云按ズルニ蚌ハ蛤類ニテ長キモノ、通稱ナレドモ本草蚌ト指モノハエカヒナリ○琵琶湖產大サ七八寸餘ノモノアリ

馬刀　和名トブカヒ又ミゾカヒト云處處水田溝渠泥中ニ生ズエカヒト一類二種ナリ故ニ世俗エガヒヲモ此物ヲモドブ貝カラス貝ト云又ミゾ貝ト稱スルモノ同名二種アリ予所著ノ日本介譜中

ニ詳ニ辨之

蜆　和名シヾミ淡水鹹水皆アリ○琵琶湖産他所ノモノニ比スレバ殼厚ク形異ナリ古歌ニハ堅田ノ蜆ヲ詠ズ今ハ堅田ニハ稀ニシテ勢田ニ多シ方言ゼゼ貝ト云或云勢田ハ膳所ニ隣故ニ膳所貝ト云又曰此貝大サ錢ノゴトシゼゼハ錢ノ俗稱ナレバ卽錢貝ナリト按ズルニ上説是ニ近シ

石決明　和名アハビ所在海中石ニ着テ生ズ

△鰒魚　和名トコブシ石決明ト一類二種ナリ其狀大同小異石決明大ナルモノ尺ニ近シ鰒魚ハ二三寸ニ過ズ其形石決明ニ比スレバ殼薄シテ形瘦タリ石決明ハ七八孔アリテ九孔ノモノ稀ナリ鰒魚ハ八九孔ヨリ十一二孔ノモノアリ蘇頌曰鰒魚乃王莽所嗜者一邊着石光明可愛自是一種與決明相近東壁曰鰒魚是一種二類故功用相同ト此二説石決明鰒魚ノ二物ナルコト明ナリ

○和名千里介ト云モノアリ是亦石決明鰒魚ノ類ナリ形相似テ孔ナク尻ニ曲アリ紀伊熊野海中ニ生ズ千里光トハ石決明ノ殼ナリ是トハ別ナリ

貝子　和名タカラガヒ又コヤスガヒト云處處ヨリ出ヅ就中琉球薩摩紀伊八丈嶋ヨリ出ルモノ上品多シ大ナルモノ三寸餘ニ至ル爾雅及漢朱仲ガ相貝經ニ其形ヲ以テ名ヲ異ニス其品類多シ今亦數百種アリ形狀文彩不可枚擧古ハ貝ヲ以テ寶トシテ交易ヲナス故ニ寶ノ字及賣買ノ字等皆貝ニ從至秦貝ヲ廢シテ錢ヲ行フ今モ咬嚁吧ベンガラノ海島ニテハ貝ヲ以テ交易ヲナス名ヲカウル

スト稱スト云ヘリ

紫貝　即貝子ト一類別種ナリ相貝經ニ如赤電黒雲者謂之紫貝ト然ドモ陸璣詩疏紫貝質白如玉紫點爲文ト蘇恭ガ說モ亦然リ故ニ東壁相貝經ノ說ヲ不取此物琉球及紀伊熊野ヨリ出ルモノ大サ三四寸ニ至ル上品ナルモノ玉ノゴトシ按ズルニ紫貝一名砑螺蘊頌曰畫家用以砑物故名曰砑螺也閩書南產志曰紫貝紫色有斑點俗謂之砑螺以砑紙光滑便作字ト是砑螺ハ紫貝ノ一名ナルコト明シ然ルニ怡顏齋介品福州志ヲ引テ砑螺ヲツメタ貝トスルハ誤ナリ

△海鏡　綱目海月附錄ニ出タリ一名膏藥盤和名板貝又タウカヾミ貝又マド貝又トウロウカヒト云○漢產長崎ニ來ル其形圓ニシテ薄ク外濇ニ內滑ナリ日ニ映ズレバ透明ニシテ雲母ニ似タリ中夏ノ人是ヲスリテ方ナラシメ燈毬トナス又漳州府志ニ土人鱗次之爲天窻トハメンドリバニカサ子テ引窻トスレバ光ヲ引テ雨ヲフセグ故ナリ大和本草海鏡ヲ月日貝トス然レドモ其說ニ曰但本草ニハ悉ニ不合ト怡顏齋介品是ヲ決シテ月日貝トス大ナル誤也

△壁虎魚　和名クモカヒ中山傳信錄曰螺殼上生五六爪形如壁虎名壁虎魚ト○琉球產壬午客品中浪花渡部主税具之

獸部

△水鼠　綱目鼠附録ニ出タリ和名カハネズミ東壁曰似鼠而小食菱芡魚蝦ト云モノ是ナリ○上野横川産壬午客品中信濃飯山高木竹菴具之

△鼷鼠　是亦鼠附録ニ出タリ和名キネズミ郭璞曰鳥鼠同穴山在今隴西首陽山之西南其鳥為鵌音涂狀如家雀而黃黑色其鼠為鼷狀如家鼠而色小黃尾短鳥居穴外鼠居穴内ト此モノ山中ニ産ス形狀鼠ノゴトク黃赤色ニシテ脊黑シ大サ二寸許尾ノ長寸許ニシテ毛多シ常鼠ノ尾ニ異ナリ○肥後熊本侯珍藏壬午客品中具之

△香鼠　和名ジヤカウネズミ○長崎産己卯主品中田村先生具之其大サ三寸許ニシテ香氣略麝香ニ似タリ松岡先生曰長崎後藤町ニ此鼠多シ其居處常ニ香氣アリ本邦ニテ此ヲ麝香鼠ト呼昔暹羅舶來ル時此鼠舟ニ付來今其種繁育セリト是卽地志ニ載スル所ノ香鼠ナリ

物類品隲卷之四終

物類品隲巻之五圖繪
甘草
讃岐　鳩溪平賀國倫編輯

朝鮮種人參　四圖

初生圖

兩椏圖

三椏五葉圖

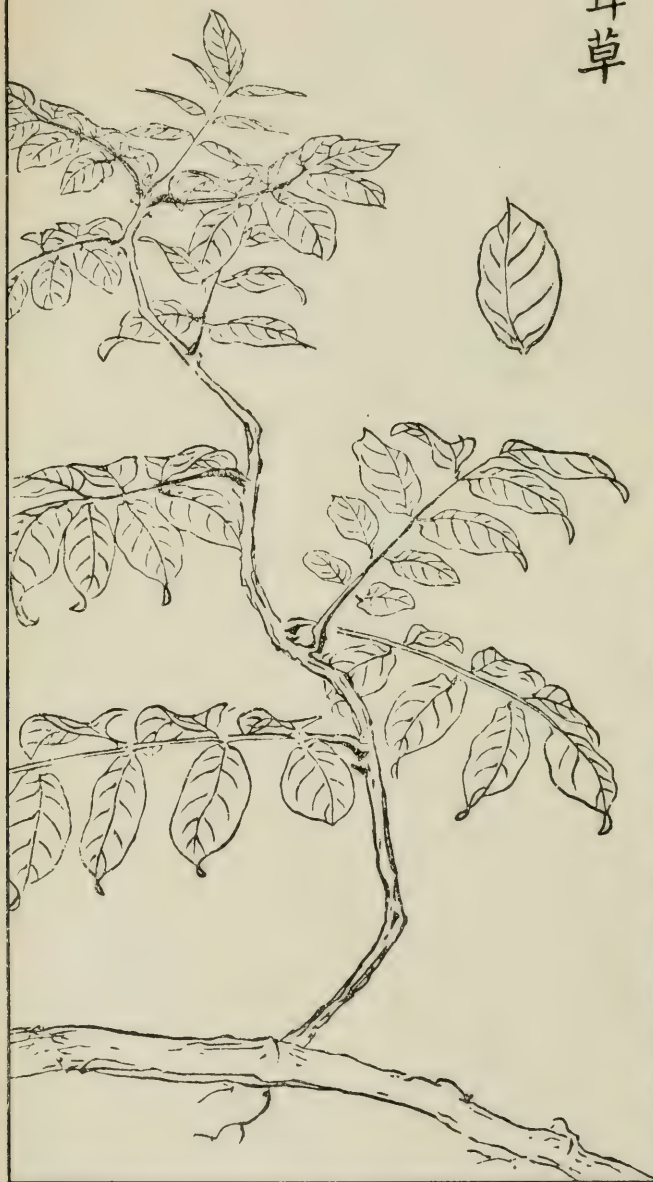
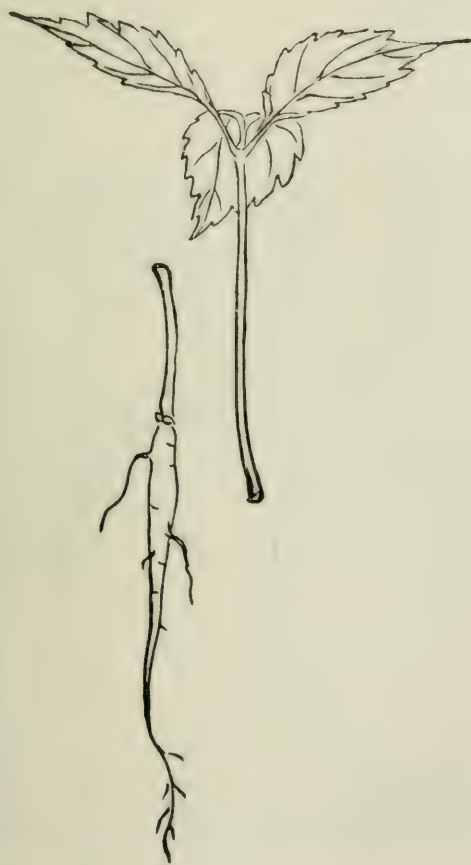
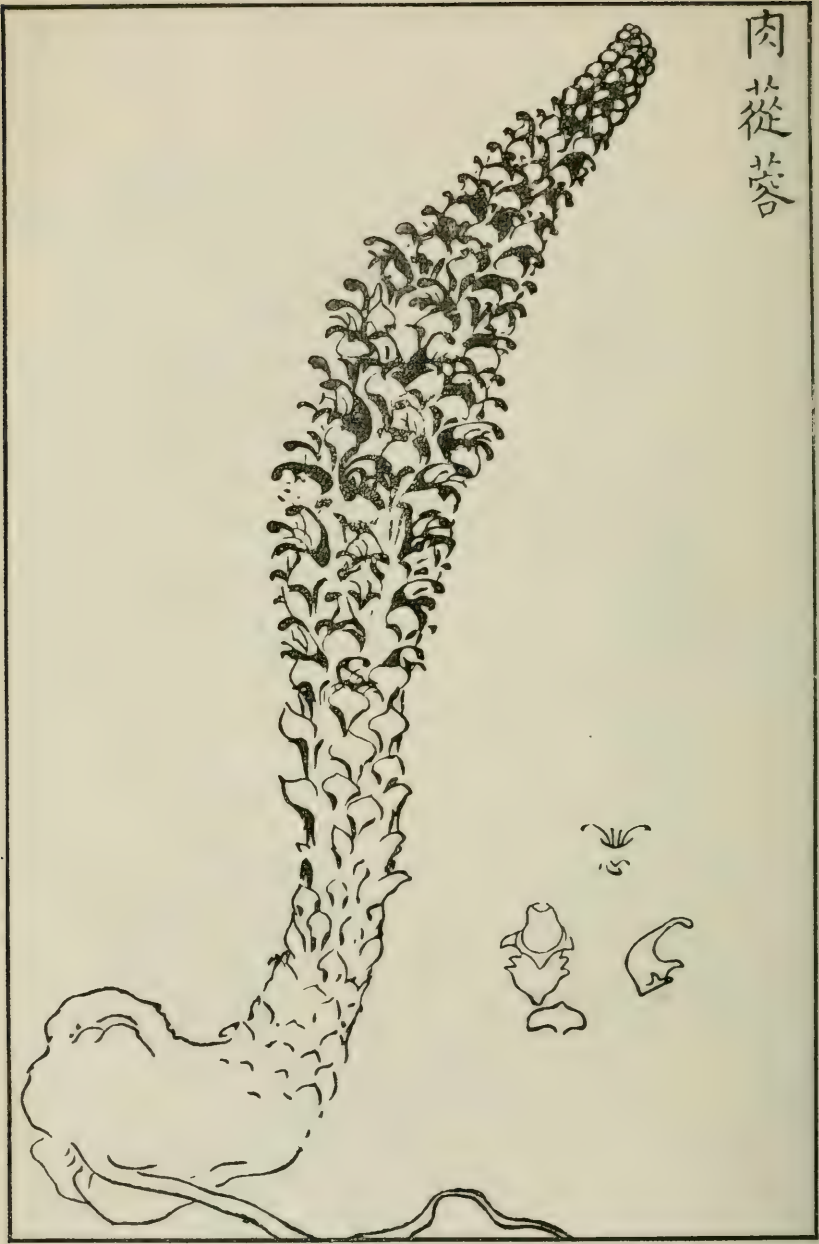
結實圖

漢種黄精

肉蓯蓉

赤箭天麻

巴戟天

仙茅

結實圖

漢種延胡索 二種
大葉

小葉

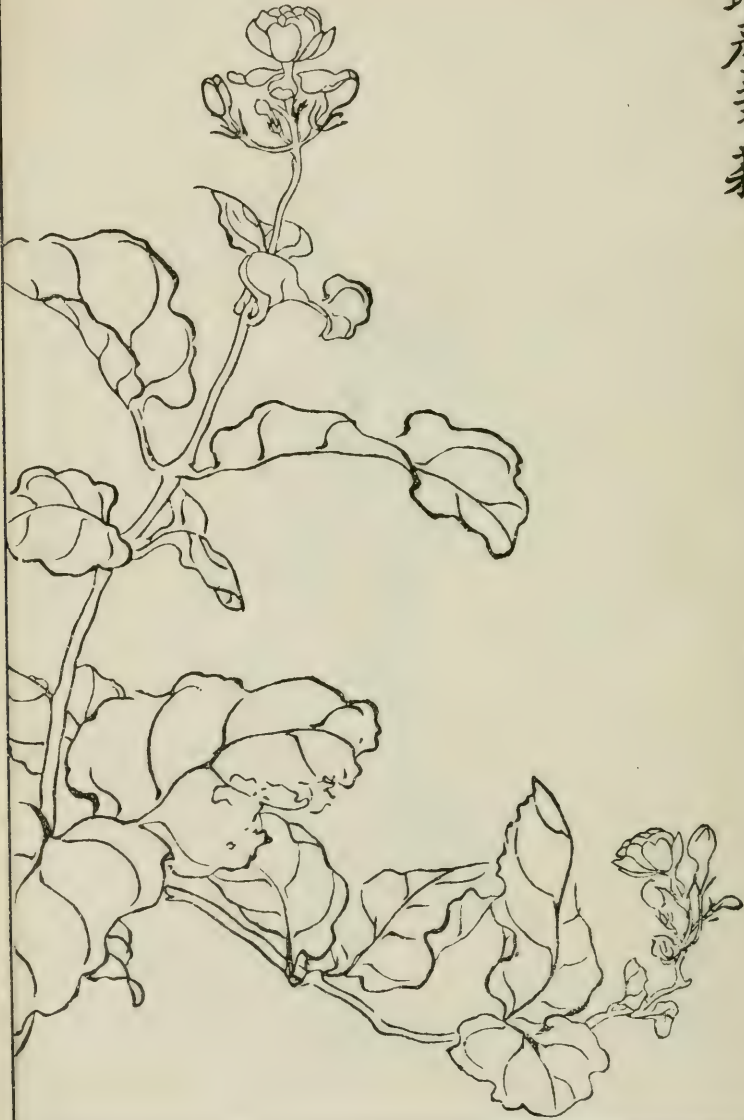
漢種細辛

漢種補骨脂

琉球產茉莉

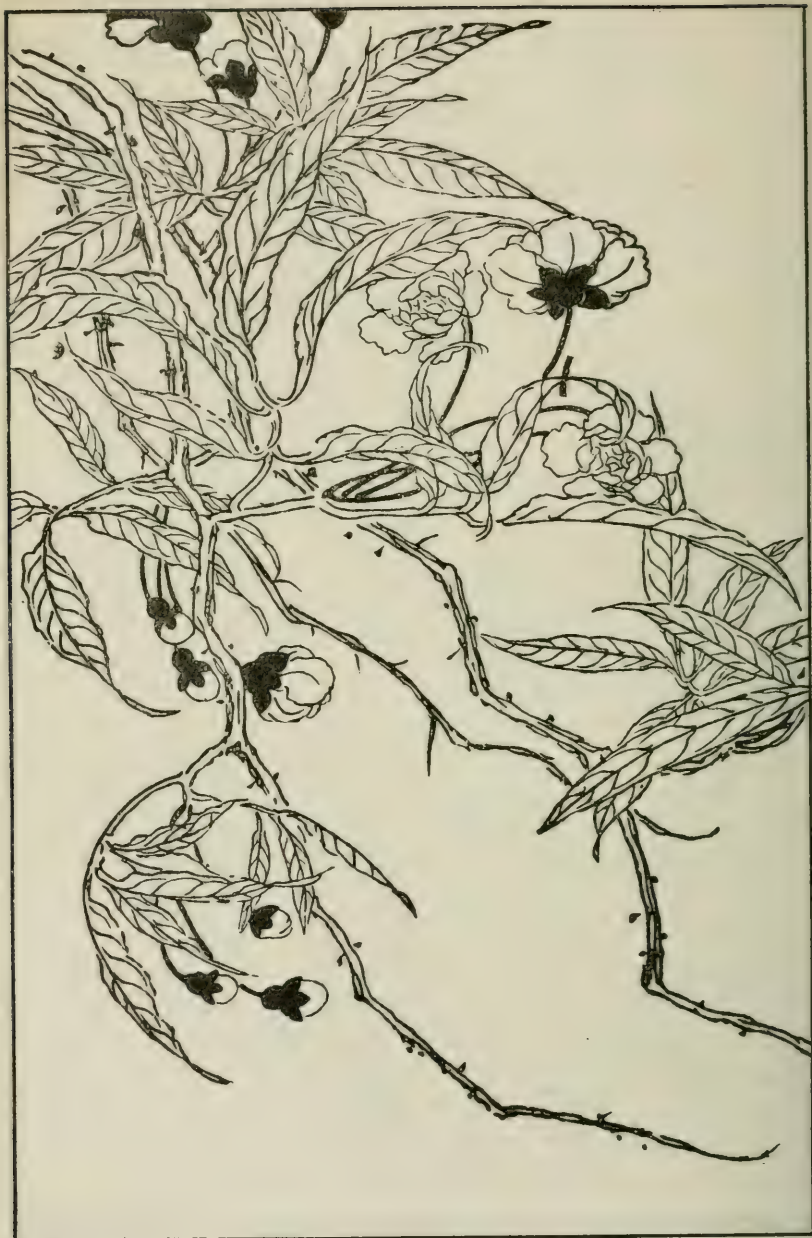
泊夫藍

此一圖以紅毛本草臨

漢種蕳茄

蝦夷種附子

漢種使君子

琉球種天茄子

漢産木香花

漢種百部 三種

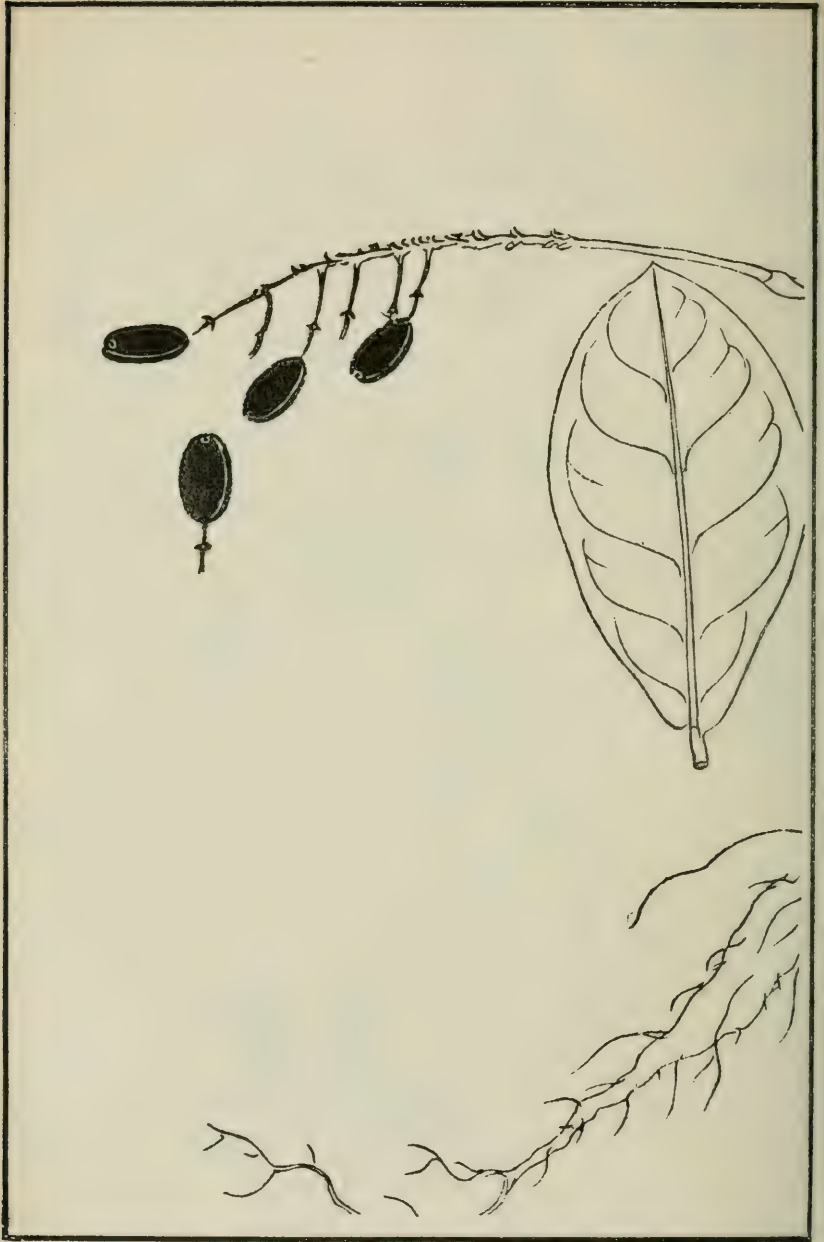
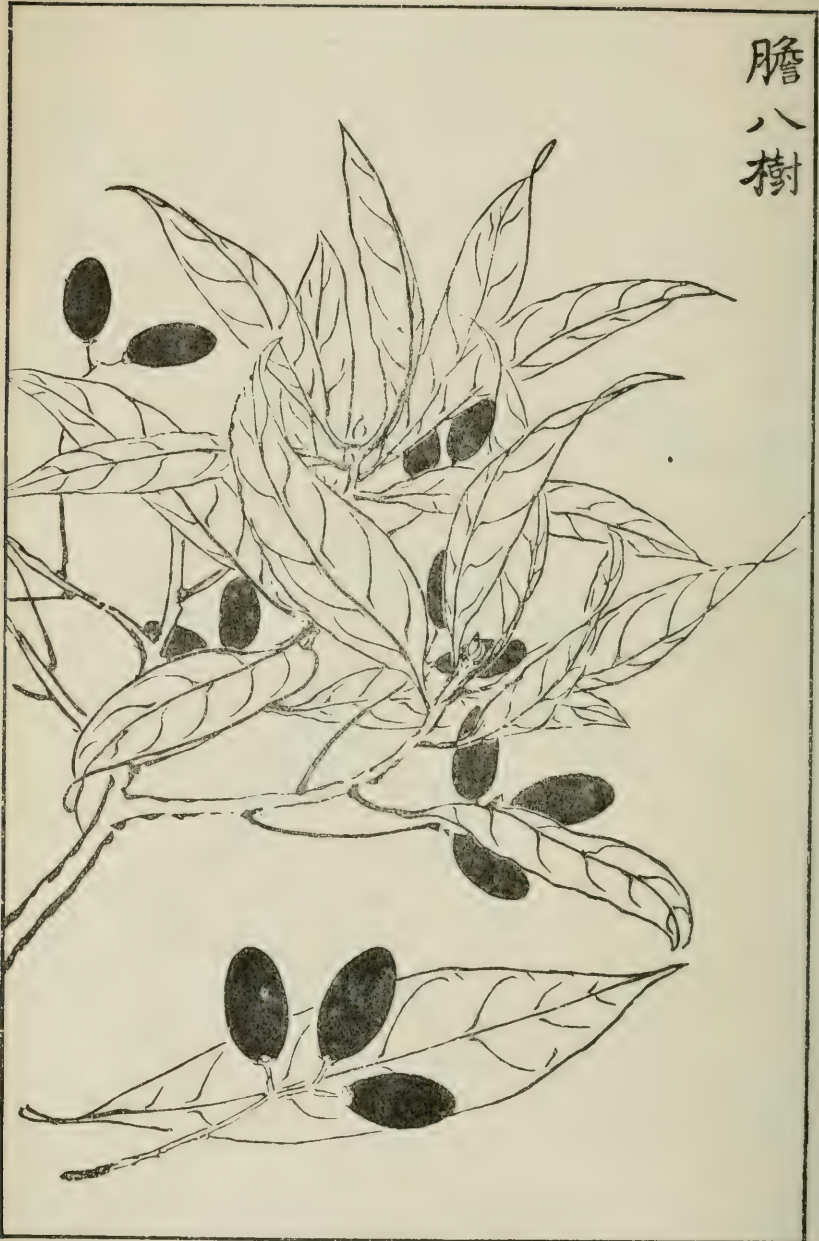
特生

一種特生

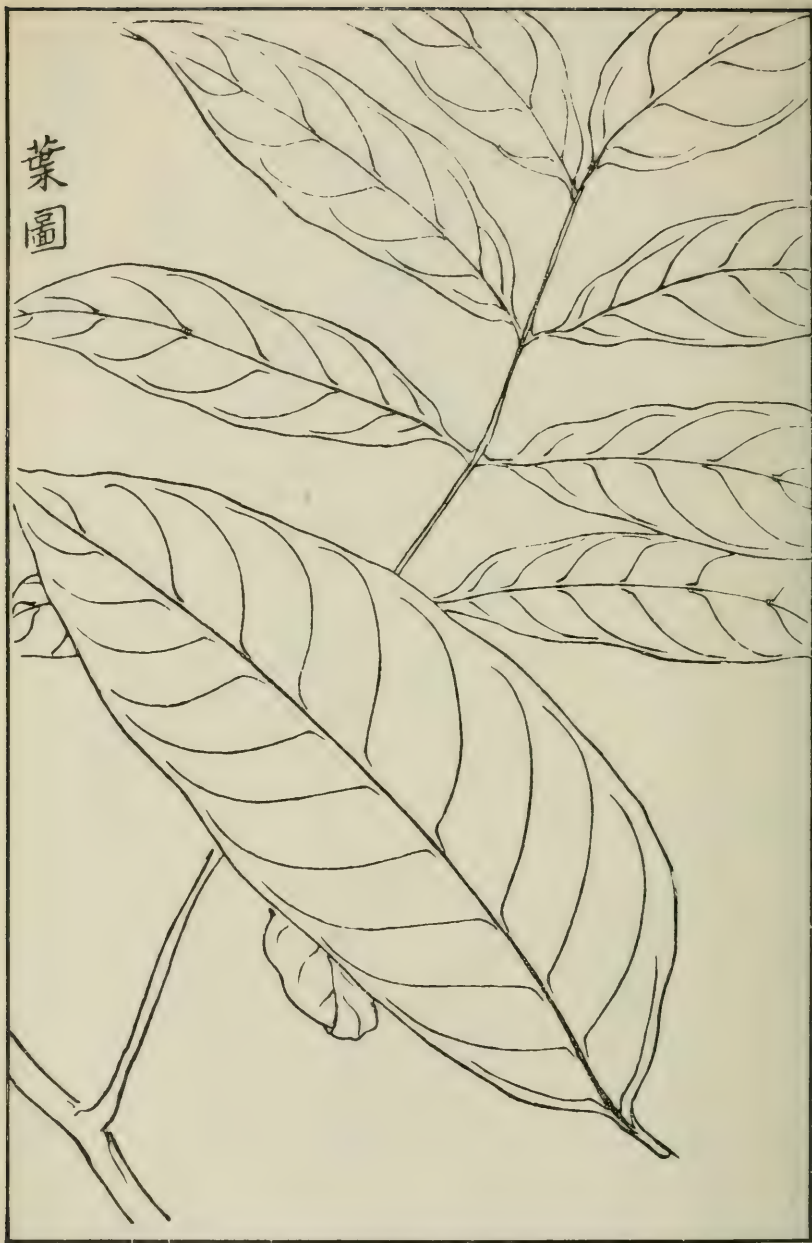
蔓生

山豆根

漢產楓樹

膽八樹

漢種橄欖　二圖

初生圖

葉圖

台州種烏藥

漢種蕤核樹

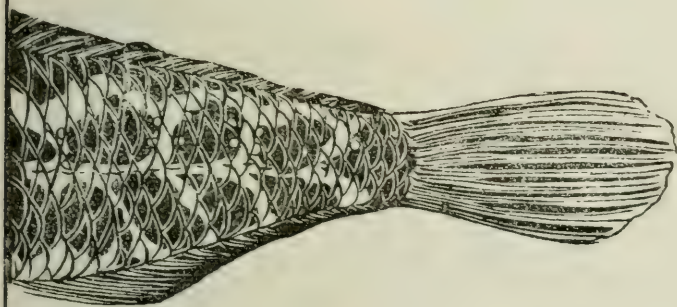
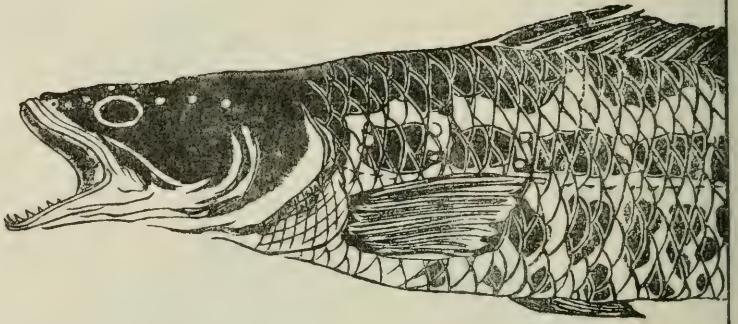
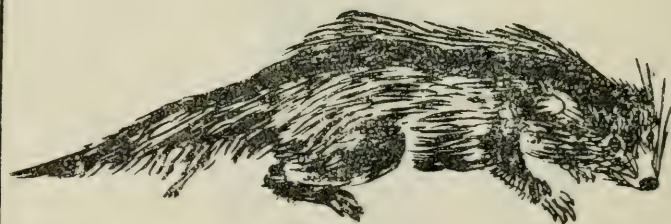
漢種檀香梅

蠻種木綿樹

蠻產木綿殼

漢産鱧魚　乾腊圖

蠻産蠆

鼷鼠

蠻産蠶龍
以藥水蓄硝子壜中圖

蠻產蛤蚧　同前

石芝

東都　楠本雪溪圖

物類品隲卷之五圖繪終

物類品隲巻之六附録

藍水田村先生鑑定

讃岐　鳩溪平賀國倫編輯
東都　田村善之
　　　中川鱗同校
信濃　青山茂恂

按ズルニ本邦往古ハ藥物ヲ正シ民ノ疾病ヲ救フ延喜式典藥寮ニ諸國ヨリ貢ズルトコロノ藥物ヲ記スルコト詳ナリ又令典藥寮ニ載ス藥園師二人正八位上掌ル知藥性色目種採藥園諸草及教藥園生藥園生六人掌學識諸藥使部二十人直丁二人藥戸乳戸等ノ職アリ中古以來其事廢ス故ニ本邦藥物ノ誤アルコト擧テ數ガタシ享保中台命アリテ藥ヲ諸國ニ採シム又漢土朝鮮及蠻國ニ徵テ種ヲ傳ルモノ數十種今尚官園ニ存ス然レドモイマダ普ク世ニ布カズ若是ヲ四方ニ植テ國國ニ產スルコトヲ得バ其益少カラズ就中人參砂糖ノ用アルコト多シトイヘドモ此種培養ノ法ヲ知ザレハ是ヲ植トモ生育シガタシ今予ガ植試ルトコロ衆人所植ノ法ヲ以テ摘其要記シテ便于世

人參培養ノ法

東壁曰高麗百濟新羅今皆屬於朝鮮矣其參猶來中國互市亦可收子於十月下種如種菜法ト此說ヲ以テ考レバ朝鮮製ノ人參モ自然生ノモノニハアラズ又東國輿地勝覽其地理風土記スコト甚詳ナリ各郡ノ產物亦記シテ其中ニアリ人參ヲ產スル所ノ土地寒暖等ヲ考ルニ深山廣野海邊ノ處處嚴寒酷暑ノ地皆產之風土モ亦大抵日本ニ異ナルコトナシ此種本邦四方ノ地共ニ植ベシ

擇土之法

人參ヲ植ルニハ土ノ色黑シテ細ナルヲ佳トス東都及日光ノゴトキハ黑土ナリ方俗是ヲクロボコト云黑土ナキ處ニテハ山土ヤブ土ノ類ヲ用ルモ可ナリ目ノ細ナル篩ニテ能能フルフベシ篩ハ通用ノ砂フルヒ目ノ大サ一分計ナルヲ用ウベシ

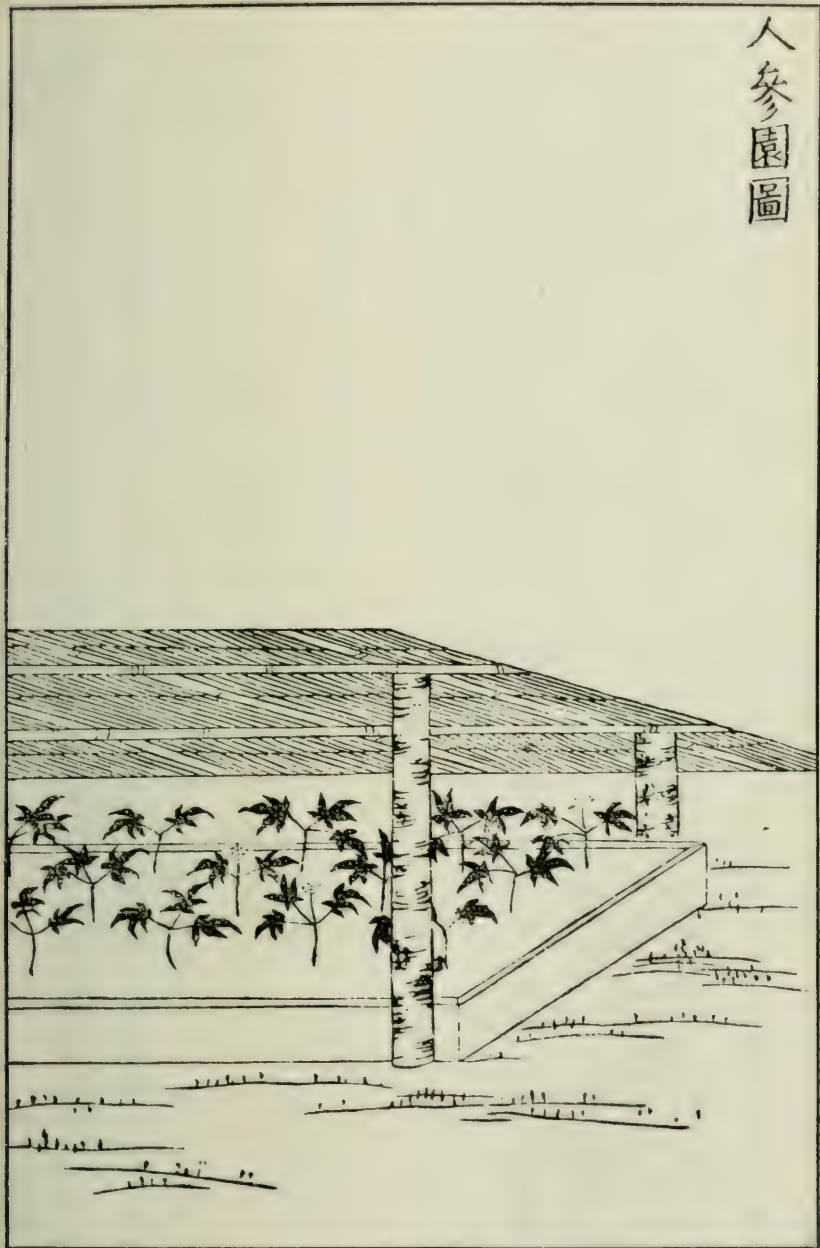
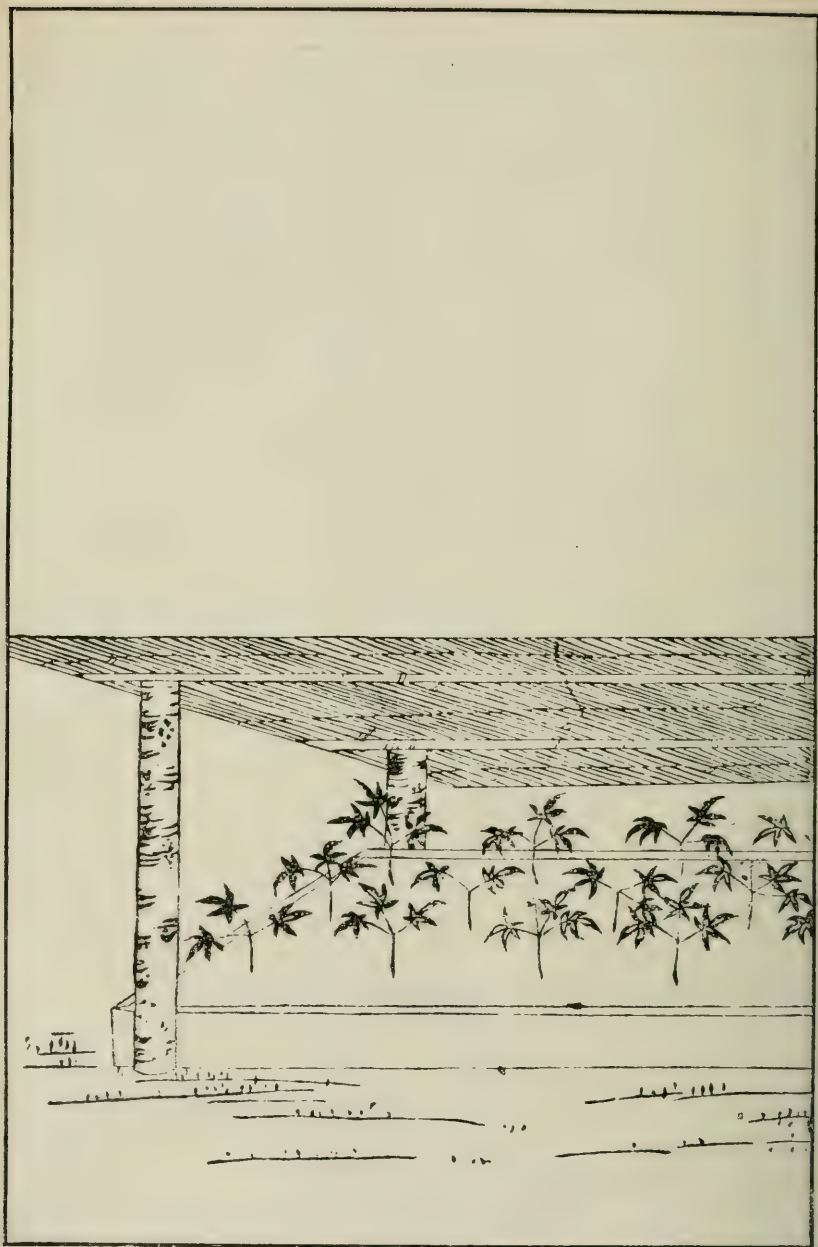
作畦之法

人參園ハ山中或ハ庭中ニテモウチ晴テ風ノ吹通ス處佳シ人參ハ陰地ニ生ズルモノナリトテ風日ノ當ザル極陰ノ處ニ植ルハ惡シ此物陰地ヲ好トイヘドモ陽氣ヲ得ザレバ長ジカタシ又甚濕ヲ畏ル水濕

ノ地ニ植レバ朽易シ園ヲ作ルニハ先掘地濶三尺深尺五六寸長サハ人參多少ニヨルベシ如此ニシテ四方ト底ニ竹簀ヲ入テ箱ノゴトクスルナリ是鼹鼠ノ入ザル爲ナリ又四方ニ板ヲ以テ縁ヲスベシ高サ二三寸其内ヘ初ノ細土ヲ入高クモリ上テ置テ雨ニアヘバ自然ニ土落付ナリ此土ニ水ヲカケ或ハ足ニテ踏付ルコト決シテアルベカラズ土能能落付タルヲ待テ平ニシ種ヲ下スベシ土ヲ平ニスルハ園ノ縁ヲ規矩ニシテ板ニテカキ落セバ土ト縁ト等ク成ナリ

下種之法

六月土用中ニ熟シタル實ヲ取水ニ浸スコト二三日肉爛ルヲ待テ洗去核ヲ取テ直ニ植ベシ若シ核乾ケバ來春生ジカタシ必ズ核ヲ乾スベカラズ或ハ六月ニ植テハ暑熱ノ爲ニ土乾テ實生ジガタキコト有ガ故ニ十月種ヲ下スノ法アリ其法ハ參實ヲ土ニ包土器ニイレ銅絲ヲ以テ纏ヒ陽地ニテ潤ノアル處ノ土ヲ掘ルコト尺計ニシテ土器ヲ埋置十月ニ至テ掘出セバ實コト〴〵ク芽ヲ生ズルヲ取出シテ植ベシ植ルニハ前後左右各五寸許隔ベシ多ク植ルモノハ三寸許ニモ植レドモ廣ニハシカズ土ヲ覆コト一寸許ナリ深ケレバ生ズルコト遲シ又人參土中ニ在テ年年深ク入モノユヱ初深ケレバ後愈深ク入テ惡シ然ドモ土ヲ覆コト淺ケレバ土乾テ核カタマルユヱ生シガタシ必其中ヲ得ベシ植テ後其上ヘ藁ヲ布ベシ是亦新キ藁ハ汁出テ惡シ古藁或ハ馬ノ踏タル藁等好シ土乾バ水ヲ灌クベシ○實ヲ植ルニハ其間或

人參園圖

ハ廣或ハ狹キハ惡シ是ヲ正ク植ル法ハ長三尺餘濶二三尺ノ板ニ五寸ニテモ三寸ニテモ植ント思フ程ニ間ヲ置キ一寸許ノ釘ヲ打ナラベ其板ヲ打反シテ土ヲ押ハ土ニ釘ノ跡ツクナリ其處ヘ實ヲ植レバ數千萬ヲ植ルトイヘドモ廣狹ノ違アルコトナシ

搭棚之法

參園ハ上ニ日覆アルベシ園ノ濶サ三尺柱ヲ其外ニ立ベシ柱高サ前三尺後ニ二尺桁ヲワタシ上ハ蘆簾ニテ覆ベシ蘆簾廣四尺餘ナリ廣サ三尺ノ園ノ上斜ニ覆テ前後各餘リアルベシ又苫藁等ニテ覆フ法アリトイヘドモ蘆簾ノ間ヨリ雨露風日ノ氣ヲ通ズルニハシカズ然ドモ蘆簾ニテハ大雨ニ逢ハ雫下テ土ヲ穿初生ノモノニハ害ヲナスコトアリ故ニ初一年ハ苫ヲ用ヰ二年ヨリ蘆簾ヲ用ヲ佳トス夏日ハ覆ノ外又別ニ南面ニ蘆簾ヲ掛テ日ヲ防べシ或高麗人參讃曰三椏五葉背陽向陰欲來求我椵樹相尋ト云説ニヨリテ日覆ヲ北面ニシテ南ヲヒキクシ又多ク木ヲ植ル等皆非ナリ上說ハ山中自然生ノモノナリ園ニ植ルハ日覆ヲナシ夏日ハ又別ニ簾ヲ掛テ日ヲ防グ故ニ陰ヲ取コト心ノ儘ナリ木ヲ多ク植レバ風ヲ通ゼズシテ惡シ人參絶テ日ヲ見ザレバ莖弱シテ折レ易シ日覆ハ南面ニシテ春秋ハ陽氣ヲ受ケ夏日ハ簾ヲ掛テ烈日ヲ防べシ冬ニ至レバ藁木ノ葉ヲ以テ土ヲ覆テ凝ザラシムル春芽ヲ生ゼザル内藁木ノ葉ヲ取去べシ

掘根之法

當年參實ヲ植テ來春二月末三月初ニ至テ葉ヲ出ス初生ズルニ一莖三葉二年ニシテ一莖五葉三年ニシテ兩椏各五葉四年ニシテ三椏五葉五年ニシテ四椏ニ至ル或ハ初生一莖五葉二年ニシテ兩椏ヲ生ジ一ハ五葉一ハ三葉三年ニシテ三椏五葉四年ニシテ四椏ニ至ルモノアリ三椏四椏ニ至テヨリ中心莖ヲ抽テ實ヲ結ブ然ドモ三椏ニシテ實ヲ結フハ希ナリ又ハ實ヲ植テ一二年不生三四五年ヲ經テ生ズルモノアリ不生トテ掘捨ルコトナカレ生ジテ三年ヨリ五年ノモノ八九月ノ間掘出シテ製スベシ製法傳アリ又掘出シテモ細クシテ製スルニ堪ザルモノハ再植テ一二年ヲ待テ掘取ベシ或ハ多岐横根曲節等有テ製シガタキモノハ別ニ植置テ種ヲ取ベシ植之其間各尺餘ナルベシ

移植之法

人參移植ニハ根ヲ水ニ浸シ刷毛ニテ能能洗舊土ヲ去テ植ベシ然ザレバ舊土ノ着タル所ヨリ銹出ルコトアリ又園中濕イリテ根朽ントスルモノハ掘出シ腐肉ヲ洗去テ日ニ晒スコト一日ニシテ植ベシ新ニ細根ヲ生ズルモノナリ移植ル時手ノ溫氣ニフル丶コトヲ忌ム手ヲ水ニ浸シ或ハ土中ニ入テ能冷シテ後植ベシ

採實之法

人參結實初四五粒或ハ七八粒八九年以上ノモノ百粒ニ及ブ實ノ形扁ニシテ内ニ兩核アリ又一核ノモノアリ實初青ク熟スレバ鮮紅ナリ凡六月土用ニ入テヨリ十日ヲ以テ實ヲ取ノ候トス然ドモ土地ノ寒暖ニヨリテ又遲速アルベシ大抵實ハ能熟シテ後取ベシ然ドモ甚熟シ過レバ肉ノ潤去テ核乾ユヱ植テ生ジカタシ東璧可收子於十月ト云ハ誤ナリ

用糞之法

初メ園ヲ作ル時土ニ干鰮ノ汁ヲ灌キ或ハ荏葉ヲ取莖葉共ニ切交テ能フルヒ日ヲ經テ後實ヲ植レバ生ズル時勢ヨク末末マデ長ジ易シ又長シテ後干鰮人糞等ヲ以テ養バ能長ズルナリ然ドモ糞ヲ用タルモノハ製シテ後虚鬆ニシテ氣味薄シ按ズルニ蘇頌曰人參初生小者三四寸許一椏五葉四五年後生兩椏五葉未有花莖至十年後生三椏年深者生四椏各五葉中心生一莖ト今本邦所植比之長ズルコト最早シ且東都ハ土甚肥タリ然ルヲ糞ヲ用ウル故ニ生根肥大ナリトイヘドモ製後虚鬆ナリ若シ瘠土ニ植テ糞ヲ不用漸長ズルヲ待テ是ヲ製セバ甚上品ナルベシ必糞ヲ用ウベカラズ然ドモ實ヲ取ント欲スルモノハ糞ヲ用ウベシ糞ハ寒中ニ用ルモノ佳ト云ハ非ナリ寒中ハ芽既ニ土中ニ發ス糞ヲ用レ

バ嫩芽ニ害アリ四五月葉長ジタル時用ウベシ作園年ヲ經テ土痩タルハ別ノ土ニ糞ヲカケテ晒置園ノ土ヲ掘出シ新土ヲ入ベシ其餘微細ノコトハ一一記シガタシ大抵此法ヲ以テ植試ハ自其詳ナルコトヲ得ベシ

或曰朝鮮人參朝鮮ノ地ニ産スル時ハ上品タリトイヘドモ是ヲ本邦ニ植ル時ハ又和參ト等ク下品タリ江南橘種江北爲枳カゴトシ尾張宮重萊菔伊勢日野菘ノコトキハ共ニ名産ナリ是ヲ東都ニ植ルニ初年ハ稍異ナルコトナシ年ヲ經レバ形色俱ニ變ズ且美濃粳米信濃蕎麥ノ類上品タレドモ其種ヲ他國ニ植レバ又尋常ノ品ナリ固ヨリ風土ノ然ラシムル所ニシテ強テ種ニヨラサルナリ是本邦所植ノ朝鮮種人參和參ト等シテ益ナキニ非ヤ予答曰是亦一槩ノ論ナリ夫土産ノ異ナルヤ土地寒暖肥瘠ニヨリテ此ニ産シテ彼ニ不産彼ニ在テ此ニ無モノ一國一郡ノ内ト云ドモ猶不同又是ヲ以他處ニ植ルニ悉ク變ズルニ非ズ唯變ズルト不變トアリ南方草木狀曰蕪菁嶺嶠已南俱無之偶有士人因官携就彼種之出地則變爲芥亦橘種江北爲枳之義也至曲江方有菘彼人謂之秦菘ト是日野菘ノ東都ニ植テ變ズルト一意ナリ又曰耶悉茗末利花皆胡人自西國移植于南海南人憐其芳香競植之陸賈南越行記曰南越之境五穀無味百花不香此二花特芳香者緣自胡國移至不隨水土而變與夫橘北爲枳異矣ト是他處ニ移植テ不變モノナリ變スルモノハ少ク不變モノハ多シ胡麻出大宛秈出占城國蜀黍蜀葵出蜀豌豆蠶豆出胡戎海松海棠出新羅其餘

蠻國ヨリ漢土ニ種ヲ傳ルモノ多シトイヘドモ變ジテ用ニ中ズト云コトヲ聞ズ且今本邦所産ノ物其始外國ヨリ來ルモノ多シ草綿煙草茶菊橘柑西瓜南瓜番椒甘藷ノ類枚擧スベカラズ皆本邦南北ノ地ニ植トイヘドモ變シテ他物トナルコトナシ世俗平常是ヲ食トイヘドモ甘口充腹コトヲ知テ其始如何ト云コトヲ思ハズ偶人參ニ至テ此疑ヲ生ズ故曰朝鮮參本邦ニ植レバ和參ト等ク下品ナリト其言甚謬ナリ和參亦直根ノモノ形略朝鮮人參ニ似タリトイヘドモ氣味功用朝鮮參ニ比スレバ尤下品ニシテ其種自別ナリ譬バ稲ニ糯秈アリ芋ニ紫芋野芋アルガ如シ美濃粳米信濃蕎麥尾張菜菔ノ他處ノ物ト種同シテ風土ニヨリテ味微ク異ナルノ類ニアラズ凡草木風土ニ合ザレバ是ヲ植ルトイヘドモ不繁茂甚キ物ハ忽枯ル今朝鮮種人參處處ニ植テ繁茂ス是本邦ノ風土ニ合コト明ナリ只其微ヲ論ズレバ朝鮮國ノ内トイヘドモ新羅高麗百濟ノ處處所出ノ人參各美惡ノ異ナキニアラズ又本邦諸國植之トモ四方ノ風土ニヨリテ氣味功用自優劣アルベシ優劣アリトモ只朝鮮參中ノ優劣ニシテ和參ノ企及ベキニアラズ

甘蔗培養幷製造法

甘蔗數種アリ王灼糖霜譜云蔗有四色曰杜蔗即竹蔗也緑嫩薄皮味極醇厚專用作霜曰西蔗作霜色淺曰艻蔗亦名蠟蔗即荻蔗也亦可作沙糖曰紅蔗亦名紫蔗即崑崙蔗也止可生噉不堪作

餳事物紺珠曰紅蔗止可生啖紫蔗可作磋糖青蔗可作糖霜竹蔗長丈餘圍數寸色白可作糖霜蠟蔗色白作糖霜荻蔗小而燥節疎而白色芳蔗又諸蔗杜蔗夾苗蔗青灰蔗皆可作糖交趾蔗長一丈圍數寸崑崙蔗色赤可作糖扶風蔗一丈三節見日則消見風則折扶南蔗如扶風蔗子母蔗牙蔗檳榔蔗味次ト按ズルニ蔗類多シトイヘドモ是ヲ約スルニ果蔗糖蔗ノ二種ナリ果蔗ハ其莖生ニテ噉フ取汁適口世說顧長康每食蔗自尾至本ト云モノ是ナリ此種ハ砂糖ニハナラス只莖ヲ果トナシテ食ノミ其種未傳本邦或云薩摩ニ在ト未目擊糖蔗ハ其莖堅シテ生ニテ噉ハ唇舌ヲ傷ル是ヲ製シテ糖ヲ造ルベシ煎汁未結砂モノヲ蔗糖ト云又蔗餳ト云嵇含南方草木狀云吳孫亮使黃門以銀椀併盞就中藏吏取交州所獻甘蔗餳ト漢土ニモ往古ハ砂糖ヲ製スルコトヲ知ズ故ニ蔗餳ヲ以テ貴人ノ食ニ供スト見エタリ唐ニ至テ西域ヨリ法ヲ傳テ砂糖ヲ製ス其品亦數種アリ黑糖一名紫砂糖一名紅砂糖一名赤砂糖和名クロザタウ此物蔗ノ老嫩ト製法ノ精粗ニヨリテ色或ハ黑或ハ帶紫帶紅モノアリ今薩摩ヨリ來ルモノハ紫黑色福州ヨリ來ルモノハ紅紫色ナリ共ニ皆黑糖ナリ再製シテ色白モノヲ白砂糖ト云一名白糖和俗亦シロサタウト云白糖ニ三等アリ上ヲ清糖ト云又潔白糖又洋糖ト云和俗大白砂糖ト云モノ是ナリ中ヲ官糖ト云和俗是ヲ中白ト云下ヲ奮虎ト云和俗シミト稱スルモノ是ナリ三製シテ凝テ石ノゴトヲ石蜜ト云又凝水又氷糖ト云和俗是ヲ氷砂糖ト云按ズルニ綱目沙糖ヲ指テ直ニ紫砂糖トシ石蜜白沙糖ヲ混シテ一トス是亦有味沙糖ハ蔗汁結砂ノ名

ナレバ黒白トモニ通稱スベキナリ然ヲ蘓恭曰沙餹出蜀地笮ニ甘蔗汁煎成紫色東壁又沙糖此黒沙糖也ト云モノハ砂糖其初出モノ黒糖ニシテ白糖ハ後世ニ至テ製出ス故ニ本草家砂糖ト指モノハ黒糖ナリ譬バ稲ハ糯粳ノ總稱ナレドモ本草家稲ト指モノハ糯ナリ是ト例ヲ同ス又石蜜ト白砂糖ヲ混ズルモノハ其形異ナリトイヘドモ其功同ヲ以テナリ沙參ノ條下等乳ヲ出ス例ノゴトシ夫砂糖ハ人家有用ノ品ニシテ昔和産ナシ故ニ漢土及蠻國ヨリ多ク渡ル享保中臺命アリテ琉球ヨリ種ヲ傳フ是即糖蔗ナリ莖葉蜀黍ノゴトクニシテ花實ナシ植之砂糖ヲ製スベシ筑前ノ士宮崎安貞翁ハ元祿中ノ人ナリ農業全書十巻ヲ著ス其書甚國用ニ益アリ勤タリト云ベシ甘蔗ノコトヲ記シテ云此物暖國ニ育モノナリ近年薩摩ニハ琉球ヨリ傳テ種ルトカヤ是ヲ諸國ニ廣ク作ル事ハ國郡ノ主ニアラズンバ、速ニ行レガタカルベシ庶人ノ力ニハ及ガタカラン是常ニ人家ニ用ル物ナル故本邦ノ貴賤財ヲ費スコト尤甚シ是ヲ植ルコト能其法ヲ傳テ作リタラハ海邊暖國ニハ必生長スベシ若其術ヲ盡シテ世上ニ多ク作バ猥ニ和國ノ財ヲ外國ヘ費シ取レザル一ノ助タルベシ然ハ力ヲ用テ是ヲ世ニ弘メタラン人ハ誠ニ永ク我國ノ富ヲ致ス人ナランカシ是ヲ種ル法ハ農政全書等ニ詳ナリ其種サヘ此國ニナキモノナレバ略之ト宮崎翁利人濟物ノ厚志ナルコト如此然ドモ其種ナキ時ハ又手ヲ措トコロナシ今幸ニ本邦此種ヲ傳フ是ヲ世ニ廣メンコトヲ思テ猥ニ記之

擇地之法

甘蔗漢土ニテモ江浙閩廣湖南蜀川等ノ地ニ出ヅ就中閩廣ノ間尤繁シ他方合併シテ其十ガ一ヲ得ト云ヘリ此物本南地ニ出ヅ故ニ寒ヲ畏ル寒國ニハ植トイヘドモ糖出ルコト少シ北地ニハ植ベカラズ近世尾張知多郡長門細江ノ邊多植テ製シ出ス其他植ルコト未多按ズルニ和泉紀伊伊勢志摩伊豆駿河四國九州ノ諸國是ヲ植ベシ此物夾砂土ヲ好ム黄泥等ノ地ニハ植ベカラズ海ニ近キ河濱州土ニ植ルヲ第一トス土ヲ試ルニハ坑ヲ掘コト尺餘沙土ヲ口ニ入テ味苦キモノハ植ベカラズ又土ノ味甘クトモ深山上流河濱等ニハ植ベカラズ蔗質日ヲ不懼處處海島水利悪シテ水田トナシガタク或ハ生田又川水溢テ沙土ノ入タル地他物ノ植ガタキ處モ是ヲ植テ長ジ易シ

貯莖之法

甘蔗實ナシ莖ヲ切テ植レバ節ノ傍芽ヲ生ズ呂惠卿所謂草皆正生嫡出惟蔗側種根上庶出故字從庶也ト云モノ是ナリ莖ヲ貯ルハ冬ノ初霜將至トキ莖ヲ伐根ト杪ヲ去水濕ナキ處ノ地ヲ掘コト深サ二三尺莖ヲ土中ニ埋メ水濕ノ入ザルヤウニシテ貯置ナリ大抵芋種ヲ貯ルニ似タリ根ヲ貯ルモ其法同シ

植莖之法

莖ヲ出シ植ルコト天工開物ニハ雨水ノ前五六日天色清明卽チ開出スト雨水ハ正月ノ中ナリ處ニヨリテ餘寒強キ地ニテハ早ク植レバ莖朽ルナリ是ハ土地ノ寒暖ニヨリテ遲速アルベシ莖ヲ掘リ出シ鬚ヲ去リ二節ヅヽニ伐リ暖ナル地ヲ擇テ是ヲ植ユ植ル法ハ莖ノ本ト末ト少ヅヽ重合テ魚鱗ノゴトク繫ク植ベシ莖二節アルユヱ芽ノ出ル處兩方ニアリ是レヲ植テ一ノ芽上ニ向ヘバ一ノ芽下ニ向ユヱ惡シ兩芽トモ横ニ向ヘハ各芽ヲ出スナリ掩フ土薄クスベシ芽長ズルコト一二寸ニシテ淸糞水ヲ澆ギ六七寸ニ至テ分チ栽ベシ

分栽ル之法

前ノ如ク一タビ植テ芽六七寸モ出タル時別地ニ畦ヲ作リテ移シ植ベシ畦ヲ作ルコト濶サ三尺畦ノ中犂ミツ溝ヲ掘ルコト深サ四五寸蔗ヲ溝內ニ栽ソノ間各一尺七八寸掩フ土寸コト許土厚ケレバ芽ヲ出スコト少シ芽二四箇ヨリ六七箇出ル時漸漸ニ土ヲ下シ時時犂耕スキタカヘシテ土ヲ加フベシ土ヲ加ルコト漸厚ケレバ根深シ根深ケレバ莖長シテ倒ルヽノ憂ナシ長一二尺ニ至レバ芸薹アブラカス枯ヲ水ニ浸シテ灌クベシ月ニ二三度モ犂耕シテ草ヲ去リ根ニ培フベシ六月以後傍ヨリ生タル莖ハ悉ク切リ去ベシ

伐ル莖ヲ之法

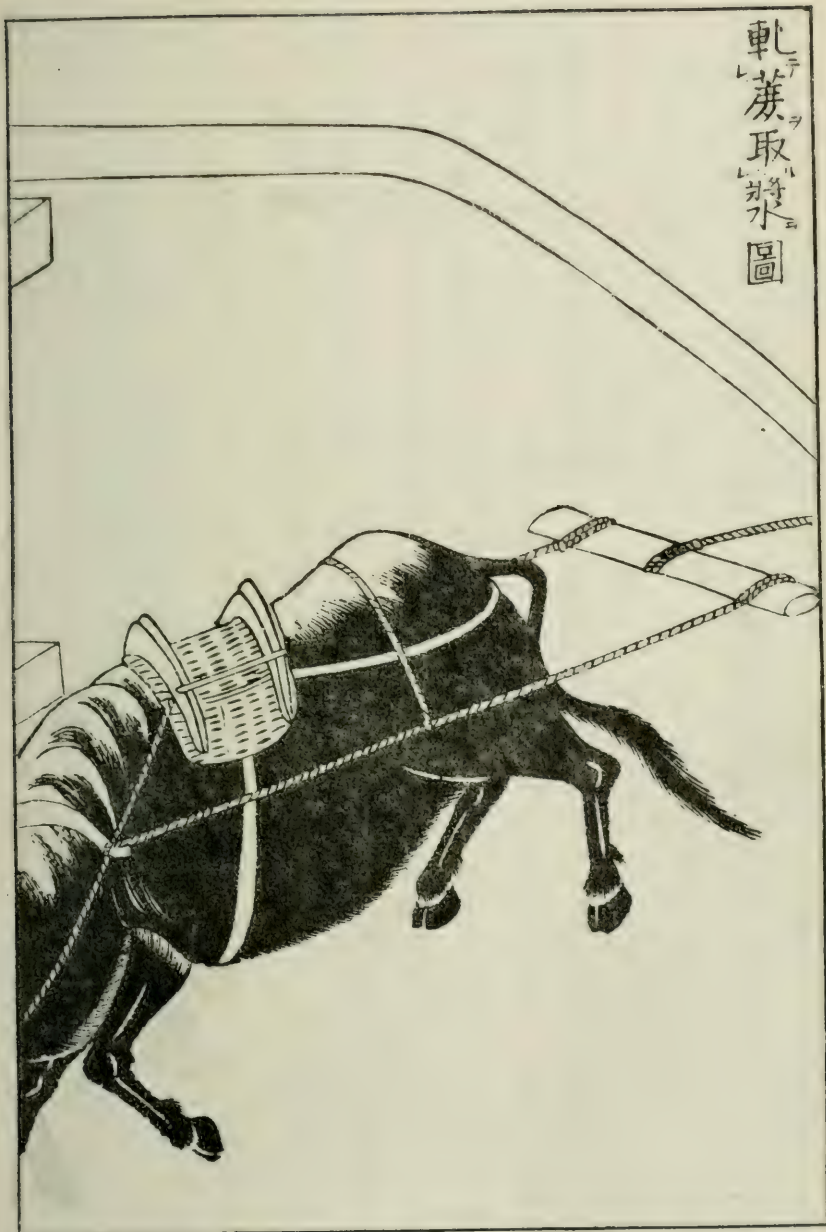
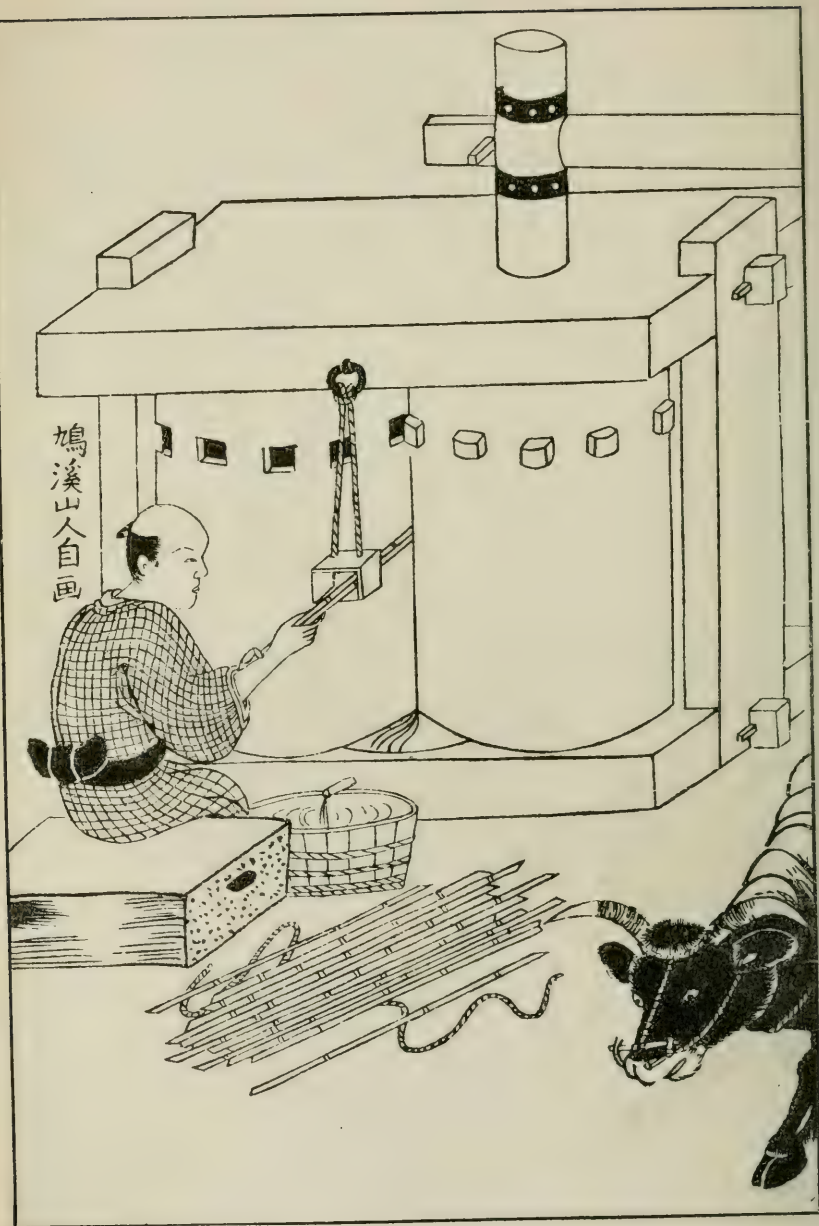
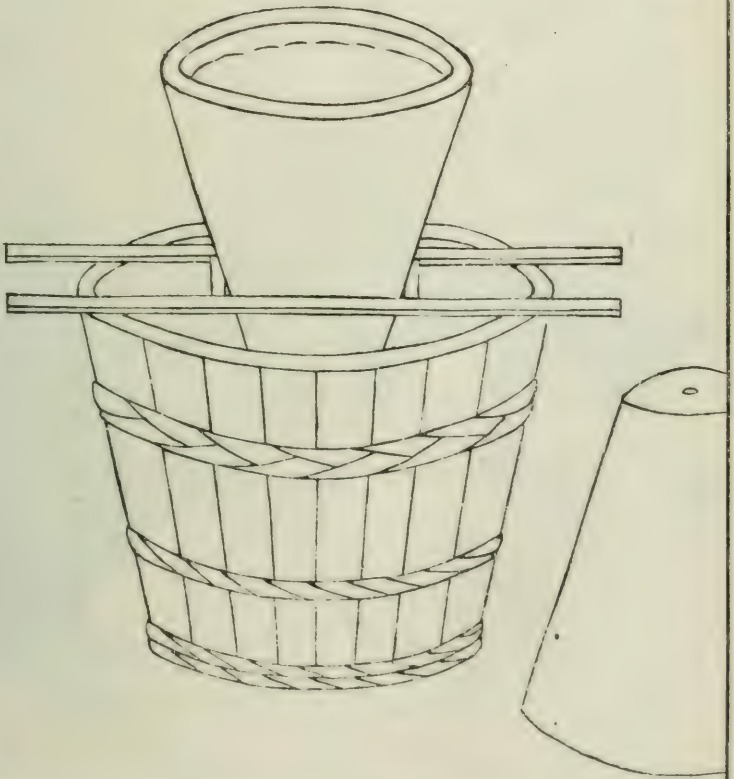
漢土ニテ五嶺以南甚暖ニテ冬霜ナキノ地ハ蓄蔗不伐年ヲ經テ製シタルモノ糖甚好ト云リ本邦ニテハ霜ナキノ地ナシ蔗霜ニ遇ハ卽枯ル久ヲ經ルコト能ハズ氣候ヲ考ヘ霜降ント思バ是ヲ伐ベシ然ドモ若伐コト早ケレバ其漿未滿故ニ糖少シ時候ヲ考ルコト尤心ヲ用ウベシ

製車之法

造糖ニハ先車釜ヲ備フベシ釜ハ平常ノ釜或ハ鍋ヲ用ウベシ車ノ製ハ其法一ナラズ天工開物曰凡造糖車製用橫板二片長五尺厚五寸濶二尺兩頭鑿眼安柱上筍出少許下筍出板二三尺埋築土內使安穩不搖上板中鑿二眼並列巨軸兩根（木用至堅重者）軸木大七尺圍方妙兩軸一長三尺一長四尺五寸其長者出筍安犂擔用屈木長一丈五尺以便駕牛團轉走軸上鑿齒分配雌雄其合縫處須直而圓圓而縫合夾蔗于中一軋而過與綿花赶車同義ト大抵此法ニ據テ製スベシ或ハ軸三ヲ用テ兩處ニテ軋モアリ人人ノ好ニ隨テ製スベシ只兩軸軋蔗ノ處ヲ要トス其餘ハ簡易ニ隨フベシ

造糖之法

王灼餹霜譜云古者惟飲蔗漿其後煎爲蔗餳又曝爲石蜜唐初以蔗爲酒而餹霜則自大曆間有鄒和尚者來蜀之遂寧繖山始傳造法ト本邦ニテハ近世尾張知多郡地中村原田某其法傳テ是

軋蕨取漿圖

鳩溪山人自画

澄結糖霜尾器圖

ヲ製ス凡製糖ニハ莖ヲ取籜ヲ去二三本ヅヽヲ以テ車ノ縫合中ニ夾テ是ヲ軋バ漿出ルナリ再滓ヲ取テ又是ヲ軋ル一度軋テハ莖軟痿ナルガ故ニ鴨嘴トテ莖ヲウケルモノアリ其上ニノセ置テ是ヲ軋リ又滓ヲ取テ三タビ軋之莖愈軟痿ナルガ故ニ繩ニナフテ軋ベシ三タビ軋テ汁盡其滓ヲ薪トスベシ汁ハ車ノ下板ヨリ桶ノ中ヘ流入ル布ニテ漉テ塵ヲ去釜ニ入テ武火ヲ以テ煎ツメルナリ汁ヲシボリテ時ヲ經タルハ味不佳速ニ煎スベシ煎ズル内ハ竹ヲ以テ手ヲ休ズカキマハスベシ若火力弱ケレバ頑糖トナリテ用ニ中ラズ武火ヲ用ウベシ漸煎ジテ蛤粉ヲ入ル天工開物ニハ汁一石ニ石灰五合ヲ入ベシト云ヘリ尾張ニテハ牡蛎粉ヲ入或蚶殼灰ヲ用ルモノアリ蛤蚌粉皆用ウベシ釜ハ三ヲ一處ニ置テ品字ノコトクシ初稀汁ヲ入テ煎ジ稠汁トナレバ聚テ一鍋ニ入又稀汁ヲ兩鍋ノ内ニ入稠汁トナレバ又一鍋ニ入如此スレバ甚便ナリ小許製スルニハ一鍋ニテモ可ナリ汁ヲ煎シ手ヲ以テ捻リ試ルニ手粘スレバ糖成タルナリ此時黃黑色桶ニ入置バ黑糖トナルナリ暖地ニテ春植コト早ク秋製スルコト遲ケレバ莖實シテ糖多結砂粗シテ味佳ナリ寒地ニテ遲ク植早ク伐タルハ糖少結砂微細味淡シ且杪ニ至テ用ニ當ラズ故ニ寒地ニ植タル蔗ハ莖ノ末半切去莖ノ本實シタル處ノミ製スル故其利少シ

造白糖法

漢土ニテモ往古白糖ヲ造コトヲ知ズ元ニ至テ始テ是ヲ製ス閩書南產志曰初人莫知有覆土法元

時南安有黄長者爲宅煮糖宅垣忽壊壓於漏端色白異常遂獲厚貲後遂效之ト凡ソ造白糖ニハ先瓦溜ヲ燒造シムベシ是スヤキノ赤瓶ノ類ナリ其形上寛下尖レリ大抵徑リ尺許ナルベシ一小孔アリ是ヲ桶ノ上ニ置藁ヲ以テ孔ヲ塞住其内ヘ黒糖ヲ入結シ定ルヲ待テ孔中ノ塞タル藁ヲ去リ黄滑泥ヲ以テ其上ニ置ハ黒汁孔ヨリ流出經日溜内悉ク白霜ト成上面二三寸許ハ其色甚白シ下ナルモノ稍黄褐色ナリ

造氷糖法

氷糖ヲ造ル法ハ清糖ヲ以テ煎化シ鷄卵ヲ劈テ攪之渣滓ヲ上リ浮シメ火色ヲ候視テ新青竹ヲ以テ斬コト寸許篾ノ大サニ破テ其中ニ入一霄ヲ過レバ卽チ氷糖ト成ナリ

右人參培養ハ予手自植之數年略其意ヲ得ルニ似タリ甘蔗ノゴトキハ是ヲ製スルコト不多故ニ雖未得其精詳諸書ニ記スル所ト予ガ微ク試ル所トヲ以テ記之甘蔗可植ノ地此法ヲ以テ植試コト數年ニ至ハ自其法ノ詳ナルコトヲ得ベシ是不如老圃老農謂也

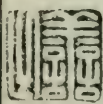
物類品隲卷之六附錄終

朝鮮種人參試效說

朝鮮種人參之行于世也既久矣葢其氣味功用無與朝鮮來者異也然世猶或以橘枳易地則變爲惑焉先是庚辰之春柳原火我宅亦罹於其災後三日平賀士彛來訪曰來時見鄰街積石間有童子年十二三所如餓且病之狀乃携簞食俱往問其病不應切之脉脉不至四肢既厥冷士彛乃探懐中出朝鮮種人參吹咀竄入其口須臾腹中雷鳴四肢搐搦急

煎參一根鑵口臨口傾注其咽中於是脉出始爲呻吟之聲因問其居與其姓名曰小網街長助者之男也火之及小網街也倉皇而走不食三日矣未知親之存否乃與食與衣再進獨參湯一椀余與士彝前後抱持以助陽氣半時而方能行乃屬之市保以送歸其所也夫如是則此參起死回生之力與朝鮮來者何異焉令紀此事以解或之惑云

寶曆癸未正陽月東都田村善之識

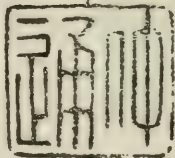
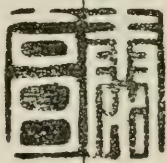
跋

士之為學將以大其具而効於當世也何必從事於名物庶類之末竊竊乎較得失於其間耶然醫之於本草未嘗不與方書相待為用也譬之猶庖人為

調和先得其味而後劑多少之量乃適于人口也其亦不可不講究多識以待用也豈可謂諸末葉置不論哉若或考索之未盡於間擇之未至草石無以拯冷熱乖違焉

其於得効也不亦遠乎故唯精
覈詳審始可與言本草已
矣陶隱居曰注易誤不至殺
人注本草誤則有不得其死
者云本草不可不精覈詳悉
也須友人平賀士翼編物類

品隲其品物非論罪至當者則不收焉可謂精覈詳慎矣顧其益乎習者豈小小乎哉士某為人才氣豪邁逸行頗類乎俠其志蓋將以有為者然則此編又未足以悉士某也

其品物所由集與此書所以編則凡例及田村氏序有焉茲不復具論

寶曆癸未之夏讚岐久保泰亨書於東都昌平學舍

寶暦十三年癸未秋七月吉辰

松籟館藏版

鳩溪平賀先生嗣出書

神農本經圖註　日本介譜

淨貞五百介圖　日本魚譜

物類品隲後編　四季名物正字考

書肆

江戸本石町通三丁目　植村慶三郎

江戸室町三丁目　須原屋市兵衛同梓

大坂心齋橋筋順慶町　柏原屋淸右衛門

會菜譜

會藥譜卷之一

藍水田村先生鑒定

讃岐　平賀國倫　編
東都　田村元長
　　　古河章輔　同校
　　　中川純亭

藥品目録

耳草 甲州産　黄芪 豊後産　人参 朝鮮産　羊乳
萎蕤　知母 漢産　白朮 漢産　溪羊藿 大葉 白花
玄参 紫花　地楡　紫草 南部産　白頭翁
白及　黄連 芹葉　秦艽 朝鮮産　紫胡 韮葉

参
参

前胡　防風 朝鮮産　山慈姑　細辛 加賀
杜衡 小葉　徐長卿　白前 漢産　〇當帰 大和産
藁本　白芷 漢産　芍藥　高良姜
補骨脂 漢産　欝金 同上　蓬莪茂 同上　香附子
茉莉 琉球産　藿香 信州産　荊芥　薄荷
莽草　白蒿　牡蒿　夏枯草
青葙　天〻焦　麻黄　地黄 美作産
牛膝　麥門冬 漢産　黄蜀葵　馬蹄决明 漢産
狼把草　虎杖　蕁麻　馬兜鈴
百部 漢産 蔓生　何首烏 同上　土茯苓 琉球産 菝葜葉　白斂 漢産

威靈仙　茜草　木通
白英　萆薢　澤瀉　萹草
羊蹄　香蒲　蘋　蓍
景天　酢漿草 琉球産 大葉　茴香　茴羅勒
苦菜　翻白草　土芋　李
肉桂 漢産　烏藥 衡州　蘗木 朝鮮産　椿
合歡　楡　牡荊 朝鮮産　蠟梅
〇金　銀　赤銅　鉛
鐵　丹砂　雄黄　雌黄
慈石　太一禹餘粮　曽青　石硫黄

礬石　鸀鳿羽　孔雀尾　椰子樹
以上百種　田村元雄具
黄連 大葉　藜蘆　呉茱萸 漢産
以上三種　官醫　藤本立泉具
鴨跖草　龍葵　天門冬
以上三種　官醫　岡田養仙具
黄芪 富士産　三稜　紫荊
以上三種　官醫　岡了伯具
沙参 細葉　桔梗 白花　蘭草　海根
以上四種　官醫　宮村永隆具

紫胡竹葉　馬蘭　、木□麦門冬　琉球産　、瞿麥
曼陀羅花
以上五種　後藤梨春具

石防風　羌活　白□　、薏苡仁
以上三種　福山舜調具

淡竹葉　、金星石葦　、ミルウメ
以上三種　松田長元具

牛膝　柳葉　女菀　馬鞭草　、女青
石葛　細葉　蔓荊子
以上六種　□口玄周具

馬先蒿　大戟　鳳尾竹
以上三種　古河章輔具

遠志　小葉　蘿藦　海金砂
以上三種　中川紙亭具

澤蓬蘽　蘡薁　栗
以上三種　□江元長具

酸棗　漢産　、蜀椒
以上十種　影山耳齋樹母具

香薷　荳蔚　、萱草
鳳仙花　紫藤　鼠麹草
以上六種　熊井宗寺具

蓼藍　穀精草
以上二種　小貫玄昌具

劉寄奴　落葵
以上二種　松坂屋六兵衛具

燈籠草　石葦　、仮天蓼艸　、休天麥
以上四種　藝花屋宇平次具

松　白楊　女貞木　、狗骨
以上四種　藝花家五郎吉具

蒼木　漢産　地榆　白花　黄連　菊葉　及已
由跋　白部　漢産　白屈菜
以上七種　藝花家義右衛門具

三七　蘘荷
以上二種　海老屋□藏具

玉簪　白花　鉤吻　特生
以上二種　蓋屋傳兵衛具

右品類凡百八十種 寳暦七丁丑年十月會

會主　藍水田村元雄

黄精 漢産　升麻　黄芩 朝鮮産　升麻 鬼臉

獨活 漢産　苦参　百兩金　蛇床子

馬蘭 蘄艾 渡産

澤蘭　積雪草。　[illegible]　[illegible]

旋覆花　紅藍花　續断　飛廉 紅花

江南大青 漢産　胡盧巴 同上　菜耳　豨薟

紫菀　蜀葵　地膚　王不留行

葶藶　鱧腸草　香薷 播州産　地楊梅

鬼針草

半邊蓮　紫花地丁。　大黄 漢産　商陸

蘭茹 漢産　澤漆　甘遂　莨菪

鳶

萆麻　竹子 漢産　射干　鳶尾

菟絲子　五味子 朝鮮産　月季花　葎草

虎耳草

忍冬　酸漿　白蒿　蓴。

石胡荽　螺厴草　地錦　卷柏

地柏　玉柏　韮　龍爪葱 朝鮮産

蓉菊心　薤　蒜　茉菔 漢産

斳

胡荽　水斳　蒔蘿　薺

蓂

菥蓂　蘩縷　鷄腸　苜蓿

蘩

馬歯莧　蒲公英　百合　山丹

草石蠶　榛　海松　枳椇。

字夫

漆　楸　罌子桐　梧桐

海桐　欒華　樺木　五加

鯪○

陵鯉 漢産　守宮　鰣魚　杜父魚

河豚魚 朝鮮産　海参 同上　海牛　海鰤

魚鰾 漢産　車渠　淡菜　班蝥 漢産

天　[illegible]　砂挼子

五種重　田村元雄 具

龍珠　狼芽草

以上二種　官醫　橘隆菴 具

黄精 泉州産　石薄荷　防葵　鬼臼

覆盆子 漢産　以上五種　官醫　藤本立泉 具

山龍膽　拳参　[illegible]　青蒿

紫參　[illegible]　佛見笑

以上七種　官醫　岡田養仙 具

燕

鹿藥　鹿蹄草　天南星　薔薇

楨櫨　榧　木犀　桐

偏　鄰蘭

羅漢松　落葉松　竹柏
以上十一種　官醫　岡了伯具

萱草重瓣　水韮　棕櫚漢産
以上三種　官醫　宮村永隆具

落新婦　龍膽白花　蕳子
以上二種　後藤黎春具

鼠尾精　石長生　佛甲草　畢豆
以上四種　福山舜調具

車前大葉　草薢漢産　獼猴桃
以上二種　松田長元具

馬蘭　剪春蘿　羊躑躅　菠薐
榲桲　安石榴
以上六種　大口玄周具

江芏　狗舌草　牛扁　蒟蒻
以上四種　古河章軸具

貝母漢産　菝草　覇王樹　蓮
[illegible]
以上四種　[illegible]

迎　姊　二

升麻　醉魚草　山梔子黄實　衛矛
以上四種　澤東富具

麥斛　地柏　桑
右二種　鶴齢樹母具

秦艽紫花　升麻　灰藋　鳳尾蕉
郁李　象山貝母
以上六種　白河宗壽具

石三稜　土常山　毛茛
右三種　松田新蔵具

白薇白花　迎春　腫某　佛頭草
ウエウルテルウメ
以上五種　中嶋三智具

蝴蝶花　十姊妹
以上二種　小林文左衛門具

水楊　木槿
以上二種　中野東節具

平地木　臭橘
以上二種　片山文菴具

染篗　枇杷　桑
右三種　鶴齢樹母具

藜蘆白花　牡丹　萹蓄　常山
槐
以上五種　熊井宗壽具

百脉根　芎藭大葉　忍冬菊葉　胡葱
金橘　山茱萸漢産
以上六種　青柳仙安具

鬼針草　牛扁別種
以上二種　小貫玄昌具

攸參但鏡　赤參
以上二種　福山喜安具

延胡索竹葉　青參圓葉　馬參
以上四種　志水秀安具　茖

青蒿　黄花蒿　辛夷
以上三種　樋口仙安具

白及淡紫花　廻青橙
以上二種　河毛松運具

淫羊藿淡紫花　鬼督郵　水萍
以上三種　田中元迪具

白及白花　連翹　蕺菜
以上三種　今井元安具

鐵線蓮　連錢草　酴醾
以上三種　小貫玄秀具

山丹黒花　建蘭琉球産
以上二種　藝花家義右衛門具

鳳尾艸　絡石小葉　含生艸　肉桂
烏藥台州産　越橘
以上六種　藝花家林蔵具

貫衆琉球産　淫羊藿漢産　白蕉　[illegible]具
玫瑰花　芙蓉木綿　[illegible]
以上五種　平賀國倫具

右品類凡二百三十一種戊寅四月會
會主　藍水田村元雄

禹餘糧[illegible]
巴戟天肥後産　山律根　仙茅長崎産　白前
菴蕳　薇銜　[illegible]廣産　山豆根肥後産
南藤　骨碎補　水芋　草蓯蓉漢産
杜仲漢産　〇崑崙黄漢産　理石南部産　長石日光産
ホウリスアルメニヤ長崎産　碧青肥後産　[illegible]　[illegible]肥後産
砂箸肥後産　紫金砂朝鮮産　蠣石肥後産　カナノ色ル[illegible]産

七

ネモトヘサゲル

以上五種　古河章輔具

山薑琉球産　金星草　萹草　ニソスミレ

古度子　烏藥別種

以上四種　中川紙亭具

杓春　玄参別種　漏盧長崎産　薜茘

馬兜鈴細葉　土茯苓竹葉琉球産　骨碎補長崎産　花セキシヤウ

赤枝橋肥後産

以上九種　堀江元長具

鴨跖草白花　馬腦　石螺

以上三種　澤東宿具

水蘇　耳蕉　ベトウニカ　ロウデウイルデメンテ

ケメイネアルドベシーイン

右五種　海治文四郎具

茴芋別種　アメン　霸王鞭　金絲竹

右四種　髭髯再齊樹母具

火齊珠雲花　ヘイシムル

以上二種　谷村元眠具

林霓

以上一種　圖師長益具

白石英

四

以上一種　堀宗本具

花乳石

以上一種　堀宗樂具

サフラン

以上一種　黒川儀助具

蠟蛇針　螻蛄尾針

右一種　大津傳十郎具

蓬蘽　ユケクニ小葉

右三種　青山仲菴具

岩ツバキ　イヨカツラ　孔雀卵

右三種　福山喜安

劉寄奴細葉　小薊　龍豆　五加大葉

右四種　河毛松運具

地参　山蘭白花　江モツニ　佛桑花重瓣

豊瑞花

右五種　樋口仙安具

苦蕺　芊様錦　王栢

右二種　志水秀安具

甘諸　藤長苗白花　君遷子

右三種　鈴木見恆具

藿香白花　赤莧　梓

右三種　大平宗本具

天名精引自三七

右三種　河野亮達具

沙參薩産

右四種　中久喜素常具

細辛南部産　百兩金白實　穀精草大葉　○石蠏那須野産

右四種　白石原進具

○青滑石　石蛤

右二種　松井半兵衛具

鶏冠雄黄　龍歯石　羚羊皮　虎頭

豹頭

右五種　中村屋伊兵衛具

右品類凡二百五種己卯八月會　二百十二七

會主　鳩溪平賀國倫

昭和五年十月以平賀輝子女史藏本縮寫畢

紀州産物志

紀州產物志

一　本邦往者ハ產物之詮義もくハしく御座候故、國々ゟ藥物を貢候義、延喜式等にも相見へ申候。中古以來異國ゟ相渡り候藥物を以用に給(爲カ)へ(ひカ)、或和產藥種と稱候品、翻白藥を紫胡とし、枸橘を枳殼とし、萬年青を藜蘆とし、珊瑚藥を防風と仕候類甚多御座候。依之和藥は用にたへすと人々相心得居り申候。近世本草之學世に行れ、粗藥物之詮儀も仕候。且、有德院樣御代、國々採藥等も被爲仰付、此時に至て出候品、今官園に殘り居申候。私儀生得好候道にて御座候故、諸國採藥仕、採出候品も御座候。就中伊豆國に而は芒硝、鍼石、コホルド、山豆根、讚岐にては画燒青、巴戟天、鼠矢樣之金剛石。駿河之石筆、上總之鹽藥。遠江之蛇含樣之自然銅之類は、本邦古人のいまた不考品にて、私初て採出し候。其外國々詮儀仕候ハヽ、珍物も出可申と奉存候。別而御國紀州之儀ハ、土地南海張出、大山大河至て多く、山海之利無殘所御國にて御座候。殊更暖國故、草木等能生候。漢土ニても南國ハ產物多、珍奇品ハ兎角南國暖地に出候物にて御座候、去去年貝類詮儀仕度、加太、和ら浦、鹽津、由良、柏、比伊之保、印南、切邊、南邊、田邊、瀨戶、湯崎之邊迄、浦々無殘所遊行仕候。貝之義ハ甚宜き物御座候。其上種類多き事、他國之可比も無御座候。天下第一之名產と奉存候。其節ハ海邊計詮儀仕候故、山中ハ採藥も不仕候。何卒熊野三所を始メ諸深山委ク相尋度奉存候得共、いまた力不足仕候故、心外に打過候。とくと詮義仕候

ハヽ、珍物出候儀、決而相違無御座候。御國所〻山中之様子竝先輩ゟ申傳を以相考候ハヽ、草木も御國を日本第一と奉存候。然共只今迄くハしく詮議仕候者も無之、世之寶と相成候品空く山中ニ埋候儀甚可惜事に御座候。古人之言に、千里馬は常にあれども、伯樂ハ常にあらすと申義金言と奉存候。幸御國ニ而ハ湯淺橋本清七、御城山東田中町山瀨治左門など藥草も少〻見覺居り候へハ、尙とくと御詮義被爲仰付候而、珍物探出し候ハヽ、乍恐天下之大益ニ而御座候。草木にかきらす名藥等も詮義仕候ハヽ、出申義決而相違無御座候。

一　只今御國より人參製出候由傳承り候、此藥品中第一之物にて御座候得ハ、甚御益と奉存候。乍然、日本にて産候人參ハ、多くハ竹節ニ而、下品に御座候故、朝鮮産人參とハ同日之談ニ而ハ無御座候。幸有德院様御代、朝鮮人參種御取寄被遊、今官園竝日光より段〻作出候。尾張國に而も作り出し、御家中へ被下候。此兩品之人參を相考候に、成程、正眞朝鮮種にて御座候故、功能中〻和人參、廣東人參抔之可及にてハ無御座候。然とも是も所〻ニ而作出候人參、專ら培養等仕候故、出來宜し過、形ハ見事に御座候得共、功能ハ朝鮮渡り之人參よりハ一等おとり申候。私存付候ハ、只今迄自然と和人參之出候熊野山中にて、右朝鮮之人參を御作らせ被遊候ハヾ、下地ゟ自然に和人參之生候土地之義ゆへ、甚相應可仕候、當時朝鮮人參種御詮義被遊候ハ、いか程ニ而も自由に才覺相成候。一年に一二萬粒も御蒔せ被遊、十年も相續候ハヽ、先に蒔置候分、追〻四五年以上ゟ實を結候故、十年之内ニて段〻培養仕候。扨

種等澤山に相成候節ハ、所〻山中へ蒔捨置候得ハ、後〻山中自然ニ朝鮮人參之生候義、唯今之和人參之通に相成候。然る時ハ永代迄も御國ゟ朝鮮種人參之產候樣に相成候儀、甚大益と奉存候。此儀段〻仕方等も可有儀に御座候得共、一〻に書盡しがたく御座候。

一　御國之湯淺之寺にホルトカルト申木御座候。甚珍木ニ而御座候。人存不申候。此木之實を取、油にしぼり候へハ、ポルトガル之油と申候而、蠻流外療家常用之品に御座候。當年ゟ油をしぼり候樣にと、橋本仙質へ內意申遣置候。其外網不知浦近山に、禹餘糧見出し置候。上品にて御座候。白羅山に磨力石も二種御座候。

一　古唐土に而ハ、貝子を以寶と仕候義、古書に相見へ申候故に、日本ニ而も寶貝と稱し申候。只今に而もハルシヤ、ヘンカラミ海嶋ニ而ハ、カウルスト申候而、貝子を寶と仕候由、紅毛通詞とも物語に而承り候。日本ニ而中古諸之貝を集メ、高貴之人之玩と相成候儀、甚雅遊ニ而御座候。近き頃東山帝御宇、京師之衛士淨貞勅を蒙り、國〻之貝を尋候、其書を私方に相傳居申候。此書も御國之御產も多く相見へ、古歌ニも貝を詠候ハ、御國と伊勢を專に詠候。貝之品類多き事ハ諸書ニ而も見當り不申候。御國を世界第一之名產と奉存候。右貝を玩候義、漸おとろゑ候ゆへ、只今にては名なとも間違多御座候。御國ニ而好候而集候者も、五六十年以前迄は多く御座候へ共、只今ニ而ハ夫さへ古人ニ相成、貝之名も古きを失申候。御國ニ而近世貝すきの名を得候者、田邊龍泉寺、干鰯屋喜市、加賀屋吉兵衛、

瀨戸本覺寺、南邊山内勘右門、湯淺林藏なと＝而御座候。干鰯屋喜市、山内勘右門ハ物故仕、龍泉寺ハ及老衰候、只今＝而ハ瀨戸本覺寺、かゝ屋吉兵衞、湯淺林藏のミ、貝の名を相傳へ居候。就中かゝ屋吉兵衞能覺居候。最早及老年、今此者相果候へハ、貝の正名永く亡可申義可惜事＝御座候。私儀貝品繪畫仕、彼者とも覺へ、和名を相正し、漢名等一ミ相考申上度存念御座候得共、是又力不足御座候故、打捨置候、是等ハ藥用＝而無御座候得共、風雅之一助に而御座候。

一　近年甘蔗相渡り、尾州知田郡＝而ハ、段ミ作出し砂糖製法仕候。東都にても砂村之邊＝而被爲仰付、作り出候得共、寒國にてハ十分＝無御座、御國＝而先達而ゟ被爲仰付、作り出候樣承り候、別而御國ハ暖國に御座候故、甘蔗出來甚宜筈に御座候。是等も仕方＝より甚御益に相成可申と奉存候。

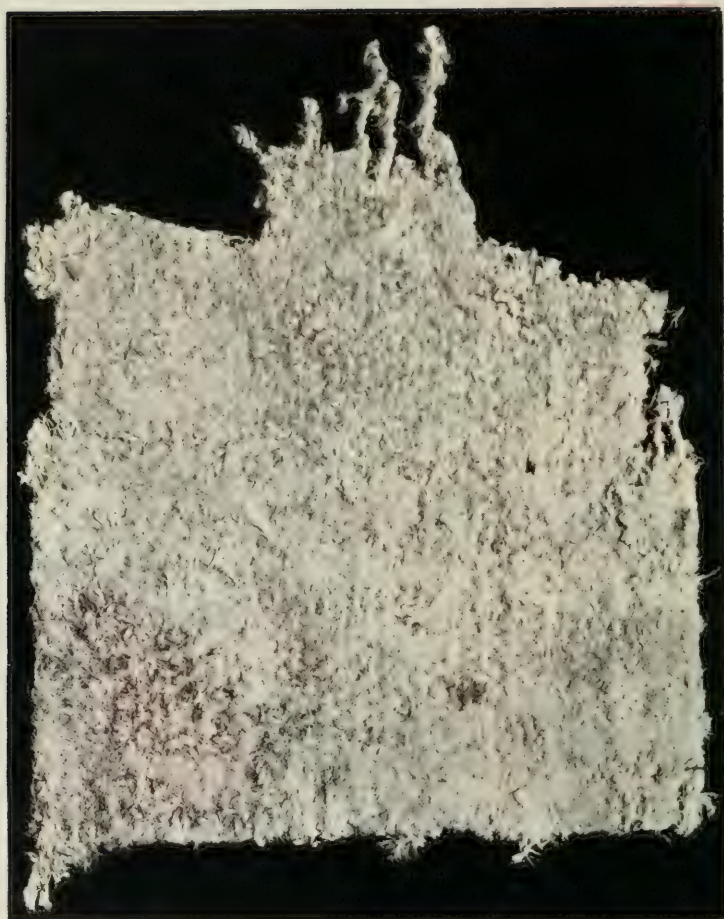
一　有德院樣、漢土ゟ御取寄被遊候藥種にて候、人參、白朮、蒼朮、地楡、砂參、知母、貝母、鬱金、莪茂、黄芩、防風、大靑、對生、黄精、延胡索、呉茱萸、山茱萸、百部、百蕊、五味子、史君子、大黄、蘭茹、附子、蘜艾、自芷等之類、日本に產よりハ格別上品にて御座候、此種官園に而澤山御座候得共、いまだ世上へ行渡不申候。是等之品も御國山中へ種子を蒔置候へハ、永代日本之寶に相成申候　別而御國在田郡之農民ハ、甚耕作に心を用ひ、蜜柑を植候端に、茴香を作り出候。今諸國＝而用候茴香は、御國と攝州池田より作り出候。此物藥種計にかぎらず、鬢付油の香に入候故、甚有用之品に而御座候。ヶ樣に耕作無油斷、農民ともへ右唐渡りの藥草種を被下置、作り覺させ候はゝ、甚大益

ゝ奉存候。右唐種藥草御用に御座候へハ、私方に而近〻用意も相成候はゞ極上候樣に仕度候。

一 御領分伊勢丹生村水銀之義、只今ハ製法も不仕樣に傳へ承候。是は日本他所に無之品、別而有用之物に御座候得ハ、何とぞ不絶製し出候樣に仕度奉存候。ヶ樣之品、日本より多出候得ハ、自然と異國より渡り候品等減し候へハ、甚日本之大益乍恐上存候。以上。

九月

平賀源內

昭和五年十月以早川佐七氏藏本令書寫加校合畢。

火浣布の小片

東京　勝俣銓吉郎氏所藏

この小片はその檀紙製の包紙に

平賀源内織之　矢埜壽光書之（朱印）

火浣布　　　　品主飯島氏

とある外何等傳來について物語るところがない。

冷沈布說

火浣布說

火浣布之儀は漢土にても甚珎物と仕候。周書列子抱朴子述異記後漢書梁冀傳三國志齊王傳東方朔神異經梁四公記典籍便覽、本草綱目等之書に出居申候。此物穢候時は火に入て燒候得者、垢者燒落、布は少も燒不申候。試に墨を付、或は、油に浸し燒候ても、布は燒不申、希代の珍物に御座候、此物漢土にても、彼國より出來仕候にては無御座、何れも西域より渡候由相見申候。仍之、或は火鼠之毛にて製し候と申說も御座候得共、元來蠻國より出候品故、唐人も不存、皆々妄說而已にて御座候。日本にても往古より出候噂も無御座候。竹とり物語にも火鼠の裘(ヒネヅミカワコロモ)とて、至てなき物の部に入居申候。然處、私此度考出し、日本之地より取出し候、卽手つから織出し申候。尤大にも出來可仕候得共、甚手間取候故、先少々斗織試候處に、香道秋の光と申香事に、香敷に仕候得者、甚宜布候由出居申候に付、香敷に製し申候、此間官儒青木文藏殿御世話にて、紅毛人にも見せ候處、彌蠻產と同種之由申候、紅毛人かひたんヤン、ガランス、書記ヘンデレキ、デユルコウフ、外科コルチイレス、ボルストルマン三人列座にて、大通詞今村源右衞門、小通詞楢林重右衞門譯を傳へ申候。此品紅毛國にも無之、トルコラントと申國に產し申候。但し往古はたゞ着などに仕候樣に織出し候處、彼國亂世相續、織出し候傳も失ひ、只今は出不申候。火浣布之名もラテイン語にて、アミヤントス又アスベストスとも申候。ラテイン語と申は紅毛國之古語に

て御座候。當時之紅毛詞にてはスティン、フラス、又アールド、フラス共申候由、紅毛人共申候。尚亦大通詞源右衛門方にて紅毛之事を詮議仕候處、シカットカンフル、デル、ケチイシエン。ナテユール、コンデキサアカ、ウヲイト。一名レキシコン、ハン、ウヲイトと申書に出居申候。

一トルコ國之儀是亦紅毛地毯之圖を以て、詮議仕候處、凡世界抜四に劃、ヱロッパ、アヂア、アフリカ、アメリカと申し四に相分、トルコ國者アヂア之西北、ヱロッパ之境にて、唐土より數千里西北に相當申候。

一香道秋の光ニ遵生八牋を引て曰、隔火銀錢雲母片玉片砂片倶可以火浣布如錢大者銀鑲周圍作隔火猶難得、又典籍便覽曰凡火浣布甚難得、嘗有如錢大者用銀鑲周圍留火上燒香と御座候。漢土にても香敷に仕候得共、至て得かたき由相見申候。

一右火浣布日本は申ニおよばず、唐土、天竺、紅毛にても開闢以來出不申、トルコ國にても近世ニてハ織候傳も絶候品にて御座候處、此度私取出候、古今之珎物故、奉入　御覽候。猶委細之儀者火浣布考と申書、追而開板仕候以上。

寶暦甲申春三月

昭和六年三月以京都帝國大學附屬圖書館本令書寫並校合畢。

火浣布の隔火（實大）

京都帝國大學所藏

角入方形　竪横各七分五厘、緣、銀製、厚約八厘

火浣布の隔火としては現存する唯一のものであり、これによつて火浣布略說に載せられた隔火の圖が實大であることが知られる貴重な遺品である。さうしてこの隔火が故品川彌二郎子によつて大阪の某氏の手から尊攘堂文庫に移されたとはいへ、もとは讚岐高松藩の木村黙老の所藏であつたことが、この遺品の史的興味を深からしむるものである。

火浣布說の一部

京都帝國大學所藏

火浣布の隔火とおなじく木村黙老の舊藏であるが、詳なことは本書の解題を參照されたい

火浣布畧說

全

鳩溪平賀先生著

火浣布略説

松籟館蔵板

火浣布略説序

火浣布之名久雖存傳也。尚矣。嘗云。此物如織。大抵難得也。説者或以爲鳥羽之譚。須鳩僚姆造火浣石楚探。蓋物品講究之餘緒耳。樺軸栽

紛々然。爲紀竟獲焉。令俾鯢女

而左。將無有典謂之假令。是

乃嫦娥之不折。而寒露心悦曜者

一時者已乎。明和丁酉之秋

八月　桂川國訓序

火浣布畧說

讃岐　鳩溪平賀國倫編輯
武藏　門人中島貞叔
　　　中島永貞全校

○火浣布。又火毳ともいふ。浣の字澣の字におなじく。物を濯ことにて。此布穢るゝときは火に入て燒ハ。垢は悉く燒落て布は少も損ぜず。左ながら火にて浣がごとくなるゆえ號て火浣布といふ。試に墨をつけて烈火の中へ入。又ハ油にひたして燃せバ。墨油みな燃て。布ハ猶もとのごとし。唐土にても至て得がたき寶とす。周書に載す。西域火浣布を獻ず。汚るれバ則これを燒ハ潔し。烈子曰西戎周の穆王に火浣の布を獻す。是を浣ふに必火に投す。布則火色。垢則布色。火より出してこれを振へハ。皓然として雪のごとし。東方朔が神異經曰。南荒の外火山あり。長三十里廣五十里。其中皆不燼木を生ず。晝夜火燒。暴風猛雨にも滅ず。火中鼠あり重さ百斤。毛の長さ二尺餘。細こと絲のごとし。是を以て布に作るべし。常に火中に居れば色赤し。時〳〵外に出て色白し。水を以てこれを沃ば卽死す。其毛を織て布とす。火浣布と號く。抱朴子に曰。南海の中蕭丘の上自

生ずる火あり常に春起て秋滅す。この丘上一種の木を生ず。火起ときにあたつて木少く焦て黒し。其人此木の華を取て火浣布とす。木の皮も亦剝で灰を以て煮て布とす。但華の細にして好には及ばざるのみ。又白鼠あり。大なるもの數斤。毛の長さ三寸。空木中に居る。火に入て焦れず。その毛も亦績て布とすべし。其餘。搜神記。後漢書梁冀傳。同西域傳。三國志齊王紀。東晳が發蒙記。梁四公記。任昉が述異記。譙周が異物志。張華が博物志。范汪が典籍便覽。高濂が遵生八牋。李時珍が本草綱目等の書に出たり。又後漢の桓帝のとき。大將軍梁冀火浣布を以て單衣とす。嘗て大に賓客と會す。冀佯て酒を爭ひ。杯を失して單衣を汚し。僞怒て衣を解てこれを燒。布火を得て燃て灰のごとし。垢盡火滅れは粲然として潔白。灰汁を以て洗ふがごとしと。此事後漢書。傅子記略等に出たり。漢の代には西域より獻たる事もありしが。中頃久しく絶てわたりし事なきゆへに。魏の初に至ては。時の人火浣布といへるは名のみにして。無ものならんと疑へり。魏文帝以爲。火の性酷烈にして含生の氣なし。火に入て燒る物あらんやと。遂に典論に著して無こと決せりといふ。明帝の代に至り三公に詔して曰。先帝昔典論を著す。不朽の格言なり。大學石經と竝に永く來世に示べしとて。石にきざんで廟門の外に立。しかるに齊王の靑龍二年。西域譯を重て火浣布を獻ず。大將軍太尉に詔して燒試て百寮に示す。於是かの典論を削滅す。天下是を笑ふ。又晉の泰康二年　大秦國より火浣布を獻ず。殷臣奇布賦を作て曰。乃採

乃析、是紡是績、毎以爲布。不盈數尺。以爲布帊。布帊とハふくさなり 右諸書に出る中、梁冀が單衣とせしと。晋の代に布帊とせし外ハ。其布の大さをもしるさず。多ハ紙上の空論にして。目のあたり見たりへいへる説なし。此物唐土にてハ織ことをしらず。只西域より希にわたりたるもの故。唐人もしらずして。或は火山蕭丘にある火鼠の毛。または木の華。或は木の皮等にて織たるものといへるハ大なる誤也。蕭丘、火山火ありて常にもゆれども。是は即陰火又寒火ともいひて。常の火のごとく物を燒火にハあらず。抱朴子曰。蕭丘に自然の火あり。一種の木を生して小く焦て黑し。陸游曰。火山軍其地鋤耘を深く入れハ。烈焰ありて種植を妨ぐと。按ずるに我邦越後妙法寺村に出る火の類にして。物の燒ざる陰火なり。其陰火中に生したる。鼠にもあれ木にもあれ。常の火に入るときは燒ざるといふいわれなし。然を理にくらき唐人ども。火に陰陽の二火ある事にこゝろつかず。もとより火浣布ハ外に一種の物を以て製する事をしらざる故。かゝる不稽の説をなす。大に笑へきにたへたり。又我邦にてハ古より名のみつたへて。其物を見しものもなきゆゑに。竹採物語にも火鼠の裘とて至てなきものゝ譬とすれば我邦もとより其形狀を見るものさへなし。予此物織べき事を考出して。過し申のきさらぎなかば創て製し出す。同じ年の三月紅毛人東都に來る。官儒靑木先生對話の序を得て紅毛人に見せけるに。かびたんやんがらんす。書紀へんでれき。でゆるこうふ。外科こるねいれす。ぱるすとるまん。など大に驚て曰。此品紅毛天竺をはじめ世界の國々にても織法

をしらず。とるこらんと。といふ國にむかし一人ありて織出せしが。彼國亂世つゞきて織傳を失へり。故に此物絕て希なり。火浣布の名を。らていん語にて。あみやんとす又あすべすとす。ともいへり。らていん語とは紅毛國の雅言なり。常の紅毛語にてはすていんふらす。又あゝるどふらすともいへりと。委は。しかつとかうむる。でる。げねいしゑん。なてゆうる。こんできさあか。うをいと。一名れきしこん。はん。うをいと。といへる紅毛の書に出たり。大通詞今村源右衛門。小通詞楢林十右衛門。譯をつたへて是を正せり。

とるこらんと。とは。西域の國の名なり。凡世界を四つにわり。ゑろつぱ。あぢや。あふりか。あしりか。といふ。とるこ國はあぢやの西。ゑろつぱの境にて。唐土よりは數千里西北にあたれり。むかし唐土へ火浣布を獻じたる。西域西戎西番などいへるは。皆此とるこ國なるべし。是等の國は唐土へ通ずる事希にして。たまへ通するときは。重譯とて通詞に通詞もかさねざれば其詞を通ぜざるなり。紅毛人は彼國へもゆき。又我邦へも來るゆゑ。譯をかさぬるに至らずして其事通ずる故に。今詳なる事をしる。實に太平の餘澤といひつべし。

〇火浣布をもつて香敷に作ることは。遵生八牋曰。隔火。銀錢。雲母片。玉片。砂片。倶可。以火浣布如錢大者。銀鑲周圍作隔火。猶難得。又典籍便覽曰。火浣布甚難得嘗有如錢大者。銀鑲週圍。留火上燒香と見えたり。隔火は我邦にては香敷。又銀葉ともいふ。専雲母、

又銀などにて作れども。此二品は薄くしてかたき物ゆゑ。火の移り急にして香氣おだやかならず。火浣布ハ其質軟にして火氣徐〻徹るゆゑに香氣おだやかなり。又雲母ハ數度もちゐるときは火をはね。銀は火にあへばそりてよろしからず。此二品一度香を燒ば木の脂燒つきて溶がたく。再香を燒ば。初の移香ありて。はなはだあしく。火浣布ハ木の脂つきたるときは火中に入て燒ば。脂少も殘ず燒おち。幾度もちゐても移香なきゆゑ、唐土にては隔火の絕品とするなり。

○余が創製する火浣布の隔火 辱も
台覽を經その餘やんごとなきおんかた〳〵へも獻じける。又唐土にて至寶として尊ぶ事は諸書に見えたれば試に彼國の人にしめさん事を 公へ申上けるに。官より 仰ありて長崎へおくり。異國人に見せしむべしと。新に命を受て隔火五枚を製しぬ。

典論と刑滅乃圖

火浣布隔火の圖

火浣布隔火包紙の圖

火浣之布。自古有名。彼妄造說。臆度意量。
木皮斯調。鼠毛南荒。或果誣理。謂傳者妄。
涬溟造物。寧可推窮。陽中有陰。陰中有陽。

入火不化。柔能制剛。昔彼西戎。今我東方。織成素縷。週以銀鑲。一片隔火。百姓襯香。書堂清供。繡房風情。
明和甲申秋八月
大日本讚岐　鳩溪平賀國倫創製

右隔火五枚。公に奉る。十月中旬　官より長崎へ贈り給ける。十一月下旬長崎より清人の呈狀來れるよし。官より寫賜る。

清人呈狀の寫

蒙賜觀火浣布隔火一事。子等俱已公同領觀。但此物從古傳名近所未覩。今　貴國有此名人博綜廣識。秘製精奇。實爲罕見。筆難盡述。子等幸在崎館得叨異遇見此奇珍。公同賞

嘆欲通知在唐之人有此異寳。然有空言若無實據諒難見信。今欲給領數枚帶回俾在唐博物之人。一同賞鑒。爲此具單謹覆

明和元年十一月　日

未十番　南京　船主　龔子興
仝十三番　南京　船主　項乾升
申一番　南京　船主　趙可欽
仝二番　寧波　船主　黃恰齋
仝三番　廣南　船主　沈綸溪　林本水
仝四番　南京　船主　宋敬亭　黃奕珍
仝五番　南京　船主　汪繩武
仝六番　寧波　船主　超紹統
仝七番　南京　船主　崔景山
仝八番　寧波　船主　唐重華
仝九番　寧波　船主　黃世訓　顧舒長

火浣布隲火　一

火浣之布自古有名彼妄造説臆度意量
木皮斯謂鼠毛南蕗或果誣理謂傳者矣
滓溟造物寧可推窮陽中有陰陰中有陽
入火不化柔能制剛昔彼西戎今我
東方織成素縷邁以銀鑲亡隲火百姓
襯香書堂清供繡房風情。
明和甲申秋八月
大日本讃岐。　鳩溪平賀國倫創製

火浣布隔火の包紙

香川縣志度町　渡邊富三郎氏藏

料紙　奉書　横　二ッ折　竪　一尺一寸八分五厘　横　八寸五厘

折上　竪　五寸七分　横　二寸八分五厘

横一尺六寸一分の奉書を折目を左に横二ッ折にし、中央に藍色で竪六寸、横五寸の廓内を九行に分ち、なかに火浣布以下の文字をあらはし、末尾に朱印を押捺してある、そしてこの横折を折目から二寸六分の幅に右に折り、次ぎに右端から矢張り二寸六分の幅に左に折り、更に上下を裏に折返したものである。圖は包紙を開けた形と折上げた形とであつて、前者に見ゆる丼はその折目である。

仝十番　寧波　船主　曹體三
仝十一番　寧波　船主　朱秉鑑
仝十二番　南京　船主　張雲衢
仝十三番　寧波　船主　吳果庭
仝十四番　南京　船主　邵詩南
右各有印

右之譯文

火浣布之香敷御見せ被遊、私共一同拜見仕候。此品古より名而已傳承候得共、是迄終に見及不申候處、當時右通博綜廣識之御方秘製有之候者、實以希代之珍事難盡筆紙奉存候。折能罷渡御蔭により寄品致拜見何茂打寄賞嘆仕候。併在唐之者共に如斯珍寶有之段物語仕候共、實跡なく空言而已にては信用仕間敷奉存候に付、此度一二枚拜領被仰付度奉願候。左候はゞ、唐國え差越數寄者に茂賞見爲仕度奉存候。仍以書付申上候

明和元年十一月　未申諸湊船頭共連判

右書付之通和解差上申候

林　市兵衛　印

何幸次右衛門印

蒙

賜觀火浣布隔火若能可成後開馬掛衣料尺寸。仰懇准買一件。何者敬等因圖帶回唐山。欲作進獻之用。其價値即將六分參鮑銀三百兩配買。但此品帶回進獻果中上意。將來再令敬等採進。彼時具單呈懇給配。仰懇恩准所求。則感不淺矣。

計開

一馬掛　一件

長　九尺一寸

濶　二尺四寸　係貴國小尺

以上尺寸織成方合進獻之用。如有五寸四方或乙尺四方者。俱不合唐山進獻之用。則不敢領買帶回。

明和元年十一月　日

申四番　南京　船主　宋敬亭

仝五番　南京　船主　汪繩武

各有印

右之譯文

拜見被仰付候火浣布之香敷、若左に書載仕候馬乘羽織、寸尺に御織立相成候はば、一着分御買せ被下度奉願候。右は私共見込を以唐國ゟ持歸獻上に可仕候に付、六分煎海鼠鮑銀三貫目迄に買渡申度奉存候。此品持歸獻上ニ仕首尾能相納、再び調進之命を承候はば、其節ゟ書付御買せ之儀可申上候間、右奉願通、御許容被成下候はば　難有仕合奉存候

覺

一　馬乘羽織　　一着

　丈　九尺壹寸

　幅　貳尺四寸

　　　　但貴國曲尺之積

右之寸尺御織立出來仕候得ば、獻上相成申候。若五寸四方又は壹尺四方之小切にては獻上に相成不申懇望ニ無御座候ニ付難買渡奉存候

明和元年十一月

申四番　南京　船頭　宋敬亭

同五番　南京　船頭　汪繩武

右書付之通和解差上申候以上

林　市兵衛　印

何幸次右門衛　印

按するに、淸人の火浣布を珍らかなりとするは左もありぬべき事なり。しかれども馬乘羽織の寸尺なれば獻上すべけれども、若五寸四方一尺四方の小切にては、獻上にならざるゆゑ望になしといへるはいといぶかし。まへにもいへるごとく神異經、捜神記、抱朴子、發蒙記、述異記、本草綱目の諸說は、みなうはさのみにて目のあたり見しにはあらず。又梁四公記に。杰公火浣布二端を見て。木の皮と毛にて織たるたがひ有ことを辨じたるなどいへるは。至て妄說にして信ずるにたらず。實に西域より渡りたりと見ゆるは、周の代西戎より獻たることは周書列子に見えたり。次に後漢の梁冀が單衣とせしもの一ツ、三國志　齊王紀に獻じたりと出るもの一ツ、晉の泰康二年に獻じたるもの一ツ、唐土數千歲のうち西域より渡りて書籍に記せしもの以上四つに過ず。梁冀が持しは單衣なれば其狀大なりと見ゆ。周の代並に三國の時渡りたる物は其大さも記さず。晉の時獻じたる物はふくさの大き也。それさへ殷臣奇布の賦を作て是を稱す　又遵生八牋。典籍便覽には、錢の大さのごとき物を隔火に作る甚得がたしと見ゆ。かく少しの切さへも重寶とすれば、五寸一尺の切なりとも唐土にては甚尊ぶべき事明白なり。しかるに右のごとくいへるは商賈を專とする船主どもにて、彼國の書籍のおもむきをもしらざるゆゑか、

又は外に意味も有べき事にや、いといぶかし。

〇清人の望の通。幅二尺四寸長九尺一寸に出來なんやと　公より御尋あり。依てまづ試に幅一寸に長四寸三分の物を製して　公に奉り、尙淸人の好にまかせて跡より作るべき事を申上ぬ。はじめおはりの詳なる事は。火浣布考に記し置ぬれば、爰には其あらましをしるすのみ。

火浣布畧說終

著述書目

物類品隲　全六冊

淨貞五百介圖　全三冊

嗣出書目

神農本草經圖註

藥品諸圖擇工寫生形似逼眞庶一覽認得不費辨說如其古人論說撮要删繁務從簡約

同倭名考

專據源順和名抄丹波康賴和名本草萬葉集古今集等書參以近世諸家之說辨其當否

本草比肩

李氏綱目衆說繁蕪泛無歸宿今除本經三百六十五種外取千金方外臺秘要以下諸方書所載藥物考究論辨搜採諸家之長又師本經意分品者三以便醫家之用

食物本草

食物臭味日用不知可乎亦分三品氣味能毒忌畏反佐悉記無遺

火浣布考

四季名物正字考

日本穀譜　同菜譜

同草譜　同木譜

同石譜　同禽譜

同獸譜　同魚譜

同介譜　同蟲譜

右諸譜毎品有圖名稱一從我邦雅言。附以方言俗言及漢名蠻名。其外國之種。不論生活乾腊。類附各品之後。以備博考。

明和二年乙酉夏四月

平賀國倫識

題　火浣布

右は詩文章歌發句御出來次第私共方迄
被遣可被下候各卷を分候而集置品により追て
板行仕候

書林

江戸室町三丁目　須原屋市兵衛

同本石通三丁目　植村藤三郎

京寺町通松原下ル所　梅村三郎兵衛

大坂心齋橋順慶町　柏原屋清右衛門

肥後國天草郡深江村

陶器工夫書

揖斐十太夫様御代官所

肥後國天草郡深江村產

一陶器土（ヤキモノツチ）　壹包

右之土、天下無双之上品ニ御座候。今利（イマリ）燒、唐津燒、平戶燒等、皆皆此土ヲ取越燒候。其内今利、唐津ハ日本國中普ク行渡、唐人、阿蘭陀人も調歸候由、平戶燒ハ御獻上ニ相成候故、御領主ゟ嚴敷被仰付、自由ニ賣買相成不申由、若賣買仕候ハヾ、唐人、阿蘭陀人も大ニ望可申由ニ御座候。

一天草ニ而も、近年高濱村庄屋傳五右門と申者、燒覺候得共、細工人不宜候故、器物下品ニ御座候。私存付候ハヽ、天草か長崎ニ而、巧者成職人ヲ呼集、器物之格好、繪之模樣等差圖仕、唐、阿蘭陀之物好ニ合候樣ニ、工夫仕候而、段々職人共ヲ仕込候ハヾ、元來土ハ無類之上品ニ御座候得ハ、隨分上燒物出來可仕奉存候。燒物之儀、荒方鍛煉仕罷在候。其上先年讃岐ニ而、私取立候職人共之內、器用なる者共御座候得ハ、右體之者共呼寄、外國ゟ相渡候陶器、手本ニ仕、工夫ヲ加へ候ハヾ、隨分宜燒物出來可仕候。平戶燒なと隨分奇麗ニハ御座候得共、いまだ俗ヲ離れ不申候。今利、唐津ハ勿論之儀ニ御座候。今少之事ニ而、風雅ニ相成候共、片田舍之職人共故、古ゟ致來候ヲ、漸仕覺候迄ニ而、新ニ工夫所ハ不參、譬唐物、阿蘭陀物を傍ニ置寫候而も、心ニ風流無御座候故、自然と下品ニ相成候。畢竟天草之燒物土ハ、南京燒、阿蘭陀燒之土ゟも、拔群宜御座候共、形不風流ニ御座候故、日本人、外國

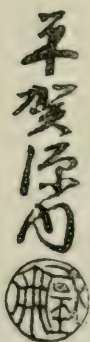
（上燒物一本作上陶器）

（寫字一本作覽）

（日本人一作諸人）

成就仕候得ハノ次有年恐二字

物ヲ重寶仕、高價ヲ出候。若日本之陶器、外國ニ勝レ候得ハ、自然ト日本物ニ而事足リ候。尤近キヲ賤ミ、遠キヲ尊び候ハ、常之人情ニ御座候得共、既ニ刀、脇差又ハ蒔繪物之類、日本ガ萬國ニ勝レ宜御座候故、日本物ニ而事濟候。陶器も日本製宜さへ御座候得ハ、自然ト我國之物ヲ重寶仕、外國陶器ニ金銀ヲ費シ不申、却而唐人、阿蘭陀人共も、調歸候樣ニ相成候得ハ、永代之御國益ニ御座候。元來土ニ而御座候故、いか程遣し候而も、跡之減候氣遣も無御座候。ケ樣之事ハ、甚廻り遠キ樣なる事故、長立押出而ハ、難中上御座候得共、成就仕候得ハ、御國益ニ而御座候。若成就不仕候而も、私一人之費、骨折のミニ御座候間、少も有餘御座候得ハ、内々ニ而天草へ參、樣子次第ニ而、心覺之職人共呼寄、少々宛も製シ出度奉存候。以上。

明和八年辛卯五月

右陶器工夫書並廉繪圖

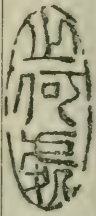
東京　黒川眞道所藏

明治四十四年三月影寫畢

昭和五年十一月就東京帝國大學所藏本騰寫以平賀敏氏藏本校合畢

肥後國天草郡深江村陶器土行程運送麁繪圖
天草
深江村
富岡
海上七里
海上二十五里
長崎

胡適集

柏舟艸

根南志具佐
紙鳶堂風来画

根南志具佐序

余讀斯篇也不覺擊節驚呼曰咄人邪鬼邪無能名焉蓋可測而測可言而言旦暮萬古咫尺六合世有若人而為若事亦昌異之若乃冥途潛府幽昧浩渺瞿曇氏者姑舍其他雖有明者不能窺測也而斯篇能測其不

可測也能言其不可言也紀事詳悉屬辭壯快波瀾變幻不可端倪嗚呼人耶鬼耶果無能名焉童子秉燭曰儻有類黃帝華胥之遊者非耶

寶曆癸未秋九月黑塚處士題

自序

唐人の陳紛看(ちんぷんかん)は経(えぢく)の字(おん)にしてべらぼう也

紅毛(をらんだ)の[illegible](すつぱらぱん)[illegible]鶉(ころ)鐘(らん)の口(む)ちやり(ちやり)

手(く)ちやり(ちやり)京の男が髭(ひげ)吟(なび)らして何の

おきやんすまいな江戸の女が吟(ぎ)に

からいおくしいきつ流け野郎(やらう)あんど

字刻を書て違へども吟(ぎん)葉(さこ)して寝(ね)く

起(おき)て飛く佐好ふ命(いのち)ゑい[illegible](きり)あぢらめて

ね和歌誹諧から人情無處を大倭
に若も仁を易てなし聖人は世界は
い禄幸手なりと有く云く俳諧も御ら
書生の膚てあつて熟らも神穂あり
すハ神道か持力は教へず皆も書が
歌の世の中あり一日付と俗の素本
て子ちかなりし源を尋ねハおい
つまる歌がる病の膏肓にふる親[illegible]あり

疾を治せんとするに鍼灸薬の及べき
にあらねば疾を戒るに儒を以てすれば彼回
聖人も如何ともせざりしや神道を以て
すればまさいよく驕りして正直ありがたし
佛法を以て責れば又因来求より現在
あり冀ハまづ餉を躍し錦く京内の
口を以て論幕へ流しして而後激を学し
戸蓋に窺なく筆を執て此篇をなし

名づく根南志具佐は、釋迦の嬌娥卵、老荘の譬言、紫式部が寓言は、空に比す。虚言にあらずんば只人情を論ずるにおいては、彼も一時なり是も一時寂刻

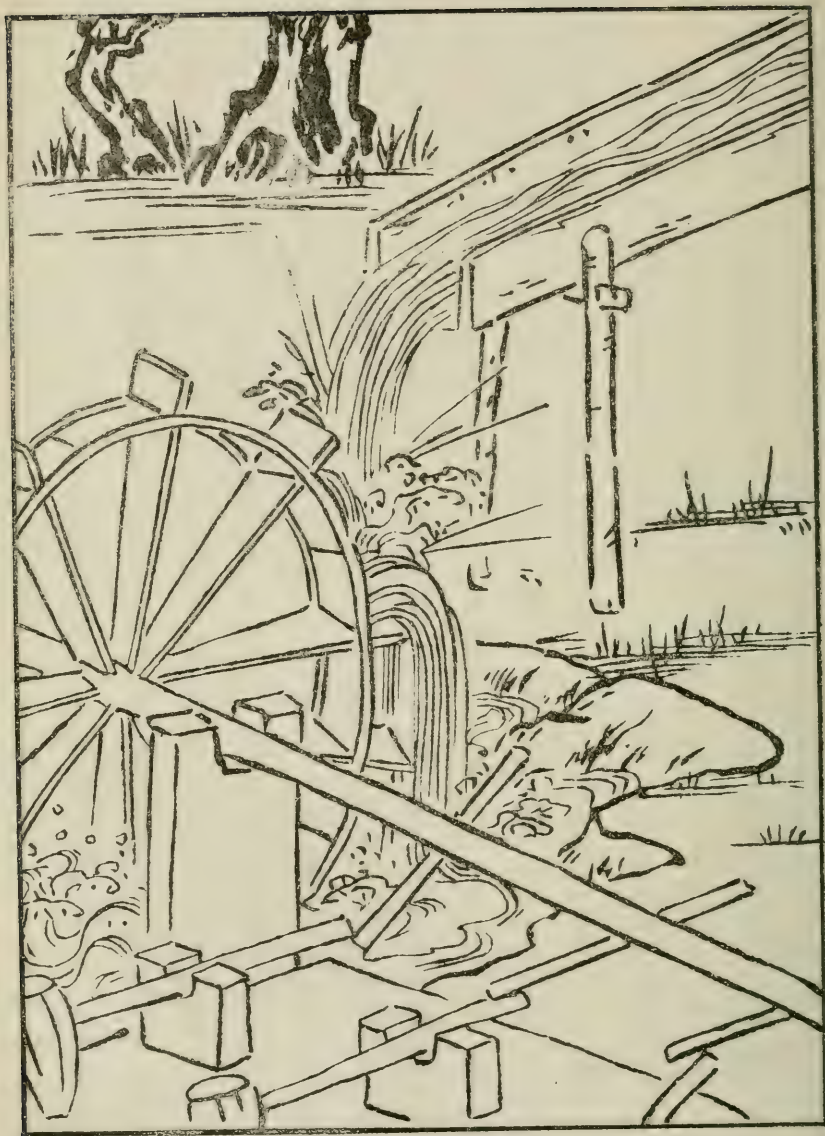
時宝暦十三未年十一月

天竺浪人誌

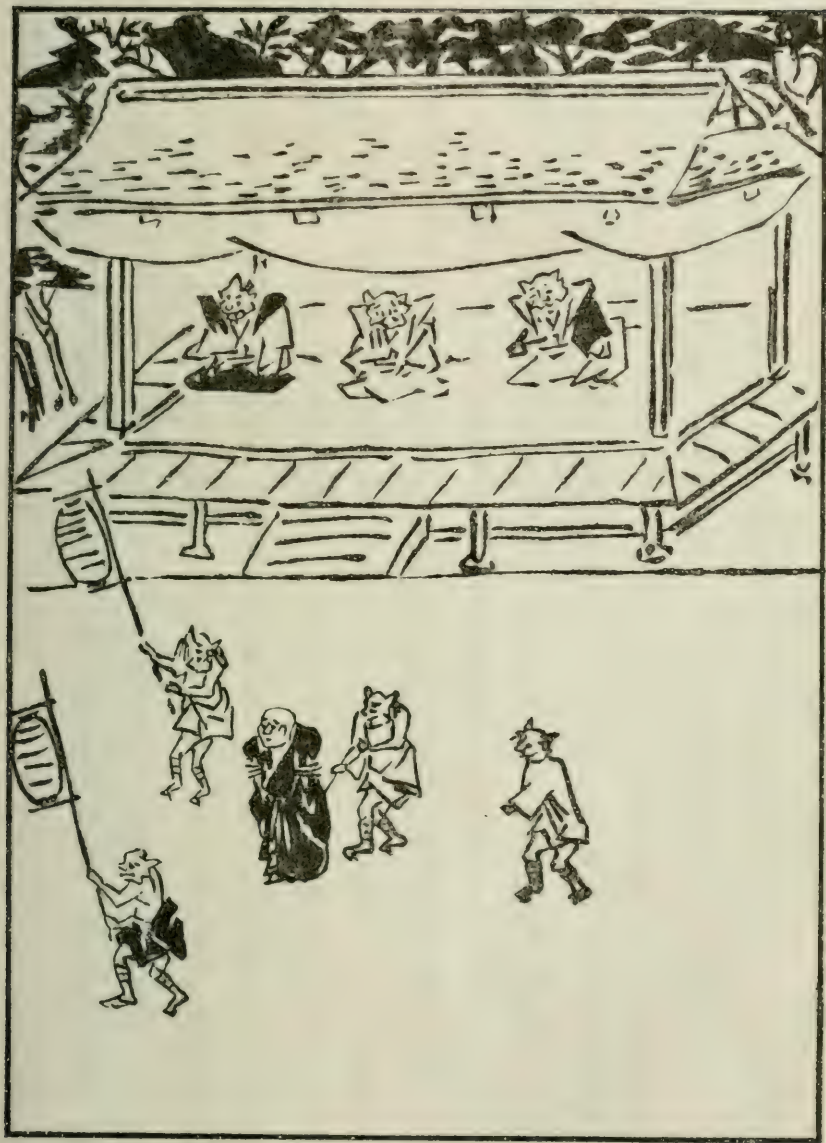
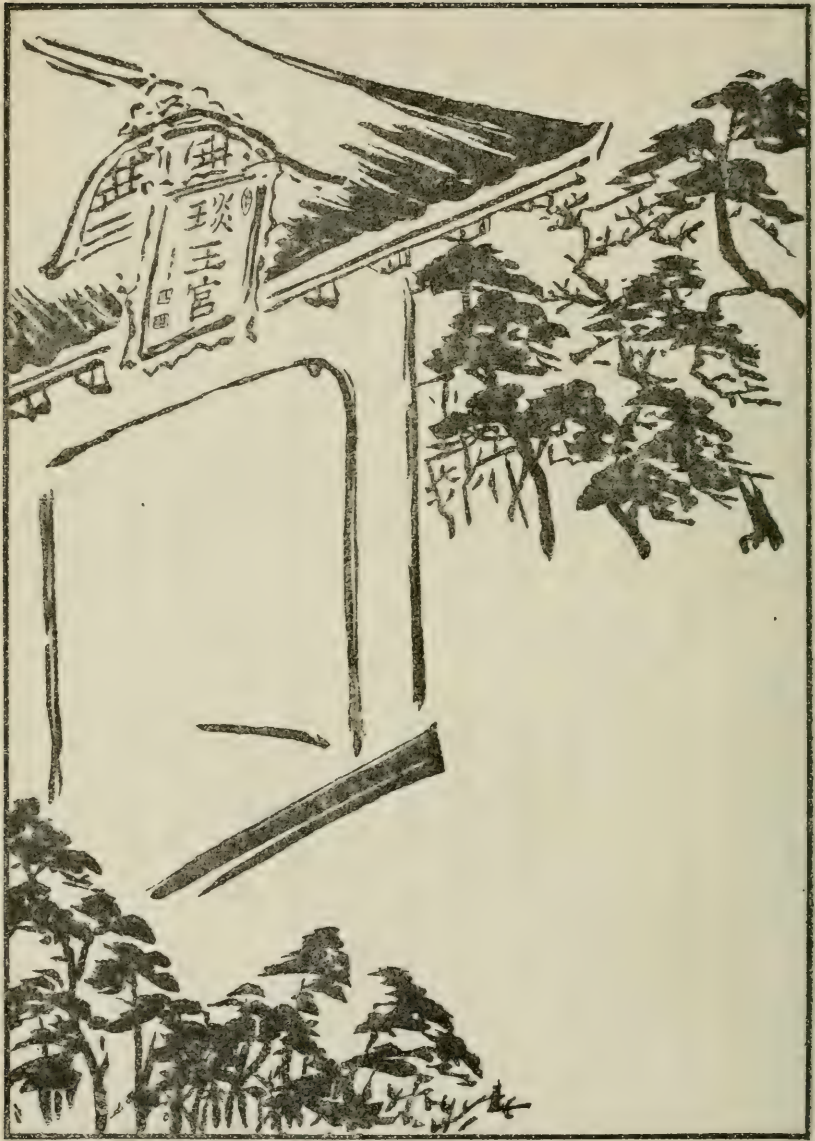
根南志具佐一之巻

公無渡河、公竟渡河、墮河而死、當奈公何と詩に作しハ、見ぬ唐土の古、夫の水に溺て死たるをなん、かなしみに堪ざる妹子の歎とかや。されバ寶暦十あまり三の年水無月の頃、荻野八重桐となんいへる俳優人の水に入て死たる事、世の取沙汰のまち／＼にして、それと定たる事を知人なし。其由て來る處を尋に、皓々の白を以て、世俗の塵埃を蒙んやと憤て、汨羅に沉し屈原が流にもあらず、龍宮の玉を取んと海底に飛入て、命を捨たる蜑人にも異なり。此世にもあらぬ世界の極樂と、地獄の眞中に、閻魔大王となんいへるやんごとなき方ぞまし／＼ける。此大王三千世界を領し給ふことなれば、十王を始として朝廷の臣下數もかぎらず。それ／＼の役を司者多し。されば人間の世渡、士農工商の各隙なきも斷ぞかし。閻魔王宮も、昔はさのみ閙敷もあらざりしが、近年ハ人の心もかたましくなりたるゆゑ、樣々の惡作る者多く、日にまして罪人の數かぎりもあらざれバ、前々より有來の地獄にては、中々地面不足なりとて、閻魔王こまり給ふ折を窺、山師共は我一と内證より付込、役人にてれん追從賄賂などして、さま／＼の願を出し、極樂海道十万億土の内にて、あれ地を見たて、地藏菩薩の領分茄子畠の邊までを切ひらき、數百里の池を堀、蘇枋を煎じて血の池をこしらへ、山を築ては劒の

苗を植させ、罪人をはたく臼も、獄卒どもの手が屆かざればとて水車を仕懸させ、焦熱地獄には人排を仕かけ、其外叫喚大叫喚等活黒繩無間地獄等の外に、さま〲の新地獄をこしらへて、岡場所地獄と稱し、三途川の姥も、一人にてはなか〲手かまはり得ぬとて、久敷地獄に墮居たりし淺草の一ッ家の姥、安達が原の黒塚姥、堺町の笋姥、其外婆婆にてよく嫁をいぢり、繼子を憎たる惡姥どもの罪を御赦免あり、三途川の姥の加勢に入て、段々地獄も廣まりければ、彼山師共また〱願を出し、何とぞ新地獄町の大屋に成度との願。しかし餓鬼道の分は掃除代が上らざれば、節句錢を貳百文づゝに御定下され度と願ひ、或は舌を拔鋏の入口、鐵の棒、火の車の請おひ、釜も新敷仰付られ候よりは、古地獄にて底のぬけたるを取集て鑄懸させ、竹の根を堀、燈心も、蠟燭屋の切屑を御買上になさるゝが至極下直に付候。少〻の事にても、地獄の年數は假初にも百万劫などゝ久々の事なれば、塵積て山師共の謀、又は三途川の古着を一人にて座に仰付られば、其かはりには獄卒衆中樗蒲一に御まけなされ、虎の皮のふんどしを質に御置なさるゝとも、隨分利安に仕らん。左ある時は惣地獄の御うるほひにも相成申べしと、己が勝手は押かくし、お爲ごかしに數通の願書、地獄の沙汰も錢次第、油斷せぬ世の中とぞ知られける、閻王もさま〲の政を聞せられければ、少の暇もなきをりふし、獄卒ども地獄の地の字の付たる高提灯を先に立、一人の罪人を引立來れり。閻王はるかに御覽あれば、年の頃廿斗の僧の色白く痩たるに、手かせ首かせを入、腰のまはりに何やらんふくさに包たるものをくゝり

付てぞ有ける　此者いかなる罪にてか有と尋給へハ、かたハらより倶生神罷出て申けるは、此坊主は、南瞻部州大日本國江戸の所化なるが、堺町の若女形瀬川菊之丞といへる若衆の色に染られて、師匠の身代からくれない、錦の戸帳は道具市にひるがへり、行基の作の彌陀如來ハ質屋の藏へ御來迎、若衆の戀のしすごしに、尻のつまらぬ尻がわれて、座敷牢に押込られ、したふかいなく己が身を、宇津の山部の現にも、逢れぬ事を苦に病て、むなしくあの世を去けるが、だんまつまの苦にも忘得ぬハ、路考が俤なりとて、此處までも身をはなさず、アノ腰に付たるハ、鳥居清信が畫たる菊之丞が繪姿なり　若氣とハ云ながら、師匠親の目をかすめたる科、一々鐵札に記置たり。しかしながら、今時の坊主、表むきハ抹香くさい貌しながら、遊女狂ひにうき身をやつし皃を明神、葱を神主などゝ名付、取喰ふから見れハ、坊主の優童狂ひハ其罪輕に似たれハ、劔の山の責一等を許、彼が好處の釜いりに仕らん、と寛バ、閻王以の外怒せ給ひ、いや〳〵彼が罪輕に似て輕からず。都て娑婆にて男色といへる事有よし、我甚合點ゆかず。夫婦の道ハ陰陽自然なれハ、其はづの事なれども、同じ男ををかすこと決て有べからざる事なり。唐土にては久しき世より有て、書經には頑童を近る事なかれといましめ、周穆王は慈童を愛してより菊座の名始り、彌子瑕、董賢孟、東野が類、また日本にはハ弘法大師渡天の砌、流沙川の川上にて文珠と契をこめしより、文珠は支利𦬇の號を取、弘法ハ若衆の祖師と汚名を殘し、熊谷の直實は無官の太夫敦盛を須磨の浦にて引こかし、ハリハドッコイなされけるとうたハれ、牛若は天狗にし

められ、増賀聖の業平、後醍醐帝の阿新、信長の蘭丸、其名も高尾の文覺ハ、六代御前にうつゝをぬかし、いらざる謀反をすゝめこみ、頼朝のとがめを受しより、妾婆にて尻の來るといふ詞始れり。但馬の城の崎、箱根の底倉へ湯治するもの多きハ、皆此男色の有ゆゑなり。昔は坊主斗がもて遊し故にや痔といふ字は疒冠に寺といふ字なり。しかるに近年ハ僧俗押なへて好こと、甚以不埒の至りなり。今より娑婆世界にて男色相止候樣に、急度申渡べしとの勅命、皆々はつとお請を申けるが、十王の中より轉輪王進出て申けるハ、勅定を返し奉るは、恐多きに似たれども、思ふ事いハでやミなんも腹ふくるゝわざと、仰の通り男色も亦害なきにハあらず、しかハあれども、其害女色に比すれバ至て輕くして中〳〵同日の談にあらず。譬バ女色はその甘こと蜜のごとく、男色は淡こと水のごとし。無味の味ハ佳境に入ずんバ知がたし。是は畢竟大王の若衆御嫌なるがゆゑ、上戸の餅屋をやめさせ度と申がごとし其上娑婆の評判を餘所ながら、菊之丞が絶色なる事兼てよりかくれなければ、せめて此世の思ひ出に、繪姿なりとも見まほし。此義ハ何とぞ御免を蒙たしと願へバ、閻王は不機嫌にて、蓼喰ふ虫も好〳〵とハ其方が事なり。然れどもたつての願もだしがたし、繪圖を見る事ハ勝手次第たるべし。ゑかしおれハ若衆を見るハ嫌なれバ、繪の有内ハ目を閉て見まじき程に、早く〳〵と御目を閉させ給へバ、彼罪人が持たりし姿繪を柱に掛けるに、清如春柳含初月艶似桃花帶曉烟その姿のあてやかなる事、ゑもいハれざれハ、人々ハ目をはなさず、はつと感じて暫は鳴もやまず。誠や、

娑婆にてうつくしきものハ、天人の天降たるといへども、それハ畢竟遠が花の香なり。此國の極樂にてハ、凧巾を登す同然に、常に見る天人なれバ美しいとも思はず、路考とくらべて見る時は、閻广王の冠と、餓鬼のふんどし程の違ひあり。聞しにまさる路考が姿、古今無双の器量かなと、十王を始として、見る目は目玉を光らし、かぐ鼻ハ鼻をいからし、其外一座に有あふたる牛頭、馬頭、阿防、羅刹まで額の角を振立て感ずる聲止ざりければ、閻王覺へず目をひらき御覽しけるに、越なふあてやかなるに心動、初笑しとハどこへやら、只茫然と空蟬のことぬけのごとくになりて覺ず、玉座よりころび落給へバ、皆々驚いたき起し奉れバ、漸正氣付せ給ひ、ため息をほつとつき、扨〳〵かた〳〵が見る前面目もなき事ながら、我思ハずも此繪姿のみやびやかなるに迷たる心を、何と遍照が歌のさまなる我ふるまひ。扨つく〳〵と按ずるに、古より美人の聞え数もかぎらぬ其中にも、またならぶべき人もなし。西施がまなじり、小町が眉、揚貴妃か唇、赫奕姫が鼻筋、飛燕が腰つき、衣通姫の衣裳の着こなし、ひつくるめたる此姿、桐は御守殿、山丹ハ娘盛と瞿麥の、などゝハ並〳〵の事、花にも月にも菩薩にも、又あるべきともおもほえず。まして唐日本の地に、かゝるもの二度生ずべきにあらざれバ、我も是より冥府の王位を捨、娑婆に出て此者と枕をかわさバ、王位の貴も何かハせんと、御目の內もえどろにてうかれ出んとし給ふ處に、宗帝王かけ出、御袖をひかへ、にがり切て申けるは、これけしからぬ大王の御振舞、わづか一人の色におぼれ、此冥府の王位を捨、娑婆に出て人間にまじわり給ハゞ、地獄極樂

琰王宮

の政は執行者もなく、善惡を正すべき所なければ、三千世界の衆生は何を以て敎させんや。かゝる貴き御身をバ、優童買と成果給へど、極樂に滿々たる金の砂は、忽に堺町の有となり、いくら有とも使足らずは、金のなる木がわしやほしいと悔段に成ては、極樂の先生釋迦如來の黃金のはだへまで、潰に掛て下金屋へ賣てやり、地藏菩薩は長太郎坊主同然に、子供のなぶりものと落ぶれ、びんが鳥は兩國橋の見せものとなり、天人も女衒の手に渡り、三途川の姥はのり賣姥と變じ、仁王は辻竹輿かくやうに成行かば、地獄極樂破滅せんは目のあたりなるに、其氣の付ざる御年ばいにもあらず。また譬當世を見習て、蝙蝠羽織に長脇指、髮は本田に銀ぎせる、男娼買と見せ掛ても、色のこれる御顏にてもましまさず。昔海老藏が景清の狂言にて、御姿を似せしさへ、婆婆の者共はおぢおそるゝに、其御姿にてぶらつき給はゞ、うさんな者と召捕れ、大屋を詮議せらるゝ時、大屋は釋尊、名主は大日と云たりとも、證據に立者もなければ、無緣法界の無宿仲ヶ間へ入られて、憂目を見給はんは案の內、それとも御得心なくば、此宗帝王、御前にて腹かつさばき申べし、御返答承らんと、席を打て諫ける處に、平等王すゝゞと立出、申されけるは、宗帝王の諫言は、比干が胸をさかれ、伍子胥が眼をぬかれ、木曾の忠太が義仲を諫て、腹切たるにも、をさ〳〵おとるべうはあらねども、日頃御偏意地の大王、一旦仰出されたる事は變じ給はぬ御氣質、一杯の水を以、車薪の火は救がたし、いか程に諫給ふとも、馬の耳の風牛の角の蜂とやらで、さして御爲にもならぬ山の、この手柏の二面に、男とも見え女とも、みめよき、

路考が姿故に、此冥府を捨給はんとは、世上の息子の了簡にして、地獄極樂の主たる大王の智と云ふべきにあらず。是非〳〵御望とある事ならば、使をつかはし召捕て參んに、何條事の有べきや。何れもいかにと申されければ、一座の人々口を揃、平等王の評議、甚道理に當て碎る大王も尤と聞れければ、いざや路考を召捕に遣すべき使を詮議せられけるに、泰山王申されけるは、それ人生れては定業にあらざれば、此土へは來らざる習なり、いざ〳〵定義帳を詮義あるべしとて取出させ、つく〳〵とくり返して申されけるは、午の霜月佐野川市松、未の七月中村助五郎、腫物にて死すべしとは有ども、菊之丞か命はいまだ盡べき時節にあらず、御使を遣されたりとも、彼國には伊勢八幡を始として、彼か氏神王子の稲荷なんどとて、四も五も喰はぬ手あひにて、此界をも直下に見下すおへない親父が澤山に守り居れば、中〳〵表立ての御使にては存もよらず、此義いかにと申されければ、初江王進出て申けるは、それこそ安事なんめり、愛宕山の太郎坊、比良山の次郎坊などに申付なば、忽抓て參んこといとやすし。誰かある、天狗ともを召寄よと呼はり給へば、五官王しばしと押とめ、いや〳〵此評議宜かるまし。情を知らぬ天狗ども、力にまかせ引抓で、もし疵付ては悔で返らず、それより疫神を遣さるゝが近道ならんと申さるれば、變生王かぶり打ふり、イヤ〳〵疫病神といへども、のふさんころり山椒味噌と、手短に殺事はなりがたし、大陽經から段々傳經をしている内には、大王御待遠なるべければ、疫病神は御無用たるべし。一向それより近道は、今世上に澤山なる醫者どもに申付れば、一ふく

にてもやり付る事、疫神などのおよぶべき所にあらず、此使は醫者共に申付んと申されれバ、皆尤とうなづき、先よく殺醫者ハ誰〳〵ならんと評定ありけるに、一向文盲なる醫者ハ、これがつてめつたなる藥ハもらず、何見せても六君子湯、益氣湯の類、一腹の掛目わずか五分か七分の藥にて、白湯に香煎も同前、つまる所は一ふくで何分ッヽのわりを以、謝禮をせしめる斗にて、毒にもならず、藥にもならざれハ、そろ〳〵干べりのするハ格別、急に殺すことハ成がたし。小文才のある醫者は、人を殺が商賣なれば、一ふくにても驗あるべしと申上れバ、閻王暫御思案あり、イヤ〳〵近年の醫者どもハ、切つぎ普請の詩文章ても書おぼへ、所まだらに傷寒論の會が一へん通り、濟やすますに自古方家或は儒醫などゝハ名乘れども、病ハ見えず、藥ハ覺えず、漫に石膏、芒消の類を用て殺ゆゑ、死て此土へ來るもの、格別に色も悪く痩おとろへて、正眞の地獄から火を貰に來たと云ふやうな形になる事、是皆當世の醫者共、己が盲はかへりみず、仲景、孫子邈、張子和など同じやうに心得て、鸚鵡の眞似をする烏なれバ、かあいや路考も藥毒に中て死たらバ、花の姿も引かへて、火箸に目鼻と痩おとろへバ、呼寄てから詮もなし。何とぞ無事に取寄て、互ちん〳〵ちがひの手枕に、娑婆と冥途の寐物語、緣につるれバ日の本の、若衆の肌を富樓那の辯、舍利弗が智惠、目連が神通をかりてなりとも、片時もはやく呼寄て、朕が思ひをはらさせよと、しほ〳〵として宣へバ、さしもの十王方便に盡、もはや我々が智惠も中橋なれハ、此上は修羅道へ使を立、太公望、孔明、韓信、張良、孫子、吳子、武則、義經、正成、道鬼が類の軍、

師どもを召れ、御評議然べしと申上れば、末座より、色至て赤、眼の光鏡のごとく、口耳のきわまで切て、首有て形なきもの出るを見れば、人の一生の事を見届て帳に記す横目役、見る目と云る者なり。閻王の前にすゝみ出、かた〳〵の御評議御尤には候得ども、是式の事に修羅道へ人を遣し、軍師どもを召れんとハ、此界の耻辱といふべし。其上彼等が智謀計略にて、此方の智恵を見すかされなバ、いかなる謀をなして、小夜嵐の騒動以後太平の地獄界、再亂世となるならバ、上閻王より下獄卒に至までの難義なれバ、軍者を御招ハ、御無用たるべし。私ハ人のかたに居て善惡を規か役目なれバ、人々心に思ふ事をも、明白に是を知れり。菊之丞を初として其外の役者ども、船遊に出べききざし有事、兼てより存たり、此虚に乘て、謀給ハヾ、やわか御手に入ざらん哉と、聞より大王悦び給ひ、それ〳〵つきやうの事なめり、水邊の事なれば、いそぎ水府へ使を立、龍王を呼寄よ、畏候とて、數多の鬼の中より、足疾鬼とて、またゝく内に千里行て千里戻、地獄の三度、仲ケ間へ仰付られければ、兎角する間もなく八大龍王の惣頭、難陀龍王參内と披露させ、衣冠正しき其よそおひ、頭に金色の龍をいたゞき瑪瑙の冠、瑠璃の纓、珊瑚琥珀の石の帶、玻璃の笏、瑇瑁の履、異形異類の鱗ども、前後をかこみ參内あり。御階の本にひれ伏バ、大王はるかに御覽あり、珍しや龍王、只今召こと餘の義にあらず、此大王うこそ恥しくも、心をくだく戀人ハ、南瞻部州日本の地に、瀬川菊之丞と云ふ美少年あり、是を我手に入れんため、さま〳〵と評議せしに、彼菊之丞近日船遊に出るとの事ゆゑ、水中ハ汝が領分なれバ、急

ぎ召捕來るべしとありければ、龍王ハ恐入、勅定の趣いさい畏り奉る、私支配の者どもには、鰐、鱶魚を初として、水虎、水獺、海坊子なんど、人を取と妙を得て候へば、此者共に申付、急に召捕差上て、宸襟をやすめ奉んと、事もなげに勅答あれハ、大王怡悦ましましくて、然ハ菊之丞が來迄ハ、奥の殿に引籠、天人どもに三絃彈せてなぐさまん。此砌に罪人どもが見へたりとも、大抵輕は追返し、重きやつハ先六道の辻の溜へ打込で置べし。また最前の坊主め、菊之丞に身を打し事、初ハ憎しと思ひしが、朕が心にくらぶれバ、若い者の有そふな事なれバ、再び娑婆へ返べし。去かし此後、菊之丞買とハ法度たるべし、辨藏、松助、菊次なんどを初として、其外湯島神明に至るまで、外の者は免許なるぞと勅定ありて、御簾さつとおりければ、龍王は水府に歸り、皆々退出したりけり。

根南志草一之卷　終

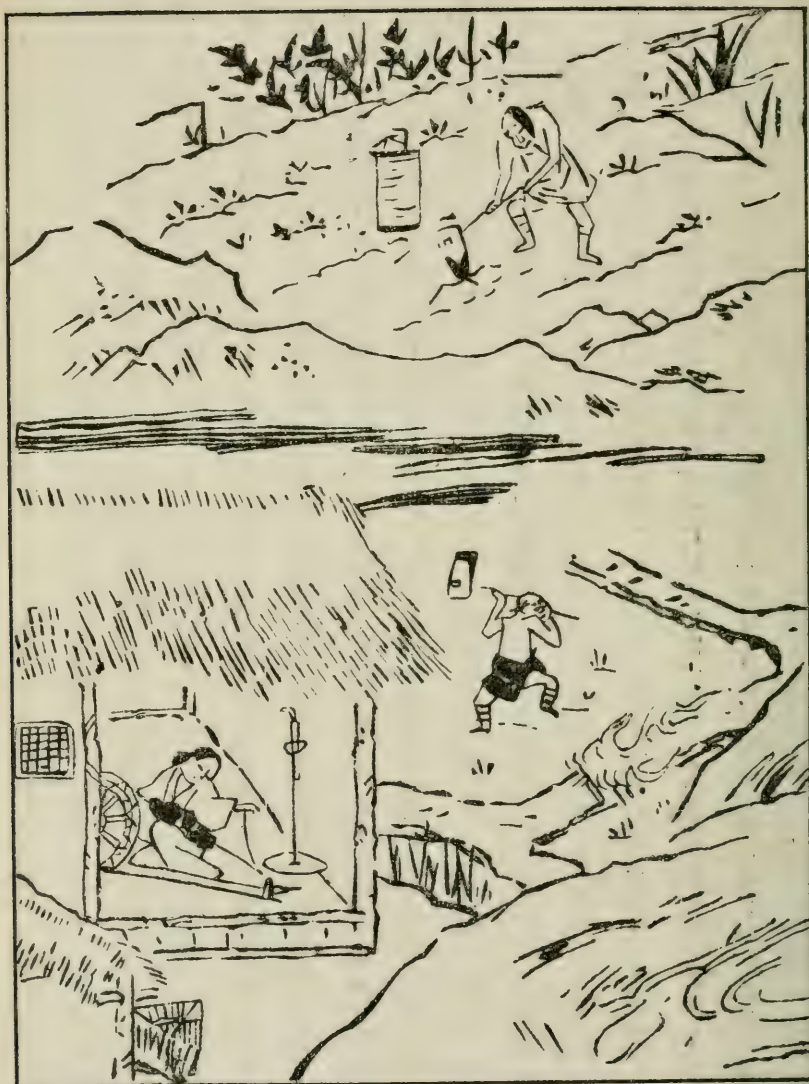
根南之久佐二之卷

抑狂言の濫觴を尋に、地神五代の始天照太神、此日の本を治給ふに、御弟素戔鳴尊、御性質甚きやんにてましませバ、何事も麻布にて、様々どうらくをなし給ふ。太神是を愁給ひて、あの通の安本丹にてハ行末心もとなしとて、色〳〵御異見ありけれども、久しいもんぢやソリヤない。ひいなと思て請付給ハず、後にはいろ〳〵の悪あがき長じければ、天神慍まして、天石窟に入まして、磐戸を閉て籠給ふ。故に六合の内常闇にして、晝夜の相代をも知らず、初の程は行燈、挑灯にても用を辨しけるが、何が家〳〵にて晝夜不斷とほす事なれバ、俄に蠟燭、油の切もの、次第に直段は高間が原、神の力にも自由にならぬハ金銀なれバ、中以下にてハ挑灯とほすこともならされバ、馬士の神、車引の神などハあられぬ所へ引かけて、神ンたゝきに打合、神抓に抓合、町〳〵小路〳〵にて喧嘩のたゆる隙もなし。されども闇夜の盲打、誰相手と云ふ事も知れず、公へ持出しても、くらかりに牛つないだ様にて、是非のわかちも付かたければ、先世の中の明るく成まではハ、名主の神大屋の神へ御預との事なり。扨また世間のつきあひ等は、俺服にても目に立ねバ始末にはよけれども、或はいつ何日に御出合申へしといふ事も、正眞の闇夜の鐵砲にてあてどもなく、物を洗ても火であふるより外は干べき手たてもあら

されハ、士農工商の神〳〵、業を勸る事もならず、中にも色里にてハ、いつを夜とやと時も知れねバ物日などゝいふ事もなく、花の時やら燈籠やら、わけもなくなりゆき、客も初の程は志つぽりとして結句能などゝて來るものも多かりしが、次第に世間かまびすしくなりけれハ、後には遊者もなく、太夫格子さんちやより、河岸女郎に至まで、さしも多かりし馴染の客も、科戸の風の天の八重雲を吹はなつとのごとく、繁木が本を燒鎌の、敏鎌を以て打掃ふ事のごとく、こととふ者もあらざれバ、忘八夫婦ハ頭痛八百、やりて若い者なとを呼寄、コリヤマアとふしたらよかろふと、四人額に皺をよせ、八の耳をふり立て、色〳〵評議の詮もなく、口に諸〳〵の噂はすれども、目に諸の客を見す　借の有茶屋、船宿は、拂給へ清め給へとせかむへき相手もなく、牽頭が貰ふた紙花も、坎、艮、震、巽の卦に當たとの悔言。其外上下押なへて、勝手によいといふものは、只鼠と朝寐好の男より外にはなし。是てハ世間ささほうさになりてたまるまいと、八百萬の神、天ノ安ノ河邊に會て、色〳〵評議ありけれども、さして尤らしき事もきこえず、或ハ石匠に入札させ、天窟屋を切開んといへは、イヤ〳〵若太神怒給ひて飛去ハゞ、甚難澁なるへしと、評議さらに一決せざりし處に、近松氏の祖思兼神進出て宣ひけるハ、中〳〵外の事にて御機嫌ハ直給ふまじ、太神常に狂言を好給へバ、岩戸の前にて狂言を初なハ極て岩戸を開かせ給ふへしと申けれハ、皆〳〵至極尤なり、是ハ慥に當そふな趣向なりとて、扨役者をこそ撰れける。先立役荒事角かつらにての一枚看板手力雄神、丹前所作事やつし色事師には天兒屋、

命、敵役には太玉命、わけて其頭名も高き、黒極上々吉、女房方娘方おやま所作事引くるめて、若女形のてつぺん天鈿女命、其外居なり新下り、惣座中殘ず罷出、第四番目まで仕御目にかけまするとのはり紙、明日顔見せと聞つたへ、諸見物山のごとく詰懸れバ、芝居の內より茶屋の門〳〵、それ〳〵のひいきの定紋たる挑灯ハ星のごとく、天香山の五百箇眞坂樹を植て氣色をかざり、常世の長鳴鳥を吸ものにして吞掛れハ、常闇の世も明たる心地、神〳〵ハいさみをなし、思ひ〳〵の積物、天神組、地神組と左右にわかち、花をかざりきらを盡けるか、いつあくるともなく約束の刻限に成ければ、木戸口はどや〳〵もや〳〵錐を立てるの地もなく、誠に天地開闢以來かゝる大仕組はあるまいと、知るも知らぬも、老たるも若きも、我一との人群集、式三番も終り、お定の口上も相濟ければ、是より天浮橋瓊予日記、一番目より段〳〵狂言に實かいり、程なく第三番目に至て、天兒屋命ハ磤馭盧丸、本名伊弉諾尊の役、天鈿女命ハ傾城浮橋、本名伊弉冊尊、つもり〳〵し揚代三百兩の金の代に、天瓊予を揚屋か方へとられしを、太玉命ハ大戸之道尊の役にて、兩人の瓊予を詮議し給ふ檢使の役、此處にて檢使のつよき、兩人の愁の所、諸見物ハ感に堪兼、イヨおらが鈿女のよ、イヨ兒屋樣、太玉樣などゝ、棧敷も下も聲〳〵に、暫鳴もゑづまらず。此時天照太神聞し召て、下地ハ好なりたまられず、御手を以て磐石を細目に開て是を窺す。折よしと三人の尊立寄て、岩戸を明んと手をかけ給へバ、太神ハたてんとし給ふ。互にえいやと引力、勝負ハ更に付ざりけり。時に向の切幕より暫く〳〵と掛聲あり、太神御

聲うるはしく、今朕が岩戸をたてん、いやたてさせじと爭ところに、暫と留て出たは、何者なるぞと宣ふ内、拍子木俄にくわた〳〵、大薩摩尊淨瑠璃をかたり給へは、切幕をさつと明、柿のすはうに大太刀はき、市川流の貌のくまどり、鬼かイ、ンニャ神かム、エイ手力雄尊だモサアと、せりふに味噌の八百萬程上て、つか〳〵と立寄、何の苦もなく岩戸を取てつまみ碎、天照太神を引出し奉る中臣神、忌部神端出之繩を引渡す。日の神出させ給ひければ、昔のごとく明るくなり、人の面しろ〳〵と見えしより、芝居を見て面白やといふ事は、此時よりぞ始りける。扨また同じ神代に彦火火出見尊の太夫元にて、火酢芹命など狂言興行ありけれども、金元なかりし故に、赭とて赤き土を手にぬり、貌に塗て勤められしかども、一向に入もなくて、太夫元の名代もつぶれける。又翰林葫蘆集なとを考れバ古は神樂とも云しを、聖德太子神樂の神の字の眞中に墨打をして、秦河勝に鋸にて引割せ、是を名付て申樂といふ。其後の人申の字の首と尻尾とを打切て、田樂と號して專行れけり。其後は田の字の口をとりて、十樂などゝも名付べきを、永祿の頃出雲のお國といへる品物、江州の名古屋三左衛門となんいへるまめ男と夫婦となり、歌舞妓と名をかへ、今様の新狂言を出す。夫より千變萬化に移かはり、江戸は江戸風、京は京風と分れ、物の名も所によりてかはるなり、浪華の蘆屋道滿が伊勢座から名古屋の繁昌、安藝の宮嶋、備中の宮內、讚岐の金毘羅、下總ノ銚子まで行渡らぬ所もなく、三歳の小兒も團十郎といへばにらむことゝ心得、犬打童もぐにやつく事は富十郎なりと覺ゆ。されは太平の

世の翫、人を和するの道にして、孟子にいわゆる世俗の樂たりともまた捨べきにはあらず。去かはあれども、高貴の人自其わざを學び、烏帽子の緒も掛る顔を紅白粉にて塗よごし、政をも談ずべき口にてせりふなど吐出して、みづから樂とおほゆるは、片はらいたき事なり。或愚人、我死て先の生は松魚になり度といへるを、傍の人聞て何故松魚になり度やといへば、松魚はうまきものなればなりといへるに、同じ松魚も喰ふてこそ味あるべけれ、我松魚になりて人に喰れては、我はうまくはあるまじ。狂言も役者にさせて見るはよし、自是をするとも面白はあるまじきとなれども、樂はまた其中に有馬筆、人形まわしや狂言にて日を暮す、貴人の心の樂とする處のひれつなる事は、我心に問て知べし。曾子は飴を見て老を養んことを思ひ、盗跖は是を見て錠をあけんことを思ふ。下戸は萩を見てぼた餅を思ひ、歯なしは淺漬を見て蕣菜卸を思ふも、皆人〳〵の好處へ情の移が故なり。好こそ物の上手なりとて、親好は孝行の名を上、主好は忠臣の名を殘す。是等の好は積とをいとはす、其餘の事は好なりとて、心をゆるす時は害をなすと少からず。食は躰を養ふ物にして、過時は命をそこない、酒は愁をはらふといへども、内損の愁はのまぬ先の愁にまされり。火事がこわひとて、一日も火を焚ずしては逗留のならぬ浮世なれば、兎角得失はみな其用る處にありと知るべし。芝居も勸善懲惡の心にて見る時は、敎ともなり、戒ともなれども、是に溺る時は其害少からず。或はまた人の妻女の櫛笄に役者の紋を付て頭にいたゞくを、涎たらして見て居る亭主の鼻毛三千丈たはけによつてかくのごとく長と、

李白に見せたら詩にも作そふな親玉も世に多し。扨また役者も、昔ハ名人多かりしが、寄年の引道具にハ拍子木の相圖もいらず、そろ〳〵あの世へせり出し道具、蓮の臺へ早替りしてより、堺町、ふきや町、木挽町、三方の芝居に餝海老なく、狂言の骨もぬけたか屋の高助を始として、名人の名をむなしく印の石にとゞめしめより、又名人と呼るゝ人の希なるハ何ごとぞや。されば諸藝押なべて昔の人よりおとれるハ、近世人の心、懦弱にして小利口にして大馬鹿なる故なり。昔の役者ハ師に隨て隨分其業を傳へ、晝夜心を用たるゆゑ名を揚しもの多し。近年の役者ハ、師匠と云ふも名字を貰ふ斗にて、山上参りの權大僧都の官にのぼる樣に心得て、氣と給金斗が高く成て、修行すべき藝ハ學ず、兎角女に思ひ付るゝを第一とし、我より目上なるをも非に見なし、味噌を上ればよいことゝ心得て、作者の詞をも用ず、縦一花の思ひ付にて、評判を取といへども、其おとろへの早きと、鐵炮の玉に帆を掛たるがごとし。是皆心を用る事疎が故なり。今ハ昔、澤村小傳次といへる若女形、河内の藤井寺の開帳へ参りて、小山といふ處に宿しけるが、小傳次曰、一日竹輿にゆられて血暈がおこりしといへるを、連にて有ける竹中半三郎、小松才三郎、尾上源太郎など笑ていわく、いかに女形なればとて、男に血暈とハと腹をかゝへけるを、其座に西鶴も居合けるか、大に感じて曰、稚より形も詞も女のごとくならんと日頃にたしなみしより、假初の頭痛も血暈と覺えしハ、扨〳〵ゑほらしき事なりといへるとなり。實に其業を專一に勤るものハ、皆〻かくのごとくありたきものなり。然バ敵役ハ常に人をいじめ、或ハ芝居、

ですることき惡工をして、日に二三度も本に殺れて見るやと理屈いふへけども、是又左にあらず、惡き事ハ似せる事易し、譬芝居でなくとも、惡人になるのハ何のざうさもなき事なり。只善に移る事ハ勤ずんばなりがたし。殊に男にて女に見せる事ハ、至て心を用ずんバ上手にハ成がたし。小傳次がたしなみ誠に感ずべき事なんめり。近年ハ若女形にて、舞臺へ出たる處ハやさしくも見ゆれども、常の身持ハ、けふもあさつても鮫鞘の大脇指をぼつこみ、うでまくりして茶碗で清左をもちりちらし、其上にたれをかきさがしまわした跡でのはりこみ惡たい、舞臺で見た時の仕打とハ、お月樣とひし餅、下駄と人魂程違ふたるよし。縱一應評判よくとも、名人の名を得る事にハ至りかたるべし。かゝる中にも蓮葉の濁にしまぬ玉の姿、瀨川菊之丞となんいへる若女形あり、此人先菊之丞が實生にハあらかねの、土の中より堀出したる分根なるが、二葉の時よりも生立野菊の類にあらずと、評判は高作器量ハ外に並度菊ともてはやされ、今三ケ津に此歲にして此藝なしとの是沙汰、末賴もしき若者にてぞ有ける、頃しも水無月の十日あまり、わけて今年ハ去し頃霖雨の降つゞきて、俄に照あがりたる跡なれバ、暑ハいつよりも强、風見ハ作付たるがごとく、草ハ晝るに似たり、道行人ハ汗となりて消なんかと苦、犬の舌ハ解て落んかと疑ふ、人〳〵暑をさけん事をのみはかりけり。菊之丞も我家にありて、暑をなん苦居ける處に、同し若女形荻野八重桐來りけるが、同座の勤といひ、共に戴紫ほうしのゆかりの色も有中なれバ、心置べきにしもあらず、そこらを三保の松ならで、羽衣をぬひて掛ざほの、

掛かまいなく打解れバ、菊之丞が妻ハ馳走ぶりと、後から扇の風も既にそよ〳〵、深川にて人なれし者なれバ、葛水もつめたい所へ心を付てのもてなし。一ツ二ツの物語も、半は暑の噂なるが、八重桐が云けるハ、わけて今年は暑もつよき故、涼船の多き事是までになき賑ひなり、幸此砌ハ芝居も休の事なれバ、一日出なんハいかにと云ふ。菊之丞曰、我も兼て其望ありながら、事繁にまぎれて打過ぬれバ、いざや一日出て遊んとの催、然らバ連をも誘ふべし、去かしあまり大勢もそう〳〵しけれバとて夫より来ル十五日と日を定て、鎌倉平九郎、中村與三八なんどへ使していひものしけるに、何れも去かるべしとの返事なれバ、いよ〳〵十五日早朝よりときハめ、船中の事などつど〳〵に約しつゝ、八重桐は我家にぞ帰りける。

根南志草二之巻　終

根奈志具佐三之巻

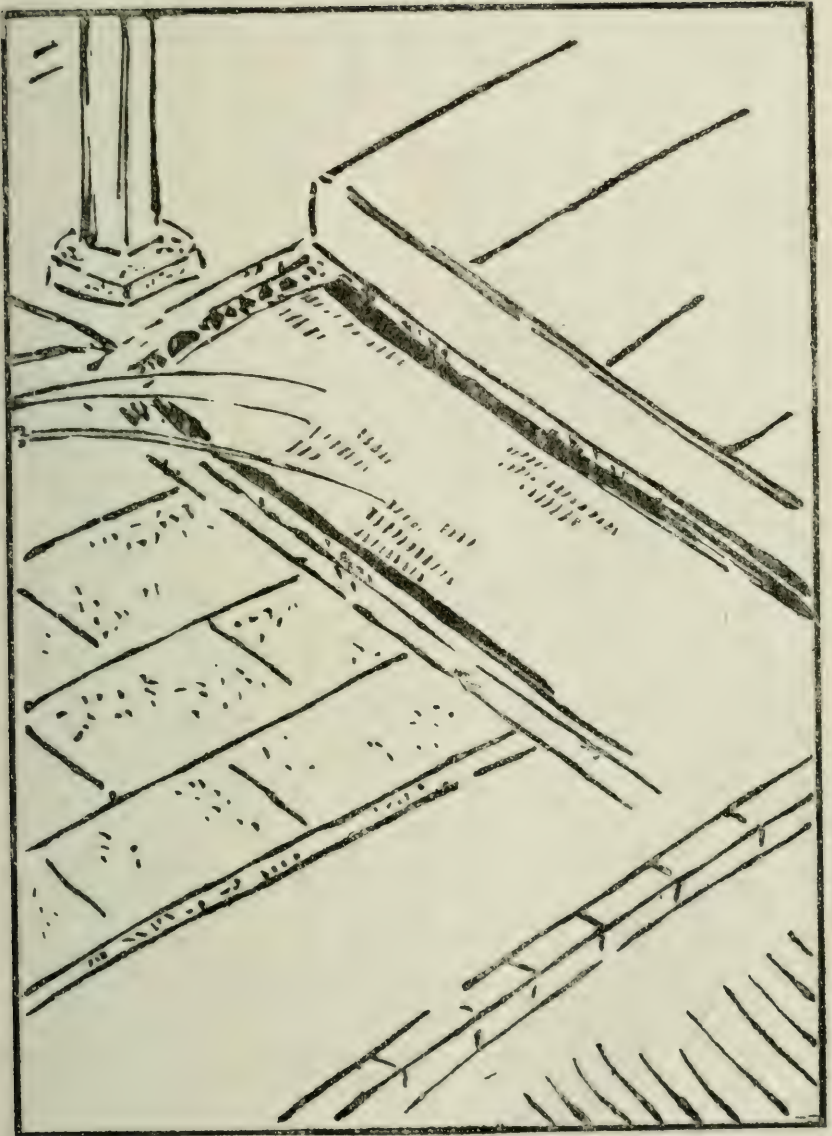
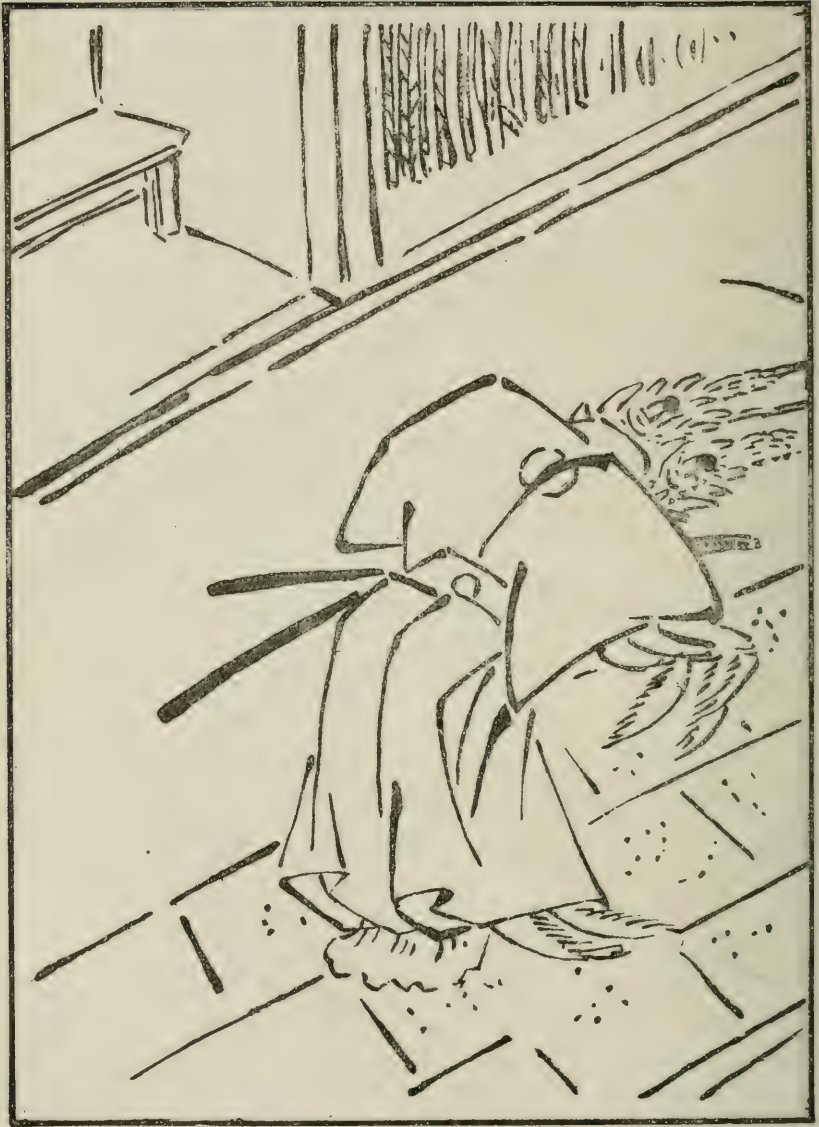
去程に龍宮城にハ、先達て閻魔大王の勅命を蒙りければ、急ぎ菊之丞を召捕べき評定あるべしと、諸の鱗ども列を正して相詰ければ、龍王仰出さるゝハ、我閻魔王の幕下に屬し、此水中界の主となり、多の鱗を養ふ事、皆大王の御恩なれバ、かゝる時節に忠義を盡さずんハ、いつの世にかハ御恩を報じ奉んや。しかハあれども世界をへだてゝの事なれバ、容易く取り得る事かたかるべし。若此度の御用を仕損じなバ、其祟ハ三途川の川ざらへか、極樂の御修覆など仰付られてハ、近年は押なべて、金魚、銀魚の手ハまハらず、ほう／＼より緋鯉にセつかれ、世間のしびも白魚のひしことつまりし時節なれバ、甚難義たるべし。若逆鱗つよき時は、我々此水中を離て、いかなる所へか追立られん。もし三十三天の内などへ左迁などとある時は、道中にて皆々枯魚となるべければ、假初ならぬ一大事、急ぎ菊之丞を召捕へき思案あるべしとの仰。一の上座に坐し居たる鯨、ゆう／＼と立出申けるハ、仰の通り御上の御大事此時なり。私義ハ身不肖ながら、家がらたるを以て、代々大老職相勤、是に並居る鰐、鯊魚なんども家老の座に連り、しび、まぐろなどハ用人を勤むれバ、彼等とも内々評議致セし處、所詮人界の様子、委く聞届たる上ならでハ、謀ハ出まじく存付、手下の者共の内にて、才覺ある者どもを、忍びに遣し置た

れバ、定て様子相知れなんと、中詞も終らぬ處へ、御注進と呼ハり〳〵、眞黑になりて、ころ〳〵とこけ出るハ、本店邊に住居する業平蜆にてぞありける。龍王ハ御聲高く、彼等とき下郎たりとも、甚急ぎの事なれバ、直に聞べきとの御諚。蜆恐れ入て口を明、私儀人界へ忍びの役目を承り、籠の中へはかり込れ、人の肩にかつがれ、方々と歴廻り大抵人界の樣子承りて參たり。先私罷通りし所ハ、處々の新道、裏店が第一なれバ、大名小路ハ勿論、通り筋などの樣子ハ存せず。先始參りし所にて、何かハ知らず私をかつぎし男、一升十五文と申セバ、歳の頃三十斗の女房立出、五文にまけろと云ふ。かつきし男腹を立、とつぴよふずもない盜物てハ有まいし、半分殼てもそふハ賣らないと、惡たいついて立出れバ、跡にて女房、さしも小美い貌しながら、えいかと思ふていけすかないこてれつめ、そんな惡たいハうぬがかゝにつけろと、はり込聲のほの聞ても、かつぎし男は聞ぬ貌して、蜆や〳〵と賣て通れバ、とある格子作りの内にかなきつた聲で、はなたれ娘が三絃をぞ彈居たる。此龍宮界にてハ、琴三絃などハ能樂ばかりの翫かと思ひしに、かゝる少き暮にて、娘に三絃彈すとハ、扮々人間と云ふものハおごりしものかなと思ふ内に、きひらの帷子着て、小紋羽織を手に提た男來りて、お娘ハいよ〳〵やら杰やるつもりに相談ハきまりましたか、一昨日もいふ通り、向は國家の御大名、お妾の器量えらミ、中せいで、鼻筋の通た豐後ふしを語のかあらバとの事、炎なお娘をすりミかきしたら、いけそふなものかと思ふ。殊に先樣御好の豐後節ハなるなり。彌やら杰やるなら、文字に賴で、弟子分にし、

て貰ひ、濟せる樣にしませふ。支度金ハ八拾兩、世話ちんを二わり引ても、八々六拾四五兩の手取、もし若殿でも產て見やしやれ、こなた衆ハ國取の祖父樣、祖母さまなれハ、十人扶持や二十人ふちハ、棚に置た物取よりハやすい事、いよ〳〵やらしやる合點かといへバ、夫婦ハよろこび、イヤモ御深切なおせわの段〻、どれかゝ小半買ふて來ふと、佛壇の下戸棚からはした錢とり出し、かんなべさげて足も空どぶ板をふみぬきながら、裾をまくつて走り行。かつきし男ハ付込で、御祝に蜆買しやれと云を聞より、もし我等も賣れてハなるまいと大勢を押退て、籠の底へかゞんで、ちいそふなつて聞居けれハ、女房ハ盃を洗ながら、けふの祝ハ蜆でハ濟されぬ、かばやきでも買ふとの事故、かつぎし男ふせう〳〵にふりかたけ、又二三丁程行て、四辻を左へまかれバ、今度ハそこら大さわき、大どろほうめと抓合、組んずこけつの人くんしゆ、格子ハめり〳〵皿鉢はぐわら〳〵、手桶の輪がきれて水が飛ハ、疊からハ黑煙、腕に彫物した男ども、大はだぬきに成てのさわぎ、聞た處が姦夫出入、初ハ今も切か挨かと見る内に、イヤ親分しやの割を入るのと、兎や角と云ふ内に、酒五升とけんどん十人前と、下らぬ文言な誤證文一通で、討果ほどの出入が、ついぐにや〳〵とむつ折して、我等をかつぎし男めも、近付かして仲ケ間へ入、茶碗てしたゝか引掛て、千鳥足にて歸がけ、馴染の内へ立寄れば、死だ息子の七回忌とて、天窓に輪の入た道心が、きやり聲をはりあげて、鉦たゝいて百万遍、世帶佛法、腹念佛、豆腐のくつ煮に、干大根のはり〳〵て濟せバ、蜆ハいらぬとはねられて、かつきし男腹を立、あたけたいな、

いま〳〵しいと、歸りに川へさらへ込ミしを幸と、干汐につれて息を切て歸りしと、語もはてぬ處へ、背に角をおふて一文字に成て來るものハ、拳螺にてそありける。是も忍びの役人なれバ、龍王見給ひ、人間界の樣子、いかに〳〵とせめ給ふ。其時さゞえにしり出て申けるハ、私は小田原町から通り筋を一へん廻りけが、先珍しきハ石町の角に、朝鮮人行列附の看板を、おびたゝしくかざりたて賣子大勢にて賣あるき、又珍說ハ旦那のねつた膏藥賣が、奥州の相馬にて主の敵を討しとの取沙汰より外、さして替りたる事も承らずと申上れば、龍王大にいかりをなし、汝等評議ハ何として、ケ樣の役に立ず共を忍びにハ遣セしぞ。此方の入用ハ菊之丞が船遊の日限なるに、其事ハ聞すして、役にも立ぬ事どもを見て歸りしとて、いかめしそふに申段、言語同斷につくいやつ。是と云ふも家老、用人共か、面ゝの身勝手斗を考へて、下ゝの難儀ハかへり見ず、鰮やすばしりの類を澤山してやらふと斗心がけて役儀をおろそかにするゆへ、かゝる大事に魚らしきものもやらず、さゞえや、蜆をやりし段、以ての外の不屆さ、鱗をさか立怒り給へハ、其時鯨鯢をうごかし、仰御尤にはい得共、遣べきもの詮議致せど、他の者ハ水を離れては働こと相ならねは、水を出て息の長ものを撰出セし處に、御用に立ざりし段不屆千万、急度申渡べし。今一人忍ひに入しハ、兼而上にも御存の龍蝦なり。年罷寄たれども、洒ハそこぬけ、ひんしやんとはねる所が當世のひんぬきなりとて、留守居役相勤れバ、元日より人間にまじハり、諸寄合、無盡會、吉原、堺町、岡場所を初、兎角向ふへ廻りたがり、年の暮の淺草市まで、年中、

人にすれるが役目なれハ、定て聞届參んと申上る折から、龍蝦只今罷歸り候と、案内させ、例のとく眞赤になり、腰をかゝめて立出れハ、龍王御覧じ、樣子いかにと尋給へバ、さん候、私儀ハ堺町からふき屋町、樂屋新道、よし町邊へ入込、能く樣子承り候處、來ル十五日、菊之丞を始として、荻野八重桐なんど船遊びに出るよし、微塵毛頭相違なしと、詞少に申上れバ、龍王甚だ悦び給い、流石留守居役を勤る程あつて、世間の穴を能知つて、堺町とハ氣が付たり、神妙の働と御褒美に預て、髭喰そらしてうづくまる。龍王、鰐、鱶魚を近く召れ、此度の役目汝等罷向ふべしと有けれバ、兩人ハツトひれ伏申けるハ、凡人を取事私どもにつゞくものなし。海中の儀にて候ハヾ、いなみ申べきにあらねども、船遊と承れバ兩國、永代の邊なるべけれバ、私共力におよびかたし。虎の勢強といへども、鼠を捕事、猫におとるの道理、譬バ最上の智者たりとも、つかひ處惡き時ハ、却て其智の出ざるがごとし。是ハ餘人に仰付られ志かるへしと申上れバ、龍王暫御思案あり。然バ海坊主に申付べしとて召出されけれハ、油揚にて眞黒にふとりたるが、白帷子に紋呂の衣、五條の袈裟をかけ、珊瑚の珠數をいと殊勝げにつまぐり、罷出て申けるハ、私儀佛弟子となり、身には三衣を着し、口に佛名を唱へて、厭離穢土、慾求淨土、此界の衆生ともハ火宅にあらぬ水宅をのかれて、南無網の目にすくいとられ、往生の素懐をとげる樣にと導こそ出家の役目なれ。かゝる事など勤べき身にしもあらねども、近年ハ私に限らず、諸宗とも皆々風俗惡くなり、出家の身持に有まじき、榮曜、榮花に暮す故、中々定りの布施もつにてハ、遊女狂ひ、

二

お花の元手、重箱で取寄る肴代に不足なれバ、葬禮をかき入、石塔を質に置ても、思ふ樣にまハらざれバ、もの云ぬ佛をだしに遣ふて、愚癡、無智の姥かゝをたらしこそ、こうすれバ、佛になると經文にもなきうそ八百をつきちらし、堂の寄進、釣鐘のほうがなどいひ立、衆生をたふらかすゆへにや、いつとなく化物仲ヶ間へ入られ、姬路におさかべ赤手ぬぐいと、一口に謠るゝ事、佛の敎に有べき事にもあらざれども、御上にも能御存の上からハ、隱べきにもあらず。しかし他所の御用ならバ、人間をたぶらかすハ坊主共の得手ものなれバ、早速御請申上べけれど、此度の御用にハ心苦き事の侍ると。其故ハ、涼船の往來する兩國、永代の邊にハ、見セもの師共甚多く、唐鳥、熊女、碁盤娘なども古、孔雀にも入がなければ、犬にかるわざをさせ、甘藷に笛まで吹セる程の者共、何がな珍しき物見出さんと、鵜の目、鷹の目にてさがし求れバ、私などのやうなる異形の者、あの邊へ貌出しセバ、忽にからめとられ、憂目を見んハ案の内なり。もとより出家の事なれバ、死る命ハいとハねども、大切の御用間違ん事、本意なく覺ゆれバ、餘人に仰付らるべし。緣なき衆生ハ度しがたし。假寺を開とも、此儀ハ御辭退申上んと、魚溜りへぞ引退く。當時諸人に敬れ、智識と呼るゝ海坊主さへ、御辭退申上からハ、我參んといふもの一人もなき處に、奥の方に鈴の音して、いとなまめける姿にて立出るを見れバ、頰高く、鼻少く、脊ハひきく、腹ふくれたるハ、まがふ方なき乙姬に、召使るゝおはしたのお河豚なり。諸歷々の並居る眞中おめる色なく立出、龍主の前に畏り、最前からの御評議を、一ゝあれにて聞やんすれバ、大切のお使に、皆、

様こまりなさんすよし、龍王様の御案もじが御笑止さに、姫ごぜの身で、大膽ながら、わつちが思案を申上ます。世の人毎にわつちをバ、植木屋の娘か何ぞのやうに、毒だや〳〵と云ふらされ、腹か立て、頬をふくらセバ、おふく〳〵と笑れしがる災も三年と、今度の御用を承り、君が情に妾が百年の命を捨、菊之丞が腹へ飛入て、連來んハほんに〳〵心に覺へがありやすと、白歯をむき出し、口をすぼめて申上れバ、龍王ハ思案の躰。傍にひかえたる棘鬣魚、鰭を正してゑづ〳〵と立出、かやうに申セバ、物知り貌に似たれども、僕儀ハ何によらず、祝儀の席をはづさず、仁、義、禮、智のはしくれも覺へしとて、儒者の數に加へらるれバ、かゝる折から差扣んも、尸位素餐にて候へば、覆藏なく申上ん。惣してむかしハ、人間も質朴にありし故、毒といふものハ喰ぬ事と心得、河豚を恐るゝ事、蛇蝎のごとくなりしが、次第に人の心、放蕩になりゆき、毒を知て是を食す。人に君たる方、是を憂ひ給ひて、河豚を喰ふて死たる者ハ、其家斷絶とまで律をたてゝ、上仁を好ども、下義を好まず。ふくや〳〵と大道を賣步行、煮賣店にも公に出置事、上をかろんずるの甚しきといひ、父母より受得たる身躰髪膚を、口腹の爲に亡さん事、五刑の類三千にして、罪不孝より大なるハなしと云ふ。聖人の教にそむくこと、天命のがるる所なし。剰河豚なき時ハ、外の魚をふぐもどきと名付て喰ふ事、歎かハしき事なり。古人の詞にも牢をを畫て、其内に坐セずとて、假にもけがれたる名ハ嫌ふとなり。非禮見ることなかれ、非禮聞ことなかれと、申ことを知らざる世上の文盲なるものハ、是非もなし。小文才有男、或ハ人に毒だちなどを教る醫者な

どに、好んで食ふものあり。是等ハ一向食をむさぼる犬猫のごとし。かく亂たる風俗なれバ、菊之丞も河豚ハ好なるべけれども、天の時を以て申さバ、今水無月の半にて、河豚を喰ふ時ならざれバ、此御評議御無用ならんと申上れバ、龍王もせんかたなく、無用の長詮議に時うつるとも、所詮埒ハ明まじければ、此上ハ此龍王一人自身立向ひ、雲を起し、雨を降し、菊之丞を引抓で、閻魔王へ奉らんと、波を蹴立て立給ふ。一座の鱗前後をかこい鷄をさくに何ぞ牛の刀を用給ん。今一御評議と留ても留らず、前後、左右を踏飛し、黑雲を起し出給ふ處に、御門に扣へたるものつゝと出、御腰をむづとだふりほどかんとし給へども、中々容易動得す、御所の五郎丸にてハよもあらじ、何者なるぞ、爰をはなせとふりむき給へバ、天窓に皿を戴たる水虎にてぞ有ける。龍王御聲高く、己下郎の分として、推參至極と、御手をふり上ケ打んとし給ふ處を、大勢の鱗ども、左右の御手にすがり付、御とゞめ申セしハ、水虎が君への忠義なれバ、惡くばし聞し召れそ。先〻御座に御直りと、無理に引立もとのごとく、御座になほセバ、龍王猶も怒り給ふを、水虎御前にすゝみ寄、天窓の水もこぼるゝばかり、涙をはら〳〵となかし、下郎の身をかへり見ず、無禮セしも寸志の忠義、事にのぞんで、命を捨るハ、臣たる者の職分なり。是に並居る海坊主など、日頃過分の知行を給わり、身にハ錦繡をまとひ、網代の輿に打乘、御菩提所の上人のとあほがれても、スハ君の御大事にのぞんでハ、辯說を以て、我身をかこふ不忠者、私ハ漸御門番を相勤、塵より輕足輕なれども、忠義においてハ、高知の方にもおとるべからず。寺坂が昔を思召あ

てられて、此度の御大事、拙者に仰付られかしと、思ひ込で願ふにぞ、龍王面を和げ給い、彼が申分といひ、力量といひ、用に立つべき奴なれバ、此度の役目申付んと、我も頓より氣の付さるにハあらねども、彼ハ若衆好の沙汰あれバ、猫にかつをの番とやらで、心にくゝ思ひしかども、只今の忠義にめで、大事の役目申し付る。天窓に水のつゞかんたけ、隨分ぬかるな、早急げと、仰をうけし水虎が面目、飛がごとくに走行。

根奈志具佐三之卷　終

根南志具佐四之卷

行川の流はたへすして、志かもとの水にあらずと、鴨の長明か筆のすさミ、硯の海のふかきに殘るすみだ川の流、淸らにして、武藏と下總のさかいなれバとて、兩國橋の名も高く、いざこと問むと詠じたる都鳥に引かへ、すれ違ふ舟の行方ハ秋の木の葉の散浮がごとく、長橋の浪に伏ハ龍の晝寢をするに似たり。かたへにハ輕業の太鼓、雲に響ハ、雷も臍をかゝへて逃去、素麪の高盛ハ、降つゝの手爾葉を移て、小人島の不二山かと思ほゆ。長命丸の看板に親子連ハ袖を掩ひ、編笠提た男には田舍侍懐をおさへてかた寄、利口のほうかしは豆と德利を覆し、西瓜のたち賣は行燈の朱を奪ふ事を惡。虫の聲ミハ一荷の秋を荷ひ、ひやつこい〳〵ハ淸水流ぬ柳陰に立寄、稽古志やうるりの乙ハさんげ〳〵に打消れ、五十嵐のふん〳〵たるハ、かば燒の匂ひにおさる。浮繪を見るものハ壺中の仙を思ひ、硝子細工にたかる群集ハ、夏の氷柱かと疑ふ。鉢植の木は水に蘇、はりぬきの龜ハ風を以て魂とす。沫雪の鹽からく、幾世餠の甘たるく、かんばやしが赤前だれハ、つめられた跡所斑に、若盛が二階座敷ハ好次第の馳走ぶり、燈籠賣は世帯の闇を照し、こはだの鮓ハ諸人の醉を催す　髮結床には紋を彩、茶店にハ藥鑵をかゞやかす。講釋師の黄色なる聲、玉子〳〵の白聲、あめ賣が口の旨、榧の痰切が横なまり、燈、

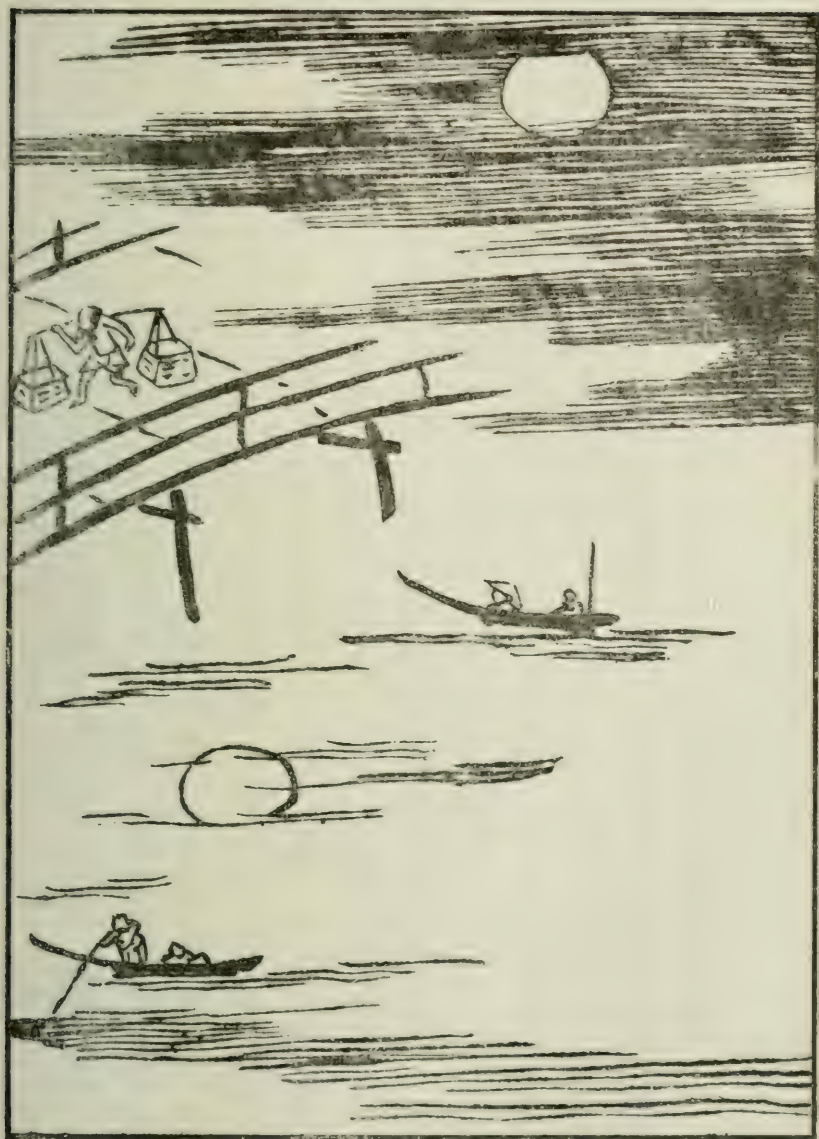
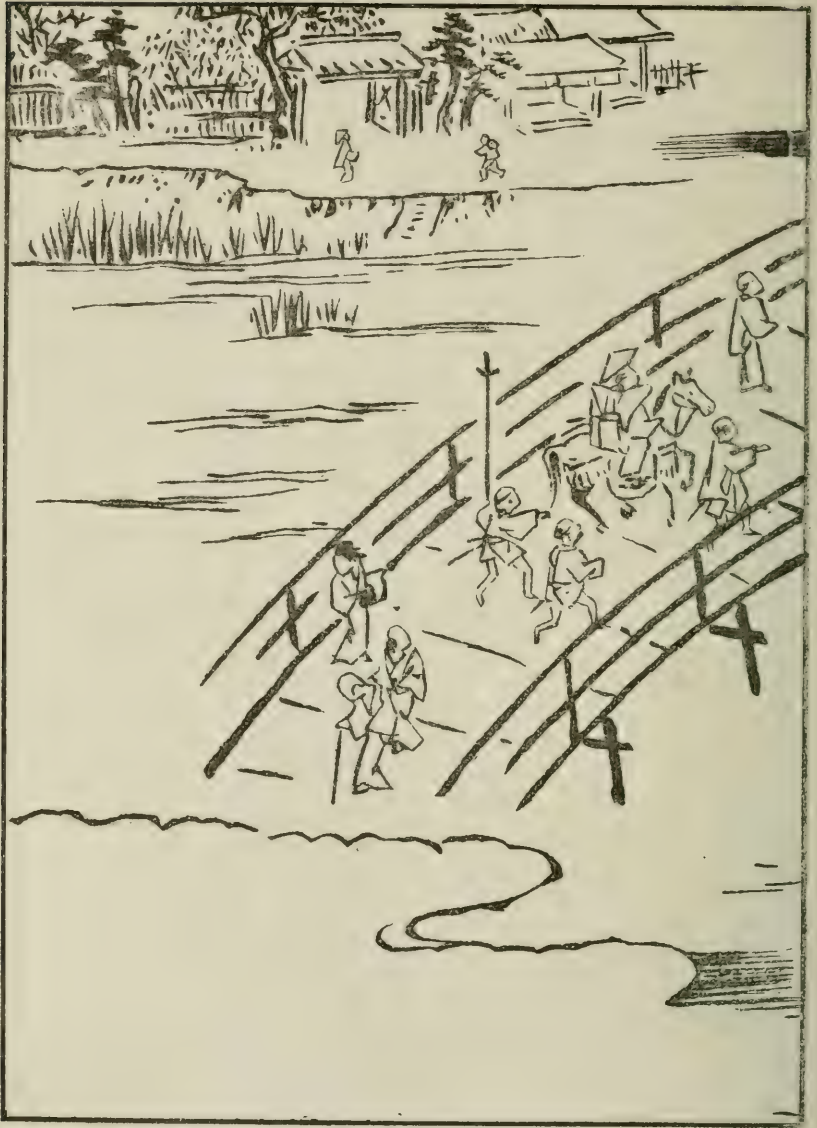
籠草店は珊瑚樹をならべ、玉蜀黍は鮫をかざる。無緣寺の鐘はたそかれの聲に響、淨觀坊か筆力ハ
どふらく者の肝先にこたゆ。水馬は浪に嘶、山猫は二階にひそむ。一文の後生、心ハ甲に萬年の恩を
戴、淺草の代參りハ足と名付し錢のはたらき、釣竿を買ふ親仁は、太公望が顏色を移し、一枚繪を見る
娘ハ王昭君がおもむきに似たり。天を飛蝙蝠ハ蚊を取ん事を思ひ、地にたゝずむよたかハ客をとめん
ことをはかる。水に船か〳〵の自由あれば、陸に輿やろふの手まハしあり。僧あれバ俗あり。男あれバ
女あり。屋敷侍の田舍めける、町ものゝ當世姿、長襦、短羽織、若殿の供ハびいどろの金魚をたづさ
へ、奧方の附〳〵ハ今織のきせる筒をさげ、ものゝのすれる媤は、己が尻を引ずり渡り、歩行のいかつ
がましきハ大小の、長に指れたるがごとし。流行醫者の人物らしき、俳諧師の風雅くさき、ゑたゝるく
てぴんとするものは色有の女妓と見へ、ぴんとしてゑたゝるきものハ長局の女中と知らる　劍術者の
身のひねり、六尺の腰のすハり、座頭の鼻歌、御用達のつぎ上下、浪人の破袴、隱居の十德姿、役者のの
らつき、職人の小いそかしき、仕事師のはけの長き、百姓の鬢のそゝけし、蒭蕘の者も行蕥菟の者も來
る。さま〳〵の風俗、色〻の貌つき、押わけられぬ人群集ハ、諸國の人家を空して來るかと思ハれ、
ごみほこりの空に滿るハ、世界の雲も此處より生ずる心地ぞせらる。世の諺にも、朝より夕まで、
兩國橋の上に鎗の三筋たゆる事なしといへるハ、常の事なんめり。夏の半より秋の初まで、涼の盛なる
時ハ、鎗ハ五筋も十筋も絶やらぬ程の人通りなり。名にしおふ四條河原の涼なんどハ、糸鬢にして僕

にも連べき程の賑ハひにてぞ有ける。又かゝるそう〴〵しき中にも、戀といへるものゝあればこそ、女太夫に聞とれて、屋敷の中間門の限を忘れ、或ハ志ほらしき後姿に人を押わけ、向へ立まれバ、思ひの外なる貌つきにあきれ、先へ行たる器量を譽れバ、跡から來る女連、己が事かと心得て、につと笑もおかし、筒の中から飛出る玉屋が手ぎハ、闇夜の錠を明る鍵屋が趣向、ソリヤ花火といふ程こそあれ、流星其處に居て、見物是に向ふの河岸から橋の上まで、人なだれを打てどよめき、川中にも煮賣の聲〴〵、田樂、酒、諸白酒、汝陽が涎、李白が吐、劉伯倫ハ巾着の底をたゝき、猩〻ハ燒石を吐出す。茶舟ひらだ、猪牙屋根舟、屋形舟の數〻、花を餝る吉野が風流、高尾にハ踊子の紅葉の袖をひるがへし、えびすの笑聲ハ、商人の仲ヶ間舟、坊主のかこひものハ大黑にての出合、酒の海に肴の築島せしハ、兵庫とこそハ知られたり。琴あれバ三弦あり、樂あれバ囃子あり、拳あれバ獅子あり、身ぶりあれバ聲色あり、めりやす舟のゆう〳〵たる、さわぎ舟の拍子に乘て、船頭もさつさおせ〳〵と艫をはやめ、祇園ばやしの鉦太鼓、どらにやう鉢のいたづらさわぎ、葛西舟の惡くさきまで入亂たる舟いかだ、誠にかゝる繁榮ハ、江戸の外に又有べきにもあらず。去程に菊之丞が仕出し舟、荻野八重桐、鎌倉平九郎、中村與三八なんどハ、藝ハもとより珍しからず、さわぎも又うるさし。役者の舟遊に三弦、淨るりを翫は、學者の書を講じ、出家の經を讀、米つきの杵をかつぎ、大工の手斧を腰にさして、花見遊興に出るがごとくなればとて、いざ靜に酒酌かハし、人のさわきを見て步行は、月夜に挑灯のいらぬ、

と同じ道理にて、見らるゝ者も恩も着せず。見る者ハ心遣もなく、さりとは又能慰なり。一日あそこ爰と漕廻りけるが、いざやさわがしき所を離て遊んとて、船を三股てふ處へこぎ寄て、四方の氣色を見渡せバ、南は蒼海漫〻として、雲と海との色もさやかにハ見へわかず。行かふ帆は蝶の飛かふがごとく、安房、相摸の海にそふて出たるハ、唯一筆にて畫たるに似たり。西は箱根、大山なんども幽に見へわたり、けふハ水無月其日なれバ、かの望に消ぬれバ、其夜ふりけりと詠じたる、富士の高根もいとゑるく、近きあたりハ人の家居のミ多くして、民の竈の夕煙、たなびき渡り、さしもに廣武藏野も、人の住わたらぬ處もなく、草より出て草に入、昔の月に引かへて、軒により出て軒に入ともいふべき風情、道行人は只蟻なんどの行ふがごとく見へ渡れバ、さながら仙境に入たる心地なんして、覺へずも舷をたゝき、いとゑめやかに諷たるに、舟屋かたの塵もちり、空行雲もたゞよひぬともいふなる。人〻ハ與に乘じて香包取出して、一炷くゆらせ、いとゑづかにたのしみけるが、いざや中洲の邊へ行て、蜆とらんと、皆〻小舟に乘移、菊之丞曰、我は案じ掛し發句あれバ、跡より行んとて、一人舟にぞ殘居たりける。頃しも水無月の中の五日、日は西山にかたむき、月代東にさし出て、水の面、漣漪立て、いと涼しく、頃日の暑も忘るはかり、別世界に出たる思ひをなしけれバ、菊之丞硯取寄てかく

浪の日を染直したり夏の月

となん書ゑるして、黄昏の氣色、能も云かなへたりと獨笑をふくミ、吟し返しける折から、何ちともな

く、

とほの聞へければ、菊之丞は不思議の思ひをなし、何人かわかるゝ志ほらしきわきをなんせしと、あたりを見廻せば、一葉の舟の梶取もなく、若き侍の只一人、笠ふか〳〵と打かつぎ、釣竿をさしのへて餘念もなき躰なり。扨は只今の脇は此人にこそ有けんと思へば、心ばへ奥床しく、船ばたより打ながむれば、彼男もふりあをのきしを能見れば、年の頃二十四五斗にして色白く清らなるが、路考を見てにつこと笑し面ざしに、包にあまる戀衣、胸に思ひの十寸鏡、正目にハ見もやらず、水に移れる俤を、やゝ見とれたる其風情、さすが岩木にあらされば、我思ふ人の捨がたく、やゝ打ながめ居たりしが、互に云出る詞もなく、折しも風のそよと吹ければ、彼男ふりあをむきて

雲の峯から鐘も入相

身は風となならはや君か夏衣

と吟しければ、菊之丞取あへず

志ばし扇の間を垣間見

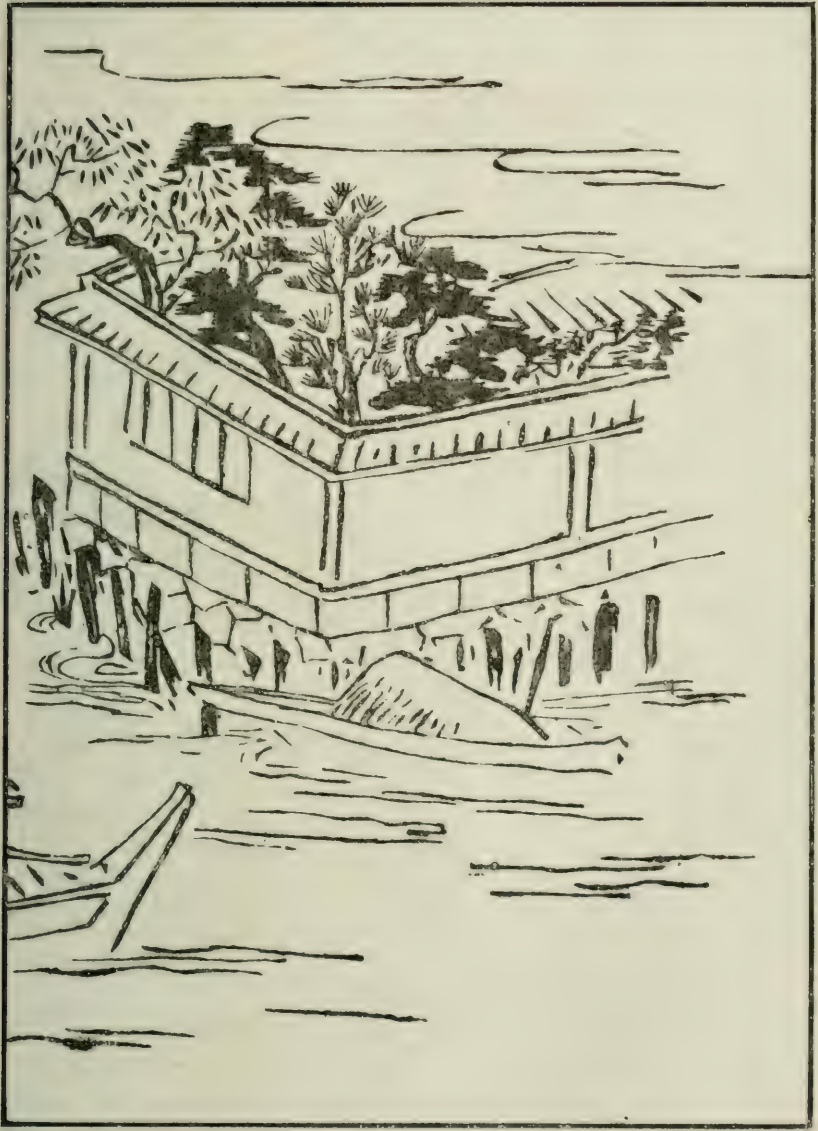
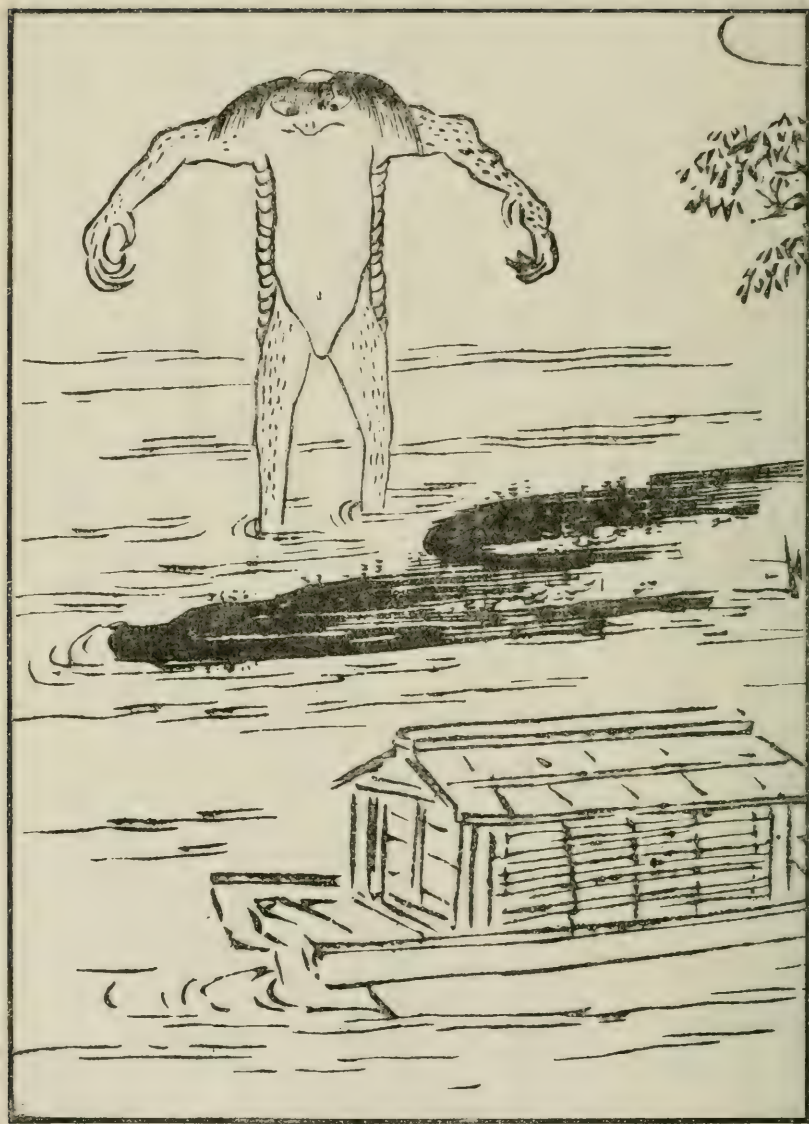
是より少しほころびて、彼男舟さし寄、菊之丞が舟につなぎ捨て打のりつゝ、日の暮てより越のふ涼しくなりたりなんどゝ、よそ事にいひものすれば、菊之丞ハ下づから銚子、盃なんどたづさへ来り、先程ふつゝかなる口ずさみに、やんごとなき御脇給ハりしより、只人ならず、見参らせたり。一樹の陰、一河

の流も一かたならぬゑにしとなん聞侍りたり。何國の人にてましますぞや、御名ゆかしと尋れば、我は濱町邊に住るものなり。夏の暑は間をさけんため、人なんどもつれず、我一人小舟に棹さし、此風景を樂とせり。ゑかるに、けふ思はずも君が姿を垣間見しより、思ひははれぬ天雲の、ゆくらゆくらと釣舟の、浪にたゞよふ梶枕、一夜の情、有磯海の、深心を明し合はゞ、此世の願足なんとて、路考が手を取よりそへば、さすが上なき粋ながら、向ふよりは思ふ事のいとふかく、我もまた此人ならではと思ふ心のおもはゆく、詞はなくて銚子取つゝ盃をさし寄れば、彼男丁と請て、つゝと干て、路考にさす。呑ではさし、さしてはのみ、合もおさへも二人なれば、數々めぐり逢ふこども、結の神の引合セ、夜もはや五ッむつごとの、雲となり、龍とならんと、月夜烏を心のセいし、互のちぎり淺からず。こけるともなく、寢るともなく、互の帶の打とけし、二ッ枕のさゞめ言、いかなる夢を見しかいざゑらず。

根奈志具佐四之卷　終

根奈志具佐五之巻

定なき世と人ごとにいへども、世の定なきよりハ、只定なきは人の心にてぞ有ける。古人春宵一刻値千金と、めつたに高ばれバ、又浮世を三分五厘と捨賣にする男もあり。然とも春宵一刻に千金出して買たわけもなく、三分五厘に賣て仕舞ふ出來合の浮世もなし。いかに口から地代の出ぬものなればとて出る儘のいひたい事、つまる處は能も惡もいひなし次第の浮世にて、浮世の定なきは人の心の定なきなり、聖人も父母の國を尻引からげて去給ふハ、魯國廣といへとも高の合た相手なきゆゑと見へたりまた程子に逢て蓋をかたむけ、途中にて立びりの切る程長咄しハ、初對面から心の合たるが故なり。心合ざれバ親子兄弟も仇敵のごとく、心が合へバ、四海みな兄分ともなり若衆ともなるとハ、酸も甘も喰て見たる詞なり　されバ今評判隨一の路考なれバ、誰か一人望ざるものなからんや。皆能器量とゆひ綿の、紋を見てさへ心動者多し。されども獨も手に入レる者なきに、いかなれバ彼男、俄の出會にてかゝるさまに手を入れしハ、誠に此道の氏神ともいふべし。程なく二人ハ起あがりて、何かハ知らず手水などせしさまいと心にくし。またもとの座に直りて、酒釣かハせし躰、何となう始のほどよりハ一入打とけてぞ見えける、月も漸さしのぼり、船中ハ晝のごとく、川風そよと吹渡て、夏去秋の來

たる心地、いと興あるさまなりけるに、彼男路考が顏をつれ〴〵と打守り、初は物かなしき躰なりしが、猶たえかねし思ひの色外にあらハれ、泪をはら〳〵と流ければ、菊之丞すり寄て、何とてかく物思はせ給ふ躰のましますやと、いと念頃に尋れども、彼男ハ猶さらにさしうつむき、とかうの詞も泪より外いらへなし。路考も心濟ざれバ、扨ハわらハが心いき御氣に染ぬ事もや有けん、かく打とけし中に、何とてものを包給ふやと、打うらみたる躰なりければ、彼男泪をおしぬぐひ、かほどに深御身の志を仇になして、いハぬもつらし武藏鐙、かゝる情の其上に、わらハが心の氣に滿ぬかとの一言、胸にこたへて覺ゆれバ、子細をあかし侍るなり、必〳〵驚給ふべからず。我實は人間にてハあら波くゞり、水底を家と定て住なれし水虎といふものなりと、聞より路考ハあきれけるが、いかなる子細にてあるらんと、心をしづめ聞居たれど、思ハずぞつと寒けだち、すみ〳〵も見らるゝ心地なりけれども、漸に胸押しづめ、心の內にとなへごとなどして、猶も樣子をそ聞居たりける。彼男ハ貌押拭ひ、我かく人間の姿と成て來りしわけを語るべし。故有て閻魔王御身を深く戀したひ、何とぞ冥途へつれ來れと、我々が地頭難陀龍王へ、勅定下り、龍宮にて色〳〵評議有ける處を、某命に懸て申上、漸と此役目を承り、何とぞ御身を連行んと、忠義一圖の謀、乘捨し船を盜、かく侍の姿と變じ、神變を以、俳諧の句などを吟じ、近寄て御身を引立、水中へ飛入んと、兼てよりはかりしが、思ハずも御身の器量に心まよひ、わりなき戀をいひ懸しに、君が情の深緑、松に千年と藤浪の、思ひまとひし戀

衣、互の帶の打とけし、其むつごとのわすられず、又の逢瀨と兼言の、兼て工し我心も、きのふに替飛鳥川、淵と瀨川の君ゆゑに、我身を捨る覺悟なれば、是より我は龍宮へ歸とも、菊之丞も取得事、中〳〵力およばずと申上なば、龍神より罪せられんは案の內、昔も乙姬、病氣の時、猿の生膽の御用に付、水母に仰付られしを、いはれぬ口をしやべりし故、龍神のいかりを請、筋骨ぬかれてかたわとなり、恥を殘せしためしもあり。我は其上大勢の鱗どもの並居る中にて、廣言吐しとなれば、何面目にながらへん、山林へも身をなげて、死る覺悟と極たり。君を助て、それ故に、死る我身は本望ながら、死れば、忽生をかへあさましき姿とならば、さぞやあいそも盡給ん　其上また世の人は、死して未來と契れども、君は閻王の寵を請、我は又はかなくも畜生道に落行ば、相見る事もなりがたし。薄えにしと思ふほど、胸の水のとけやらず、必〳〵死だ跡にて一へんの御ゑかうも、君が口より請るなら、未來の苦げんものかるべし。去ながら我死すとも、龍宮城にはさま〳〵の手だれあればかまへて水邊へ出給ふべからずと、事こま〳〵と物がたり、又なミだにぞむせび入。路考も袂をしをりしが、御身の上の物語、始て聞て驚入たり。生をかゆるとは云ながら、ためしなき事にもあらず。唐土にては非情の梅さへ其精靈美人と成、契をこめしと聞傳ふ。日のもとにては安部の保名、孤と夫婦の契をなせば、何かはくるしかりそめながら、枕かはせし其人を、我身のかはりに死なせては、わらは情の道立ず、其上我は閻王のしたひ給ふと聞からに、とてものがれぬ命なれば、是非〳〵我を連、

行て、御命全ふ圡給ふべしと、いひつゝ立て舟ばたより飛入んとする處を、彼男いだきとめ、お志は嬉しけれども、今御身を殺してハ、流石いやしき畜生ゆゑ、情を仇にて報ぜしと、世の取沙汰をせられてハ、我身ばかりの恥ならず、國に殘セし親兄弟一門までの恥辱といひ、其上玉の顔を、底の藻屑となさん事、見るに忍ぬことなれバ、必はやまり給ふまじ、我さへ死ばことおさまる。いや主を殺てハ、わらハ情の道立ずと、互に命捨小舟、死を爭折からに、やれ待給へと聲をかけ、立出るハ荻野八重桐なり。二人は驚飛のかんとするを、兩手にて押圡づめ、必さわぎ給ふべからず。最前蜆取んとて中洲まで行けるが、醉つよくして堪がたく、小舟に乘て立歸、お二人の閨の內いふかしくハ思ひしが邪魔せんもいかゞなり、またハ樣子も聞んものと、舟のあなたに身をひそめ、始終の樣子ハ聞たるぞや。かげろうの夕を待、夏の蟬の春秋を知らざるさへ、命を惜習なるに、お二人の死を爭ふとハ、扨〳〵やさしき事ながら、路考どの御事ハ、閻魔王戀圡たひ給ふと聞バ、とてものがれぬ命なり。去ながら見ぬ戀とある事なれバ、某を身かハりに立、路考どのを助てたべ。何故の身替と御不審ハ有べきか、路考どのには能御存、我荻野の系圖といふは、元祖荻野梅三郎より親八重桐に至まで、代〳〵名代の女形にて、三ケ津にて人に知られ、上方にてハ座元迄を勤しゆゑ、隱なき家筋なり。然るに我父八重桐浮世をはやく去ける時、某はまだ三歲、母の懷にいだかれて、知るべの方へ身を忍しに、五の歲母に別、たよる方なき孤にて、乞食、非人ともなるべきを、路考どのの親菊之丞どの、我親とのゑたしみ

ありとて、不便を加へ我を養ひ、産の子も同前に、お乳やめのとゝかしづきて、漸人と成し頃より、小歌、三絃扇の手、身ぶり、聲色さま／＼に、教給ひて人となし、幸我に子もなければ、家をも繼すべけれども、其方我家を繼ならバ、荻野の名字たえはてバ、先祖の跡とふ人なしとて、我を親の八重桐が名に改、こなたをむかへて養子とし、兄弟と思へとある、呉／＼の御詞、今我不肖の身ながらも、三ケ津の舞臺を踏こと、親にもまさる大恩は、養親とも師匠とも、一かたならぬ情ぞや。今ハのきハにも枕元に招寄セ、我身ばかりか菊次郎まで、名人の名を殘セバ、死る命は惜からねど、心にかゝるハ吉二が事、何とぞ其方我にかハり、吉二を守り立、二代目の菊之丞といハセてくれよと涙を流セし末期の詞心こんに志み渡り、命にかへても後見し、名を上させ申べし、御氣遣あられなと、聞てにつこと打笑ひ、此世を去セ給ひしを、思ひ出すも泪ぞや。まだ幼少の路考殿、セわにセしハ恩返し、父御に習し藝の秘傳も、五年以前に又傳授、次第に名高く、見物も、路考／＼と評判は、我身の名を上るより悅しさハ百そうばい、評判を取度ごとに、位牌に向ひくり言の、自慢も師匠の末期の詞、忘れ置ぬ我寸志。志かるに今日の入わけにて、路考どのを死なセてハ、師匠への言わけなく、二ッにハ又瀨川の名字斷絶させてハ本意ならず。我は死すとも、子もあれバ、荻野の名字ハ絶まじければ、五ッの歳より守立られ親にもなさる師の大恩、報ずるハ今此時、必／＼妻子の事、見捨ずせわを頼入。心にかゝるハ是ばかり閻魔王へ行たりとも、こなたの器量にくらぶれバ、雪と墨繪の鷺をからす、云くろむるハ舞臺の功、

返す〳〵も路考との、身持大事に酒過さず、世上の評判落まいと、ひたすら藝を修行して、親にも伯父にもまさりしと、いはるゝ程になり給ふが、草葉の陰の思ひ出と、いと念頃に語にぞ、二人もなミだにくれながら、菊之丞はとりすがり、親に別れて其後ハ、さま〳〵の御敎訓、淺からず思ひしに、身にかはらんとの御詞、生々世々忘れハおかじ、去ながら、御恩ある御身をころし、何とて我身をながらへん、是非此身をイヤ我をイヤ某と三人か、死を爭ふてはてしなき、折から平九郎、與三八、船頭など、蜆なんどをとりもたセ、どや〳〵と立歸れバ、三人あハてる其中に、彼男ハ影のごとく、きえて行衞ハ見へざりけり。菊之丞ハいま𛀁ばしといふもいはれぬ他人の中、水面を見やる折から、八重桐ハ覺悟をきハめ、やぐらの上よりざんぶりと水中に飛入れバ、はつと立たる水けふり、かたみに殘るうたかたの、泡と消行玉の緒の、絕てはかなくなりゆけバ、船中俄にさわぎたち、八重桐入水と聲〳〵に、いへどこたへもあらし吹、なみの間に〳〵そこ爰と、さかセどさらに詮もなし。菊之丞ハ淚ながら、明ていはれぬ身の上の、生てハ義理も立がたしと。ともに入水と覺悟の躰、何の樣子も知らねども、此躰に驚て平九郎押留、尤そこの催セし船遊とハ云ながら、八重桐が入水セしは、畢竟怪俄の事といひ、我〳〵とても此船中、一所にありし事なれバ、こなた一人のとがにあらず、公へ申上、兎なりとも角なりとも、皆〳〵一所なるへしと、與三八、船頭諸共に、詞を盡て留れバ、明ていはれぬ胸の內いたハし、なミたゑきなミの、そこに爰よと大舟の、思ひ賴て求れど、姿も水のつれなくも、いづこ

に流れ、夜の雨のふりかゝりしに憂事を、神に祈れど、せんすべの、渚におりて玉桙の、道をたどりて若草の、妻にかくぞと告ければ、消ばかりの露の身ハ、置所さへしら波の、跡なき人を戀しとふ。されば古歌にも、汭潭に偃たる公をけふ〳〵と來んと待らん妻がかなしも、と詠ぜしも、我身の上とかきくどく、歎ハ濱の眞砂にて、かきつくされぬ筆の海、聞人袖をぞしをりけり。

根奈志具佐五之卷　大尾

ゑみて爪とらに髪ゆはず拵へせむ
ず世俗のがきぬる人なり角て無陰
人と称す此人横ざま之事をかんで
其毒気一角にある其長三
寸ばかりにて角額にありて頭に
あまざ芸もよる屈まるか隠れてゐんで
といへども此根南志具佐
まおよんぐ二寸角一長に丈

嗣出書

根南志具佐後編　全部五冊　近刻

宝暦十三癸未霜月吉辰

江戸神田白壁町　岡本理兵衛

書肆

同　室町三丁目　本屋又七

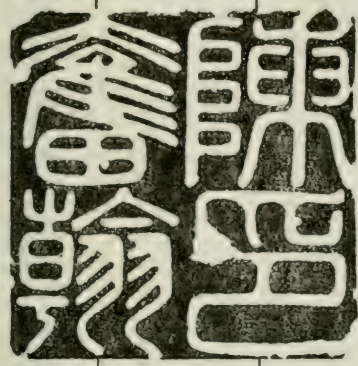
根南志具佐後編

序

風來山人登萬國之東側觀婆娑大劇場有小舞臺之志於是以紅毛千里鏡觀冥途樂屋仰天堂俯地

獄啖抹香於閻魔被犢鼻
于地藏倒舍利弗智囊振
冨樓那辨舌三摩佛面始
知黃金膚嘆曰地獄天堂
金次第兵退著一書寓言

八重桐間聞柏車薪水御
無常風纔爲此編以傳諸
借本屋二子追善莫大焉
此編也掛一枚看版而行
於三箇津矣明和戊子秋

寐惚先生陳奮翰撰

上にお話

自序

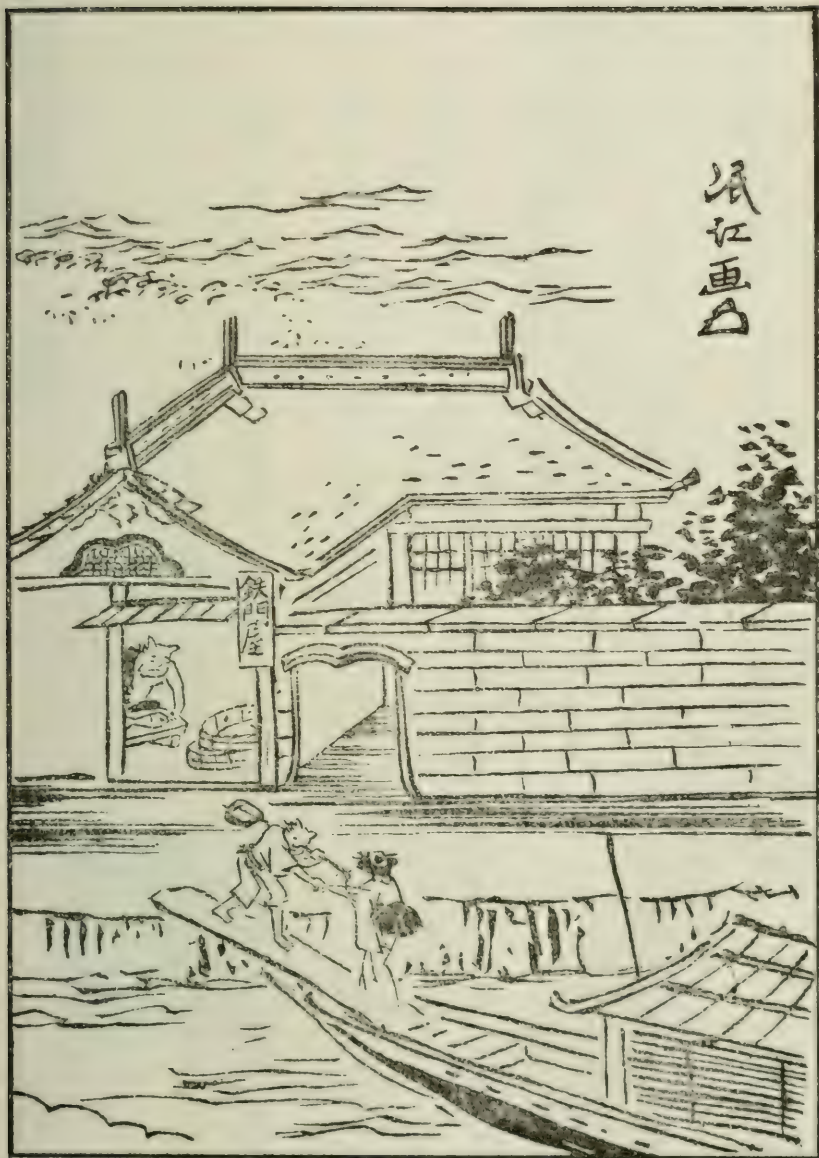
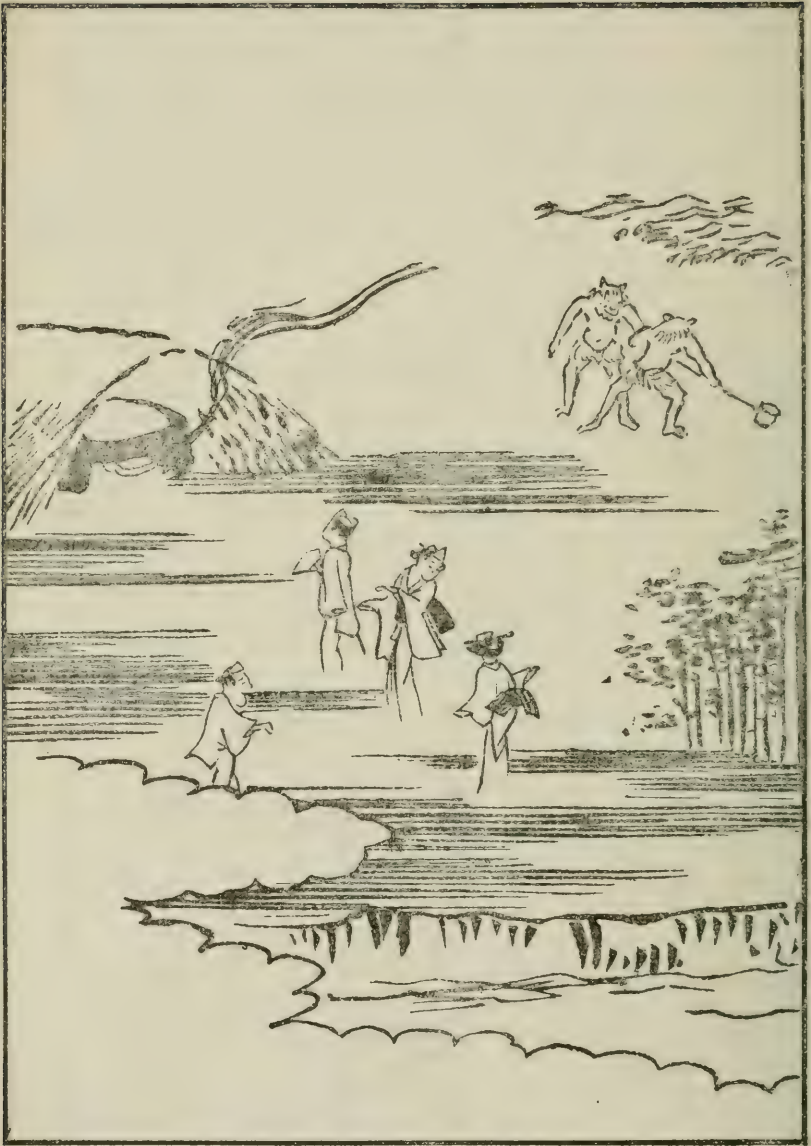
味噌を上るとハ○自慢といへる東都の俗言なり○謹でその云ば意を考るに○口廻がましくて詰の塩ふき出せるがより起れり○されバ志るをしりぬもせ味噌を漏ることなし○唐の親父ハ○天徳を予に生せりと理屈具き玉味噌を上れバ○天竺の譃つきハ○唯我獨尊と阮がまし

そのワケちうをしれ人は。味噌を費しるか灸のごとく。癒ることをしらんと言懐の梟檑槌のごとく天狗が立た味噌匿しとは、敬白

明和丸年子の歳見せ。柿の衣は兜巾竹條懸。風来山人切幕と重ぬ。旨と声掛て。世上の作者も梟をひしぐ

根無草後編一之巻

僞りのなき世なりせバいかばかり、人の言の葉嬉しからまし。されバ卵の方と娼妓に實なきのみならず、佛法に方便あれバ、軍法に斗策あり。浮世に追從、輕薄あれハ、參會に座なりおはむきあり。虚言あればてれんあり、僞あれハ手くだあり。だますといひ、こんたんといひ、文なすといひ、懸るといふ、手爾於葉の違ひハあれど、つまる所ハ引くるめて、謊で丸めた世の中に、只僞ならぬもの迚ハ、産れた者の死ぬることにて、北州の千年、蜉蝣の夕、長き短き限あれども、貴きも賤しきも、賢きも愚なるも、猫も飯盌もおしなべて、此道をもるゝことなし。されども人情の淺はかなる、門松は冥途の旅の一里塚とも氣ハつかで、無上に新春の御慶と壽き、懸棘鬣魚も魚の死骸と悟らねバ、めつたに目出度ものとのみ覺え、熨斗鮑を顚倒ハしのと讀れ、四の字をきらへバ、五の字にもごねるといへバ油斷ならず。いざや其死で行先々を尋るに、釋迦の工夫の大狂言。切落しから落の來る、萬代不易の當り劇場。地獄、極樂數多ある中に、六道の街となんいへるは、繁花いはん方もなく、車轂擊、人肩摩、弘誓の船宿、川岸に招けハ、紫雲の逵肩輿通りに遮り、五々の菩薩のめりやすハ、楓紅露友がおもむきをうつし、呵責の鬼の催促は日なしの親方火の車をめぐらし、蓮花の大屋店賃を債れバ、脱衣の老婆勸化をせつく。實や現在を

鉄砲屋

見て過古未來をしり、明樽を見て澤菴漬を思ふ、油斷せぬ世の中なれバ、三途川の遠干潟に數千丁の土手を築出し、白波變じて平地となれハ、國ニ懸出しをするがごとく、後々末代に至るまで、其益すくな芥子味噌、鼻の穴迄ぬけめなき、鐵門屋か仕出し料理、しゆんかんの筍にハ石女に燈心をあてがひ、硯蓋の蓮根にハ極樂のねだをはづす。死手の薯蕷、三途の川鱒、八寒地獄の煮凍に、西の河原の地藏燒、好次第、飲しだい、夜の內からの人群集、是ぞ此地の名物と、詞の鹽に錢出して、辛ひ浮世に甘き族も、暮を限に立歸れハ、跡ハ人聲も波の音のミして、更行夜半のてよ〳〵風に、草木もおのづから居眠をそゆる星の光、かすかなる闇路はるかに聲立て、迷ひ子の閻魔様ア〳〵と、鉦太鼓の音哀げに、小提灯の明りを賴、うそ物淋しき三途川の邊り、西を東、南を北と立別れ、尋つかれて追々に、さゐる結縷原を目印に、赤鬼、黑鬼、斑鬼、棕色、正官綠、碁盤島、五色八色さまざまの貌形、一角、兩角、一眼二眼、牛頭、馬頭、あほう、羅殺なんど、異類異形の獄卒とも、一ツ所へ寄集り、是程にさがしても閻魔樣のお行方しれず、地獄、極樂創て、終どない旦那の亡命、尋に出るこちとが難儀と、口々にわめきちらし、振廻ス頭の數々、角目立とは是なるべし。地獄の果でもなひ智惠ふるふ、社長、戶頭と思しき鬼、しかつべらしく正中に居並び、扠々每日町々のいかひやつかい、昔と違ひ、地獄、極樂ともに近年の大不景氣、日にまし死て來る人ハふへる、そう〳〵餓鬼道斗も遣れねバ、日々の喰潰し、段々米ハ貴て來る、粥喰してもつゞかれぬに、娑婆で欠の序ながら申た念佛を恩に着せ、百味の飲食かはかしおり、

うぬらが夫妻相對の內證事を大そふらしく、一蓮たく生と契りました、かゝアが跡から成佛いたし、格別尻が大ひから、出來合の蓮臺でハほうがへしも成りませぬ、蓮臺をひろげるとも、お臀の方を削とも、お指圖なされて下さりませと願ふやら、菩薩達の箔の置替、天人衆を釣下る道具立の大物入。扨又地獄の責道具も、請負方で高ばる故、近年御勝手不如意の只中、閻魔樣の無分別、捨置てハ三千世界が暗闇に成事ぢやと、十王樣のとちめん棒、ふつてわいた地獄の騷動、每日每夜尋てもまだにお行方しれざること、旁いかゞ思ハるゝと、小首かたむけ問掛れば、又跡の月頃、田舍から山出しと見えて、荷持瘤の跡しやちこばつた黑鬼の長助、大勢の中遠慮もなく、それ樣達アどう思ふておんじやり申。閻魔樣の亡命とは、ヲヤてんこちもなひ肝サアがでんぐりかへるにヨ。大方年內の借金につまり申て逐電をし申されたか、每日さがせど影サアも見え申さない、扨うらゝ迄が宿なしに成申ハ、悲しいこんだと、流涕こがれてとこぼへ申と、臂に違ぬ鬼の目に、淚ぐんで物語れハ、額をぐつとぬき上、さかやき延たがつたり天窓、腕に彫物した赤鬼の八兵衞、懷手してずつと出、つがもない、こつとらが身代でも、五兩三兩の借金にせつかれ、內外で濟ぬこんなら、高が砂利をつかむと思へハ、借る時の地藏顏、なす時の旦那の面だ。貸た奴がのたまく云や、橫ぞつぽうはりのめすに、素氣の短い旦那殿、がふぎに亡命されるとハ、あて事もなひ外聞を失つて、おいら迄が顏が立なひ。何のこんだ咄しの樣なと、めつたにりきめバ、そばからねそ〳〵、上方の產れと見えて、西瓜に蠅のとまつた樣な髮の曲

は、寐てもこそんせぬ勘辨ごと、白鬼はよごれめ見え、黒鬼ハ弱からふど、地の太き伊勢島鬼、不思議そふな顔つきにて、わしらハさんさ呑込ぬわひの、焔魔様の身代はゑらアいもんぢやさかいで、いくら借金が有た迚、ちつと始末なさたら、つゐ直りそうな物じやわいな。こふいへバ、わしがのが、小了簡の様なれど、ひどふ積つて代物の随分利口に付やふに、菩薩達の黄金の膚も御堂前の出来合同前、倭鉛鍍金で間を合セ、極樂へ毎日の仕出も百味の飲食。理いふて、仕掛で壹匁五分膳ぐらいで濟そなもの。其上でまだ不足なら、娑婆中へふれを廻し、六道錢に新鑄の當四錢を入させ、無間地獄の蛭を止て、壹歩札にて三百兩の富を突せ、畜生道で馬市をはじめ、劔の山を一丁目か柳原へはこんでも、一方ハ防がれるに、焔魔様ハ味な了簡、わし等はこんさ呑込ぬわひのこ、茶粥の腹の減をもおぼえず、上方理屈いひ並ぶれバ、鬼仲満でも口を利、殺鬼といへる通り者、銀煙管脂下にくハへ、唐ざらさのじゆばん腕まくりに、本田あたま打振で、イヤ親玉の亡命は金でなしの色事、目玉光の赤面、髭むしやの口廣で、見掛けに似ぬ近惚、天人衆の奇麗事に頗いきのいちやつき、羽衣じめのちよんの間・おれこましのからだおも宿上りもずい流し。そこで大日腹を立、焔州には似合ぬ身持と、尻われのぐつさこまり、ずいにげのぐひはづし。推量違ひの中の丁、打て置チョンとそゝり立れハ、鼠色のへんてつに、東坡巾かぶりしハすかんぴんの宗匠鬼、朝鮮扇しやにかまへ、イヤ〱大王の亡命は中々左様の事ならず、紀の貫之が古今の序に、繪を畫る女を見て心を動すがごとしとは、僧正遍照が歌の評、

判。それは昔の筆の跡、かゝるためしを目のあたり、眉目容顔ひなき瀬川菊之丞が繪姿に、焰魔大王現をぬかし、龍神に勅定ありし一部始終の委い事は、根無艸に書しるし、世上に隱レなきミ〱ならぬ、其戀人を思ひ川、流て末の逢ふ瀨あらバこそ、待わび玉ふ折からに、龍神の下知を請、手下の水虎が働にて、伴ひ來ル路考が姿、聞しにハ似も付ず、存の外の不器量に、一座大にあきれ果、定て譯の有磯海、不覺を取りし其樣子、包まず白狀仕れと、水虎を御吟味有けるに、己が心に覺有、疵持足の氣味惡く、御白洲にひれ伏〱、誤入たる有樣より、かつぱと伏といふ事ハ、此時よりぞ初ける。

され共漢子も去ル者にて、詞をかざり、鷺を烏といひくろめんと、淨頗梨の鏡に掛ての詮議故、のがれぬ所と覺悟して、路考が情に大事を忘れ、荻野八重桐といふ女形を身替りに連來れること、有の儘なる白狀に、焰王甚怒らせ玉ひ、三千世界を司る此大王を茶にしをるハ、言語道斷につくき奴と、忽ち水虎を蹴殺し給ふ。したが娑婆にて死だ者ハ此所へ來れども、此所で死だ者は行所がない故に、魂娑婆へ迷ひ行、人のからだを假初に、男色千人切の馬鹿を盡すも、皆此水虎の亡魂の障礙をなすとしられたり。それより年を重ねても、焰王今に熱さめず、路考をこがれ玉へども、定業にあらざれハ、大王の御威光でも呼寄事叶はぬ故、いつそ娑婆へ尋行んと、思ひ詰ての亡命ならんと、始終の咄を聞居たる、茶色の鬼が圖に乘て、おれも御用に撰出され、去年と今年の堺町、節分の夜のにくまれ役もいやと鰮の臭をこらへ、狗目で目をつく〱と、路考に見されし贔負の證據、赤鬼、白鬼、黑鬼のと、昔

から定法の仲まをはつれ、おれ一人か路考、茶鬼、コレ見よ虎の皮の犢鼻褌に金絲でゆひ綿縫せたハ、おらも首だけ濱村屋、今三ケ津の希者、鼻の高い天狗仲間、鞍馬山の太郎坊、愛宕山の治郎坊、湯の山の有馬坊、羽黒山の出羽坊を始として、贔負の連中、山の手から下町はいふに及バず、蝦夷、松前の果までも、路考を引ぬ者なければ、旦那の惚たも無理ならずと、口々評議に社長のいうち、咄がかふじて長休ミ、あんまりたばこ呑過し、男倡の地獄見るやうに、尻から焔の出ぬ先に、サア最一息待て見よふ。コリヤ尤と大勢が立さハぐ最中に、急脚子と見えてすたり／＼走り、色眞黒にふすもり顔、眞一文字に行過るを、獄卒共引とゞめ、我々に理なしに何國へ通ることがめられ、誰とはおろか忝くも藥研堀に隱れなき、不動明王を見しらぬかと、市川流て白眼付れハ、獄卒共うろたへて、能見れば不動様、後光の火焔がござらぬ故、頭巾着ぬ大黒同前、見違しとのわび言に、不動明王打うなづき、おれが急足に來りし様子ハ、今朝淺草の觀音殿から呼におこされ、焔魔様が藏前の出店にかくれて御座らしやる、潜に迎をよこす様にと、地獄へ飛脚がやり度が、參りの多い時節故、寺内でも人少、隙で居る久米の平内、見る通りおもたいからだ、急ぐ間には合にくい。雷や風の神でハ通り筋の小言も氣の毒、そちの小懸をやつてくれ。ヲツト心得たんぼ道、安うけ合に請合て、制吒迦、矜羯羅に行といへハ、近年は地獄でも若衆の沙汰が物窓なれバ、酢の蒟蒻のといやがる故、しやうことなしに自身の捷歩、三途川を歩行渡り、先祖代々持傳へし、脊中の火焔を微塵にして、大事の後光株仕舞、德ハいかひで、

不動そん見違しも無理ならず。焔魔のどやがしれたれバ、外をさがすに及まひと、聞て皆々色を直し、去とはいかひ御苦勞樣、安い佛に樂をさせ、御自身の急足され、本の次第ふどう明王、娑婆の若衆にうつほれて、路考しやうどにうかれ出る、これも他生のえんま樣、迷ひ子の焔魔樣と、やちまな地口口々に、鉦ちやん〳〵と打鳴し、藏前さして尋行。

根無草後編一之巻　終

根無草後編二之卷

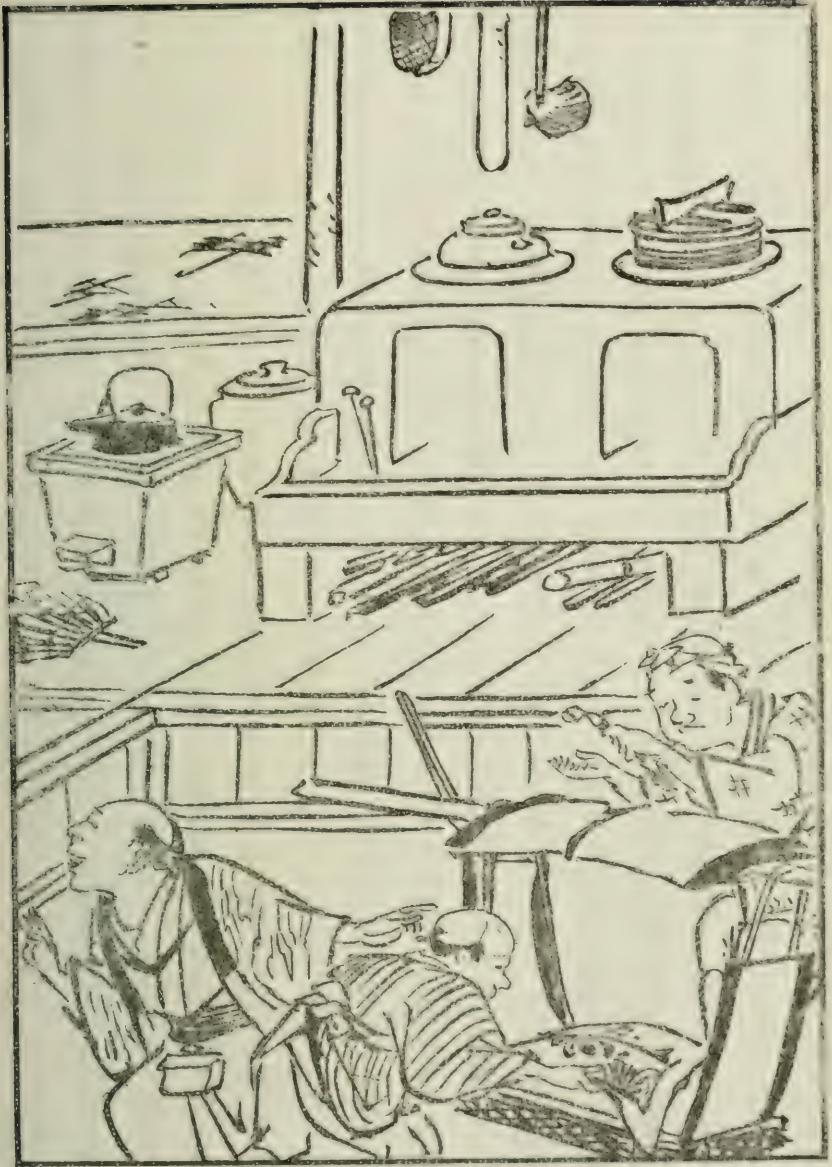
それ造化のかぎりなき、小見を以てはかるべからず。田鼠化して鶉となり、雀水に入て蛤となり、蟄奴變じて伴當となり、婦化して姑となる。漆盤を得て泥のごとく、海參藁を得て水のごとく、大戸酒に呑れて酒風漢となり、少年倡妓にたらされて飄客と成。千變萬化のかぎりなき、張華も博物の看板をおろし、東坡も相感志の店をたゝむ。爰に市川雷藏なる者あり、此者の變化定りなき其源を尋ればば、父は代々瓢象の、都の方に隱れなく、富さかへぬる武家に仕へて、渡部義兵衛となんいふ人なりしが、朋輩の連坐にて浪々の身と成けるより、老たる母と妻子をも養育手次にもと、住なれし都を離れ、うき數々に大津の町のわび住居、弓馬の道は廻り遠く、外に營むべき業なければ、繪の事は先素人ながら、つい出來易き所の名物、げほうのあたまへ階子掛ても、我身の上の下り坂、主持ぬ身の一徳と、浮世は輕き瓢簞で、押へる鯰のぬらりくらり、犬のくわへて引あるく、先士の坊の褌さへ、しまりなき世渡の、いつ果べき事にしもあらず。其上に民之進とて一人の悴あり、容貌百人にすぐれ、心さとくして滯らず、手習、學問、鎗、兵法、遊藝迄も器用なれば、末々は能主取をもさせんとて、江戸の稼を心掛て、薄々用意は有ながら、老いたる母女房なんどの、しらぬ吾妻の長旅を如何有んと思ひす

ごし、一日過、二日過、早三年の月日さへ、立寄べき方もなく、有附べき主人迚もなが〳〵の浪人住居、母女房も氣毒がり、いつそ江戸へ出て見てはと思ひ立は立ながら、兎して角してと隙取る內、思ひ掛なく母の中風、旅立どころにも有ばこそ。わけて義兵衞ハ孝行なる男にて、看病の手ぬけもなく、あなたこなたの醫者よ祇禱よと心遣ひ、もとより手薄き身代なれバ、諸方に穴も秋の末より、冬の半に打つゞき、義兵衞も脊に癰を發し、初は母の病苦の障りと、隱しても隱しとぐべき病ならず、段々と腐入ハ、中々一通りにて快氣しがたしと、下地せつなき其上に、又此才覺にかてゝくわへ、少も所緣有方ハ、段々無心もいひ盡し、貯し兵器、諸什器、指がへの大小の反ハなけれどまげ仕舞、夫婦が着がへ夜の衾、後は銅壺、茶鈴まで賣代なし、漸殘る物迚は、四人が口をとぢ蓋の破鍋にさへ金氣もなく、せつなき餘りの一寸のがれ、高利の金をかりそめにも、足元を見てハ猶物の哀をしらぬ族、日夜朝暮の詰催促、義兵衞は重き病氣の上、母の耳へ入まじと斷いふ程責かけられ、詞の劍、理づめの鎗先、千騎、萬騎の敵よりも、防ぎ兼たる浪々の身を悔めバ、女房の心遣身をそがるゝよりせつなけれども、智惠、才覺にも出來がたき金が敵の世の中なれバ、只しみ〴〵と明暮に、年の寄より外ハなし、或夜母のすや〳〵寐入しを窺ひ、義兵衞女房に向て申けるハ、いかなれバ我々程果報拙き者あらじ、京都にて勤し時も、何の仕落なき身ながら、朋輩のまきぞへにて御暇給ハりし、それよりかゝる浪人住居、仕つけぬ業の世渡りも、今の難儀にくらぶれバ、うしと見し世ぞ今ハ戀しき、母の病氣、我腫物、剩

其上に四百四病にまさるといふ貧の病身にせまり、耆婆扁鵲が藥でも、生延られぬ我おとろへ。今日の醫者の詞にも、母の病氣も中風なり、我腫物も腐つよく、いづれも人參の力ならでは中々療治なりがたし、外へ見せよとにげらるれど、其日の煙立兼て、知る通りの躰なれば、死たる者が蘇へ、枯木に榮の發ばとて、人參のことハ扨置、毎日毎夜の催促に、最早いふべき詞も盡、貧苦の上に我大病、手がまはらねば母人の看病までが疎畧に成、不幸の罪もおそろしければ、我は今宵腹切て相果ん、我死たりと聞ならば、貸方にてもあきらめて催促にも來ルまじ、左すれば貧苦と我看病、二ッのなんぎを助りて、母壹人の看病しとげ、いかなる人にも身をまかせ、奉公宮仕をしてなりとも、悴を守立人となし、家の名字を繼せてくれ。頼置は是計といふ内も、腫物の痛、熱の往來、胸迄せき來る無念の涙、痰咳とともにむせび入ば、女房夢の心地にて、藥あたへつ抱かゝへ、漸咳をさすりしづめ、母の目や覺んかと聲をも立ず、ないじやくりして夫の顏をうらめしそうに打ながめつゝ、いかに難儀のかさなればとて、日頃にも似ぬ不了簡、今自滅し給ハゞ、母御も生ては居玉ふまじ、ワらハもながらへ居らるべきか。さすれば可憐氏之進ハ、誰が殘て人となさん。されいふものゝいかなれば、貧苦といふも程有んに、其日の煙も立兼て、昨日も藥ハ貰ながら、煎ずべき薪なければ、わらハが髪の中を剃り、漸少の價にて買調し落葉さへ、涙にしめりもえ兼る、寒氣つよき此時節夜の物なく火の氣もなく、姑御といひ、御前の大病、次第に募る苦しみを、病目より見る目のせつなさ。人參で愈ると聞ば、

せめて此身が若かりせバ、君傾城に身を賣ても、しやう模様もあるべきに、それさへも叶ハぬ因果、天道も佛神にも見かぎられたる身の上と、夫婦手に手を取合て、忍ぶにあまる泣聲を、初よりつく〴〵と寐たふりにて聞居たる民之進が孝心にも、堪兼て泣出せば、夫婦ハ驚き、いかゞせしぞと尋ながらも、様子聞ての事なるかと、心遣ひかぎりなし。民之進もせきくる涙、明さば猶しも苦の上ぬりと、こハい夢見ておそはれしと、何氣なく取なす内、夜明鳥の聲諸共、母の目も覺ければ、藥よ湯よと、女房の心遣、哀なりともいふばかりなし。其日も終日民之進は、獨しみ〴〵泣居たれども、何となすべきてだても出ず、此上頼ハ神佛の力ならんと稚心に思ひ付、暮にまぎれて内を抜出、あたりの淵にて垢離を取る、所も名にし逢坂の、關の明神へ裸參り、神前に打伏て、死ぬといふ父の命、祖母の命、諸共に金さへ有ば助るとや、何卒金を調て、病苦、貧苦を救はせ玉へ。夫も叶はぬものならば、一寸も動くまじ、爰にて我を蹴殺してたび給へと脇目もふらず、祈けるが、頃しも冬の半なれバ、次第に夜陰の空寒く、雪吹交りに吹風は、身内を切がごとくなれども、固氣丈の生れつきに、一心の誠をあらハし、少もたゆまずこたゆれども、寒氣五臟にしみ渡り、からだは氷のごとくなれば、何かは以てたまるべき、正氣を失ひ打たほれしハ、目もあてられぬ次第なり。折節近所にて心易き柏屋の長右衛門といふ人、牙郎宿願の事有て、此宮へ詣けるが、此躰を見て介抱し、羽織を脱で打着せ、あたりの家に伴ひ行、巨燵に暖め、藥をあたへ、さま〴〵といたわりければ、漸に心付けるが、又かけ出して行んと

するを、人々とゝめ樣子を問ば、右のあらまし物語、此上はいか樣なる奉公にも身を賣て、家内の難儀すくひ度との稚心、有あふ人も感に堪、長右衞門も哀とは思ひながら、年端も行ぬ稚き者、年季奉公に出たりとも、高のしれたる給金也、いつそ宮川町へ身を賣て、男倡奉公に行ならば、いつかどの金にもなるべしと、つど／＼にいひ聞すれば、相應の金にも成、父母の難儀をすくふならば、身は八ざきにさかれ、生膽をぬかるゝとも、さら／＼厭ふ所存にあらずと、流石日頃の氣質程有て、惡びれもせぬいひぶん。長右衞門呑込で、民之進を人に送らせ、わづか三里の道なれば、其身は宿へも歸らずして、直に京都へ急ぐ行。されば孺子の井に入んとするを見ては惻隱の心ありといふ、親父の寢言野夫ならず。斯て民之進は宿に歸れば、家内は案じ居けれども、立願の譯いひくろめ、其夜も過て翌朝より長右衞門を待居ける、孝行ふかき心の內、けなげにも又哀なりけり。程なく晝にも至りければ、長右衞門が案內にて、京都の子供屋扇屋藤助、義兵衞が內に入來れば、民之進出むかひ、二人を伴ひ內に入、父母の前に手をつかへ、祖母樣と申父上の久々の御病氣、貧苦にせまり、父上の死ふと覺悟し給ふを、寐たふりにて聞たりしが、子の身としてはうか／＼と聞ていられぬ命の瀨戸、せめて廿年にもなるならば、仕樣模樣も有べけれ共、若年の私故、外になすべき手だもなく、是なる長右殿を賴で、宮川町へ奉行に參り度御座りまするこ、淚と共に願ふにぞ、祖母も夫婦も思ひよらねば、顏と顏とを見合せ、とかふの詞も出ざれば、長右衞門引とりて、ない習でもござらねば、マアそうでもして、

身の代で、諸方の借金をもつくのひ、人參でも調て心ながふ養生なされい。いつも闇でハない習ひ、わしが請に立からハ、金さへ出來りや、何時でも請返さふと自由な事、御子息の孝行を無にせまいと思ふ故、夕べから夜寐ずに京へ六里のたて通し、兼て懇意の親方故、諸事しめくゝりして置たれば、判さへ出來れば金渡さふと、詞に付て扇屋も、長右殿の咄に違はず、孝行といひ、器量といひ、目の内に見處あれば、此子は一はねはねふと思へは、飛つく程欲いから、六年切て百兩と、金子の包さし出せば父は涙の顔を上、何れもの御世話悴が孝行、過分にハござれ共、拙者も故有武士の浪人、いかに貧苦にせまり果、病氣難儀なれば迚、天も地にも只ツタ一人のおひ先有悴を賣て、其身の代で命をつなぐハ、我子の肉を食する同前、先祖へ對して言譯なく、犬猫にもおとりたれバ、譬砂をかみ餓死とも此儀ハ決して相ならずと、得心すべき氣色もなし、民之進もしほれ居しが、父の詞を聞よりも、傍なる脇指ぬきはなし、切腹と見るよりも、皆々驚きいだき止れば、祖母も行歩は叶はねども、共々に這よりて、短氣をするな、どふなりとも、そちが望にまかセんと、取々になだむれば、どうで生て詮なき命、祖母様や父上の、お難儀を見んよりハ、死せてたべとかこち歎きバ、父も涙の目を押しのごひ氷の魚、雪の筍、其孝行にもおとるまじ、日頃一徹短慮なりと呵られし程有て、十二や三の子心にて年の似合ぬ丈夫の魂、此上は留ても留らじ、汝が望みに任すべし。去ながら此年迄養育セしハ、主人を見立奉公させ、世に出さんとこそ思ひしに、ふがいなき親故に、年端も行で苦勞かんなん、不便の

次第とふるふ手を、長右衛門が介抱にて、證明に印形すれば、祖母と母とは左右にすがり、涙ながらに髪かきなで、思ひつゞけし數々の、胸にせまりて詞なし、二人も哀にくれながら、用意の竹轎をさし寄させ、民之進をいたわり乘せ、名殘は盡じとそこ〳〵に、暇乞して立歸る、後のなぎきいはん方なし。かくて果べき事ならねば、彼身の代にて大醫をむかへ、價の貴き人參を用ひ、殘方なき養生に、母の病も全快し、義兵衛も程なく平愈しけり。これ偏に民之進が世に類なき孝心の、天に通ぜし故ぞかし。彼唐土の郭巨てふ人、母の爲に子を埋まんとして金の釜を堀出せしに、類等しき孝行なり、それよりも民之進は宮川町へ引移り、昔の武藝引かへて、三絃、小歌、舞の手なんど、日數もたゝで覺ければ、嵐玉柏と名をかへて、四條の劇場へ出しけるが、卞和が玉磨れてハ、瓦石と類すべきにあらねバ、全盛つゞく者もなく、江戸よりも聞傳へ、段〳〵の云入に、親方の相談極り、堺町へ下りけるが、わけて其頃押なべて、男色盛の時節なるに、梅のずあいのすんとして態ならぬ色香あるは、東の人の氣象に叶へバ、風流の客前後を爭ひ。色子の内も評判つよく、元服して海老藏が弟子と成、栢莚の一字を貰ひ、俳號を栢車と名乘り、村上彦四郎の荒事より、次第〳〵に詳判よく、上方よりも招かれて當りを取其內に、初の名は遠慮ありとて雷藏と改名し、再江戸へ入りてより、益〳〵贔負の人多し、此人常の詞にも、我は仕合惡してかゝる身となりたれバ、形ハ武門に返りがたく共、心ハなどか昔の武士を忘んやと、其志古の朱家劇孟がおもむきを移し、物ごと至て正直にて、任俠をこのみ劍を愛し、

弱き人には下れども、強き者にハ一寸も引ず。酒を飲、角力をすき、又拳の上手にて世上にならぶ者もなし。されバ段々評判よく當狂言多き中に、しのぶ賣りあかん平、總角の助六などと類ひなき、大入にて、世上の評判、樂屋のもてなし、取わけ女中の贔負つよく、雷藏〳〵とはやし立、仕出し團扇櫛笄、三升の中へ雷の字を付たるは、屋敷も町も嬉しがり、鳴雷ハこハがれども、此雷ハかわゆがり、抓まれたがるも多かりき。爰に又色事師坂東彦三郎薪水といふ者有、先の彦三郎が實子にて、稚名を菊松となん呼けるが、父薪水泉下の客と成てより、菊松父の名を繼で二代の彦三郎と成にけり。元來父彦三郎は、くれ竹の伏見の里の産れにて、是も武士の悴なりしが、故有て役者と成、舞臺も武道を專とし、實の實といふ仕内にて、眞の上手ともてはやされ、家老職のおも〳〵しさ、其頃續く役者もなし。然るに薪水四十に至て子なき事をうれへけるが、人の敎にまかせつゝ、隅田川の龍神へ、三七日の通夜をして、祈出せし申子は卽後の薪水なり。實やびんがハ卵の中より其聲衆鳥にまさるとやか、薪水子役より愛敬つよく、若衆形にて大入を取、僧俗、男女心をうごかし、扇、牙扠差、煙袋、歌、發句ハいふに及ばず、薪水が手で墨を付ても兒女子の嬉しがると、義之が墨蹟、定家の色紙にもまされり、父は堅きを仕にせとし、後の薪水ハ初より色事師の名代にて、舞臺の風はかはれども、常の行跡、父にもまさり、贔負の人々招ども、等閑にてハ茶屋へも行ず、若據なく行時は、いつも袴を脱ざる故、客も却て窮屈がる程、行義正しき生質にて、流石昔のあづさ弓、引かたの女中なんどは、鴈の便を求てハ、玉

の緒の絶なんとかこち、人目の關を忍兼ツヽしたひ來るも多かりしが、自然と柳下惠が行ひに等しくみだりなる事怪我にもなし。女ハつれなしと恨れども、其守りの堅き事、大人、君子も恥ぬべし。初薪水孤にて、親類迚もあらざれバ尾上梅幸を親と賴　又此栢車が男氣を見込、兄弟分の約をなし、雲と成、雨とならんと契りしが、元服の後も交り絶えず、實の兄弟より睦じゝいかなる過去の約束にや、戌の秋より雷藏は何となふ煩出し、押て勤ハ勤ながら、次第に氣分惡ければ、亥の二月より舞臺を引て養生しけるを、薪水も日々行て看病おこたる事もなし。され共さらに快氣も見えず、次第におもる病の床、最負の方にも聞傳、そこの立願、かしこの祈禱、樣々心を盡せども、其驗も見えざり。

根無草後編二之巻　終

根無草後編三之巻

かやうに候者ハ、市川の雷藏にて候、我久々の病氣にて、醫療手を盡すといへども、更に快氣もなかりし處に、此程淺草の觀世音を念じ奉りける驗にや、いつに勝れて快く覺ゆ程に、御禮の爲淺草に參詣せばやと存候。浮世の夢も短夜の、まだ晴やらぬ雲井の月、心の駒を引立て、法の爲には藏前の、焔魔堂にぞ着にけり〱。淺草迄ハ程遠し、爰にていざや休んとて、堂のかたへに蹲踞、暫し念珠し居ける所に、拜殿俄に物音して、晝のごとく照り渡り、焔王中央に座し給へハ、左右に十五列を正し、表の方には獄卒共數もかぎらず並居たる焔魔大王、御聲高く、是迄心を盡せども、戀の叶はぬ業腹まぎれ、朕闇雲に亡命して此所に至し心は堺町をぶつこハし、玉をこつちへ引さらハんと、心ハやたけにはやれ共、日本は神國にて、伊勢、八幡、王子の稻荷、おへない手相が多けれハ、漫に他領へ踏込がたし、乾道の事ハ敎法大師の支配なれバ、呼寄て申付よと、轉輪王の心付尤に思ふ故、廣野へ呼に遣ハセしが、定て使歸りつらんと勅諚あれバ、轉輪王さん候、敎法が儀ハ幸と大師河原の別業に逗留セし由承り、御次迄召寄置たり。それ〱と呼次ば、香の衣に、九條の袈裟、御衣の袂の香を殘す、縹帽子の花々しく、いとも殊勝に着座あれバ、焔王近くと招かせ玉ひ、汝を召事餘の儀ならず、聞も及ばん

此大王、見ぬ戀に身をやつす、御坊ハ名高き若衆の開基、此道一派の祖師なれバ、諸分功者と聞及ふ。何卒路考を手に入る魂膽は有まいかと、惚々として勅諚あれバ、教法の詞を待ず、宗帝王居丈高に成て毎日毎夜諫ても、金言耳に逆馬の、指つまりたる御所存哉。三千世界の其中には、日本といひ、唐といひ、天竺、阿蘭陀をはじめとして、數萬の國々ありといへども、皆それ／＼の司有て、國を治め、民を教萬國太平を樂むと、皆上一人の德によれり。されば古唐土にて、呉王劍をこのまるれバ、民きずつく者多く、楚王女の腰の細きをすけバ、宮女に餓死多かりしも、上の好所、下必隨ふならひ。君ハ世界の惣司にして、過去、現在、未來までの善惡を正し給ふ、大切の御身を以て、稚子の小路がくれ、二才野郎の拔參りのごとく、地獄を逐電し玉ふさへ、沙汰の限りの事なるに、寢ても起ても若衆の噂、一ッ穴の狐とやらで、教法迄を呼寄て、言語道斷の御しかた。是に居らるゝ教法大師も、廣野へ入定めされて以來、未だに戲家がやまぬかして、動バ石芋、石蛤で人をちやかし、古河でハ水でじやうだんをはじめ役にも立ぬ臼の目を切、折々ハ堺町、葭町通ひもめさるやら、坊様忍ぶハ闇がよい、月夜にハあたまがぶらりしやらりと諷る。天地自然の女色さへ、淫るゝ時ハ身をしくじり、家を失ひ、國を亡す、況男色の無理、非道なること、耳の穴へ食を喰、煮茶罐で味噌を摺がごとし。かゝる不埒を行ひながら、此宗一派の洪匠とあをがれ、密敎とやら夕河岸の阿字本、不生の春こし膾、鮓の過た衆生を化す。上べ斗の見せかけにて、葛西舟の船頭、雪隱の神の末社も同前、己がなくハ我々も、かゝる憂目ハ見まいぞと、此一宗の

新發意が祖師のあたまを叩といふも、實尤と覺ゆる也。いそぎ教法を追まくり、廣野山と黄獨葵根店を片時も早く破却して、痔病の愁を除べし。ソレ〳〵と下知すれバ、轉輪王押とゞめ、宗帝王の詞ハ皆理屈と申物にて、大道をしるの理にあらず。焰王の御身持、諫るハ臣下の道とハ申ながら、譬ハ雷火に水を掛れば、其火ますます〳〵さかんなれ共、合せ火をなす時ハ、其火却て消るがごとし。又教法の若衆好は其人の一癖にて、道を害するに至るべからず。なくて七癖といふ諺あり、王濟が馬癖、和嶠が財癖、杜預が左傳、慈鎮の倭歌、盛親僧都の芋魁、宗祇法師の髭を愛せしも、皆人々の癖ぞかし。志尋常にして癖大なる者ハ癖の爲にとらかされ、志し大にしてなミ〳〵の癖ある者、何ぞ癖の爲に志を奪れんや、大師の若衆を愛するは、一には癖、二には糟糠も腹にみつれバ八珍をかへり見ず、末世の坊主、男色にて事を濟せ、女犯の害をまぬかれしめんと、遠きを慮る權者の心、不學、無術の輩の容易しる所にあらずと、詞を放て云返セバ、初江王すゝみ出、轉輪王の詞面白し。去かし坊主ハ左も有んが、女色をいましめぬ俗人の男色を好事、甚以て其意得ず。大王も只今より路考が事を思ひ切、是より三谷通ひと出掛、土手をしつぼり雪の鷺、只一人は用心いかゞ、我等御供仕らん。それ郭通ひの風流なる宿の出入に人目を忍び、家業のいとまに我身を竊む。或ハ兜籠、或は船、黄帝車を製すれ共、四ッ手の輕き案じは出ず。梶原逆櫓を爭へ共、猪牙の早きに心付ず。末世の手まハし浮世の才覺、腰のすハり、櫓

の手練、飛鳥と成て雲に入ざれば、射る矢と成て空をしのぐかと疑ふ。船かろく人重く、動けバうごき、鎮まれバしづまる。潮引てハ橋杭長く、月出てハ登ること早し。火繩箱にくゆれば吸がら舷をたゝく、聲ハ聞へず往來の人、目ハ屆く左右の河岸、椎の木は屋ねをしのひで高く、首尾の松ハ波をくゞりて榮ふ。竹町の渡、十文字に過、駒形の堂斜に見渡す。遠きもの自近づき、近き物忽遠ざかる。程なく廬崎、眞乳山、三圍の鳥居恨めしそうに覗けバ、洲の上の葦、心有りげに招く、今戸橋小しといへども、通る人よりくゞる人多く、堀の舟宿多しといへども、出る舟あれバ入舟あり。懸方燈水を照せば提燈の火は土手に映ず。道哲の鉦耳をすませバ煙の臭鼻をつらぬく。金なき男ハ無常を觀ずれども、時めく人は遊ぬが損也と悟る。草青々と萌出てハ心殊更春めき、月皎々と照てハ其俤益々ゆかし。螢かすかに飛でハ別世界の風涼しく、雪ちら〳〵と落てハ醉覺の顔心地よし。野路の風景他に異なるを、見れども見えず、聞ども聞えず、衣紋坂、大門口、人の風俗常にあらざれバ我心我にあらず、仙人も通を失ひ、石佛もうかれ出る。衣裝の伊達、あたまの物好、三人一般ならざれバ、萬人亦同じからず。しる人あれバ、しらぬ人あり、見ぬふりあれバ、見せるふりあり。待合の辻中の町、大道直して髪のごとく料理潔して玉のごとし。茶屋の饗應、牽頭の洒落、小戸は茶漬に正躰をあらはし、底ぬけハ先底を入る。垣間見の隣座敷は見し玉簾の內ぞ床敷、行過る道中には乙女の姿しばしとゞめよと思ふ。提灯寸をはづれて大く、定紋紙にあまつて目立つ。花美を極る紐には鳳凰も文彩を恥、照を撰べる瑇瑁には、

名玉も光輝を失ふ。道筋糸をはゆるがごとく、足音節を打に似たり。禿のされやかなる、新造の花やかなる、やりての一くせ有顔色も、芝蘭の室に入て自香しき、常の嫗とはたがへる様におもほゆるもおかし。江戸町、京町、前後に在て、各左右二町に分れ、すみ町、亦其中にはさまれて、獨南一町にかたよる。五丁町の名遠近に傳へ、夜店の氣色、古風を變ず。身仕舞濟で、鈴の音聞へ、日暮て後格子賑ふ。座は位を定め、衣裝ハ新古をわかつ。油煙天に登り、三絃地に響き、文は誰爲に書、囁ハ何事をかいふ。地廻りの下駄鼻歌と共に去り、はむきの町人新吾左と伴ひ來ル。老爺あれば少年あり、醫人あれば先士あり、野夫あれば通り者あり。どらは盡す始終の氣、僧ハ忍ぶ借り着の紋、頭巾ハ一むれの闇を生じ、編笠一片の山を畵く。種々の出立、さまざまの風俗、波のごとく寄、雲の如く集る。人の心各異に、物好亦一般ならず。目本に惚れバ口元になづみ、鼻筋に見込バ靨に打込、莠と苗と燕石と玉と、何れをか捨、何れをか殘さん。初會の盃おもむき古く、給えせぬも久しいもの也。作法を崩さず位を落さず、座を明ず囁ず、されぎの柏子に乘ざること、岡場所の企及べきにあらず。料理出床おさまり、來る事おそく、待事長し。引ヶ四ッの柝聲ほの聞ゆれバ、廊下の足音、耳に響き、茶屋ハ迎の刻限を約し、男僕來りて油をつぐ。隣の口舌、よその むつ言、浦山しき風情ありて、待ハ久しき物にぞ有けりの小歌の文句も身にこたへ、モフ來そふな物じやといふ狂言も、思ひ出す上草履の音、扨こそと待バ、夫にはあらで行過たるも本意なく、亮篇の明ハ是なんめりと思へバ、新造來りて厨櫃を鳴らすもにくし。長

ふなり短ふなり、右に寢、左に起、咽乾て手をならせば、丁髷の返事もなが〳〵しき夜を獨かも寐んかといとゞ心細し。欠し伸し心氣勞れて纔に來り、たばこくゆらすも亦思ハせぶりなり。初會の遊ハ蕾る花の色を含て日を待がごとく、谷の報春鳥枝に來て聲を出さゞるに似たり。かゝる内なん九郎助稻荷もいまだ講中とハ思はず、出雲の神も先當座帳に記すなるべし。行に解通ふに馴染、白き糸の染にたごへ、陽氣に物の暖るがごとく、茶屋にむかへ大門におくり、先座の委細巨細、新造の人身御供、させども貰ひ、もめれども來る。愈思へバ愈思はれ、可憐がれバ又がられ、連あれバ行、一人も行く、異見いふを野夫と見くだし、馬の合たを粹なりと思ふ。惣仕舞は門帷をおろし、居つゞけハ浴室を覺え、雪の旦の小鍋立ニハ、丁髷向ふの人を呼び、雨の夜のしつぽり酒には、内の女郎追々に集る。語盡して歸ると思へど、別れになれバ詞殘がごとく、逢ねバならぬ用ありと、呼れて行ば、又左のミ外に用なし。枕の定紋ほくろの命、箸紙客の替名をしるせば、文にハ己が本名をあらハし、昔を明し、行末をかたり、神に誓ひ、佛に祈り、或ハ指、或は爪、實と見える虛あれバ、虛より出る實もあり。若飛鳥川の淵瀨定らず、月草のうつろふ色あれバ、捕手待伏勢おこり、羽織さかれ、髮切られ、男は女の操を守れバ、女に男の意氣地あるも、實此里のならハせなり。物日の約束、夜具の敷初、袖留つき出し身請の祝儀物を貰てやり手と呼れ、角なくて牛といはる。臺は喜の字に定り、豆腐は山屋に名高し。袖の梅卷せんべい、漬菜、昆布卷、甘露梅、群玉庵ハ河瀨に名をなし、最中の月は竹村に仕出す、小賈の淺漬茶碗の

煮豆・宵の文蛤、夜明の按摩、世に並なく、外に類なし。遊の興多き中にも大黒舞のいさましき、燈籠の花〴〵しき、二日七種藏開き、初午涅槃事おさめ、上巳、灌佛、衣更、端午、七夕、盂蘭盆會、八朔、重陽えびす講、いのこ餅つき淺草市、櫻の風流、月見の趣向、善盡し美を盡す、一時の榮花に千歳をのべ、白髪忽黒きに變ず、世に譬ふべき樂あらんや。かゝる風流を知らずして、若衆を愛し玉ふ事ハ、夏の虫氷をしらず、乞食の女房搗立の餅を喰ざるにひとし。サア返答を承んと、席を叩て演らるゝ。

根無草後編三之卷　終

根無草後編四之卷

初江王の辨舌に、焰王を初として、一座大きに驚き入、詞を出す者もなし。其時大師莞爾として曰、鮑魚の肆臭き事を覺えず、蓼の虫葵にうつらず、女色に淫るゝ輩は、我男色の貴きことを知らず、それ男女の交りは、陰陽自然の道理にして大倫の根元なれば、いきとし生る者此道にもるゝことなし、然るに末世に至ては、かゝる貴き男女の道を切賣にして、遊所と名付、人の心を蕩より、家を傾け、國をかたむく、其災少からず。我これを慮て、男色の淡きを以て其災を滅せしむるは、鹽茶にて渴をさゝめ、むかへ酒にて宿酒を醒す。又男色の上品なるは劇場の地を專とす、これ亦樂の餘風にて人を和するの器となり、惡を懲し、善を勸め、鬱を散じ、憂を忘れ、太平に居て亂世の趣をさとり、安きに座して危きの理を知り、愚夫も仁義のはしくれを聞き兒女子も古人の姓名を覺ゆ、實に治世の玩びなり。抑芝居のさかんなる二丁町の賑ゝ敷、中村座、市村座、外記座、辰松肥前掾、軒をならべ入を爭わけて歌舞伎兩座を以て根元とし大劇場と稱す。顏見世入替り定てより、役者附四方に散じ、世界定めはなし初、讀初、稽古總ざらへ、下りの乗込一座のさわぎ、酒酒を飲人人にたかる。雪霜の夜の寒きを忘れ、一陽來復先此地より初る。紋看板には甲乙を顯し、繪姿藝のあらましをしらしむ。提灯、

連て定紋まばゆく、行燈争て趣向を盡す。左右の埒鮓のごとく押、前後の群衆桃を盛に似たり。行んとすれども人分らず、退んとすれども顧に隙なく、押れて動き、もまれて止り、氣頭に登り足地を踏ず。贔屓のきをひ手打の連中、ひろめの帨巾歪にかぶり、我慢の弓張、筋違に提、虎のごとく猘り、狼のごとく叫び、十里の谺谿ヨイ〱〱と響き、歸の禮義お目出度と騷ぐ。積物峨々として山よりも高く、張札翩翻として雪のごとく飄る。迎の提灯烈鈌を欺き、二階のさハぎハ雷の落るかと疑ふ。どぶ板厚ふして足音高く、拔露地狹ふして小便流る。東西の街南北の道筋碁盤のごとく、又蜘手に似たり。來る人、行人、止る人、貨食者は煮にいとまなく、貢擔子は遠にむらがる。橋は群集の人にたはみ、川は蹴上の流塵に埋む。一番太鼓ハ八聲に先立、三番曳は明るを待ず、木戸の仕着せ揃の定紋、手巾長ふして領に餘り、扇大きふして招くに便なり。仕切場、留場、棧敷番、半疊中貢火繩賣衣裝目立、鬘光り、勢ひ猛に聲高し。貴賤、老若、僧俗、男女、胸さはぎ魂飛び、足を空になして脇目をふらず、衆星の北辰に共ひ、河水の海に朝するに似たり。上棧敷、下棧敷、内簾太夫新格子、場所の善惡手筋を求め、茶屋の云込前後を競ふ。毛氈の紅葉、衣裝の花、羅漢の人は俵のごとく重り、舞臺の透間ハ蠅のごとくたかる。向棧敷、土間棧敷、切落し追込なんど、分に應じ、好にしたがふ。膝と膝、肩と肩、人氣蒸火繩くゆり、番附つゝね新淨瑠璃、饅頭、煎茶、おこし米、蜜柑、辨當、酒、肴、無遠慮に越、大股にまたぎ割込は近所の膝を痛め、烟草は隣の羽織をこがす。袖と袖との色事にはあたりのやきもち騷々敷、足

を踏れし諠譁には、留場來りてかつぎ出す。しらせの撃柝、替名の讀立、幕明てより殊更にどよみ、花道の出端手打の祝儀、下り役者の謁見にハひろめの取なし贔屓を願ひ、座附の口上玉を連ぬ。家々の藝、得手〳〵の所作、頭の物好天下に流れ、衣裝の仕出し都鄙に傳ふ。音曲は呂律を極め、鳴物は拍子を盡す。作者の趣向、道具の見え、故を溫新しきを工ミ、或ハ勇ミ、或ハ戯れ、或ハ笑ひ、或ハ愁ふ。諸見物の心々響の聲に應ずるがごとく、りきめバりきミ、泣バ泣、私に感じ、顯に譽、はづミのかけ聲人並のヤンヤ、鼻毛延、涎流る。しつぽりのぬれ事にハ女中の上氣耳を熱がり、老女も昔に還らまほしと思ふ。着替てハ媚を爭ひ、のべ鏡ハ化粧を補ふ。東の上はてら〳〵と輝き、西のうづらハ興を催す。舞臺の出這入ちよんの間盃、手折れる花のあたりに目立、水の月影所を定めず、追々に後出てより程なく正月二の替り、嘉例の曾我に種々の持込、春狂言曾我祭り、土用休、秋狂言、又顏見世の入替り、環の端なきがごとく、年々歲々、人同じからず。茶屋の混雜、勝手の騷ぎ、下女飛で八百屋に至り、魚ながしに踊る。かまどに陽炎もえ出れバ、擂盆地下に雷を發し、割刀に電光あれば、いり鳥鍋に液雨の聲あり。四季の景色、目前にあらはれ、はからずして仙境に入かと疑ふ。二階はれやかにして間取無造作に、割正して器物潔し。茶屋のむかひ送りの提灯、編笠面を覆ひ、振袖地を拂ふ。綠の髮、雪の膚、小袖きらびやかにして往來の目を驚かし、足音しとやかにして待人の胸に響く。追々に來り、程々に座す、氣どりハ旭の昇るがごとく、風情ハ若竹のうるハしきに似たり。小歌勇ありて、三絃俗ならず、酒、

はづミ興闌にして、舞の身ぶり狂言のおもむき、栴檀は二葉より香しく、蛇は一寸にして其氣を得る。ぽんぱち火まハし道具まハし、八兵衞〳〵八兵衞、地口どぐわんす羅漢舞、蔭繪、聲色、中返り、男ハ女ハ獅子ちよ、きりちよ、投壺の矢數、拳の變化、蛇は蛞蝓にまけ、里長は狐に誤る。我を忘れ人を忘れ、童に還り、愚に及ぶ。臨氣應變、千變萬化、遊の骨髓に入騷ぎの妙所に至る。或ハ通ひ或は馴染、こつそりと逢しめやかに語る。いやみなくいちやつかず、意氣地あり、拍子あり、己を立るの計策少く、末を契るの慾もなし。傾城は甘きこと蜜のごとく、串童は淡きこと水のごとし。甘きものは味盡、淡きは無味の味を生ず。倡妓の實ハ慾より出、優童の實ハ義より出。鳳凰、孔雀、雉、鷄、雌は雄の見事なるにしかず、脧子、女妓、町屋形、女ハ男娼の美なるに及ばず。まして二丁町の他に勝れる、花の都の錦を分てハ柳櫻の艶なるを撰び、浪花江に身をつくしてハ、よしあしの品をさがす。千人の中より百人をすぐり、百人より又一人を出す。名代の小倡古今絶ず、此地の繁花、四時をわかたず、二月の瓜、九月の獨活、寒中の笋には孟宗のお袋小言を云やみ、四方が仕似せの沃泉水には美濃の孝子も荷嚢をたゝく。福山の河漏、虎屋の菓子、家橘盛府が油店、雷藏おこし、鹿子餅、月々に流行、日々に弘る。うかれてハ暮るを覺えず、騷ひでハ明るをしらず、元氣を引立、積鬱を散ず、不老延年の藥たりとも、いかでかこれに勝るべけんや。彼利に入りし倡妓買の、陰症の傷寒に類せると、日を同して語るべからず。かゝる繁花の其中に、三ケの津にて一人と呼れし菊之丞が其容貌、譽るにも詞なく、譬んとするに物なし。餻のお

仙、小指をくわへ、銀杏のおかんはだしにて逃、雪溪が花鳥も色を失ひ、春信も筆を捨。帽子に瀬川の名目あれバ、染物に路考茶あり、路考娘弓町路考、似たるに名付美しきに譬ふ。我此一派開基以來、かゝる器量は見初なれバ、焔王のこがれ玉ふもゆめ〳〵僻事と思ふべからずと、敎法大師の辨說に、一座も大に感心し、大王猶しもうかれ給ひ、扨々餅は餅匠とやら、さすが男倡の祖師程有て驚入たる諸分の功者、迚もの事に御坊を賴、路考を迎に遣ハすべし。早々用意させかせ給へバ、倶生神かぶり打ふり、イヤ〳〵それは宜しからず、かゝる名代の若衆好を、路考が迎に遣ハされんハ、燒鼠を狐に預け、猫に佳蘇魚の番とやらにて、必定しくぢりの基なり。既に以先達て龍神に勅定ありしに、若衆好の水虎めを迎にやりし不調法故、あつたら玉を取にがし、只今に至る迄地獄のさはぎと成たること、前車の覆るをみす〳〵も、敎法を遣ハされんハ以の外の誤也。只今大師申通り、天下に一人の器量にて、四角四面の大王さへ、戀こがれ給ふからは、誰をやりても忽惚、木乃伊取とて木乃伊と成ハ、億萬劫をふる迚も、容易御手に入まじければ、此以後の懲しめの爲、龍神を呼寄て罪に行ひ玉ハずんバ、焔王の政道暗きに似たり。即水中の惣司、難陀龍王の幕下、此淺草の川上、隅田川の龍神を召給ひて、急度御吟味有べし。ソレ〳〵との早使、足疾鬼に引立られ、隅田川の龍神參內あれば、焔王怒の御聲高く、先達て路考がこと難陀龍王に申付しに、不吟味なる取斗故、水虎めが大しくじり、汝此川筋を守りながら、しらず顏にて打過しハ、言語同斷の仕かたなれバ、其罪汝一人に歸す、早く刑罰に、

處すべしと、仰の下より獄卒共、鐵の棒をふり立〳〵、龍神を取まハし、既にかうよと見えければ、傍に居合す雷藏が、椽側よりあゆみ出、暫く〳〵と聲を掛、ずつと出て獄卒を取てつきのけはりとばし、龍神を後にかこひ、焔魔王をはつたと白眼、東夷、南蠻、北狄、西戎、四夷八荒、天地乾坤の其間、あるべき者の知らざらんや、長病にて痩たれども、海老が讓の暫役、天幸まがひの焔魔殿、鬼瓦からつりを取、あてこともなひしやつ面で、身の程しらなひ色せんさく、傍から見る目かぐ鼻の、いハれぬちよこざい出かしだて、おらが若衆の產神の龍神までを呼出ひて、いじめる所へびつかりと、ひかりに出かけた雷藏が、ぐわた〳〵鳴の荒事に、うぬらが臍の用心しろと、飛掛て大王の、がんづか抓で投付ればゞ、ソレのがすなと取卷を、取てはなげのけ、つかんでハ十王みじんの鬼つぶて、當を幸、踏ちらし、すつくと立し夢覺て、雷藏は病の床、冷汗流してうなさる聲、妻をはじめ病家の人々、様々に介抱すれバ、漸〳〵に正氣と成、いさくるしげなる息をつぎ、我長病のつかれにて、まどろむこともなき其内に、不思議なる夢を見しさて、始終の様子物語、これぞ正しく我命の終るべき時至り、焔魔の廳に至といふ、佛の告と覺えたり。しる通り幼少より、うき艱難の世の中を、渡りくらべてしるといふ、阿波の鳴戸のなみ〳〵ならぬしんぼうしとげ、世の人の贔屓に預り、世話に成りし恩もおくらで果んと、返す〳〵も口惜し。二にハ兼てより、我は此身で朽果るとも、悴を守り立、人となし、父の名字をつがせんと、思ひし事も水の泡、是ぞよミぢの障りぞと、涙と供に物語れバ、妻や子供はしやくり上、と

かうの詞も出ざれバ、薪水ハ力を付、尤病は輕からねど、死るといふにも極るまじ、藥の効、佛神の力を頼給ひつゝ、心しづかに養生あれ。譬お命終るとも、我らかくて有からハ、跡の案はし給ふまじと、念頃に力をそゆれバ、いと嬉しげにうなづきて、何かいはんともがけども、舌強りて聲出ず、漸に筆をとりて、辭世の一首かく斗

終にゆく道とはしれど子規
　なきつる方にむかふ極樂

市川栢車と書終り、四十四歳を一期とし、明和四年亥四月中の二日子の下刻、眠るがごとき臨終に、人々夢の心地にて、前後不覺の歎きの躰、目もあてられぬ次第なり。扨有べきにしもあらざれバ、野邊の送り取おこなひ、所縁有菩提所なれば、下谷の常林寺に葬て、蓮華院詠行信士と書しるす。印の石ハ朽せねど、贔屓の人の涙の雨、朽ぬ袂ハなかりけり。

根無草後編四之巻　終

根無草後編卷之五

萬のことはたのむべからずと、吉田の法師が筆の跡、頼にならぬ娑婆世界、さしも日頃健なりし市川栢車世を去れば、世上の驚き大かたならず、遠近親疎の差別なく、或は惜しみ、或は歎き、わけて贔屓の婦人なんどは、思ひ亂れて泣く涙、雨とふらなん渡り川、水まさりなば、かへり來るかに、などゝかこてども、三途の川に川留なく、死出の關の戸閉ねば、反魂香の烟さへ、仇に立行月と日の、七日〳〵の訪吊ひ、諸事薪水が身に引請、事故なく取まかなひ、殊に悴雛藏は、父栢車が稚立にひさしく、怜悧なる生質にて、育も賤しからざれば、先祖の家名を繼せんとて、父の傳へし業を止させ、頼母しき人引とりて、敎訓殘る方もなし。其外稚き娘なんども、所縁の方に宮仕、天道人を殺さずにて、皆それ〳〵にかた付けり。されば南山雲起れば、北山雨下るの習にて、翌年の春の頃より、薪水も氣のかたにて、どこ悪しきとも覺えねども、只何となふ心重く、次第に形容瘦おとろへ、盜汗、朝熱、痰咳に、藥よ鍼よ四花患門、祈禱立願殘る方なく、さま〴〵に養生すれども、中々快氣の躰にも見えず。其身も所詮生らるべき病とも覺えねば、後世の營おこたらず、兼てより聞るにも、佛出世の本懷を妙法蓮華經と名け、法華の八軸は八葉を表し、四要品の中には普門品を咽喉とし、觀音薩埵の妙智力、三十

三身、無量の容を標し、南方於帝庭古天の廣小路、補陀落の切通にて、種々の手づまをはじめ玉ふ。就中聖觀音は餓鬼道にての化主の助と呼れ、衆生濟度の方便には互と德利の妙をやらかし、一紙半錢の手の內には、むしやらくしやらの大明神、[梵字]となへて、掌より甘露をふらし、餓鬼趣に施し給ふ故、大慈觀世音と申なり。金龍山淺草寺に安置し給ふ因緣は、推古天皇の御宇に當て、檜熊濱成、武成とて兄弟の漁夫有けり。憂世渡りの網の中より顯れ玉ふ尊像にして、古今の靈驗いちじるく、日頃念じ奉れば、ましてかゝる時節なれば、普門品を念誦して、懇請少も怠慢なし、頃しも卯月初つかた、いとゞ短き終夜、寐る隙もなき、なが〳〵の看病に勞れ果、妻をはじめ病家の人々、眠らじとは思ひながら、皆それなりに打こけて、跡の樣子は白川の、夜舟轆てふ鼾の音に、新水は目を覺し、讀かけし經にかゝり、一心稱名觀世音菩薩、即時觀其音聲皆得解脫と念じつゝ、信心おこたることぞなき。されば水晶太陽の火をよび、水淸ふして月影をうつす、氣にむかへ心にまねき、思ひ〳〵て止ざれば、鬼神告るの習にて、異香四方に薰じ、音樂の聲聞え渡れば、新水不思議の思ひをなし、ふりさけ見れば大空より、淺草の觀音忽然として顯れ給ひ、これへ〳〵と招き玉へば、新水夢の心地にて、病の床を立出れば、自然と病苦も覺えずして、行ともなく步行ともなく、と有所に隨ひ行。菩薩御手をのべ給ひ、かたへなる卯の花の、雪にまがふを手折せ給ひ、それ世の人の口ずさみに、我大悲の力にては、枯れたる木に花咲とのみ、一筋に覺えたるは、皆凡俗の迷なり。生ずべき時節に生じ、枯

べき時節に枯ることは、天地自然定れる數にて、破鏡重て照らさず、落花枝に上りがたし 釋迦、達摩、顏囘孔子、深山烏も白鷺も、のがれがたきハ此道なり。悟れバ安く、迷バくらき、生死二の道にうとく、私の法を立、得手勝手の教をもうけ、皆己が田へ水をひく、不埒の族多き故、世上の俗人益々愚にして箸のこけたも神子、山伏、屁を放たるにも加持、祈禱、奇妙の咒咀卜筮人、一犬吠て萬犬吠、應といへバきくかと思ひ、祈禱を賴の不養生より、身を失ひ家を亡す。心だに誠の道に叶ひなバ祈らずとても神や守んとの教の歌は、丘之禱久矣といふ、孔子の詞に符合せり 人は天地の靈なれども、私の雲に覆れ、人欲の雨風はげしき故、災を生じ、病を生ず。事に臨で祈といふハ、人欲の私をしりぞけ、浮雲を拂て晴天を望む、これ一心の誠より其本にかへるなり。譬バ此卯の花の白きハ花の持まへにて、天より授かる色なれども、人家の垣根に咲時ハ、風塵埃の爲によごれ、煙にふすぼり、灰に穢さる。息にて拂ひ、水にて洗へバ、本の白きにかへれども、願くハ初よりよごさぬやうに氣を付れバ、穢を拂ふ煩ひなし。よごれを拂ふを賴にして、よごるゝをかまはぬ故、スハといへバ狼狽まハり、ソリヤ御祈禱よ立願よと、せつなひ時の神だゝき、地黃を賴の不養生、袖の梅を楯につひて、內損をするがごとし。彼觀音の力を念せず、火阬變成池刀尋段々壞と說れしは釋尊一時の方便にて、實の觀音を說にあらず。正法に奇特なし、飯綱放下の類にハあらず、何ぞや業慾無慙の祈禱者の言を巧僞をもうけ、謝禮をむさぼる族を賴て、凶事を祈、病を退んとするは、開帳場にて巾着切に紙入を預るに似たり。

又人の名をなし事をなすは、草木の花さき實のるにひとし。牙ある者には角なく、重瓣の花に實少きハ、造化といへる伴當の入合せたる算用なり汝が花は二葉より、人に優れる榮名ありしハ、早く咲バ早く散る花の譬と思ふべし。さきに栢車が病中に、我を念ずること切なりし故、浮世のはかなき有樣をしめし、生死の道を悟らしめんと、焰王だも煩惱のまよひまぬかれがたきをしらせ、人の樂み多き中に虛を賣、實を買、吉原堺町の面白きこと世にならぶべきものなく、人の心をとらかせども、皆是一睡の夢の樂なることを示し、栢車がよみぢの迷ひをはらせり。いざや薪水、汝が命、久しからざる因緣を語り聲かさん、汝が父彥三郎、四十に及て子なきことを愁へ、隅田川の龍神にたんせいをぬきんでゝ祈るといへども、天より授し子種なき故、龍神の力にも叶はず、去りながら、あまり切なる志にめで、龍神自形をわかち、汝が母の胎內にやどり、出生せし子ハ其方なり。去によつて汝が體は、隅田川の龍神とハ一躰分身の姿なり。栢車が夢中にしらせしごとく、隅田川の龍神無失の罪にしづみ、其科のがれがたき事あり、是龍神の飛行自在、大小變化の妙術も、死べき時節ハまぬかれがたく、去ル四月五日の夜、天人の五衰とて、多の天人甍をならべ、作り立たる家々の、忽一時の灰燼となる其砌、龍神も煙に卷れ燒死で、其尸世に殘り、龍の頭と評判せしハ、焰王の命にそむき、路考が代りに八重桐を連行し、水虎が科のとばしり故に相果し、隅田川の龍神の遺骨〳〵と思ふべし。龍神死てハ程もなく、汝が命終るべきは、極れる命數なりと、いふかと思へバ忽に、かき消ごとく失給ふ、薪水はぼう然と

元の病の床の内、夢ともなく現とも、思ひ掛なき教を請、心のまよひ晴行バ、病の苦痛ハなけれども、とても必死の症なれバ、次第〳〵にをとろへて、辭世一句

艶なるや我はめいどへ花あやめ

明和五ッ戊子の歳五月四日の曉に、終に空しく成にけり。戒名ハ妙果院薪水日成と、深川の淨心寺に石の印いちじるく、最屓の參詣絶間なし。嗚呼時なる哉、命なる哉、さしも名高き栢車、薪水、二年の内に故人となり、劇場も何か物足らぬ風情にて、いかほの沼のいかにせんと、世上のいさみうすかりしが、楓葉衰て廬橘花發く習にて、當顔見せの入替りより、若手の役者新下り、花を競べ、色を爭ひ木戸の大入、世上の評判、一時の煙となりたりし、吉原も建つゞき、日々に繁昌いやまして、美麗昔に十倍せり。人間萬事塞翁が、うまれた時ハ裸にて、又死時もはだかなり。飲や諷や、一寸先は闇の夜に、鳴ぬ鳥の聲聞バ、拾ぬ先の金ぞ戀しき。かやうのたわけ世に多きも、實に太平の御代の春、事もおろかや、かゝる世に、住る民とて、豐なる、君の惠ぞありがたき〳〵。

根無草後編五之卷　大尾

跋

鷄が鳴吾妻はやと、千早振神の敎の和事より、相聞の根に通ひ、由緣ある江戸紫の治郎帽子は、ここにその色香も深からずや。とりわき此道の聖とあふぐ市川瀨川の兩流は、その源遠く、その末廣して、流れをくみ取人多ければ、浪速のみづと聞とにつけて、蘆町のよしあしをいはず、花房町のあだなる散のわかれには、湯島のわきかへる胸をこがし、底倉の湯泉のそこひなき淵に身を沈むるとも、と思ひ入たる意氣知のをゝしさ、男氣のいきはり有、是に增る情やはある。はしきやし郎女のなからひは、久方のひさしいもので、舊衣の事ふりにたれば、朝夕の飯を調るが如く、是を包丁の人、料理の家とはいかでかいはん、山鳥の尾の長々しき、河漏麪の淡薄をめで、隼人の薩摩なる、金粟酒の酷烈をもてはやすこそは、風流のしわざなるべき。學の窓に氣を屈て、古文をよみ、烏几の上に筆を曲て、篆隷を書を、文人書家といふも、みな是なりがたきを、樂として醴の如なすてゝ、水の如きにしたがふならずや。今や時太平に治る　御代の春しごと、遊魚なすのらりくらりの遊の道は、ながいも有ばみじかいも、百たらぬ八百屋の緣の下より多く、寶、

引の糸の千條にわかれ、紋付の數の百箇に替が如く、坪皿のそこはかなく、二乘をくひ、瓜造にはあらぬ獨樂の詐も有めれど、是等はみなうまさけの蜜をねぶらせて、終にはうつはぎに剝とられ、裸莬のきりめに壚のしむうきめ見んよりは、しかし此道の左袒して春はよふ／＼曙白くなり行頃より評判記を待受、品定の九品十躰の月旦評に、一の替、三の替の未來記を思ひ量、顏見せにお取越の正月して、時ならぬ花を咲せたるは、玉だれの小瓶の中の乾坤もかうかしらず、三千世界に外にはないぞや。古人のいへる、狂言綺語も法の聲と、空海師の蒼海よりひろき眞言秘密のをしへ、在原の朝臣の童すがたに、なづみし岩つゝじの和歌什を初として、代々の歌集に撰み入られしも、松帆物語の見る、にゆかしき、みな此道の器なるをや。先に根無草の册子の。行河の水のまに／＼、大邦に流行しに、今續て出る物は、衆妙門の教にもとづける成べし。今に見るべし、あら金の地を走る犬じもの、久方の天をかける鳥の類ひは、雌雄相交る心のみ有て、童子を相おもふ道をしらず。是を思へば、今艶治の情をすてゝ、僻事なり、あらぬ外道なりとそしる輩ハ、人の面は有ながら、獸の心なりといはゞいかゞハせん。あに人として鳥にしかざるべけんや。

明和戊子のしはす、足をそらにする夜、來春をはま町のやどりに、大藏千文しるす。

嗣出書

當世智囊抄　全部五冊　近刻

虛實山師辨　全部五冊　近刻

金神論　前編　後編　全部五冊　近刻

明和六巳丑正月吉辰

書肆　江戸神田下白壁町　岡本利兵衛

風来六部集

放屁論　同後篇　痿陰隠逸伝
里のをだ巻　飛だ噂の評　天狗髑髏鑒定縁起

風来六部集　全二冊

東武書林　大觀堂板

風來六部集序

時に遇ざれは孔子もお茶を引キたまひ。管仲が鞍替も能所へ乘込ば。桓公の揚詰と成て遂に齊國のおいらんとなる。予が先師風來山人。宿昔青雲の梯を踏失て。天笠浪人と成しより。滄浪の水糝に濁醪の世の醉を醒し。吐散したる酒反吐は。醉た浮世に廻さるゝ醉潰共に目を明す。太平樂の卷物を。纔の本に書つゞめ。世に行るゝ物六卷あり。頃日書林太平館。其小册にして讀足らず。且ちよぼくさと數多きは。囘覽するの煩はしきを厭ひ。六部を合して二卷となし。是を號て風來六部集と題す。全く殘口が無駄書を八部せんとするには非ず。唯是會刻の六部に御放施。

于時安永九年五月十八日下界隱士天笠老人賴もせぬに筆を採る

放屁論自序

屁てふものゝある故にへの字も何とやらをかしけれど。天に霹靂あり神に幣帛あり鷹に經緒有船に艫あり草に女青あり虫に氣蠜あり狐鼬鼠の最後屁は一生懸命の敵を防ぐ。人として放ずんば獸にだも如ざるべけんや放たり臭だり屁たる君子ありこいへば强これを賤しむへからす今評判の撒屁漢論より證據兩國橋

風來山人誌

放屁論

人參吞で縊る癡漢あれば河豚汁喰ふて長壽する男もあり。一度で父なし子孕む下女あれば每晩夜鷹買ふて鼻の無事なる奴あり。大こふなれど嗚呼天歟命歟　又物の流行と不流行も　時の仕合不仕合歟。又は趣向の善惡によるならんか。粕莚が氣どり。慶子が取作事。仲藏が功者金作が愛敬。廣治が調子三五郎がおこなし。梅幸浪花をひしげば　富三東都に名を顯し川口の參詣　淺草の群集、深川の角力、吉原の俄。沙洲は木挽町に河東節の根本を弘むれば。住太夫は葺屋町に義太夫節の骨髓を語る或は機關　子供狂言身ぶり聲色辻談議　今にはじめぬお江戸の繁榮。其品數へ盡がたき中に。さいつ頃より兩國橋の邊りに、放屁男出たりとて。評議とり〳〵町々の風說なり。それ熟惟ば。人は小天地なれば、天地に雷あり　人に屁あり。陰陽相激するの聲にして。時に發し時に撒こそ。持まへなれ、いかなれば彼男　昔よりいひ傳へし階子屁數珠屁はいふもさらなり、碪すがゞき三番叟、三ツ地七艸祇園囃。犬の吠聲。鷄鳴。花火の響きは兩國を欺き。水車の音は淀川に擬す。道成寺菊慈童。はうためりやす伊勢音頭。一中半中豐後節　土佐文彌半太夫　外記河東大薩摩、義太夫節の長き事も、忠臣藏矢口渡は望次第。一段ヅヽ、三絃淨瑠璃に合せ。比類なき名人出たりと聞よりも見ぬ事は咄にならずいざ行て見ばやとて二三輩打連て横山町より兩國橋の廣小路橋を渡ずして右へ行ば昔語花、

咲男とこと／＼しく幟を立僧俗男女押合へし合中より先看板を見ればあやしの男尻もつたてたる後。に薄墨に隈取て彼道成寺三番叟なんど數多の品を一所に寄て畫たるさま。夢を畫く筆意に似たれば此沙汰しらぬ田舍者の。若來掛りて見るならば尻から夢を見るとや疑んと つぶやきながら木戸をはいれば上に紅白の水引ひき渡し彼放屁漢は。囃方と供に小高き所に座す。その爲人中肉にして色白く。三ケ月形の撥鬢奴。縹の單に緋縮緬の襦半。口上爽にして憎氣なく囃に合せ先最初が日出度三番叟屁。トツハヒヨロ／＼ヒツ／＼／＼と拍子よく。次が鷄東天紅をブヽブウーブゥと撒分其跡が水車、ブウ／＼／＼と放ながら己が體を車返り。左なから車の水勢に迫り。汲てはうつす風情あり、サア入替り／＼と打出の太鼓と共に立出、朋友の許に立寄り放屁男を見たりといへば一座擧てこれを論す。或は藥を用て放といひ又は仕掛の有ならんと衆議さらに一決せず。予衆人に告て曰諸子いふことなかれ放屁藥ある事は我當てこれを知る大坂千種屋清右衞門といへる者をかしき藥を賣が好にて喧嘩下し屁ひり藥等の簡板を出す其藥方も聞得たれどそれは只屁の出るのみにてケ樣の曲屁を放ことを聞ず又仕掛ならんとの疑ひ尤に似たれども。竹田の舞臺に事替り 四方正面のやりばなし。しかも不埒の取しまり、何に仕掛の有とも見えす。數萬の人の目にさらし仕掛の見えぬ程なれば。譬仕掛有とても眞にひると同前なり。衆人眞に放といはゞ。其糟を食ひ其泥を濁らして。放と思ふて見るが可。扨つく／＼と案ずれば、かゝ世智辛き世の中に人の錢をせしめんと千變萬化に思案して新しひ事を工ど

も十が十餅の形昨日新しきも今日は古く固古きは猶古し此放屁男斗は咄には有といへども覗見る事は我　日本
神武天皇元年より此年安永三年に至て二千四百三十六年の星霜を經るといへども舊紀にも見えず。いひ傳にもなし。我　日本のみならず。唐土朝鮮をはしめ。天竺阿蘭陀諸の國々にもあるまし。於戲思ひ付たり。能放たりと譽れば。一座皆感心す。遙末座より聲を掛。先生の論甚非なり　余申べき事有と出るを見れば。頃日田舍より來りたる石部金吉郎といへる侍なり。以の外の顏色にて。扨々苦々敷事を承る物かな、それ芝居見せものゝ類、　公より　御免あるは。人を和するの術にして。君臣父子夫婦兄弟朋友の道をおかし、譬ば大星由良介が仕打は。忠臣の鑑と成。梅枝が無間の鐘は。女の操をすゝむるなり。見せものゝ異様なるも親の罪が子に報ひ。狩人の子は蹄と成。惡の報ひは針の先。必人々油斷するなとの敎なるに。近年は只錢もふけのみに掛りケ様の所へ心を用ず剰屁ひり男の見せ物、言語道斷のとなり夫屁は人中にて撒ものにあらず。放まじき座敷にて。若誤てとりはずせば。武士は腹を切程耻とす。傳へ聞。品川にて何とかいへる女。客の前にてとりはづせしが。其座に小田原町の李堂。堺町の巳なんど居合て、笑けるに。彼女忍び兼、一間へ入て自害せんとするを。傍輩の女が見付。さま〴〵に諫れども。一座がかの通り者なれば。惡口にいひふらされ。世上の沙汰に成なればどふも活ては居られぬとのせりふ、彼二人も詞を盡し、此事決ていふまじとひたすらになだ

むれども。イヤ〳〵今こそ左様に請がい玉へ。跡にていひ給はんは必定。活て耻をさらさんよりは死せてたび玉へとかきくどき。とゞまる氣色あらざれば。二人もすべき方なくて。此事口外せまじきよし。證文を書て。漸自害をとゞめしとかや。可咲事の様なれど。女が自害と覺悟せしは。情を商ふ身の上にて。耻を知て命を捨んといひ。又いき過の通者も。惻隱の心ありて。おほづけなくも證文書て人の命を助しは。又艶しき事ならずや。かく人の耻とする事を。大道端に簡板を掛。衆人の目にさらす事。無躾千萬此上なし。見せるものは錢もふけ。見るが鉢漢なりと思ふに。先生雷同し給ふ事。見限り果たる事〳〵。盗泉の水。勝母の地。皆其名をさへ惡むなり。非禮聞となかれ。非禮見るとなかれとは。聖人の教なりと。青筋はつてのいひぶん。予答て曰。子が辭甚是なり。去ながらいまだ道の大なる事を志らず。孔子は童謡をも捨ず。我亦屁ひりを取事論あり。夫天地の間に有もの。皆自貴賤上下の品あり。其中に至り極りて下品とするもの大小便に止る。賤き譬諭を漢にては糞土といひ。日本にては屎のごとしと。其糞小便のきたなきも。皆五穀の肥となりて。萬民を養ふ。只屁のみ撒たる者。暫時の腹中快き斗にて。無益無能の長物なり。上天のとは音もなく香もなしといふに引かへ。音あれども太皷皷の如く聞べきものにあらず。匂ひあれども伽羅麝香の如く用べき能なし。却て人を臭がらせ。韭蒜握屁と口の端にかゝり空より出て空に消。肥にさへならざれば。微塵用に立つとなし。志道軒が腐儒をさして。屁ひり儒者といひ初しも。尤千萬の詞なり。斯ばかり天地の間に無用の

物と成果て。何の用にも立ざるものを。こやつめが思ひ付にて。種々に案じさま〴〵に撒わけ。評判の大入。小芝居なんどは續べき勢ならず。富三一人が大當りは。菊之丞が餘光も有。屁には固餘光もなく。惣人もなく勝負もなし。實に木正味むき出しの眞劔勝負。二寸に足らぬ屁眼にて諸の小芝居を一まくりに撒潰す事。皆屁威光とは此事にて。地口でいへば屁柄者也。されば諸の音曲者。いふべき筈の口。語べき筈の咽を以て。師匠に隨ひ口傳を請。高給金はほしがれども。聲のよしあしは生れ付。月夜烏や五位鷺の。があ〳〵と鳴がごとく。古き節の口眞似はすれども微塵も文句に意なく。序破急開合節はかせの鹽梅をしらざれば。新淨瑠璃の文句を殺し。面々家業の衰微に及ふ。然るに此屁ひり男は。自身の工夫斗にて。師匠なければ口傳もなし。物いはぬ尻分るまじき屁にて。開合呼吸の拍子を覺。五音十二律自備り。其品々を撒分る事。下手淨瑠璃の口よりも。屁の氣取が拔群よし、奇とやいはん妙とやいはん。誠に屁道開基の祖師也。但し音曲のみに限らず。近年の下手糞ども。學者は唐の反古に縛られ。詩文章を好む人は。韓柳盛唐の鉋屑を拾ひ集て柱と心得。歌人は居ながら飯粒が足の裏にひばり付。醫者は古法家後世家と。陰辨慶の議論はすれども。治する病も療し得ず。流行風の皆殺し。誹諧の宗匠顏は。芭蕉其角が涎を舐。茶人の人柄風流めくも。利休宗旦が糞を甞る。其餘諸藝皆衰へ。己が工夫才覺なければ。古人のしふるしたる事さへも。古人の足本へもさゞかざるは。心を用ざるが故なり。しかるに此放屁漢。今迄用ぬ臀を以て。古人も撒ぬ曲屁をひり出し。

一天下に名を顯す。陳平が曰。我をして天下に宰たらしめば。又此肉のごけんご。我も亦謂く。若賢人ありて。此屁のごとく工夫をこらし。天下の人を救玉はゞ。其功大ならん。心を用て修行すればゞ。屁さへも猶かくのごし。呼濟世に志人。或は諸藝を學ぶ人。一心に務れば。天下に鳴ん事。屁よりも亦甚し。我は彼屁の音を貸りて。自暴自棄未熟不出精の人々の。睡を寤さん爲なりご。いふも又理屈臭し。予が論屁のごしごいはゞいへ。我も亦屁ごもおもはず

放屁論終

跋

漢にては放屁といひ。上方にては屁をこくといひ關東にてはひるといひ　女中は都ておならといふ其語は異なれども。鳴と臭きは同しとなり。その音に三等あり　ブツと鳴ものの上品にして其形圓く。ブウと鳴もの中品にして其形飯櫃形なりスーとすかすもの下品にて細長くして少ひらたし。是等は皆素人も常に撒所なり。彼放屁男のごとく　奇々妙々に至りては　放さる音なく、備らさる形なし。抑いかなる故ぞと聞ば　彼ケ母常に芋を好けるが　或夜の夢に　火吹竹を吞と見て懷胎し。鳳屁元年へのえ鼬鼠の歲　今を春邊と梅匂ふ頃誕生せしが成人に隨ひて。段々功を屁ひり男。今江戸中の大評判　屁は身を助るとは是ならん歟讃岐の行脚無一坊神田の寓居に筆を採る

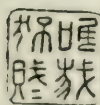
放屁論後編自序

倭學先生曰。夜はおよるの上略にて。晝とは諸人目を寤せば。小便をたれ屁を撒故夜晝の倭訓起れり　或は鯨淺き所に寐入たる内。潮引て洲となる時は　大に困りて無術窮を撒故に潮の引をも干といふ此道を好ませ玉ふ御神を。蛭子といひえびすといふ。えびすはへびすの間違にて。あいうえを。はひふへほの通韵より誤り來れり。又日本武尊東夷征伐の時。夷ども草に火をかけ　大勢一度に尻をまくりて撒ければ。焰尊の方へ吹靡御身に火掛らんとする時。御劒をぬいて投付給へば。夷の臀をしたゝかに切られ八方へ逃し故。逃る事をへきゑきといひ始め。（へきゑきとは屁消益なり。屁消て尊の爲に益あるといふなり。）十束の御劒を改て臭薙の寶劍と號給ふ。臭き物を薙ちらせしといふ詞也。大政入道清盛は火の病を煩ひ初は居風呂桶に水を入て體を浸せば。即時に湯となる故。後は大なる池を掘。加茂川の水を堰入這入られけるに。水火激して頻に屁を撒しにより。屁池の大將と異名せられ。記せし記錄を屁池物語といふ。後世平家と書は當字なり。また兵衞佐頼朝卿伊豆の國へ左遷の内。貧乏にて常に芋飯を喰。好んで放屁なされける故。其所をひるが小島と號たり。野にて

放を野邊といひ。山にて撒を山邊といふ古今集の歌に

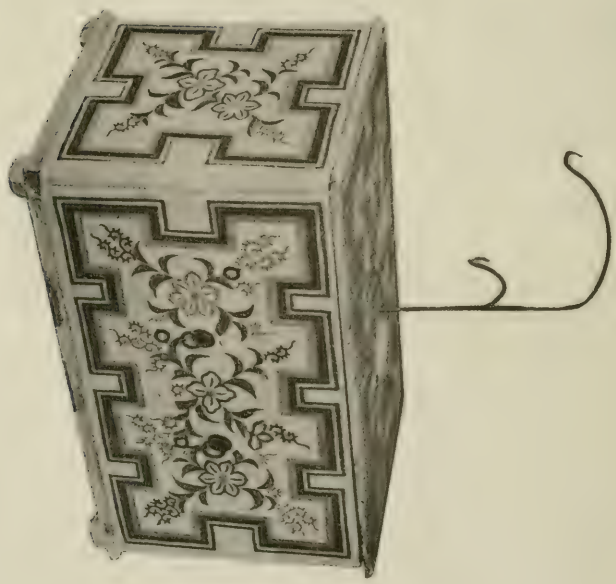
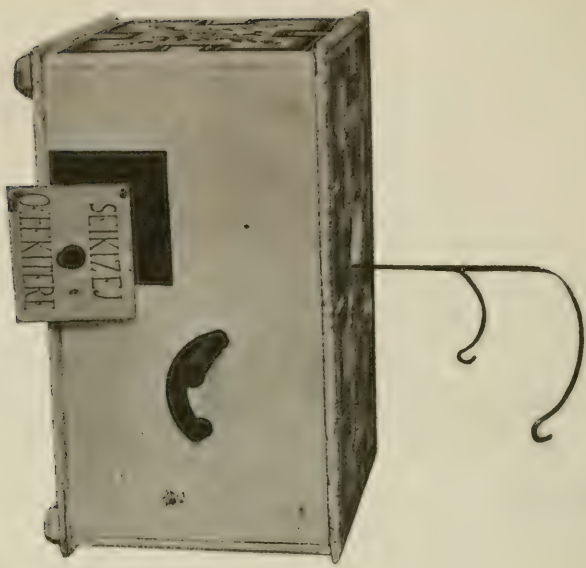
　霞立春の山屁は遠けれどふく春風は花の香ぞする

海邊といひ。磯邊といひ。澤邊の螢は尻に縁あり。奥州に一の戸二の戸。古戸の字をへと訓せしも家あれば人あり。人あれば撒故なりと倭訓の講釋聞取法問。出まかせに放出して。此書の序とはなりけらしブツ

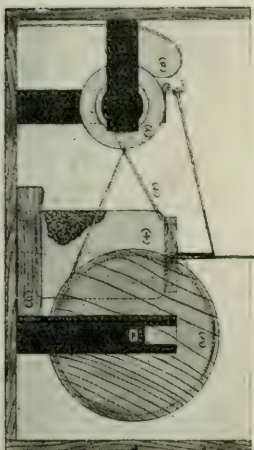
風來山人誌

放屁論後編

世の諺に。剪逕するも浪人の習ひと御所櫻の伊勢ノ三郎。風俗太平記の日本左衛門なんど。淨瑠璃本にある時は。さも手強ふ侍らしく聞ゆれども。夫は血臭ひ時節の事にて。かく治れる時世に。そんなけびらひが有や否。こんだ目にあふ故に。今時の浪人は紙子羽織に破編笠。御子孫も御繁昌猶いつまでか活延るほど恥の上ぬり。但浪人のみにあらず。春さきの華臍魚と目出度御代の侍は段々に値が下り。工農商の三民に養れる素餐の様に思はれ。まさかの時は侍でなければ世は治らず。日本は小國でも。唐高麗から指もさゝせぬは皆武徳なりといふ事を。思ひ出す者もなきは。是ぞ誠に太平の世の御恩澤。井を鑿て飲耕て食ふ。提燈かりた禮はいへども。月日に禮はいはざるに等し段々太平の化にあまへ世上一統金銀にのみ目が付故。先祖はお馬の先に進。義は金鐵よりも堅く。命は塵芥よりも輕しと。踏止て高名を顯したる家柄の子孫でも。又君を諫萬民を敎へ。國家の礎を堅ふせんと心を碎く忠臣でも。算盤の桁に合す見一無頭早急に金にならねば。二一天作言語道斷。六沈が二進。雪隱が決ちん。穴のせまい仕送り用人に乗越れ。扨は御家に由緒ある數代出入の町人でも。不如意になれば安くあしらひ。昨日今日まで手代奉公。年季野郎の成上でも金さへ持ば追從輕薄御堅勝御安全。様の字までをひねくり廻して六ケ敷認るは地獄の沙汰も金次第金が敵の世の中。されば歌にも。鉦敲

金がないゆゑ鉦たゝく金があるなら鉦はたゝかじ又。それに付ても金のほしさよといへる下の句はいづれの歌にも連属すると卑劣千萬に覺え。富十郎が鐘入も。金の供養といふ故に若才覺の計策にもと。味な所へ目のつく世の中。此間さる方にて。段々と不如意に付。一家中鎗の稽古を止にして鈴の稽古が初りしとの噂。よく／＼聞けば。鑓といふ字は金篇に遣といふ字鈴は金篇に令といふ字なれば。遣ふ事を止にして。只々金を令よと。あて字ながらも主命は默止がたし。いかなる名人達人でも金なき衆生は度しがたしと。佛もあちらむくと見えたり。いつの比にか有けん。江戸神田の邊に貧家錢内といへる見る陰もなき痩浪人あり。抑彼が系圖といつぱ。忝くも天兒屋根命の苗裔。大織冠鎌足公の御子。藤原淡海公。讚州志度の浦にて海士人と野合かの面向不背ノ玉を採得給ふ時。一日を六十四文で人足に傭はれ。浦人よろこび引上たりけりと謠にも作られ。戯場でしても名もなきはい／＼伎者のする浦人の嫡流なり。母夢に澁團扇を呑と見て懷胎し。此者を産みしより。貧乏神を氏神と仰ぎ。七福神と喧嘩して。故郷を去て江戸の住居されば諸藝貳百石。無藝高なしとやらいへども此男何一ツ覺たる藝もなく。又無藝にもあらざれば。どちら足らずのちくらが洋。磯にもよらず。浪にもつかず。流れ渡りの瓢箪で。鯰の樺燒鰻鱺魚を欺き見識は吉原の天水桶よりも高く。智恵は品川の雪隱よりも深しと。こけおどしの駄味噌を千人に一人は實かと聞込で敎化的の報謝米で召抱ふと相談すれば。イヤ／＼女は美惡となく宮に入て妬れ。士は賢不肖となく朝に入て惡まる。比諭を鳥で申

SEIKIZEJ

源内自製のエレキテル（遺存する二個のうち）　東京　遞信博物館藏

箱　木製、高九寸三分、竪八寸五分、橫一尺五寸一分の長方六面體

箱は木製の白ペイント塗、ハンドルの出てゐる面に蘭語で
Seikizet Elekitere とあり、他の面には赤
と藍との色ペイントで和蘭唐草が描
かれ内部は別圖のやうな裝置がある。
ハンドルを廻すと車(ハ)
が動き、調帶(ホ)のために
硝子圓筒(イ)と錫箔を貼
つた枕(ロ)とが摩擦して電氣が發生す
る。その電氣を傳導線(ヘ)によつて、鐵屑
を充塡し下部を松脂で絕緣してある蓄電池(チ)に導く。そして
箱外に出てゐる銅線(ト)の兩端に金屬製の鉤を出して色々實
驗したのである。

さふなら。孔雀錦鷄鸚哥の類。高金出して弄ども。外飾のよいばかりで。鳥も捕らず。晨も司らず。心。線午蒡の相手にもならず又鳥の男ぶりは惡けれども。朝は早く起て人をおこし。吉凶を能志りて豫告志らせば。忝いといふべきを。鳥啼が惡ひの。いま〳〵しい鳥めのと惡まるゝを見るにつけ。良藥は口に苦く。出る杭は打るゝ習ひ。されども御無理御尤。君々たらず臣々たらず。八幡大名太郎冠者。脱活の虎見る樣に己が性根は微塵もなく。風次第で首を振て。一生を過さんは。折角親の產付た睾丸を無にする道理。浪人の心易さは。一簞のぶッかけ一瓢の小半酒。恒の產なき代には。主人といふ贅もなく。知行といふ飯粒が足の裏にひッ付ず。行度所を駈めぐり。否な所は茶にして仕舞ふ。せめては一生我體を。自由にするがもうけなり。斯隙なるを幸に種々の工夫をめぐらして。何卒日本の金銀を。唐阿蘭陀へ引たくられぬ。一ッの助にもならんかと。思ふもいらざる佐平次にてせめては寸志の國恩を報ずるといふも志やらくさし。其位にあらざれば其政を謀らず身の程志らぬ大呆と。己も知ては居るそふなれど。蓼食ふ蟲も好〻と。生れ付たる不物好わる塊りにかたまつて椽の下の力持むだ骨だらけの其中にゑれきてるせゑりていとゝいへる人の體より火を出し。病を治する器を作り出せり。抑此器は西洋の人電の理を以て考。一旦工夫は付けれども。其身の生涯には事成らず三代を經て成就しけるといへり。阿蘭陀人といへども知る者は至て少く。固朝鮮唐天竺の人は夢にも志らず況や日本開闢以來創て出來たる事なれば。高貴の旁を初として見ん事を願ふ者夥し。

四國八十八ケ所
同行三人

或日去屋敷の儒官。石倉新五左衛門といへる人來りて。觀る事良久して曰。天地人の三才に通達するを儒といふ。我天下の書に眼をさらし。理を以て推す時は。森羅萬象明かならざる事有べからずと思ひしが。今是を見て始て驚く。それ燧と石扁柏と扁柏相激する歟。又は日輪の水精硝子を照し。或は鏡に映ずる時は火を生じ。時に臨ては目からも出骸からも出。扨又貧なる家内へは。火の降事も有とは聞ども。かゝる事は思ひもよらず。いかなる理にて火出るや。後學の爲承んと。其時主人うち點頭書を讀斗を學問と思ひ。紙上の空論を以て格物窮理と思ふより間違も出來るなり。さらば火の出る根元をお目にかけんと。取出す小冊に。昔語花咲男放屁論と題號せり。主人笑て申けるは。抑此放屁といつぱ。四年以前兩國橋の邊にて花咲男の號。見せものにて近年の大當り。諸の小戯場を撒潰せし趣は此放屁論に詳なり。今年また釆女原に出て三國福平と名乘る。扨此者の身の上を尋るに。父は大和の國吉野の郷の狩人。佐次兵衛といへる者なりしが。年來多の猪猿を殺せし罪亡しとや思ひけん。近所の者兩人といひ合せ四國順禮に出けるに。彼殺生の報にや。伊豫の國に至りて。佐次兵衛生ながら猿と成て林の中へ逃入ければ。二人の連はあきれ果。是非なく國に歸りけり。今童謠に。一ッ長屋の佐次兵衛殿。四國をめぐりて猿となるんの。二人の連衆は歸れども。お猿の身なれば置て來たんのとは、此事因縁なり。さて兩人は國に歸り。悴福平に此譯を語れば。一ト方ならぬ歎なれども。なすべき樣もあらざれば。せめては父が現世未來畜生道の苦患を免る爲にとて。一切經を供養せんと思ひ

立。鳥が鳴東路を錢がなく〳〵たどり着。本錢の入らぬ金もうけを工夫して。いつとなく屁を比類なき親孝行の奇特にや。兩國橋の屁撒と江戸中の大評判。夫よりも浪花津に咲や此花咲男。今を春屁と咲や此花の都に匂ひ渡り。再江戸へ歸り咲。三國福平と名乘て。釆女原の春霞。立子這子もしらぬ者なし。扨佐二兵衛と連になり四國をめぐりし兩人も目前かゝる不思議を見。且は福平が志を感じ。佐二兵衛が追善供養。共に力を合さん爲。空也上人の鉢扣。茶筅賣より思ひ付。歌念佛を趣向して。六字を飴にねりませ。うまひだ。うまい陀佛うまいだより樣々の替唱哥。扨當世の立者は仲藏幸四良三五郎。また半道のきゝ者は。時に大谷友右衛門。最負市川團十良は。木場についての親父分其癖年は若いだ。若い陀佛若陀と賣歩行。大評判に預りしも。皆福平が孝行のなす所。古今にまれなる屁柄者と語ければ。新五左衛門一圓に呑込ず。不思議の事を承るもの哉いかにも彼撒屁漢先年兩國にては流行しかど。此度釆女原へ出たれども。其後は聲もなく臭もなく今は世間に沙汰もなし。當時諸方にて評判の品々は。飛んだ靈寶珍しき物。十月の胎内千里の車。鹿に兩頭あれば猿に曲馬あり。穢銀杏が辨說には。蘇秦張儀も跣足で逃げ。友世綱世が力には。巴。坂額干鱈持て禮に來る。源水が獨樂は魂ありて動がごとく鶴市が聲色はその人そこに在が如し。新之助は一身に骨なく。どう突請身は五臓金鐵にや有ん。大魚出れば大蛇骨出。硝子細工牽絲傀儡古を以て新しく田舍道者の目を悅しめ。鳥娘は名にてくろめ。人魚は人をちやかすなり。子供角觝の取組は。河津股野が俤をうつし。鶤鷄相撲

の勝負には。鷄の季桓子拳を握る。馬の立合狗の糞。仕込に馴教に順ふ。是を思へば人並に人別帳には付ながら。畜生に劣たる無藝の者は心にて。己が耻と思ふべし。あるが中にも險竿の大當り。小櫻松江が笑顔には弘法大師筆を捨、韓退之涎を流す。無三飛新藏が體は龍骨車のめぐるがごとく。早飛梅之丞が一本綱は。五体を天へ釣かと疑ふ。是等をして珍しともいふべけれ。何ぞや古き屁撒を。ここ〱敷長物語。拙者屁の講釋を聞には參らず。彼ゑれきてるより火の出る道理を聞んとこそ望みしに。以の外の屁あいしらい。さては我らを屁の如く思ひ給ふやと。眞黑になつて立腹す。其時錢内詞を和らげ。ゑれきてるより火の出る道理を聞んとお尋あれども一天四海引くるめての大論にて一朝一夕に論じがたし能く近く譬を取て敎ん爲。扨こそ屁論に及たり。夫佛法に地水火風空を五輪といへども。空と風とは躰用にて。つまる所は四大なり。此水火土氣は天地の間に滿〱たる故。固人の體中に備たれば。四の物皆體中より出る之日々の食物糞と成て五穀の肥となる。これ人間の體より土の出るにあらずや又小便となり汗と成は。體中水を出すなり。上に在ては呼吸。下に在ては屁と號く。是體中氣の出るなり。あるが中にも火といへるが萬物造化の座元にて。その本を大陽と號し。その末を火と號く。日と火の倭訓同じきも天地自然の道理なり。されば神に天照大神。佛に大日如來。金剛界とは地上をさし胎藏界とは地下をさす。十萬億土無量壽佛。反照自己本來空、秘密も悟道も引くるめて此日輪ましまさゞれば。土は皆本體の石、水は皆本體の氷なる故。草木を生ずる事なく。魚鼈を育すべ

き道なし。役者あつても座本なければ戯場の出來ざるに異ならず。かゝる道理を知る時は。糞と成も汗となるも。屁の出るも火の出るも。同じ體の小天地。固怪に足らざれども。理にくらき輩は。燧より出る火は常となる故怪まず。ゑれきてるより出る火は。飯綱幻術の様に心得。又は關棙手づま人形と一ツ事に覺へ慰に呼で見る旁も多き中に。天文暦數酸も甘も呑込だ親玉をはじめ。理に通達せるからは。問に骨ありて答るにはづみあり。人の分量智惠の程をゑらざる人は。僅の藝をいひ立に。口過する浪人者や。日待月待に召るゝ。雜劇の藝者同様に心得たるぞ苦々し。凡天地の間に。火程尊き物なく。その火の道理を目前に喩す故。ゑれきてるほど尊き器なし。又吾　日本
神武帝より今年まで。二千四百三十九年死で生て入替る人其數かぞへ盡されず其大勢の人間のゑらざる事を拵と。産を破り祿を捨工夫を凝らし金銀を費し。工出せるもの此ゑれきてるのみにあらず是まで倭産になき産物を見出せるも亦少からず。世間の爲に骨を折ば。世上で山師と譏れども。鼠捕る猫は爪をかくす。我よりおとなしく人物臭き面な奴に。却て山師はいくらも有。人は藝を以て山の足代とし。我は山に似たるを以て藝の助とす。顯るゝと隱るゝとは。譬ばあん餅とあんころ餅の赤小豆の如し。まこと金をほしく思ふて。是までの精力を一圖に金銀斗に凝て。一生鼹鼠見る様な親父と成。生爪はもがれても。握たる金は放さず。徒然草にある通り。假にも無常を觀ずべからず。人は惡れ我善れ。義理も絲瓜も瓢箪も。沈香も焚ず屁も撒らず。上手名人といふは扨置。下手といはるゝ藝もな

く食て屎して寢て起て。死だ所で殘る物は骨と證文ばかりなりと。いふ様なわかちも志らず。彌出るなら無間の鐘の。蛭は扨置蝮蛇や龍盤魚を糞でこくせうに煮て食せても。食ふ氣に成てためる時は。盲でさへも出來る金。出來ざる事もあるまじく。近ひ例はゑれきてるを。兩國か淺草の見せ物に出す時は。押へ付たる大金。豪猪綿羊なんどの例もありと。すゝむる者も多けれど。陰陽の理を盡せし物を勿躰なしと合點せず。されば曾子は飴を見て老を養ん事を思ひ。盗跖は錠を明ん事を思ふ。それ相應の了簡。我は綿羊を見て　日本にて羅紗らせいたごろふくれん志よんとろめんへるへとあんさるせ毛氈類の毛織を織らせ。外國の渡りを待ず　用に給せんと心を碎き。人は手短に錢をせしめんと計る。いかに物いはぬ畜類じやとて毛を織て國家の益にもなる物を。らしやめんなんどあてじまいな名をつけ。繪具で體を塗りちらし。引ずり廻して耻をさらす。綿羊の手前も氣毒なり。世にある人は錢をほしがり。錢なき者は意地をはり。渇しても盗泉の水を飲ず　道理で南瓜が唐茄にて　いらざる工夫に金銀を。費す故に錢内なり。夫。熟惟。骨を折て譏るゝは。酒買て尻切るゝ。古今無双の大だはけ。屁の中落とは是ならん。けふよりゑれきてるをへれきてると名をかへ。我も三國福平が弟子となり故郷をかたどりて四國猿平と改名し。屁撒藝の仲間へ入。芋連中と參會して。屁の穴のあらん限り。撒り習はばやと存るなり臭ひ者の身知らず。以來御用捨下さるべしと。屁撒て後の尻すぼめ。まじめになつていひければ。新五左衛門あきれた顔にて、兎角是は古方家に下させずは　此肝積はなほ

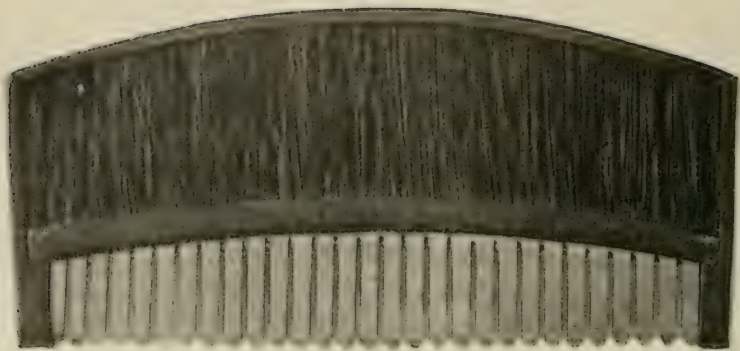
るまいと。つぶやきながら歸るを見て。眠らぬ夢は覺にけり。

放屁論後編 終

追加

去ル申の歳。菅原櫛といへるを工出し世に行はれける時。好人より狂歌を給ひし。その返歌並に序を爰にしるす。

用ゐれば鼠の子も上尖竿をおぼへ。用ゐざれば虎皮褌も地獄の古着店に釣さるゝは。さつと昔の唐人の寓語。眞實で叩らるゝより。座なりに譽らるゝが快は人情なれば。虚言と追從輕薄をいはねば人當世をしらぬといふ。抑此當世といふもの今ばかり有にあらず。祝鮀が佞有て宋朝が美あらずんば難乎今の世に免れんとゝあれば昔より有來の當世にして。八百藏が助六は柏筵が助六なれども。人今更の樣に心得るも片腹いたし。我も此當世をしらざるにはあらねども。萬人の盲より一人有眼の人を思ふて。假にも追從輕薄をいはざれば。時にあはぬは持前なり。されども人と生れし冥加の爲國恩を報せん事を思ふて心を盡せば。世人稱して山師といふ。予戯て曰。智惠ある者智惠なき者を識には馬鹿といひ。たわけと呼。あほうといひべら坊といへども。智惠なき者智惠あるものを識には。其詞を用ることあたはず。只山師〳〵と識より外なし。又造化の理をしらんが爲産物に心を盡せば。人我を本草者と號。草澤醫人の下細工人の樣に心得。已に賢るのむだ書に淨瑠璃や小説が當れば。近松門左衛門自笑其碩が類と心得。火浣布ゑれきてるの奇物を工めば。竹田近江や藤助と十把一トからげの思ひをなして變化龍の如き事をしらず。我は只及ばずながら日本の益をなさん事を思ふのみ。或

菅原櫛

東京帝室博物館藏

一　竪一寸五分　横三寸强　重量四匁五分
二　竪九分五厘　横一寸六分五厘　重量三匁七分

この櫛は源內の考案であり、菅原櫛と名つけたのも源內であるから世間では源內櫛と呼んでゐる。伽羅木に銀の覆輪をかけたのがこの櫛の特徴である。こゝに揭げた櫛は二枚共その表裏を示したもので、大きい方は齒が象牙製、小さい方は銀製である。

は適大諸侯の爲に謀りし事ども。國家の大益なきにしもあらざれども。狡兎死して良狗烹られ。高鳥盡て良弓藏る。細工貧乏人寶。嗚呼薄ひかな我耳垂珠と悟を開き。ろ命をつなぐ營に。當時賤しき內職にて。其糟をくらひ其錢をせしめんと思ひ付しを早くも卯雲木室君に尻尾を見出され。おくり給はる狂歌に

醉て來て小間物見せのおて際は仕出しの櫛もはやる筈なり

實や己を忘らざるに屈して。己を知るに伸となんいへば。此御答申さんとて。我まゝ八百を書ちらす。固己を知らざる人に見せるにはあらず。嵐音八が曰。アヽ氣が違ふたそふな

かゝる時何と千里のこまものや伯樂もなし小つかひもなし

風來山人誌

跋

風來山人放屁論後編をひり出して予をして尻へに跋せしむ按ずるに放屁字典に曰屁ブブウノ反音ブウ去聲に發して音スウ論語に所謂舞雩に風じて詠じて歸らんとはそれこれ是をいふ歟此書や始には狂言綺語のすかし屁を放り中は萬物の理を掌に握り屁の極意をこき末又合ふて一ツ屁の尻をすぼむ讀者その臭を逐はゞ高に升る階梯屁の一助たらんと云爾

葛西土民姑射杜老糞船の中に書す

痿陰隱逸傳

この一卷は內容の稍猥褻にして善良の風俗を害する懼あれば插繪と贊とを掲けて遺憾なから本文及ひ序跋はこれを省略することとせり。

編纂者しるす

祭先師志道軒圖

贊曰

六寸許撅十丈的舌、墾萬物根、說虛空穴、盲天下睛明婆婆埒啯人

行過悲世人

咦

配閻浮屍不滅精血聞一屁聲悟捺落滅

無名禪師撰

自序

むかし〳〵其昔祖父は山へ柴刈に娘は川へ洗濯に其娘のぼた餅を萩の花と間違え美しからふと思ひしやら。久米の仙人目をまはしずんでんころり山椒味噌からき命を漸と息吹返し。娘も共に雲に打乗消失けり。夫故末世に行衞しれぬ。道中の竹輿かきを雲介とは名付たり。扨祖父は山より立歸おらが娘が飛だ〳〵と立さはぐを、近在近郷聞傳へ飛だ咄をお聞たか飛だ事だ〳〵と、段々といひ傳へる是飛だ事の始り〳〵

戌の九月　風來山人誌

飛だ噂の評

我も亦徒然なる儘に。日くらし硯にむかひて心にうつり行よしなし事をそこはかとなく書つくるとは譃の皮折角なひ智恵の底を叩て。工夫仕出した金唐革も。度々の雨天に差つかへ隙あれ共錢なければ。せふ事なしの別莊に風雅でもなく洒落でもなく浪人の詫住居喰ず貧樂のみなれ共。主人が欲けりや飯粒を二百石か三百石に。負てやれば何時でも出來ると思へば苦にもならず。二朱か壹歩工面すりや。四海皆女房なりと悟れば寐覺も淋しからず。とはいへ一人できよろり關々たる雎鳩は。三股の洲にあり。窈窕たる妓女は。中洲にも好逑ありと。口すさみたる折しも。表の方に人聲して。飛た事ンだ〱。市川の團十郎色事の大評判。又彼後家も後家でござる。惚るにも程が有。ほれて惚てほれぬひた。飛だ事だ〱だと。追々の賣聲は。例のたわひもなき事ならんとつぶやき居たる處へ。或人來りて曰。世間一枚飛だ噂は。市川團十郎。或後家に喰ひ込。段々ともめ出して。既に市川の苗字を削られ芝居も構るべき程の事なり。ア丶愼べきは色事〻と。吐息ついての咄しを聞て。予笑て問て曰。市川團十郎とは何人なるや。彼人腹を立て曰。しれた事役者〻。役者も役者による物なり。元祖團十郎一天下に名を揚てより。初の柏筵後の海老藏。今の團十郎に至る迄。都鄙遠近三歳の小兒もしり。親玉といへば團十郎と覺たる。此道の名家なるを、此度の不埓故。數代の名家に疵を附。市川の苗字を穢し。世上の口の端に掛る事。言語

道斷の事之。扨彼後家といへるも。左のみ美人の聞へもなく。いか物喰ひの噂とり／＼江戸中の物笑ひと。眞黑に成ての咄し。予又笑て曰。扨ゝ先程飛んだ事の讀賣。其譯も分兼今亦飛んだ事のお物語。初は本に飛だ事かと思ひしが。能々咄承れば是程飛ぬ事はなし。夫役者の身の上は。貴賤上下の贔負を請。諸人愛敬を第一とする之。わけて立役ぬれ事師。女に贔負せらるれば。桟敷の入が多い迚。給金も上る之。或は女の襦袢。手拭浴衣烟草入に。贔負の紋を付る事。是等は不屆千萬なれども。付させる親や亭主がべら坊といふ物にて。役者の方に科はなし。又奥勤の女中なんど。傳を求緣にたよりて。扇楊枝差に。役者の手跡歌發句を書て貰ふて。是を尊ぶ事祖師の御筆定家の色紙よりも勝れりとす。夫にも千差萬別蓼くふ虫も好々と。己々が贔負／＼。或は西の下桟敷。通りながらの捨詞。夫から熱にうかされては。種々樣々の夢を見る。中にも後家の明重箱。借人の仕合貸人の歡び。されば奴が土手店で。買った鞘には事替り。去とは能仕た細工にて。どれにもしつくり相生の。松茸賣とは是ならん。こちらの後家も素人なれば。能野鴨の類に成て。さのみ目にも立ねども。名高ひ役者の後家故に。大そふなる評判すれど。若も彼團十郎代々の儒者ならば。相手の後家に貞女兩夫にまみへずの女の道を破らせ。其身も定れる妻の外に。他の女を犯し。江戸中の口の端に掛る不埒を仕出して。言語道斷共いふべけれ。相手も役者の後家なれば嘗殿御に別れても。又の夫をもふけなよ。主有女の不義同前といふ事は芝居で聞ても耳へは入らず。どふで只は居ぬ者なれば。團十郎がせしめてもせしめいでも亦同じ事之。扨又器量のよし惡は。天

此人を生ずれば。不男でも悪女でも餘りて打やつたためしもなく夫相應にかた付物にて人々の物好次第鼻のひくいが醫と見え毛深ひが天鵞絨の。手ざわりに覺へるは。外より少も構ぬ事ぞ。不器量な女と色事したを笑ふなら。美人を女房に持た者へは。誤證文を書ねばならず。此方に一切喰ふ氣がなけりや。人の女房と枯木の枝ぶりよからふが惡からふが。してやんしてどふしやうと。やつさもつさぺんぺこぺん。いらぬおせへのかばやきぞ。扨々飛ぬ事なるを。飛だ事〳〵と江戸中の沙汰に成は。大そふ過た比喩なれど。君子の過は月日の蝕のごとし。過時は人是をしるのはしくれにて。此道の名家故。少の事も仰山に。飛だ事といはれるは。江戸生拔の名代の家柄。當團十郎に至ても。株を落さず江戸中の。贔負が多き故ぞと。我は却て賴母しく思ふといへば。彼人大に腹を立。後家と契りて斯取沙汰に及ぶ事を。無躰に理を付取なしをいふ人は。其身にも後闇き。下心が有故ぞと。以の外の腹立。其時詞を和らげて敎て曰。小善なりとて捨べからず。小惡なりとてなすべからず。是は一通りしれた事にて。寢ても起ても飯と汁と香の物斗喰て居れは。病氣も出ず勘定にもよけれ共。うまひ物のほしく成は。お定の人欲にて。百病は口より入。諸事の災彼所よりおこる是も親父の呼でくれた。女房斗かぢつて居れば。黴瘡もかゝず錢も入らず。結構な事なれども。我も人もそふはつゞかず。踏はづしは有物なれども。同じ樣な踏はづしでも。することゝせぬ事有。此處が分らねば。必災に逢ふ物なり。我門人何某が古鄕へ歸る餞別に。送たる一書有とて。取出して見せにける

門人何某に示す

予若年の時漢書を讀。高祖關中に入て秦の苛法を去。法三章を立。我も自法三章に約して血氣の禁とす盗博奕密夫なり。此三の悪しき事は。小兒もしりたる事なれ共。我しらずおかす事有く。常に心を禁むべし

大石内藏介も遊里に在ては。面白き事世の風流の士とさのみ替る事なし。只敵を討事を忘ざるく。主親の敵のみ敵と思ふべからず。人々志す處。家業藝術皆敵を持たり。討ずんば有べからずと。行住座臥にこれを思へは。あちらの物よりこちらの稱錘が重き故。面白き事になずまず。思ふ敵を討としるべし。早く其本にかへれ

興に乘じて酒を呑共。酒に乘じて興を呑事なかれ

友人何某大に家計を失して。來て我に談する事有。或人傍に在て問て曰。汝が首有や。友人曰。有。予が曰。首あらば何の憂事かあらんと。大に笑て去。これを聞て論實に過たりといふ人有。予答て曰。大丈夫事をなすに。時に臨で狐疑猶豫すべからず。然共其事固善悪有。只々遠きを慮て。首の落ざる用心すべし。幸にしてまぬかるゝは道にあらず人々心に問ば。首のぶらつく事多かるべし。孟子の國に入て大禁を問も。首の用心と見えたりと漫にしるして禁の一助とす

右は善の善たる敎にはあらね共。いかなる扁柏の上材木でも。初手から鉋は掛られず。先手斧にて荒

削盜博奕密夫の朽さへ入ざれば。いつでも鉋は掛るなり。彼團十郎が爲人。家業の敵も討おふせ。書籍を集歌誹諧を樂とし是迄あしき沙汰もなく。木場に有ての親父分。其くせ年は若けれ共。闇夜にはなす鐵砲汁。當ると死る色事ならず。いはゞ河豚もどきを食ての食傷。明家で棒を振た斗。誰に當隙もなければ。天竺迄持出しても彼首の氣遣なし。隱す〳〵と思へ共。天道といふ目の玉が。不斷上から見てござれば。首の有人間と首のない人間は。誰が見ても知る〳〵。かういふ心に成て居れば。與風うまひ首尾が有て。人の女房の手を握る。其時はモッ首筋に。墨打をされたと思へば。こそはく成て止る〳〵。團十郎もいか程に氣丈でも元氣でも。首がなければちんころが。うんこ踏だ樣な顏をして。だまつて居ねばならね共。首が有故舞臺での。口上も男らしく。去とは氣象が面白いと。江戶中の諸見物益見增の紋所。おいらも神田の贔負組。惡くぬかすとうへんぼくは。どいつでも相手に成。アヽつかもねヱ。時に安永七の年。飛だ噂と菊月上旬　風來山人淸住町の別莊に。獨きほふて是を評す

序

不時に吹を天狗風こいひ當なく打を天狗礫こ呼天狗賴母子天狗誹諧等みなあてじまいより號しなり、予が拾得たる異骨を天狗の髑髏こいひそめしも此類ひならむ歟ゑかるを風來先生筆を採てより普く世上に隱れなく見む事をねがふ人多し我も亦これを見せて錢を取べき工もなく只持あるきて隙をついやせば諸共に能見せものゝ。

人の目をくらまさんにもあらばこそ

もこより山の天狗でもなし

こ口すさみて一座の笑種こしけるを。今書林のもこめに應して寫しあたへぬ。

大場豐水誌

序

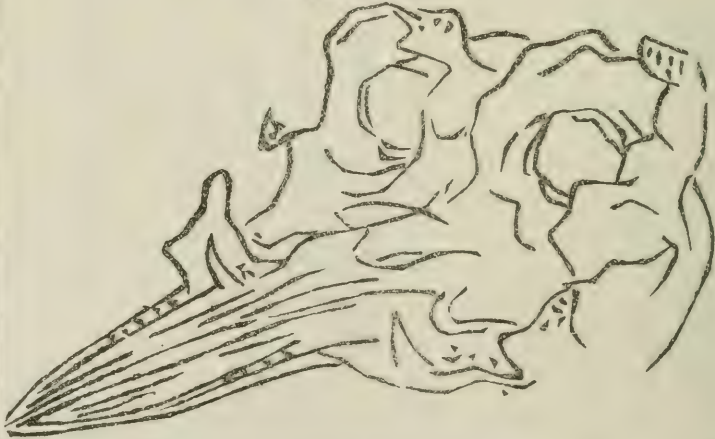
我　風來先生戲に筆を採。多くの小說世に行れてより。近世開板の俗文、名をかすり文意を贋、或は直に風來山人と記すもあり、是皆書林智惠もなくて錢を欲がり謾に　先生の名をかたる事。言語道斷不屆千万なり、まだしも評判茶臼藝は、寐惚先生の作にして。筆勢頗相似たれども。作れる花の匂ひなきがとし其餘紫の朱を奪ひ、莠の苗をみだる而已ならず、炭團を名玉と欺き夜鷹を晝三と僞るもの少からず。今より後堅く制して可ならんといへは、先生笑て曰。我飯を喰ふて人の聲色を遣ふも、皆人々の物好にて、盲万人目明三人賣るも本屋の渡世なれば强て咎るに及ばずと。其儘に打やり置ぬ頃日書肆淸風堂大場氏の方より天狗髑髏鑒定緣起を得て櫻

木に鏤む。是ぞ正眞正銘の　風來先生の作なり善こ惡ひはお手にとりて
御覽じやれ

戲蝶謹誌

天狗髑髏圖

頭大サ六寸余
觜七寸余
目のくぼく成穴一寸五分程
耳の穴二寸 牙五分程
咽のくぼくの穴二ツ
都て一尺二寸余

天狗髑髏鑒定縁起

明和七ッのとし菊月末の四日。門人来りて薬物の眞僞を論ず。折ふし扉を叩くものは大場豊水なり。一の異物を携へ来りて曰。昨夜天狗を夢む。今朝夢さめて思ふに。けふは廿四日にて愛宕の縁日なればとて芝の愛宕に詣けるに。門前櫻川と號する小流の中に怪しき物あり。拾上て泥土の穢を洗去ればしか〴〵の物なりとて篋を開て取出し。けふ此品を得て歸るさの道にて。見るもの皆天狗の髑髏なりとて市をなせども。固俗人の億見證するに足らず希は先生眞僞を辨ぜよと　予諾して門人に告て各其志をいはしむ　一人が曰。これ大鳥の頭なり。阿蘭陀のぼうごる。すとろいすならんと、又一人曰。蠻夷の大鳥たりとも斯まで大には有べからず。これ大魚の頭骨ならんと。反覆上下の論。異説まち〳〵にして衆議一決せず。予曰。これ天狗のしやれかうべなり。門人驚て曰。夫レ倭俗の天狗と稱するものは。全く魑魅魍魎を指すなれども。定れる形有べふもあらず。然るに今世に天狗を畫くに。鼻高きは。心の高慢鼻にあらはるゝを標して大天狗の容とし。又嘴の長きは。駄口を利て差出たがる木の葉天狗溝飛天狗の形狀なり。翅ありて草鞋をはくは。飛もしつ歩行もする自由にかたどる。杉の梢に住居すれども。店賃を出さゞるは横着者なり。羽扇はもの入をいとふ吝嗇に譬す。これ皆畫工の思ひ付にて。實に此のごとき物あるにはあらず。聖人も怪力亂神を語らずとこその玉へ。いま是を、

天狗の髑髏〳〵とは我〻を欺き給ふや。予曰。諸子の疑その理なきにあらず。去ながら。我微意を悟ずんはいざさらば語り聞さん。古人の曰。藥を賣ものは兩眼。藥を用る者は一眼。藥を服する者は無眼とはとつと昔の譬。今時の醫者といふは。武士の子なれば惰弱者。百姓なれば疎懶者。町人なれば商を爲得ず。職人なれば無器用者にて。糊口を爲兼るもの醫者にでもならふといふ。これを號て。でも醫者とてあたまぐるりの長羽織。見えと座なり斗にて。藥の事は陳皮もしらず。長屋も露路も踏もすへるもそこらだらけが醫者だらけ。藥種屋も盲。醫者もめくら。病家は猶盲故。臭橘を枳殼とし鼠麹草を芫花とし。鯨の牙をうにかうるとし。氣蠜を䗪虫とし。翻白茱を柴胡と心得。廣東人參を人參と思ふ。其外千變萬化の大間違。されども浮世は盲千人　はくらんの藥はそくらん病が買習なれば。是を賣もの家藏を建。これを用るもの四枚肩に乘　これを呑者往生の素懐をとげながら。恨もせねば氣の毒なとも思はず〳〵嗚呼悲しきかな文盲なるかな。予これを憂て藥物の眞僞を正し。世上の醫者の目を明んとて千辛萬苦すれば。うぬらが心に引當て山などゝの取沙汰。智者は水を樂。仁者は山を樂。后稷は農を敎え禹王は水を治む。過たるをはぶき。足ざるを補ふは聖人のいさをしなり。山のやまなる山の芋。鰻鱺とならで朽果なば。薯蕷とも甘藷とも旨ひ奴等が口の端にかゝる浮世に產れ來て。牛の糞やら胡麻味噌やら。やみらみつちやの流渡。海參の尻やら頭やら。蟹の竪やら横道やら。にうがにうへとちりあべこべ錢あるものは利口に見え。出る杭は打るゝ習ひ。天狗のあたまの眞僞を論じ。時を移せば腹

がへり。日が重れば店賃がふへ。月が延れば質が流るゝ。儒者は本田あたまの通り者をとらへて。堯舜の民たらしめんとし。賢女兩夫に見えずと。女郎屋の二階で講釋をするは。蠮螉が螟蛉をとらへて。我に似よといふが如し。動と止との文字は合ふても。馬めが合點いたさねば。世話やくがたわけながらも。腹へはいる藥は。人命の存亡にあづかれば。聞ぬまでも赤目引はり。某時珍になりかはり。一問答せねばならねど呑もせず傳もせず目を歡ばすばかりにて。毒にもならず藥にも。何のお茶とうにもならざれば。諸人自甘ンして天狗といふて嬉しがるならば　其波を揚その醨をすゝりて天狗にするが卓見なり　そのうへ縫目の蚤虱さへ悉くは見盡されず。まして天地の廣大なる萬物の際限なき。一人の目を以て極がたければ。若は繪に畫天狗殿がお出やるまいものにもあらず。有たとて天狗ぐらいにさらわれる男でなければ。微塵こわくもなんともなく。無いとて小遣錢の切た程に不自由にも思はねば。只造化といへる細工人のお心持次第なり。若又天狗が何故死だと根問する人の有ならばあまり高慢が過て。科なき者を惡くいふたり。人を食たり抓だりがかうじた故。天狗の親玉太郎坊殿怒をなし　木の葉天狗を引とらへ首ねぢ切て捨たるを。豊水が見つけて拾ひ上し物ならん。これ皆余所の事ならず　今時世上に目がなければ。おとなしふ爪をかくせば鳶かと思ふてたはけどもが。茶にしたり馬鹿にする故　謙退辭讓は間に合ず。高慢いはぬは損なれども。又其高慢が過る時は。天道からあたまをへさへ。必憂目にあふものなり。人々愼給へかしといへば。皆尤とうなづきぬ

天狗さへ野夫てはないさ悲やれかうべ極てやるが通りものなり

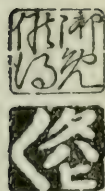
風　來　山　人　書

跋

天狗髑髏鑒定緣起といへるは。一とせ予が戯に書ちらし。大場豐水に與へたるを此頃書林開板しけるを或人見て予に謂て曰。嗚呼子が人を譏る事甚しひかな彼文中醫者と藥店共に盲とし陳皮もしらずとは何事ぞや陳皮は蜜柑の皮にして三歳の小兒も能是を知る。まして醫者藥屋をや此書行れざる以前此文を削去て世の嘲を免るへしと。予答て曰陳皮の事神農本草經には橘柚と有後世二物自別なり或は方書に橘皮と記し陳皮青皮のわかちあり然るを香川氏か藥撰に譫言をついてより。古方家と稱する文盲醫者ども。陳皮を捨て青皮而已をつかふ。陰陽造化の理に暗く。藥をしらすして療治するは。坐行にて轎夫と成り。達磨が串童を勤るに似たり。蜜柑の皮より腹の皮。日頃笑止千万と思ふ息が鼻へぬけ。戯ましりに書ちらせしなりこけおどしの大言にあらず。習ひたくば教てやるべし若此惡たゝ

いを無念に思はゞ藥屋にもせよ醫者にもせよ。遠ひ藥はさて置て。陳皮一味の事なりとも。わかるといふ人有ならば來りて我と議論せよ。所は神田大和町の代地一月三分の貸店に。貧乏に暮せども本名も隠れなし時に安永五ツのとし尻眞赤いな申ノ極月借金乞にいひ訣の暇風來山人識

里のをだまき評自序

莊子が寓言紫式部が筆ずさみ。司馬相如が子虛烏有、弘法大師の兎角龜毛、去りとては久しひ物なり。予も亦彼虛言にならひ。氣のしれぬ麻布先生。古遊花景の人物を設て詑八百を書ちらす。針を棒にいひなし、火を以て水とするは、我が持まへの滑稽にして。文の餘情の譫言なり、或は所々の地名なんどは。人の耳馴たるに便りて、直に其名を出セども、固作り物語なれば、實に此事の有にはあらず、見る人怪べからず。安本元年手狐のはつ秋、有頂天皇九代後胤、風來散人居續の風呂揚。宿酒の夢中に筆を採る。

吉原細見 里のをだ巻評

賢を賢として色に易よと。唐の親父がむだをいひ。外面似菩薩内心如夜叉と。天竺のすつとの皮が思ひ入にはり込でも。面白といふ事を呑込でゐる凡夫ども。氣短にいふてはいけぬと。闇雲に踏破りて。あしびきの山の手に一ッの艸庵を構へ。自麻布先生と號する人あり。されば賤しき諺に。牛は牛連馬は馬連。同氣相求同類相集の習にて。古遊散人といへるしれもの。殘暑の見舞に來りし折節。麻布先生の門人花景といへる當世男來掛りて。四方山のもの語。三人寄れば文珠の智惠はどこへやら。そろ〳〵と理に入て例の遊びの魂膽咄し。花景しかつべらしく懷中より小冊を取出し。先生達も御存有まじ。これこそ吉原細見の一枚摺里の緒環といふものなり。抑此一卷といつぱ。土橋中丁樓下の腐艸化して螢と成り。今五丁町に光を爭ひ。全盛いはん方なし。京の倡妓に江戸のはりと。それは昔の喩草。今ぞ吉原深川をもみませは。兩の手に梅櫻。遊のきつすい喜見城此上の有べきやと。我一人呑込でりきみ返て味噌を上れば。古遊散人熟聞て。彼をだまきの一枚摺。白ひ所も黑ひ所も一面に淚をばら〳〵とこぼし。山の手から吉原まで屆きそふなる吐息をつひて申けるは。嗚呼笑止なる事を承るものかな我日本は小國なりといへども。五穀豐饒に金銀多く萬の物に事を欠ず。繁花の地甚多し。京に嶋原大坂に新町長崎の丸山をはじめ。諸國の色里かぞへ盡しがたく。各土地の風流有て何れも面白からざるはな

し。有が中にもお江戸の吉原、一といふて二のなき事は人々のしるところなれば今更にいふがくだなり。世上にて目に立器量も此里の女と競ては思ひの外に見おとすべし。近き證據は山下にてとんだ茶釜と聞えしは一頃の大評判。能く聞ば吉原にて何とかいへる女良なりしが。吉原に居た内は本の十把一からげさして目に立事もなし。廓外へ押出せば掃溜の鶴砂の中金。飛だ茶釜の堀出しものと大評判に及しなり。斯吉原の女郎の勝て宜ふ見ゆる事は。幼少よりの育がら。立居振舞髮容第一氣取を大切とし。禿の時より姉女良の仕込方あることなり。就中其古、太夫格子の上品に至りては。琴三絃はいふに及ばず。詩哥俳諧香茶の湯、碁双六躾方。何れの道にも闇からず。諸藝を知て知た顔せず。見識有てべた付ず。上方の女良などの眞似てもならが吉原なり。今のさんちや付廻しは以前の太夫格子に劣らず。意氣地あり風雅あり。各たしなみの藝術あり。これ昔の風義殘り古川に水絶ず、假令菩薩の影向あり。天人が天降ても負ぬが此地の女良なり。岡場所の賣女ども。奴となりて來りなば。やはりかへ玉同前に一月一貫八百づゝで預捨にして置歟。さんとか松とか名をかへて。爨妾傳婢にして使ふ歟。いつそ鐵砲店へでも追下し。免許の遊所と岡場所は。雲泥万里の違ある勢を見せてこそ吉原ともいふべけれ。いかに末世に成ればとて。岡場所の土娼共に大造なる名を付て。二人禿座敷持、歩行も左つけぬ道中。其癖稽古に骨を折。家鴨の足どり懸絲傀儡。中の町の人立に氣を登して眩轉ば跡のいざこざ面倒なり。又下地から吉原に居る女良もふがいなし。親方は金さへとれば。幽靈をさらまへても商さ

せ度心なりとも　イヱわつち等は岡場所の土妓衆と旁輩には。得成いせんさつゝはれば、此相談は玄やみる筈なり、吉原中に智恵がなく、女良に氣がなき故、斯のごとくに成行て、剰自惚そふに細見迄を捨て世上へ恥をさらすなり岡場所の客までを引付ふといふ氣をやめて、客が來いでも吉原じやと、古流の角を崩さぬやうにじつと守て居る時は。奥床敷見ゆる故、自繁昌するく。移り安きは人心。上方にても一頃は、祇園町嶋の内北の新地が繁昌し。新町島原は不景氣なりしが、近頃は又そろ〳〵と餅は餅匠へ復るなり。思ひ付にて流行事は一花斗でさめ安し。當年の俄なども初は手がるくておかしかりしが。後は段々おもくれて、役者の聲色門をどり、何やらに似て氣の毒なりと心有人々の評判も有しぞかし。病に應ぬまや藥は。いやゐを抜獨樂をまはし。いろ〳〵に煮やべらねば賣ぬ故にもがけ共。眞に病に應藥はだまつて居ても買に來るなり。料理で落を取ふとしたり。さま〳〵の思ひ付は。まや藥を賣同前で女郎の恥と心得べし　又藝者幇間も　岡場所にまぎれぬやうにと不斷の心得第一なり。かくいへばとて必しも大キな面はせぬがよし米が安ふても江戸は江戸なり　買人の來ぬは地合が悪ひか、染様が氣に入らぬか、摸様が當世にむかぬかと、代物に氣は付ず。あぢな所に骨を折。今の様に段々と思ひ付がかうじたら、中の町に男倡茶屋、大門口で夜鷹が引とめ。大どぶに船をつなぎ。船饅頭が出よふもしれず。モツそろ〳〵と此節は。岡場所が吉原歟、吉原が岡場所歟。我がおれかおれが我歟、女良と賣女のつかみ賣　何でも撰取十九文、扨苦々敷事なりと眉をしかめて申ける、其時花景銀烟管を取直し　灰吹を

くわち〳〵と敵あざ笑て曰。古遊子の論高きに似て甚低し。されば古歌にも植て見よ。花の育ぬ里もなし。心からこそ身は賤しけれ。同じ天地の間に生ずる人間。國をわけ郡をわけ。村をわけ里をわけて。其品を論ずるは僻事なり。いかにも吉原は日本第一の遊所にて。女の姿勝れたりといへども。百人が百人千人が千人ながら能と定たるにもあらず。細見嗚呼お江戸の序に有ごとく。或は骨太毛むくじやれ。猪首獅子鼻棚尻の類なきにしもあらず。吉原の女郎なればとて代々其家筋有て女良が女郎を產にもあらず腹の中から誂て拵させるにもあらず。又岡場所の女良とて下り細工の出來合にもあらず。つまる所は親兄弟榮耀榮花で育りもせず。爲事なしの廻り足。吉原へ行キ岡場所へ行も皆夫々の因縁づく。能も有惡いもあり。江戸前うなぎと旅うなぎ程旨味も違はず下り酒と地酒ほど水の違もあらざれば。吉原にも絲瓜有。岡場所にも美人あり。又幼少からの育テから。立居ふるまい髪容。第一氣どりを大切と此詞又非なり。習性と成といへば。鉢木の梅うけぢの松。仕込にもよるべけれど堯の子丹朱不肖なり。舜の子も亦不肖なり。三年磨ても無患子は黒く。十年煮にても石は硬し。又龍文鳳姿とて生れながらに能ものあり。八丈嶋で八端がけを織。王子から菊之丞が出たれば。土橋中丁は扨置。根津音羽菜菔圃にも楊貴妃西施が有ふもしれず扨又當世に躁族。深川の風流なる事をしらず。只一口に岡場所とのみ覺たるは片腹いたき事共なり。吉原の地は北陰にかたより一方口にして道遠く。くはだてざれば行事ならず。深川の地は陽氣にして偏らず。船の通路自由にて。牡蠣店の牡蠣。文蛤町の文蛤。鰻鱺

は黒江町に名高く。鴈金焼は萬年丁にかくれなし。竹子の調味。升屋が洒落。二軒茶屋。二軒に限らずして榮へ。鹽濱鹽を焼ざれども賑ふ。角力あり。開帳あり。山開あり。夜宮あり。木場の岡釣には太公望も歩をはこび。三十三間堂の大矢數には養由基も汗を流す。新地の名いつとなく古。石場の人自和らぎ。追々客の入船町。遊びの跡を直助屋敷。表樓裏樓。裾繼やぐら佃新地。中にも土橋中丁には全盛の君多く。川には船筏を組。陸には轎夫の屯をなす。送りむかいの提灯は宇治の螢の飛かふがごとく。茶屋に持込寢衣は鳴門の濤の寄がごとし。間毎の座敷はれやかにして。山海の美味刻を正し。藝者の調子尋常に勝り。さはぎの小哥天下に類なし。世上の女の羽織着と。サツサヲセ／＼の浮拍子も皆此里を始とす。又女郎の氣象をいはゞ夜店といへる退屈なく。或は裏の三囘目のとわけ隔た仕内なく。新造袖とめ座敷の普請。簞笥長持夜具諸道具。抱の仕着せ茶屋船宿。牽頭末社の付ヶ屆。紋日の數／＼暮のやりくり。無心工面の責もなく。同じ勤といひながら。內證の苦しみ薄く。自然と心のびやかにて氣象に微塵もいやみなし。今吉原へ押出てもあまり跡へは下らぬなり。是でも岡場所と賤しむやと顏を赤めて論じければ。麻布先生莞爾と打咲て曰。御兩所の爭ひ最前より承る。各一理なきにしもあらず。去りながら井の內の蛙大海をしらず。夏の虫氷を笑ふの論なり。夫古より著しきは。江口神崎野上の里。大磯假粧坂の類。其名殘りて今はなし。實治れる御代の御惠み。繁花の地は都鄙を限らず色里多きその中に。押出したる　免許の地あり。擬者あり。かくしもの有。地者有はんかあり其品々をいは

ど傾城湯女白人踊子　比丘尼飯盛綿つみ。夜鷹蹴轉し舟饅頭の類は。小哥にも出たれば人々の知るこころなり近年提籃と稱するは持はこびの手輕きよりいひはじめ。山猫と名付しは化て出るといふ事ならん。又地獄とあだ名せしは。其初清左衞門となんいへるもの。此事を企けるを。箱根の清左衞門地獄にもとづきて。仲間の合詞に。地獄〳〵といひしより。今は其名とは成けらし。もの〻名も所によりて易るなり。浪華にては惣嫁といひ。伊勢の鳥羽あのづにては走りがねと呼。古市にてはあんにやといふ。伊豆の下田にせんびりあり。松崎にくねんぼあり。丹後にしやらかう越後には。冷水浮身あをのごあり。長門の萩にかごまはし下ノ關にて手拍とは船を見掛て手をたゝくより號く。肥後にきぶし長崎に。はいはちあり小女性有。信州上田にべざいあり。松本に張箱あり。加賀に化鳥名護屋にもかにておしやらくと呼。松前にて藥鑵といふは。尻が早といふ事なり尊きと賤しきと善と悪ひの差別出羽奥州に根餅とは。其初の女共蕨餅を賣ける故。其名とは成けるぞ。津輕にてげんほといひ。南部はあれども。情を賣は一ッにて。極意に至り至りては粹もなく野夫もなく。無中に有あり有中に無有。尊きと美しきが面白にも限らず。賤しきと醜が面白からざるにもあらず。それ相應の樂にて　撮千魚は石菖鉢をめぐり鯨は大海をおよぐ。牡丹も花なり野菊も花なり。夜鷹船まんぢうを樂む者は鼻の落るをと共せず。岡場所に遊ぶ人は岡場所を最上と心得。吉原よりも勝れりと思ふ。花景丈の味噌を上る。女の羽織は世の風俗を亂り。跡先しらずの浮拍子は遊に風情ある事をしらず。是岡場所の悪風儀ぞ。又

内證の苦ミ薄く自然と心のびやかにて氣象に微塵もいやみなしとは。鮑魚の肆臭ことを覺へず。深川に遊んで深川の穴をえらず。夫彼地の女良は鞍替ものありつき出しあり。甚しきに至りては人の女房を賣もあり。或は女郎の身で新子をかゝゑ。我身を買てめくりを打。掛金百落しの下卑有ていけもせぬ癖人を茶にし。客の前にて呷合。一字はさみであて付たり。哥の唱哥の耳こすり。亭主の身替りのれん替。前の家名は風呂敷に殘り。大工は爰がく所に工夫をこらし。一二三壬玉と名付。流れ渡りの岡場所と。万代不易の吉原をくらべ物には成がたし。又吉原の裏三廻は扨置。詞つきからもの日の作法。仕着せ衣裳の模様迄。古風を少も易ざるが此地の尊き所なれども。未熟の人の知る所にあらず。又古遊子の議論尤なる事ながら。これも去とはいらざる世話なり。今吉原の女良少しといへども三千人に餘れり。岡場所より來れるは多しといへども五十人に過す孟子に所謂。諸〻楚人これを咻せば多勢に無勢叶ひ申さず。岡場所の悪風義もいつとなくそろ〳〵と吉原風に變ずるなり。必しもいさふべからず。山は塊を辭せず。海は細流を辭せず。日の輝すがごとく鏡の移すがごとく。廣大無邊の取込勝負、六十餘州の人心千差万別の物好。粹は粹だけ面白かり。鈍漢は鈍漢程嬉しがる。萬両も一夜につかい、百疋で二度も行れる。勝手次第の衆生濟度。廣いが吉原。つかへぬが吉原。花は三芳野女郎は吉原。他所の櫻を芳野へ植ても。即吉野の櫻なり。岡場所の私娼でも吉原へ來りたれば。直に吉原の

倡妓なり美と悪ひは手に取て御覧ぜやれ

甲午の初秋

風　來　山　人　書

跋

童謠に曰。五尺體が三尺解て。跡の二尺はちぎる樣な謹で按ずるに解るが如くちぎるがごときもの海參に藁あり人に人あり或は新五左石部金吉も。一度吉原の風に當れば其柔なると山屋の豆腐のごとし我　風來先生嘗いへる事あり豆腐は軟なるをいとはず遊は和するを厭はず。しかはあれども若腐豆に膽水を入ざれば練酒のごとく米粕水の如く。遊の節々に極なければ闇夜に鐵砲を放に似たり。我に極あれば先の是非自明けし酒の失をしらざれば酒を呑て酒に呑れ。遊所の是非を辨ざれば。遊所に行て前後を忘ること宜なるかな此言手前に一箇の曲尺ありて。能人の長短をしり。今此をだまきの評を著す彼義士大星由良殿の敵程にはあらずとも人皆願有

望あり望は本なり遊は末なり本を外にし末を内にすることなく身の分限をしりて程々に遊なば一時の榮花に千年を延ることやいはん。

安永三年甲午秋七月

門人無名子誌

風來先生著述書目

風來かな文選　全

野夫論　近刻

虛實山師辨　全

書林　大觀堂

江戸下谷池之端仲町通り

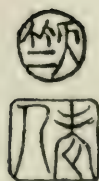
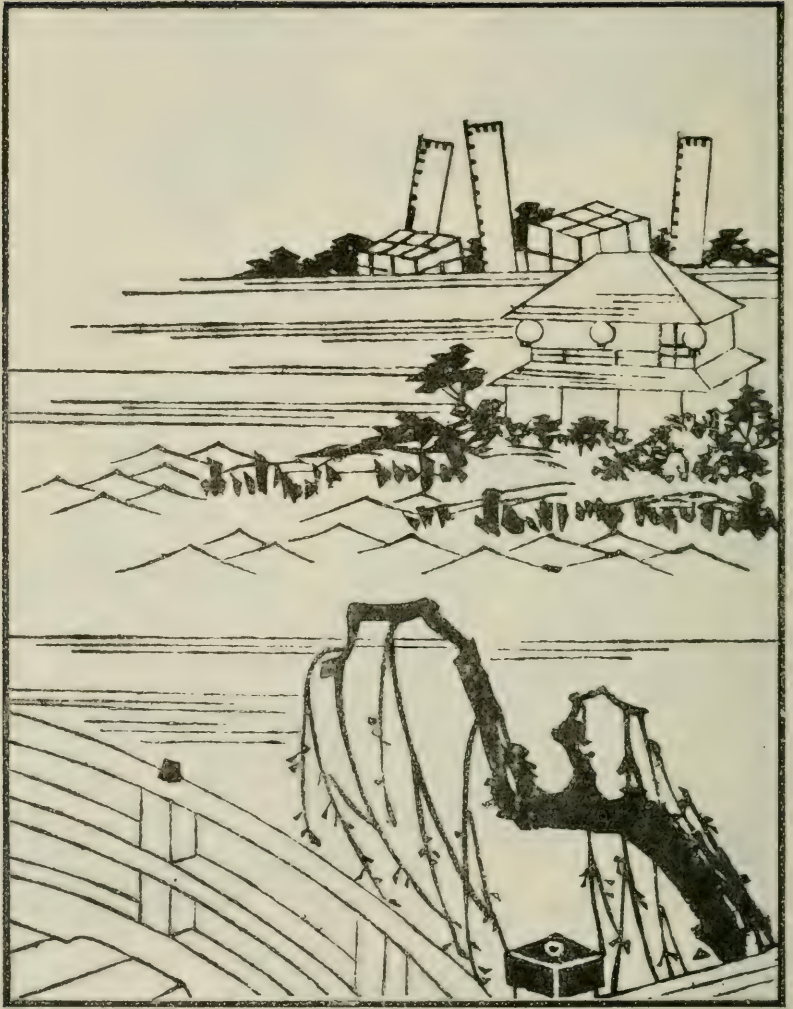
伏見屋善六

風来六部集　後篇

序

やまと歌はたけき心をも和らげ鬼神をも感ぜしむ男女の中をも和らぐるは歌ぞ。されば犢鼻褌もてゝらといへば歌にもよまれ下紐といへば雲の上人の口號ともなりなんかしもは言様言品にて仇し仇浪寄ては返る波淺妻船の淺ましやと。いへばさも麗しく聞ゆとなん取もなをさず今の世に船饅食どもて囃す此道の蒼妓肥滿〱の阿千代てふもの新飛てふ白拍子に。まみへて生活の不祥を説破り浮世は卞和が替玉となりて女閭の寓居に目下見し兩瓦三舍の荒唐を口かたましくも言たるを慣熟の奴が供待の聲高に語りしを予物蔭より立聞しが言葉のはなはひくしといへども見識は水道尻の火の見より高く彼泥良が得難にしたる跖婦傳の

趣にもおさ〳〵劣るまじと筆にまかせてかいつけ大平樂卷物と號す。
希は四方の君子鼻の孔の行届ざる所は瘡深ひ奴が脱漏たる事も多から
んと萬事茶にして見給へかしと云爾

天竺老人戯書

名物の饅頭は皆様御存のぼちや〳〵

川端の笘船は普賢菩薩の御縁起

柳腰の取形は江都妓女のしやな〳〵

縮緬の二布は尻喰観音の御戸帳

太平樂卷物

阿千代之傳

汨江の源は觴を浮ぶべし。楚に入に及んでは。舟船にあらずんば渡るべからずと。毛唐人の陳奮漢を。三十一文字にやはらぐれば。へよし野川その水上をたづぬれば苔の岩間の雫なりけり。」此歌の心をやはらぐれば。水のながれと人の身はよるべ定めぬ川竹の。あるが中にも取分て浮ふし玄げき浮れ舟。笘もる名代隠れなき。ほちや〳〵の。阿千代といふ。船饅頭の品者あり。おちよだァなァこうよつていきねエなアこうとよびかける。鼻聲もどふやらあぢに可愛らしく。これに打込折介は。心の竹光うち割て。うつゝをぶんぬきまことをつくし。そゝり手合の俠客は。手ぬぐひのあいそめてより。日和下駄の鼻を落そふと。まゝよ。てんぽのかわ財布。そこをはらつて通ひつめ。永久ばしのこまよせにて。磨墨のまつくろに成て。いきつきあらき戰ひに。われぞ先陣われ一陣と。梶原が逆櫓にひさしく。舟軍のかけ引にて。喧嘩口論たへざれば。所の番人さし置がたく。六尺棒にておつ拂ふ。是辻ばんから棒が出たと。童謠にいふ所なり。ころしも三伏の夏の夜なりしが。お江戸にその名立花の。新飛といふ藝者あり。客人は四季庵から仲町へはしけて仕舞。相仕の小まきと舟にてもどる其折から。新飛ナント小まきさんこの比名代のおちよとやらいふ船まんぢうを。はなしの種に船へ呼んでなぶつて見

よふじやァあるまいかと。いへば[小まき]ホンニこれはいゝ所だねエと廻しにたのめば。心得てたれだ〳〵と聞うちに。おちよが舟にたづねあたり。酒のあいてに此船へと。のりうつらせて見た所が。むきみしぼりの。もめんゆかたに。黒もめんの手拭を。はしと〳〵でむすび合せ。帶と見せるは仕似のいでたち。やき付のかんざしで頭をかきながら。おくめんなく座になをれば。[新造]取あへず。おちよをとはおまへの事かへ。佛千人神千人世間はちつとも廣ゝするは。わたしらがつとめのならひ。これをしんに心やすくしてくださんせな。かふいへばどうやら團子らしいが。あつたら器量をもちながら。さりとはいやしいおまへの商賣。とてもつとめを仕なさるなら。せめて女閤の河岸へなりとも。出なさつたがよかろふではあるまいか。おしたてならみめかたち。あつぱれお職といつても。だれが點の打手もあるまい。もしまた藝者になる氣なら。わたしが妹分にしてひき廻して上やんせう。ちつとはな八聲のぬける所は。新内のふし落にうつて付でござんせう。すべてわたしらが商賣は。うじなくて玉のこしとやら。身はいやしふても。能衆のまへなどへ出られて。面白い事やおかしい事を見るばかりはつとめの一德。又さもしい事ながらうまいものは年中くひあき。これもみんな藝のおかげ。ナゾト今から船まんぢうをやめにして。藝者をして見る氣はないかへと。むだ半分にいゝければ。[ちよ]くつ〳〵とふき出しホンニ夏の虫がこふりをわらふとは おまへがたの事じやわいな。ふなまんぢう〳〵とおしさげていはんすけれど。ふなまんぢうの尊ひ事。あらましつまんではなしやしよふ。こうがく

のために聞ておきねエなア。かふ唐の詩經といふ本に。漢に遊女ありといふ事がある。漢とはひろい川の事。遊女といふはうかれめの事。川中のうかれ女なら。船まんぢうではあるまいか。さうすりやアわしらが商賣は。人のおしへのもとゝする五經のなかにも出てゐるぞへ。また朗詠にも秋水未遊女の珮を鳴さずと。四角な字で書てあれば。きつとしたけいづじやアあるめへか貞家卿うかれめに寄する御うたにも。へ心かよふゆきゝのふねのながめまでさしてかばかりものはおもはじ。」これ川なかにふねをうかべて客をまつ風情をよめり。すべて遊女といふ文字をうかれめとよみ。うき川竹のながれといゝ。越後の國ではうきみといひ。又ひや水となづくるはひつふかひといふ事なり。大坂の新まちでは太夫に付を引舟といゝ。はじめて客にあひそめるを水あげとゑやうくわんし。はじめて勤めにいづる者を新艘となづくるは。あらたにつくりし舟によそへて。のり初らるゝといふ事〳〵なじみをふかき淺きといひ。ゐつゞけをうつをながすといゝ。心がはりを水くさいといふ。なんでも女郎の身のうへは。たいてい水によそへてあれば。ナント遊女のはじまりは。船まんぢうではあるめへか。そのかみはあさづま船といゝたりしを。まんぢうぶねとなづくる事。つく〴〵とかんがふるに。むかし西行法師によみへ給ふ。江口の君。三十二相のすがたをげんじ。普賢ぼさつとあらはれ給ひ。めされたる御ふねは白き象となりたるよし。象はもとよりまんぢうを。すくものゆへうかれめののる舟をまんぢうぶねとぞなづけけん。また一切を三十二銅にきわめしは。三十二相のゐんをとりしものならん。

なんじややらおまへがたは。いろざとじやのくるはじやのといはんすが。それもとうろうの時分か。にわかの時。おきやくのともでゆかんして。おもてむきばかり見さんすゆへ。温和らしう思はんしよふが。ないしやうへまはつて見ると。精靈さまのもりもの同前。内と外とは大ちがひでござんすぞへ。わたしもかへ玉になつて。まる三年あづけられてゐるうちに。とつくりと見て知ておりやすむかしから替らぬものは。引四ッに大あんどんもめんかぶろのとりなりは。菱川がむかしゑのぬけ出たるかさうたがはれ。正月の伊達ぞめは。一蝶が名所遊女を眼前に見るがごとし。つるべそばはほつときをきらはず。やまやがとうふは白きをいとはず。竹むらがまきせんべいははあたりのかたきをしやうし。なかの街のこぶまきははごたへのせざるを感ず。かんろばいは下戸くらふて舌うちし。そでのうめは酔潰服してゲツプ〳〵す。八さくのしろ小そでは。時ならぬに何の雪ぞ。七月のとうろうはやみなるに何の月ぞ。うちへむけてのまつかざり。あらごものざうにもち。庭の焚火に草市小そで。春のさくらは秋のにはかさかわれども。かはらぬものは。家々の。かくしきどふしよふははま屋におざんす。松かわ屋にいんすりんすのことばのはしに。むかしの風がのこつてはあるけれど。かわりはてたは娼妓衆の躰たらく。いにしへは十八樓の揚屋より名ざしの女郎の名をしるし。おくに御法度の客に御座なく候といふ文言をしたゝめるを。たけやさしがみと名付たりとぞ。かゝる蕩々たる花街の粉頭が。相手かまはずつとめの外のたのしみも。人めをしのぶ間夫ぐるひ。それもむかしの高尾に。しまだあげまきに助六。小

むらさきに權八ともいふやうな。末の世までもうたはれるやうな事はなく。たゞわけもなくちわをも有。又近ごろのはやりもの。こゝかしこで見た人や。つき合にくる客人のあたゝからしう見へるあいてに。惚身てかける色じかけ。どうぞ一度なり共つれもふして來てくんなんし。みあがりの二三度もはりこめば。こけはむしやうにうれしがり。あしが付たがさいご。ぬしにやアなにもかくしいせんと。うちかぶとを見せかけて。白化の金太板ごき。下でもぬしに目をつけて。外の客人のじやまになるゆへ。にかいをとめると申いすから。なんぞ主の仕てくんなんした分にして。こしらへて見せいせんではならぬやうになりいした。じつに ぬしのほかはつとめる事が ゑみ／＼いやでおざんすから。ねつから客衆ははなれて仕舞。どふもゑようもおざんせんが。半金くらゐはいなかの客人にどふとも仕てもらいゝすから。どふぞ寢道具をしておくんなんし。のつぴきさせずくゝり付れば。身あがりだけの事はうまる。すつぱり寢道具のできた時分。もらふあてがまちがひしたと。もらつたかねはあたゝまり。どふも顏が合されいせん。さう／＼如在でない事は。これでゆるしてくんなんし。ゆびのさきを少しそぐか。髮の毛の中でもすかしてやれば。童子格子がたんのふするさ。むねのそろばんのけたを合せてはぢきこみ。爪のながさこゝろのうちのさもしき事。口にてはいわれもせず。さりながらそれも道理入江町に居さんした。お跖さんが（跖婦傳の惣嫁なり）三浦屋の高尾さんに。いわんした通り。けいせいのものとては。錢が一文やうじが一本さらになし。みな客人のふところをあてにするきやうがい。どふしてこれ

が正じきに情をたつてくらさるべき。心は山うりどうぜんに。どふがなしてくゝり付ねば。たちまち借金のふちにしづみて。てん／＼舞のをどりの拍子これを來て見よ。かしへさげられ。またはば女護のしまの惣雪隠かとおやしまるゝ。ふしみのつぼねへおろされ。よるひるわかたぬてつぼふせめのくるしみ。晝三ッのつけまはしのと。くらゐが付て全盛するほど。座敷代が月に壹まい。しんざうまでにつかはせるみすのかみからおはぐろ代。茶屋の付金。買ぐらひ。さま／＼のもの入がおふく成ものいりの多いにしたがつて。軍用金におわれて來て。おつつめは手くだへ。落かふすれば客がせきこむ。どういいかければ。のぼせて來ると。あけてもくれてもきやうげんのすぢをかんがへ。正月の元日からしはすの卅日まで。こゝをしきつてかふせめてと。ゆらの介が夜うちまへといふ氣になつてくらす事ゆへ。なか／＼ゆうな事や。なさけらしい事にさんぢやくしてはゐられぬはづ。こけおどしのからやうや歌書のことばをひねくるを。やさしい事と見給ふな。有ていのところを申さふなら古人の句にいへるごとく。へにしき着てたゝみのうへのこじきかな。」これいまの世のけいせいの身のうへなり。さてわたしらがつとめのいきがた。こゝろいきのいさぎよきをはなそふから聞なんし。江口の君のながれはたへず三十二銅のすがたを顯じて。此かしばたのこまよせを。まがきとも格子とも。おもつて居れば。いろざとのみせつきも。さまでかくべつの事ともおもはず。内をば船でのり出す時。冬ならばたどん二ッにかた炭一升あさくさ紙の四ッきりを。おやかたから請されば。小づかひに追れる氣ぐろうなく。二階の

小用所はくるわばかりとじまんらしくいふけれど。それはおきやくの小べん所。わしらが船のちやうほうは。あれ見なさへ。ともの わきの四かくに明たところから。おいどを川へつき出して。ゑやツ〳〵とはぢく氣さんじ。ゆく水のながれはたへず。あとはきれいなうしほをくんで。てうづ水にも事かかず。またあんどんのないうろ〳〵船や。一ぜん二六の舟そばが。まいよこゝをうりあるけば。むかふの人をよばずして。ゐながら萬事の用がたる。三十二文ときまりはあれども。五十六拾ないしは百。なげ出して行客があれば。上端はわしがほまちにて。かひぐらひの仕拂。明るひるまへかんぢやうすれば。ものまへのくろうもなし。おせきゐンの身のうへも。わしらがつとめもどうぜんにて。おもてをはゞむだがなければ。もん日もの日のとんぢやくなし。錢がほしひともおもはねば。客衆をたらすいつわりなく。ちよんの間の事なれば。いろ男じやとてうれしくもなし。ぶ男じやとていやでもなし。心にまかせてふるといふわがまゝなし。わづか三十二文でなさけをうれば。くぜつをゑぶくる野暮もなし。いやなれば來ず。客にうそなければ。こつちに手くだもなし。いつはらざるより。まことなるはなく。まことなるより正直なるはなし。サアこれでも船まんぢうがいやしいかへ。またこれからはおめへがたのたなおろしゑや。まづおとびゐンのさしてゐさんす。ふなしべつかうのむなたかぐしに。ゑのぎの笄。まへかんざしの銀匁から。やすづもりに見たをして。十八九兩が物はある。やなぎちやのどんすのをびに。ちりめんひとへのぶつかさね。ゑぞにしきのどんぶりぐるめ。これも十兩か

らが物はしつかり。サアそのかねの出どころをたづぬれば。おめへがたの晝夜のつとめが。ふたりしばつ二三歩づゝ。たゝきわけにしたところが。一歩貳朱にしかならねへぞへ。月三十日うりつめて。あぶみふんばり十兩あまり。そのうちを。百助がくこのあぶらに。下村のぶたい香。あぶらもとゆひかみゆひ代たなちんから飯米から。とゝさまかゝさんの仕着せ。内を出る時うちかける。火うちかまにひうちいし。こつぽり下駄によせ緒のうらつけ。諸しきくるめて勘定した。引のこりおめへひとりの身じんまくにもたりよふかへ。そうしてみれば定式のほかにもらふ客が。たんとなくては一日もくらさりやうか。また金をくれるだんなじやとて。むしやうにくれるものでもなし。そこがかのころぶとやら。けつまづくとやら。たゞは起ぬつかみ金山寢ずにとるくすりとはほつてもゆかず。うはへばかりは娘の命でも。御本地は正はちまん賣女からつりをとるはおめへがたの身のうへじやぞへ。惣じてせけんのことわざにどじやうの事をおどり子といふは。汁がおもじやと云事なれど。いま時のおどり子に。汁氣が有たらそれこそほんに二ッとない鼻ッかけじや。またいゝ衆の前へ出るのを。見へらしういわんすが。とりもなをさず狆ころや。ねこの子を。おひざのもとへ引付てなぶりものになさるとおなじ事。夫をよい子のふりをして。ひつかけるはなの高ぢやうし。五分なかのいたじめじゆばんで。座いとの三をきゆつ〳〵といわせ。きく岡がつぎさみせんに。千枚ばりのつらのかわ。さりとはばちあたりのさいじりは。ろくでもないころじまん。春はさくらのむかふじま。きやくのはな

りをひつかけて。おき手ぬぐひのはなうたに。すそはばら〳〵ばらをの草履けまはしのうらもよふ。もれ出るあさぎのちりめんは。しりくらひくわんおんの御戸帳が。はをりのかんばんと思われて。このもしげはみぢんもなし。夏はすゞみのやかたぶねに。二度の月見をくゝりつけ。冬は雪見の二けんぢや屋。酔潰どのゝつぐ酒を。新川のまへだれどふせんに。酒ひたしに成た着がへのひざへうけこぼしてざつぷりいはせ。平氣でそでぬぐつて見せるは。かはりの小そでをしてやらふと。りづめでいわせる下こゝろ。ある時はまたざしきもなく。ねッからひまなじぶんには。御きげんうかゞひとこしらへて。おとくいがたへおして參上。御しうぎなしのたゝまりは。打ッちやッてもおかれやるまじと。舌なめずりのあつかましさ。またちつともひけそふなむすこと。見れば。あしだをはいたなまゑひのどくころぶよふてころばぬよふに。おもしろおかしくだましかけ。モシわつちが内へ來なさへと。めりやすのけいこはおもてむき。仕だし茶屋へいゝ付て。くひたいものをとりよせて。あとの拂はむすこのふところ。またその上に小釣はみんな手前へかきこみ。また用をいゝ付るのをはなにかけて。茶屋のおぢゐゝにめしの菜をねだつてやる。さす手ひく手がみんなよくづら。その内にもふちつといゝ鳥がかゝると。さきのむすこをとらまへて。けさもゆ屋へゆく道でおまへの來なさるのを。近所のわかい衆がいろ〳〵にどくづきやす。あれではけんくわでもしかけやしよふから。これからはこつそりと。やねふねで出やしよふと。あぢにもてなし。むすこが足があがつたあとへ引づりこみこんどの

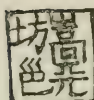
おきやくはからあたまから。惚身で仕かけ。おやぢは用事とおもてへはづせば。おふくろはねんぶつ講。ついそのうちに。ちよ〳〵けまちよけのこんたんで。たゝみがへをもねだり出し。竹がふしがすかしまどのくろ塀とかわれば。そのあと變じておちまのくり石すみにちよつこりほてい竹。ひかり手合がもつて來た。不動樣の御ゑん日にかつた鉢うへやくしさまの御ゑん日にかつたせきだいなど。むかふの方へづらりとならべ。たけずのゑんにぎぼうしゆのやきもの。はんどうはんぞうみゝだらい。樂屋きやうだいがりつぱにでき。手まへ雪隱のふしんもすめば一夜けんぎやう半日こじき。だん〳〵ゑように實が入て。とりつけひつつけねだりとも。かほに衣かけがあるうちばかり。目元に衣はよゑちりめんの。三十ふりそでになつてくると。仕おくりきやくもはなれて仕舞。又さま〴〵な男をくつた上は。一通りなはいやになり。あにぶんとやらこぶんとやら。どふやらこふやら亭主にしても。ほころび一ッぬはれねば。こそくりものにも人だのみ。ぬかみそへ手を入るゝがいや。めしをたくも下おもいと。けんどんそばではらをつくろひ。さいはいつでも取つけの。ひしほうりがもつてくる。座ぜんまめやなづけて仕まふ。當座のがれのじだらく世帶。まんまと身のうへもちくづして。末はでいしのながれの身。よく〳〵うんにかなふたところがよび出し茶屋のむすめとばけ。又はそここゝの水茶屋ぐらいで。まづしひくらしをするもあり。おめへがたもそのとふり。いつまでわかい身ではなし。いまからそろ〳〵身のおさまりをふんべつして。おきなさるのがよささふなものではないかへ。そふいふ

もおめへがたが。うそにもわつちがためをおもつてしんせつにいつてくださんした。御禮ながらのあてこすり。良藥は苦ひとやらむしに。さはらばゆるさんせ。またおめへがたが高尾さんぐらゐたゝ人で。わつちがおせきさんほどなきりやうのものなら。まだいふ事もあろふけれどなにをいつてもよまぬどしかゝぬどし。こんやはとまりの客もあるはづ。モウおいとま申やすさ。おのれが舟へのりうつり。ふなばたをたゝいていわく。大川の水すめらばかみをあらふべし。にごらば脚布をあらふべし。よしか／＼のりなんしさ。はなごゑでうたふてさる。あとにふたりは顔見合せ。なんだかねつからわからねへの。アハヽヽヽ

後序

傾城傾國は唐人の付たる名にして。白拍子ながれの女は。我朝のやはらぎなるべし昔より品類あまた。かぞふるにいとまなからん。國々の名目。當世の洒落柄杓。干瓢白人。巾着のたぐひ。大むね一種より出て位階の高下有。金銀の相當る成へし。たつとからずして。勅撰にゆるされ。貴人のかたはらに侍るゆへにや。ちと子細過て。おほくはふるみに落たり。爰に天竺老人のいへることく。遊君有て終に人の魂をとらかすいきはりも見へず。まして歌よむほどの戀にてもなし。たゞ物くひ月落鳥啼の吟も。此君にあはぬうらみをのべ。江口の泊に宿かさぬきみもなく成て。今はたゞの所には成ぬ。伊勢路の彩色はおかめがちにて。大津草津は少しうすかるべし。冬枯のまばら成る比は。いつとなくよはり果て鼻の下の煠氣もさむく。木綿所の小車の音も。さびしくくれて。水風呂のほかげに足袋さすわざも詫し。片田舎は法度きびしく表向はつとめせず。されどあはれなるかたには心ひかるゝならひ。夜更てあるじしづまりぬればぬけいで。しのびやかに書院床、

出るはゞかりなくて大股に打越、終に一夜の枕をならぶゝ、出替りは年の暮を定め、給分の加増は赤まへだれをこぎる、物皆終あれば古莚も鳶には成けり。此ものゝ行衛何にかならん。むかしは普賢ぼさつにも成たる先例もあれご。今は少しの違ひありて、果は駕籠かきの妻に成瘦子産捨生涯を終る。未來とても覺束なし。八萬地獄有れば。素人の地ごく有をきくも。たゞ一生の福をいのる。諺にいへる。運は天にあり。牡丹餅は棚にあり。まんぢうは船に有といふ。

嵩天坊誌

自序

夫本覺の佛は形なく。法性の神に姿なしと。いへる如く。寔の通といふものは面に通をぶら付かせず能ないと饒態をもヲヽいゝと讃左迄なき事にても難有と育つる故。人の照るといふをなく立引を專とする心より金がなくては娼妓は買はぬが。まし聲花をせぬくらいなら大門をば潛らぬが能と天の岩戸に閉籠れば。世は常不變にお先眞暗わいだめもなき虚に乘て神や末社の濫吹共神集に寄合て魂膽咄しの。意氣ちよんを聞て居るのも無益敷殘口翁が口眞似に勃然としたる惡口は世上の通を壁と見て達摩大師のはりこみをおきやァがれ小法師といわばいへ頭を振て搆はぬ而已

下界隱士

天笠老人誌

蛇蛻青大通

大通は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける花に行無駄人月に通ふ遍鋋もいづれか通を知らざりける夫大通といふ文字は唐の俗語にて大に人情に通じたるを稱したる字の通りの詞なり近頃世上一般の通語と成て晝三買の意氣人より切店そゝりの俠客に至る迄假にも通を唱へざるはなし彼通に差別あり極眞の大通は上方の達衆に等しくくつきり立チし水際は水道の水の名物男。意氣地の立引男氣は。くた〳〵言も緒環なり夫より次へ落來て木葉通といふ溝飛ありて彼大通の大びらに錢金遣ふを鈍漢と譏り熱鐵の。ぐひ飲に高まんの脂をさげ我慢己惚の鼻高く四ッ手の翼の自在を得ざればぱつち尻端折の悋惜を用ひ羽折は長きを厭はず身幅はひろきを嫌はず流行物の仕出しに追れて工面のときんに額を痛め常に意氣過の梢に架を高くして江戸節の横噤をゑぶくるを天狗倒と唱へしが近頃號て横倒といふ。扨言語も跡を詰笑話の受賣に稍〻口拍子が廻つて來るとおれは餘程通だはへと我と我手に印可を許し人の咄の腰折てお先眞暗に晒落散を心ある人々は垂準で苦笑すれば扨はおれが口先には楯突者こそ無かりけると。仕たり顔する痴漢共知惠は三文番椒の袋より狹く高慢の高きこと前引の月躍はそこ退と彼殘口翁が小言に曰未熟柿が己レ熟せりと甘味を付れど根からの美味ならねば何所に否なる味の出るは腐の付ケる之腐付ば萬の物も臭し臭味の付族に眞物はなしと知るべし味噌はみそながら

味噌臭はわろく粋も粋くさきは粋ならねものぞとは誠に古今の通言ゝかたの如き鈍漢めらが盡した衆の魂膽はなしを得手の道へ引ッかけてとかく女郎を買ふなら魂膽が第一にて一文成り共引キずと出ねば手に入たといふではないと手前勝手な横ぞつぽう馬鹿の上盛鈍間の下タ積能積ても見るがよし。女郎に無心を言迚も折と時とがあるものゝれつきとした通達でも遊廓の金にも詰るならい遣つた上の金詰切及詰りし才角に膝とも談合男づく頬を捨ての無心には女郎の心はしらねども其苦は誰がさす事ぞと氣の毒餘れば。いとおしく。人の譏りも顧ず裸にも成年シをも入レ身を粉に砕く黄金心中貸人の手柄借ての名聞。氣の切レた女郎じやと立浮名には客が殖。客が殖れば金もでき。首長はまる借金の。淵は瀬となる陰徳陽報。遣ふ丈の金も遣はず何かくせやら寐がつてやら。まだ氣もしれぬ傾城に。かう一双から魂膽とは。穴の貉の盃晴共。適登樓の後朝には先友立の所へ欠込。態と寐むたひ顔付にて。マア聞てくんなさヱ。斯いやアどふか味噌を上ゲる様だが。つがもねヱ難有てヱ句が有サ。どふしたもんか。めつきりと噂が付クよ。マア斯だ夕ア小切ッ懸のある傾を張やした。所で床が納まるとサアつがもねヱ銘句を吐やす。そかアまた恐敷櫻田が狂言に高麗やが魂膽で廿五點といふ所をヅドン〳〵と當た所が先刻承知の山櫻裏ア身揚でいる筈だが隙ならおめへもあいばねヱか連の一人や二人アロ鉾てはたらかせる何ンでも強敵引みんたんのソレ。ほん突出シだがとわへしやねヱかへと繻伴で咽をメながら唇反した自慢貌約束の夜にいて見れば女良の方でもぬかりなく夕ア貫箸の客人が來いせんから

今夜はどふ共しておくんなんし今度はきつと働いすホンニえみ〳〵お氣の毒で。ござんすとどふえいせふの二ツ三ツも。やらかして明透らしく見せかくれば今度は〳〵と。思ふより木乃伊取迚蜜人。己が手に蹴返シて罠に懸る白痴共去迚は世に多し是より段々惡業が入。金のとれぬ腹いせに。無理にせこめて髮を切らせ墨彫せて嬉しがり坊主にも俗にもござれ〳〵の起請文又は盜人證文の當テ名は誰でも。お望次第指の先の厚皮でも削せれば早手の物と悦ぶは。去とは狹き了簡ならずや近松翁が。傾城請狀にみには咥を書ならひ。床にて人を燒ならひ。寢む度とも。居眠らず泣ともなく共絹〳〵の別に泣せ申べし起請誓紙に。身の內の。血をば惜ませ申まじと。書たる如く思ひまいらせぬといふみもなく。替りませうと書。誓文もなきものにて。臨機應變御緣次第。小股潜の書人と見れば主に苦勞は懸いせんと夫相應の調子に合せ。所詮いふても錢にはならず三度來たなら。三度だけ客帳の駄目を差シ。賣の込のが得なりと。十把一トからげに。見縊られたる心。恥敷事にあらずや大通の元〆。文魚先生が茶飲咄に曰今の浮世の女郎買に。まだしもに。見ゆる物は新吾左の遊びなり。買切た上からは傾城の五輪五體は我ものと。決定し假令名染の客にもせよ貰引を聞入れず少と床が不勤か。又は床廻が惡いと忘八を呼と。切及廻し傍搆はずがなり出せば。心の內では親の敵のよふに。思ひながらも。何でも一夜の賜顧なれば。おゆるしなんしと。誤て小言いわるゝ右流左。さにまんぢりともせず。勤ても。商冥利かふする筈と。客といふ字を眞向に。差翳し。腹一盃に權威をふるへど定式の入目の外。格別

金が入でもなし。又聞た風の通共が。書人とか魂膽師とか。名を付て諸事扣目に立廻り。面白くさへて居ル最中に件の如き。客が來て差合ならば。貰ふて出せと。言譯聞ずだけ散せば。まだ貰にも來ぬ先に爰が通だと。氣を通シありやァ手前が。客人か。つがもねヱとんちきだの。ゑたがあんな奴が爲に成。おりやァゑヱから勤たがいゝあんな横倒ゑやァ座敷もあけろといふだらふ。口を明カせねヱよふにこけヱ入たがるヱと。うぬが方から引ケを取。氣を通す心遣ひ。誠に粋が身を喰とは。是らが事を言成べし。此調子にて。ばんじけち〳〵と。立廻るを色仕立と號よし。どこの仕立やが仕立ルか。去りとはきう屈な仕立様我等がよふな肥滿た者には尻がへばつて着惡しと笑はれしも理之斯如く引ケを取も一躰の下タ心は女郎の内股ヱこび付て。一度振の勤なり共引みんたんにせんと。欲するむさき根生より起る事之蓼くふ虫も好〳〵ゆへ。一概には。言れねど左程身銭がだしとむなくば。たかで遊びに行ぬがよし。一度ぶりの勤さへ工面の出來ぬ。ごくどうなら假令氣のある女郎でも。あいそを盡すは。知れた事之行着までは遣つて見ぬ不甲斐なき魂にては傾城は扱置。何事に寄らず。行ものではなし。又席狭き遍鍾が傾城に誠なしと。四角な卵を引事にて無面目に言破れど女郎の子が女郎にもならねば傾城の種じや迚禿の黄巻が有でもなし。我は親兄弟の爲に沈みし戀の淵。一ッ頭の朱唇萬客嘗と。聯しとく。入替り引替り來る客が惚られまいと思ふも無れば鍾愛可愛の情を述。惚た惚ぬのせりふにも。げつふをして居る矢先なればめつたに惚ぬも道理之其又惚ぬ傾城を手に入やうと。思ふには

誠の一字を以てすべし鹽冶判官高貞の家士大星由良之介が嘘から出た誠でなければ末が遂ぬといへるごとく魂膽狐のすつとの皮。釣留んとする狩人は度〳〵の罠に金銀を費し。果は直化實の化實が嘘にて嘘が實。心の誠がまことに顯はれ身の油の揚鼠で眞の甘味を喰はせたらどの樣な白藏主でもゑん實の尾先を顯し手に入段に成つたなら。懷春の處女や。男ほしい侍女の部舍切た。浮氣より垢拔のゑた。いろごとなるべし併かやうに申せば迚親の讓の家を潰し。居屋敷を打チこんで深はまりはいらぬもの只女郎は遊び物遊君遊女の。遊の字は。あそぶといふ文字なれば。壹歩ならば。壹分だけ。貳朱ならば南鐐だけ。客といふ字の位を落さず。買といふ字を心に込惡穴を言ず。惡洒落を決してせず見へをいわず。虚をつかず。男氣を專として座敷の數を重ぬる時は需して通となり態とならさる仕内の中に自と。出る面白みには傾城もおもひ付世間でも難有がるべし。よしやそれは千差萬別女郎殺の魂膽にて。お手に入のも。有べけれど。高が疵瑕ない女郎の才角。拾兩遣つて五兩は引ケず假令五兩引た所が心盡しか。いくらのことなれ共是も得手勝手吉原でかいた恥が。家の瑕瑾に成るでもなく。女郎に不實をゑたればとて。一家親類に見放されもせぬものなれば。詰る所が理屈もいらず。何して見るも樂しみなれば。差徒に千年。似た山に千年。すつとの皮に千年の。ぬらりくらりの功を歷て。青大通の殼を脫浮世くるめて丸飮の蝮蛇となり給へと叢探の穴賢〳〵

自敍

鹿子餅先生曰口質門鼻質屋根也以是巴眉間尺首酢醬眉間尺尻也故登毛與則巴御蒔後來高麗琉球唐土天竺平均一雄婦也或曰登毛與何爲對曰予筆記登毛與傳焉四方君子欲見登毛與先見此書而後以可見登毛與也安永丙申夏柳塘北岸滄浪題

力婦傳

風來山人述

都鳥は吾妻の隅田川に名高く。すみだ川諸白は淺草の名物。眞先の狐は稲荷の社をはなれて汐入神明の地内にお出〱と呼ばる元柳橋に柳ありて柳橋に柳の無きたぐゐ何共其意得ぬ事に存ると。苦に病んだ所が大の無娜〱柳の糸のかゝる事は打遣ておくべき事とて諸事柳の名あり。名にしをふ兩國の涼も大橋の新地にけをとされ千ふね百ふね皆三ッ叉を臨て走れば。岡涼みの千萬人は各石垣にそふて進む。銀燈萬樹のはなの穴も。ふすぶる斗の灯の光陸の安藝の宮嶋の本店かと疑ひ川は天滿祭のふり賣かと怪しむ硝子細工は逆につるさね共美しく。汲たての氷水ぬるけれ共涼し鰹の雉子燒夜の鶴市子を思ふ親仁も口に涎を流す憐むべしお跡眞闇にして間部河岸鍋より黒く元矢のくら素より暗し。此時に當てさんげ〱は岡に居て唱ふとも、見咎る者も有べからず境葺屋の兩町も今年は五月雨と共に垂こめて曾我祭の沙汰もなく土用休に引續けて。いと寂寞たるさま〱それが中に樂屋新道の賑ひ。いかなる事かと見れば大坂下り女ちからわざ。ともよと染ぬきの大幟木戸口のやつさもつさ大入とは云もおだまきくる〱車に俵の曲持つく〲感ずる臼のれんまんうつゝをぬかす碁盤のかねあひ譽る聲は高けれど。安いは木戸錢廿四銅四人合て百せんの雷一チ度に落るかごく〱抑此ともよは此度大坂表よりお江戸見物のために罷下りしを。相頼各様へお慰のため御覧に入奉ますと。いふは表向の口上にし

て實は大坂の者にあらず北陸道の北の方越後の國のかたほとりに。山岡が末葉にもあらず酒呑童子の親類にもあらず上杉家の臣下にもあらず弘智法印の檀家にもあらず高田近郷の產こ其容貌美にして膚は狗脊の綿のごく。ほちや〳〵やわ〳〵こゑかも雪國の白きを見せ皮薄なる事のし縮の如く湯上りの姿は鹽引の色を帶たり越後の國の大坊主も首のありたけ延しつべき風情、更に力者のあらくれたるさまにあらず故ありて江都に來り大根畠に住する事又故あり

凡力婦は日本にては巴板額を親玉こして淸水上野か妻以下近江のおかね奴の小萬に。至迄其數あまたありこいへども目前の事にあらざればくらべ物にはなりがたし男子の力量こいへども書の上に形容し狂言綺語にまなびて信しからぬ事多し故人栢莚。五郎の役にてせり出しにて家を片手にさし上て出たり訥子これを諫て曰時宗もこより大力の士なれども家をさし上るを片手わざにせんや重ねては兩手にて指上給へかしこ。栢莚答て曰非之時むねいかに大力なりこもいかんぞ家を指上る事を得んや。これをさし上るは則狂言戲藝の情こ。是強剛の甚しきを見するのみにて尤虛こ。されば兩手にてさし上て強く見せんよりも片手にてさし上たらんは殊に強く見ゆべきこ。其實を正さば兩手にても指あぐべからすこ云しを。訥子深く感じけるこぞ況唐土の万八。卷の書籍に力婦の沙汰ありこもそれは夫レに片付て置かんものこ詩邶風簡兮篇に有レ力如レ虎こは大磯のこらが事を言て大磯のこらは漢宮三千第一の美人。夫狹手彥が不老不死の藥を取りに日本へ歸る時。李白王維等こ共に明州の津に分れを惜みきこへ

ませぬぞ狹手彦さんと追かけしに股野五郎景久が山の上より投かけし重さ三万三千三百三十三貫目の大石を請留目より高く指上たり。深川の三井先生筆を揮て三圍の繪馬堂に此額有石はあづまの森の內に有。則さらが石是也、夫ト狹手彦此勢ひに恐れ凝堅まつて石と成る今淺草の地內に久米の平內是也、などゝ書て置かれても見ぬ事は口が利かれず。されば水滸傳に一丈青扈三娘あれ共ともよが心には豆腐小半挺とも思ふべからず故に盡く書を信せば書無きに如かずとは諸事杓子定規にするなとの敎。さればとて無性やたらにはり込をくはせて書物を片つぶしにもなりがたし傾城に誠なしといへばとてどうぞ節句に來ておくんなんし外に賴む所もありいせんと。せつなるは詐の無い事なるべし詐多きは見せ物の看板。かんばんにいつはりの無いと云が則詐なるに此ともよが力はまことに往古の巴にも賢つべし民部省に主稅寮有仁王樣に力紙あり腕に覺へは。力瘤鷹の抓は力艸馬具に逆鞆あれば刑具に万力あり祇園に一力伍長に與力山伏に强力苗字に高力コンコ、リキコ、マカリキ迄は聞きしが女にかゝる大力ある事を聞かず奇なるかな妙なるかな

俠たる彼淫行黨が大根畠に豆の萠がござると唄ひしは此地開闢の比の口調にして大根ばたけ豆藏を蒔と武玉川にも見へたり時なる哉今此畠を探して力もちといふ餅を得しは末代力者の鏡餅くもらぬ御代のしるしとて田に出來る餅米を畑へ植ても熟しつべく畑へ作る餅粟を田へ蒔ても實つべし此時に當つて木に餅の生るといふ譬もあまり旨過た事とも聞へず畠の中といへども田螺をも取得べく。赤貝をも

取つべし環を提て木場に趣き提籠をかたげて搏河岸を過るも木に據て魚を求るこもこぢつけてん孟軻は泰山を挾て北海を超るこ力業にも及ばぬ事錠の下りたたとへに引けば貫之は力をも入ずして天地を動かすこ敷島の道廣く温和に説かけし此國のきまりなるべし。されぱよみ哥の上には自然こ其姿のあらはるゝ物から。小町の哥を評してはつよからぬは女の哥なればなるべしこも書て三十一文字のこごくさにも嫋々たる風情は見ゆるを婦人としてかゝる力者に生れたるは何ぞや

私に按ずるに　扶桑武を專に尊む事鎌倉の右幕下。總追捕使の職に補せられしより。以來天下盡く武威に伏して今猶かくの如し治世に亂を忘ざるは　專　武道の本意なるに今時の息子株安樂に居て安樂に厭ぬ事をいかん。こゝに江都の自由自在なる事試に其一二を擧ば鴈鴨のあてがい賣冬瓜東瓜の切賣はまだな事にて短尺梶の葉の裁賣あれば鳶凧の請合賣有鯨うなりのふりうりあれば鐘の出來合有風鈴そば切夜發そば田樂鵬燒。やき肴一ぷく一錢の荷ひ賣結納の突かけ買葬式の損料貸切ぬきの地紙には古骨を世に出し。張ぬきの似面はむだ骨こも聞へず。能かれあしかれ捨るものなく何でもかでも十九文こ何闇からぬお江戶の繁昌イヨ秀鶴有がたいとめつた。むせうに有がたがるかと思へばかゝる御代に生れ出しを有がたいこは。思はず夏は晝寐して居る座敷迄屋根船が着かぬこの小言を云出し。冬は巨燵の前へ芝居があるいて來ればよいこの我儘。只いきな事をのみ尊み欣々通々として鮫鞘のお太刀は煙管より輕く嚢の帋入は七ッ道具を兼て重し弓馬合戰たしなむ事は武士の道。めづらしからずと今川

狀の眞中を一寸ト斗り切抜て己か行ひとし。只新らしひ事好み象牙の撥の胝は手綱の胝より高く弓手の爪の糸道は韘の弦道より深し役者の身振を學ずんばいかんぞ奢の腹をへらさんと。怠懈放侈の心より親仁の尻は祖父様より重く息子又爺様より弱し只通を以義とし。見へを以勇とす弓矢神かゝるのら者の多きを歎給ひ武士は天下の神物なすべからく靜謐る事を掌べしそれに何ぞ今の若さに武藝をも語止て天の岩倉に居つゞけ！伊豆の千別に千話みの手跡さへ拙く遣り手若い者への祝義は紙拂に掃ひくさりちくらの置藏にひどい工面をしてにげ耳にもろ／＼の異見を聞て心に此頃の不孝を思はずこゝに於て八百万の神たち神議にはかり給ひ中にも大力持尊ともよが體にやどり給ひ世上のなまけ男に見せしめ給ひて勇氣に引入給ふ歟何にもせよともよが力量ハテいぶかしやナァ

傳曰登毛與越の後州高田城邊の農夫の女之父が收るの田六十畆有（六十畝は大畝之千八百歩をいふ）家極て貧し今年黄金十片の爲に六畈の田を失ふに及ぶ晨昏歎息す登毛與父が悲歎を見るに忍ず隣家の主を憑で我身を十片金に伐て二月十日東都の蘿蔔畠に至り柳家某が牛物となり六年俸仕の約をなせり一日登毛與四斗酒一樽を酒局に納るに一毬を捧るか如く微歌して常のとし衆皆驚て初て力有ことを知ぬ倘試に其力あげて量べからす是に於て主人五年の給仕を免し期年にして故郷に歸さしめんと約し且其力を千万人に見せしめんことを求む登毛與期にして歸郷するの歡に絕ず辱を千万人に忍んで遂に此業を爲す其孝かる事見つべし誰か是を憐ざるべけんや

力婦傳　終

跋

先に風來先生はなさき男のために放屁論を戲述して其屁海内に響き其文は淀の川屁に水車の廻るか如し書林は錢を積上て階子屁の尊きを知る此屁の臭味を忘乗て又こもよが事を著せよこ我門人渭滄浪を責む彼は屁の可笑物をこらへて天下の才子に握らせ是は力業の可笑からぬものを以て井の内の蛙に物眞似せよこは屁ひり儒者にもあらばこそ俳の力もない者にさりこは〱こ云ながら其後に書して書肆浮瀧軒に與ふ

ナント榮良軒朶老

飛花落葉序

春の朝中の町にちる花を見て山屋豆腐の雪かさうたがひ秋の夕正燈寺の落葉をわけて淺茅が原の露をあはれむこゝにごこのか風來山人一文紙鳶の糸きれしよりかきおかれたる狂言綺語讃佛ならぬ六部集などすでに書林の櫻木ににほひて茶屋にこさはる紙花のごさしたゞ相對の紙花は風前の塵こひさしく根なし草の根に歸らず廊下座敷の箒にはかれて終に砂利場のすきがへしこならむ事をかなしみて千早ふるかみ屑をくれ竹のよくひろひあつめ近からんものは目に見なんし遠からんものは音にきく耳搔寮の腰張の張交こはなしぬ

てんつる天明みすじの糸の長き春の日

四方山人

飛花落葉序

風來先生のかひやりたる戯れのくさ〴〵多かる中にありとは見へてさだかならず散もてゆきしを四方やま人のよもに求めいそのかみ古ふんでのはゝきゞにかきあつめて飛花落葉となづく其文は飛んだことの華やかにして落の來ることの葉なれば見る人無常を觀ぜすして只無性に感ず遙に察す風來の面目何ものかこれに過んもとより觀と感と音相混じてお慮がいおかんたいのカン則かんのんさんのカンなれば佛におごけの相通あり髮に本田の大通あり牛込にはへぬきの圓通ありてかれたるいたの櫻木に花咲かせよしてくれ竹のふしみやをして微笑せしむそれは禪錄これは善六所は下谷池のはた黃泉の客の讃岐圓座に換しはちすの糸口の尻も結ばぬ序幕の口上飛花落葉のおことはり左樣にと云てやみぬ

天明卯のむ月はしめ

喜三二識す

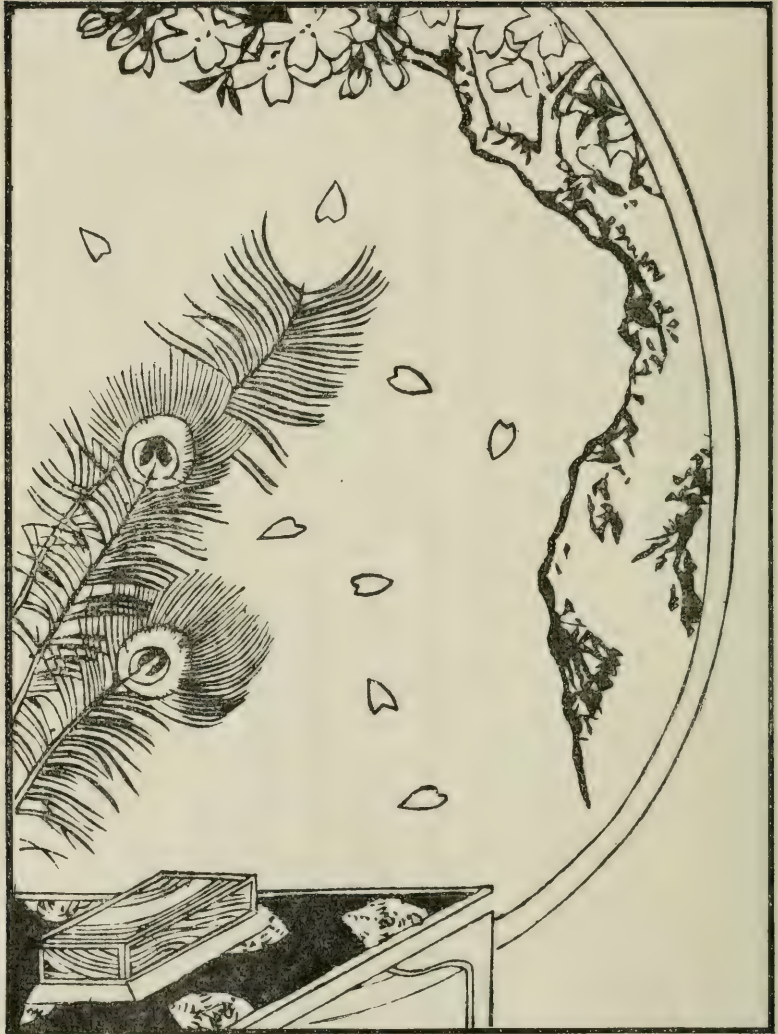
序

四方山人こゝに故人何かしが遺草を集て專世上に售つけんとすされば現金玩宣が杖にぶらつく風來先生百家にわたりし百の口はきなかもぬけめのない人にて波の文章たくみなるや眞鍮錢の左氏司馬子長も恐をなして三舍を避べしげにや先生一盃機嫌の咳唾は玉の盃となりそこで肴は千金の裘は一狐の洗鯉なりそのいり酒に酢の過たる二三兄弟ひざくみにておいらも一口ゆかうかとあんとさつ口さし出すにぞ

あけら菅江題

序

悉是吾子は釋迦の世話やき教而不倦は孔子の世話やき拍子木をうつ神會の世話やき耳に數珠ある後生の世話やき口を酢くするおきな腰をたゝく姥大小のたがいあれども終に肝煎の名をのがれず風來子きたさのさぬきの志度浦よりめつほうこはいの玉をもち來り匱におさめてかくしたりあらめや〱大根の切ぼしとひとしく吝嗇家の惣菜となりて漸百夂三文の價をまつ其紙袋のうらを見れば憤激と自棄ないまぜの文章なり風來子もまた吾黨一人の世話燒なりしを今は此土の世話に厭て無何有の鄕の講頭とやなられけんその書捨もなつかしとて四方山人の世話によて此小册とはなりけらし

へづゝ東作書

飛花落葉

江戸男色細見序

餅好酒中の趣をしらず上戸は又羊羹の旨きを憎む寒暑晝夜はかはる〳〵時をなし春の花秋の紅葉何れをか捨いづれをかとらん男色女色の異なるも亦しからん歟吉原に細見あれば堺町木挽町には四季折々の番附有て世の人普くありがたがれども恨らくは此道の盛なる事をしらざる愚痴無智の凡夫もあらんかと贔負の腕をさすりつゝみづから有頂天に登り夢中に氣を採てところ斑の譫言をそこはかとなく書付れば馴染の名に至てその顔ちら〳〵として目のあたりに出たるはア、ラ不思議や生靈にあらずんば是親玉のかたまりならんヤイ餅好の衆生どもみだりに是を笑ふことなかれナント一番誤てその粕を食ふに至らば漸にして酒中の趣をしらんきのえ申葉月の比水虎散人惡寒發熱中に書す

はこいり
はみがき　嗽石香　はなしろくし
口中あしき
匂ひをさる

二十袋分入壹箱代七十二文
つめかへ四十八文

口上

トウザイ〳〵抑私住所之儀八方は八ッ棟作り四方に四面の藏を建んと存立たる甲斐もなく段々の不仕

合商の損相つゞき澁團扇にあふぎたてられ跡へも先へも參りがたし然所去御方より何ぞ元手のいらぬ商賣おもひ付くやうにと御引立被下候はみがきの儀今時の皆樣は能御存の上なればかくすは野夫の至く其穴を委く尋奉れば防州砂ゝにほひを入人々のおもひ付にて名を替るばかりにて元來下直の品にて御座候へ共畢竟袋を擠候の板行をすり候のあのゝものゝにて手間代に引ケ候依之此度箱入に仕世上の袋入の目方二十袋分一箱に入御つかひ勝手よろしく袋が落ちり楊枝がよごれると申やうなへちまな事の無之樣仕かさでせしめる積にて少ばかり利を取下直に差上申候尤藥方の儀私は文盲怠才にてなんにも不存候へども是も去御方より御差圖にて第一に齒をしろくし口中をさはやかにしあしき臭をさり熱をさまし其外しゆ〳〵さつた富士の山ほど功能有之由の藥方御傳へ被下候應かきかぬかのほど私は夢中にて一向存不申候へ共高が齒をみがく肝心にて其外の功能はきかずとも害にもならずまた傳へられた其人も丸で馬鹿でもなく候へばよもや惡しくはあるまいと存敎の通藥種をしらみ隨分念入調合仕ありやうは錢がほしさのまゝ早々賣出申候御つかひ被遊候て萬一不宜候はゝだいなし御打やり被遊候ても高のしれたる御損私方は塵つもつて山とやらにて大に爲に相成候一度切にて御求不被下とても御恨可申上樣は無御座候若又御意に入スハ能はと御評判被遊被下候へば皆樣御贔負御取立にて段々繁昌仕表店罷出金看板を輝かせ今の難儀を昔語と御引立のほど隅からすみまでつらりつと奉希上候其爲の御斷左樣にクハチ〱〱〱〱

てつほう丁うら店の住人
川合惣助元無

本白銀丁四丁目南かは是も同くうら店にて

賣弘所　ゑびすや兵助

くはんおんのむかふろじ口に安かんばんあり

出店は勿論無御座候せり賣等一切出し不申候折〳〵私自身出申候

丑霜月　日

長枕褥合戰後序

孝弟忠信を口に稱し身に行ふ君子有とも當世是を號して野夫といひ武を知り國家を守る者を人嘲りて新吾左といふ又此議をまぬかれんと思ふたわけはぬしと呼びわつちとさなへ顏は白きをいとはず脇指は細きをいとはず今の浮世に交らんもの此境を志らずんばあるべからずと案じの鋼鐵棟へまはりまら坊が弟子と成て斯べら坊とは成けりえかれども又かゝる中にもおのづから孝弟忠信の意備はれるは我筆力の妙と若目玉の明たる人ありて其妙を知るに至らばこいつ咄せる奴なるべし或は志らずして譏るもの有とも我〻へちまの皮とも思はず

申のはつ春　　悟道軒書

道行乱の妹脊筋

太夫 爪本加久太夫直傳

戀すてふわが名はまだき立出る襟の縫目やはだ着のうらなれし故郷をふり捨て何國をあてとさだめなくおちて行身は人のみか乱の身にも戀のふち深き妹脊の二疋づれ生れ付たる數々のあし手まどひのはかどらぬ大椎峠天柱の原風門が谷うちわたりいとかう〳〵たるけんぺきの峨々たる峯をよそに見て脊筋海道とぼ〳〵とたどり出るぞうざ〳〵し見上ればはるかのみねに生茂る木々の梢や烏羽玉の夜晝わかぬ所にも頭えらみはすむとかや世上の人のわる口に花見乱と浮名立身のたのしみもいつしかにきのふはけふの瀨とかはるあすやさつてやもへ出るくさのにそよぐ風さへももしや知死期のつかひかと世を忍ぶ身の一ト筋に千手の御手につく〳〵と杖とたのみし七九の里四くはくはんもんを打越て烏のそらねや帶の關十四十六初戀に思ひみだれし物心血汐の酒のえひまぎれ縫めの糸のたまさかにほころびそめしころび寐のそのむつ言にいひかはし取かはしたる誓紙のからすかはひ男とだきえめてたとへ野の末山のおく虎ふす野邊の足の毛や爪の地ごくへ落るともはなれはせぬといはえやんしたその言の葉がえみ付てわたしが脊の入ぼくろ苦勞する身のうき旅もみんなわしからおこつた事こらへてやいのとよりそへば男もともに打えほれ親のゆるさぬ不義いたづら襟の住居も叶はねばかく落ぶれし二人が中

心はやたけにはやれども走らふにも飛ふにものみならぬ身のかなしさこそやゝ涙にくれけるがハア、まよふたり誤たり實數ならぬ此身にも先祖の譽レに王猛が傍若無人と名を傳へ不思議を殘す節穴に根をむくひしためしもあり又水中にうかんでは磁石にかはるの德あればゆびにひねられ灰吹の底のもくずときえづむとも尸に譽有明のつきぬ妹脊の旅づかれいざや急がん夜明なば東えらみと人やとがめん兎にかくに身の用心の腰眼や雲のかけはし白たへの加賀越中の國境ふんどし谷のかたほとり肛門寺とて名にしおふ大師の古跡ふし拜み蟻のとわたり打過て金だの宿にぞ三重着にけり

神靈矢口渡跋

榨ぬき澁柿を笑て曰汝我身の澁きを耻ず澁柿答て曰汝も澁を拔ずんば澁く我も澁をぬかば甘からんと善惡は　本不二なり一日吉田冠子來りて淨瑠璃の作を請こととえきり也されば盲は蛇に畏ず小戸はぼた餅に逃ずと不躾無上の筆任せ只初段の切三段目の口のみ予が筆にあらず其餘は闇雲に綴合せども今をはじめの作者の巣立えかも初日の急なれば引書を閲に遑あらず挍合も足ざれば其誤多からん澁のぬけざる澁柿の澁き所は容したまへ寅の初春中旬作者の甲拆福内鬼外まじめに成て誌す

嫩榮葉相生源氏後序

古語に曰寸も長きことあり尺も短きことありとされば木綿を買者は價少ふして其丈長しといへども長しとせず錦を買ふものは價多して其丈短しといへどもみじかしとせず予が戯に作れる嫩菜相生源氏九段續なるを東都の芝居の習なれば末の三幕をのこし置評判よだいにて猶追々に出さんと先六段目まで取組けるに當正月二日より如月下旬の今に至るまで引續ての大入棧敷切落はいふもさらなり二の手をのけて見物雲の如く集り舞臺の後人の山を築く入るにあまへ勝に乘て末三段は趣向のみにていまだ筆をさへ採らずよかるを淨瑠璃このむ人々よきりに正本を望むと本屋が錢をほしがるとにうがにうに止ことを得ず物足らぬ正本を出しぬ手織木綿の地太にしてよかも丈の足らざるをもひいきの目には蜀江の錦とも見違て跡の出るを待玉へかし

安永二年癸巳二月三十日

福内鬼外誌

りやうごく橋の邊
新見勢
ひらき
仕候

きよみづもち

口上

世上の下戸様がたへ申上候そも　我朝の風俗にて目出たき事にもちひの鏡子もち金もち屋敷もち道具

に長もち魚に石もち廓に座もち牽頭もち家持は哥に名高く惟茂武勇かくれなしかゝるめでたき餅ゆへに此度おもひつきたての器物もさつぱり清水餅味は勿論よひ〳〵と御贔負御評判の御取もちにて私身代もち直しよろしき氣もち心もち嗅もやきもち打忘れ尻もちついて嬉しがるやう重箱のすみから隅まで木に餅のなる御評判奉願候以上

未四月　ゑかうゐんまへ
音羽屋多吉

清水餅口上書第二番

風流餅酒論

私餅店の義町中御下戸様方御贔負御取立を以段々繁昌仕ありがたく奉存候然る處此あいだ底貫鱶右衛門様と申生酔様御出なされ巻舌にて御意被成まするはヤイ亭主清水といへば水に縁ある酒をこそ賣べけれ何ぞや野夫な餅店を出し下戸めらをうまがらせ錢をせしめんとの謀言語道斷の次第なり汝が口上書を見るに皆身勝手のせりふなり我上戸の眼より見れば餅ほど穢らはしき物はなし先痰持は胸を苦しめ疝氣持はきん玉にもてあつかひ女郎の末は積持となりかげまの果は痔持となる子持は女の色氣をさましやきもちはあいそをつかす不器量のあくたいを棚から落した牡丹もちといひ蒲團ばかりの獨寐を

かしは餅と異名せりとりもちは殺生戒を破りむぐらもちは植木をそこなふ高望王は下總に朽はて持氏は鎌倉に亡ふ秩父におほさき持あり四國に犬神持あり賤き事を荷持歩行持と言無首尾な事を手もち無沙汰といふ身持氣質は附合をえらず餅喰は相手がいやがる鑓持は鑓を遣はず金持は金をつかはず辨當持先へ喰ずかゝる不埒の餅ゆへに下戸の建たる藏はなし早く相止メ然るべしと青筋はつてぞ申ける

右の返答に上戸を一まくりにやりこめ餅の利運に相成候文談跡より出し可奉入御覽候已上

矢口後日　荒御靈新田神德口上

軍は勢の多少によらず芝居は水物とは昔から負をしみに能申事なれども終ぞこれまで芋がらて足ついたためしもなければ止るに相談きはまりしを去方樣の御異見に去とはお江戸の廣いとをえらないか二丁町を聲色をつかふて通り吉野丸でさわげばにたりでも諷ふ主水の表で駄菓子を賣越後屋の門を切レ賣が通る晝三から夜鷹まで夫相應に賣レるといふがお江戸の廣い證據なり裸で物は落さず女角力で睾丸をつめたためしなしと闇雲にすゝめられ運は天にありぼた餅は棚にあり下りは隣にあり此方には何ンにもなけれども其代金の出し人もなければ請子をしてはる樣な心持にてはたいた所が元直なり入らぬ所が平氣〱と申もやつぱりへらず口やねの破た一ッ德に寐ながら月を見るといふて味噌を上る理屈にてろくな事ではなけれども只御見物樣の御ひいきを下りの太夫三絃とも守り神とも金ッ主とも是

斗が賴にて心一盃の思ひ付福内鬼外先生の新淨るりを出せども衣裳もなければ道具もなし江戸のお氣ではお目まだるし大山御參詣の道すがら旅芝居を見るお心にて惡い所が面白い不出來な所もこいつは能やりそこなふてもこいつはよいいけない所もけちな所もこいつはよい〳〵と委細構はずお譽なされて御見物の程奉希上候

同口上後日

先達而奉申上候通貳文四文のはした芝居誠ニ海老雜魚の魚まじり一寸法師の脊くらべさりとてはおつかましいねりま大根で太いの根と來た万八芝居と御呵も可被下所判官贔負曾我贔負弱ひ者を見捨ぬは實に賴母しきお江戸の御氣象有がたいのてつぺんにて屋根の穴から雨の漏をも御いとひなく御出被下候御贔負御憐愍を笠に戴きどふやらかふやら芝居の樣な物に成懸り偏に御蔭御取立故と難有仕合奉存候何をがな御禮御慰に相成候樣にと心はやたけにはやれどもない袖は振られず瓢箪から駒も出ねば金主から金も出ず提灯で餅つく樣に氣ばかりあせつて埒明ず鐙ふんばり身代かぎりゐいやつとの思ひ付にて來ル廿七日ゟ七ッ目の泥仕合八ッ目九ッ目大切迄追〻出し奉入御覽候へ共是以道具衣裳そこらだらけが不都合だらけ御目まだるきは勿論なれども惡ふても能負ても勝じやと御町中樣御贔負の御蔭を以て此度、四幕目濫鬧扇の氏子をはなれリン〳〵リン〳〵に引かへてゐいとう〳〵と御見物幾重にも奉願

上候

三月日　　ふきや丁　結　城　座

荒御靈新田神德後序

近松老翁世を戯場に辟て數の淨瑠璃を作けるに筑後播磨の名人有ッて普く世上に行渡ル勸善懲惡世を教るの一助たる事是近松氏の本心なり中頃千前軒文耕堂が類も亦近松氏の意をうけて作れる所正しければ此道甚盛なりしがいつの頃よりか衰て今時の作者は固そこ所ではなく文法をゑらず手爾於葉を辨へず嘲を遠近に傳へ耻を千歳に殘す讀ぬ同士書ぬ同士金聾雷をこはがらず盲蛇物におぢずされども五年か三年に一度犬も步行ば棒に逢ふ闇夜の鐵砲まぐれ當リはくらんの藥ハはくらん病が買に來る遲牛も淀早牛も淀それも作者是も作者鳫が飛ば飛で見たがる石龜仲間の玄だんだ組すつへらぽんの鼈作者泥水に足を踏込首をすつこめ敬白

亥のとし卯月上旬　　福内鬼外書

木に餅の生辨

つれ／＼なるまゝに日くらし硯に向ひて心にうつり行よしなし事をそこはかとなくかき付るといへば

向上らしう聞ゆれど借金の斷手紙や質の利上の書物にほつと精をつかせし所へ門人無名子なる者來て曰けふ藥を葛西の邊に採る至ッて珍らかなる事あり木に餅のなりたるとて人々市の如くいたりつどひ猶此說街に滿つ願くは先生の說を聞んと一ト枝を携來れり予答て曰天地の廣きかゝる異物も有まじき事にしもあらず然れども是は餅といへる名ばかりにて食ふべきにあらざれば眞の餅といふべからず又我家別に木になりたる餅ありて食すべきものなり門人驚て曰先生既にかゝる異物あらば幸に我に見ん事を許せとねもころに是を乞ふよつて箱を開取出せば門人笑て曰これ初春をとぶく餅花にあらずや爰に於て予是に敎て曰世人の愚昧なる今に始ぬ事なり試に是を論ぜん夫くのぎ類數種あり讃岐にてくにぎと云ならかしわあり一にかしわといふくのぎあり又大ならといふ又一種あへくのぎあり櫟あり柞あり小ならあり皆同類異種にして漢名實の大なる栩といひ實を橡實といふ實小なる方を槲といふ小ならは槲中の小きものにして詩經の樸樕鎭江府志の孛落葉是之實おの／＼苞ありてその半を包ム花ハ栗の花に似て短し又此花實の外に毬ありて形松かさの小サきがごとく榛の實のぶの實のごとし是亦別に一物なり其名をならがうといふ今餅といへるはならがうの初生木の勢惡くして一ッ處にかたまりたる物なり是畢竟は木の病なり吉にあらず凶にあらず餅にあらず實にあらず又今年のみ有にはあらず年毎にあれども常は氣を付ケざれば只にやむのみ今年はからずも俗人の目にふれしより一ッ犬形に吠て百犬聲に吠己か愚を賣ることはえらず木に餅のなりたりといふもの少からず只是のみにしもあらず國の吉事としてこれ

を祝すその祝する下心は貪欲よりおこれり佛を賴ンで極樂へ行たがるも先の世の榮花身には金箔をぬりながら蓮花の腰かけに半座を分て嚊と戲をなし耳には二十五菩薩の音樂に豐後ぶしの艶なるを聞口には百味の飮食金翅鳥の燒鳥天の邪鬼の糟漬等を食んが爲なり木の餅を祝するも國家の安全を祈にてはなく國の吉事といへば我身の上にふりかゝる仕合もあらんかと思ふよりしるもしらぬも祝して曰木に餅のなりたるは古今無双の吉事〳〵と夫天吉凶をしらしむるになんぞ小兒の戲の如きを以て是をしめさんや或人曰しかれども又其理もなきにはあらず萬物陰陽に造化す陰陽不順なればよのつねならぬ異物生ず異物の生ずるは吉にあらず凶なり後醍醐帝の御宇龍馬を献ぜしを中納言藤房の卿評せしも理に當りたるにあらずや予謂是も亦陰陽の大なる事をしらざるが故なり造化のかぎりなき億萬を以てはかるべからず豈と〳〵く全き事あらんや五瓣の花六瓣に咲キ茄子の巾着形なる釋迦如來の黃疸色なる福祿壽の天窓の長き鎭西八郎爲朝が弓手の腕の長きも皆同出來そこないなり六瓣の花は必其實双仁ありて人を殺す二子茄子を孕婦食へば二子を產むといふも俗說なり又贔負の方から押て理を付る時は釋尊の黃疸は黃金の肌と號すいかに佛なればとて體が金ならば風呂に入り巨燵にあたらば五躰なま金と成て病者と成べし又指を切て兩替にもやられねば正眞の金の持ぐさらしなり殊更夜道の獨旅盜人の用心惡かるべければ損有て益なし故に我は佛は生れぞこないの病イ者と見る事理なきにあらず又福祿壽の天窓が長きとて南極星の化身といへるも見て來たものなければ請合がたし爲朝が腕の長きは弓取

と盜人には重寶なれどもつまる處は出來そこないなり此類の出來そこなひ今も世に多し生れ付のかたわもの葉替りの草木碁盤娘熊女馬に角あるの類みな出來そこないにしてならこうの餅に似たるも同じ造化の細工屑なり何ぞかゝる小物を以て國の禍福を論ぜんや（此間闕）又吉凶をしらしむるならば天地といへる名人の作者に春夏秋冬といへる上手の細工人の手が揃て居ればまだ外に尤らしき趣向も有べし是衆人のまどへる事言を待ずして明なり去年の春にてか有けん江戸西が原といへる所に木に餅なりたりとて群集せしもならの木に付たる瘤のごときものにて今年の物とは小異なり去冬家内に餅のなりたる木は柳なり此外に餅のなる木の有やと問ば只稻と答んのみ門人笑て去る

寶暦十一辛巳年彌生上の九日

麥飯報條

高かろうよかろう安かろうわるかろうとはやぼの時代のたとへにて今ときは御合點なされずひつぱりみせで二の膳にすはり安札で棧敷へ上る賣人のやすり買人のかすりやすりかすりと云事をしらねば今此の商賣はならぬとさる御方の御說法聞とそのまゝ早合點かしこまり子のとろゝ汁よりむぎめしの思ひ付南鐐一片六進か三進二一天作の御壹人前つもり上て見ればサアやすい／＼伴頭殿のそろばんちがひ歟ぬすみ物歟ひけ物歟但し又狐をつかひて馬糞でも喰はせはせぬかと御うたがひの御方もあらふが

そこがかのやすりとかすりかひての仕合うりての悦すたつた所が南鐐一片もうけた所が五十か七十みぢんつもれば山をなし頭巾と見せてほうかぶりいかな御客も足かろ〳〵と御出被成てめしを出せコリヤ酒をだせヨウイ得意にならゑやんせよ

追加

吉原細見天の浮橋序

天地開け始てより天の浮橋のもとにて契りをこめ給ふは夜發の濫觴ならんかとある物ゑりに問ひければいや〳〵それは三ツ蒲團をゑらぬ神代の物語お江戸の女郎に長崎の衣裳をきせて京の揚屋で元祿年中の譬今のお江戸の吉原は梅が香を櫻にうつし柳につぎほしたるごとくそろひにそろひし繁華のてつぺんそれがうそなら來て見給へ

四方山人誌

右の一篇は此書編集の折から四方にもとめ侍りしか得がたくてやみにしを北里にすめる魚躍主市駿の記憶して口づから傳へしまゝ此書の末にくはへしるしぬ

跋

筥根から此方に何やらのなきこのかた狂文戯作の弘まりしは此風來子に止たり首創は功をなしがたく因循の業は致しよく〱近頃は其糟を食もの多く作者で目をつく樣なれども光る物は飛で天月となり黑いものは泳て水虎となる何耶今の通眼世界可止可止〱かの志度浦吹出す風來山人筆をとればよく世上の毛の穴を搜し舌を出せば阿蘭陀南京までもたゞ一嘗筆の花は梅さくら舌の長さは三千丈その風の吹來るたびに隨筆したる穴さがしと太平樂の短文あり四方山人その天德寺とならん事を惜み集成て飛花落葉と題すこれむかしは羅漢の觀想たれども今は書肆の巾着の工面となる意味は播州三箇月味噌讀者覺へず舌を鳴さんさあ〱沽之哉沽之哉買たらばよかんべい筥根から先にはないぞや

天明三年

八百里野

天放山人

跋

易曰　雷は來也能百里を驚し聲あれとも形はなしときのふ聞風來山人飛んだ噂も七十五日今は昔と成田屋の人の噂や我身の上この人にして斯疾六道の辻駕にのり極樂淨土の居つゞけとは御釋迦も御存あるまいと留守の閑庭を覗見れば飛花落葉のちり塚のちり多くの人の目にふれば見ぬ世の友ともなれかしとさる御方の思ひ付わがむだ口も跋の心やうやくこゝに强作たり時に天も明るき三のとし兎の耳の長き春の日虛言八百里の野の片端逃水の流にのぞみて三平二滿藏醫になつて誌

跋

佛は衆生の爲に花を降し勇士は戰場に火花を散す大盡は末社の爲に紙花を飛し折介は夜鷹の爲に鼻を落す是等は落ても散しても懸替も有ルべけれど此花の外に此花なきはいはずと皆樣御存の作者の巨擘風來山人盛を見する程もなく遮陽阪の岐穴から賊風の心なく吹散したる花は根に復花となせし事惜むへき事にあらずや此比嘗て四方山人彼風來の書置れし劇本の後序新樣物の報條なンど敗紙に紛雜込で還魂紙とならん事をおしみ編て一部の小册となし櫻木に花を開かしむる事とはなりぬ飛花落葉と標題せるは春は櫻の花の雨秋は落葉の村時雨徒然を慰さむる端香のつよい茶飲ばなしのはなしの主兒にも換給はゞ故人の鼻を高くして亡名に花を咲する心で名をつけた物で御座るてやと四方山人のはなしにいはれたりしを鼻紙に書留て此書の跋とはなし侍る

天明三年
むつきの比

風來山人遺弟
下界隱士天竺老人述

細見嗚呼御江戸序

女衒女を見るに法あり一に目二に鼻すじ三に口四にはへぎは膚は凝る脂のごとし歯は瓠犀のごとし家々の風好々の顔尻の見やう親指の口傳刀豆臭橘の秘術ありてこれを撰むこと等閑ならねど牙あるものは角なく柳の翠なるは華なく智あるは醜く美しきに馬鹿あり静なるははりなく賑なればきやんなり顔と心と風俗と三拍子揃ふもの中座となり立者と呼る人の中に人なく女郎の中に女郎まれなり貴かな得がたきかな或は骨大毛むくじやれ。猪首獅子鼻棚尻虫喰栗のつゝくるみも。引け四ッの前後に至れば餘つて捨るは一人もなくひろいところかァ、お江戸なり

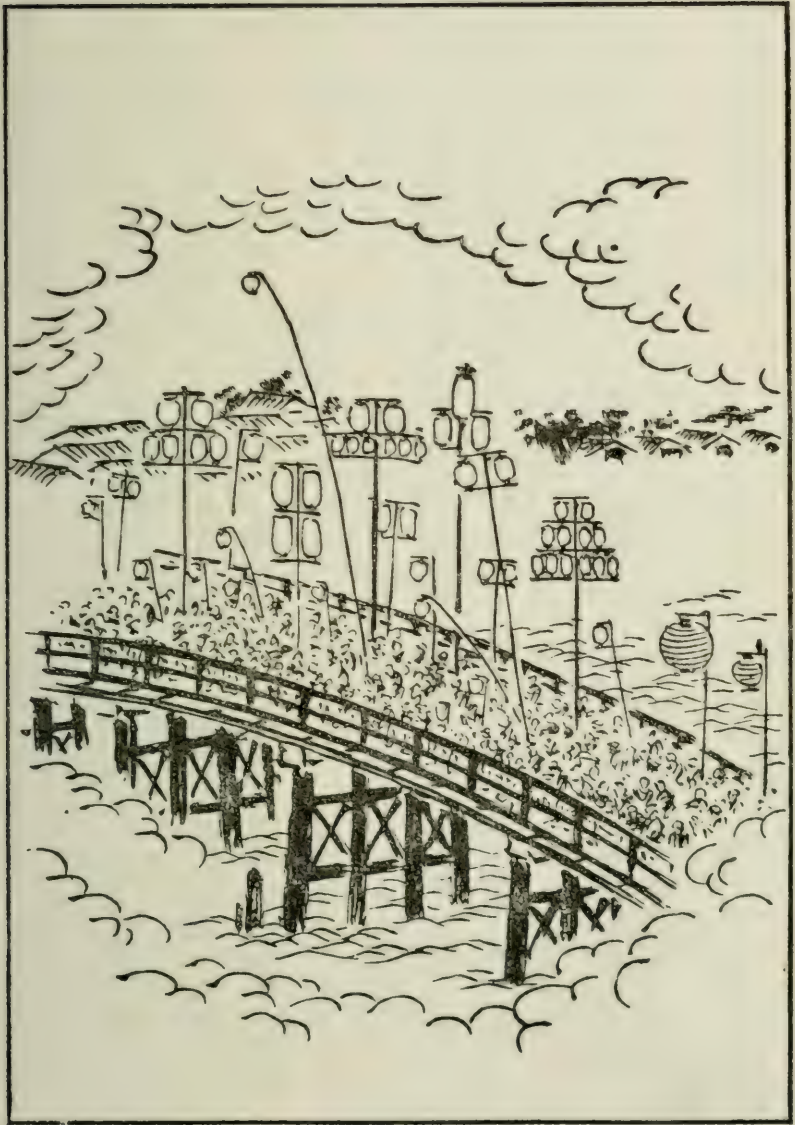
午のはつはる

福内鬼外戯作

序

抑この風來假名文選といつぱ、錠前鋏物なほしの秀句と聞ゆれども其樣な茶なる事ではなし。是我先ン師の筆進にして。狂文戲作を書人には白氏の文集紫淸が艸紙。夫にも勝る至寶なり。夫先生の文たるや活々たる事龍の如く。彼唐山の文選莞莚を。はるか足下に掛川莞莚。詞に咲する花莞莚は。堅いやうにて和らかく、浮世莞莚の世話にわたる。いふに云れぬ味ひ事あたかも。天にあらば比翼莞莚の。飛だはづんだ筆拍子。又地にあらば連理の枝の寢莞莚を掘ても惡落に類せず、かへす〴〵も世上の戲作者草履をぬいで下座莞莚に手をつかね。此書を拜して筆を探と。我ものよしの先生自慢。書して序文の明地をふさぐ。

于時天明八の歲霜月廿日。他所へ出懸の追とり筆。出たら目に述之

万　象　亭

佛法奇瑞 菩提樹之辨自序

舊板其砌大に行れ所々磨滅に及ひ見安からねばヶ程の文章埋木となるを悲しみこのめる人の望に任せ再刻なしてこゝに加ふ

或人南無阿彌陀佛の六字を註釋して曰。それ南無とは南無と書たる文字にて死ンで仕舞ば皆身無後生を願へといふ心。阿彌陀とは世の人を救はせ玉ふ。網だ程に隨分頼めとの御誓願。佛とは念佛を高聲に稱へる名聞之口の內にてぶつ／＼と申せよとの事なりとしかつべらしき傍から。如來とは扨如何是には殆こまりながら。いひ掛り引れもせず。嵯峨の釋迦でも善光寺でも開帳に出る事は衆生濟度は勿論なれども。二ツには參詣の散錢をによらう故そこで如來と申といへば一座どつと笑ひけるを此書の序とはなしけらし

戊八月

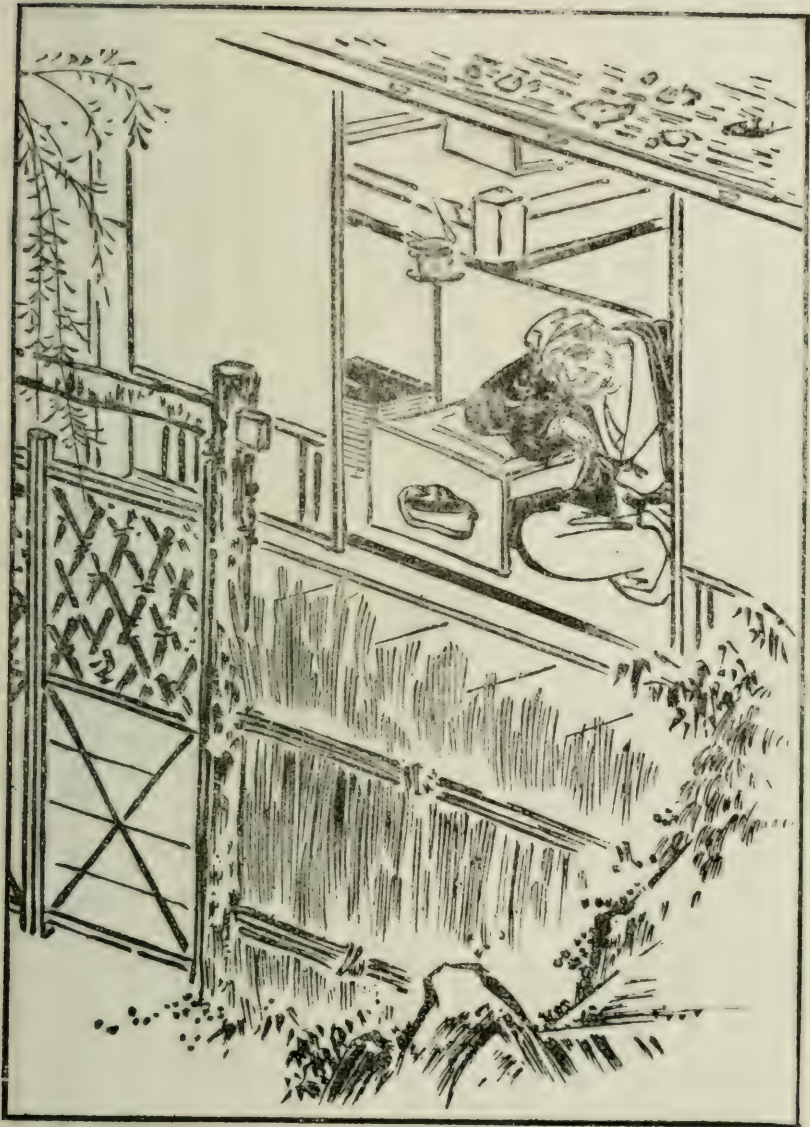
風來山人誌

菩提樹之辨

今年六月朔日より本所回向院におゐて信州善光寺如來の出開帳參詣群集。前代未聞の事は人々の知る處なれは今更いふもくだ〳〵し。程なく日延の日限もみちけるにや閏七月十七日の曉限りに閉帳有ける。然るに十七日の日中より誰いひ出すとなく善光寺如來の奇瑞によつて菩提樹を降し玉ふと我先と是を拾ふ。三十年前開帳の時も降し玉ふ又今年もふらし玉ふは。誠に世は澆季に及ぶといへども佛法の奇瑞有がたしと。諸人益〻渴仰す。追々高貴の御方より予に是を鑑定せよとて見せ玉ふ事七八ヶ處に及べり予皆眞の菩提樹なりと答ける。或日門人何某來掛て問て曰。先生彼品を以て眞の菩提樹と答へ給ふ事甚以不稽の言なり夫菩提樹の事は。翻釋名義集に佛其下に生し成等正覺し玉ふ因て是を菩提樹といふと其形狀濳確類書に出たり又元亨釋書に千光國師榮西入宋の時。菩提樹の種を傳へて筑前國香椎の宮の側に植しより京都泉涌寺六角堂。同寺町。又叡山西搭にありと貝原先生大和本艸に詳に出されたり。又筑後國鎭西本山善導寺中に昔か大木有東都にては東叡山の寺中に有て。先生固能しれる所ゝ。其實大豆粒より大にして念珠に作る物故に號て菩提樹と云今降處は麥粒のごとく何かしれぬ。木の實にて念珠に成べき物にも有ラず降た所が役にも立ず。降ぬ迚不自由にもなし拙著記を考るに粟を雨し麥をふらし石をふらし土をふらし灰をふらし毛をふらし血を雨し肉をふらし虫をふらし魚を

ふらし或は湯沸紅雪をふらすも皆譯の有事なれどつまる處なきにはしかず。若も佛の靈顯ならば虛空に花降音樂聞へ天津乙女の羽衣の曲にて諸人の心を慰るか同じく降らす物ならば錢金か。麥米なら下のくつろぎ如來の御蔭と難有く思ふべきに江戸中から近在掛て一萬兩餘もせしめて置てけふ閉帳の名殘とて降すものに事欠て役にも菩提樹のしかも贋物をふらすとはさりとはあたじけ如來〱。又熟案ずるに日本書記第十九ノ卷欽明天皇十三年冬十月百濟の聖明王釋迦佛の金銅の像一軀幡蓋經論等を献ず小墾田の家に安置す。國に疫氣行れて。治療する事あたはず物部ノ大連尾輿中臣連鎌子同じく奏して佛像を難波の堀江に流弃と。此説に據時は實の善光寺如來といふは釋迦如來なるべけれど夫は先差置て釋迦にもあれ彌陀にもあれ浪花の堀江へ。ぶち込れ鮒や鼈と相店の住居なりしこれを川柳點の前句附に善光も初手は水虎と思ふて居と。いへるごとく纔見付けて笈に入て處々方々負歩行たる佛といふは何にもせよ一軀にて觀音勢至のさたはなし是をも又川柳點に二菩薩は歩行しやいと本田いひとは後世三尊に作り直せる杜撰を笑ひたる句作〱扨又晝は善光。如來を負夜は。如來。善光を負給ふといふも難有ひ事の樣なれど去りとは聞へぬ仕方〱晝の內長の旅路重い佛を負歩行草臥て居る善光せめて夜はとつくりと足踏延して休てこそ。旅の勞も直るべけれ夜がな夜一夜金佛に負れては眠る事も成まひし寒ひ時には冷渡つて去とはこまつた物成べし扨又極樂海道の切手成迚御印文を戴かす若地獄極樂有物にしてからが一生涯佛を念じ善根を積でこそ極樂へも至るべけれ夫さへ上品上生より下品下生に至る

迄九品の淨土のわかち有て漫に極樂へは行れぬと聞しに壹分に壹〆賣時も壹〆五百賣時も相場に構はず百文で。極樂の切手の安賣世智辛ひ人間ども二百出して蹴轉を買ては。ちつとの間の樂しみなり。其半分の百だして億萬劫が其間百味の飮食振舞れ。天人を揚詰にして蓮の臺に店賃入らずの活計歡樂是程安いものはないと。我一と戴で只さへ善事は嫌にて惡作りたがる凡夫共御印文を。楯について額に極印がすわつたからはつがもねエどんな惡ひ事しても地獄へ落る氣遣なしと衆生の心を安堵させるは跡をかまはぬ肝煎が判賃取ふ斗にどこやらへ遣るべき宿なしを奉公にありつかせ主人の難義かけまくも忝くも如來とも。いはるゝ程の身を以て去とは不埒千萬々斯のごとく一ッとして取處もなき佛なるに先生も雷同して菩提樹なりと極る事。以ての外の不見識言語同斷の事々と。にがり切て申ける其時山人莞爾として笑て曰。子が詞一々理あるに似たりといへ共一槩の論々先日本紀にどう有ふが善光寺でも。阿彌陀といひ世間一統阿彌陀佛なりと。覺て居ら阿彌陀にて何の邪魔にもならぬ事。小刀細工の青表紙いらざる所へ骨折て法界悋氣岡燒餅。去とは無用な穿々。扨御印文といふ事もあさとい樣なる事なれ共佛とも法共辨へぬ人間の皮かぶつた猫また姥やきやん／＼わん／＼の類には仁義禮智は聞に合す百位なら極樂へ往ても見よふと。思ひ立が取も直さす仁の端佛家でいふ結縁にて。めくりに負て裸に成たり夜たか買ふて鼻を落す程。氣の毒にも思はぬ事々又晝は善光。如來を負夜は如來。善光を負玉ふとは陰德あれば陽報あり。善のむくひ著く負へば負るゝといふ比喩成べしこゝらをあしく心得る

と牛馬にむごく當る人は死で牛馬に成故に佛にむごくあたる人死て佛に成といふ間違も有物〻扨三國傳來の閻浮檀金は藏して置て新に三尊にせし譯は客の多い女郎の名代をだす。まづ其ごく引手あまたの御手の糸來る人多きも一かたならぬ閻浮檀金の名代に新造如來を出されたりそれもゑよんぼり只一人では卜見た所が淋しひ故歩行しやいの二菩薩は二人禿の心〻扨又閉帳の名殘狂言いかにも花降音樂聞へ東遊びの羽衣の曲が相應といふ事は。如來をして喰ふ身でしらぬ事はなけれ共五々の菩薩の管絃天人の舞といふも。やはり昔の通りなれば土佐の芝居見る樣で。甚古風な事故に慶子路考杜若が所作囃町の手合には寄ても付ずいはれぬ出來し立をして味噌付れば極樂の株仕舞と思ふ故。是もさらりと止しと見へたり。又錢金をふらしては此廣ひ江戸中へ五千兩や七千兩では。どこのはなへも行屆ず。出開帳も權みへごんにやくこ〻は一番錢入らずに輕く刎る仕方が有ふと如來も茶番をする氣に成て思ひ付れた菩提樹なれ共そふ〳〵は有合さねばゑゑれぬ木の實を取雜て。ちやらくらをやらかされたりトハゑらずして凡夫共めつた無上に有がたがれども聊か害にならず。若も腹へ入ル藥ならば辨じ樣も有べけれど天狗の髑髏同樣にて何の絲瓜の可愛そふに。落を取て居らる〻ものを我一人知た顔にけちを付るもおとなげなしと。菩提樹にして置〳〵是にも議論有やといへば。門人もあきれた顔にて詞もなく歸ければ。山人も閨に入てとろ〳〵とまどろみける然るに夜更人靜て後。表の戸をとん〳〵〳〵たゝくは秧鷄の聲にもあらず節季でなければ借金乞の氣遣もなく誰と答てぐはらりと明れば

思ひ掛なき善光寺如來金色の光を放近ふ〳〵と招せ玉ひ爰は一番善哉〳〵我はこれと言そふな處なれども。近年雜劇で不斷する故古ひ趣向と笑はれんが恥しさに。ゑら化と出掛たり其方最前菩提樹の辨茶にしたるいひまわし近比以て痛入。面目もなき次第〳〵。勿論我らが方便で山事をやらかして人の目をくらまそふとおもへば竹田の關棙出羽の手づま藥研堀の龜丈が工伎ぐらいは。やり兼もせまひけれども正法に奇特なし夫も開帳が不當りで難義にも及ならば又思案も有べけれ共流行過てこまつた位。何に不足のない仕合菩提樹をふらして入を取にも及ばず又重て出る時は三四十年も後の事今の人間はぐはらりと替れば跡の仕込にも迂遠し殊に降らせた菩提樹といふは其方もゑる通り正眞の物ではなく倭名。水木又俗に水草共いへる木の實を烏が好て喰ふ物にて彼水木の實の肉は烏の腹中でとごろけても中の核は其儘に糞に雜りて出たるが度〻の雨に能漂射てそこ爰に。落て居るを一人が見付て菩提樹が降たといへば百犬聲に吠る〳〵眞の菩提樹とは形狀も違。大きさもちがふ〳〵いかに衆生が文盲な迚如來ともいはる〻者が座頭に熱湯浴るやうに贋物をつかませふ筈はなけれど愚痴無智の凡夫どもおれを最負の引たほし却而恥をか〻せるなり成程一圖に祈るものは奇瑞も有筈の事なれど千人に百人も誠の信心で來るは少く衣裝自慢器量じまん見せに來る人。見に來る人納涼ながらの參詣やら負るが嫌ひの日參講中桃灯の伊達前後を爭ひ念佛の聲遠近に響く人そばへの朝參。隣のか〻をそ〻のかし門前の茶やで出合おれを出しに大それた事をして日比の思ひをはらしたも如來ゑの御蔭有がたひといわる

る時は身をそがるゝよりせつなけれど一々罰も當られず實に此度の菩提樹の事は臺座後光をぶちこわされさつかへべいの飴賣が手へ渡る德もあれおれは夢にも厶らぬ事なり都て世上の習ひにて何ぞ替つた事が有ば名高い人の名を立て　牛若が切た石じやの　辨慶が捻岩じやの片目の杜父魚武文蟹石　芋　石蛤臼の目切たも弘法大師さあられもない名を立らるゝおれも　善光寺の　如來さいふてや　佛仲間での立もの故此度の菩提樹の様に・　無い名を立らるゝも常不斷有事く扨又おれを安くして引ヶ四ッ迄見世ざらしの新造ッ子の様におもやるさふな成程天竺より渡ッたるには觀音勢至の脇立もなく閻浮檀金に違なければ無法の族奪ひ取ん事を　慮　て祕佛さして藏置く然ルをなま物ゑり共がィャ名代じやの前立のさ色々理窟をこねるは去さは若輩千万なり抑實の無量壽佛さ申奉るは在がごく無がごとく遠がごとく近がごく草木國土引くるめて皆如來の細工なれば廣大無邊いふはかりなし閻浮檀金も燒付も聊形容を標するばかり皆同し前立く人間の目から見れば金は尊く燒付は賤しい様に思へども佛の目より見る時は金も銀も銅も皆一圓の土にして佛の照らす光明く斯廣大に說時は本尊も念佛もいらず儒者の獨を愼神道者の正直斗て濟さふなものなれど譬ば弓の稽古する者すびき藁砧斗りで手前さへかたまれば的に掛るに及まじけれども我身を我心で試には其手前のかたまりしかかたまらざるか委ふ分ラぬ物故に的に掛て射て見れば今の矢は上だ下ださ的を目當に手前を直す本尊に向て念佛申惡念を去て善心に立かへるも彼的を射ル心にて閻浮檀金でも燒付でも目當斗の事なれば貪著はなき事なり只人々の力相應・

弓は強くも弱くもあれ的は金でも燒付でも一心不亂に願ふ時は風やんで埃なく浪靜て水清し惡念邪念の雲晴て硝子のどくすきとほれば心が卽火珠にて誠の如來うつらせ玉へば其時悟を開なりと。の玉ふ聲の耳へ入しは是も我鼾にて如來と見へしは有明の行燈幽にちらつきて夜はほの〴〵と明にけり

跋

去御方善光寺の縁起を聞玉ひ夜は如來善光を負玉ふといへる論して宣ふには閻浮檀金の尊像は小像なるよし善光が五尺の體を二寸八分にておひ玉ふとは甚以心得がたしと或人答へ申されしはそこが佛の通力にて一寸八分の尊像を五尺にも七尺にも忽變じ玉ふなりといへども合點し玉はず左程通力自在ならば尊像變じて負んより竹輿を雇ふが近道なるべし斯智惠のなき如來にて衆生濟度は覺束なしと或人又申けるは一應竹輿も借られしが善光路錢を持ざればなんぼ佛の通力でも柿の蔕では合點せず爾時如來の小言ニ曰嗚呼錢なき衆生は度しがたし

いぬの菊月

門人

無名子愼書

風來六々部集跋

千里をはしる馬有といへども。これを知る伯樂なければ四ッ谷街道尿取馬と共に引れ人を知識なければ。ともに遣つて見よふのはなしも出來ずなんでも。壹番やつけべいとやぐら骨を粉にして命を縮める程のおもひをしても殘るものは借金ソコデマヽヨ今年はてふご庚申　何事も是から先のゑんぎにもと。ふじ參詣の思立牛は牛づれ馬は馬連同氣相求る友武三人うち伴ひ行手の道も笑艸採藥しても漢名にまた蠻名もむづかしくしらべた所がひまづひへ費るまゝにさしかゝる。御山の廣大靈異なる事今更いふもくだ〳〵し昔語にふじ山で近江の湖水を埋たれば。余程の新田ができるとはやつぱり是も山咄しまた金銀銅の出るよふすも見へず物廣大なれば手が届かず手のとゞかざるは金のたらざるなりこゝにおゐて止むにはしかじ止むに至りては古人を友とするにしかず友としてこころを

慰するものは風來六部集にしくものなし先生もとより世に用ひられず世をすつこのかはに引込しもその智の餘れるなり智餘れは人々恐をなす恐れられゝば用ひられず嗚呼難かなこゝをもつて今六部を増補して十二部の利を得んと欲すと云

小膽山人

風來六々部集 終

風流志道軒傳

敘

吾友風來山人栖栖市門數年矣其發興所著詠達多端洸洋自恣蓋有微意云此冊成矣余與客讀之客搥案而歎曰辨哉辨哉

假令在於六國之時目如
輝星舌如電光與藺張范
蔡之徒周旋於中原者其
在斯人歟余曰否若山人
之才文之以禮樂令太史
謂非龍非虎而未可知也

而戰國術士豈為山人願
之乎容嘿而太人或責以
非法言不敢言蓋以此摡
山人固非也以此病山人
又非也士苟學焉成志何
必銖銖寸寸若膠柱刻舟

哉今題數語聊為山人觧
嘲雖獲阿好之謗所不辭
也癸未冬日

獨鈷山人撰

自序

史馬遷の名聞一なるべし阿房なり

雲津久阿李部羅坊あり多ハけ

なりまし安本丹比親玉なり但同し

詞少く見イといへばめしかさしく利

口不可なるといへば人めへ不縫主綴

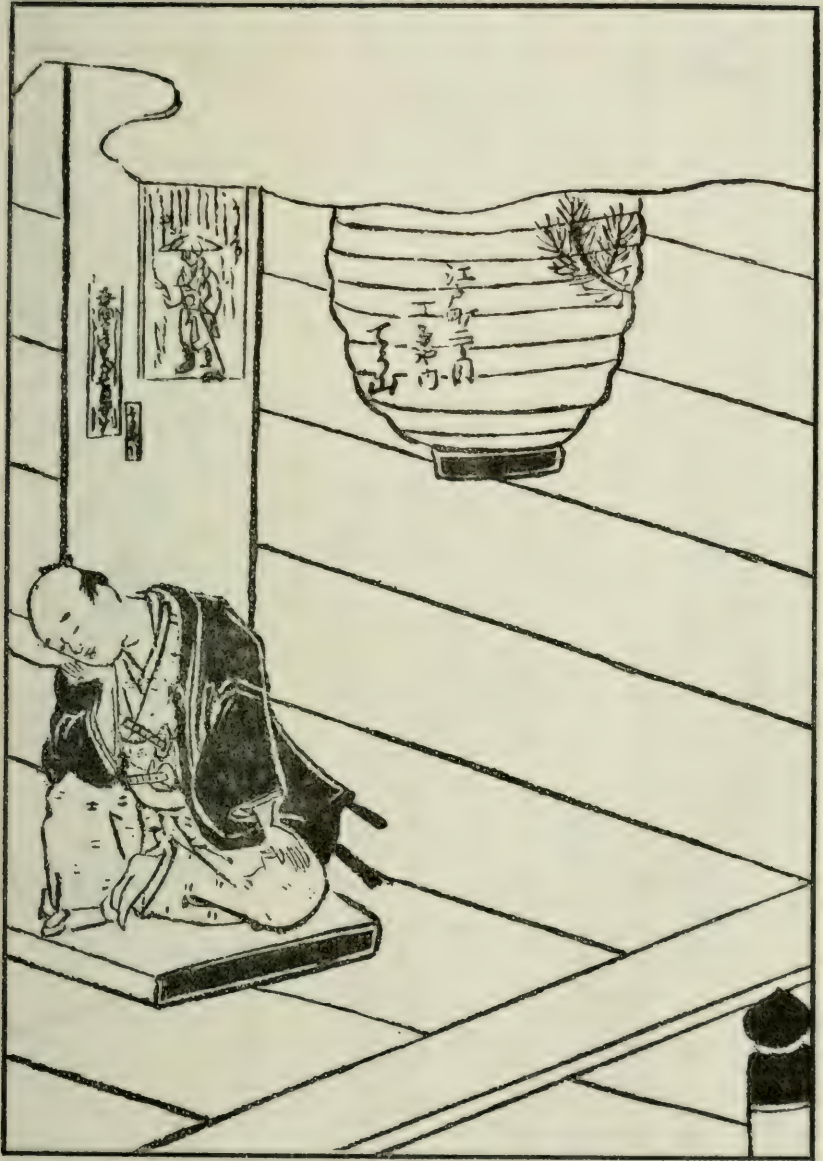
ど法物も愛気を引るゝ多ハけ無を

同したハけなり家ハ志道軒といふ
大馬ハけなり浮世の人我馬鹿ふ
するが我不二よりも雲名高ハ謙す
馬ハけの親玉とあんいふ思し志方ハ
阿呆どもと中〱ぞ男和計ハ頤をと落し
諸草我此内かり猿我かくニ言あ出白雪
津まどくと因果ハ集人といふ数ぬ見ば世

ふ思ゐハけし多らぬのなり歌かるた
本屋の晒ぼんと云かくれたハけなれバ
字彼が傍ニ一ツ書紙著安本丹ぼら
ずしらぬ又何しらや或ハ字を書し
字を画するも雲津皇なれバ梓
ふちりだ恕んといふ歴程場あり家
法書紙厥く之承法歴らしく讀

こゝのつばかりならざる真のぬいけに
あらはしぬ張鸞雲風来山人一
名は天竺浪人浮世ニ於て塵居に
寓居ニ書ス

風流志道軒傳卷之一

爰に江戸淺草の地内に、志道軒といへるえせものあり。軍談を以て人を集、木にて作たる、松茸の形したるをかしきものを以て、節を撃て諸人の臍を宿がへさせる猥雜滑稽、耳を抓で尻のごふ程、取ても付ぬ齒なしの口をくひしばり、そこらたらけが皺だらけなる顔打ふり、或は白眼にして他の世上の人を味噌八百のめつほう矢八、九十に近き痩親父にて、女形の身ぶり聲色まで、其趣を寫すこと、誠に妙を得たりと云べし。其說ところは神儒佛のざく〳〵汁、老莊の芥子ぬた、氷の吸物稲光の油あげ、跡も形もないて居る子も笑出し、草履つかむやつこらさまでが、何やら坊といへば志道軒としる程の、古今無双の坊主なり。されば江戸に二人の名物あり。市川海老藏と此志道軒親父なり。然るに柏莚は世を去て、今殘處の志道軒、江戸に一人の名物といふべし。故に一枚繪今戸燒を始として、祭のあんど、髪結床の障子にも、此親父が形を畫、すばしりの頭松茸を見ても、志道軒を思ひ出してをかしくなるは、誠に目出度親父なり。此人何が故にかゝる事をなしけると、其源を尋に、元來此志道軒が親は、さる屋敷の用人を勤て、其志淺からぬ、深井甚五左衞門といへる筋目正しき人にてそ有ける。此甚五左衞門四十に及で男子なき事を深く憂、夫婦一所に淺草の觀音へ、三七日の通夜籠をなんして

祈けるに、滿ずる夜の曉、南の方より金色の松茸臍の中へ飛入と見て懷胎し、男子出生有しは即此志道軒なり。夫婦は悅のあまり、淺草觀音のもうし子なればとて、稚名を淺之進と號、蝶よ花よといつきかしづき、初春祝ふ破魔弓も、千年を我子へゆづりはと、人もちゐの鏡より、幟畫の尉と姥も、猶いづまでかいきの松、是も久しき親心のまよいなるべし。或は髮置袴着なんど、光陰は鐵炮のごとし、淺之進七八歲の頃より寺入の初清書、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ闇に眞黑な、牛の角文字ゆがみなりも、器用な手筋と譽そやし、早そろ／＼と、大學は孔氏の遺書にして、初學德に入にも出るにも人を付置、なをざりならぬ養育に、また生性勝れたれば、人心付頃より、洒掃、應對、進退の節も、年よりはおとなしく、弓馬の道は云もさらなり、立花、茶の湯、鞠、揚弓、詩歌連誹を始として、其餘の藝能ぬけめなく、十五歲に成ければ、父母つく／＼と思ふやう、佛に祈て產たる子といひ、又かく人に勝れて發明なる子は、必短命なるものなり。其後は不思議にも二男三男の出來たるこそ幸なれば、何とぞ此子を出家させば自長命なるべく、また先祖の菩提をも問せんと、其よしかくと告ければ、左のみ望にはあらざれども、父母の命もだしがたく、それより世々の旦那寺なれば、光明院といへる寺へぞ遣しける。淺之進は稚心に思ふ樣、我好て出家せんとにはあらざれども、父母のかく宣ふは偏に佛緣のなす處なれば、此上は一筋に佛法の奧儀を極、天下の名僧と成て衆生を濟度せんものと、日夜朝暮佛經に眼をさらし、行住坐臥の勤おこたらず、學問の外餘の交は、夏の夜の花火見に誘れて

も、俗人のたのしみまさに電光石火のごとしと悟、春は飛鳥山の花盛も、むれつゝ人の来るのみぞあたら櫻のとがには有けりとつぶやきて、雪を寄螢を集こそ古人の心なんめりと、獨竹窓のもとに日ぐらし硯にむかいて、見ぬ世の人を友とし、四方の氣色うらゝかに、春しり顔に咲亂たる庭前の桃の盛なるに、仙境の趣を思ひ出つゝ餘念もなき折から、軒に巣をくふ燕の、窓より内に飛入つゝ、机の上におり居たり。淺之進は身を動ば、燕の驚んかとひそまりて見る内に、彼燕机の上に卵を一ッ産落て、何ちともなく飛行けり。淺之進は卵を取上、巣もあらば入なんと思ふ内、彼卵二ッに破て、中より人の形したるものぞ出たりける。昔竹採の翁が竹の中より取得たる、赫奕姫の類ならんかと、打守て居る内に、すく／＼とおほきになりまさりて、忽能程の人になりて、其形のけそうなる事世に類なく、玉の顔緑の眉、三十二相の形を備、淺之進を見てゑみを含めば、覺ずも心とろけて醉かごとく、彼美女はしづ／＼と庭に立出顧て、淺之進をさしまねく。淺之進も庭におりたちけるに、彼女手をたづさへ、いとしづかに假山のあたりへ歩行、咲亂たる桃花の下石なんどのありて、其中に小き穴の有けるが、其穴の中へ伴ひ行たり。此穴上より見たる時は、わづか五六寸の穴なりけるが、行時はまた人の身の通ふべき程の道とぞ成たり。行こと十間あまりになれば、其内平にして、犬鶏の聲なんどのほの聞えて、さま／＼の木草生しげり、梅か枝に木傳ふ鶯あれば、かたへには卯の花の垣根いと白く、雲井には子規のおとづれ、紅葉に鳴小男鹿の聲、或はまた川風さむみ千鳥のむれ居て、雪の降しく處もあ

り。四時の花實時をあらそひ、砂の色も常ならず。行水の聲までも、其清々たる事また有べきにもあらず。それより遙歩行は、ゑならぬ匂ひの薫來て、管絃の聲ほの聞えつゝ、玉をかざれる樓閣あり。金銀の砂を敷渡し、瑠璃の階馬腦の欄干、また譬るにものなし。淺之進は此處に至りて、少し猶豫し居たれば、彼美女かく來れとて先に立、幾間ともなく廊下を傳ひ行て、一間なる所へ請じ入けり。數多の美女立かわり茶の給仕しつゝ、様〳〵の菓子なんど出すを見れば、何も初メ卵の中より出たる女にもまさりてあてやかなるに、思ひ〳〵の繡して、いときらびやかなる衣類をかざり、立かわり入替て出る度に、酒肴の數〳〵、善盡し美つくし、今様をうたひかなで、或は美なる女の來て、手を取足をさすりつゝ、ひとかたならぬもてなし、淺之進は興に乘じ、思はずも酒をすごして美女の膝に打もたれ、とろ〳〵とまどろみけるか、暫して目を覺しあたりを見れば、今まで有つる美女の姿も酒肴も宮殿もなし。扨は夢にて有けるかと打見れば、松柏は枝をつらね、岩にくだくる溪水の音のみして、我住し寺内の躰にもあらず。扨は狐狸の爲にまどはされしかと、忙然としてながめ居たる處に、一むれの雲下りて、中よりあやしき姿せしもの、木の葉を以て衣とし、頭には巾をいたゞき、左に藜の杖をつき、右に羽扇を持て淺之進をさしまねき、善哉〳〵汝敎へき事ありて、我仙術を以て招寄たり。少もあやしむべからずとて、近寄を見れば、形は左なから老人めけども、顔色は玉のごとく、年の頃三十歳に過ず、髮黑く髭長く、目の中さわやかにして、威有て猛からざる姿なれば、淺之進はひざまづきて是

を拜す。其時仙人告て曰、汝元來生れつき衆人に勝れたるに、父母佛法にとらかされ、出家させんとする事、金を泥中へ抛がごとし。我是を救んがため、汝を爰にまねけり。それ佛法は寂滅を敎とし、地獄極樂なんど名を付て、愚痴無智の姥嬶を敎る方便にして、智ある人を導べき敎にはあらず。人は陰陽の二を以て躰をなす。譬は石と金ときえり合て火を生ずるがごとし。火の薪ある內は、人の一生のごとし。火消る時跡に殘所の炭は卽死骸なり。其時消たる火地獄へ行や極樂へ行や、汝此行衞を知らば、地獄極樂有とすべしと、淺之進手を拍て大に悟て曰、先生の敎を受て、是までの迷豁然として夢の覺たるがごとし。今より出家の志を止べし。去かれども人世の中にありて、只草木と共に朽果んは本意ならず。願は先生、我に業とすへき道を敎よ。其時仙人羽扇をあけて曰、汝能我言を信す。今我身の上と汝か生涯を示さん。我は其昔元暦年中の生れにして、源平の戰なんとは稚心の耳に殘、漸天下治て鎌倉將軍政を專にし、諸人太平の化をたのしむ。我は片田舍に長けるが、つく〲と思ひめぐらすに、高祖は三尺の劍を提、漢朝四百年の基をひらき、相將豈種あらんやとは、楚の陳渉が詞なり。今諸國の大小名を見るに、賴朝義經の驥尾について、匹夫よりして家を起すもの少からず。我は治世に育たれば、劍戟を起んは天にさかふの罪あり。然ば藝を以て家を起さん事を思ふ。去かはあれども、世の俗人の藝と稱する茶の湯は、古茶碗竹べらなんどに千金をつひやして、四疊半の氣づまりに、手づからにじり込の草履をつかむ事、大丈夫の業にあらず。立花は一瓶の中に千草萬

木の趣をこむるといへども、釘にて打付、はりがねにてため直す事、自然の風景にあらず。碁を打ものはならべて崩、くづして並、其智三百六十目の外に出ず。此人死ては西の河原へ行て、一目打ては父戀し、二目打ては母戀しと、地藏𦬇の袖にすがりて、獄卒の鐵の棒をうらむとかや。將棊は軍のかけ引なりといへども、韓信孔明將棊をさしたる噂も聞へず。今試に將棊の上手に採配とらせて軍させば、敵の龍馬に踏殺、桂馬の高飛歩兵の餌食となるべし。香を聞ものは鼻を以て天下を治がごとき顔をしかめ、沈外息脈の極秘を極め、聞香悉能知と高ぶるとも、高が無用の翫、六國なんどゝ文官第一の名目を立る事、片腹痛ことく。楊弓は百射て五百中たりとも、鼠を射る足にもならず。鞠が上手なりとて、腹の減と金出して、色よき裝束着るより外に能なし。尺八の名人が、女郎の屁に蒔繪置たるがごときやさしき聲を吹出しても、敵討に出る用意より外、何の役にも立ざれは、齒のぬけるだけの損なり。鼓のヤツハア、太鼓のテレツクスツテン〳〵、どんと上手に成おふせても、耳へ入てぬける間の樂にて、名の不朽に傳べきにあらず。其外俗の藝と云は皆小兒の戯なり。只人の學べきは、學問と詩歌と書畵の外に出ず。是さへ教あしき時は、迂儒學究とて上下を着て井戸をさらへ、火打箱で甘藷を燒、唐の反古にしばられて、我身が我自由にならぬ具足の虫に見るごとく、四角八面に喰しばつてもない智惠は出ざれば、却て世間なみの者にもおとれり。是を名付て腐儒といひ、また屁ツぴり儒者ともいふ。されば味噌のみそくさきと、學者の學者くさきは、さん〴〵のものなりとて、又是

を見破たる先生たち、宋儒の頭巾氣とをなへ出せし卓見も、角を直さんとて牛を殺、其末流の木の葉儒者には、猪牙に乘てひちりきを吹、三絃に唐音を乘せ、甚しきに至ては、天下を運す掌の内にお花とやらをめぐらする、言語同斷の學者も有よし、是皆中庸を知ざると、鼻毛をぬかざるより起りたるたはけなり。唐は唐日本は日本、昔は昔今は今なり。三代といへども禮樂は同じからず。立て拱するが禮なりとて、今貴人の前て立れもせず、聖人の政なりとて井田の法を行ば、百姓どもには安本丹の親玉にせられなん。去かれども不學無術にては、もとより行べきにあらず。只墨かねを能覺へて、手の利たる大工と鍛のよひ刀を能研たるにあらずんば、大功はなしがたし。我もまたなまくらならねば、鎌倉に至て人間の益をなさんと、裏店の淵に身をひそめ、鰻鱺、泥鰌と同し樣に、ぬらりくらりと世を渡つゝ、つら〳〵世上を窺ふに、平家西海に沉て後、上下太平の化にほこり、賢者あれども登庸ことを知らず。北條梶原に傳なきものは、位に進事あたはず。大江秩父なんどの賢諸侯ありといへども、近寄んとすれは、左右の俗士賢をいむこと甚しく、其餘和田、佐々木、土肥、千葉以下は、自紅白粉をぬりて狂言綺語の戯、イヨ市川の殿樣とほめられ、或は大磯小磯より女妓なんど召抱、晝夜を分ずサツサヲセ〳〵おせゝのかば燒、ぬつぺりとして和な讒諂面諛の者にあらざれば、左右に近付事なく、種〳〵のおごり日々に長じ、內證はいすかの觜、悔て返ぬ家老用人、輿も明日もさめるに早ひ樂鑵天窓を打ふつて、三人寄ば文珠の智惠、百人寄ても出ぬは金なり。さすが人がらぶつておとなげな

く、無間の鐘もつかれず、お出入の金貴橋次に塵をひねつて賴のゑるし、一の谷屋嶋の軍に命を的にして、奉公したる譜代の家來も、格式有てめつたには貰はれぬ、虎の威を借る定紋付を、狐狸が着すれば、左ながら上下のわかちも見えず、其時代に流行ものは、坊主金もち女の子、三絃しやうるりたいこもちの類なれば、和氏が璧の夜光なるは知らじと、我もそれより世を遁山林に隱、木の實を食して餓をゑのぎけるが、いつとなく仙術を得て飛行自在の身となり、風に任するからだなれば、自ら風來仙人と號して、五百餘年の星霜を經たり。今の世の風俗は知ねども、汝出家を止たりとも、必〳〵藝能を以ほこる事なかれ。また誠の道を以てするとも、却て俗人近寄ざれば、後には世を捨るか、世に捨らるゝの外には出ざるべければ、只東方朔が昔を追、滑稽を以て人を近寄、よく近く譬をとりて俗人を導べしと。此時淺之進進出て申けるは、謹で先生の敎を受。しかれども我若年にして人情に精からず。此事如何してかしかるべき。其時風來仙人、手に持し羽扇をあたへて曰、是は我仙術の奧儀をこめし團扇なり。抑此團扇を以てあをげば、暑時は凉風出、寒時は暖なる風を生じ、飛んと思へば羽ともなり、海川にては船ともなり、遠近を知幽微を見る。身をかくさんと思へば忽に見へざる、奇妙奇代の重寶なり。是を以て天地の間を往來し、諸國の人情を知べし。只人情の至處は色慾を第一とすれば、諸國の色里なんどをも遊行すべし。諸國を經る内には　面白事かなしき事幾度も有べけれども、必〳〵苦とばし思ふべからず。汝が修行成就して再此土へ歸し時、また對面をなすべし。

さらば〳〵といふ聲は、障子に殘風の音、淺之進は忙然と、光明院の窓の内に、寐るともなく覺ともなく、机にかゝりてもとのごとく坐し居たるに、側を見れば、彼の夢中に授し羽扇ばかりぞ殘ける。

風流志道軒傳卷之一　終

風流志道軒傳卷之二

淺之進は、光明院に有てつく／＼思ひめぐらすに、彼風來仙人が敎の詞、一ゝとして理にあたらざる事なく、其上暫寺に居て、諸宗の風儀を試に、何れの出家も表をかざり、錦繡を身にまとひ、人もなげに高座に登、口に說ところは衆生を導、往生の素懷をとげしめんと、極樂の店請にも立やうに說ちらせば、愚痴文盲の同行どもは、わた持の如來樣と信仰し、金銀財寶をなげ打ば、御殊勝にとばかりにて、忝ともいはねども、心の内には笑を含、其金つかふ胸算用はすれども、佛の恩さへ思はず、あげ法事頼て來れば、名聞の盛物も人の見る方は飾れども、佛には卷藁ばかりをかざませ、剰むしがへしをくらわせ、朝晩の勤も隨分外へ聞へる樣に、鉦も高くは叩ども、砂かむよりはせゆつない念佛、金持は金遣はず、鑓もちは鑓遣はず、髮結我髮結ず、辨當もち先へ喰ず、とりあげ姥子を產ず、風呂焚は垢だらけ、けんどん屋飯を喰ひ、箕賣は笠てひると、醫者の不養生、坊主の不信心、昔よりして然り。出家もと木のまたからも出ず、旨ひ物の旨ひと、面白ひ物の面白ひは皆同ジ事なり。椎茸干瓢長芋蓮根、南無阿彌豆腐の油揚にて、中／＼心にたらざれば、柔和にんにく葱ぞうすい、むき玉子松魚の雉燒、脈離江戸前大かば燒、鰺本不生の早鮓を、せんばら腹のはれる程に取込、八功德水のあつがんを

引かけ、雑修自力の心をふり捨、只一心に女郎狂ひ、妙法戀慕の闇に迷、弘誓の船の四つ手竹輿、内には念彼観音力、刀及段〳〵通へども、本來無一物の客なれば、女郎は見立花はくれなゐさ、若イ者にもうるさがられ、或は藥師の瑠璃の壺入、おんころ〳〵と蹴ころばし、眞如の月のまん丸な、比丘尼の頭巾うば玉の、闇より闇に迷ひ入。それも若きはまだしもなれども、額に歳の波をよせ、眉に八字の霜、天に登りつめたる老僧の、寺内に弟子は多けれど、魂廓に入ぬれば、一人もともなふものぞなき。されば世の諺にも、落そふで落ぬものは二十坊主と牛のきんたま、落そもなくて落るものは五十坊主に鹿の角。是はまた足利時代の譬にて、今は只老たるも若きも貴きも賤きも、野分の枝の熟柿にて、一つも落ぬはなかりけり。たとへ堅固に守たりとも、頭陀の行乞食に似たりと、淺之進は悟をひらき、かたへに有合ふ筆をとりて、

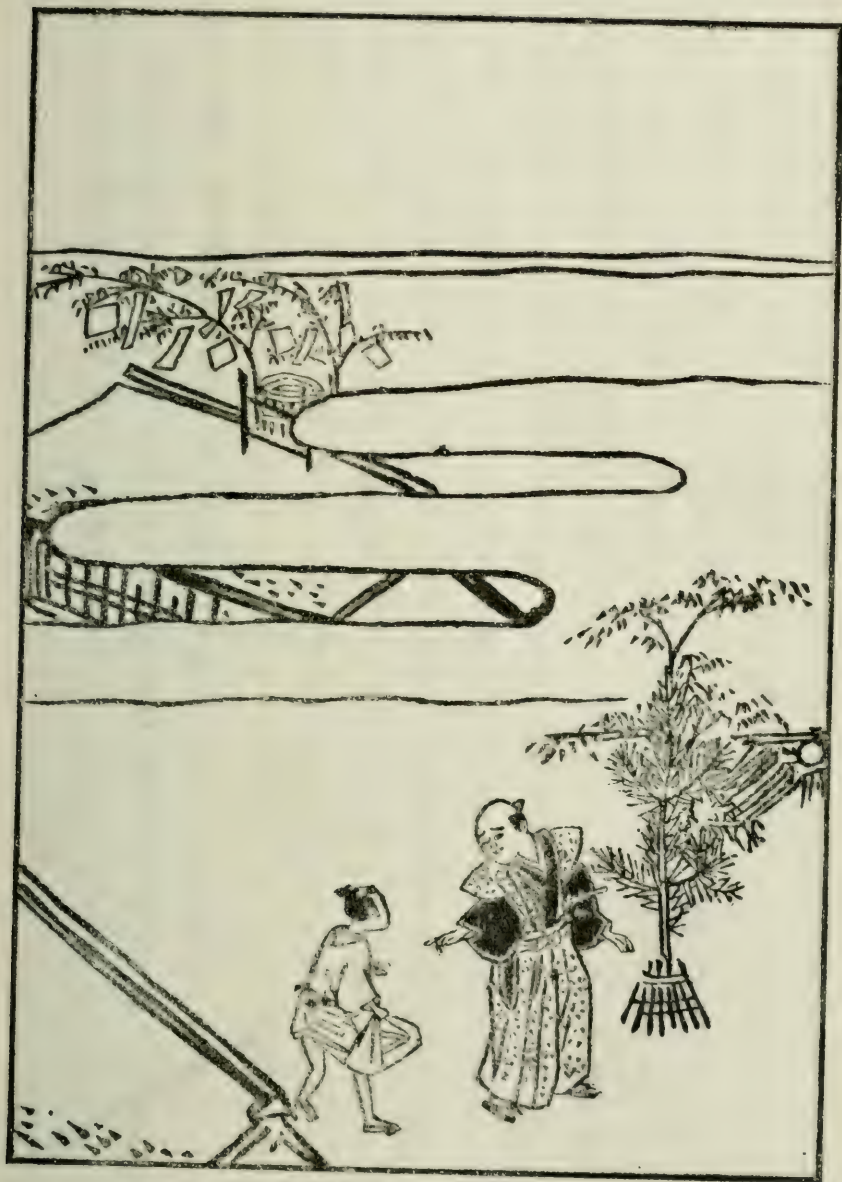
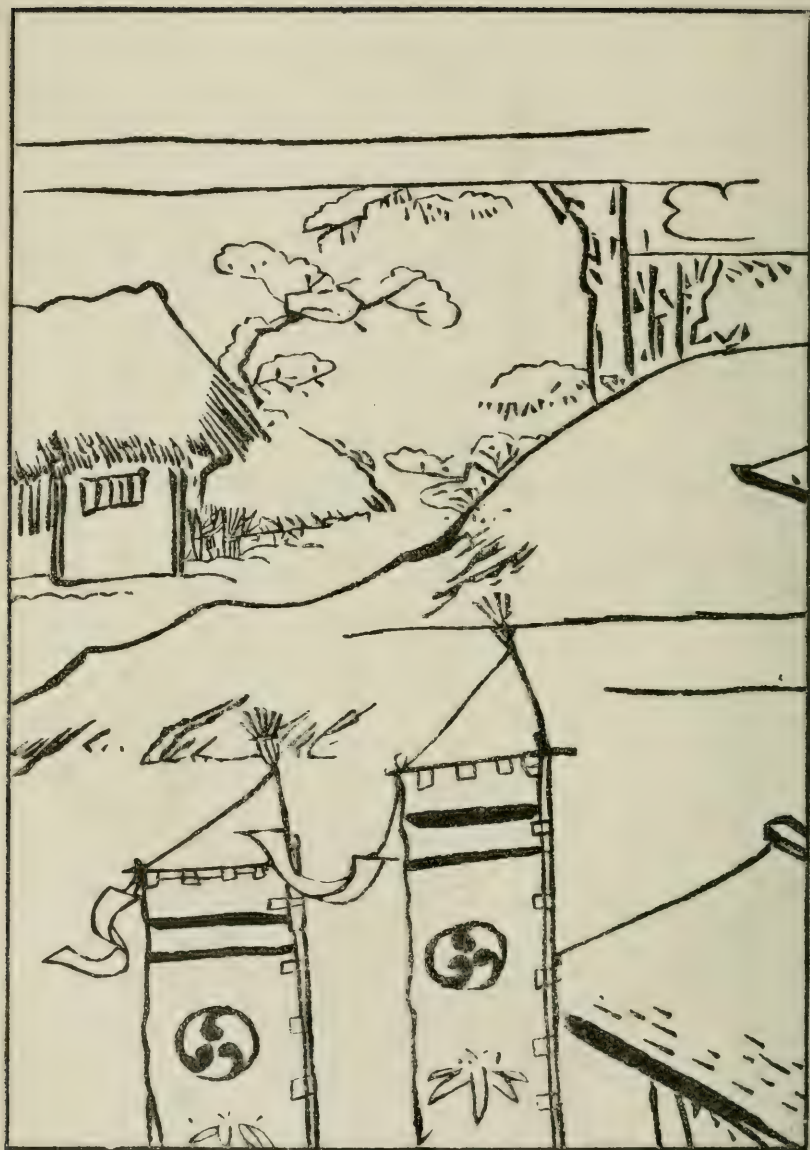
のがれんと思ひし道のくらければもとの浮世に有明の月

と墨くろ〳〵と障子に書付、彼仙人より授し羽扇ばかりをたづさへて、光明院を忍び出、髮結床に至て元服しつゝ、住べき處求んと、方〳〵とさまよひあるきけるが、駿河臺のわたり小高き所に、まばらなる庵の有けるを、主に賴ものしつゝ、此處に假に居にけり。淺之進は庵にありて、四方の氣色を打ながむれども、立つゞきたる家居の數〳〵、ひきゝは高きにおゝわれ、或は雲烟のたなびきて、さやかには見へ分ず。爰にこそ彼羽扇ならんと取出しつゝ移し見るに、南は品川北は板橋、西は四ッ谷、東

は千住の外までも、手に取ごとく見へわたり、ゑらみの足音蟻の町まで聞ゆれば、初て羽扇の妙なる事をゑり、猶また一ト年のありさまを見んと、暫心に觀ずれば、忽に氣色かわりて、吹來る風もいと寒く、道の邊はいてかへりて、土とも石ともわきがたきに、霜いたくふり渡り、師走闇の心なく暗も、くだかけの聲せはしく、鳥の飛かふにつれて東に横雲たなびき、あかねさす初日影のさし出れば、彼神代の昔にはあらねども、物の形もゑろ〳〵と見えわたり、家〳〵にはゑめ引はへ、松竹餝たる間より、行ちがふ人の數〳〵、國〳〵の大小名はけふを晴と出立、裝束の袖春風に吹そらし、馬の蹄竹輿の足音、其こたま十里にひゞき、見つけ〳〵もきらびやかに、下馬先の禮おごそかなり。公の事はいふもさらなり、町は家〳〵戸をさしていと靜かなるに、鳥追大黒舞の拍子面白く、皆出立て三河の萬歳、春立返るあしたより、嵐に逃る羽子を追行、振袖のなまめける手鞠歌、一イ二フ三イ四フ、いつもかはらぬ道中双六、上下男女入亂れ、福引の錢かけ鯛にはせ賣の聲わかちなく、門口から辰巳上り、物もうどれ大黒屋槌右衛門、惠美壽屋鯛兵衛、年始の御祝儀申入ますと、さんとめの綿入着て、尻はせをりたるでつちが差出す扇子箱も、禮に來べきゆかりある紫紙の似せ皮を、まづ諂の先走、夕部までは借金にせつかれ、欠落せふか首くゝろふかと、くつたくを持越て、雜煮の膳にはすはりながら、餅はまだ咽を通さず、上置のこぶや午房をかぢつて、五六十年の歳を一度に寄て、片息になつて居る亭主をとらへて、お若ふおなりなされましたと、虚言八百の正月詞、門松餝竹の千代萬代と壽も、元

が根のなきこしらへもの故、常盤の色も請合かたし。其外俗の嘉例などには、をかしき事も多かんめれど、害なき事はくるしからず。但古人の詞にも、一日の計は朝にあり、一年の計は元日にありとは、其本亂て末をさまりがたきをいふ。わけて初春は一しほに心を改め、悪しき事はなすまじきことなるに、正月といへば童までが、寶引穴一の類をする事と心得て、親〱も寶引せねば蚊がくふとやら、馬鹿律義におぼえこむにはあらねども、人〱の好所より埒もなき理を付て、稚時より見習ば、成人するに隨て、御器用なる御子息達、勘當帳につく事は、皆親〱のあやまちなり。二日からは初芝居、金元の勢は屋倉太鼓のひゞきにあらはれ、太夫元の手まはしは、幕の間の遲速に知らる。故をたづねて新しき、八百屋お七に取ませし、曾我兄弟が敵討、くどふ云はねど其由來は、葛見宇佐美河津の庄、三ケ日から七日の賑ひ、飯焚に笑出されて、七種の拍子を違へ、帳とぢの祝には、錐を囊に入た樣な番頭も活氣を出し、大盃の醉が廻り、上書の大福入が三十程に見へるは、もうけの有前表と、なんぼ醉ても數は忘れぬどう慾な、くだ卷舌に同じ事を幾度か、十五日は綱引粥杖爆竹の烟空にきへて、行衞もしらぬ奉公人も、やぶ入小袖の花やかなるに、裏店の露路かゞやけば、風流の若イ者は魂のおり所を知らず。コリヤマタ組がはり込もいま〱しい程美しいと、云はれぬ世話をやき餅も齒にこたへて來る時分は、もふのらつきも廿日正月、柳は色を含梅は香を吐出す、鳥の囀さわやかに、東風吹空の長閑なるを、ふりさけ三輪の神なちで、いとゆう〱と吹すさむ、風巾の數〱は天をいろ

どり、垣根には蒲公英の花盛なるに、隣の姥様もうかれ出し、涅槃參の珠數袋に、臍くり金の底をたゝき、彼岸といへば只だんごとのみ覺たるもをかし。白酒賣の聲春めきて、十軒店のわたりどよみ出せば、菱餅のこしらへいそがしく、鷄合の人たかり、汐干の蛤またふみも見ぬ尼法師まで、梅若參我一と、まつさきの田樂も燒野の雉子ほろゝ打、昨日今日と移行、飛鳥山の花盛に、染井のつゝじ色を爭ひ、毛氈の虹道にたなびき、掛香の匂ひは草に殘る。鋲乘物のゑとやかに、繫馬の不遠慮なる、聲色淨瑠璃のかまびすしき、なま醉の腕まくりと、未熟なる詩歌發句に、あたら櫻を穢さんよりは、只友どち打むれて、靜なる所に酒酌かはしたるぞ、越なふ奥ゆかしと見ゆ。或は其日も暮方の、朧月夜に敷ものもなく、獨樂の樽枕にいかなる夢を結かはしらず。いびきの聲の聞ゆるは、もぎとふにてまたをかし。御影供の參を賴に、江戸の田舍の片ほとりにも、煮賣店の立つゞく大師河原のにぎはひ、世は空海とぞ知られたり。程なく卯月は衣更、佛の產湯の時も過、初松魚の賣聲高く、子規啼や五尺のあやめふく、錺兜幟の氣色、空には五色の雲ひるがへり、粽柏餅のおとづれに、蒔繪の重箱はせちがひ、夏の氣色を荷出す、はんじ團扇澁團扇、あをげばいよ／＼高荷の蚊や賣、水雞のたゝく頭より五月雨の降つゞきて、衣類に黴もみな月の氷餅氷室の便、不二祭の群集の足にごみ踏立れば、麥藁龍も雲を起すかと疑れ、花火の盛は兩國を照し、船は水をかくし人は地を覆。空にも戀は天の川、星の手向のいとゑほらし／＼、琴の爪音かきならす、十三日より盂蘭盆の苧がら蓮の葉瓜茄子に、懸乞

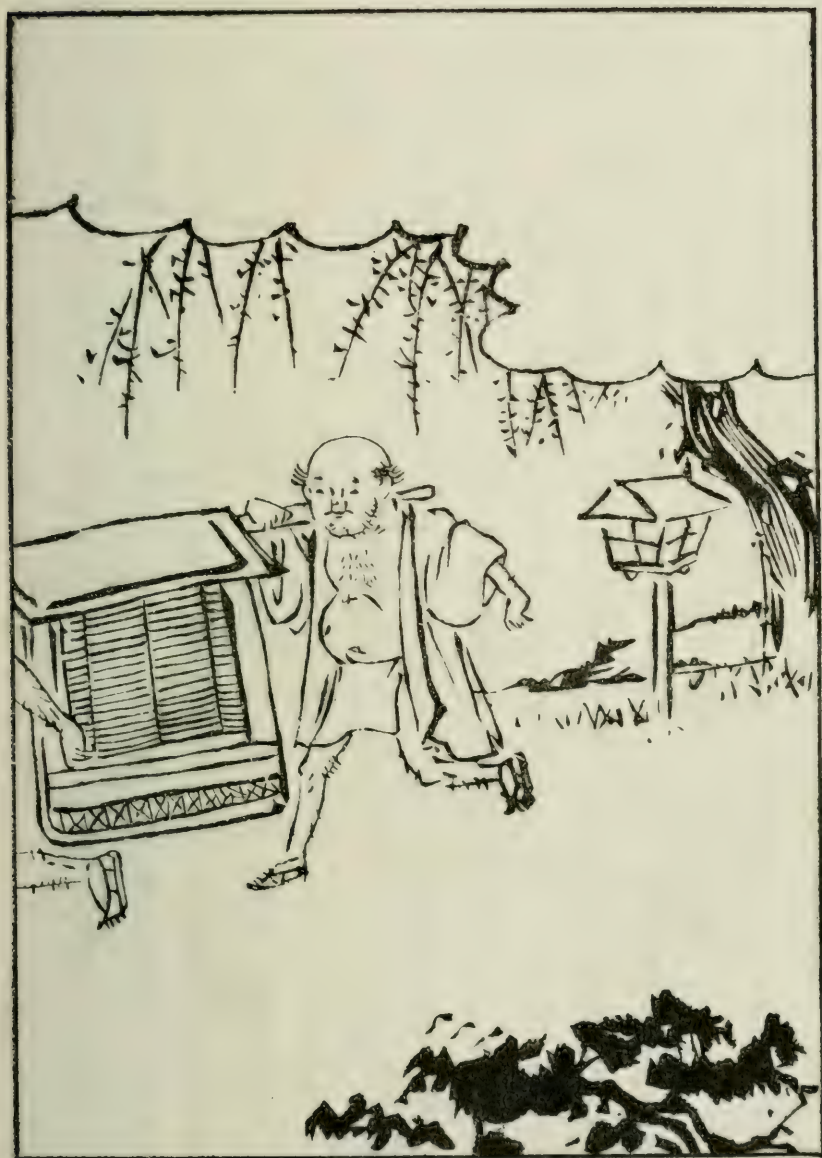
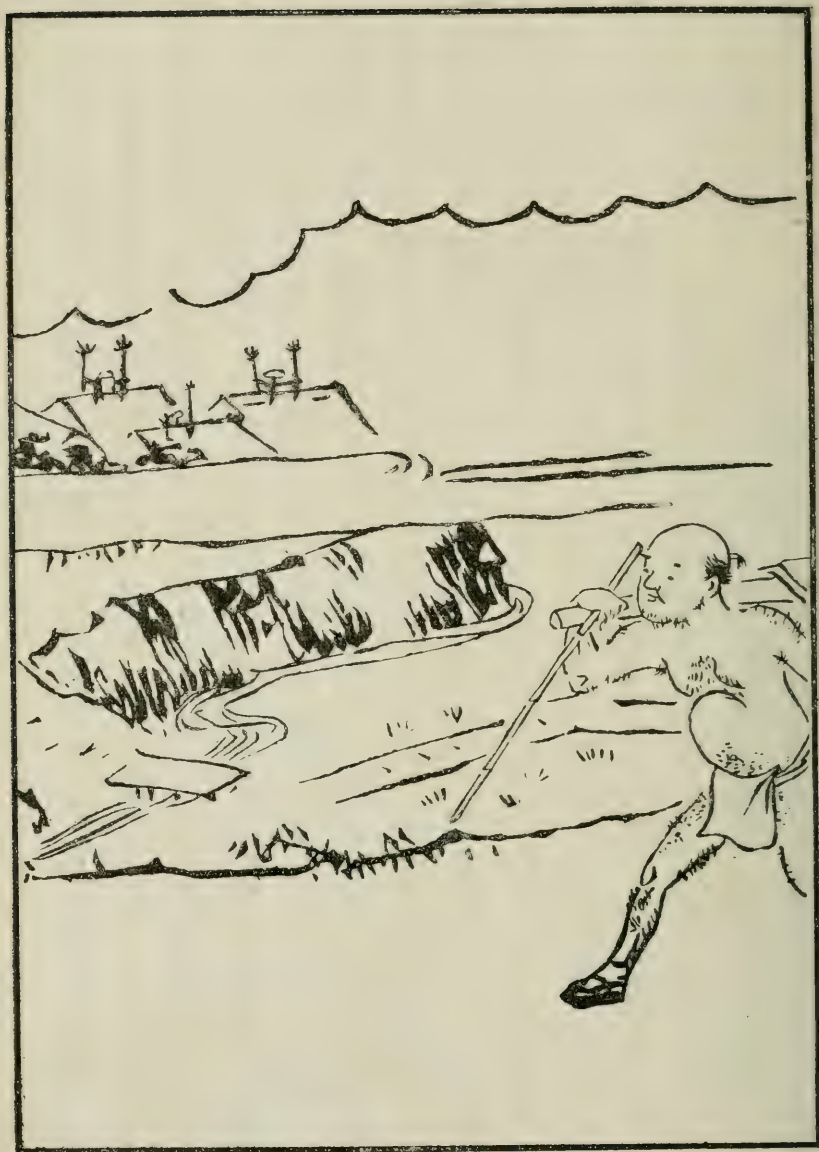
の入みだれ、聖靈祭生身魂、郭には燈籠にさま〴〵の美を盡、八朔の白妙に、約束の客待宵より月見のさわぎ、すかゝきの上づり、客人がらには人形まはし、隣の趣向もうそならぬ、本田組の一むれが、まけぬ氣の河東ぶし、聲の響は山彦のばち音も清見八景、皆こがれよる船の內、人の心も浮瀨に、里神樂三番叟、目出度鈴をまいらせふと、臺の蒲萄に牽頭が口合、客の羽織を萩の花、芒のやうな目はすれども、心の慾の穗に出る花車、やりて若イ者さま〴〵口を菊月には、九日の節句後の雛、十三夜の月見には我朝の風流を增、中菊の盛なるには、澁谷の隱居が物好を傳ふ。目黑の餅花神明の生姜市、亥猪十夜の時も過れば、御影講の餝物は錢とらぬ見せものゝごとく、惠美壽講の百萬兩は商人の虛言をかざる。顏見せの先ぶれは番附賣八方へ散じ、芝居の挑灯はそれ〴〵の紋を照す。帶解のすそ長〳〵しく、報恩講の尻もつたて、おの字を千ほど云ならべる口切、ふいごのまつりなんども事終て、乙子の餅祝ふ頃より、雪霰なんどゑげ〴〵にふりまさりて、風は身をそぐがごとくなれば、富ル人〴〵は冬籠の巨燵に藥喰の用心するさへ、手水鉢の檜杓も氷にとぢられ、軒の氷柱は劍を逆に植たるがごとくなれば、おのづから寒氣にあてらるゝに、其日のいとなみ事ゑげき者は、さま〴〵の業に雪氷をもいとはず、西を東南を北と立さはぎ、手足にはひゞあかぎれ、我身を損ずるをもいとはず。或はつよき力わざする者なんどは、かゝる寒時にさへ肌をあらはし汗をながし、わづかの價の爲に使はるゝ下ざまの世渡を、貴キ人は思ひはかるべき事にぞ有ける。わけて煤拂のそう〴〵しき、布子の上に

單なるを引はり、常は事たらぬ道具なれども、かゝる時は多きやうに覺ゆるを、手〳〵に持はこびて、御祓は屏風の内に鎮座まし〳〵、持佛は半櫃の上に來迎あり。用に立ず捨るにもをしかりしものなんども澁紙に包込れ、久敷見へざりし器など、物のそこより出たるも嬉しく、または全道具を持はこぶとて損じたるを、我は知らぬなんど、下部はとがをゆずり合、疊のごみもたゝき仕舞て、諸道具も片付たるさま、左ながら淸らには見ゆれども、からだを見れば手足も鍋の底なんどのごとく、目計きよろつきて、鼻の下の一文ほ黑もをかしく、追〳〵湯に入て後、初てもとの人間になりたる樣にぞ覺ゆ。次第に暦も人の心もせまりて、道行人の足も跡から追來る人も有やと見ゆるばかり、町〳〵には賣物の山草折敷ほんだはらはご板、何やかやかちぐり、淺草市の人だかり、節季ぞろのせはしなく、餅つきのかしましき中にも、親出合の年忘、拳酒の九十、めつたに手をひろげても、義太夫ぶしの五段目、大三十日までかたりつめては、八人藝でも間に合ず。ソリヤ獅子も浮て來ず。掛乞は皮財布を膝に敷て、達磨のやうな目をむき出し、九年面壁の居催促、あてはなくてもまだ寄ぬとの一寸のがれ、此時に至ては、愚なるも富ル者はさかしく見へ、賢も貧は愚なるが如シ。節分の狗骨鰛の頭も信仰からといへども、豆に逃る鬼ならは、來りたりともまた何事をかなさん。やく拂の西の海は十二文の惡事災難有たとて邪摩にもならじ。惡夢を喰ふとは云傳れども、獏の糞を見た者なく、家〳〵に敷ては寐れども、寶船に船大工もなしと、思付に形を畫て、身勝手ばかりの心やりなり。一年の内には千變萬化、

の世渡りも、つまる處は金といふ一字に歸し、人慾の私に使るゝが故なりと、淺之進羽扇をなぐれば、有し駿河臺の庵の內に、焚懸し飯のいまた熟せさる內なりければ、益羽扇の妙を感じ、彼風來仙人の敎にまかせ、是より日本はいふに及す、唐天竺より諸の外國までを、廻り見んとぞ思ひ立けり。

風流志道軒卷之二　終

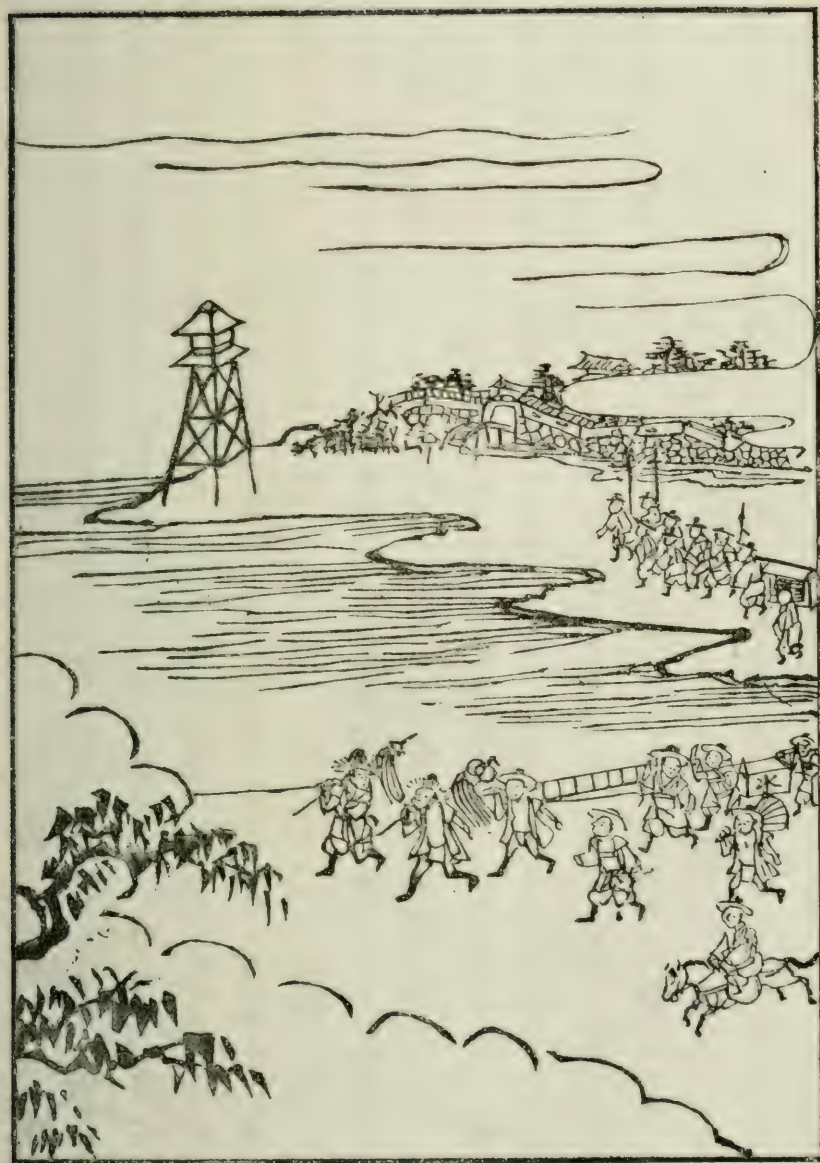
風流志道軒傳卷之三

天神七代の始は、男女の道を志らざれば、男色ばかりをたのしみて、甚窮屈なる世界なりしが、伊弉諾伊弉冊の二神、天の瓊矛を指下して、めつたむ志やうに滄海を探しかば、其矛の鋒より滴瀝る潮凝て燒鹽となる。是よりしてからき浮世といふ事始ける。此時始て合交せんとするに其術を志らず時に鶺鴒飛來て其尾をひこ〳〵搖を、味噌豆に研槌擂盆、始て交の道を得たりと。今時そんな野夫な事にはあらず。書物のとぢ目に生ずる白魚、肌着の縫合の花見虱まで、いきとし生るもの皆陰陽の形あり。形有て後此交をなすこと、天然自然の道理なれば、其後の若イ者はつがもない脊令ぐらいを先生には賴ず。去程に淺之進は駿河臺の庵を立出、何心なふ通りけるに、かたへより竹輿やろふ〳〵の聲〳〵を聞流して打通れば、跡から頰かぶりせし男、ちよこ〳〵走にて追掛、小聲に成て、旦那土手までやりませふとなんいへるに心付て、名にしおふ吉原のさんや堤の土手ならば、渡に舟と打うなづき、乘ふのの字を半分聞と、ソレ棒組といふ間もなく、竹輿すへる乘かき上る。コリヤサ〳〵の掛聲は、さわたる雁が洋漕船、ふらり〳〵と居眠の、寐耳へはいる暮六も、鐘は上野か淺草を、過る間もなき千里一はね、是も偏に通ふ神の、竹輿よりをりてすそ打はらい、少し繕ふ衣紋坂、まだ

知人も中の町、茶屋が内に着ければ、夫婦は槌でにわかのもてなし、ソレお茶よ煙草盆、今日初ての客なれば、どんな加減か白魚の吸ものに、柚子の匂ひはかはらねど、外よりは何となう酒も一入味よく、亭主は機嫌取肴に、みせの出るを待合の辻、色の上下の境町、見るも殊更京町から、新町より河岸の邊まで、ぐるりと廻りてすみ町は、遊びの時を江戸町と、口合まじりに見渡せば、行かう提灯下駄の音、格子の内の燈は、晝よりも照かゞやける、縫箔の伊達もやう、銘〳〵たばこ盆に指向ひ、思ひの烟くゆらせつ、または文なんと書る躰、ゑりの白きにいたづら髪のふりかゝれるもおくゆかしく、何かは知ず隣どちの呼合たるも心にくし。人の心を引立る三絃の、いとかしましくは思へども、何となう心うかれ、此界の人ともおもほえず。雲の通跡吹とぢて、天津乙女の姿ならんと、何れを見てもみにくきはなく、又それと定んと思へば、是ぞと思ふわいためのなきは、目のうつろひならんと、後には却てそこ〳〵に見極る、一夜流の縁結は、出雲の神の帳付るにも、さぞいそがしくや有らん。遊びの趣向閨の振舞、手くだこんたんやりくりのもやうは事古にたればいはず。二度目に行を裏返すとなんいへるは、塗工よりいひ出し、貢かえるを鞍がへなどは、古詞もあるなんめれども、只伯樂の詞に似たり。二度よりは三度、五度よりは七度、段〳〵に面白く、顧愷之が甘蔗にはあらで、漸佳境に入たるを粹といひ、又通り者といふ。されば女郎買と灰吹は、青い内が賞翫とは近松が名言なりと、淺之進は吉原を立出、男色を試んとて、それより堺町へ至けるに、是又別世界の一風流、金剛が

挑灯には名代の紋を先にてらし、大振袖の羽織、戀風に翩翻とひるがへり、見し編笠の内ぞゆかしき紫帽子は、舞臺へ出るゆるしの色となん。人の物好は面の異なるがごとくなればこそ、稚あり長あれども、それ〳〵の相手あるが中にも、四十過ての振袖、頬髭の跡靑さめたるも見ゆ。是等を翫ぶ人は好の至れるなりと、自味噌は上れども、火吹竹のあえものは笋の和なるにはえかじ。木挽町に引るゝ客は、身代は大鋸屑のごとく、神明參の歸足は、本地垂跡の兩道になづむ。湯嶋の二階は千里の目を極、英町の向側は隣よりもまた近し。よごれをふくかやば町、眇眼もまじる神田の明神、外になければ市ケ谷の八幡前、天滿神のあたり近き室咲の梅手折んと、麴町には寐るをたのしむ。土氣の取ぬ土橋より、一ッ目山猫なんどいへるは、左ながら化物の名に近し。莠の苗を亂り紫の朱を奪ふ、所かはれば品川の風流、女護が嶋の辻番かと思ほゆる。看板に僞有磯海、深川のぴんしやんも度重れば餡のごとし。和で歯に付ぬ大根畑の居つゞけには、地黄丸の功を失ひ、鮫が橋へ走ては、親つぶのにらみをうく。鐺のつまる鐘撞堂、借た跡での板橋より、千住といへば觀音めける萬福寺の戀無常、朝鮮長屋の異國くさき、いろはちゝ谷世尊院、人を引出すおたんす町、八まんたまらぬお旅のさわぎ、三味の音じめの音羽町、かたり明して夜を根津の、東の空も赤城より、暗に逢ふ藪の下、通ふ足音高いなり、愛敬稲荷の狐より、化ぞこなひの市兵衞町、水の氷川の寒空は、ふるふて通ふ胴坊町、丸山の丸寐姿、新大橋のなが〳〵しき、三十三間どうよくに、又も一座を直助屋敷、出る舟あれば入舟町、

石場につくだけころばし、踏返したる丸太の名物、立ふさふせふさ錢次第、舟饅頭に餡もなく、夜鷹に羽はなけれども、みなそれ〳〵のすきはひは、鳶飛て天にいたり、魚淵にをどり子の氣色まで、殘方なくながめ盡せば、淺之進はそれよりも、諸國をめぐり遊んとて、旅の用意するにもあらず、其身其儘出立て、行つき次第の一人旅、たくはへなければ盜人の氣掛もなく、勞れは休やすめば行、物うき旅の忘草、宿屋の出女がふすもり顏に、葛さうどん粉の七分ましつた、下り白粉を所またらに打ぬり、頰紅はまん丸にて、那須の與市に見せたらば、日の丸かさ心得て、よつひき兵さはなつべき、顏つき出してしやべりちらせば、大象も能つなかれ秋の鹿も必よる。されば道中宿屋の女をおじやれさ名付し其いはれは、旅人其家に泊てつれ〳〵にたへかねて、晩に伽におじやれさいへは、こそ〳〵さ寐に來る故、其名をおじやれさなんいへる。おゑやれさいふは來いさ云さ、お出さいふの間にて、來やれさいふより三四文かた慇懃なる詞なりさ、業平東下の記虛言八百卷目に見えたり。金川大磯御油赤坂、吉田岡崎二丁町、古市山田は云に及ず。浦賀下田鳥羽あのり、長嶋田部印南には、腰掛加太の立柱、色の湊多き中にも、出口の柳こきませし、花の都の島原より、祇園の氣色宮川町、縄手に我身をゑばられて、跡の紋日の請合も、約束かたき石垣町、おられぬ內野新地より、さわぎに北野七間の、隱所は藪の下、鳴てこがるゝ螢茶屋、尻の方から灯す火も、暮る頃より今出川、濁らぬ水の淸水坂、二條七條八坂の前、またも遊びにかうたい寺、嵐になびく柳風呂、壬生天龍寺御靈の前、西石垣のは

てまでも、其よし蘆は難波津に、今を春べと盛なる、松梅の全盛は新町に色香をあらはし、白人藝子の今様めけるは、南北に風情をたゝかはす。ねたみ曾根崎嶋の內、戀の坂町登詰、隱せど出るいろは茶や、ちりぬる客をつり寄る、目もとの鹽町こつぼりと、たまらぬ味の安治川に、深くはまりし堀江大露地、次第に高津新地より、我を忘て神明前、何ほど廣きのど町でも、柳小路と身はせまり、何としやうまん一家には、七里けんはい八軒屋、我身の難波新屋敷、れいふ尼寺眞田山、浮名をかぶる編笠茶屋、穴に間近き臍が茶屋、六拾四文あり合町、ぜうゆうじ福ぜんじ、裏〱に住夜發の繁昌、そふじや堺に乳守より、奈良の木辻に登詰ては、身代をたゝき込撞木町から墨染の、花なき枝の柴屋町、室津の泊鞆おのみち、みたらいからうと上の關、行來のなまりには、さりとは安藝の宮嶋に、太夫の全盛後から、指懸られし鵲の、渡せる橋におく下の關、戀に跡先しらぬ火の、つゝしに遊ぶ浦〱は、博多鳴子に馬の庄、異國の人にもまるれば、角のとれたる丸山に、ちんぷん寒國ふりつもる、雪のはだへをあらそふて、三國新方出雲崎、敦賀今町金澤より、出羽には坂田かうやの濱、津輕に青森やすかた町、陸奥にもとめや八丁の目、松前のゑさしまで、諸國の風流をなかめつくせば淺之進は、いざさらば、是より外國を廻り見んとて、彼仙人より授し、羽扇を以海中に入、其上に坐しけるに、左ながら大船に乗たるごとく、蒼海漫々として浪は白馬の走かことくなれども、羽扇の妙あれは海水すこしも衣をぬらさす。數日食せされとも饑す、いつくともなく行けるか、とある嶋にぞ着たりければ、

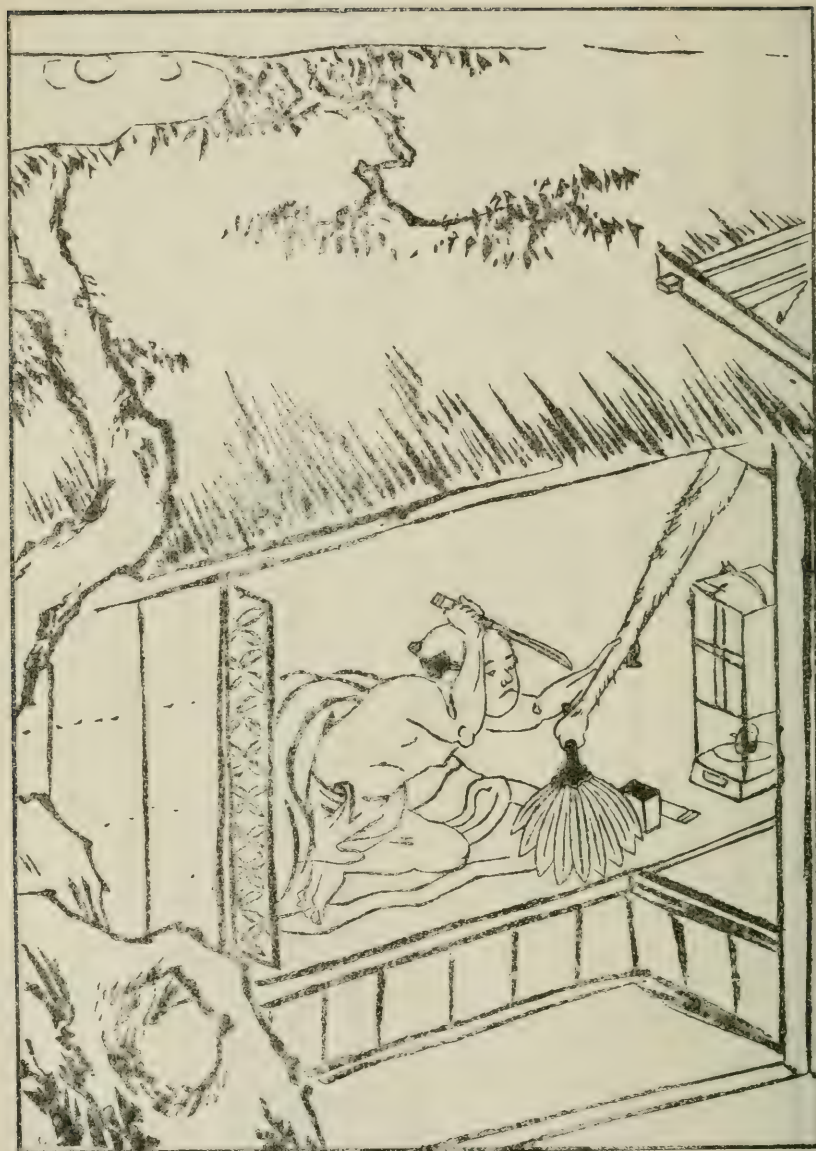
羽扇を取で陸にあかり、そこよこゝよさまよひけるに、いと大なる家の見ゆるを、目あてにしてたどり付ば、淺之進を見付て、多くの人立出るを見れば、何れも身の長二丈あまり、脊におふたる子の形も、日本人より大なれば、是こそ名におふ大人國ならんとは思へども、一向に詞通せざれば、互に手を出し口を敎なんと、樣〳〵の仕方えてもわかつべふもあらざれば、淺之進心付て彼羽扇を耳に當れば、大人の詞も通じ、口にあてゝ物をいへば、また合點するさまなりければ、其後は互に詞の通じ合、我は日本の者なりなんど語けるに、樣〳〵馳走に大人のもてなし、二三日も程經て後、遊山に出よと竹輿に乘せて、人立多き處に芦簾にて四方をかこみたる假屋の內へ伴行、臺の上に淺之進を乘置、をかしき形せし笛太鼓のなりものにて拍子取、生た日本人の見せもの、手に入て這す樣なちつほけな美男、作物こしらへものとは違ふて、生の物を生で見せる、御評判〳〵と高聲に呼はれば、老若男女おし合せり合、引もきらぬ人群集、皆〳〵指ざし笑ふ躰、淺之進うるさく思ひ、如何はせんと案じけるが、爰にこそ彼羽扇ならんと、天に向て仙人を拜し、羽扇を以て飛立ば、小屋の屋根をつき破て、雲井はるかに飛されば、大人どもは月夜に釜、ぬか悅の口〳〵に、是まで日本人の飛行する事聞及ず、是は定て日本に澤山なる天狗にてやあらんといへば、さればこそ羽扇を持たり。えかし鼻は小さかりしなど、思ひ〳〵の取沙汰、一人の大人が曰、諸國廻る天狗なれば、どこその色里にて鼻は落したるにこそ有んなど、評定しても埒明ず。夫よりも淺之進は、羽扇にまかせ飛けるが、かすかに嶋の見えけ

れば、其所へそおり居たりける。此處は小人嶋にて、人の大さ一尺二三寸に過ず。一人歩行ば鶴に取るゝ故、四五人連にてあらざれば、通得ざる程小さき國にて有ければ、淺之進を見てみな／＼恐おのゝき、戸を閉て出ざれば、見すごしてなん通りけるに、次第に奥へ行程猶更に人小く、五寸三寸の人ありけるが、奥小人嶋に至れば、其大さ豆人形程こそ有ける。かゝる國にもそれ／＼の主ありて、さしも奇麗に作たる城なんどの邊には、大勢の小人ども、登城下城の袖をつらね、さも嚴重なる其内にも、やんごとなき姫君の輿に乘て出る躰、淺之進は指にてちよつと引つまんで、印籠の中へぞ入たりけるに、付／＼俄にさわぎ立、西よ東よはせちがふ。輿に付たる奥家老とおぼしき男、うろたへまわる躰なりければ、淺之進また引つまんで、此度は印籠の下の重へぞ入たりける。半日ばかりも過て出し見るに、彼奥家老は姫君を奪れて、云わけなしとや思ひけん、ういらうに腰打懸、腹十文字にかき切て、うつぶしにぞ伏たりけり。かゝる少き人にてさへ、君臣の義理あればこそと、涙ながらに彼姫君を取出し、もとの處へ歸しける。扨／＼むざんの事かなと、それよりも又羽扇に打乘、あてどもなしに飛行見。

風流志道軒卷之三　終

風流志道軒傳卷之四

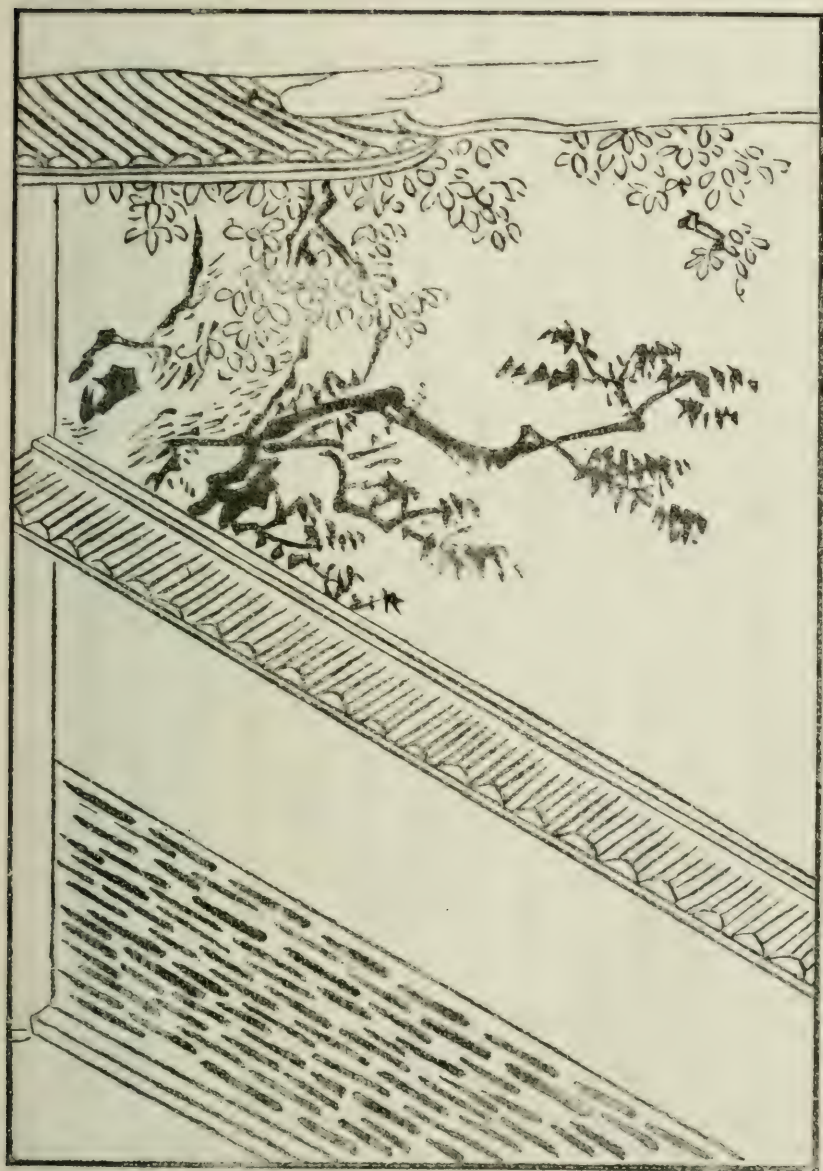
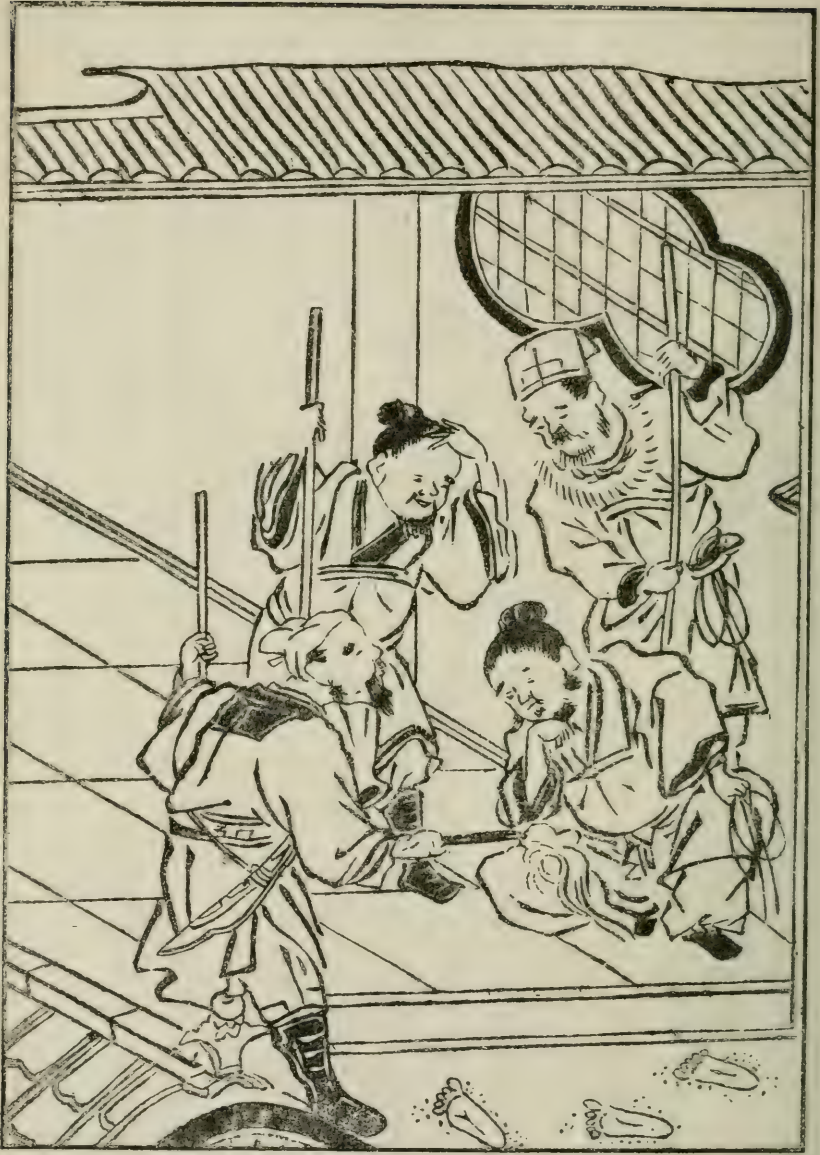
扨それよりも淺之進は、羽扇にまかせ飛廻りて、北より南へ流たる、大河の邊におり立けるが、草木の形も見なれざるもの多く、川水の色も異なるさまになん見ゆれば、歸國の咄の種にもなるべし。いざや歩行渡して見んとは思ひながら、深き淺きのそこひさへしらぬ國の川なれば、人の渡りを松が根に腰打懸て、向ふをはるかに見渡せば、川の半に人四五人歩行渡りの躰なるが、水は腰にも至らざれは、見懸にも似ず淺き川にぞ有けるとて、裳をかゝげて渡りけるに、其深さ丈にあまれる川なれば、はかなくも押流され、浮つ沈つ苦て、既に命も危かりしが、其時また羽扇を取て、さかまく水をかきわくれば、水は八方へ退て、さながら平地を行がごとく、向の岸にぞ着たりけり。去にても彼渡りし人はいかゞなりつらんと打見れば、此國は長脚國とて、體は日本人程なれども、足の長さ一丈四五尺なれば、此川水には流ざるも斷なり。扨また彼足長どもは、川中にて淺之進が羽扇の妙ある事を見て、何とぞして奪取んと打寄て評定をなしけるが、中／＼卒爾には取がたしとて、其隣國の長臂國といへるは、手の長さ一丈四五尺にて、常に盗を事とすれは、此者どもをかたらひて、羽扇を奪取んとぞ計らひける。此事淺之進は夢にも知らず、川渡の難儀に勞れければ、道の邊の茶店に立寄、座敷を借て

屛風引立、前後も覺えず臥居たりしが、何かはしらず物音に、ふと目覺して打見れば、上なる引窓より、其長さ丈にあまれる細き腕を指入て、羽扇をつかんで引上る。スハ曲者ござんなれ、扨は鳥羽繪の茨木童子、中〳〵羽扇は渡邊の綱が昔もまつかうと、懷劍をぬきはなち、腕を丁と切落せば、夫より四方さわがしく、貴賤鯨波天地も崩るゝばかりなれば、スハヤ大事と身をかため、走出て見渡せば數十萬の足長ども、手長人をせなに負ば、手も長く足も長く、其高さ三丈ばかりも有者ども、十重廿重に取卷て、稻麻竹葦と居並へは、譬羽扇の妙ありとも、中〳〵惡く飛んとせば、宙にて引抓れんは定なれば、身の一大事此時と、心の内に仙人を念じ、つか〳〵と馳寄て、彼すね長が向ふすね、羽扇を以て打て廻れば、只さへ長き足なるに、手長人を脊負たれば、竿をたをすがごとくにて、かたはしより打たふせば、殘る者とも一同に、大手をひろげて取んとすれど、めつたに長きばかりにて、振廻し不調法なる腕なれば、左へくゞり右へぬけ、終に數萬の手長足長、一人も殘さず打たふし、淺之進は羽扇に打乘、雲間に入て見おろせば、手長どもはほう〳〵に、高ばひをして迯去ども、足長はたふれる時は自起る事ならざるものゆへ、皆腰に太皷を付て、こければ其太皷をたゝくに、常は外より人來て、大船の帆柱たてるごとく、轆轤にてまきおこせども、みな〳〵たふれし事なれば、只其儘にあがく躰、捨置ば餓死なんとて、羽扇を以てはつとあをげば、たふれ居たる數萬の足長、一度にすつ〳〵と立あがり、忙然たるを見捨つゝ、四五千里も飛行けるが、また大なる國あり。此國は穿胸國とて

男女とも押なべて皆胸に穴あり。貴人他所へ行にも竹輿乗物はなくして、其胸の穴へ棒を通してかきありけども、いたまず。辻〳〵には賤者ども、棒をたづさへて通りを待、人を見れば棒やろふ〳〵となんいへる事、日本のかごやらふといふがごとし。淺之進もかゝれて見んとは思へども、胸に穴なければすべきやうなく、段〳〵奥へ行に随ひて、家居も多く賑なれども、流石夷國にて人がらは皆賤きさまなれば、淺之進を見て上下男女立つどひ、扨も珍しき風俗、かゝる男の又あるべきにやと、引もきらずの人だかり。日を經るに随て、國中此沙汰かくれなければ、此國の主大孔王の耳に入、官人を以て淺之進を召れけるに、朝廷の群臣皆淺之進が容貌の美なるをぞ感じける。此大王に男子なく、當年十六歳の姫宮一人まし〳〵けるが、淺之進が器量を見給ひ、姫君も大王も此者を婿と定め、此國を譲あたへんと、群臣をも呼集めてさま〳〵評定有けるが、大王の勅命といひ、姫宮の戀人なれば、皆然るべしと萬歳を唱、いそぎ淺之進をむかへ、裝束を改んとて多くの官女達立つどひ、一間なる所へ作行、いろ〳〵の綾錦に金玉を以て錺たる、天子の裝束を臺に載、官女達とり〳〵に淺之進が帶をとき、裝束を著せ替んとして胸を見れば穴なし。みな〳〵大に肝を潰、裝束打捨逃入けるが、一間の方かしましく、能男とは云ながら、㒵容に引かへて思ひの外なるかたわもの、胸に穴さへなき形にて、此國の主には存もよらず。大王樣へも姫宮樣へも此由奏聞有べしと、つぶやく聲〳〵聞へければ、淺之進もあきれ居たる所へ、此國の大臣來りて淺之進に向て曰、汝が容勝れたれば、大王迎て子と

せんと宣旨ありしかども、只今官女が中にては、胸に穴なきかたはなるよし。都て此國にては智惠あるものは胸の穴廣く、智惠なき者は穴せまし。故に穴せまき者なんどは高位には登がたし。況穴なきものの天子にはなしかたければ、是までの約束變改あり。早く國境より追拂へと、大王の勅命なれば、此上何と穿胸國に一日も逗留叶はず、いざこさなしに早立のけと、下部はわり竹たゝき立れば、初の兒引かへて、妹背の緣も淺之進は、我胸をさぐり見れども元より少もあなうたてやと、例の羽扇に打乘て、蝦夷琉球はいふに及ず。莫剛爾古城蘇門搭剌浡泥百兒齋亞莫斯哥米亞莒牛亞剌敢亞爾默尼亞天竺阿蘭陀を始として、其外の國〳〵には、家業をしらぬうてんつ國、髮は本田に銀きせる、短羽織に日和下駄、じやうるり三絃座敷藝、お花といへる地色に打込、只遊ぶ事を第一とす。しかるに此國折〳〵は、大水出て、親の代より讓請し家業株、町屋敷諸道具衣類なんどを押流され、火の降こと度〳〵なり。又其隣國にきやん島といへるあり。神儒佛の敎もなく、からだはしぼり染のごとく、はりこみといふ網にて、あくたいと云魚を取て肴にし、大酒を呑できをひ歩行を業とす。又おそろしき國あり。其名を愚醫國ともいひ、又藪醫國ともいふ。此國の人皆頭を丸め、折に惣髮なるものあり。學問を表にかざり、人の病を直す事を業とすれども、近年甚下こんになり、書物を見れば目の先くらみ、尻の下より火箭もえ出、暫時も學問する事ならず。只世間功者にとばかり心懸、輕薄を常とし、てれんついしやうの妙術をきはめ、羽織は小袖より長く、竹輿のすだれはいき杖よりもふとし。睾頭媒屋敷の

賣買、天窓をふり立かけまはり、見へ第一の藥箱も銀かなぐはかゝやけども、中の藥は吟味もせず、牛膝は牛の膝と覺え、鶴虱には鶴のしらみを尋るといふ、古人の詞に違ひなき、笑止千萬なる國にぞ有ける。又四角四面なる國あり。其名をぶざ國といひ、又しんござ國とも云。此國の人、面大にして國なまりをいひちらし、他國より來し者におほへいをいへば能事と心得、しつぶかくして女郎にきらはれ、陰で笑はるゝを知らざる程愚なる國なり。又いかさま國となんいへる所に至れば、此國の人寄集、舟に乘て漕出し、樗蒲一嶋といふ嶋へ連行、目の一より六ツある猛獸に喰付せて、裸にせんと謀ければ、淺之進も早〳〵にて逃歸けり。かく樣〳〵の苦勞艱難、世界中の國〳〵嶋〳〵殘る所なく廻りければ、羽扇の妙ありとはいへども、元氣も足も勞れければ、朝鮮に至て人參のぞうすいを喰ふ事二月ばかり、又足を休んにくつきやうのことありとて、夜國に寐ること半年餘にして、草臥も直りければ、まだ羽扇に打乘て唐土へとこゝろざし、淸朝の主乾隆帝の住給ふ北京になん至けるに、廣き事類なく、繁華詞にも及べからず。いざや城中に入てながめんとて、彼羽扇を背に負へは、忽に影ぼうしもなく水鏡も見えざれば、しすましたりと笑を含て、大門より白晝に入ども人是を知る者なし。それより足にまかせて、數多の宮殿殘る方なく見めぐりけるが、後宮に至て打なかむれは、三千人の官女紅粉をいろどり、雲のびんづら霞の眉、玉をつらねし美人の粧、昔久米の仙人は、物洗ふ女の木綿湯具のひらつきて、脛の白く見へしにさへ通を失ひしためしもあり。かく數多ある美人の中に至りなば、釋迦

も黄金の涎をながし、達磨の目玉も絹糸のごとくなるべし。淺之進も心亂て城外に出る事をしらず、後宮の隅にかくれて、夜な／＼官女の閨へぞ忍びけるが、いつとなく其噂聞へければ、いかさま變化の所爲ならんと、宰相以下打集て評定あり。四方八方燈をてらし、寓直の武士嚴重なれども、何事も目にさへぎらず　然れどもかゝる事などは猶やまさりければ、扨は魑魅魍魎のしはざか、又は日本にてはやると聞、姫路におさかべ赤手のごひ、狸のきん玉八疊敷、狐が三疋尾が七ッの類ならば、打ものわざにてかなふまじ、貴僧高僧に命じて御祈あるべしなんど、評議一決せざる處に、宰相申されけるは、都て魑魅鬼神の類ならば、足跡はなきはづなるに、御庭のところ／＼人の足跡殘れるはいぶかしく、是にこそてだて段／＼有馬山、油斷する所にあらずと、閨ごとの入口に細なる砂を散し置、寓直の武士懐中火把を持て、忍びてなん窺ひ居ける。淺之進はかゝる事とは露白波の、戀の關守うちもねなんとつぶやきて、彼羽扇にて身を隱、一間なる所へ忍行に、容はさらに見へざれども、散し置たる砂の上、足跡の付をめどにして、忍居たる寓直の武士、彼火把をなげかくれば、飛んとする間もあらむざんや、惣身に火付て燃上れば、淺之進すべき樣なく、急ぎ帶を引ほどきつゝ、裸になりて飛出る内、羽扇も小袖も一時にみな／＼灰とぞ成たりければ、丸裸の淺之進が姿忽然とあらはれて、始て人目にかゝりければ、寓直の武士おり重り、高手小手にいましめて帝の前に引出す　されば樂極て悲生ずるとは、かゝる事をや云なるべし　宮中にては、ひそかに契て淺之進が身の上を知たる官女は、扨

もむさんの事なりと、忍び涙に袂をしぼり、又事あらはれなばいかなる目にか逢なんと、心安からざるも多かりけり。帝王は淺之進を御覽ありて、彼が人となりを見るに、其容貌賤からざる者の、何故かゝる術をなして、我後宮へ忍び入たりやと尋給へば、其時淺之進頭を振上、我は日本江戸の者にて、深井淺之進と申者なるが、我師風來仙人の敎にまかせ、諸國の人情をしらんがため、有とあらゆる國〳〵をなん見廻りけるに、此城中の後宮に忍入、思はずも官女の美なるに心まよひて、我本心を失ひし故、師の仙人のとがめにや、仙術をこめられし羽扇を燒れて術を失ひ、今は我身を有頂天、かくのごとくの丸裸、馬鹿のむき身と笑れて、異國に恥を殘さん事、是非に及ぬ次第なれば、とく〳〵刑に行はるべしと、詞すゞしく申上れば、其時帝も群臣も、扨〳〵珍しき事かなとて、猶諸國をめぐり見たる事なんと、くはしく申上べきため、繩をゆるし衣類をあたへ、樣〳〵酒肴をもてなして、帝太子を始として、百官百寮席をつらね、後の方には后よりもろ〳〵の女官達、日本人の寐言にあらぬ珍しき事聞んとて、翠簾の間に紙なんどはさみつゝ、ひそかにのぞきて聞居給ふ。淺之進漸心落着て、夫より諸國めぐりたる物語をなす事日をかさねければ、諸國の人物鳥獸山海の樣子まで、委物語有ければ、帝甚叡感あり。世界廣しとはいへども、我唐土の五岳につゞける大山は有まじきと有ければ、淺之進申けるは、仰の通り、諸國の山の内にては、まづ五岳が隨一なれども、我故鄕の日本には不二といへる名山あり。其大さ五岳にもはるかまさり、八葉の峰そばだちて、四時に雪の消ることなく、何れ

の國より是を見ても、白屛さかしまに懸ると詩にも作り、なか〳〵にいふ言の葉もなかりけり、不二の白雪〳〵なんど〻歌にも詠じ、風は人穴を出て三千世界を涼うし、雪は麓に落て白酒と成て旨がらす。五岳なんどのごときは、草履取にも不足なりと申ければ、帝大に驚給ひ、昔日本の畫工雪舟といへる者我國に來、彼山を畫しより、唐土人も三保の原、氣も浮嶋の風景も、我は其意を繪そら言にて、五岳には及ましと今迄は思ひしが、汝が詞を聞しより、初て不二の萬國の山にまさりたるを知れり。我も四百餘州をたもてば、何に不足もなけれども、不二山ばかり日本にまけたる事、無念類は中橋なれは、是より諸國へ申付、多くの人歩を呼寄て、不二山を築せて後世に名を殘すべし。汝は彼山を能見覺へつらんなれば、科をゆるして奉行となすべし。五岳の内何れの山にても、見立次第基として、不日に不二山を築べしとの勅命。淺之進謹で、私日本に生れたれば、不二の形あらましは覺えたれども、委事は存せされば、御役儀を承りて不二山成就したりとも、目利者に見付られ、爰の所は不出來なり、此岩は付物なんど〻、似せ物師の名を請ん事、末代の耻辱なれば、一まづ日本へ立歸り、不二山の雛形を取歸るべし。しかし其雛形も外に仕方も有さるべければ、唐土中の紙と粘とを取集、不二山をはりぬきにして、此方にて築し山にすつぽりと打きすれば、其違明白ならんといわせも立ず、幸相かぶりを打ふりて、昔秦の始皇の時、徐福といへる大山師が、蓬萊山に至て不死の藥を求んとて、おこはにかけしためしも有れば、うかつには呑込れず、其上か〻る大山をはりぬきにするは、紙代等

も御時節からには大そふなれば、出來兼山の子規、外に仕方は有ましきやと、冠をかたふけ思案あればゞ、淺之進すゝみ出、此事氣遣ひ給ふべからず。船に乘て行人は皆王の臣下なれば、中〳〵一人の私にて迯かくれはなるべからず。又不二山をはりぬく事は、我に一ッの仙術あり、紙と粘は御入用までもなく、唐土中の郡縣へ公役をかけは大方には揃ふべし。もし不足なる時は、我日の本の戀風や、其扇屋の夕霧より、藤屋伊左衞門へ贈たる、文をもとめてはりぬきにし、叡覧に備へ奉ん事、本に正直日天樣掛て少も違ひこれなしと、辯舌をふるふて申上れば、帝をはじめ皆〳〵大に感心あり。今に始ぬ日本人の智恵なるかな。いそぎ其用意せよとて、唐土中へ觸をなし、紙と粘とを集る事山のごとく、大船三十萬艘を寄て追〳〵に積立、經師屋の類はいふに及ず、素人までも小細工のきゝたる者は召出し、淺之進にも様〳〵の賜ありて、不二山張拔太夫といへる官を給はり、日和を見定め、三十萬艘一度に出船ありけるは、目さましかりし次第なり。

風流志道軒傳卷之四　終

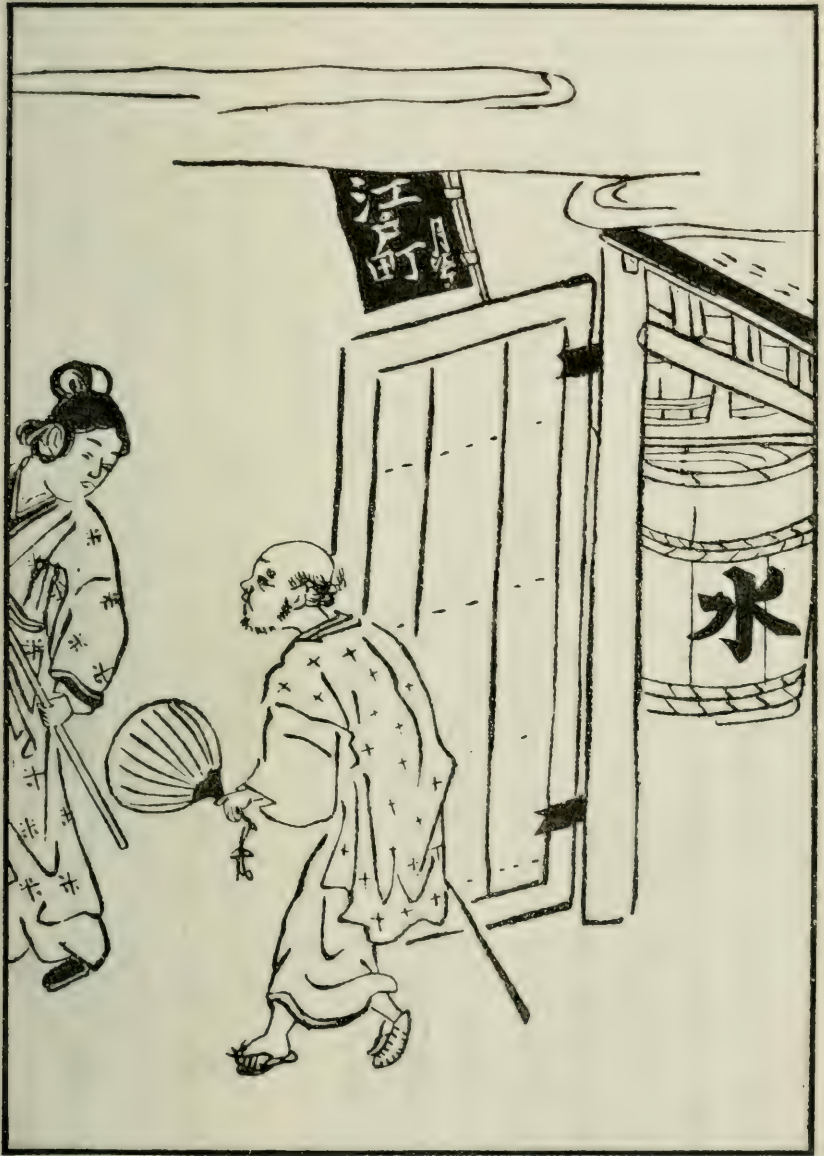
風流志道軒傳卷之五

抑不二權現と申奉るは、駿州有度郡に鎭座まします。祭ところ大山祇命の女、木花開耶姫にて、是を淺間の社と申奉る。されば神の靈妙はかるべからず。異國より不二山をはりぬきの用意ある事、忽ちしろしめされければ、我守護の名山を唐土へ寫されては日本の恥なりとて、愛鷹の明神に御內談まし〳〵て、曾我兄弟の神を早使にて、伊勢八幡の兩社へ御注進ありければ、卽時に諸國へ觸をまはし、則不二山の絕頂へ八百萬の神〳〵、神ンつどいにつどい給ひて、樣〳〵評定ありけるが、昔蒙古より責來し時の先例に任すべしとて、雨の神風の神に命して、急ぎちくらが沖に待請て、唐の船を吹くだけよと有ければ、風の神申されけるは、私共一族殘らずちくらが沖へ出張をなさば、其跡にては日本に風をひくもの一人もなくんば、醫者とも渡世に難儀たるべく思ほゆれは、少〳〵は跡に殘なんと伺ければ、諸神以ての外怒せ給ひ、若不二山をはりぬかれなば、日本末代の恥辱なり。何ぞや醫者の難儀ぐらいに替べきや。其上近年生れつきたる醫者は少く、家業にうときのら者ども、青菜賣は淺漬宅庵となり、肴屋は稻田安康、餠屋は佐藤養閑と名乘、あめ賣は雨井堯仙と改名し、氣のきれぬ麻布木庵が類なれば、はやらぬ時はほうろくはもとの土とぞ成にけりにて、餓死すべきには至らされば、

瑣細の事は打捨て、唐船日本におもむかは、雨風の神精力を盡し、霰の神雹の神もとも〳〵に力をそへ、戸板にごろつく豆のごとく、暫時の間に吹くだくべしと、はげしき仰蒙て、雨風霰雹の神は、雲を起して降て行。唐人どもはかゝる事とはいざ白波を凌つゝ、順風に帆をあげて、日本間近くなりける時、待もふけたる事なれば、黒雲八方より覆かゝり、方角さらにしれざれば、數百萬の唐人ども、うろたへまはる折からに、雨風はげしく吹來り、三十萬艘の唐船を一ッ所へ吹寄て、只一もみにもみくだけば、數十萬人の唐人共、海中に飛入て、水練秘術を盡せども、三十萬艘の大船に積置たる粘と紙、一度に海へ入たれば、さしもに廣き洋海も、紙漉の箱を見るがごとく、とろり〳〵とねばりければ、もちに着たる蠅のごとく、皆あら波に打込れ、數もかぎらぬ唐人ども、白あえとなりて死シたるは、むざんなりける事どもなり。爰に一ッの不思議あり。淺之進が乘たる船は、日本人のありし故にや、かゝる風雨の中にても、船は少もいたみもなく、何ちともなく吹流され、ゆらり〳〵と大船の、思ひ賴ん方もなく、風にまかせてたゞよひしが、覺えずも日を重て、糧も水も盡んとすれば、生たる心もあら海の、向を見れば一の嶋あり。初て蘇生たる心地にて、嶋を目あてに漕寄れば、此嶋は女護が嶋とて、男は一人もなくして女ばかり住る國〻。子を産んと思ふ時は、日本の方に向ひて帶をとき風を請れば、懐胎して又女子を産。王もあれども皆女なり。此嶋の掟にて、外より流來る人あれば、船より陸へ上る時、國中の女立出て、礒邊に草履を直し置、其草履をはきたる者と夫婦となる法なれと

も、はるかへだてし嶋なれば、是まで人の流來る事もなきに、此度船の漂着せしは天のあたへと悦いさみ、皆〳〵濱邊に立出て、前後をあらそひ草履を直せば、淺之進を始として百餘人の唐人ども、面々草履をはきつれて、陸珍しく立出れは、むかれし者は取すがりて、こんなえにしが唐にもあろかと、なれ〳〵しく悦びいさみ、はづれしものは浦山しく、聲〳〵にさわぎければ、此國の帝王より役人來りて、御用なるよし、百餘人の者どもを一人も殘らず竹輿に乘せ、城内へ連行ければ、大勢の女共は闇夜にへそをぬかれしごとく、うつとりとして居たりしか、打寄て相談しけるは、此嶋にそたつ者、上つ方も下ざまも、男のほしきは同じ事なり。いかに御威光なればとて、殘ずお上へ取上給ふは、扨〳〵つれなきなされ方。我〳〵生て何かせんと、皆一同に連判して、國中の者一人も殘ず城外へ詰かけて、男を返し給ふべし、左もなくは此城一ッ責破て目に物見せん。彼日本に名の高き巴板額にはあらずとも、女の念力岩とほすと聲〳〵に呼はりて、恨の氣天地に滿れば、帝も大にもてあまし、如何せんと評定ありしを、淺之進申けるは、所詮百人はかりの男にては、國中の者爭て、上へ取ば下うらみ、下へ行ば上恨なば、是亂世のもとゐなるべし。我に一ッの工夫有、唐にても日本にても女郎屋といふ事あれば、此上は私共百餘人の者申合せ、女郎のごとく店を出し、情の道を商ふへし。左かる時は此國の人、貴賤上下のわかちなく、金次第にて來るべければ、互に恨そねみもなし。此儀如何と申ければ、是はよろしかるべしとて、それより其旨ふれければ、何れも大に得心して、國中の女ども

圍を解て引退、扨都の北に當りて然かるべき土地を見立、四方には堀をほり、茶屋揚屋より諸商人の家〳〵まで不足なく建ならべ、一方の入口には大門を搆て、郭中の男は外へ出ざる爲にとて、關所のごとくに番人を付置、淺之進を始として彼百餘人の唐人を、五人十人引わけて家〳〵に店を出す。されば女なれば女郎といひ、また遊女なとゝいへども、是は男の傾城なれば、其名を男郎と呼、また遊男とも名づけ、又年の寄たるは、やりての役を勤れども、是も男の事なれば、其名を呼てとりてとなん改めつゝ、其外は何事も皆吉原を學びて、太夫よりかうしさんちや、下唐人は河岸へ追やり、引ぱりみせまで出しけり。衣類も様〳〵工夫しけるか、兎角日本の風俗か女の氣に入たりとて、唐人共も元服させ、捲上鬢に長羽織、紅白粉にて形を粧ひ、黄昏も過る頃、鈴の音聞ゆるを相圖に、つらりと店に居並て、燈〳〵わつと照渡れば、待もふけたる女客、格子に顔をおしあてゝ、何れあやめと引ぞわづらふ其内に、二階に上る客もあり、又は茶屋付揚屋入、對の禿に日がらかさ、羽織のゑりもしどけなく、つかみからけの八文字、押わけられぬ人たかり、此國開てこのかた咄にも聞ざれは、まして見る事は猶初なり。遊男を買て遊んとて、上を下へとこみ合て、押もきらぬ女客、初會も程なくなじみとなり、貰のもめ、ものの日の約束、いつしか客も粋に成て、立ひきいきはりのく切るの氣味合事まで、さして替れる事もなし。只世上の女郎に異なる事は、袖とめかね付の世話なきのみにてぞ有ける。淺之進を初め唐人ともは、始の程は面白き事いふはかりなく、天上の榮花も是にはしかじと、古郷の事

江戸町
水

も打忘れてたのしみけるが、いつとなう事足たる様に思へば、おのつから秋風の身にしみて、雨のふる夜も雪の夜も、本につとめはまゝならぬ、後には客を見るもうるさく、氣に入らぬ客はふつて見ても、男のふらるゝと違ひ、義理外聞もかまはす、夜中取つき恨歎は、そう〳〵はふる事もならず。晝夜をわかず勤ければ、半年も立ぬ内に色青く痩おとろへ、こつ〳〵と咳の出るを相圖にして、無常の戀風にさそはれ、百餘人の遊男ども、西方淨土へくらがへす。アヽ悲きかな生者必滅のことわり、人の命のはかなき事は露のごとく、またいなひかりのごとしと、佛の敎も此事になん。國中の女客は、一かたならぬかなしみの涙に袂をしぼりつゝ、我にこそ末かけてといひし言葉もありしなんど、くらきより暗に迷ふ戀路の習ひ、思ひの煙立登返魂香はくゆれども、門〳〵多き事なれば、幽靈さへも出やらず。しかるに淺之進は如何しけん、煩も出ざれば只一人生殘けるに、外の客も皆淺之進一人を目當にして通ひければ、後には晝夜を五十程に切て幾度ともなく勤れど、體金鐵にてや有けん、少も元氣おとへざりけり。淺之進もつく〳〵と我身の上を觀ずれば、かく一人生殘れども、身請せらるゝ事もなく、一生勤死にしても末のつまらぬ事なり。日頃面白かりし色遊も、常になりてはうるさきものと、女郎治郎の身の上までを思ひやり、あじきなき世の有様と、思ひつゞけて居眠折から、何國ともなく風來仙人忽然とあらはれ出、藜の杖を以て淺之進を打すゑれば、淺之進誤入面目もなくひれ伏けり。其時仙人聲をあげ、それ人世の中に有ては、功成名遂て身しりぞくは、春夏にさかへし草木の秋、

冬にしぼむがごとく、是卽天の道なり。范蠡が五湖にのがれ、張子房か赤松子に托せしは、進退の時をしりたる古今に類なき智者の手本、また千里の馬たりとも、伯樂を得ざる時強て功を立んとするは、夏日に氷を求るに似たり。譬わづかに出來たりとも、室咲の梅の色香薄く、しかも盛久しからざるがごとし、或はまた君を得るとも、其身に鷹の能あるもの、摺餌蒔餌にて畜んとせば、籠を離て飛去べし。雲に入の勢ありとも、其身餓に至りなば、却てすりゑにて事足れりとする雀天告子にもおとるべし。鷹は死すとも穗はつまず。主の目はぬき食ふべからず、速に世をのがるべし。但山林に隱るゝばかりを隱るとは云べからず。大隱は市中にあり。其かくるゝ事一にあらず。賣卜にかくれ醫に隱れ、詩にかくれ歌に隱れ、東方朔は世を金馬門にのがる。我汝に教も、世界の人情をしりたる上にて、世を滑稽の間にさけよと教しに、汝物にふれて心動し故、却て難儀なる事度〳〵に及べり。人の浮世にまじはることは、只錢湯に入がごとし。穢し中へはいる事は、其穢を請ん爲にあらず、けがれを以て穢を落し、掛湯をして出たる時、我身はいつも淸淨なり。此理を以て世に交らば、我側に袒裼裸程すとも何ぞ我をけがさんや。汚泥の蓮花を染さるは、涅にすれども緇まざるの理なり。しかるに世の人、物の爲にとらかさるゝが故に、我身をそこなひ家を破、遊女狂ひにとらかさるゝばかりを、とらかさるゝとは云べからず。何事もなづめば害あり。汝こそ世界中の國〳〵嶋〳〵をめぐりて能見覺へつらん、何れの國に至りても、君臣父子夫婦兄弟朋友の五の道にもるゝ事なし。人のみにはかぎらず、蜜

蜂の飛に君臣あり、烏の反哺鳩の三枝に父子の禮備れり。鷄羽をさげて雌を愛し、猫の不遠慮にさかるも夫婦の道なり。鼠は十露盤に乘る兄弟あり。犬の尾をふつて集り、鰮すばしりの海にかたまるも、皆朋友の道なり。さればこそ天地の間を引くるめて、聖人の敎に上こすものなし。夫故に伊藤先生論語は宇宙第一の書といふ事、尤至極のことにあらずや。其論語の中にさへ、また時の宜に隨ふべき事あり。沽酒市脯くらはずとはいへども、越後の鹽引周防の鯖、串石決明海參の類、學者もどぶへ捨た事なく、祭の醴より外に、内で酒を作たる先生もなし。是唐には池田伊丹といふ名物の酒屋もなく、又海に遠き國故、鹽引類の旨ひ事をしらず。狗や猪を食ふ故に、其敎もまた異なり。薑を捨ずして食ふとはいへども、鱠のけんは食ぬと云が又日本の禮なり。井戸で育た蛙學者が、めつたに唐贔負に成て、我生れた日本を東夷と稱し、天照太神は吳の大伯に違はないと、附會の說をいひちらし、文武の道を表にかざり、ちんぷんかんの屁をひつても、知行の米を周の升ではかり切て渡されなは、其時却て聖人を恨べし。誰やらが、制札の多きを見て國の治らざるをしりたりと云がごとく、亂て後に敎は出來、病有て後に醫藥あり。唐の風俗は日本と違ふて、天子が渡り者も同然にて、氣に入ねば取替て、天下は一人の天下にあらず。天下の天下なりとへらず口をいひちらして、主の天下をひつたくる不埒千萬なる國ゆゑ、聖人出て敎給ふ。日本は自然に仁義を守る國故、聖人出すしても太平をなす。唐は文化にとらかされて國を韃靼にせしめられ、四百餘州が罌粟坊主に成ても、みづから大淸の人と覺へ

て、鼻をねぶつて居る様な大腰ぬけのべらほうともなり。日本にも昔より清盛高時がごとき悪人有ても、天子に成ふとは思はず、日本で天子を疎略にすると、慮外ながら三尺の童子もだまつて居ぬ氣に成といふは、忠義正しき國ゆゑなり。夫故にこそ天子の天子たるものは世界中に双國なし。唐の法が皆あしきにはあらず。されども風俗に應じて敎ざれば又却て害あり。日本人は小人嶋を虫のごとく思へば、また大人は日本人を見せものにし、穿胸國では全き人をかたはと心得、手長足長のふつり合なるも、皆是土地の風俗なり。天竺の右肩合掌、日本の小笠原、其仕打うちは替れども、禮といへば皆禮なり。只聖人のすみかねにて、普請は家内の人數によつて、長くも短くも大にも小にも、變に應じて作るべし。經濟の道は風俗を正し、足さるを補、ゑげきをはぶく事、時に隨ひて變に應ず。柱に膠し酌子を以て定木とは炙がたし。然るに近世の先生達、畑で水練を習ふ様な經濟の書を作て俗人を驚こと、かたはら痛き事なり。其位に在ざれば其政をはからずといふ聖人の敎を忘て、聖人の道を説出すは、相撲取のふんどしを忘て、土俵入をするがごとし。其外浮世の口過學者、管の孔から天をのぞき、火吹竹で釣鐘を鑄やうな偏見を説出し、我身も薯蕷が鰻鱺になるやうに、尻の方から二三寸程を出來合の聖人に成かゝりたれは、麒麟鳳凰に星入のひけ物でも出そふなものと、自負する學者も世に多し。聖人の敎てさへ、其道にとらかされし屁ひり儒者の手に渡れは、人をまよはす事多し。ましで其外の事においては、なづむ時は大に害あり。汝人情を知んがため、諸國をめぐる其内にも、

唐土にて宮中に入、官女の色に溺しゆゑ、羽扇を燒れて難儀をせり。又人の樂は色慾に上なしと、汝常〳〵思ひし故、女護が嶋へ遣して遊男をこしらへ、色慾のあぢきなく人の命をそこなふ事を目のあたりに是を知めす。只浮世は夢のごとし。汝若しと思んが、うか〳〵諸國をあるく內、はや七十餘年の星霜を經たり。いざや汝に知めさんとて、鏡を取て指むくれは、彼浦島が昔にはあらで、今まで若かりし淺之進、八十ばかりの翁と變し、からたには肉薄く、顏は皺のみにして頷長く、鬢髭も皆ぬけて、おのづから法躰の姿をあらはしければ、我身ながらもあきれはて、あたりをうろ〳〵見廻せは、不思議や虛空に音樂聞え、光明赫灼とかゝやき、紫雲に乘て降るものあり。程なく淺之進が右の手にとゞまりたるを能見れば、木にて作たる松茸の形せし物にてぞ有ける　其時仙人ゑみを含、汝が其手に持たるこそ、昔景清が難儀の時、清水の觀世音身替に立給ふがごとく、其方女護が嶋にて、大勢の唐人どもと一度に死すべき命なりしを、淺草の觀音木の松茸と變し給ひ、汝が身替に立給へり。此御恩を報ぜんため、是よりはやく國に歸り、道に志と云ふ文字を取て、志道軒と名を改め、淺草の地內において、をどけ咄に人を集め、浮世の穴をいひ盡して、隨分人を戒べし。汝が咄を聞內にも、女あれば人の氣浮れ、坊主は慢心あるものなれば、坊主と女の毒を云て、暫時の內に追まくるべし。イザかく來れよとて飛去を、藜の杖をとらへて仙人に隨ひ行ぞと見えしが、淺草の地內にて、芦簾かこひし床の上に、茫然として坐し居ければ、參の老若立つどひ、床几に腰を打かくれば、彼松茸にて机

たゝき、トン〳〵〳〵〳〵トトントン〳〵、とんだ噺しの始り〳〵。

風流志道軒傳卷之五　大尾

跋

笑の由て来ること尚(ひさ)し手を拍歌代は
昔天孫(すめみまご)の天(あま)秋津洲(あきつしま)に降臨(あまくだり)ましく
ける時猿田(さるだ)彦(ひこ)の大神衢(ちまた)は八衢(やちまた)にして
こゆ紀の詠を遮(さへぎら)玉ふ其に天細女命(あまのうずめのみこと)の胸(むね)
乳(ち)をかき出し裳帯(ひも)を臍(ほそ)の下におし垂(たれ)て立
むかひあひければさしもの大神も七郎は
鼻をうつくの勢和(あう)殽(かく)殽(ち)の眼(まなこ)を細(ほそ)めて

和て掌(たなごころ)を抵(うつ)て、笑ひあかりてこゝろよく遊
べ、是末の世に滑稽(こつけい)をなし、多人を笑はし
むる縁(ことのもと)なる哉。しかるを陸雲(りくうん)が癖(へき)
はやく尽きて、或ある山川の端に笑ひ
新なん花に雪月に酒を喰ば咽(のど)に涜
る。種笑はれ候が津(つ)にむせるもありおゝのし
付きども笑ふつかまつる福の神はいぶ
ちいみけん面の家の冥(みやう)助もなく笑ひ御の

護念なきと浅くさすの璧の月深く朝師
売の孫に賞物あま替といふ掛乞に猶我抱
ゆへ親友誅るも古文真寶の理屈我ながら寸
きば簾如気弱あいきを虎渓過ては三笑如
仲間なきと加ふり進周其獨笑に雑人等我
思ふ頃関東子一奇人有り今既に乞食と
終に知ふ恨らくハいまゞ乞食我見て笑ざ係
きくと友人風来子ぶれく傳へて書て弥らる

予辛業ゝ曰嗚呼法師何人ぞや摩訶
迦葉の拈華微笑に非んバ薬山禅師の山月
を拈するならん吾法人と共に知事飛して謙ぞ共
にうせん孫子笑て出来に書にいふ笑を失方
に厭可是就可平時癡膺未然參須東王
らひの圖志い尊平ん鯤子筆於精進齋
中に操る

雜集

佐野川市松油店

壺屋四郎兵衛

駿河屋清兵衛

△市川屋新之助

△新万屋三十郎

〃 市村羽左衛門

市村羽左衛門油店

△今津屋文吉

△奥村屋小平次

大芝居

市村羽左衛門

福山平兵衛

△金田や佐七

松屋清兵衛

坂町子供名寄

座敷壹四切夜四切
但し一切ハ四匁六分夜六匁
○仕舞弐両弐分　片仕舞壹両壹歩壹歩
兼壹両壹歩ツヽ小花壹分ツヽ
○供花代ハ小花壹ツ付壹切ツヽそもいはる
かり

若勝

巳ノ屋仁兵衛

中村菊蔵　中村豊吉
中村雛次郎　中村菊三郎
中村辰五郎　中村豊蔵
中村常次郎　中村八重八
中村染菊

江戸屋新七

十八

中村文七　下り 中村雛吉
中村秀太郎　下り 中村岩助
中村幾安　下り 中村富吉

山城屋彦市

嘉助

大和川蔦五郎　大和川菊次郎
大和川喜菊　大和川紫浦
大和川友市　鹿岩吉
大和川梅之助

壺屋藤八

半兵

藤村駒吉　藤村乙松
藤村若松

扇屋幸七

松八

中村花咲　下り 鹿家蔵

魚屋佐平次

清松

荻野鶴吉　下り 荻野仙治
荻野初野　荻野豊吉
下り 荻野乙吉

天王寺屋惣七

中村織吉　中村兆松

正津屋弥七

喜助

藤屋安兵衛
へ斎藤瀧壺　へ斎藤条松
へ斎藤縫助　へ斎藤銀次郎
へ都鶴吉

藤屋兵左衛門
へ竹井京七　へ竹井喜孫三郎

都合七人

英町子供名寄

裏三切　表二切
○仕舞五ツ六分　片仕舞五匁五分
分ノ小夜五ツ分

三河屋源平次
菊川兵吉　菊川熊吉

菊川歌代

天龍屋源八
袖濤常丞　袖濤くまよ

近江屋安次郎

藤村吉次　藤村千代吉
藤村房吉　藤村金吾
藤村鶴弥

都合十人

八町堀代地子供名寄

裏四切　表二切

加賀屋利兵衛
袖濤熊吉　袖濤藤九郎
袖濤国八　芳澤幾蔵
袖濤吉十郎

紀伊国屋将兵衛
中村金次郎　中村壺兵衛
中村吉弥　中村菊野
中村勇次郎　中村千蔵

都合十一人

惣計二百六十六人

篠塚菊蔵　沢村菊之丞
榊山千菊　尾上粂助
小荻川豊鼓　三保木秀松
市川吉太郎　小佐川乙吉
花深熊蔵　尾上藤蔵
桃井之吉　中村富安
中村松代　嵐小雛
山下徳次郎　花深市蔵
藤川之吉　三枡徳次郎
桜井喜代蔵　沢村吉蔵
嵐毎々吉　佐野川万吉
山下半太夫　嵐家保助
榊山徳次郎　篠塚岩蔵
佐野川与茂吉　坂東助之郎
榊山松之助　中山巳之助

都合八十五人

右ハ大和屋播磨屋恵比須屋見世へ出ル子共ハ
難波新地ヨリ茶屋ニて子供屋ヨリ出ル

大坂道頓堀子供名寄

出版
○本舞台一切九歩中舞台一切六歩ゟ大芝居一切
五歩役者芝居役者ハ若手子共何も同雑用ハ別也

姉川菊八　市山富之郎
山下八百蔵　嵐亀吉
山科甚吉　山下岩太郎
嵐袖助　桐島定次郎
嵐吉次郎　富沢繁蔵
中村八重蔵　荻野万吉
浅尾虎吉　芳沢當太郎
姉川万代　嵐粂吉
芳沢いろは　三條菊勝
十木金太夫　生島かとん
生島金作　中村豊露
生島吉太郎　宝山松之丞

玉川冨吉　浅尾喜代儀
嵐吉市　中村新菊
中村粂次郎　中村光菊
中村数馬　中村亀吉
西川音吉　嵐十七勘
嵐金蔵　嵐常蔵
荻野千次郎　藤井花吉
藤川与市　浅尾菊吉
冨山吉蔵　袖崎房次郎
桐野谷庄吉　桐野谷市吉
姉川鶴次郎　姉川岩次郎
竹中万三　和哥山太吉
三桝常次郎

都合四十九人

右ハ坂町ノ関東屋中村屋ヒ廿一出家
又出てかもあり
それかあんハ新地坂くにかの新地天満ホ
乃子供ハ皆お手伴かく出之

諸国男色在所

尾張 名護屋　駿河 府中
伊勢 古市　春芝居ハ正月より霜月まで 夏芝居秋芝居追て相定る也
相州 伊勢原　下総 銚子
奥州 仙台　紀州 三日市
同 會津　同若松紙屋宿
備前 よ八せ　安藝 宮嶋
備中 玉島　讃岐 金毘羅
同 宮内　同 白鳥

右の所々旅芝居の子供あつまり多くハ大坂よりきたる

阿州 徳嶋 さくら八丁目 行者坊 新ちよ座 いつも二三座あり
豊後 浜市に二三座あり

右二ケ国ハ其外にハ歌舞妓座ありて子供
と住在近国へ旅芝居し出るなり
此外唐土天竺阿蘭陀までやつから西土八
欒男色ある所等追々考べし

金の生木

序

唐の毛唐人の語に曰。猶縁木求魚こ、不能事のたとへにいへど、樹上に魚あり、山椒魚となづく。又青陽の凧も、梢に懸つて枝を折。旦那寺に木魚あれば、黄檗寺に魚板あり。堂塔伽藍に懸魚あれば、社の上に鰹木あり。只木に縁てなき物は、錢と金との一ッ而巳。故人風来山人金の生木の說を辯ず。是を以て是を見れば、金の生木もなきにあらず。嘘なら讀でごらふじろ。

安永九庚子

下界隱士　天竺老人書

金の生木

今年如月初つかた、黄昏の物淋しきも過行、照もせず、曇りもやらぬ朧月のさし入たるに心動き。簾をかゝげて是を望めば、香爐峰の雪にはあらで、咲亂れたる油菜畑は、花の露そふと詠じたる、玉川の詠におさらず。貪らずして居ながら滿地の金を見、茶筌草の青〳〵たるに、國の富べき驗を知、東風

吹松の爪音もいとしめやかなるは、實や一刻價千金と、口すさみたる折しも、扉を叩く者あり。則門人何某なり。そこはかとなきよしなし事を語興じて、笑話數條に及びしが、事の序に問て曰、古來よりの童謠に、酒涌井とな、金の生る木がわしやほしいといへることあり。此頃家語を閲するに、孔子童謠を以て萍實を覺し、又一足の鳥を辨ず。左すればかゝる童謠も。聞捨べき事にあらず。天地造化の妙工にて自然にかゝる物ありや、ねがわくは是を聞んと。予笑て答て曰。酒涌井なきにしもあらず。唐土に酒泉の地あり。吾日本雄略天皇の御宇に當つて、濃州本巣の郡なる、山峽の瀧壺より、不思議の靈水涌出る、是杣人が孝心より。天の醤の賜にて、自然と味ひ、酒の如く、老を養ひ壽命を保つ。則ち文字も其儘に、養老の瀧水迚。朝庭へも捧し由。今も東都に泉町、四方が名酒の瀧水は、此味を寫せるなり。金の生木といへる物、是亦果して無にあらず。近頃世上に拂底なれど。長目飛耳の藥本にもと。一枝是を貯へたり。門人驚て曰。先生かゝる異物あらば。幸に見ん事をゆるせと、ねもころに是を乞ふ。依て箱を開て取出せば、門人咲て曰、先生寢惚たか。是通用の小判にあらずや、爰に於て敎て曰。此木に花の咲初しは。人皇四十五代聖武天皇天平元年。陸奥の小田といへる山に、初て花咲實のりければ。目出度御代の例迚。年號に盛寶の文字を加へ給ふ。大伴家持卿。

　すべらきの御代榮んとあづまなるみちのく山に金花さく

と、詠じられたる和歌に寄り、山に金華の名ありとかや。今の浮世にいたるまで、紙にて是が形を作

り。名も紙花のからせいたく、金の替りに通用するも、昔の花をやるなるべし。金山に蔓を堀、剛鐵といへば葉の字に通ひ、山吹色と名を呼も、花に縁ある故なるべし。實を結ぶに大數あり。花びら二十片にて小粒の實を一粒結び。十五片にて一粒結ぶ。是定式の數也しが、近頃にいたりては。盲仙人の法を行ひ、此花わつか三片にて、一粒の實を取さへあるに、春の卯杖の催促に、實かならずは芽をかくぞと、盲叩に嘖はたり。一月に二度、實のらせけるが、燈消んとして光り強く。物壯なる時は老といへるごとく。一躰植手の痴徒が。實を取事に目がくらみて。ついに元木を枯して仕廻ふ。これ末を知て本を忘るゝの白痴なり。爰に一ツの說あり。試に是を辨せん。凡天地の物を生ずるや、鳥獸魚蟲の類は、羽あれば手なく。角あれば牙なく。燒事もなく煮る事もなくして、造化のまゝに是を食す。象は鼻を以て箸とし。鷲は爪を以て庖丁とす。林に住鳥、足の踏分なるは、木にとまりて食を求るに便あり。鷺の足の長きは、泥鰌を踏に勝手なり。梟の夜步行。蛙の長寢も。皆夫〳〵の食物あり。人は是に異なり。半は造化に出、半は人功に依て是を喰ふ。故に稻に飯はならず。蠶反物を吐ず。網に濱燒はかゝらず。是人は羽なく、嘴なけれ共。萬物の靈なるが故に、智といふものありて、さま〳〵の器を作り。自ら是を製して食す。鳥獸の造化のまゝに喰ふに異なり。斯事欠ぬ人間に、何が爲に、天小判を作りて木に生せんや。金は麗水より生ずといへど、夫は沙金の事にて、是は人功を歷ざれば通用の金にはならず。爰を以て考ふるに、諺にいふ金の生木は、ナニヌ子ノの通音にて、金に成氣とい

ふ事なるべし たとへのふしにいふ通り、男は裸百貫なれば、空敷竪子の名をなさんやと。勃然とし
たる心を持。金にする氣で身を入たら、六藝雜伎の其内で、何ぞか一ツ仕裸せて、金に成らぬ事ある
まじ 此頃聞ける噺あり。山の手邊に卜居するさしたる浪人なるが、劔を好む事法に過たり 若心
に叶ふ劔あれば、其價の高下を論ぜず 或は古董家にある所の古横刀の目利をなし、又は柳原の干店
に 錆佩刀を買求て、堀出しの得物をなし 貯もなき身代を、刀の料に入上る 世に身を打といふ事
も、此人よりや、云初けん。然る折から、去高貴の君侯より注文ありて、貳尺八寸の正宗の刀、幷に大原眞
守の差添を、需給ふ事しきりなり。近習の侍臣道具屋、刀屋の數を盡して、普く四方に尋ぬれど、似よ
りたる品もなし。或人此由を聞て、彼家に至て物語れば、折節金子入用にて。もしや我所持の内に、
左の通りなる刀あらば、幸の事なり迚、多年好みて集たる、數百振の劔の內、あれ是と尋ければ、同
作同尺にて、同寸の物三腰、いさゝか寸の違し物五腰、までありしとなり、爰に於て思けるは、かゝる
やごとなき大諸侯すら、得がてにしたる打物を、八振迄所持する事、是全く劔を好むの一路に、心を傾
しゆへなるべし。我劔を求るの價に追れて。常に家政の扶を欠。是より金子をこのむならば。などか
集らざる事あらんやと。即時に心決定して、打物を殘らず拂ひ、千三百片餘の金子を得。夫より日增
に富を得る事、磁尺の鐵を吸が如し。是一ツ心の決斷早く、こだわりなき心ゆへ、自と金も集るなり。
梅か枝か無間の鐘も、夫を思ふ一念より、付さんびよもなひ手水鉢を、金になる氣で、叩きしゆへ、錆

替りの三百兩。惜いほしいが積つたら、盲でさへも溜る金。豈手に入ざる事あらんや。兎角前にもいふ通、萬能一心一向に。金になる氣でやり付たら劍術者ならば僧正坊。學問ならば文宣王。役者は海老藏。作者は近松。昔の人の上を越し、四海に溢るゝ高名には、自と富貴自在にて、身代ずつゑりあたゝまる。室には金の花を咲、實入もゑつかり受合なり。汝も今より心を勵まし、金に成氣で出精せば、物産は時珍を挫き。藥性吟味は往古の神農氏にもまさるべし。嗚呼小子勉哉。門人興をさまして去。

于時安永八年己亥二月。

門人　無　名　子　誌

跋

我風來山人口豆の種を播て、芽を吹せ、枝を咲せ、取て是を書肆にあたふ。則書林大觀堂、櫻木に繼穗をして、普く世間へ賣出せば、櫻木金の生木となる。予手を打て嘆じて曰、道理で、南瓜が唐茄じやと、書して是を後に附す。

安永九庚子とし

日本創製 寒熱昇降記

（香川縣大川郡志度町渡邊富三郎氏藏）

寒熱昇降圖並譯文

蠻語タルモメイトル

按ニ蠻語を漢字ニ當るニ。語脈の遠なりて。的當ならざるもの多し。譬バゴートはさむし。セールはおほひなり。エキスタラハきはめてといふことなれども。ゴートニ寒の字を用ゐ。セールゴートニ大寒の字を用ゐてハ。辭當れるに似て意通せず。故ニ今意を專らふして改め譯しぬ。

日本創製寒熱昇降記

明和二乙酉のとしきさらぎの末。阿蘭陀人東都ニ來る。大通詞吉雄幸左衛門兼てより交深ければ。日ごとに訪ひ侍りぬ或日吉雄氏いと珍らかなるものなりとて二の器を出だし。各紅毛人乃工出せるものニして。一をアラキフルートルと云。一をタルモメイトルといふ。アラキブルートルは。酒と水とのよし惡を知るものなり。これを酒中ニ投る（いる）ニ。酒よければ少く沈み。酒惡ければ多く沈む。タルモメイトルハ

即右に圖せる寒熱昇降なり。銅の板に分度をしるし。上に硝子の管あり。管の中に薬水なり。此薬水の昇降を以て。時候乃寒暖を計る器なり。暖なれバ薬水自昇り。寒けれバ自降る。其價百金にして猶得がたしといふ。僕是を視て笑て曰。蠻人かく淺ぢかなる工にて。我邦の人を惑ハす。若日本人拙にして。かゝる物を奇なりとし妙なりとして貴び翫ぶ。新井先生の五事略に論し玉ふごとく。我邦の寶貨年を逐て減じなんと。嗚呼惜むべし。故に彼國より來れるもの悉く我邦にて製出して。これを防ぎなんと數年心を用れども。力足らずして徒に過行ぬ。此兩品のごときハ。もとより一目撃（ひとめして）其理明白なれバ。製し出さんこと囊中の物を探るよりもいと安し。吉雄氏曰此物阿蘭陀人といへども。數十年の考へにて。漸作出せり。今容易にこれを作んや。予曰只陰陽の理を知るに過ず。試にこれを告んと。即彼二ツの物製し出す術を述ふ。然れども滿座の人猶信ぜさるの色なり。只吉雄氏と我友杉田玄白。中川淳菴の三士。大に感服す。其後事しげきにまぎれて。打捨置けるが。今年正月いたはれることありて。廿日ばかりの閑（ひま）を得ければ。戯に彼タルモメイトルを製出して。好事の方々へ贈けるに。如何して考へ出せるなどゝたづねものするに。答ふることのいとも煩しければ。彼事を思ひ出して。其あらましを記しぬ。

明和五年きさらぎ

鳩溪平賀國倫誌　［國倫］［士彝］

武州秩父郡中津川村吹初金

（香川縣大川郡志度町平賀輝子氏藏吹初金説明書）

中津川桃久保と申所之山ヲ三十七八間堀入候左右ハ何レモ堅き石にて御座候其中に一筋先日御覽入候通さら〳〵仕候砂御坐候是を鏈筋とも又蔓共申候是を目當に何方迄も堀入候右之砂を水にて板流し申に仕其土ヲ鉢にて汰（ユリ）申候得ハ金と砂を相分申候汰候者ヲ板取と申候此者至而希に御坐候霜月頃方右砂に金ハ見へ候得共右之板取無之素人にて少々汰試候所初に先足程取れ申候ヲ吹立申候是ハ素人にて取候故金と銀と分兼候故金ニ銀交リ居申候故色薄く御坐候本板取ハ金銀砂鉄砂なと皆々ゆり分申候極月廿日ニ奥州會津方板取石抱參候而廿二日ニ砂壹斗程汰候所ニ砂金壹匁二分出候由大三十日ニ山方飛脚參候右ミ砂ハ堀候得ハいくらも取レ申候堀候砂ヲ入レ候ハ莚三ツ切ミかますニ而御坐候是をむりと申候此壹むりに金貳三分ハ可有御坐候由右ミ板取申候一日ニハ二十五むり程ハゆり立申候故二歩ヅヽニ而も五包程ニハ相成申候相續出候得ハ先入用程ハ御座候右蔓筋之砂たまり候而石に相成候得ハ金多出候是を大直りと申候只今之様子ニ而ハ大直リニも近く有可御坐候と皆々歡居候

武州秩父郡中津川村初吹金

武州秩父郡中津川村產爐甘石

（香川縣大川郡志度町平賀輝子氏藏爐甘石說明書）

爐甘石と申藥種ハ是迄唐渡斗ニて日本ゟハ出不申候夫故甚高直ニ御座候百六十目斤ニ而下三十匁上々ニ而ハ七八十目迄仕候本草ニも爐甘石ハ金銀ミ苗也金銀ミ穴ゟ出候由御坐候故兼而申付置候處去暮指越申候廿八日此地藥問屋功者成者へも相談仕候處是迄唐渡ニもケ樣の上品ハ無御坐無類ミ品と申候則彼藥問屋引請可申候と相談最中ニ御坐候江戶ニて壹年二千斤ハ賣申候猶又上方へも遣樣手段仕候是ハ金銀の前立ニて淺く堀候得ハ早速出候故入用も多不掛急ニも取申候隨分澤山ニ出申候故先千斤斗差出候樣山方へ申付候千斤ニ而廿箱馬荷七駄ニ而御坐候斤一步ヅヽニ仕候而も千斤ニ而ハ二百五十匁ゟ物御坐候出方ハ隨分丈夫ニ御坐候得共兎角此上ハ賣レ方一通りミ儀ニ御坐候尤和產と申候而ハ能ても信仰ニ無之樣世上ミ風ニ御坐候故藥問屋ゟ堺へ遣堺ニて唐渡の通ニ拵させ京大坂江戶へも出候積ニ御坐候後ミハ御願申上唐渡御停止ニ相成候樣仕候積ニ御坐候今迄唐ゟ參候品ハ日本ニて見出唐渡相止候得ハ大手柄と皆々申居候唐渡よりハ勝れて上品ニ御坐候功者成者共へも御見せ可被下候

文會錄跋文

跋

古人有言曰賣藥者兩眼用藥者一眼服藥者無眼至如後世不獨服者之無眼而賣者與用者亦俱無眼矣今夫本邦賣者亦是誤認翻白菜爲柴胡萬年青爲藜蘆之類不可枚擧是我旭山先生所深憂也今茲初夏先生會同好諸子相與出藥物數品辨其眞僞品其上下且就中世所不普知者命畫工圖之輯爲一書遂上之梓以公于世蓋志斯道者據此書採擇則庶免所謂無眼之憂哉

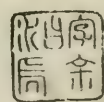
皇和寶曆庚辰仲夏讚岐平賀國倫謹識于東都聖堂偶舍

寢惚先生初稿序

味噌之味噌臭非上味噌也學者之學者臭非眞學者也方今學者移居於品川思濱漢土之裏店放屁于日黑構入唐人之人別所謂品水練爐兵法議論雖與鼻高不能鈎口于天非論語四匁世說六百以比切店蹴轉名之曰放屁儒孔門辻番窺見宗廟之美其也御簞笥町矣友人寢惚子

請余序。其初稿余讀之。詩或文若干首。徑沿秦漢之派。直至開天之域。辭藻妙絕。外則無之哉。先生雖則寢惚。探臍能知世上之穴。與彼學者之學者臭者相去也遠矣。嗚呼寢惚子乎。始可與言戲家已矣。語曰。馬鹿不孤必有隣。月之所寄晴之寄。余有感于茲。序以傳同好之戲家。如此爲野夫。未如之何也已矣。

明和丁亥秋九月

風來山人題紙鳶堂

大平樂跋

滅方海者。河東之隱者也。常住下路次于鎖。自比閉戸先生者。晝之間事也。若夫至行水終夜食過已入夜則梟起熊歩。問索當世之穴。以遂成此集焉。及欲草稿漸出來而板行附。請跋於予。予閱之。字々突雜談。句々極漂泊。淸雅雄渾。急度上也。嗚呼目出度兮。此集也。世間戲氣見之。又能重盡戲氣。戲氣莫大焉。

明和己丑八月書於八幡山毛午房

桑津貧樂

鬼外

福內

蝦夷松前島序

此書何人の作たることを知らず或人の秘し置れしを貝管にこひ得て是を閲するに地理人物より山川物産言語等に至る迄予か先きに聞ける所に同しけれは僞書にあらさるものならしとかりに寫し畢ぬ

明和元甲申秋八月

鳩溪山人

淨貞五百介圖序（東京帝國大學文學部史料編纂所藏）

年の名を寶曆といひて十年の夏のはじめに讃岐の國高松の君東のおほきの御ことをうけ給りて八百丹よし平らの宮所へまうのほり給ける時おのれしもつかへまつりけりおのれもとよりよろつのくさくさをとりてそがよしあしをわきまふることをわざとなんしけれは草木よりはし鳥にまれ獸にまれ石にまれ貝にまれ或は珍らか或はよし有へきつらは道ゆきふりにとりてまいらせよとなんおほせたまへりける御使の事をててかへりますとたゞにさかみの國の十塚のうまやにして以まし國倫こゝゆ浦々にゆきて貝つものこゝらとりてまいらせよとのたまひけれはやかてたきゝこ類かまくら山をこえて江の島より三浦見さき浦賀金澤てふ所白波のおりそ海におりたちてくさ〳〵の貝をぞひろひたるなほえかてなるを人のもた

ると聞てはこかねしろかねにかへ或はあま人におほせてちひろのそこれまた見ぬ貝をもこゝらかつ
きこえさせつしかしてそか名をとふに人ことにことにしいへはえもわきまへあへきここに鶴か岡の正
覺院尊照法印はよく貝の名しれりと聞まゝに行てとふに法印のいへらく（法印原作上人註云こは天台宗か上人といふへきにや僧位ならは大德なといはんか）靈元院おほきめらること貝を
をかしとおもほして淨貞てふ人に仰こと給はせければ浦々にとりえたる五百津あまりの貝をなん奉り
にけるそかかたを淨貞かかきたりけるを高野の山の北室院堯昌法印のもたりし披見しよりかつ〳〵し
れりとて名をさゝるることつばらくしかはあれとかのふみは堯昌法印身まかりて後なにむれあまやのな
にかしがもとにつたへけるといふなる今にしてえかたきをおもへはむやくかきとらさりけるをくゆと
なん同し年の見あ月むかり君かさぬきにかへります時もまたしたかひまいりぬ山城の伏見のやとりに
いたりてはたまむすらく紀の海こそよにいつくしき貝らさはなりと聞りなほ行てとりてこよとてお
ほくのこかねをたひてけり若の浦加太塩津由良日井印南なといふ海邊をは行もとほり田部てふ所に三
十日まりそやとれりけるそのちかき浦々はいたらぬくまもあらすひろはぬかひもくかたまもとはにつ
みかさねつれは相摸の海のちひろのそこもあさくなん覺えけるさて秋のなかむけりあしかちるなに
はにいたりてまつけまやのなにかしをとはきるに人は今世にしもあらきふミは火の神のあらひにうし
なへりと聞にそたつきもしらぬわた中にかちうしなへるらん心ちしたりさるを同し所なる天満神の社
の神主渡邊のちからてふ人かのふみをもたりと聞て卽行てとへはいとこの好る人にてむやくこそつた

へて書習たるめれ㐂ほつゝの翁といふハかゝる類ひならんとおほへてひとりよろこほひつゝおとりぬへしかれとをつくしふかくこひてうつし得しかハさぬきにまいりて貝と共にまいらせけるいと歓て給ひて深くをさめ給ひてけりそも〳〵これかえらてなるを思ひてわたくしまもうつしかきぬ又のとしもの學にとて鳥か鳴あつまにまうてけるま本阿彌乃忠光てふ人もこれ好める人まてㄜやくおのれとうるハしきともかきㄟ此ふミのたえなんこそをしけれかたを木にえりて今の世まもひろめ後の人にも傳へよとひたふるにすれハ更によこなはれるをあらためたくひをわかちて三巻となんなしにける

明和元年神無月

源　國　倫

源内戯書（香川縣大川郡志度町渡邊富三郎氏藏）

歳旦

公の御規式世に有人ミの目出度儀ハさらなり世の人奢と油斷（と脱カ）より借金にせつかれて膽勢色なる春をむかへ何かハしらずむしやうにめでたがるは大槩な正月してもいハれす

餅搗ぬ家も雑煮はいハひけり

伯夷叔齊屈原が類ひ徳高く器量せまく賢人の干物となり君子の土座衞門となる韓信義經孔明楠か徒己が智惠己云す西行兼好が風流こいつ頗ルはつち坊主に近し只張子房范蠡か進退の自由ニなりしぞ智宧上手過と浦山敷ハ思へども鳫が飛へハ石龜もしだんだん〳〵年寄て野夫なり親父とはなりけらし

功ならず名斗遂て年暮ぬ

冬籠の吟

住は都とて田舍もの心得違ひすまは都の人眞中と思ひ立四國も猿智恵鼻の先なる江戸も江戸と神田の眞中に住けるか近年かねをほしける斗て名人切レの折に生れ掃溜るとんだたこの落たる如く何かはしらず虛名高くむたの付合手間ついやし世を山林に逃れんと思ひ立しが夫も嘸ふ自由ならんとまづ毒の試にちくと斗物はしへ天窓隱して尻かくさすそろ〳〵本の隱者となるやう家〻か翌の了簡は我さへしらぬハ人ハ猶しらず知てござる天道は物いハねば相談もならず只死るまて活延ヒて喰ふてハ寐起てハひり糞の樣なる味噌つけても聞人なけれハ無益のたわ言といかいたわけのちん毛をむしる

米を喰ふ虫の巢籠る寒さかな

戍のはつ春

鳩　溪　山　人　戯書

安永八亥年十月初旬伊豆七島の山燒灰のふりたる折の戲文

（先哲像傳卷ノ二所載）

昔〱ものかたりも光陰鐵炮より早く〵こごし安永八ッの草花咲かせ祖父の八百五十年忌にあたりて虚空か諸國に灰をふらす此新酒四五灰六七灰またやゐり出したる灰盡しそこらたらあか灰たらあ諸國一統諸家諸家中誰支灰彼支灰せい灰せら灰御灰禮灰見灰讀灰領物若灰友達一兩灰筑紫に名高き天灰山生れ子このころ灰ならひ蔦は軒端に灰かかる御家に灰ぬきひけやつこ先をむらふて灰〱〱旦那ハ馬上に灰さふ〱芝居のあるのハ堺町石灰多きハ白壁町灰當さるハ座頭の坊そのくせ一灰まつあかく忍んであふハ夜灰也逢てハ百灰嬉しさにわしを女房に持氣ならさふな灰こふな灰通も不通もおしなへて灰名つかぬ人もなし灰おいさま灰たかたしけちよつさいふ言葉ニも灰のむ那れぬよの中ハこれそお江戸の繁昌ときんまやうさい灰〱と云々敬白。

落葉

狂歌と俳句（一話一言所載）

鍾子期死て伯牙琴を破りしは世に耳の穴の明たる人なきをしればなり

此調子聞てくれねば三味線のちりてつとんとひいて仕舞ぞ。

譏譯は不朽の業御高恩須彌山よりも高きにほこりたる事をしらすしていろ〳〵の物ごのみは榮曜のいたりなりけりと自ら吾身をかへりみて

むき過てあんに相違の餅の皮名は千歳のかちんなる身を。

いかなる時にか

かゝる時何と千里のこま物や伯樂もなし小遣もなし。

幼少の時夢中の發句

霞にてこし落すや峯の瀧。

心地たかへるまへにかきて人にしめせし發句

乾坤の手をちゞめたる氷哉。

藥品會目錄　（茨城縣古河町鷹見久太郎氏藏）

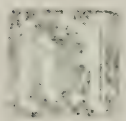
寶暦壬午歳閏四月十日藥品會

主品目錄

黄耆 異種 日光產　　黄耆 特生 同上
黄連 細葉 同上　　黄連 三葉 同上
秦艽 白花 同上　　秦艽 紫花 同上
拳參 大葉 同上　　蠡藺草
土茯苓 漢產　　防巳 相模產
紫藤 淡紅花 漢產　　金絲桃
金梅 漢產 出于致富貴書　　シンプルネル 蠻產
ヘンケル 同上　　粳 日向高千穂產 山生
百合 琉球產　　セルデリイ 蠻產 水芹類
木瓜 漢產　　葡萄 蠻產

秦皮　　柘
溲疏 攝津產（以上二十三種皆生）　　雲母 蠻產 徑尺餘
丹砂 同上　　無名異 漢產
無名異 石見產　　慈石 甲斐產
玄石 同上　　代赭 漢產
石綠 蠻產　　礞石 漢產
礞石 大和產　　ギヤマン 蠻產 卽削玉刀
凝水石　　カンターリイ 蠻產 卽芫青
魚虎 相摸產　　玳瑁 漢產
玳瑁 石見產　　豪猪毛 蠻產
蝟皮 漢產　　亞麻子 蠻產
楓 漢產 與世俗稱土宇加伊手者異　　楓香脂 漢產

真龍

鳴渡圖

藥品會陳列札

東京　帝室博物館所藏

竪　九寸四分　　　橫　一尺三寸七分

山中芳男舊藏の龍骨集說　裏表紙見返に貼付されてあるもので、恐らく藥品會の陳列札であらう。下部左隅の印章は朱印であるが印文も意義もよく判らない。

麒麟竭〔同上〕　質汗〔蠻産〕
盧會〔同上〕　胡桐淚〔漢産〕
茯苓　豬苓〔下野産〕〇以上十五種皆乾

右五十種藍水田村先生具

紫草〔讃岐鵜足郡大川山産〕　小薊　黄花
鼠尾草　續隨子〔讃岐瀬嶋産〕
千歳虆〔讃岐産〕　イケマ〔同上〕根形與蝦夷産無異
樓葱　邪蒿〔讃岐産〕
桂〔琉球産〕　對青竹〇以上十種皆生
自然銅〔漢産〕　自然銅　蛇含樣〔遠江菊川産〕陳承所說者是也
鍮石　方解樣〔伊豆熱海産〕　鍮石　禹餘糧樣〔伊豆修善寺村産〕以上二種蘇頌所說者是也
金牙石〔佐渡産〕　銀牙石〔參河産〕
メリクリヤルドーリス〔蠻産〕即粉霜　ベレインブラーウ〔同上〕
扁青　佛頭青〔蠻産〕出于本草扁青條下及天工開物

畫燒青〔漢産〕出于物理小識　畫燒青〔讃岐阿野郡陶村産〕
鍮石〔朝鮮産〕塗笠黃者是也與金部鍮石同名異物事出于格古要論物理小識等
鹽藥〔上總産〕里俗爲芒消者非也　サクシイリソート〔蠻産〕即鹽藥
芒消〔漢産〕是即英消也非芒消　朴消〔伊豆田方郡上舟原村産〕
芒消〔同上〕辛巳冬十二月奉　台命到伊豆國所手製也詳見予芒消論
馬牙消〔同上〕　盆消〔同上〕時珍與朴消混爲一者誤也
甜消〔同上〕　風化消　同上
玄明粉〔同上〕以上五種手製　消石〔藥肆〕即焇消
芒消〔讃岐産〕手製〇即焇消也同名異物　黄礬〔伊豆那賀郡志多留村産〕
石筆　漢名未詳〔蠻産〕　石筆〔駿河産〕
コヲルド〔蠻産〕畫家所用者　コヲルド　伊豆田方郡湯之嶋産
貝子　異品〔琉球産〕　柴貝　希品〔同上〕
海鏡〔漢産〕　月日介　漢名未詳〇先輩充海鏡非也
肉蓯蓉〔日光黒髮山産〕以藥水藏蓄　肉蓯蓉　讃岐香川郡安原村産鹽藏

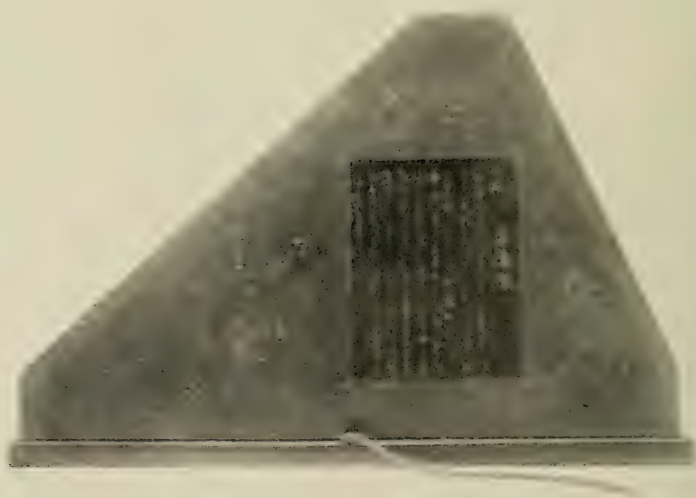
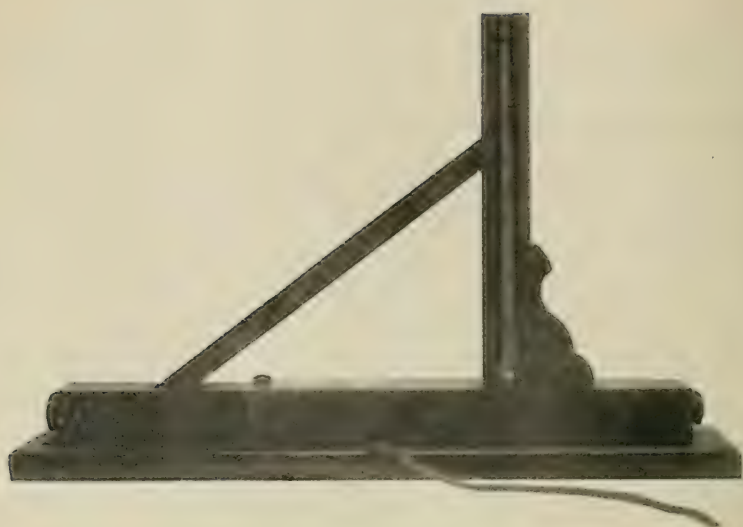
巴戟天　漢産
巴戟天　〔讃岐鵜足郡中通村産〕上上二種乾
雷丸　遠江産
天竺黄　駿河駿東郡両宮村産
右五十種國倫具
會主　讃岐　平賀國倫　國倫
寓東都神田鍛冶町二町目不動新道
會席　江戸湯島天神前　京屋九兵衛

東都藍水田村先生鑒定
讃岐鳩溪平賀國倫編
物類品隲　全部六冊
畫工　東都楠本雪溪
讃岐三木文柳
自寶暦丁丑至今玆壬午歳前後
五會所聚主客品類目錄評解圖
繪及人參培養製法附

明和二年盲暦

明和二乙酉歳
大二三五六八十
平賀源内作

こは源内の考案した明和二年盲暦である。大の字の下に二、三、五、六、八、十の六字を記してあるのは二月、三月、五月、六月等が大の月であることを示したものである。そしてこのうち印章だけは赤色刷である。

平線儀

香川縣敎育會所藏

器　高一尺〇四分。　底　長一尺六寸四分。　箱　高一尺一寸四分。

この器の製作者が源內であり、その製作の年代が寶曆十三年十一月上旬であることは、この器柱に嵌入されてある眞鍮板の刻銘によつて立證される。さうしてこの器が製作後直ちに高松藩の木村默老翁の許に送られたことは箱裏の墨書銘に「水盛器　寒川郡志度村平賀國倫ヨリ到着物也　寶曆十三癸未年十二月十有五日木村氏珍藏」とあることで明らかである。なほ平線儀そのものの銘を御參照下されたい。

平線儀銘

（香川縣敎育會藏）

平線儀

銘曰古今水平乃器其品多しと雖此一條に於ては是又實測に心なき人の制にては一應の理して實吏に施して無益成るの多し要ハ田畑用水掛井手又ハ溜池等築節得て水盛違ひにて莫大の人足仕損し有物なり是測器の粗成る故なり古大禹原水土も止事成べし猶又城繩張及陣取又ハ亂に有りてハ原水を知るを要とす予老後及爲後年乃是遺す

寶曆十三癸未十一月上旬

平賀鳩溪造之

磁針器　高七寸

この器は源内が高松藩の木村默老の需によつて製したもので、中央表字板の底裏に

寶暦五乙亥年
平賀鳩溪
三月上旬
造之

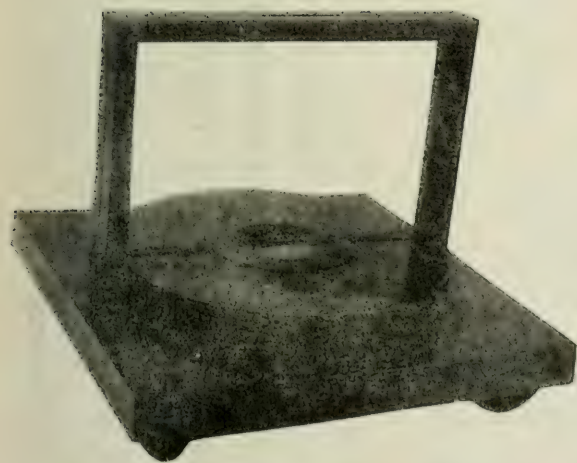
この刻銘があり、臺裏に

磁針器　倣阿蘭人製
時寶暦五乙亥三月
奉　應

とある外

木村大夫需　鳩溪
平賀國倫作

この墨書がある。

(香川縣教育會藏)

文書

岩田丈五郎氏藏書翰　（竪六寸二分、長二尺六寸二分）埼玉縣秩父郡秩父町

一筆致啓上候先日ハ御老人様御死去之由扨ミ驚入御愁傷之段察入奉存候御病中御様子も不存以書中御見舞も不申御無音無本意候新五兵衛參候而承大ニ驚入候以來御悔も申度候得共遠方殊ニ甚澁雑不能其儀是亦不任心底不本意之至奉存候扨ハ輕少之品ニ御座候得共金子百疋致進上候誠ニ御悔御香奠之印迄ニ御座候恐惶謹言

十二月五日　　平賀源内

國倫（花押）

岩田三郎兵衛様

同　要藏様

同　三藏様

（竪五寸四分、長四尺三寸）

此高見周吉ㇳ申男元來讃岐者ニ而大坂竹田之細工人いたし居候所先讃岐守召出し使はれは細工ハ日本一人ニ而御座候得共おゝしき男故浪人いたし居候ヲ我ミ呼寄六月ゟ江戸へ參居候細工ハ古今無双ニ而御座候へ共疳積持ニ而くす／＼申折ミハ夜ヲ不寐水ヲあび候事あさ氣違かと存候へハ亂心ニ而

も無之候此病氣無之候得ハ讚岐守方ニ而見事ニ仕官いたし居候得共此病御座候故浪人いたし申候前
積一通りニ而外ニ何ニも疵ハ無御座候拙者宅出來候得ハ差置候得共いまた千賀同居故家來共いやか
り申候仍之外へ遣置候得共兎角其身もしづかなる所へ引込細工いたし度由申候故中津へ遣候會所ニ
御置ていねいニ御あしらいだまし置候樣被成可被下候尤當時道も惡く候ハヽ當分大宮か久那ニ被差
置被下候共其上ハ御見合ニ奉願候尤客あしらいニハ及ふ申候御セつき細工致させ候樣可被成候細工
ハ長崎でも肝ヲ潰し江戸ニモ外ニハ無御座候右之病らなければハ天下道具ニ而御座候右之病故此方之
手下へまわり候ゞ御呑込被下御いたわり置可被下候早春ゟ下拙參候樣可致候
一大宮ニ而會所立置度存候惣五郎殿御相談被成明家等御座候ハヽ、御心掛可被下候庭木も有之大ぶりナ
ル家宜候何事も早春參可得御意候以上

源　内

極月十一日

三郎兵衛樣

要藏樣

（竪五寸六分、長五尺七寸八分）

（首缺）被成御勤此節材木も余程出可申候ゞ奉存候然ハ拙者儀來十五日長崎へ致出立候諸事甚上首尾

ニ御座候間御歡可被下候彼地へ參候得ハ何そ思ひ付も出來可申候と奉存候

一 鐵之儀ハ御しらべニ隙取長崎出立前ニ差掛り候故先ゞ是ハ延引ニ致置候來春ゟ取掛リ候手都合ニいたし置候尤拙者方へ呼ニ參候而長岐ゟ歸候樣之手都合ニ而ハ御座候得共夫ゟ內御聞合等之儀ハ貴樣迄掛合候樣ニと申置候馬喰町千賀道隆殿へ諸事書物等鐵山一件預置候貴樣御出府被成候ハヽ道隆方へ御出御逢被成置居所等委御申置可被成候右之段かけ合置候

一 新淨るり本一冊進申候御慰ニ御覽可被成候時節惡故はやりふ申候得共作之評判ハ宜御座候

一 しなのやへ宜御心得可被下候

一 長崎へ書狀被遣候ハヽ右之(所書)處迄被遣候

一 拙者出立前金子差支こまり候得共無理ニ立申候着來之上ニ而金子御廻り合御座候ハヽ植村迄御出被下候へハ早速相屆申候

一 長崎表ニ而格別宜筋も御座候得ハ貴樣呼ニ遣可申候間其節ハ御出可被成候先ゞ材木之方隨分御出精可被成候萬ゞ近年之內罷歸目出度可得御意候以上

十月十三日　　　　平賀源內

岩田三郎兵衞樣

猶〻御在所御家内様中津川不殘其外へも宜御心得可被下候

一　半三郎へ能〻御心得可被下候彼儀ハ別而御心添御不便御加へ可被下候如御存望心成者ニ御座候拙者之爲ニハ甚忠臣ニ而御座候故何ぞ宜筋もご存候内御存之譯ニ而物入斗ニ而中〻爲ニ相成候儀も無之甚殘念ニ奉存候此志能〻御傳可被下候此間秋田銀銅山之儀ニ付御用人中へ逢段〻被頼是へも掛り度候得共長崎之方差置キ候故此儀ハ來年長崎より歸候上ニ約束いたし置候是ハ御領主御頼故甚丈夫成物ニ御座候右樣之節ハ半三郎一方ヲ頼候間夫迄先〻御いたわり御使可被成候　以上

覺　（竪四寸九分、長四尺五寸）

一　紙子　壹反

三郎兵衛殿
御母上様へ

一　紙子　壹反

一　かはとうらん　一

一　蒲脚半（ハバキ）　一

三郎兵衛殿へ

一　とうらん　一

一　はゞき　一

要藏殿へ

一　とうらん　一

一　はゝき　一

三藏殿へ

一　とうらん　一

惣五郎殿へ

一紙子　一
一はゞき　一
牛三郎へ
一紙子　一反
所右衞門殿へ
一同一　壹反
彥市殿へ
一紋紙子　壹反
嘉兵衞殿へ
一紋紙子　壹反
ぬぢ殿へ
一はゝき　一
喜平殿へ

一はゝき　一
松五郎殿へ
一はゝき　一
三助へ
一はゝき　一
九兵衞へ
一はゝき　一
源中へ
一はゝき　壹
「久那ゟ被遣男名ヲ忘申候」
彌六へ
一はゝき　壹
「濱中ゟ参ル小僧へ」
佐助

右之通御渡可被下候以上

十月十五日　源　内

三郎兵衞様

要藏様

編者云、［　］印内は原本ニ抹消セシモノヲ示ス

（首欠）行（此ノ間六七字缺）乍然請願之儀昨日松本樣へ下書差上候一兩日中御直シ叅次第御代官へ差出其上ニ而叅度候並ニ昨日仙臺衆ニ出合候兩人も廿三日御城下出立ニ而鐵山へ叅候由御傳馬人足御宿等急度被仰付候由ニ御座候得ハ定而得と見分も致吹人も同道可致と大ニ樂ニ御座候不遠内歸候ハんと奉存候なれ之譯如何相分候や承度奉存候斗も叅候由今一應吹直も致見申度奉存候萬ミ期御面上候以上

二月六日

岩田丈五郎氏藏文書　（竪一尺八寸三分、長二尺一寸）

一札之事

阿部豐後守樣御領分武州秩父郡川浦山御林蟬山御林白久村熊倉山御林都合三ヶ所雑木ミ分御運上ヲ以

炭焼出相願度候所拙者名前差出候儀遠慮之筋有之候ニ付貴殿名前ヲ以御願被下候様ニと相頼候然上ハ願致成就取掛候節諸雑費諸入用引殘利潤貳拾分之壹貴殿方へ差遣并ニ外ニ出シ人足爲諸事之世話料出炭壹萬俵ニ付金五兩宛相渡可申候爲後日一札如件

安永四年未十二月十二日

平賀源内 (國倫)

證人

伊勢屋三郎兵衛 (印)

久那村

喜左衛門殿

岩田甚三郎氏藏文書 (竪八寸九分、長一尺三寸八分) 埼玉縣秩父郡久那村

一札之事

一秩父郡中津川村銕山之儀段々貴殿被致世話候間此以後稼方相募利潤有之候節は御運上諸雑用引殘利潤之內貳拾分之壹永々差遣可申候爲後日仍而如件

安永二年癸巳六月十五日　平賀源内（印）

國倫（花押）

千賀道有（印）

芳久（花押）

岩田三郎兵衛殿

武州秩父郡影森村百姓持山字橋立山炭焼出之儀最初山相對之節ゟ貴殿方相頼御兩人名前ヲ以村方相對等も相済諸事引請可致世話炭焼試候處引合可申様子ニ付此度山本文野右衛門相談之上取掛リ申候夫ニ付諸雑費引殘利潤拾ニ割内壹割爲願入用此方へ取置候分右爲謝禮貴殿方御兩人へ差遣候間五歩宛可被成割賦候尤諸入用仕切直段諸事立合可被成御取調候爲後日仍而如件

安永四年未十二月五日　平賀源内（國倫印）

久那村

三郎兵衛殿

同

喜左衛門殿

小倉右一郞氏藏書翰

（竪五寸三分、長五尺四寸） 香川縣大川郡石田村

なほ一〳〵御家內樣へ宜御心得可被下候 以上

一筆致啓上候漸春暖ニ相成愈御揃御淸福奉賀候此方相替儀無御座候此間要助□□定而委細御聞可被成候要助遣候故書狀も進不申候鐵山之儀誠ニ時節到來と奉存候御歡可被下候幸水戶仙臺鑄錢最中且江戶定座もひそ〳〵申候所鐵一向無御座候也仍之仙臺鑄錢方ゟ相談致掛候大方相極り申候先日金子少〻請取有鐵出させ候筈ニ而半三郞遣候鑄錢方極り不申候而も是非〳〵當年ハ吹掛り申候夫ニ付赤岩ゟ坂元迄馬道ニ相成候樣作らせ度奉存候近頃乍御苦勞愈々仰出被成御見分可被下候里數幷に難場等委細書に被成被遣可被下候且又三山邊に請負作候者有之候ハヽ十丁廿丁ツヽ割丁場ニ被成投ニ渡し候樣御積らせ可被下候御一人ニ而手ばり候ハヽ茂右衞門殿御賴御同道可被下候扨小鹿野ゟ大淵へ取候方宜候や又ハ薄ゟ贄川へ取候而宜候や得と御積り可被下候薄小鹿野ゟも時ニより川船通行可致奉存候是も御見分可被下候先々赤岩ゟ坂元迄之道作第一に御見分可被下候猶此元万事相極り次第追て可得御意候以上

平賀源內

二月十六日

岩田三郞兵衞樣

猶〻下總ニ而鑄物ためしめ度と申者御座候是へも炭鐵仕送り鍋其外一手ニ此方へ買取候相談いたし掛申候誠に時節到來と奉存候隨分御出精可被下候以上

（竪五寸四分五厘、長二尺七寸）

二白

金子貳分進申候駄賃御拂被降猶其地ゟ江戸迄駄賃ハ此者へ御渡被遣委御申含可被降候尤贄川迄出居申候ハヽ二駄取寄候而も駄賃二分ニ而可有奉存候若いまた中津ニ御座候ハヽ二分ニ而ハ不足ニ奉存候然時ハ所澤ゟ之駄賃江戸迄拂候様此者へ御申付可被下候何卒二駄被遣可被下候萬一何ぞ差支御座候ハヽ、壹駄ニ而も宜御座候其内成だけハ二駄被遣被下候様吳〻奉賴候　以上

源　內

廿日

三郎兵衞様

要藏様

なほ〳〵飛脚之者道中遣ハ別ニ遣候此段御心得萬〻宜御指圖可被下候何卒一時も早く糸ゝ様奉賴候

香川縣師範學校藏書翰

（竪四寸八分、長八尺四寸）

大坂ゟ之御狀ハ拜□竝ニ右記久安方ゟも委細申糸安心いたし申候久安藥御用御快御座候や隨分御保養專一ニ存候

一　八五郎□狀御請□可被成候御約束之品〻被遣被下候樣ニと申れ

一　向山氏へ宜布賴入候其後書狀出申候

一　此元も御立以後甚金子不自由ニ而こまり入候處色〻工夫ヲめくらし申候而

一　三兩壹歩　　六月朔日ゟ同晦日迄入

一　拾五兩五歩金六分□□　七月朔日ゟ同盆前迄入

右之通ニ寄申候故盆前十分之仕舞ニ而安心いたし申候

一　六兩拾貳匁五分　　七月十五日ゟ同晦日迄入

右之通之譯ニ御座候甚勢能相成申候少も御氣遣被成間敷□

一　相模屋金之蔓ニ取付申候六月中旬三百兩一口之道具ニ仲滿へ入十兩取候由夫ゟ段〻樣子能此元魚紋石も伊勢樣へ八兩ニ賣さかミやへ壹兩遣申候其外段〻取込居申候道具請戻し納申候此間小金廻り申候故甚人がら能相成申候伊勢樣ニ而段〻能商いたし申候拙者目鑑ニ而さかミや上商人ニ相成候と

て皆〻肝ヲつふし申候義ゟハ寄付不申候ぞくちヲ打候由ニ而埒明不申候

一　角平も段〻ため直し能相成申候

一　右之通ニ御座候故此元段〻ふり廻しも宜布相成申候兼而申談候人參之儀御世話可被成候隨分取出遣可申候其外御心當之品可被仰遣候

一　其方歸候ゟ此元様子宜布相成候ハ兎角其元之運いまた直りふ申候様ニ存候隨分御保養被成先當年一年も御休其上ニ而御出掛可被成候しはらくつぼみ運ヲ待候か上之謀ニ候

一　當秋末向山へ藥草遣可申候製法人參等遣可申候や様子御聞可被成候兩ニ付二兩位ニも糸可申候やと被存候

一　此間備前之醫者御下屋敷ニ而藥園地拜借被致候後〻ハ殿様御藥園ニ相成様子ニ相聞申候

一　段〻會等も繁昌いたし諸方ゟ毎日尋來候此間ハ右衞門様へ御奉公仕間敷やと申來候得共仕官ハ望不申候と申遣候其外諸方ゟ色〻之儀申糸候得共貧乏大名なとハ相手ニ致不申候

一　產物何ニ而も御買出此元へ可被遣候賣上可申候伊勢様兎角珍敷石御好被成候沼津之鳧（カモ）石も二兩ニ御付被成候十兩と申賣不申候

一　黑石ニ三日月ノ有之候石御尋御座候御取出可被成候

一　小貝なと御取集可被遣候哥仙ニ成候物能御座候其外折〻近國御せんき被成追〻此方へ可被遣候

一 秋へ成種子物進可申候地拵可被成候猶万〻跡ゟ可申進候隨分御保養専一ニ存候以上

八月十七日 平賀 源内

友七樣

猶〻向山氏塩政所其外へ宜布たのミ入候 以上

菊池寛氏藏書翰 （竪五寸五分、長三尺六寸六分）東京府北豐島郡高田町雜司ヶ谷金山三三九

三白

私數年願望之秩父鐵山も成就仕追〻生鐵鋼鐵共澤山出且刀鍬ニも爲作候處無類之上鋼鐵ニ而利鍬ヲ鍛出先日より田沼君へ差出置候近〻御樣させ被下候筈ニ御座候且去秋初佐竹侯より御賴ニ而羽州秋田へ參候處國中產物勿論色〻經濟共被相賴凡一ヶ年二万兩斗ミ國益御座候ニ付郎座御褒美金百兩御自畫ミ雲龍かこ拜領仕罷歸候彼地ニ而地方見取ニ二百可被給候尤御合力知行ミ由御內意御座候荒野多所ニより三千石五千石ニも當リ候場所御座候得共出入知行ニ而も知行こ申せハ家來ミ樣ニ相成候故御斷申上候處一ヶ年銀百枚ツ丶可被給由被渡候先小遣程ニハ有つき申候右御志らせ申上度如此御座候 以上

十五日　源内

黄山先生

猶々彼御國ハ甚手廣ナル事ニ而御座候得共未開之國ニて御座候處私糸諸事大ニ開ケかゝり申候大經濟ニ而御座候委細ハ難盡筆紙御座候

久保計一氏藏書翰　香川縣木田郡山田村

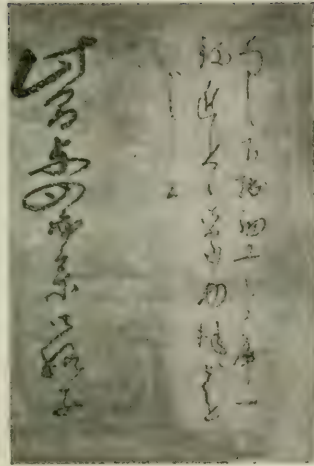
八月十六日之貴札昨日甫道方ゟ相達忝拜見仕候愈御堅勝奉珍賀候私儀無事相勤居申候乍憚御安慮可被下候先頃ハ志度へ御出被成留守御見舞被下候由忝奉存候畑稲随分廣マリ候様奉賴候

一　先頃木屋船ニ貴札幷ニ李王解愚作之一書被遣慥ニ落手仕候彼是仕貴報も不申上候貴君段々御出精之趣彦藏咄ニ而承候私儀甚多用ニ而扨々埒明不申別而目黑御供など節々ニ御座候其上物産やら醫書やら取亂シ候而一向學文埒明不申扨々切角江戸へ參候甲斐も無之儀ニ御座候物産も最早使イ申さ存候得共色々之儀出來仕是亦相手之産物ハ多見覺候心ハ一ツ中々成就ハ仕間布ニ甚不快之至ニ御座候

一　私も先頃ハ學文料として三人扶持被下置難有奉存候尤仕官ニ而ハ無之學文料故何方ニ居候而も被下置候様子ニ相聞候得ハ甚以難有奉存候

文庫

埼玉縣秩父町　久保道藏氏所藏

長方形、　身　竪一尺五分、横七寸八分、深二寸五分。
　　　　　蓋　竪一尺九分五厘、横八寸二分五厘、深二寸五分。

これは源内自作の文庫であり、それが久保四郎衛門に贈られたものであることは久保道藏氏藏十一月二十三日の書翰に尙々下拙細工の文庫一致進上候とあることと天保九年五月の箱蓋裏の記と

によつて知られる。なほこの箱は外部を金唐革で内部を和蘭紋様の紙で張られてある。

一御餘力ニ草木御樂ニ被成候ハヽ種子物久保得水丈迄澤山遣置候此元ゟ上可申ハ包分ルヲ手間取申少シツヽ御貰可被成候其段得水丈へも可申達候尤外〻江御沙汰なしニ被成可被下候得水公ハ格別心易御座候故私此地ニ而取集候珍物等ハ漸〻ニ遣置候樣ニ可仕候猶万〻後便ニ可得貴意候

平賀源内

十二月二日

田村清助樣

久保道藏氏藏書翰

（竪六寸、長四尺八寸六分）　埼玉縣秩父郡秩父町

尙々下拙細工之文庫一致進上候御家內樣に被進可被下候　以上

此間與四郎來御樣子致承知候寒冷之節愈御平安被成御座奉珍賀候誠ニ以川船ミ儀段〻御世話ニ被成下候御懇志之至不淺千〻萬〻忝奉存候委細與四郎物語ニ而致承知候一方ならぬ御世話難盡筆紙奉存候御村方一同ニ來候得ハ無此上御事ニ御座候乍去ケ樣之儀ハ最初ゟハ兎角合點不致物ニ御座候間先貴家幷ニ一二軒も御得心被下先一兩年ハ掛り損と見て致候內彌通船都合宜候得ハ外の方ゟ浦山敷相成賴來物ニ御座候間一應御懸合不得心之者へハ强而御すゝめ被下間敷候迚も致掛り故會所入用程ハ損と見て取掛

り申候間先貴家竝に熊木其外得心之方斗ニ而御取掛可被下候十年之後ハ郡中通船益有る事ヲ存可申候
當分之損ハ物之數ならすい永ゝ之功ヲ御工夫可被下候彌通船成就いたし候得ハ甲州荷物ヲ秩父へ取候
手段も致置候是等も追ゝ御相談可仕候兎角當分金ヲ巾着へ入候了簡之者ニ而ハ相談相手ニ相成不申故
御取遣りニ及候何分宜御世話奉賴候外ニも御相談之儀品ゝ御座候何卒近ゝ御出府奉待候　以上

十一月廿三日　　平賀源内

久保四郎右衞門様

黑川慶之助氏藏書翰

（竪五寸二分、長二尺七寸）　東京市小石川區茗荷谷町五七

先刻ハ御出被下忝奉存候乍然無人故何之風情も不仕候何卒明日ハ御逗留被成一夕御咄ニ御出ヲ奉待候
且又乏少之至ニ御座候得共生肴一臺進上仕候誠御旅宿御見舞之印迄に御座候

一　先刻申候御噂之一儀田村へ逢候故りな川之譯承候處彌貴地同前之儀ニ御座候處早速相濟申候此度
も又ゝ其例御座候是ハ甚濟安キ儀と申候彌左樣ニ御極被成候ハヽ彼方へも通路自由ニ御座候間隨分取
斗可仕候猶河津方双方共取斗可仕候　以上

九月廿四日

猶々大酔亂筆御用捨可被下候

平賀源内

野中ニテ

中島理兵衛様

同理右衛門様

佐伯理一郎氏藏書翰 （竪五寸一分、長二尺九寸四分） 京都市室町間ノ町

鉛其外何ニよらす其山々の石ヲ少宛御取集御見せ被下度偏に奉賴上候尤金銀山の内ゟ種々の石土出候物ニ御座候是迄金銀山等相稼私共素人故見落候品多捌々可惜事ニ御座候同シ金類ニ而も錫鈆丹等ニ至り而ハ山師共一向存不申候右色々之山色被遣候ハヽ其内ゟハ何ニ而も珍物見出候へハ御益ニ御座候間金銀銅鉛ハ申ニ不及右鋪內ゟ出候土砂石何ニよらす集り次第御取集御贈被下度奉存候

一 御國塩股銅山之內ゟ大雲母出候由承及候是等可相成候ハヽ隨分大ナルヲ被遣被下度奉存候和名キララ香敷等ニ相成候品ニ御座候

一 中みよりさ中所ニ滑石出候由是等も上品なれハ金ニ相成候

右之外何ニよらス草木金石相分兼候品等御見セ可被下候折節取込早々貴報申殘候　以上

六月廿七日　　　　平賀源内

高橋佐吉氏藏書翰　（竪五寸二分、長三尺二寸一分）　濱松市肴町

黃連之事

雨畑山黃連御見セ被下候隨分宜相見へ候ハヽ直段之儀被仰下則兩大坂屋返書奉差上候ヶ樣之類本町大傳馬町問屋へ前〻ゟ懸合候處兎角むごく下直ニ申候仍之橋町大坂屋平六石町大坂屋孫八ハ各藥店大家ニ御座候故兩家へ見セ候處別紙之如（再考ゆへハ孫八方ハ百六十匁斤か）直段相違仕候當時此位之黃連此方へ調候へハ五拾匁餘仕候山中ニ而堀候而苦勞仕候者ゟ手ヲつかね居候商人が多取候都而近世ヶ樣ニ成行申候諸國ニ而產物數多見出候而も此所ニ而差支申候仍之兼〻江戶ゟ會所ヲ立夫へ持出シ醫者なとへ直賣之手段も可有御座候と奉存候得共是以小元手に而叶不申候

一　右黃連平六方直段ゟ宜上方へ參候ハヽ宜く若叶兼候ハヽ此方へ可被遣候醫者共へ內〻ニて賣遣可申候唐藥種百六十目斤ニ而通用仕候品ヲ二百目斤と申候扱〻商家之慾心ニハこまり入候醫者へ直賣仕

候へハ百六十目斤ニて遣候少〻は賣レ可申候　以上

直段も成丈宜取計可仕候

十月八日　　源　內

清太夫様

御進物事

御紙面を以て主人へ談候處神田橋様へ之御品被仰遣候桑木水風呂桶木並ニ紙子面白可有御座候由ニ御座候早〻御用急可然奉存候　以上

十月廿日　　源　內

清太夫様

尙〻碁盤ハ松木松御上被成候

田中庸三郎氏藏書翰　（竪五寸三分、長三尺六寸八分）　長野縣松代町

以手紙啓上仕候愈御莊健奉珍賀候然ハ今日御屋敷へヱレキテル持參仕候様昨日御約束奉申上候處田沼

直吉様同鋏吉様私深川下屋敷へ花火見物ニ御出可被成旨夜前俄ニ被仰出候是ハ去ル廿二日田沼大和守様水野中務少輔様右別莊へ被爲入候夫故又々俄ニ右之御催御座候仍之今日御屋敷様へ參上仕候儀難仕甚奉恐入候得共今日之所何分御用捨被遊被下何卒明後六日罷上候樣御取計被成下度此段御願奉申上候初而參上仕候筈ニ昨日御懸合仕今朝差掛御斷奉申上候段於私甚失禮貴公樣ニモ被仰上候も御難儀之段奉察候得共格別之筋合ニ而無是非此段奉申上重疊奉恐入候其所何分宜御取成奉賴上候急草々申殘候

以上

七月四日　　平賀源内

（長書）立田玄道様
急用

中島國作氏藏書翰　（竪五寸二分、長二尺二寸）　埼玉縣兒玉郡大澤村豬股

中嶋理兵衛様　　平賀源内

一　中津川へ丹治殿被遣候事諸拂ハ相濟せ候事

一　山代ハ穴堀御願相濟山入之節遣候事

一　多門道中金渡候事

一　跡之儀は多門指圖次第ニ可仕候事

　　但シ理兵衛殿殘り十藏藤松ニ覺入の所堀セ候事

一　諸事手あての事

　丹治殿兩人之内

一　理兵衛殿品ミよりはりまへ参候事

一　矢口の事

一　慈石壹駄斗能ヲ持歸候事

一　火浣布紙候ハヽ少しニても被遣候事

一　久八ハ殘候而も不苦候事

一　山色宜候ハヽ早速ニ庄二郎歸シ候事

羽田桂之進氏藏書翰　長野縣松代町

尙々兩太夫始皆々樣へ宜奉願上候御台所御目付御兩人樣別而宜奉願上候

昨日は段々難有奉存候被爲入　御意候趣難有仕合に奉存候

一御家中衆中御覽之節は火出兼散々の仕合殘念に奉存候〇十一日御出立の由夫ゟ內一日御出奉待候

一今日は大に勞れ亂筆御用捨可被下候

一御留被遊候品は貴下御歸國以前に御返被下候樣吳々奉願上候外方ニ而は一向差置不申候　以上

七月七日　　平賀源內

立田玄道樣

林恒三郎氏藏書翰　香川縣大川郡白島村

尙々江島屋へ別紙遣申候宜御心得可被下候外近邊へもくれ〳〵宜奉賴候

七月十五日之御狀致拜見候殘暑之節母樣益御機嫌好被遊御座候次ニ皆々御替も無御座候由目出度奉存

候此元無事ニ相勤申候要助與四郎惣助皆々無事ニ居申候尤要助宗助夏以來相勝不申大ニこまり入候此節ハ快致安堵候尤少も御氣遣ミ筋ニ而ハ無御座候

一下拙歸國段々延引に相成心セき申候尤當年ハ金革並ニ下屋敷ニ而路用萬々心當ニ致候所雨天續革も一向出來不申下屋敷も不當ニ御座候扨〻こまり入候乍去盆後ハ少々都合宜候得共鬼角雨天がちニてこまり候當年ハ春以來雨天曇天かちニ御座候寂早天氣と奉存候天氣續候得ハ路用ミ心當出來次第歸國と奉存候少も油斷ハ不致晝夜くるしみ候得共三人も一所に居候外ニ召仕候者も有之前後之取〆リ路用旁心苦敷御座候故千變万化いたし候得共雨天ニハ是非なく候是非〳〵冬迄ニハ歸國之積に御座候間左樣思召可被下候母樣おりよ其外へもくれ〳〵宜御心得可被下候　以上

八月三日

平　賀　源　内

平賀權太夫殿

故萩野由之氏舊藏書翰　（竪五寸八分、長二尺）今所在不明

以手紙奉啓上候久々不奉得拜顏御物遠ニ奉存候益御機嫌好被遊御座奉恐喜候然ハ新淨るり本今日出來

仕候故一冊爲持奉差上候御慰ニ御覽被遊可被下候私甚多用故大に御無沙汰奉背本意候萬々拜顏可奉申上候　以上

四月十二日

猶々近日ゟ芝居へも御出可遊候其節御棧敷ハ何間ニ而も差上候樣可仕候此度ハ私取置遣し芝居故右躰之儀甚由自に御座候猶橋屋を以可奉申上候　以上

平賀源内

桃源院樣

御左右衆中

故平賀敏氏藏書翰（竪五寸五分、長一丈三尺二寸）　奈良市池ノ町

追啓

江戸狀御覽深切御感心夫ニ付下拙此地逗留先方意ニ達可申やと桃源公ゟ御尤之御異見權太か寸志惡ふハ不承候乍然鳥ニ羽なく船ニ帆なく旅ニ金なくバ何ヲ以て急ニ行んや小豆嶋ニ而拵候金子ハ文柳へも急度遣此地へ着ても衣類も拵三文も無之候借ルも口惜ク幸中井氏御出故多田吉野見分就中吉野ハ寬ふ申候而ハ相成不申候故江戸へ相寬候其内萬太郎方ニ而ハ心遣故貸座敷も月ニ五十五匁是ら之所田舍丁

備ニ而ハ分兼可申味ニ御座候扨致逗留ハ而も大阪ハ江戸こ違大名ハなく又源内が源内たるゆゑんヲ知人少ハ故急ニハ埒明不申こ兼而落着居申候専治歸シ候ニも百目遣候是も急ニ才覺外ニ致方無之候故御代官ヲ頼御城内へ少之賣物いたし申候然所立花之屋敷留守居ハ清太夫殿一類學問好故懇意ニ相成打明相頼段ゝ深切ニ世話致呉壹〆六七百目が賣物致ハ以先今日五百目請取申候猶追ゝ賣申候へハ此地盆前拂江戸路金ハ十分ニ御座候是ハ此度初而之知ル人ニ而御座候而さへケ様ニ引請世話致呉候右之代ハまだ寄ねども今日五百目取かへ呉候千賀などハ舊知己五藏六腑ヲ知候上之事故右躰之事不珍候其外江戸では二度逢而金五拾兩くれた男も御座候長崎でも觚哉存之通ニ御座候いかなれハ御國之親類朋友ハ惡ク申のミならす此度なども助る人ハ無御座候我不德之なす所か夫ニしてハ他所之人か不思議ナル事ニ御座候御國ニ呑込人が御座候へハ小豆嶋ても大阪でも何之面白クて隙取可申候や賣ふどいわすほしがらせて望ませる迄の骨が折候小豆嶋ニ而も笠井傳右衛門懇意に世話致五六百目ニ相成候故大坂迄来候小豆嶋大阪でからくりヲセねハ今頃ハ江戸へ參何ぞハ手ニ入候得共金が敵之世の中ニ而御座候桃源公之無益之作文こハ淨るり之等ニ候や去ゝ年もかな川ニ而金子五兩請取書遣夫ヲ路金ニ大坂迄登り申候右之板本致候故植村善六留守でも夏物質でも請て長崎へおこしたり萬端世話いたし呉候京ノ店も右同樣ニ御座候大儒先生之詩文集ても賣ねバ本屋ハ難有がり不申候今でも芝居之金ハ取不申候得共本屋な頼ハ書遣候金ニあらねハ引込申候此間も二切書て江戸へ遣七兩なら跡ヲやらふど本屋へ申遣候是等も

不得止之謀ニ御座候毎ゝ浄るりニも助られ申候

一　江戸ハ御覧被下候通之首尾ニ御座候乍去我ら初ゟ仕官ハ嫌ニて御座候仍之此度もさわき不申候御勢でハ何も角も出来る様ナ物之一失一得又えくえること申目が出候一之裏ハいつても六ニ而御座候御勘定奉行ニ成而も小野之眞似ニ而不珍候我らハ珍布聖徳太子之眞似ヲ致申候何ゟ角ゟ嬉しきハ焼物羅紗ミ類か一ツ二も物ニ成候所自慢ニ御座候けが之なき山ヲ致候得ハ是程憶成事ハ無御座候吉野山ならこれ金銅銀しろめなどが澤山顯出居申候友七専治内見分致させ申候其節之狂歌に

人丸の目よハ雲こもみよしのゝ　花よりだんご金の丸かせ

と申狂歌を添て江度窺ニ相成候其跡ニ而

涼しさやくわほう寐て待江戸便り

先肥前大村ゟ大和迄之藏ニ金銀ヲつめ置候其外何ヲ致ル而も口すぎ之藝ハ澤山故御めしつぶハ頂戴不仕候此以後共仕官ハ御すゝめ被下間布兎角何ニ而も珍敷工夫事か焼物之一色も御取立被下候か何より之御賜ニ御座候申度事不二の山ニ御座候得共中ゝ筆紙ニ盡不申候　以上

源　内

廿八日

桃源様

瓢哉様

權太夫殿

猶〻友七も疵多人間なから一能御座候故此地迄召連候所急ニ宜筋も無之逗留之内女房病氣畑か流レあと申候故銀百目遣歸し申候兎角貧乏神ハのき不申候か友七居候內ニハ銀か寄不申歸ると申せハ今日五百目取レ候友七と銀とハ中か惡と申せハ治太夫此元ニ居候が私共とも中か惡ひと申笑ひ申候　以上

毛織堺肴屋町河內屋左衛門

又申

御國ニ而色〻案候而も羅紗ニ成兼候所一時ニ致出來候兎角大都會ニならされハ事ハ成就不致候樣之下ミ力持や井蛙ミ了簡ニ而ハ埒明不申候拙者一先江戶へ参夫ゟ大坂へ出候得ハ色〻面白事共御座候久兵衞に御出待入候

一　燒物段〻評判宜候夫ニ付天草土取寄候儀天草御代官揖斐(イビ)十太夫殿へ申遣候得ハ隨分自由ニ御座候源吾ごばん屋御談桃源公御はり込被成候而本かま御立御覽被成間布や舜も河濱ニ陶被成候天草土取寄本かま取立候得ハ南京燒色〻致出來候工夫御座候天野か西ハ石塚なと宜奉存候一御工夫可被成候あぶなかり候而ハ参不申候　以上

源　內

廿八日

各様

（竪五寸五分、長六尺七寸五分）

六月廿日之貴札相達拜見仕候甚暑ニ御座候得共愈御揃御堅勝被成御座奉珍重候私無事ニ致逗留候扨ハ羊毛被遣被下慥ニ落手今日堺へ遣候追ミ致出精候

一　菊屋氣候由燒物やめ申候由先ハ御國之一手柄ニ御座候

一　浪花へ重而出候ハヽ阿蘭陀物店ミ儀是ハ江戸ても兼而存付居申候我等店ニもわり觚戱なとヲ使候へハ大金吸寄候得共兎角刀か邪魔ニ相成候又致方も可有や何ヲ申ても多いしらミで手ニ取れ不申候

一　此間も田銀山銅山見分致候扨ミ夥布儀驚目申候まだ〳〵銀ハいくらも御座候へ共慶長寬文以後智惠ミ有者出不申候故土中ニ埋置候平地ゟ五十二丈そこ迄堀入水ニこまり相止候由此間水拔工夫いたし申候天下之事何ニよらミ人ヲ得されハ成就不致候吉野ハ滿山銅銀ニ而御座候故願書出し申候いまた御下知無御座候肥前ゟ攝津迄は大抵さかし申候古今之大山師ニ相成申候

一　本竈ミ儀兩人服不申候由仍之猶時節も可有と被仰遣候乍去貴君耳頓ニ近クして惡と思召捨ルハ格

別是式ニ時節ヲ御待被成候ハ例之智恵ニたほされ候へ何へども御はしめ二ッも三も御ゑくぢり被成候へハ自功者ニ相成候手ヲ空して日焼ヲ待ハ愚民之業ニ而御座候何成共御はしめ天地之恩ヲ報し玉ハヽ自ら恵も御座候考て見てハ何でも出來不申候我らハゑくぢるヲ先ニ仕候其内ニハ火浣布羅紗燒物類之かむが殘り申候是らら智恵ヲ御止可被成候貴君之敵ハ智恵で御座候此所能々御味可被成候周輔丈瓠哉丈かとも理屈ヲ止て何そ取掛り憂目ヲ見不申候而ハ役ニ立不申候此所苦勞ニ存候猶萬々追々可得貴意候　以上

六月廿九日　鳩溪

桃源樣

尙々御家内樣へ與々宜奉賴候一桂公へ能々御心得可被成候あつたら男ヲ庄屋殿で朽果申候魯水公貧乏如何鞠も落ねハ上り不申候元氣ヲ落し不申候樣御引立可被遣候春人公其外へも能々御心得可被下候

以上

平賀輝子氏藏書翰　（竪五寸七分、長五尺九寸七分）香川縣大川郡志度町

尙々仙臺へも気與候樣御賴御座候得共中々當時気兼候是も段々御金等被下候故其力ニ而秩父致成就

候其外ニて御咄も御座候得共難盡筆紙候
六月十二日七月十五日出之御狀相達致拜見候先以母樣益御機嫌好被遊御座奉恐悅次ニ御家内御替も
無御座ゟ由比日百殿方も御狀被下致安心候此方方出狀申上候定而相達可申奉存候
一燒物二樽被遣御目錄之通委細引合請取申候扨々源吾上手ニ相成皆々肝を潰申候此間長崎掛り御役
人衆へも掛御目候品々方源吾を遣長崎ニ而燒セ唐阿蘭陀へ渡度ニ御役人方へ御内談致掛置候是ハ日
本之土ニ而唐阿蘭陀之金ヲ取候工夫ニ御座候大抵相極り候ハバ委細源吾へ可申遣候末代迄之手柄ニ
御座候間其節ハ參候樣兼而御談置可被下候
一秩父鑛山之儀いまだ吹方熟ふ申行ㇾ兼候乍去右鐵通行之爲ニ川船工夫いたし十五六里之間往古方
無之場通船いたし申候是も漸此節致成就候要助右奉行ニ遣置大ニ助ニ相成候右通船出來ル故是迄朽
捨候山々之木皆炭ニ相成候是も炭山願相濟夏以來二千俵計燒セ試候處金壹兩ニ六貫目俵廿七八俵ニ
而江戶着此節兩ニ十九俵之問屋仕切ニ而宜利分ニ候得共手燒ニ致させ候てハ埒明不申候故伊豆炭山
師山本文野右衛門ニ申者ヘ利分ケニ致相談相渡一年先三萬俵燒出シ樣子次第十萬も燒セ候積ニ御座
候是ハ人ニ世話致させ手ヲぬらさす利分に相成候
川船……火らた方故要助一人…………炭…………相成申候ハヽ□□□□□□□など氣呉
不申候而ハ他人斗ニ而ハ大に損德有之候御序ニ御咄置可被下候川船通行十分致候故是迄十五六里も

馬斗ニ而往來致候故朽捨り候澤山之諸木炭に相成天下無双之大山大木共有之候扨〻いさましき事ニ
御座候その内ニハ鐵山も成就致候是も石見之者へ渡シ候相談致掛候
一たゝら運上金百兩程には相談出來可致候先五たゝらも相立候積ニ理兵衞呑込歸り候是も成就いたし
候得ハ一年五百兩程之運上ハ取レ候是ハ未相定り不申候得共炭川船は丈夫に御座候乍去大責ハ元入
掛りこまり入候只今迄も炭山ニ五人川船ニ七人鐵山ハ休候而さへ二人牛四疋川船六艘我〻一人之力
ニ而扶持いたし居申候故最初之入たしニ大ニ骨ヲ折物入ニこまり候故是迄其御元見つきも相成兼候
是から少くつろぎ追〻金子手に入申候
一親類中近邊へも書狀遣度候得共甚取込故不能其儀候宜御傳可被下候
一寒氣之節母樣隨分御保養被遊候樣吳〻宜御申上可被下候
一江島屋へ別紙進不申候宜御心得政所うち屋其外へも宜奉賴上候　以上

十一月廿四日　　　平　賀　源　内

平賀權太夫殿

平賀輝子氏藏訴狀斷簡（第一紙第二紙共、竪一尺八分、長一尺三寸六分）

乍恐以書付奉願上候

一神田大和町代地次右衛門店浪人平賀源内申上候私儀御出入仕候御屋敷鐘樓堂時斗損シ候ニ付直させ度候樣ニ御頼被遊候ニ付則右時斗御預り申上私同店ニ而弥七と申細工人方江修覆ニ遣置申候處去月廿日弥七私方江參り先達而差遣候時斗出來者不仕候得共今日急ニ外江引越申候ニ付請取度候樣申來り候ニ付即刻見セニ遣候處最早家財諸道具車ニ積引出シ可申躰ニ相見へ候ニ付時斗相改候處懸ケ目貳貫目程宛有之候鉛之大分銅三ツ之内貳ツ之分銅鉛切取り候躰ニ見分甚見苦敷目方餘程不足ニ相成申候勿論鉛目方價ニ積り候得者聊之儀ニ御座候得共分銅目方相違仕候而者時斗用立不申以來外ニ而直させ候茂容易ニ出來不仕候故御預り申上候御屋敷樣江對シ相立不申甚迷惑仕候右分銅前目鐵槌ニ而叩直シ候躰者家主次右衛門見屆ケ候由申之（以下缺）（第一紙）

相違無之儀ニ御座候且又ゑれきてるき申而硝子ヲ以天火ヲ呼病ヲ治シ候器物阿蘭陀ニ有之候由兼而承り傳へ私先年長崎逗留之内種々丹精仕候而漸手掛り出來仕歸府之後七年之工夫ニ而去々年一月始而成就仕候其後者高貴之御方樣江茂被爲召私浪々渡世之一助ニ茂相成申候右弥七儀者十年以前ゟ私下細工致させ候者故細工をも爲手傳候ニ付見覺罷在候然ル處同店玉細工人忠左衛門と申

源内訴状斷簡　　香川縣志度町　平賀輝子女史藏

竪　一尺〇八分、　横　一尺三寸六分

源内がこの下細工人の彌七を訴へた起訴状の手控或は下書と思はれ、裏に願人平賀源内、家主、五人組などとあるが、一つの印章も押されてゐない。日附は缺失してゐるが、恐らく安永七年のものであらう。そしてこの文書によつて、明和七年の源内長崎再遊説とエレキテルの完成が安永五年十一月に江戸の地であることが立證される。

合私名前を申立右ゑれきてる拵候由ニ而龜井町文藏店鑄物師嘉七相賴右細工ニ入用之由ニ而屋敷方ゟ金子貸リ取右器物ニ似寄リ候品出來致候得共火出不申用立不申由ニ御座候右ニ付嘉七儀御屋敷江對シ申譯無之弥七と不和ニ相成候段嘉七儀私江委細申聞候其後弥七儀本石町貳丁目家主傳兵衛と申者右同樣ニ欺き候而金子六兩取之又候ゑれきてるニ似寄リ候品拵候由ニ候得共是又火出不申候由家主次右衛門方ゟ承之候既此間青山原宿時斗屋吉郞兵衛と申者右彌七ヲ語イゑれきてる拵懸リ候段弥七申聞候儀も（以下缺）（第二紙）

（第二紙裏面）

願人	浪人	平賀源内
相手	同店	弥七
	右双方	家主
		五人組
		名主

平賀輝子氏藏書翰斷簡

明日御國へ出立之償有之由咄ニ付早々書狀相認候

一　秋田屋敷も不相替首尾宜御座候乍去右屋敷大坂廻米差支ニ而金子不手廻リ之由ニ而こまり候夫故先頃中惣助叅居候得共ろく〳〵ニ金子も遣兼候秩父も大物入故彼是不手廻ニ御座候得共先頃ゟ松平陸奥守樣ゟ（二三字缺）御用等被仰付（二三字缺）候ハハ二反ありさび（二三字缺）銀十枚拜領（二三字缺）御賴之御用（二三字缺）成就致候ヘバ急度（二三字缺）も御座候委細ハ筆紙ニ申盡かたく候

一　秩父ミ鐵も五千貫目斗吹溜有之所鐵性（二字缺）鍛治共遣いにくき由ニ而當分賣兼こまり候處此間能賣口出來いたし候是は船釘鍛治橋之かすがい鍛治へ□相いたし遣セ候所隨分宜ニ相成候只今迄ハ五六百兩入置候處急ニ賣兼こまり候所ニ右賣口出來故追々破竹之勢ニ御座候

一　先日ハ田沼主殿頭樣佐竹侯へ上使ニ被爲入候御序（下缺）

（上缺）之成就と奉存候

一　此間出羽新城侯ゟ銅之銀驗御賴御座候試吹いたし候所五〆目ゟ五匁壹分之又五貫目ゟ拾匁七分之銀出候是も追々職人差遣候筈ニ御座候其外仙臺秋田懸合之筋も追々宜敷手都合ニ御座候仍之甚多用ニ

御座候當年中ニハ大業成就と相樂候今暫御待可被下候

一　拙者工夫ニ而櫛ミ細工爲致申候是ハ上手之塗師屋心易竝ニ彫物師壹人此方へ召抱置候て致サセ候金銀ヲ薄く致形ニ合セ打出候工夫ニ御座候箱入ニ致一枚五匁八九分ニ而出來以賣ハ商人へ遣候處金一分ッヽニて御座候商人共ハ一分二朱二分ッヽニも賣候由是ハ長崎行之前ニ致たハリ少斗出止ニ相成候故此度出候所大ニ樣子宜少之間ニ最早百枚斗賣レ申候是等ハ工夫斗ニ而少も手ハ動シ不申皆ミ職人仕事ニ御座候かさばり候故箱ニ不入近々おゑよへ被遣可被下以

一　源吾へ燒物之儀頼遣候何卒早く致出來候樣……頼可被下候委細……ニ得貴意候共此……狀早々御屆可被下候

一　美人會一冊是も母樣御慰ニ入御覽候尤一通御覽相濟候ハヾ源吾へ御送リ可被下候江戶細工之氣取品ハ違候得共細工心得ニも相成可申奉存候外ニ母樣へ差上度品も御座候得共陸便ニ而ハ頼かたく追ミ船便ニ而差上候積ニ仕候

一　江嶋屋へ別紙遣不申候宜奉頼候一類中近邊へも宜奉頼候

一　宇治屋政所其外…………（以下缺）

一　羊四頭無事之由わらヲ多喰候も臓腑ヲ巻き死候間わらをくわせぬ樣ニ可被成候

一　此節益〻世間廣リ仙臺様なも被召參候其外水野出羽様ヲはじめ諸家へ立入いたし申候

一　賣藥店も去年取立候ハ小ク御座候故止ニいたし此間大家ヲ求要助遣‥‥候賣弘（ヒロメ）候積ニ御座候八九十疊敷之（三四字缺）是ハ（別紙）二‥‥‥樣思居」心掛候‥‥‥當春以來雨‥‥曇天ニ而能天氣希ニ御座候故金革出來上リ兼夫故諸事差支及延引候得共是非〳〵來月ハ出立之積ニ御座候左樣思召可被下候

一　先頃大火ハ余程間御座候尤大火故騒候得共何之御別條無御座候御安心可被下候

一　小豆嶋之儀‥‥兎角拙者參候節直々ニ相談可致候夫迄一通御懸合置可被下候

當月四日御屋敷へ之賴書狀上申候定而相達‥‥‥奉存候‥‥‥月廿八日之尊札‥‥相達奉拜見候寒中愈御機元能御勤被遊奉恐悦候母丈夫ニ相成おそよ快氣之趣被仰下安心仕候兎や角心ならず候處大ニ安心力ヲ得申候

私歸之儀御供ニ而も宜布御座候由安心仕候夫迄留守ミ儀萬々宜御世話被成置可被下候

一　清三郎殿御快御座候由安心仕目出度奉存候藥も寒中製法大方出來仕候後便ニも恐可申候

一　主人之喜衞門出府仕居申候由與〻宜奉賴候

一　其御地かまひすしく御座候由此地は朝鮮‥‥ニテ賑々布御座候　乍然お大名方兎角金不自由ニ‥

……不申候　(以上)

其段被仰遣先々此書状被遣可被下候猶委細之儀ハ後便に可申上候萬々奉期永春は　恐惶謹言

正月四日

平賀源内

國倫　花押

金次郎様

尚々夏以来大取込ニ而書状も出不申候下拙随分達者今ニ元氣宜御座候少も御案不被遊様宜御申上可被下候

一筆啓上候甚寒ニ御座候得共母様益御機嫌好被遊次ニ御家内御替も無御座候や承度奉存候先達而町便ニ大坂迄書状出候相達候や下拙儀も随分無事ニ相勤居申候然ハ當夏木村太夫迄相頼書状進候其節源吾焼物等頼遣候今以何之御返事無………(以下缺)

焼物一年三百兩程ッヽ調歸候……ハ源吾ヲ長崎へ……へバ天草之土天下無双ニ而いまり唐津も有の土参候長崎ハ甚天草へ近ク候故自由ニ取寄候右天草之土ヲ以長崎ニ居候而唐人阿蘭陀人之好ミニ順ひ焼遣候へバ大ニ賣レ可申候是日本之土ヲ以唐阿蘭陀之金銀ヲ取候儀御國益之段申上候處至極尤ニ被思召候乍去御土方被低付候而ハ却而…………(以下缺)

正月二日年始御狀も相達候十二月十八日出も相達候二月十四日是亦相見先以母樣益御機嫌好被遊御座次ニ御家內御替りも無御座一類中無別條大慶奉存候下拙無事ニ相勤候去冬ハ殊之外寒氣故一統ニ中寒ニ而春へ成痰咳等御座候下拙も正月ゟ咳つよくこまり候得共打伏候程之儀ニ而ハ無之咳ニ耳鳴候ニこまり候所此節さつそく快候夫故氣六敷一日／＼書狀口認・・・・・・・・相見へ候仙臺樣へ獻上御勘定奉行川井越前守樣へも差上候川井樣ゟ狂歌被遣候

是こそは名產劦の燒物や

見ても藥のさへた色合

ニ被仰遣候源吾へ能々御傳可被下候萬國圖之鉢薩摩樣へ外ゟ御調上ニ相成伊達遠江守樣へ御進物ニ相成候由やはり唐物と思召ニ而御買上ニ相成候由桂川甫周・・・・申官醫・・・・・・・・（以下缺）

つめひらき淨るり本三段目之樣ニ而是も尤ニ奉存候兎角人之物借り而拂ハぬが惡く候得共無理ニ拂へば後之謀が出來不申候又是迄ハ療治なども存ば程・・・・まへとも・・・・・・・・（以下缺）

（前缺）不存候時節參候得共風前之塵ニ而御座候少も御案被成間布候今暫之事ヲ待兼去りこ而ハ氣之程々事共ニ御座候是レ・・・・燕雀鴻鵠之志去らぬも道理・・・・・・・・（以下缺）

一　此地も着後・・・色々工夫いたし候得共江戸と違埒之明ぬ所ニ御座候漸此節人も存就中寒熱昇降ほしがり申候故十七日ゟ取掛・・・・・・・・・（以下缺）

十月十五日之御狀當月五日相達致拜見候時分柄寒冷相增候得共母樣益御機嫌好被遊御座皆〻御替無御座安心奉存候此元相替儀無御座候

一　歸國之儀ハ委細先書ニ申遣候程なく相達可申奉存候

一　要助與四郎宗助皆〻無事ニ罷在候與四郎ハ秩父へ遣置候川船・・・・・・・（以下缺）

次第・・・・・一先歸國其上ニ而も取立候事共御座候御待遠ニハ可成御座候得共今暫御待被下・・・・・・母樣・・・・・可被・・・・書狀ハ遣置・・・・御心得可被下・・・・・出之御狀・・・・・一〻は御返事・・・・・（以下缺）

以來ハ御屋敷御飛脚便ニ書狀遣候積ニ相賴申候其御元ゟも旦殿が池田市衛門へ御賴可被遣江戸御屋敷ニ而ハ與横目（ヨコメ）伊藤井平太心易先日度〻出合候御留守年ハ月ニ一度四日ニ御飛脚出候故來月ゟハ御飛脚便ニ月〻書狀進可申此方ゟハ旦殿迄遣候月日之立ハ早き物ニ而今日明日と思ふ内延引ニ相成候故右御屋敷便ニ毎月書狀出候積ニ御座候間其御元ゟも毎月可被遣候・・・・・・・・（以下缺）

一筆致啓上候久ゝ御使も不承候寒冷相增候得共母樣益御機嫌好被遊御座次ニ皆ゝ御替も無御座候え
御樣子承度奉存候此方相替儀も無之候春以來別宅いたし甚用事多夫故…………（以下缺）

（第二紙）
一仙臺樣御願筋も去冬致成就鑄鐵等も相濟申候兼而急度御禮御座候筈之御約束ニ御座候故相樂罷在
候其外當年ハ至極都合宜致大慶候御安心可被下候母樣へくれ／＼宜被仰上可被下候おりよへも文ハ
遣不申候其外一類中近邊へもくれ／＼宜御心得可被下候猶追ゝ可得御意候　以上

平賀源内

四月十九日

平賀權太夫殿

（前缺）
母樣隨分御保養專一ニ奉存候江島屋其外一類中近邊桃源子一桂子其外皆ゝ樣へ呉ゝ宜奉賴候　以上

平賀源内

十一日十八日

平賀權太夫殿

（上缺）
一其地水澤山御安堵ニ奉存候猶萬事追ゝ可御得意候　以上

六月廿八日

權太夫殿

猶〻母樣へくれ〲よろしく御申上可被下候おさよ其外一類中近邊へ能〻御心得可被下候(以下缺)

母樣お…………宜御禮たのみ(下缺)

一　羊毛御書付之通請取申候今日友七堺へ遣候

(上缺)手傳ニ付十兩程ハ利御座候得共……去年あまり……入金ニこまり問屋仕入ニて丸屋伊右衛門と申者ゟ出金いたし山本文野衛門と申者仲滿ニ而いたし候故利分四ヶ一ならてハ手ニ入不申候

川船ハ……ニ座候是も當……艘ニ御……甲州通……中取掛り……(以下缺)

ふちま……四兩と申見合にまけ而遣り申候

一　其外筋之悪い銀ヲ取レばいくらも御座候得共夫ハ智恵なき者之事七月十七日ゟ八月五日迄十九日ニ七十兩か細工物出來いたし申候手短ニ金ニ成候ハ論ゟ證據ニ御座候

一　䍡哉丈へ得御意候ベルレン塗り甚宜布兩五匁之極上唐土合ぬり候故古今無双之色合外ニ眞……人

ハ決而無御座候‥‥‥‥(以下缺)

(上缺)被遊‥‥‥　御替も無御座候珍重之至ニ奉存候下拙□無事ニ相勤罷有候御安心可被下候扨而兼而申進候通此度御供ニ而歸國之積ニ御座候處當春以來雨天或ハ天氣能候ヘバ風立又ハ曇天等ニ而(以下缺)‥‥能〻御心得可被下候長引候故快氣も可致と存候處扨〻殘念千萬ニ存候

一　當歸川英‥‥‥草故土地‥‥‥(以下缺)

(上缺)大當ニ御座候乍去周吉程ニハ參不申返〻も周吉‥‥‥不申殘念ニ奉‥‥‥専治めがいやがり申候故つい‥‥‥江戸ゟ路金越迎ニ人おこし可申候何角ニ付御心添被成置可被下候

一　治太夫も江戸へ召連余候大出精ニ而餘程足リニ相‥‥‥‥次第‥‥‥(以下缺)

(上缺)無程歸國萬〻可得御意候吳〻も母樣へ宜被仰上可被下候

五月六日

平賀權太夫殿

猶〻おてよへ宜御心得可被下候其外一類中近邊へもくれ〲‥‥‥心得可被下候　以上

平賀源内

（上缺）早〻申殘候
七月十五日
賀候
平賀權太夫殿

尙〻鶴翁方六月十五日之御狀當月三日相達候此度ハ返書遣不申候要助無事ニ居候與四郞ハ秩父ニ居候皆無事ニ御座候

源内

追啓
金子三兩日殿へ相賴進じ宮脇又右衛門方ゟ參可申候間御請取可被成候是ハ母樣年始之御祝儀ニ奉差上じ宜御申上……（以下缺）
……殿

（上缺）相殘何卒寫呉候樣御賴可被下候相殘之畫料ハ來春迄ニ急度無間違遣可申候段能々御賴可被下候夫共いそかしく出來兼候ハヽ右阿蘭陀本草御請取其元ニ御預リ置可被下候文柳へ延引之斷ハ幾□能々御申可被下候ハヽ書狀も遣不申……（以下缺）

（上缺）　月十二日正月二日十六日……候之御狀相達致□見候……樣益御機嫌好……遊御座奉恐悅候其節……外へ壹匁……當月晦日切□かし置申候此壹匁ハ每度……御心得可被下候神宮寺樣御入院日出度奉存候是亦宜奉賴候　以上

源　內

廿二日

權太夫殿

（上缺）樂御咄ニ御座候扨々源吾手柄さ此元ニ而も評判いたし候此元へ……くれ／＼宜賴入候

源　內

二月三日

權太夫殿

平賀源内

藤猪平太樣

（上缺）御屋敷樣も參上仕候儀難仕甚奉恐入候得共今日之所何分御用捨被遊被下何卒明後六日罷上候樣御取斗被成下度此段御願奉申上候初而參上仕候筈ニ昨日御懸合仕今朝差掛御願奉申上候段ミ於私甚失禮貴公樣ニも被仰上候も御難儀之段奉察候へ共格別之筋合ニ而無是非此段奉申上候重ねて奉恐入候其所何分宜御取成奉願上候早ミ申殘候　以上

十月四日

（上缺）不申…………則近邊神田大和町代地細川玄番樣表御門前右之處へ別宅いたし申候秩父も段ミ成就致大慶候當時炭燒三十四五八竈十八ニ而燒出させ候一月炭四千俵ツヽ致出來皆々川船ニ而積下申候川船當時□艘御座候追々作………月頃ゟ…………申候炭………（以下缺）

（上缺）相樂候

一　要助無事ニ致出精候當時川船方引請世話いたし居申候

一　忠兵衞難參由尤ニ奉存候吉兵衞ハ參候而も如何ニ御座候間其噂も御座候而御止可被下候

一　與四郎此地へ參居申候先頃途中ニ而逢申候

其後一兩度參申候いさこ福岡屋文藏と申者日用頭いたし居申候右之者方へ參居申候由日光へ參候由

申聞候先樣ヲふませ可申候さか……（以下缺）

追啓

先日被遣候源吾燒物評判宜候御勘定奉行石谷豐前守樣同御組頭益田新助樣ハ長崎御掛ニ御座候故先

日燒物掛御目及御内談候其譯ハ日本ニ而ハ唐物阿蘭陀物を尊候得共又彼地ニ而ハ日本之燒物ヲ殊之

外致重寶いまり唐津之……（以下缺）

保坂潤治氏藏書翰　東京市小石川區雜司ケ谷町

如貴命寒冷相增候得とも愈御勇健奉恐喜候然ハ孔雀之繪御返し被下慥に落手仕候客來取込早々申上候

以上

十月卅日

猶〻此間九兵衞御傳言一〻奉承知候萬〻近日拜顔可申上候　以上

平　賀　源　內

井口長兵衞樣

貴報

松原朋三氏藏書翰　香川縣木田郡平井町

一　周吉參候節各樣段々御細書被下候得此節秩父ゟ歸且又明日秋田へ致出立候故一〻御返事不仕候

一　周吉藤兵衞參候□其節秩父へ參留守ニ而御座候周吉ハ跡ゟ追カケ參道逢同道いたし歸候然處藤兵衞ハ其日此地出立ニ而歸リ候由扨々氣之短き男大田舍氣象論ニ不足候周吉當分同居致追〻細工出來大評判ニ御座候田沼樣ニ而御召抱被遊度由被仰候得共例之異物故御斷申上置候根付一三分一兩ゟさ申口れ者評判ニ而御座候

一　下拙儀明日秋田へ參候委細ハ權太夫方へ申遣候御聞可被成候夫故取込早〻申殘候　以上

六月廿八日

平　賀　源　內

久保桑閑様
同　久安様
伊東忠吾様

南大曹氏藏書翰　（竪五寸七分、長一尺一寸五分）　東京市赤坂區檜町一番地

追啓

此度阿蘭陀飜譯御用被仰付冥加至極難有仕合ニ奉存候仍之長崎へ罷越候ニ付近〻御地出立仕候誠ニ數年大願成就仕大幸之至ニ奉存候古今ノ珍事ト此地ニテモ噂仕候右御禮ニ參宮にも相望居申候得共如何可有御座候や此儀ハいまた相極め不申候若し左樣相成候ハヾ緩々得拜顏可申相樂候御同行之儀ニ御座候間淡齋先生へも御咄被下御歡可被下候能度故右之趣御知らせ申上候委細ハ中〻難盡筆紙候　以上

源　內

十七日

雅樂樣

三二 好松太郎氏藏書翰　（竪五寸、長一丈八寸五分）　香川縣大川郡志度町

八月十日之御狀致拜見候愈御堅固ニて御歸國目出度奉存候栗崎流御覺被成候由ニて御療治も御座候由扨〻珍重ニ奉存候乍然御國之一はお氣がほめ申候迚必〻御のり被成間敷候貴樣栗崎へ隨身少之間之儀ニ御座候得ハいまだ熟不申候と奉存候必〻習口斗ニ而ハ手練ハ參不申候とくと御熟し可被成候夫ニハ在邊之牛つかいなど肉太ニて喰料ニハ宜布御座候隨分切たりついたりヲ達者ニ御なり可被成候其内ニ大こまり之物出來可申候其處ヲ長崎へ御出御習可被成候モフ能と思召候得ハ上り不申候栗崎ニ而も高之しれたる者ニて御座候得共御國〻下手から見てハ上手故入門御すゝめ申候此上之長崎御けいこ御心掛馬鹿者めらヲ療治して錢ヲ取ため夫ヲ元手ニして長崎へ御出御けいこ被成候上でなけれハ天下〻名人人之命ハ救われ不申候今から仁術ハ早もぎ申候間ねぶと三文が膏藥付而白米之二升づゝもえてやり夫ヲためて長崎之極意ヲ極而後ニ始テ外療家瘤でも疔ても殺さぬ奴ニならねハ仁術もをちまも口斗ニ而御座候今之内ハ隨分だまして金ヲせしめ夫をつかハずニ長崎へ持て行と申大願候

戸田方之儀委細被仰下忝奉存候先達而紺屋町先生よりも被仰下候大坂右記方ハいまた何共不申參候一寸聞而ハ齊尤らしき事に御座候乍然少之事ニも門人勘當など久しいものニ而御座候夫レ醫者之

弟子勘當なとゝ申ハ醫術ヲ以て渡世とし或は内弟子などゟ仕立候者不埒なる時ハ勘當いたし申候も尤ニ候下拙ハ醫者ニ而ハ無之候得共好故仲山ニも習齋ニも承候此地ニ而も功者成者ニハ習申候尤齋儀ハ世上之者ゟ上手ニ而御座候故弟子分ニ被成御傳授被下候と申置候然共近年ハ拙者醫者ハ止秋之蟬ニハあらて高松様の御藥坊主之ぬけがらどこへ出ても浪人者ニ相違無御座候且又表立て申セハ林大學頭門人とこそ申るけれ戸田齋門人とハ申かたく御座候尤醫術かすき若望か不叶時ハ醫者ニでもなると申心をしの歩兵ヲついて逃道を拵置心で醫者ヲ習へハ畢竟物好ニ而御座候去年御暇頂戴仕大坂へ參候積ニ御座候處御勘定奉行一色安藝守様ゟ伊豆芒消御用被仰付當春又右芒消廣メさセ候様ニと田沼侯ゟ御老中様方迄被仰上候程之儀仍之大坂へも行れぞ候儀ハ殿様御耳ニも達申候其後右御用落着も不致故大坂行延引致候儀ハ齊も存居申候　殿様ヲだましたるニ而ハなく　大公儀ゟの御用可致方も無之候然ルヲ此方へハ何共不申參勘當致などとハ腹ノ皮ニ而御座候醫術ニかきらだ物を習ふ者ハいくらも御座候得共家業ニいたし候か或ハ内弟子ニ而取立不申候者ハめつたニ勘當ハ相成不申候前方物ヲ習候人々へ不沙汰いたし申候もいくらも御座候只今ニ而も醫者ヲ家業ニいたし申候へハ勘當と申而も一言も無御座候いまた家業ニハ致不申候且大阪へ參度と願候而不參ハ源内一人か〔是かうそにあらす御本丸之先生からの御用之〕うそにて御座候齊力に而無理ニ引寄候儀も不成物ニ御座候へハ齊が大名ヲだまし候とハ誰も申間敷候乍然ケ様之儀ヲ申立候へハ茶碗ニふらすこ破ワれても末こあわんとといふ瀧川ニ引かへ取かへしあ

り不申候へハ爰ハ一番誤而近々大阪へ罷出候積ニいたし申候只今此地大事之場所ニ而御座候得共無是非事とあきらめ往來道中遣之損と見て一寸なり共愈々罷出候と申候左樣御心得可被下候

一　此書狀御覽早々火中〳〵必々御同苗樣ゟ外たれニも御見セ被下間敷候

一　末筆なから皆樣へ宜樣奉賴候　以上

九月廿七日

平　賀　源　内

久保久安樣

（上缺）評判宜相聞候兼テ要助おもニ世話いたし候處炭方の手代共と私方要助不和ニ而角立不都合ニ候處尤右之事ヲも與四郎取計ニ而程能相成仍之來年ゟハ私方炭方一所に打込ミ致候相談ニ相成大ニ致安心まさかミ時ハ他人ゟハ身ニ相成候故彼者ニ世活ヲも爲致候積ニ御座候手くせも不出甚宜相成候間此段母樣福岡屋一類共へも御傳可被下候則來狀掛御目候

一類中へ別紙遣不申候宜御心得可被下候江ノ島屋へも宜奉賴候當年ハ殊の外いそがしく書狀も遣不申候是ゟ少く手透ニも相成候間追て御吉左右可申上候段寒中母樣隨分御保容被遊候樣御申上可被下候其外近邊の衆へも呉々宜奉願上　以上

十二月四日

平賀權太夫殿

（上缺）任幸便致啓上候殘暑强御座候得共母樣益御機嫌好被遊御座候次ニ皆〻御替りも無御座候珍重ニ存候下拙無事ニ罷在候御安堵可被下候然ハ御中元……（以下缺）

中村不能齋採集文書所載書翰　（卷十）石黑務氏藏

扨々御物遠ニ奉存候殘暑强御座候得共愈御莊健ニ被成御座奉珍賀候私儀先比ゟ新宅普請且別莊御客來ニ而甚取込申候先比細川樣ニも被爲入御花火等も御座候其外日々被爲入候御方々ハ皆々明渡故御謝禮ヲせしめる計口ハはり不申候得共先日田沼こ水野之若殿達被爲入候其後又々子供衆も被爲入十一日ニハ神田橋御部屋樣被爲入住太夫ニ氏太夫蟻鳳いせ源京文こ申名代之聲いろ外ニ藝者等差出大御馳走ニ御座候浪人者之下屋敷へ大名客ニ而大騷キ當盆前御繁可被下候右御客來ニ而別莊宜相成候間　亘樣近日潛ニ被爲入被下候樣御申上可被下候尤大勢ニ而ハ此節之儀故亭主迷惑仕候間　亘樣　松峯老なこ三四人之御積ニ而御出奉待候

一　此一封御使ニ奉賴上ル要用申遣ル呉〻奉賴上ル

一　先達而御賴申上ル貢物いかゝ御座ルや承度奉存ル拜借之品延引仕ル萬拜顏可申上ル　以上

七月十六日

平　賀　源　內

宮脇又右衞門樣

名家手簡所載書翰　（二集上卷）

御書付奉拜見候然ハ吹出鐵荒川通船炭竈之儀委細書付差上㝡加永之儀來ル十五日迄ニ上納可仕旨被仰下ル趣委細奉畏ル得と相考らべ可申上ル　以上

酉　十二月六日

平　賀　源　內

國倫印

前澤藤十郎樣

先哲像傳所載書翰（卷の二）

夜前ハ段々難有仕合奉存候御母公樣へ宜奉願上候扨々立軒樣御病氣ヱレキテルニ而一廻りも御療治被成候ハヽ極めて宜奉存候御服藥ヽ違きかいでも害ニ相成不申候若御療治被成候ハヾ初ハ私叅後ニハ家内之者に而も相濟候私ハ中々惡候而も只今右躰御病身てハ濟ぬ御事ヽ奉存候へハ氣之毒奉存候右之趣一應御懸合可被下候私ゟ直ニ申上候而御請惡御座候へハ如何に御座候故一旦被仰通被下候上ハ私參上も不苦御座候此段宜奉賴上候　以上

霜月十二日

源　内

道有樣

内用

猶々くれ〳〵も右之段宜御取合一療治仕度奉存候中かるくてもケ樣之時ハ寸志申上度如此に御座候何分宜奉願上候

所藏者不明書翰寫

如貴命殘暑強御座候愈御莊健被成御座奉珍賀候誠ニ先日者御來駕被下候處取込早々之仕合眞平御用捨

可被下度候然ハ其節御相談仕候　御屋敷樣へエレキテル持參仕候儀明四日參上仕候樣ニ被成度段被仰下奉畏候被仰下候通八時頃參上可仕可候左之通御人被遣可被下候

一　御釣臺　　壹荷

重ク御座候間三四人掛り

一　右宰領　　壹人

一　駕人足　　三人

私も重ク御座候間達者成人

右之通被遣可被下候外ニ入御覽候品少〻持參可仕候エレキテルハ晝ゟ暮合の間能相分候間其御積ニ被成可被下候萬〻明日拜顏可申上候　以上

七月三日

平　賀　源　内

立田玄道樣

貴樣

猶〻私肥滿甚暑ニ苦しミ候故夏之內ハ外ニ御屋敷へも出不申候得共貴君御逗留の內被成御覽度奈上仕候凉しき所ニ被差置被下候樣ニ第一ニ御願申上候御酒ハ下戶ニ食事等御構ひ可被下凉しき所偏ニ奉願上候

日記

明和五年日記斷簡

三月十五日
御家老
矢貝清太夫殿
御着
同廿二日
同
福井市郎兵衛殿
御着
同廿日
會津御家老
北原恒藏殿
御着
四月廿三日
御上使
渡部久藏樣
稻垣求馬樣
御代官
前澤藤十郎樣
御着
同廿五日
御城御引渡シ其日直ニ湯ノ原迄御越被成候
同廿七日ゟ廿八日廿九日迄
三ノ丸御家中屋敷地割御見分
新井甚五左衛門殿
山田介左衛門殿
里村丈助殿
高橋三郎兵衛殿
石津平兵衛殿
四月朔日ゟ
右場所繪圖御認ニ付善右衛門幸七御普請方御役所へ罷
出ル

藤巻　十右衛門殿
百　下　傳　八殿
小奉行　高橋　三郎兵衛殿
鈴　木　右　内殿
篠原　源右衛門殿

四月朔日夜五ツ時小橋町松岩寺焼失

四月六日
平吉庄二郎江戸へ差遣ス右ハ大工並人足呼大野屋杉田
玄白老へ書状遣ス

四月十日
伊兵衛江戸へ飛脚ニ遣ス右ハ御普請被仰付日限相延申
ニ付大工等押へのため遣候

四月十日
大野屋并嘉平次貞右衛門二郎兵衛召連阿てら澤山材木
見分ニ罷越十一日帰り時分長崎村へ通掛り候處中町ニ
而五郎助と申者方ニ秋元様御家中之仁ら相見へ候御組
體の人亂心の様子に而居候由村方打寄評義いたし候處
へ行掛申候間様子相尋候へハ(豐?)墨伴九郎殿と申御組
親候由被申候依之右五郎助方へ新預ヶ置候而罷帰り申
候依之即刻御普請方御役所へ三郎兵衛罷出古屋又助殿
石津平兵衛殿へ右様子申達し候

四月十二日
江戸表ゟ飛脚来ル右ハ當月五日ニ美濃伊勢川ノ御普請
御手傳
松平阿波守様
有馬中務大輔様
中川修理太夫様
加藤遠江守様
黒田?豊松様
被仰付候由ニ而西宮善兵衛帰府いたし候様申来ル左野
や七郎右衛門と申仁方ゟ

四月十二日八ツ時出立ニ而善右衛門傳兵衛兩人仙臺ゟ松

嶋迄參ル

十三日

西宮善兵衛江戸へ歸ル左野やゟ飛脚同道ニ而

同日

大野や井三郎兵衛大工貳人召連松原御關所ゟ長谷まで御關所へ見分ニ參ル書付繪圖御役所へ上ル十四日大工三右衛門善二郎兩人狸森御關所へ遣ス

同月十五日三右衛門善次兩人新山御關所へ遣ス

同月十七日ニ積り書御役所へ差上ル

同月十六日

御長屋入札明日中ニ差出候樣ニ御役所ゟ申來ル同夕幸七ヲ御役所へ差出シ入札一兩日御延被下候樣ニ申上ル卽御承知之旨御挨拶申來ル

同廿日　八ツ時善右衛門傳兵衛仙臺松嶋ゟ歸ル

同廿壹日　御長屋梁間二間半兩外家付貳間部屋貳間半部屋三間部屋右之通積り書差上候樣被仰付卽積差上ル壹坪ニ付金

同廿二日　開札有之候處札數九枚程之由右之内山形町六人組竝江戸出雲屋八郎右衛門札下直ニ付可被仰付筋ニ而大野屋被召出御内談被仰聞候故吉六申上候ハ私共積書後再吟味之上仕候處前札ゟハ格別相違仕候儀出來仕候存寄御座候ニ付入札仕候筋ニ奉存候間右落札へ被仰付候樣申上候而罷歸ル

同廿三日　善右衛門被召出小奉行衆竝石津氏大屋氏ゟ此度取掛りニ候處大野屋相除キ候而ハ上ニモ氣毒ニ被思召候由併損金在之候共落札ニ而致候樣ニ押而申付候も難致候間此段吉六へも内談いたし可相成候はゝ少ゝも御請吉六方ゟ申上候樣可然被申候旨依之打寄内談致候處積り相違致候而申切外へ斗爲致此方ニ而一切不仕候も是迄被召連候かひも無之樣又は該職人等材木人足者迄も如何之筋ニ存手都合不足筋へも可相成哉仍而少々も御請致候方可然ニ内談相極大野屋罷出壹棟二棟も爲

心見御請申上隨分出精爲致ゝ間ニ合申義ニ御座候ハ、其上相勤可申候萬一右金高ニ而出來兼申候ハ、右斗ニ而延行御斷可申上旨申上候而罷歸ル

同廿四日

大野屋善右衛門我等三人罷出候樣ニ御役所ゟ申來ル九ツ時三人罷出候處御奉行新非甚五左衛門樣山田介左衛門樣里村丈助樣被仰渡候ハ大野屋義ハ數年御出入殊ニ西野樣ゟ御推擧之事ニ御座候得共幾重にも内談之上可然組筋三郎兵衛事ハ受負人ニ而ハ無之候得共是迄立會ニ被参候故乍御大義呼寄申候間積相違ニ而損金も可有之哉ニ存候處押而申付候ニハ無之候併外々斗へ申付候ハ猶以氣ノ毒ニ候間後ゟ内談致候而落札之内半分成共三分一成共被仰付可然存寄ニ在之候ハヾ其旨明日挨拶仕候樣ニ被仰渡ゝ御書付御渡シ被成候左ニ文言相記候通

覺

一梁間貳間半兩外家附桁行三拾間御長屋　一式

代金八拾六兩貳分ト錢七百五十文　十部屋

但シ壹部屋ニ付　金八兩貳分ト永百七十文

貳間半兩外家付三間部屋　壹ヶ所　此坪數十坪半

但壹坪ニ付　銀四十九匁五分四厘余

一同梁間兩外家付桁行廿五間御長屋　一式

代金七拾壹兩三分　錢五百四十文

但シ壹部屋ニ付　金七兩　永百九十文　十部屋

貳間半兩外家付貳間半部屋　一ヶ所　此坪數八坪七合五勺

但壹坪ニ付　銀四十九匁三分貳毛余

右ハ山形四日町　六兵衛

同　丁　與四郎

同　丁　市之丞

小橋町　惣兵衛

宮　丁　長兵衛

六日丁　忠兵衛

一梁間貳間半兩外家付桁行三拾間御長屋　一式

代金七拾五兩壹分　十部屋
但壹部屋ニ付　金五兩ト銀壹匁
貳間半兩外家付貳間部屋　一ヶ所　此坪數七坪
但壹坪ニ付　銀四十三匁
右ハ江戸出雲屋八郎右衛門一式請負之内
居石　萱　戸障子　疊　地形
右ハ相除キ候積リ

覺

一木數六百廿本
柱外家柱梁桁板壹家　中棟尾行根太一敷居同板壹寸
之木一間ヵ貳丈壹尺迄
代六拾四〆四百三十八文
一千六百四十本　大ほけ
代八〆七百十貳文
〆七十三貫百五十文
右御直段ニ而御買上ニ被仰付御請申上候四月廿二日

貳間部屋ノ方
い一
八棟　大野屋御請仕候
一四拾間（桁行）　貳間部ヤ二十　代百壹分ト五匁
内百四十匁　屋根違代引
い二
一廿八間　貳間部ヤ十四　代七十兩ト十四匁
内九十八匁　同斷引
い三
一三十間　御忠間部ヤ　代七十五兩壹分
内百五匁　同斷行金七兩三分ト七匁一ト住居直シ代引
い四
一貳十間　三間部屋二　二間部屋七　代五十貳兩壹分
内七十一匁　同斷引
い五
一三十四間　貳間部ヤ十七　代七十五兩壹分
内百五匁　同斷引
い六
一廿貳間　貳間部ヤ十一　代五十五兩ト十一匁
内七十七匁　同斷引
い八
一廿貳間　貳間部ヤ十一　代五十五兩ト十一匁
内七十七匁　同斷引

ろ六
一十四間　弐間部ヤ七　代三十五両ト七匁
　内四十九匁同断行
合金五百廿壹両ト銀十八匁三分
五月朔日　江戸ゟ庄二郎伊兵衛歸ル八丁堀喜二郎深川村
松喜兵衛大野屋清八大野屋御内室秩父忠兵衛喜郎右衛
門右書狀持参忠兵衛喜郎右衛門方ゟ之狀ニ中津川加兵
衛由右衛門入山延引ニ付村方百姓迷惑いし候由伊奈備
前守樣御役所へ願出候由ニ而御地頭御役所ゟ願人三人
并村役人差添備前守樣地方御役所へ罷出候樣ニ被仰付
喜郎右衛門出府致候趣書狀ニ申來ル卽書狀有之
五月四日ニ大野屋被召出御渡シ書付

覺

七日町通
は七
一三十弐間　梁間三間両外家付　壹棟
　内七間部ヤ二　六間部ヤ三百三十弐坪　四坪增
〆百拾四両
　壹坪ニ付　五十一匁六分弐厘ツヽ
は四
一三十五間　壹棟
　七間部ヤ三　四間部ヤ　一　拾間部ヤ一
百四十六坪七合五勺　六坪七合五勺增
〆百廿五両九匁六分五厘
　壹坪ニ付　五十弐匁四厘ツヽ
は五
一廿四間　壹棟
　七間部ヤ一　六間部ヤ二　五間部ヤ二
　九十九坪　三坪增
〆八拾五両三分七匁
　壹坪ニ付　五十弐匁四厘ツヽ
ろ十
一拾弐間　壹棟
　七間部ヤ一　五間部ヤ一
　五十坪　弐坪增
〆四十弐両弐分八匁
壹坪ニ付　五十一匁壹分六厘ツヽ

ろ八
一廿九間　壹棟
七間部ヤ　六間部ヤ三　四間部ヤ一
百十九坪貳合五勺　三坪貳合五勺増
〆百三両三分ト貳分五厘
壹坪ニ付　五十一匁八分七厘ツヽ

ろ三
一廿八間　壹棟
六間部ヤ四　四間部ヤ一
百十四坪貳合五勺三坪貳合五勺増　大野屋
〆百両三分ト四匁七分五厘
壹坪ニ付　五十三匁ツヽ

ろ壹
一三十間（廿六間と成）　壹棟
六間部ヤ一　大野屋　四間部ヤ四　八間部ヤ一
百廿三坪半　三坪半増
〆百九両ト十匁
壹坪ニ付　五十壹匁ツヽ

は三
一三十六間　一棟

十間部ヤ一　七間部ヤ二　六間部ヤ二
百五十坪　六坪増
〆百廿九両壹分ト十四匁
壹坪ニ付　五十貳匁三分四厘ツヽ

に八
一廿六間　一棟
十貳間部ヤ一　十四間部ヤ一
百十五坪　十一坪増
〆百十六両三分ト七匁
壹坪ニ付　六十一匁ツヽ

ほ壹
一十貳間（四と成）　一棟　大野屋
六間部ヤ二
四十九坪　壹坪増
〆四拾三両ト十四匁
壹坪ニ付　五十三匁ツヽ

ほ三
一廿六間　一棟
九間部ヤ　八間部ヤ　五間部ヤ　四間部ヤ

百九坪半　五坪半増
〆九十五兩貳分ト九匁貳分五厘
壹坪ニ付　五十貳匁四分ツヽ
ほ四
一廿八間　一棟
八間部ヤ二　六間部ヤ二
百十七坪　五坪増　大野屋
〆百三兩壹分ト十一匁
壹坪ニ付　五十三匁ツヽ
ほ五
一十貳間　一棟
六間部ヤ二
四十九坪　壹坪増
〆四十三兩ト十四匁
壹坪ニ付　五十二匁九分ツヽ
ほ六
一貳拾間　一棟
八間部ヤ一　六間部ヤ二
八拾三坪　三坪増

〆七拾三兩壹分ト十四匁
壹坪ニ付　五十三匁壹分ツヽ
ほ七八
一廿四間　一棟
八間部ヤ一　七間部ヤ一　五間部ヤ一　四間部
ヤ一
百坪貳合五勺　四坪貳合五勺増
〆八十七兩ト五匁七分五厘
壹坪ニ付　五十貳匁ツヽ
ほ九
一廿八間　壹棟
十貳間部ヤ二　四間部ヤ一
百拾六坪貳合五勺　四坪貳合五勺増
〆百九拾貳兩貳分ト壹匁七分五厘
壹坪ニ付　六十三匁四分ツヽ
へ二
一拾貳間　一棟
六間部ヤ二
四拾九坪　壹坪増　大野屋

〆四拾三兩ト拾四匁

壹坪ニ付　五十三匁ツヽ

へ三
一十八間　一棟　大野屋

六間部ヤ三

七拾三坪半　壹坪半増

〆六拾四兩三分ト六匁

壹坪ニ付　五十貳匁九分ツヽ

十八棟

〆千六百三兩貳分ト四分

千七百九十六坪七合五勺

右は旅籠町與惣次同町清兵衛百姓町藤吉十日町
新七小橋口忠七五人組合落札

は六
一廿七間　三間梁兩外家付　壹棟

七間部ヤ三　六間部ヤ一

百十三坪　五坪増

〆百拾五兩ト十貳匁

壹坪ニ付　六拾壹匁壹分六厘ツヽ

は一
一三拾五間　一棟

二十間部屋一　拾五間部屋一

貳百十五坪七合五勺　七十五坪七合五勺増

〆貳百兩貳分ト十匁

壹坪ニ付　五拾五匁八分ツヽ

は二
一三拾三間　一棟

十八間部ヤ一　十五間部ヤ一

貳百七坪半　七十五坪半増

〆百八十九兩ト十貳匁

壹坪ニ付　五十四匁七分壹厘ツヽ

ろ九
一廿七間　一棟

七間部ヤ三　六間部ヤ一

百拾三坪　五坪増

〆五拾壹兩ト十貳匁

壹坪ニ付　廿七坪壹分ト八厘ツヽ

是ハ百両ノ落カ

に十
一三十間　一棟

十間部ャ一　四間部ャ二　六間部ャ二

百廿三坪半　三坪増

〆百五両貳分十四匁

壹坪ニ付　五十一匁三分六厘ツヽ

は二
一廿五間　一棟

十一間部ャ一　七間部ャ二

百六坪　六坪増

〆百十三両壹分

壹坪ニ付　六十四匁壹分ツヽ

〆八棟

金七百七十四両壹分ト銀六十匁

八百七十八坪七合五勺

右ハ出雲屋八郎右衛門落札

一三十五間　一棟

七間部ャ五

百四十七坪半　七坪増

〆百拾六両壹分ト五匁

壹坪ニ付　四十七匁三分貳厘ツヽ

右ハ積違之由御免願罷出御叱リ之上相止メ

に八
是ハ手前積書不仰付

軸積

は七
一三十貳間　代七十八両三分　銀十一匁

は六
一廿七間　代六十六両六匁

は五
一廿四間　代五十九両十貳匁

は四
一三十五間　代八十六両壹分五匁

は三
一三十六間　代八十八両三分三匁

は壹
一三十五間　代百廿八両三分十一匁

は二
一三十三間　代百廿三両貳分十四匁

ろ十
一十貳間　代廿九両貳分六匁

ろ九
一廿七間　代六十六両貳分六匁

一ろ八　廿九間　代七十一兩貳分五匁
一に八　廿六間　代七十四兩貳分五匁
一に十　廿六間　代六十四兩八匁
一ほ二　廿五間　代六十一兩貳分十匁
一ほ三　廿六間　代六十四兩八匁
一ほ五　十貳間　代廿九兩貳分六匁
一ほ六　貳十間　代四十九兩壹分五匁
一ほ九　廿八間　代六十九兩四匁
一へ四　三十五間　代八十六兩壹分五匁
一ろ壹　廿六間　大野屋　代六十四兩八匁
一ほ壹　十四間　大野屋　代三十四兩貳分貳匁
一ほ四　廿八間　大野屋　代六十九兩四匁
一ほ八　廿四間　大野屋　代五十九兩ト十貳匁
一へ二　十貳間　大野屋　代廿九兩貳分六匁
一へ三　十八間　大野屋　代四十四兩壹分九匁
一ろ三　廿八間　大野屋　代六十九兩四匁

上ノ間御住居
小間一間ニ付　銀七十八匁ツヽ
臺所方住居　右割合ヲ以半減
但シ三十九匁ツヽ
住居被仰付候ヘバ右直段ニ而仕立可申候
七棟
合金三百七十兩

五月廿三日
ほ四　下渡し二十八間　六と成
一　金三十九兩　請負人　久次郎　證人　平三郎

同日
ろ三　二十八間
一　金三十八兩　請負人　七右衛門　證人　茂衛門

同日
ほ七　二十四間
一　金三十三兩壹分　請負人　彦　助　證人　又右衛門

へ二　十二間
一　金十六兩壹分

へ三　十八間
一　金廿六兩貳分　請負人　松右衛門　證人　榮　吉

五月二十五日
ほ壹　十四間

一金十九両弐分　請負人　助六　證人　忠右衛門

材木此方ゟ渡し
ろ一 二十六間　二十八と成

一金　請負人　利助

一　御勘定所　代金百三両

一　秦安寺并本堂御門二ヶ所共ニ代金百廿七両

是ハ入札なし御積リヲ以テ被仰付候三郎兵衛福井様へ罷出御頼申上候并御奉行中御三人へ出ル

一秦安寺　代金八十両　下渡し　請負人　喜助　證人

一御勘定所　代金七十両　請負人　久二郎　證人　平三郎

差上申證文之事

一私共御請負仕候三間梁御長屋之義先達而御注文素建ニ而御座候處若御住居造作之義被爲仰付候ハヽ大小御部屋共小間壹間雪隠共銀七十八匁之御割合ヲ以何部屋ニ而も被仰付次第御請可申上様御請證文差上候處此度私共御請負御長屋之内

一ろ　壹番西ゟ壹番　六間部屋　上田宗實
一ろ　三番西ゟ三番　六間部屋　星野新六
一ろ　三番西ゟ五番　四間部屋　若海玄傳
一ほ　四番西ゟ三番　六間部屋　山田大助
一ほ　七番西ゟ二番　五間部屋　本多見育
一ほ　七番西ゟ四番　四間部屋　井草伴助
一ほ　壹番西ゟ壹番　八間部屋　村山平右衛門
一ほ　壹番西ゟ弐番　六間部屋　和田源五郎右衛門
一へ　三番西ゟ三番　弐間部屋　根岸小四郎

右都合九部屋御住居造作被爲仰付難有仕合奉存候尤造作仕立候御部屋之義ハ御役所御繪圖而御仕様帳之通八月十日迄不残仕立差上可申候万一御繪圖御仕様狀ニ違候所ハ幾度も御差圖之通仕直差上可申候爲後日御請負證文仍而如件

明和五年戊子七月

七月廿一日

材木直段覺

一 松貳間　四寸二分角
　壹本代　百五十三文
一 同八尺　四寸二分角
　壹本代　八十三文
一 同二間丸太　末口四寸
　壹本代　百廿三文
一 同貳間丸太　末口三寸五分
　壹本代　八十九文
一 同貳間半丸太　末口四寸
　壹本代　百五十三文
一 同八尺八寸丸太　末口三寸五分
　壹本代　五十八文

一 同九尺丸太　末口四寸ゟ三寸迄
　壹本　五十八文
一 松丸太七尺　末口四寸
　壹本　四十五文
一 同三間丸太　末口貳寸四五分
　壹本　五十六文
一 同貳間丸太　末口二寸五分
　壹本　四十七文
一 同三間丸太　末口三寸五分
　壹本代　百九十文
一 同貳間丸太　末口二寸五分
　壹本代　五十七文

一 同四尺五寸丸太　末口二寸五分
壹本代　廿五文
一 松貫二間　三寸三分ニ八分
壹本代　三十八文
一 松敷居　二間　四寸二分ニ一寸九分
壹本代　七十文
一 同九尺　同断
壹丁代　六十五文
一 同　壹間　同断
壹丁代　三十五文
一 同　壹丈壹尺五寸　柱　むら角
壹本代　百二十文
一 同　八尺五寸　同断
壹本代　七十貳文
一 松板　墨五分半掛大小
壹坪ニ付　貳匁九分ヅヽ

一 松貳間　四寸ノ九ツ割
壹本代　廿四文
一 同貳間五寸　十二割
壹本代　廿八文
一 杉小割貳間　壹寸貳分角
壹本　廿文
一 杉　四分板　壹坪ニ付
代　貳匁八分
山三郎
一 杉壹丈壹尺五寸
ひら角　四寸角
壹本ニ付　百五十六文
藥師町
嘉助積
一 松板　墨六分 六七枚伏セ　百間ニ付
代　六兩二分ト六百五十文

一　同　同五分 七八枚伏セ　大間ニ付
代　六兩壹分
一　竹　百本　四寸廻リ
代　四貫八百文
一　同　百本　三寸廻リ
代　四貫文
一　敷居壹間　四寸三分 壹寸九分
代　四十八文
宮町忠兵衛
歩町八郎衛内
一　竹　長八尺五寸　幅六分五厘
壹本ニ付　四文ヅヽ
一　同　長一丈貳尺五寸　幅六分五厘
壹本ニ付　六文七分ヅヽ
一　同　長六尺五寸　幅六分
壹本ニ付　三文三分ヅヽ

古繩
二十尋二十把ニ〆手ミ六
手ニ付　十四五文位ゟ十八九分位迄
印繩
十尋二十把ニ〆手
手ニ付　八九文ゟ十貳三文迄
むしろ　十枚ニ付
五十五六文ゟ六十文迄
三寸五分貫　四十四文ヅヽ
敷居木

昭和七年九月三十日以小倉右一郎氏藏本
書寫並校合畢

平賀源内全集上卷　終

平賀源內全集
上下全二册

昭和十年二月十日印刷
昭和十年二月十五日發行

著作者　平賀源內先生顯彰會代表者　入田整三
發行者　東京市牛込區辨天町一七四番地　中村時之助
印刷者　東京市本郷區駒込林町一七二番地　柴山則常
印刷所　東京市本郷區駒込林町一七二番地　合資會社　杏林舍

發賣所　東京市神田區神保町一ノ三五　荻原星文館　電話神田三〇三八番　振替東京三〇四六番

定價金拾五圓